

---

# 唯一の女隊士

玖月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

唯一の女隊士

### 【Nコード】

N9978J

### 【作者名】

玖月

### 【あらすじ】

長年の遠征より、京から帰ってきた真撰組の特別部隊。その部隊の隊長は、真撰組唯一の女隊士だった。

…上から順に読んでいただければ、話が繋がります。

たまに玖月の他の作品、「黒衣の死に神」と「意志を継ぐ者」の姫華と松光が出てきたりします。

## 鬼姉（前書き）

いつもの三人で買い物に出掛けた万事屋メンバー。三人はそこで、真撰組局長、近藤勲に会う。彼と一緒にいたのは、真撰組唯一の女隊士だった。

## 鬼姉

その日が待ち遠しくて、日が過ぎるのを指折り数えていた。

ついにその日がきて、気分がいいから朝の散歩をして屯所に戻った。

門番が教えてくれたのは散歩を終わらせて帰った時だった。

「局長！ 戻られてますよ！」

「嘘っ！」

戻ってくるのは昼過ぎだと聞いたのに。慌てて待たせているという  
広間へかけていくと、廊下は走らないと注意された。

障子を開け放つと、数人の隊士とともに、隊長格の人間が腰掛けて  
いる。

久しぶりに見る顔に、近藤は嬉しそうに歯を見せた。

「近藤局長。我ら特別部隊、京での任務を終え、ただ今帰還いたしました」

特別部隊隊長の言葉に、近藤はうんつと頷いた。

「お帰りっ!」

「銀ちゃん。ニラが一束五十円ヨ! 安いね!」

「おおっ! 安い! 買ってこっぜ!」

「ほどほどにして下さいね」

天気の良い昼下がり、賑やかな商店街に、万事屋三人の姿があった。

夜ごはんの買い物に来ているのだが、食べたいものを買い食いして  
いくため、なかなか進まない。まとめ  
買いでなくあちこち回るのでなおさらだ。

「おお、旦那じゃないか」

やけに上機嫌の近藤が近付いてくる。三人は同時に、ゴリラだと呟  
いた。

「お揃いで、買い物かい？」

「ああ。アンタはサボりかい？」

「ハハハ。総悟じやあるまいし」

近藤はにかりと歯を見せた。

「久しぶりに帰って来たんだから、二人して出かけてこいって奴ら  
がいうからよ。有り難く休暇を貰ったんだ」

「帰ってきたって、誰が？」

「ああ、俺の…」

「勲ー？ 何をやってるの？」

コツ……とピンヒールブーツをならしながら歩み寄ってきたのは、隊服を着た、美しい女性だった。

おろした黒髪はさらさらと風に揺れ、ヒールブーツで多少偽造されてはいるもののすらりと伸びる背は高く、品のある姿に腰の長刀がよく似合う。

豊かな胸の谷間がシャツから覗き、もろそこに視線が行ってしまう銀時は、凶器みたいだなと正直に思った。

彼女の耳を飾る翡翠のピアスが、しゃらんと幻想的な音をたてる。近藤は女性に気付くと、笑顔を見せた。

「ああ、ほら。手紙でよく書いた万事屋さんたちだよ」

「まあ、貴方がたが？ いつも勲がお世話になってます」

伸ばされた手に、手を重ねる。銀時はその綺麗な手に、無数のタコがあるのを感じた。

「お姉ちゃん、真撰組アルか？」

「ええ、そうよ。真撰組の紅一点なの」

新八はさりげなく、女性がただ者ではないことを感じとっていた。

身につけている隊服が、隊長格のものなのだ。親しい山崎に聞いた話、隊長格の服はその名の通り各隊の隊長しか着用は許されていないはず。ならばこの女性は……。

「へー。ゴリラの彼女？」

にたにた笑いながら聞いた銀時に、女性が吹き出した。

「やだあ旦那ったら冗談が上手いのね。勲、私たちそんなに似てないかしらね」

クスクスと、鈴を転がしたような笑みは止まらない。

「いや、月とスッポンだろう？」

近藤は至極真面目に言って退ける。傍から見たら、本当に恋人のようにはしか見えないのだが……。

「挨拶が遅れたわね。私は真撰組九番隊隊長、近藤操<sup>みさお</sup>。勲の姉よ」

万事屋の三人が、顎を外したのはいうまでもない。

「もー堪んないわこの反応！ おっかしー！」

立ち話もなんだからと喫茶店に入ったものの、三人は未だ信じられずに口を開けていた。操は操で三人の反応が可笑しいのかころろと笑いつばなした。

「そんなに驚いてくれたのは鴨太郎以来かしら。ふふっ、可らしい……」

笑いたらないらしく、震えながら近藤の肩をばしばしたたく。注文してもらったパフェが届くと、銀時はやっと正気を取り戻した。

「ほ、本当にゴリラの姉貴さんなのか？」

「本当よ。なかなか信じて貰えないんだけど」

「信じねーよ！ このゴリラの姉貴にアンタみたいな美人がいるわけねーじゃん！」

「だから言っただろ旦那。兄弟のどちらかが不細工だとどちらかは綺麗に育つもんだ」

真顔で言っ近藤に、銀時はなおつつこむ。

「自分で言っなよ！」

銀時もし少しパニックになっているらしい。同じく思考が止まっていた神楽は、ふと思い当たって聞いてみた。

「そう言えば、帰ってきたってどこかに行ってたアルか？ いろいろ

る事件があつた時も、会わなかったのはそのせい……？」

「ええ。わたし二年以上前から天導衆のアホ共の命令で、特別部隊として京に遠征に行つたの。九番隊隊長に新しく任命されて、やっと帰つてこれたつてわけ」

「今、すごい単語聞いたような……」

天導衆に対して、はつきりと “アホ共” と言つてのけた。

「新しく？」

「……殉職してしまったのよ。動乱事件の時に……」

元九番隊隊長、二木二郎は伊藤派の人間だった。それ故、殉職してしまった彼の隊長の座が、長らく空席になっていた。

「……ごめんなさい」

重い空気が流れる。近藤も思い出しているのか肩を下ろし、顔色は冴えない。

「いいのよ。気にしないで」

「だが…」

重苦しい空気を破壊しようと、銀時が口を開く。

「女で真撰組って大変なんじゃねーの？ 男の仕事に女が入るのを嫌う奴もいるだろうし、反対意見はなかったのか？」

「まあ、なかったわけじゃないけどねー。一番反対したのは勲だったし」

操がちらりと近藤を見下ろすと、近藤は当たり前だと頷いた。

「いくら狂暴で怖いもの知らずのみい姉でも、流石に危ないって…」

「フオローになってない！」

横殴りのパンチで殴り飛ばす。みい姉？ と三人が首を傾げた。

「女だからって見下されたこともあった。でも、そんな奴らは力で揶揄せてきたの。真撰組に男も女も関係ないわ。必要なのは剣術と全てを統べる力、それを抑える器のみ。力のないもの、器のないもの下には誰もついて来ないからね」

「ふおお、姉貴がつくいいー！」

神楽が目を輝かす。

「なんてね、偉そうなこといつでも所詮は女だしね」

「そんなことはない。みい姉は女性であるからこそ、男には出来ないことをしてくれている」

近藤が、頷きながらそういう。

「その通りだ。アンタがつくいいーよ、そこらへんの男よりも」

操は弟と銀時の言葉が嬉しかったのか、にっこりと笑った。

「ありがとう。そう言われると嬉しいわ」

そして気をよくしたのか、メニューを取り出す。

「嬉しいから奢ってあげる。好きなもの頼みなさいな。勲、貴方もよ」

「「「「「やっただあ!」「」「」」」」

万事屋三人が、ここぞとばかりに食べたのは言うまでもない。

「あー、食べたあ」

レストランを出て、操はうん……と伸びをした。正確に言えば、食べたのは操以外の四人だ。操はあまり食べなかったが、四人の食べっぷりに満腹感が広がったらしい。

「「ごちそうさまでした。すみません、遠慮なしに食べちゃって……」

「いいのよ。気持ちいい食べっぷり見せてもらったから。お腹いっぱいになった？」

「なった。ごちそーさん」

「ごちそうさまでしたアル」

「ごちそうさまでした」

ぺこりと頭を下げる万事屋三人。

「俺も、ごちそうさまでした」

近藤も頭を下げる。操が帰ってきてくれたことが嬉しくて、つい食べ過ぎてしまった。

「どう致しまして。本当に楽しかったわ、ありがとう」

笑った操の真後ろに、ざっと立ちはだかるものがあった。

「失礼、真撰組局長近藤勲、九番隊隊長近藤操とお見受けする」

数人の男たちがすらりと刀を抜く。全員攘夷浪士だ。銀時たちが息をのむ。

「なっ……」

「だとしたら、どうする」

聞き慣れない、近藤の低い声。

「幕府の犬め！我等が天誅を下してやる 世に残るは正義だけだ  
！」

洞爺湖に手を伸ばしかけた銀時を、近藤が制した。

「……折角の楽しい気分が台なしよ。洞窟で宝石を見つけたのに、生き埋めにされた気分」

盛大にため息をつきながら、操は浪士たちを睨み付けた。

「覚悟は出来てんでしょうね、腑抜け共？」

「ふっ…。幕府の犬の分際で、我等を愚弄するか！」

「言つてなさいよ。たかが二人倒そうとこんなに集まった腰抜け共。何が 正義よ、正義を名乗るなら、一対一でかかるぐらいの男氣を見せなさい！」

「度胸満点だな、アンタの姉ちゃん…」

「すげえと呟く銀時。そうだろう？ と、近藤は歯を見せた。

「我等攘夷浪士をそれ以上侮辱すると、命の保障はないぞ！」

「元からないじゃないのよ」

「操は腰から刀を抜いた。鞘に収まったままの刀を、浪士たちに向ける。」

「私はアンタ達を攘夷浪士だなんて認めない。この中で本当に国を憂いている奴が何人いる？ 私が認める攘夷浪士はただ一人」

刀を下ろし、操は笑った。

「本当は私一人で倒したいところだけど、流石に人数多くて自信ないわ。勲！」

「はいよっ！」

威勢よく返事をし、操と背中を合わせる。

「万事屋のお三方、危ないから下がっていて。手出しは無用よ」

「でもっ……」

言いかけた新八を、銀時が制す。

「無用だって言うてんだ。見守ろっぜ」

何故だか、神楽には銀時がわくわくしているように見えた。

「うおおおお！」

斬りかかってきた浪士の腕を掴み、刀を落とさせて蹴りを食らわせる。怯んだ別の浪士にみねうちを食らわせ、さらに別の浪士の鳩尾に食い込ませた。近藤も、刀を抜かずに戦った。

「何処まで我等を虚仮にすれば気が済む！ 刀を抜け！」

「嫌よ。抜いたら刀が汚れるでしょ」

「心配するのそっち！」

つつつこむ新八。銀時は知っている。彼らを殺さず、傷付けずに捕縛するため、二人があえて刀を抜かないことを。

「抜いてほしいなら、私たちを本気にさせなさい。ま、抜いたらア  
ンタたち死んじゃうけどね」

操は不屈な笑みを浮かべた。

数分後。

「ああ、暴れ足りない！ 勲、帰ったら相手して！」

「ええっ！ みい姉強いんだもんよー。トシに頼んでよ」

「やあよ。トシ君加減が分からないんだもの」

両の足で立っているのは、二人以外にいなかった。ばたばたと遠慮なく昏倒させた二人に、万事屋三人は口をあけるしかない。

「強い……」

「凄いネ……」

ぼんやり呟いた神楽は、ふと銀時が何故楽しそうにしていたのか気付いた。

彼は近藤姉弟の実力を知りたかったのだ。だからこそ今も、その実力を目の当たりにして楽しそうにしている。

新しいおもちゃを与えられた子供のようだ。

「あっ！」

その銀時が声を上げた。倒れていた浪士が立ち上がり、近くにいた少女を盾にしたのだ。

「きゃああ！」

「動くな！ 動けばコイツを…」

浪士が言えたのはそこまでだった。操が躊躇いなく動いたからだ。

（躊躇なく…）

ゴッ…！

固くにぎりしめた拳が、浪士の顔にめり込んだ。怯んだ隙に少女を引きはがし、遠慮ない踵落しをくらわす。浪士がどつと地に倒れこんだ。

顔を上げようとする浪士の頭を、ピンヒールで踏み付けて押さえ込む。

「女がいなければ子を残すこともできないことを忘れた？ 女を大事にしない男は、滅びろ」

一瞬、操の後ろに鬼が見えたような気がした。

「じゃあ帰るわね。ごめんなさいね。気分を悪くしちゃって」

「気にすんな。こちらこそごちそうさん」

浪士たちを縛り上げた操らは、それを引きずりながら手を振った。

「またなー。旦那」

浪士を引きずって去っていく姉弟を、その姿が見えなくなるまで見送る。

「…なんだか、すごいお姉さんでしたね」

「あの姉あつて弟ありつて感じる」

各々の意見をいい、二人は踵を返す。

（ゴリラの姉御が。一度手合わせしてもらいたいもんだぜ）

なにせあんな強い女性には、久しぶりにあつた。

「銀さん？ 置いてっちゃいますよ」

「お、ちょっと待てよ」

慌ててあとを追う。銀時は一度足を止めて操が消えた方向を見やると、何事もなかったように神楽と新八を追った。

「なあ？ 面白い人たちだろう？」

「ええ、手紙にあつた通りね」

並んで歩きながら、他愛のない会話をする。引きずっている浪士の姿がなければ、普通の姉弟の図だ。

「旦那かあ。強そうね」

「またあ…。強そうなの見つけると手合わせしたがる癖止めてよ」

「いいじゃない。自分の剣を磨くためよ」

仕方ない姉だと呟く近藤。

「あ、今日はお帰りなさいパーティーするからな!」

「あら、ありがとう。飲み過ぎないでよ? 私看病するの嫌よ」

「冷てー」

笑って、近藤は歯を見せる。久しぶりに姉が帰ってきて、嬉しくてしかたないのだろう。

「あ、でもパーティーの前に手合わせ宜しくね」

「…本気だったの?」

「本気よ。いつとくけど私、遠征する前より強くなったからね」

誰か助けってくれと、影で懇願した近藤だった。

そうだ、  
みい  
姉

なあに？

おかえり

ただいま

## 鬼姉（後書き）

劇場版が楽しみで仕方ないです。ちなみに私が好きなキャラはまた子ちゃんです。

## 女として（前書き）

オリキャラ操さんと、銀さんのお話です。

## 女として

神楽が朝早く、遊びに行くからと出かけていった。

新八もお通のライブがあるからと休みをとり、誰もいない万事屋にいても暇だからと散歩に出かけた。

上掛けを羽織り、マフラーを巻いても寒さは和らぐことなく、大好きな鯛焼きでも買って温まろうとしたとき、視界の片隅にさらりと流れる黒髪を見た。

視線を巡らすと、先日出会ったばかりの女隊士が、美しい着物の袂を揺らして薬局に入っていくところだった。

「あ」

「お姉ーさん」

薬局から出てきた操に声をかける。

振り返った操は、あらと表情をほころばせた。

「旦那じゃない。おはよう」

「おはよう。仕事はいいのかイ？」

「ええ、今日は非番よ。お散歩ついでに買い物。旦那は？」

聞くと、はいと紙袋を差し出された。

「姐御に差し入れにきた」

袋の中は鯛焼きだった。

「鯛焼き大好きー！」

袋を受け取った操は、とても真摯組隊士とは思えない無邪気な笑みを浮かべる。

そう言えばこの女性はいくつなんだろうと、銀時に疑問が湧いた。

「そっぴゃ姐御、年いくつ？」

「女に年齢聞いちゃ駄目よ」

「いや、本当に」

操は鯛焼きの入った袋を抱えると、にたりと笑う。

「今年で32」

「32！俺よりも年上！？」

「だって私、勲の姉よ？」

その言葉は妙に説得力があった。外見の美しさからは想像出来ないが、世の中いろんな女性がいるんだなと、本気で思う銀時だった。

「そっか…。それはそうとして、どうしたんだ？ その大量の薬。風邪でも引いたのかイ？」

操の腕に下げられているビニールの袋の中には、沢山の薬が放り込まれていた。

「違うの。昨日私たちの帰還パーティーをやってくれたんだけど、皆飲み過ぎてね」

「…ああ。皆して二日酔いか」

「そーゆーこと。もう、なんで吐くまで飲むのかしら」

呆れたように呟く操。銀時はくつくつと笑った。

操の耳から下がっているピアスが、ふと目に付く。大人らしい、シンプルな造りのものだ。戦いの際に揺れるこのピアスは、さぞかし美しいのだろう。

「姐御が帰ってきて嬉しかったんだろうよ。男って生き物は嬉しいときや羽目はずすもんだ」

「大変なのね。男って」

「おお。大変さ」

鯛焼きを取り出し、おもちゃを与えられた子供のようにわーいと笑う操。子供みたいだなと銀時は笑った。

「鯛焼きって何処から食べる？」

「はらわた」

普通は頭かしっぱと答えるだろう。予想外の答えに、銀時はなんと言っているのか分からなかった。

「冗談よ。私はお口にキスして頭から食べるの」

言いつつ、鯛焼きにキスしてかぶりつく。

「冗談キツイぜ…」

そういう銀時は、しつぽから。

「キスカ。姐御、男はいんのかい？」

「どうしたの？ いきなり」

「キスっていうから気になっただけ。男だらけの真撰組だ。より取り見取りじゃねーの？」

操は頬にあんこをつけ、咀嚼を繰り返して言った。

「うーん、隊士だと男って見られないのよね。仲間としか見ないから…。まず第一に好きって気持ちがいマイチ分らないの。一生彼氏無しかしら」

他人事のようにくすくす笑う操。

「奴らも不幸だねえ。こんないい女がそばにいて、男として見て貰えないなんざ」

「あら、恋愛は刀を鈍らせるのよ。それに私は弱いから、自分を守るのが精一杯」

大事なものが増えれば、守るのも大変なのよと、操は呟いた。

「ゴリラにしてみれば、大事な姐御を他の男にやらずにすんで安心なのかもな。一度冗談でも言ってみ、気になる男がいるって。暴れだすぜ」

「もう、うちの勲で遊ばないでよ旦那」

だが気になる男と言われ、ある男の顔が頭に浮かんだ。なんであいつがと頭をふって追い出した。

銀時に不思議そうな顔をされた。

「旦那は？ もう奥さんいるの？」

「まさか。カノジョすらいねーよ」

「へえ、意外。モテるんじゃないの？ 旦那」

「この天パのせいでモテませーん」

おどけた銀時に、操はくすくすと笑う。

「天パは関係ないわよ。でも旦那は素敵な人だから、いつかきつとかわいい彼女が出来るわ。その時は紹介してね」

「姐御はなってくれねーの？ 俺の彼女に」

操は一瞬キョトンとして、銀時の肩をばしいと叩いた。

「冗談が上手なんだから旦那は。こんなオバサン彼女にしたっていいことないわよ」

「冗談じゃないんだけどなー」

「はいはい。もっと若くてかわいらしい子見つけなさいな。私みたいにガサツで男勝りじゃなくて、しとやかな大和撫子をね」

口許についたあんこをぺろりと嘗め、袋をごみ箱に放り投げる。

「私は独り身でいいの。だって真撰組が、私の恋人だもの」

「そうやって、女を隠すとか？」

「え…？」

打って変わった銀時の真剣な眼差しに、操は少したじろいだ。

「昨日レストランでアンタの話を聞いて…もう女を捨ててるんじゃないかって思った。だが違うんだよな、女捨ててる奴が、他の女邪険に扱われてあんなに怒るわけがない」

『女を大事にしない男は、滅びる』

「あ、昨日のことは忘れてよ…」

「姐御ホントにかっくいーんだからさ。女の中の女でいてくれよ。男になろうとしたら駄目だぜ」

操は目を瞬かせた。

「ありがとっ、そうね。男になろうとしたら駄目よね」

笑っていたが、それは至極悲しい笑みだった。

「ばれちゃうものなんだなあ。必死に偽ってきたのに……」

「偽っちゃいけねーよ。女として、生きていかにゃあ」

「分かったわ。でも、あまりその話はしないで。必死になってる私が崩れて、泣いちゃうから」

「泣きたいなら銀さんの胸においで」

ふざけて腕を広げ、いつでも貸すよと笑う。操は悪戯な笑みを浮かべると、一瞬にして銀時の懷に滑り込み、肩に手をおいて銀時の頬

をぺろりと舐めた。

「う、おうあ!？」

「あんこがついてた」

それを咀嚼し、操はまた悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「年上をからかうものじゃないわ、旦那。惚れちゃうじゃないの」

そして美しい髪を揺らし、踵を返した。

「私帰るわね。鯛焼きごちそうさま」

そして意気揚々と帰って行った。銀時はそれを見送り、

「いや、こんなことされたら俺が惚れちゃうよ」

ぼそりと呟いた。

「ただいまー！ 勲ー！ 局長ー！」

「あ、あまり大きな声出さないで…。頭に響く…」

えろんと文机に突つ伏す近藤の部屋の障子をしばらく開けてやると、それも響いたのか青い顔で頭を押さえる。

「本当に情けないわね。はいこれ、お薬」

水差しと、買ってきた薬を差し出す。

「すまねえ、みい姉…」

「貴方がこれほどなんだから、トシ君は死んでるわね。早く持つていつてあげなきゃ」

袋を提げる操を見て、近藤が不思議そうな顔をした。

「みい姉…何かいいことあった？」

「どうして？」

「なんだか、楽しそうだよ」

弟だからこそ気付く、些細な表情の変化。操は銀時に言われたことを、実践したくなった。

「私のこと理解してくれる人が増えたからね。あとは、ちょっと気になる人ができたー、みたいな」

別に銀時が気になっているわけではない。気になる男は、他にいる。

「きっ…」

酔いも吹っ飛んだようで、近藤は絶句した。

「き、気になる人って誰！」

「さあ誰かしらねー。さて、トシ君にお薬持っていかなきゃ」

引き止めようとする近藤の腕をかい潜り、操は廊下に出た。近藤は必死に追い掛ける。

「誰！？ 許さないよ！ そこらへんの男にみい姉はやらないからねっ！」

「はいはい。おっきな声出すと頭に響くわよー」

「そんなもん後回しー！ 今はみい姉の純潔のほうが大事だー！」

どたばたと廊下を走り回る。銀時の言った通りだ、本当に暴れ出した。

「姉さん、頼む…。頭に響くから止めてくれ…」

二人してじゃれながら土方の部屋へいけば、青白い顔でそう訴えられた。

ぐったりと二日酔いと戦う二人を見て、

私はこのままでいいんだと、そう思った。

終

## 女として（後書き）

二日酔いの時に騒がれると、ちょっと殺意が沸きませんか？  
まあいいやそんなこと。

感想お待ちしてます。

## カンチガイ（前書き）

まだ武州にいたころのお話です。土方さんが、近藤さんと操さんの関係を勘違いしています。

## カンチガイ

『いつでも遊びに来い。お前はもうウチの門弟だ』

その言葉をかけられて、引きずられるように道場に帰った。自分と近藤を見た時の操の反応は凄かった。

「  
…」

血まみれの自分らを見て啞然と口を開き、そしてパクつかせた。

「な  
…」

思えば、あの時耳を塞いでいれば良かったと思う。

「なにやってんの貴方たちはー！」

怒鳴られ、有無言わず中に引つ張り込まれた。

「土方君はともかく、なんで勲まで怪我してるの！ 土方君も怪我酷くなってるし！」

「いやあ、色々あつたんだよ」

「なにが色々！」

きしゃつと怒鳴ると、操は棚から救急箱を取り出した。土方はこの隙に逃げようとしたが、ぐいと後ろ髪を掴まれた。

「手当てさせなさい」

「んなもんいらねーよ」

反発すると、細い手が首にのび、ぎりぎりと絞められた。

「させないと死んじゃうわよ」

「分かった分かった！ 死ぬ！」

手が離れ、大人しく座り込む。この女性には頭が上がらない。自分も、近藤も。

「勲も逃げちゃだめよ」

「逃げないよ」

仲のいいこった。人前でいちゃつきやがって。

「また暴れてきたの？」

慣れた手つきで包帯を巻く操がそう問う。

「無理しちゃ駄目よ」

手早く額にも手当てを施し、操は救急箱から軟膏を取り出した。

「手を見せて」

二人が、同時に顔をあげた。

「ほら、早く」

大人しく開けば、無数の血豆が現れる。操は大きなため息をつき、軟膏を塗りはじめる。

「なんで分かった…」

「土方君、帰ってきてからずっと握り締めていたでしょう。だからなにか隠してると分かったのよ」

なんとも目敏い。操は血豆の上にも包帯を巻くと、その手を握らせた。

「はい、終わり」

「…がとよ」

照れ隠しにそっぱを向くものだから、操は可笑しくてクスクス笑った。

「ほら勲。次は貴方よ」

「要らないよ、手当てなん…」

ずいと操が迫ったせいで、近藤はひくりと口の端を吊り上げた。

「なにか言った？」

「言ってますん…」

大人しく、近藤は手当てを受ける。

「なんで貴方まで傷作ってんのよ」

「いやー、あはは」

「あははじゃないわよ。まったく」

普通の夫婦とはこういうものなのだろうか。土方はぼそりと呟いた。

「仲いいな。あんたら」

「そう？ 姉弟ってこんなものでしょう？」

「そうかよ…はっ？」

流しかけた土方は、妙な単語を聞いて絶句した。

「…誰と誰が姉弟だって？」

「私と勲」

土方の頭の中で、ぐるぐると思考が回る。

「姉弟だあ？ あんたら夫婦じゃなかったのか！」

今度は操が絶句して、クスクス笑った。近藤も豪快に笑い、傷に響いたのか顔をしかめる。

「やだもう夫婦だなんて。私たちそんなに似てないかしらね」

「似てねーよ！ つうかちょっと待て！ あんたが姉って一体いまいくつなんだ！」

「女に年聞いちゃだめよー」

「いいから教える！」

必死になつて喚く土方に苦笑し、操は年を教えてやった。土方はまた絶句した。

「嘘だろオイ！ 俺より五つも年上！」

「嘘じゃないわよねえ、勲」

うんと頷く近藤。土方は開いた口が塞がらないようだ。

「…俺より年下でも十分通るぞ」

「あら嬉しい。ありがとう」

操はにっこりと微笑んだ。

「鬼ババは年を取らないんだ」

近藤が笑って言ったが、操に無言で横パンチを食らわされて沈んだ。

「ぷっ…」

耐え切れなかった土方が吹き出した。

「本当面白いな、アンタら…」

「…笑ってたほうがカッコイイわよ、トシ君」

「トっ…」

そう呼ばれたことはないらしく、土方の顔が真っ赤になる。

「なんだトシ君って！」

「いいじゃない。かつこいいわよ」

「トシかぁ。いいなあトシ」

「トシって呼ぶな!」

ぎしゃっと叫んだ抗議は、永遠に無視されることになる。

.....

「トシ君?」

呼ばれて、土方ははっと我に返った。隣には、キセルをくわえて不思議そうにしている操がいる。

「あ、なんだイ? 姉さん」

「タバコ...」

ふとくわえていたタバコを見ると、燃えかけて灰になっていた。

「あっつ！」

落ちた灰が手に落ち、思わず振る。操はその手を取り、火傷を嘗めた。

「なにを思い出していたの？」

「なんでだ？」

「笑ってたわ」

恥ずかしさと、火傷を舐めて貰った照れで顔を赤くする。

「俺が、近藤さんと姉さんを夫婦と思っていた勘違いが、解けた時のことをよ」

言っと、操は思いついたのかクスクス笑った。

「あの時のトシ君の驚き様は凄かったわね」

「近藤さんの姉であるうえ、俺より年上だろ、驚くつつつの」

ふふつと苦笑する操が、あの時のものと重なった。

「あれから十年…。なんで姉さん年取ってねーんだ？」

「とってるわよ。お肌のハリも落ちてきたし、色々大変」

「十年前と変わらねー。綺麗なまんまだ」

操は顔を赤らめ、褒めたってなにもでないわよと土方を叩いた。

「俺が怪我したときは、また手当てしてくれよな」

「トシ君が逃げなければね」

「逃げねーよ。ガキじゃあるまいし」

操はクスクス笑って、土方の頭を撫でた。

変わらぬ二人  
時が過ぎても  
二人は姉さんとトシ君のまま  
変わらない。

## カンチガイ（後書き）

たまに、年齢偽ってんじゃねーの？ って女性を見ませんか？  
私は二十代後半にしか見えない女性が、実は三十五歳だったことに  
飛び上がった記憶があります。

感想お待ちしてます。

気高き華と可憐な華（前書き）

近藤さんの姉、操さんと、お妙さんのお話です。

気高き華と可憐な華

「こんにちは、旦那。凄い荷物ね」

「おお姐御、よく会っねえ」

例の如く巡回をしていると、見慣れた銀髪を見つけた。なにやら沢山の袋をぶら下げている銀時に、声をかける。

「ねえ。非番だったらお茶に誘いたいぐらいよ。仕事中で残念」

「俺も残念だよ。助けてくれよコノヤロー……」

どうやら、荷物が重いらしい。

「どうしたの？ その荷物」

「あん？ 新八の姉貴に買い物手伝わされてんだよ」

「あら、新八君お姉様がいたのね」

意外そうに、操は声を上げる。

「狂暴なのがな。今日だって荷物持ちにしやがって……」

「ふふつ。女の子の買い物は大変なのよ」

楽しそうに笑ったとき、銀時の後ろで声がした。

「銀さん、お待たせしましたー」

「だー、またお前は大量購入して……」

ピンクの着物を着た若々しい女は、大量の荷物を銀時に押し付けた。

「はい、これもお願いしますう」

「しますう、じゃねーよ。もういい加減にしろ！ 銀さんもう持てねーよ！ お妙！」

操の眉が、ぴくりと釣り上がった。

「お妙……、まさか勲が追い掛けてるお妙さんって、貴女のこと？」

自分を知っているような口調に、妙がキョトンとする。

「ええ、私が妙ですが……。どちら様……？」

「ゴリラの姉貴だよ」

銀時が紹介してくれた。妙が、驚いて口を押さえる。

「貴女がゴリ……じゃない近藤さんのお姉様！」

二人して手を取り合い、顔を近付ける。

「なんてかわいらしい美人さんなの！」  
「なんて若々しくて素敵なお方なの！」

二人同時に声を上げる。

「二人ともくつつかないでくんない？ 百合にしか見えなからくつつかないでくんない？」

妙も美人だが、操も美人だ。くつつくと華にしか見えない。

「まあ……。これじゃ勲も惚れるはずだわ。こんなにかわいらしくて綺麗な女の子始めてみた……」

「本当に近藤さんのお姉様なんですか？ 私と幾つも代わらないように見えるわ……」

「嫌だ。冗談がお上手なんだから」

きやあきやあと飛び交う楽しそう二人の会話を眺め、銀時は気をきかせてやる。

「折角だから、女二人で話してきたらどーだ？」

「でも、荷物……」

「俺の家にでも置いておくわ。帰って連絡くれりゃ、運んでくさ」

じゃあなと踵を返す銀時。その背中を見送って、操は控えめに口を開く。

「ごめんなさいね。折角お買い物楽しんだのに」

「気にしないで下さい。それより、どうしましょう、こんなところじゃなんですし……」

「何処か、いいお店ご存知ない？ 寒いし、温まりましょうよ」

操の申し出に、妙は嬉しそうに頷いた。

「ごめんなさいね、いつも勲が迷惑をかけて」

妙の行きつけの喫茶店で、二人して向かい合って座る。操は珈琲を、妙は紅茶を注文した。

「あの子は何かに夢中になると、猪の如く突っ込んでいくタイプだから……」

ずっと珈琲を啜り、カップを置く操。

「周りに私以外に女がいなかったから、接し方が分からないのよ」

「いなかったんですか？ 女性……」

妙が、意外そうな顔をした。

「ええ、母親はあの子を産んですぐに死んでしまったし、兄弟も私だけが女……」。

唯一いたとすれば友人のお姉さんで……、その娘も相思相愛の彼がいたから恋人の対象として見てなかったのでしょう。

幼い頃から刀を握って、そばにいたのがこんな私だったから……。

私と同じように接してれば大丈夫と思ってるのね、きつと」

妙は少しの間黙り込み、一口紅茶を啜った。

「私も、分からないのかも知れません。あんな積極的な……、想いを公に伝えてくれる男性なんていなかったから……」

ぽつぽつと話す妙の顔は、赤くなっている。もしかしたら脈ありなのではないかと操は踏んだ。

「勲にはよく言っておくわ。迷惑かけるなって。お妙さんの……」

「妙でいいすわ」

「そう、じゃあ……お妙？ 貴女が迷惑していることを勲にも伝えておく。でもタイプは間違っちゃいないのよね、こんな可愛くて綺麗な女の子、あの子がどうやって見つけたのかしら」

「そんな、お上手なんだから……。操さんの美しさには敵いません」

妙は、ぽつと顔を赤く染めた。

「あの、お姉様って呼んでいいですか？ 私、姉に憧れていて……」

「嬉しい！ お妙、私も妹に憧れていたの。お妙みたいなかわいらしい妹分が出来て幸せ！」

互い、嬉しそうに微笑んだ。暫くの間、華やかなおしゃべりが続いた。

「ただいまー」

「お帰り、異常はなかったかい？」

「はい、異常ありませんでした」

そうかと安心したように笑う土方。仕事が無くて淋しいが、なにものもないに越したことはない。

「……なんだか楽しそうだな」

「分かる？ 今日ね、お妙に会ったの」

タバコをくわえようとした土方の手が、止まった。

「お妙……。近藤さんが追いかけて回してる女か？」

「そう。勲を殴るって言うからどんな狂暴な子かと思ったら、なかなか可愛くて愛らしい子じゃないの。勲が惚れるのも分かる気がするわ」

「ふうん……」

どこが愛らしいんだとツツコミかけたが、やめておいた。

「……あの女、何となく姉さんに似てないか？」

キョトンとした顔が、返ってきた。

「まさかあ。私はあんな美人じゃないわよ？」

「いや、十分美人だけど……。外見じゃなくて、中身だよ」

「中身？」

ああと、土方は頷いた。

「強くみえて、実はか弱い。でも芯は強くて、優しくてはかないのさ」

かあつと操の顔が赤くなる。

「ほ、褒めたってなにも出て来ないわよぉ！」

バシィと背中を叩かれて、多少むせた。

「へへ、ありがとう。そうだ、トシ君も行く？ お妙に貰ったの」

そう言って操が見せたのは、スナックすまいるの割引券だ。

「……近藤さんにやれよ。女が行く場所じゃねえだろ？」

「一緒にお酒飲もっつて言ってくれたのよ」

「俺はいい」

つまらないなあと操が呟いた時、

「みい姉、おかえりー」

呑気な近藤が、姿を現す。昨日妙に殴られ、操が貼ってやった頼の湿布はまだ外れておらず、操は近藤の腕を引いた。

「勲、ちょっといらっしやい」

「えっ、なに？」

そのまま部屋に連行される近藤を見送り、土方は笑って息をついた。

「はい、お説教タイムスタートお」

「今日、お妙に会って来ました」

正座した姉が何を言っているのか分からず、近藤は一瞬キョトンとしたものの、すぐに自分の愛する妙のことだと分かり、にっと歯を見せる。

「どうだった？ 美女で素敵な人だろう？」

「ええ、綺麗だし可愛い。貴方が惚れるのも分かります。でもね」  
操のオーラがひやりと冷たい。嫌な汗が、近藤の背中を走った。

「お妙は私とは違うの。いい？ 女って生き物は美人なほど繊細で、硝子のような心を持っているの。そしてそれを必死で守ろうとする。貴方が猪の如く突っ込んだって、お妙はその心を守ろうとして貴方を拒否するの。分かる？」

「え、えーと……」

「お妙に気に入られたいなら半歩身を引いて、硝子を扱うか如く大事に丁寧に接しなさい。今のままの貴方だったら、そのうちお妙は崩れてしまいます」

いつの間にか正座をして恐縮していた近藤は、そうかと納得したように呟いた。

「大事に、丁寧に……」

「そう。私と同じように扱っちゃ駄目。お妙に迷惑かけることは私が許しません」

何故そこまで親しいのかと、近藤は少しだけ妬いた。

「お妙は美人だし、可愛いし、私だって妹にしたいの。だから頑張りなさい。貴方の嫁にするんじゃなく、私の妹にするために」

「……そっち？　みい姉」

「当たり前でしょう？　そんじょそこらの女には貴方はあげないわよ。お妙が妹になってくれたら、私も幸せだわあ」

妄想しているのか、幸せそうに頬を包む。

「というわけで、頑張りなさい。大事に丁寧だね」

「はい……」

この弟に出来るかは分からなかったが、近藤はちゃんと行動に移していることを、操はのちに知ることになる。

「お妙はいらっしゃる?」

操がスナックすまいるに足を運んだのは、一週間後。スナックに着物姿の女が来たとあって、オーナーが対応にあたってきた。

「あのう、妙に何かご用で……?」

「お客として来たのだけれど……」

「連絡でもすれば良かったわね。仕事お邪魔しちゃって」

「いいんですよ。来てくれて嬉しい!」

個室に落ち着き、妙に酒を注いで貰う。女二人が個室に座っているのは、些か滑稽な姿だ。

「じゃあ、お姉様が来て下さったことを祝って」

「今日も愛らしいお妙に」

二人して、グラスを傾ける。

「乾杯〜！」

チンツと重なり合う音が響く。一口喉に流しこみ、グラスを置く。

「スナックに女が客として来るなんて、前代未聞かしら」

「まあ、珍しいでしょうね……」

男性客の視線が集まっている。ばっちり目の合った男に、操は妖しい笑みを返してやった。

「本当は勲も連れてきたかったんだけど……」

「あ、ゴリ……じゃない近藤さん、最近どうかなさったんですか？最近……その、あまり迫られなくなったので……」

戸惑う妙の言葉に、酒を口に運びかけていた操の手が止まる。

「なんていうのか……。控えめになって。なにかあったのかなって

……」

まさかとは思ったが、どうやら言ったことを実践していたらしい。

「やつと女の子の扱い方に慣れてきただけよ。可愛い女の子は繊細だってやつと分かったようね」

「そうですか……良かった」

ほっと息をつく妙に、操はしてやったりと笑う。押してダメなら引いてみるだ。

妙を妹にする夢が一步近付き、操が酒を飲んだところへ、ガシャンとグラスの割れる音が響き、店内が静かになった。

「やつ！ 止めて下さい！」

「ケチケチすんな！ こちとら金払ってデメエらの相手してやってんだぞ！」

どうやら酔っ払いが、ホステスに絡んでいるらしい。妙が立ち上がるよりも早く、操が歩みよっていた。

「あ、お姉様……！」

操は振り返ることもせず、真っ直ぐ酔っ払いのもとへ。

「女なんぞ男に貢ぐことしかできねえ悲しい生き物のくせにいつ……！」

酔っ払いを黙らせるように、操は酔っ払いを殴りつけた。酔っ払いは床に尻餅をつき、操は絡まれていたホステスを立たせてやった。

「デメエ、なにしやがる！ ホステスが客にこんなことしていいと思ってるのか！」

鼻の骨が折れたらしく、酔っ払いは壊れた水道のように鼻血を出して怒鳴る。

残念でした。私はホステスじゃなくてお客です」

長い髪をさらりとかきあげ、操は言っただけ。

「随分聞き捨てならないことを吐いてくれたわね。金払って相手をしてやってる？ 馬鹿をお言いでないわよ。可愛い女の子たちが、

大事な時間を割いて、アンタ  
たち酔っ払いの相手をしてあげてるんじゃないの」

冷たい目で、酔っ払いを見下ろす。

「男に貢ぐことしかできない悲しい生き物ね……。なら男はそんな  
女に貢がれて付け上がっているもつと悲しい生き物かしら」

店中の視線が、操へ集まる。操は片手を腰にあて、言っただけだ。

「女がいなければこの世に生まれることすら叶わないのよ。女を大  
事にしない男は、滅びろ」

酔っ払いは頭に血が上ったのか、立ち上がり様に操に殴りかかる。

「この女あ！ 言わせておけば………！」

「お姉様！」

妙が悲鳴を上げる。操は酔っ払いの拳を軽々と受け止めると、踊る  
ように懷へ滑りこんだ。

「訂正。滅びなくていいから、さっさと帰れ！」

遠慮ない拳が炸裂し、酔っ払いは階段の上まで吹っ飛んだ。操は手を叩き、息をつく。

「つたく、悲しい生き物め」

「お姉様！」

抱き着いた妙に、目を丸くする。

「わっ、お妙！？」

「大丈夫？ お怪我は？」

「大丈夫よ。私があんな奴に負けるわけないじゃない」

にこりと笑みを浮かべると、店中のホステスがわらわらと集まってきた。

「ありがとうございます！ お陰ですっきりしました！」

「凄いかっこよかったです！」

「私もお姉様とおよびしていいですか？」

「あら、あららっ。」

男であれば泣いて喜ぶほどに囲まれて、操は少しかりパニックに陥る。

「お姉様、あちらで私と飲みましょう？ 私に奢らせて下さい！」

「まあ！ 私が先よ！」

「私よ！」

乱闘が起こりそうだったので、慌てて止めに入る。

「お、落ち着いて。皆で一緒に飲みましょうよ。私も皆と楽しく飲みたいわ」

はいつと目を輝かせたホステスたちをみて、彼女たちをまとめられ

るなんて凄いなあと、オーナーはのんびり思っていた。

その夜、一人の女性がスナックすまいるに君臨し、スナックの女帝として名をしらしめたという噂を近藤たちが耳にしたのは、数日後の話。

終

## 気高き華と可憐な華（後書き）

スナックに女性が客として入ることはできるんですかね…。

感想お待ちします。

## 密会に注意（前書き）

高杉さんが壊れてます。ニヒルで真面目な高杉さんが好き、という人は回れ右したほうがいいです…。

## 密会に注意

一日中着物に袖を通してゐるのは、なかなか窮屈だと感じてしまった。

やはり隊服がいいなと思う自分に苦笑する。

ついに女を捨ててしまったか、お洒落より動き易さを重視するなんて。

（馬鹿みたい）

自嘲し、久々の休日を楽しんだ。もちろん、あのピアスも忘れずに。江戸の街を見て回り、散歩中の万事屋メンバーとおしゃべりを楽しんだ。

最初はあまりの代わりように神楽と新八には気付かれなかったが、白い大きな華がかかれた着物姿を、銀時は綺麗だと言ってくれた。そんな褒め言葉は久しぶりだったから、少しときめいてしまったのは隊士たちには内緒。

「カラスが鳴くからーえろ」

子供達が口ずさみながら脇を駆けていく。弟にもあんな時期があったなと笑い、ふと空を見上げた。

（あら、綺麗なこと）

真っ赤な夕焼けが、沈もうとしていた。折角なので眺めていようと、河にかかる橋の欄干にもたれ掛かる。

煙草を吸おうと煙管に葉を詰め、火を付けた。

「その火、くれねえかい？」

声をかけられて、はっと顔を上げた。すぐ近くに、笠を被った人間が一人、佇んでいる。操はいままさに消そうとしていたマッチを、静かに差し出した。

（気付かなかった……）

気を抜いていたとはいえ、こんなにも接近されても気付かなかった。

たるんでいる。

「ありがとうよ」

どうやら男のようで、ちらりと見えた煙管をくわえた口許が妖しくつり上がる。

操はマッチを消し、携帯の灰皿に燃えカスを押し込んで隣の男を見上げた。男は立ち去るかと思いきや、操から少し離れた欄干へもたれ掛かる。

（変な人）

女物の着流しを身につけ、実にうまそうに煙管をふかしている。気になるのは腰に下げられた刀だが、まあいいやと流し、夕日を見ながら煙を吐き出した。

「ひゅー」

男が、口笛のような音をたてた。

「煙草を吸うような女はろくな奴じゃねえと思っていたが、こりやなかなか……。煙管をふかす女に夕焼け、存外映えるじゃねーか」

操は夕日から、男に視線を戻した。

「随分失礼なことを思うのね。女だって吸うわよ」

「クク……そりゃあ失礼」

男は笑って、煙を吐いた。操は無視して煙を吸い、ため息のように吹き出す。

「今日は隊服じゃねえんだな」

口許に運びかけていた煙管が止まった。

「あら、私の職をご存知？」

「知っているさ。以前アンタが刀振り回す姿を京で見たことがある。その姿はさながら、戦場に咲く大輪の華……」

「そんな例えをしてくれた人は初めてよ」

嬉しいと呟き、煙を吹き出す。

「さぞかし大変だろう。男ばかり獣だらけの世界で、女一人でやっていくのは」

「男ばかりだから女が必要なよ。男なんて放っておいたら自墮落で絶滅するわよ？」

「違いねえ」

沈黙が流れ、互いの煙が空へ消えていく。

「綺麗ねえ」

夕日が沈んでいく。赤く染まった世界が、消えていく。

「オメエ……。なんで真撰組なんかに入った」

「なんで？　なんでって言われても……」

「何故幕府になどにつき従う。あんなクズ共に……」

男は吐き捨てるようにそう言った。恐らく最後の言葉は、彼の本心だろう。操は煙管を逆さにして火を落とすと、懐へしまった。

「勘違いもいいところよ。幕府に飼われてるなんて思ったこともない。私が真撰組にいるのは、大事な人達を護るため」

男が、ふんと鼻で笑った。

「女的身で、一体なにが護れるっていうんだイ？」

「言ってくれるわね。確かにひ弱な女の力じゃ、限度があるわよ。でも、護ることは出来なくても、見守ることはできる」

煙管を口に運ぼうとしていた男が、こちらを見た。

「貴方にはいない？ 危なかつしくてやんちゃで、鉄砲弾みたいなまるで駄目な奴だけど、でも、見守ってあげたい子が」

「……いねえな」

あら、淋しいわねと呟きが聞こえた。

「なら、護りたいものは？」

「んなもん。とうの昔に亡くした」

「そう……」

操は暗くなりはじめた天を見上げて、言葉を探した。この意味の分からない男に、なんと声をかけていいのか迷う。正体が分かってしまったから、尚更。

「なら、見守ってくれる人ならいるでしょう。貴方に従い、志を共にする人達が。……いないとは言わせないわよ。鬼兵隊総統、高杉晋助」

ざあ……と風が吹いて、男の笠を吹き飛ばした。顔を曝した男は、唇を吊り上げてニイと笑う。

「おや、知っていたのかイ？」

「これでも真撰組なのよ。知らなかった？」

わざとらしく首を傾げてみる。

「女物の着物着流して、煙管くわえてる隻眼の色男っていったら、

貴方しかいないでしょ？」

「そりゃあ嬉しいねえ。真撰組九番隊隊長、近藤操が俺を知っているとは」

「こっちも嬉しいわ。肩書きも名前も知ってもらえて」

なにしにきたのかと思う。斬りに来たのか、ただ会いに来たのか。まあ、後者であればそれにこしたことはないのだけれど。

「私に何か用？」

「アンタの顔を拝みにきただけさ。京で毎日のように見ていたからな。少しは変わったかと思って」

変な男だため息がでる。

「で、私は変わってた？」

「ああ」

「何処が？」

高杉は煙管を仕舞い、不意に操に近づいてきた。こつこつと操に近寄り、真横へ。

「そうさな」

操の顎を掴んで、こちらを向かせる。操は怯えも、逃げもしなかった。

「美しくなった」

なにを言っているか分からず、操は目を瞬く。

「気が強いと思えばそうでもねえ。脆いと思えば、なかなか芯の強い女だ」

「それは褒められているのかしら」

「褒めてんだよ」

顔が近い。互いの吐息が届くほどに。

「いい女だ」

ぐいと腰を引かれ。バランスを崩したところに口付けられた。思わず手を置いた肩は、外見からは見当もつかないほどがっしりしていた。

「ちよっ……！」

胸を強く押して唇を離す。飛びすさろうとしたが、高杉の腕がまだ巻き付いていたため、出来なかった。

「じっそさん」

ぺろりと唇を舐める高杉。操は頭の中でぐるぐるするものを押さえつける。

「……物好きね。こんなオバサンに……」

「俺よりほんの少し年上ただけだろう。外見からは想像もつかねーくせに」

「気にしてるのに……。しょっぱくわよ貴方」

高杉が、ククと笑った。

「出来るか？ このままアンタを連れ去ったっていいんだぜ？」

「それは困るわ。見逃して」

「見逃したら、どんな特典がついてくる？」

「とりあえず、貴方には火をあげたわ。それでも足りないっていうのなら、今のキスでチャラ」

高杉はしばらく何かを考えているようだった。真顔がすぐ近くにあるので、可笑しくて笑ってしまいそうだった。

「しょうがねえか」

腕が解ける。代わりに、また顎を捕まれた。

「オメエ、独り身か？」

「そうよ。どうして分かるの？」

「キスに慣れてなかったからな」

「……貴方、性格悪そうね」

含み笑いを漏らし、高杉は手を離れた。

「そのまま代わらずにいてくれりゃ、弄りがいがあるってもんだ」

「訂正、性格悪いわ。貴方」

「よく言われる」

高杉はまた笑い、操に背を向けた。

「また来る」

「もう来るな！」

小さな笑い声を残し、高杉は闇の中に姿を消した。

「なんなのよ」

毒づく、その声が震えていることに気づいた。慌てて手を見てみれば、こちらにも微かに震えている。

「私としたことが……」

男一人に、怯えていたなんて。

「いつか捕まえてやるんだから」

覚悟しておけ。高杉晋助。

終

## 密会に注意（後書き）

私の話の中では、高杉さんはキス魔になってます…。まあ、桂さんもなんです…。

## 髪は女の命（前書き）

松平さんが、ずっと昔のことを回想しています。

## 髪は女の命

「この腐れゴリラあああ！」

松平が物凄い剣幕で怒鳴りこんでくるのも慣れたもので、近藤は汗を拭きつつ竹刀を下ろす。

土方も、同じく竹刀を下ろした。

「なんだいとつつあん」

「なんだいじゃねえバカヤロー。今月の浪士検挙率はどーした、半年前からがた落ちじゃねーかコンチキショー」

性懲りもなく、松平は銃をむけてくる。流石に当たりたくないという方は一歩下がる。

「それは毎月聞いてるって、とつつあん。そんなに言っなら、トッブが掴んでる攘夷浪士の情報教えてくれよあ」

「馬鹿言っな。んなもんテメエらで調べるのが仕事だろうが。オジさんまた上にぐちぐち文句言われてよあ、もう耳にタコさあ」

だからなにしに来たんだと土方がツツコミかけた時、とたとたと廊下を走る音がした。

「松平のオジ様！」

操が駆けてきたと思いきや、がばりと松平に抱き着いた。松平はそんな操を受け止め、慣性を打ち消すため数回回転する。揺れたピアスが、しゃらんと音をたてた。

「おお、操ちゃん。久しぶりだなあ」

「お久しぶりです松平のオジ様。会えなくて淋しかったあ」

「オジさんもだよ。操ちゃん」

「もう私たちだけ遠征なんて決めちゃ、い・や・だ」

甘えるように、松平の胸を指先でぐりぐりと押す。松平は機嫌をよくしたのか、カカカと笑った。

「上層部によく言っておくよ」

道場の中では、近藤と土方が青くなっている。

「……姉さんには脱帽だぜ」

「とつつあんにあんな接し方出来るのはみい姉だけだからなあ……」

操は女であることを利用して松平との関係を保てる、至極貴重な存在だ。ここ数年、彼女がいなかったためどんなに大変だったか……。

「ねえオジ様。久しぶりにお酒飲みましようよ。私にお酌させてくださいな」

ねえねえいいでしょうと擦り寄る操に、松平はデレデレと鼻の下を伸ばす。

「いいねえ、久しぶりに一緒に飲もうか」

「わあい！ オジ様大好き！」

抱き着いた操は松平にばれないように、こっそりと近藤らにウィンクした。近藤と土方は、冷や汗を流しながら頷く。

「早く行きましょう。私いいお店知ってますのよ」

「おっ、カワイイ娘いる？」

「もう、私以外の女の子に現を抜かしちゃ嫌ですよ」

そんなことを話ながら、二人は頓所をでていく。土方はため息をつき、近藤は床に手をついた。

「ごめんみい姉……。あんな終わりかけの猿のお酌なんか……」

「……かといって、姉さんしか出来ないんだよな、あの仕事……」  
仕事といえるのか、分からないけれど。

「お妙ー！ 来たわよー」

「いらっしゃいお姉様！ 隊服姿もやっぱり素敵！」

酒を飲む場所と言っても、操はスナックすまいるしか知らない。  
妙に会うことも口実に、松平を連れてきた。

「なんだあ。操ちゃんもここを知ってたのか」

「みんな力ワイイ妹たちなんですのよ」

妙を抱きしめながら、操はにこりとして見せる。他のホステスたちは、久しぶりに松平が来たと騒いでいた。

「お偉いさんの接待しなくちゃいけないのよ。私のキャラが壊れてたらごめんなさいね」

こそこそと妙に耳打ちする。

「任せてお姉様。私たちもフォローするから」

「ありがとう。私の可愛い妹」

ぎゅうと抱きしめると、松平がにかにかと笑った。

「二人くつつくと百合みたいだねえ、操ちゃん」

そういえば旦那も同じようなこと言ってたなと、こっそり思った。

「そっかー。松平さんってお姉様の上司なんですねー」

「おーよ。むさい男の中にも可愛い部下がいて、こっちも気が和むってもんだ」

「オジ様ったら、冗談ばかり」

数人のホステスに囲まれ、気分上々の松平。酒のペースも速い。

「ねえ松平さん、昔のお姉様ってどんな女性だったの？」

「昔から変わらない綺麗な女性だったんでしょ？」

「ちょ、何を聞くのよ」

酒とは別の意味で赤面し、割り込む操。

「だってえ、お姉様ったら昔の話してくれないじゃないですかー。私たちもお姉様を見習って強い女になりたいんです！」

「貴女たちはかわいいままでいいの！ 私みたいになんかなっちゃダメ！」

ホステスたちにとって操は、女性の根本的な見本である。操に少しでも、近付きたいのだろう。

「そうさなあ、昔から気が強くて、でも大人しい子だったなあ」

「ちょっと、オジ様話す気ですか？」

「いいじゃねーか操ちゃん。恥ずかしいこともあるめえ」

「十分恥ずかしいんです！」

声を荒げる操を、妙がまあまあとおさえる。松平は話す気満々のようだ。

「じゃあ、操ちゃんが勢い余って長い髪をばっさり切っちゃった話でもするかあ」

「ちよつ……オジ様、あれは勢い余ったんじゃないかって私の意思で……」

赤い顔で弁解する操。まあいいじゃないかと、松平は笑う。

「まだ真撰組が創設したてで、隊士も十数人しかいなかったころの話だ。ゴリラを説得して真撰組唯一の女隊士になった操ちゃんを、気に入らない新人もいてな」

どんな時も、操を見れば蔑んだ。それも直接ではなく、聞こえるように影で。

その日はちょうど稽古をしていて、松平もその様子を見ていた。

「女のくせに帯刀なあ、いいご身分だよな」

「そうそう、女は家で家事でもしてろつての」

聞こえてくる蔑みに、操の相手をしていた沖田が額に血管を浮かせた。

「デメエら、いい加減に……」

「いいのよ総悟君。放っておいて」

そのうち、実力で黙らせてやるつもりだった。

「言ってくれるじゃねーかよ。局長の姉だからって、でかい面する

なよ！ アンタは所詮は女なんだよ！」

近付く隊士に、髪を掴まれる。ブチ切れぎりぎりの沖田を、操は制した。

「女よ。それは紛れも無い事実」

「だったらこの暑苦しい髪をなんとかしてくれよ！ まあ、どうせできねーんだろ、髪は女の命なんだからな」

操はその隊士を見上げて、ぱしりと髪を掴まれていた手を払いのけた。そして壁にかけられていた真剣を手にとる。

「みいさん？」

操はすらりと刀を抜くと、髪を掴んで一気に滑らせた。

ぴしっ！

切られた髪が、床に落ちた。沖田も、土方も、成り行きを見守っていた松平も、誰もが絶句した。

「これでいい？」

操はさりと、言つてのけた。

「お姉様かつこいい！」

「かつこよくないわよ、自分でも馬鹿やつたなと思つたし……」

話が現実に戻り、ホステスたちがきやあきやあと騒ぐ中、操は赤い顔を片手で隠した。松平は何杯めかの酒をあおり、かかと笑う。

「いやいや、操ちゃんかつこよかつたよ。男を黙らせちまつたんだから、たいしたもんだあ」

「黙らせてません、あのあとの勲、うるさかつたじゃないですか」

なにかあつたんですかと、皆が目を輝かせる。

「あのゴリラも、所詮は操ちゃんが好きでたまらないのさ」

それはもう、近藤はうるさかった。

「みい姉の髪が〜！ 世界一の美髪が〜！」

「勲、うるさい……」

夜、話でもしようと沖田、土方、松平、操が集まった。

そこに俺も混ぜてと仕事から帰った近藤が、変わり果てた姉を見て今に至る。

「なんでこんなに短くなってんの〜！ さらさらの流れる緑の黒髪が〜」

あまりにもショックだったらしい。突っ伏しておんおん泣く近藤の

泣き声は、うるさいサイレンのようにも聞こえる。

「すみません近藤さん。止めなかった俺らのせいでさあ」

「俺も見てただけだ。すまねえ……」

操の髪が大好きだった二人も、些か残念そうだ。

「誰のせいでもありません。切りたかったから切ったの。どうオジ様、似合う？」

話を、松平にふる。

「似合わねえわけねえが……。やっぱ些か淋しいなあ」

「もう、みんなして……。髪なんて一年後にはもとの長さになるんだから。黜ももう泣かないの、子供じゃあるまいし」

「だってえ……。竹刀をふって流れるみい姉の髪が好きだったんだぜ……。暫く見られなくなっちゃった……」

まだぐすぐすと、近藤は鼻を鳴らしている。操は息をつくど、弟の顔を包んで自分を向かせた。

「なによ、お揃いになったのに嬉しくないの？」

「嬉しいけどお……」

悲しいものは悲しいんだいと、近藤は続けた。

「しかし、同じ髪型になったとはいえ、本当に似てねえよな」

「本当に姉弟なのか、疑問ですねい」

同じ髪型をしていて尚、二人は似つかない。まるで美女と野獣だ。

「ま、どっちかが美しく育てば、どっちは不細工に育つもんだ」

「オジ様ひどい！ 勲だって男前ですわよ」

ねえ？ と同意を求める操。近藤は嬉しそうに、笑った。

「あの時のゴリラの泣きっぷりって言うたら。ああ、面白かったなあ」

「もう、オジ様ったら。勲で遊ぶの止めてくださいな。この前も、勲と本物のゴリラを結婚させようとしたでしょ。一応私の妹になる子なんですから、慎重に選んで下さらないと」

松平はふふつと笑い、そりゃ申し訳ねえと漏らした。

「ささ、松平さんもお姉様も、もっと飲んで下さいな。折角来てくれたんだから」

「おお、すまないねえ」

とくとくと注がれる酒を、松平は美味しそうに飲み干す。操も暫くの間、酒の味を楽しんだ。

「ねえオジ様。オジ様たちは攘夷浪士の詳しい情報、いくつか握ってるんでしょう？ 私にだけ教えて下さいな」

松平が泥酔し始めたころ、操は酔ったふりをして松平にすり寄った。

「そりゃあいけねえよ。一応内密情報だからなあ……」

「そんなことおっしゃらないで。私だけの秘密、ねえいいでしょうオジ様。教えてくれなきゃ操泣いちゃうー」

甘えるようにすり寄ると、松平は酔ったのも相まって、仕方ないなあと笑った。

後ろで、数人のホステスが、紙を広げていた。

「ただいまー」

深夜、操の帰りを待っていた近藤は、姉の声を聞いて部屋を飛び出した。

「みい姉！ お帰り！」

「ただいまー。遅くなってごめんなさいね」

かけより、ぎゅっと抱きしめる。

「ごめんよみい姉！ あんな終わりかけの猿の相手させてー！」

しがみついて嘆く弟を、操は慣れた手つきであしらう。

「くつついたらお酒の匂いがつくわよ。それよりも貴方、こんな時間まで起きて……」

「みい姉が心配だったんだい」

弟の心使いにうれしそうに笑い、操はあるものを取り出した。

「じゃあ、はい。起きててくれたご褒美」

それは、折りたたまれた紙だった。

「なんだいこれ……？」

「オジ様から聞き出した、攘夷浪士の情報よ。ホステスの子たちに書き留めておいて貰ったの。これからは私の記憶に頼らなくてもいいわ」

広げてみれば、かなりの情報が書かれている。

「いつも申し訳ない……。みい姉」

「気にしなさんな。私にできることならなんでもやるわよ。女であることを有効に使わなきゃ」

髪を揺らし、操は歩き出す。

「さすがに飲みすぎたから、私もう寝るわね。その情報についての任務、一個ぐらい参加させて頂戴」

「うん、わかった。本当にありがとうみい姉……。おやすみ」

「おやすみなさい。よい夢を」

歩み去る姉を見送って、近藤は自室に戻った。松平から情報を聞き出すなど、操にしかできない芸当だ。改めて、操の存在のありがたさを思い知る。

「とつつあんも、みい姉には弱いんだからな……」

情報を絞りだされた揚句、酒のせいでそれを覚えていないのが松平だ。操のいいように操られていると思えない。

「……みい姉は最強だな」

ぽつりと、呟いた。

数日後、新聞の一面に、真撰組がでかでかと乗せられた。攘夷浪士の大量検挙、お手柄という見出し。  
松平は煙草をくわえながら、ほおと小さな息を漏らした。

「あいつら、なかなかやるじゃねえか。しかしどこからこの情報を掴みやがったんだ？」

その情報を流したのは自分であるということを、松平は知る由もなかった。

終

## 髪は女の命（後書き）

松平さんのことをボロクソ言ってますが、私は松平のつつぁん大好きです。

## 好敵手（前書き）

真撰組の女隊士、近藤操が認めているただ一人の攘夷浪士とは…？

## 好敵手

「新八くん！」

呼ばれて振り返ると、浅黄色の着物を着た、美女が立っていた。――瞬誰だか分からず、微笑んでくれた彼女の笑顔に合点がいく。

「近藤さんのお姉さん！」

「一瞬分かりませんでした。お姉さんだって」

「そんなに分からないものかなあ。隊服着てるのと着てないので」

隊服姿の時は、まるで鋭い刃のような印象を受ける。だが着物姿だと、柔らかい絹布のような、温かな印象しか受けないのだ。

「まあ、ギャップがあります」

散歩中だという彼女の隣を歩きながらそう言いつつ、ふふつと楽しそうに笑い声が返ってきた。

「今日は一人？」

「はい。ちょっと用事があったので…」

そう答えれば、また笑い声が返ってきた。

「あんまり旦那を一人にしちゃだめよ？ 構ってくれなくて旦那泣いちゃうかも」

「ははは。まさか…」

苦笑が漏れた時、新八はふと何かに気が付いた。

「…お姉さん、縮みましたか？」

以前は見上げていた彼女の顔が、今はほんの少し上にあるだけだ。

「ああ、ヒールのせいでしょう。私は6センチのピンヒール履いてるから、隊服の時は背が高くなるのよ」

「…動き辛そうですね」

「慣れればそうでもないわよ。それにね、ピンヒールで回し蹴り食らわせると効くのよこれが」

「…笑顔で言われても」

この人なら容赦はしないんだろうなと、ぼんやり思う。

「あ」

ふと、ずっと彼女に聞きたかったことを思いだした。

「お姉さん、一つ質問していいですか？」

「ええ、どうぞ」

「お姉さんが認めてる、攘夷浪士って誰なんですか？」

操は大きな目を丸くして、何故そんなことを聞くの？ というように首を傾げた。

「始めて会った時…。攘夷浪士の人に言ってたから、気になって…」

『私が認める攘夷浪士は、ただ一人』

「成る程。でも、言っても知らないかもしれないわよ？」

「知ってるかもしれませんが」

敵わないなあと思は笑って、

「桂小太郎よ」

「えっ…！」

まさか桂の名前が出てくとは思わず、新八は息を飲んだ。

「認めているって…?」

「攘夷浪士としてね。彼は他の攘夷浪士とは違う、本当に世の中を憂いてる。世の中を変えるために、本気で動いてる…。悔しいけど、彼だけは本物の攘夷浪士よ」

真撰組隊士にここまで言わせてしまうなんて、桂さんは凄いなあとぼんやり思う。

「私がいないうちに過激派から穏健派に成り代わったってきいたけど、さつさとっ捕まえて…」

立ち止まった操が、ふるふると拳を握り締めている。その額には、青筋…。

「あんの女顔…っ…」

（お姉さんに何したんだろう、桂さん…）

冷や汗を流す新八の後ろから、低い声が飛んだ。

「おお、新八君じゃないか。今日は銀時と一緒にじゃないのか？」

いましがた話の種にしていた桂が、唐笠に錫杖といった僧侶の姿で立っていた。マズイと新八が顔を引き攣らせたのと、操が懷に手を滑らせたのはほぼ同時…。

「桂さん！」

ガキイイイ…ン！

操が凄まじい早さで引き抜いて突き出した短剣が、桂の立てた錫杖とぶつかり合って甲高い音を立てる。

「なんだ貴様は！」

いきなりの攻撃に、驚いて声を荒げる桂。新八は目の前で起こった大立ち回りに、なす術がない。

「浮気者。私の顔をお忘れ？」

にやりとした操に、桂が息を飲む。

「お前……！ 戻っていたのか！？」

「ただいまー。というわけで逮捕よ！」

振われた短剣を、桂はひらりとかわす。飛びすさり、間合いを開ける。

「隊服の時に来てくれなきゃ困るわ。愛刀が無きゃ、貴方をたたっ斬ることも出来ないじゃない」

短剣を構えながら、操はそう言う。

「それは良かった。お前に刀を振り回されたら、ただではすまないからな」

「フン。分かってるじゃないの」

どうしたらいいのか分からずオロオロする新八の前で、ぴりぴりした空気が漂う。

「何年会っていなかったか…。変わらぬものだな。戦場に舞い降りた女神も」

「一瞬分からなかったくせによくいうわ。貴方は随分変わったみたい。いい顔してる」

ふつと桂が笑う。なんだが恋仲の会話みたいだと新八が思う目の前で、操が軽く腰を落として短剣を構える。

「わざわざ私に捕まりに来てくれたわけ？」

「なにを馬鹿な」

「そうでしょう。でもここで私に会ったが、貴方の運の尽き」

桂も腰を下ろし、錫杖を構える。まさかここで乱闘が起きるのではないかと、新八はハラハラしながら見守るしかない。操が、にたりと笑った。

「いざ尋常に…！」

だが次の桂の行動は、思いもよらぬものだった。

「さらばだ」

言って踵を返し、一目散に逃げたのだ。

「って逃げるんですかー！！？」

いつものくせでつい突っ込む新八。操も思わずコケたようだ。

「あいつが逃げの小太郎だって忘れてた…」

やられた、と呟いた操は、それでも気を取り直して駆け出した。

「待ちなさい桂ー！！」

桂と操の姿が、遠くに消えていく。新八はそれを、ただ呆然としたまま見送っていた。

そんなことがあったのは、昨日のこと。

「あの…、なんですかコレ…」

「遠慮しないで食べて食べて。お姉さんの奢りだから」

通勤しようとしたら、駅をおりたところで操に捕まった。

ほぼ強引に引きずられるようにしてレストランに入り、現在目の前にはステーキやオムライス、ホットケーキにパフェなど沢山の美味しそうな料理が並んでいる。

「…なにを企んでいるんですか？」

「あら、なにも企んでなんかいいわよ」

おいしい話には裏がある。なにより操の満面の笑顔が恐ろしい。

「ちょっと新八君に教えてもらいたいだけ」

肘をついて、手の上に顎を乗せる。操はニコニコ笑いながら、続けた。

「旦那と桂の関係について」

新八は冷や汗を流して飛び上がった。指名手配中の桂を匿ったり、一緒に行動したりして関わっていいのかと思うことは、正直に何度かあった。

だばだばと滝のように汗を流して、それでも新八は視線はさとられまいと視線をそらす。

「か、関係なんかいいですよ！？ 銀さんが桂さんと関係なんかあるわけじゃないですか！」

多少声が上擦る新八に比べ、操はまだニコニコ笑っている。

「ほら、また言った」

手を解き、細い指を珈琲の入ったカップに伸ばす。

「桂さんって」

「おかしいですか？」

「桂さん　よ？　普通知らない人にさん付けしないわ」

その通りなのでぐっと押し黙る。

「それに昨日はつきり彼が言った。今日は銀時と一緒にじゃないのか、  
って」

もう逃げられない。新八は汗と心の涙を流しながら、どうすればこの状況を逃れられるのか必死に考える。

操は優雅に珈琲を飲みながら、笑った。

「安心して。これは尋問じゃない。旦那と桂に接点があったからって、旦那を逮捕したりしないわ。貴方から聞いたことは、私だけの秘密」

「…なんでまた」

訝しげに、新八は問う。まだ完全には信用していないようだ。

「私はね、彼が攘夷だろうが乗員だろうが何だっていいの。そんなもの勝手にやってればいい…。真撰組ではなく個人的に捕まえて、一発殴ってやりたいだけなの」

（本当にお姉さんになにしたんだろう、桂さん…）

操の言葉からは、多少の憎しみが滲み出ている。桂は一体なにをして、操を怒らせたというのだろう。

「…本当に、銀さんを逮捕しないんですか？」

「しないわ。約束する」

新八は暫く黙り込んで俯いた。操は新八の口が開くのを、辛抱強く待った。

「…銀さんと桂さんは、一緒に攘夷戦争に参加したことがあるそうです…」

「戦争に？」

「はい…。それ以前も、どこかで交流があったと聞きましたけど、詳しくは知りません…。二人とも、昔の話はあまりしてくれないんです…」

操は目を伏せ、そう…と小さく呟いた。

「盟友だったのか…」

「あのっ、桂さんもあんなんだけど、悪い人じゃないんです！もう何だか、何がしたいのかも分からなくなってるけど、江戸を守りたいって気持ちは、ちゃんと…」

「分かってるわ」

はつきりした操の言葉に、新八はまた黙り込む。操のその顔は、まるで母親のように優しいものだった。

「悪い人が、真撰組隊士助けたりしないわ」

桂が誰か助けたのだろうか。それとも、この操を…？

「話してくれてありがとう。本当に誰にも言わないから、安心してね」

「は、はい…」

「それから、もし桂に会ったら、伝えておいて」

「なんてですか？」

「いつか捕まえてやるから首洗って待ってるコノヤロー」

笑顔で物凄いことを言っただけのけるものだから、新八はひくりと、唇の端を引き攣らせた。

『私ね、幕府も、攘夷浪士たちも、本当はどうでもいいの。私が真撰組にいるのは、勲やトシ君の側にいたいがため。彼等を護りたいがため…。だから攘夷浪士なんて放っておきたいけど、仕事だものね』

とても近藤の姉とは思えない台詞を吐いた操は、みんなには内緒よと立てた人差し指を唇に当てた。

『でも、それなら隊士になることはなかったんじゃないですか？ 同じ屯所で暮らせば、近藤さんのそばにいることだって…』

そう言うと、お馬鹿さんね、と苦笑が返ってきた。

『隊士にならなきゃ、戦場まで着いて行けないじゃない』

強い女性なんだと思った。ムサイ男の中に一人、女性が生きていくのは大変だろうに、ただ側にいたい。それだけの願いのために…。

（僕もずっと、銀さんや神楽ちゃんのそばにいられたらな…）

そのためには、強くならなければならぬだろう。今のままでは、あの二人の隣を走ることすら、叶わない。

（お姉さんを見習わないとな…）

「おはよーございまーす！ 遅くなりましたー！」

玄関を開けて中に入ると、見慣れた雪駄が揃えられている。これは、まさか…。

「やあ新八君。遅かったな」

リビングのソファには、呑気に茶をすする桂の姿。神楽と定春は、出掛けているらしい。

「桂さん！ 何してるんですか！」

「銀時にちと用が会ってな。その用も終わった」

「じゃ帰れ！」

銀時の機嫌が些か悪い。

「銀時、俺はもう少し濃い茶が好きだ」

「煎れろってか！？ もう一回煎れろってか！？」

手にしていたお盆を今にも投げてしまいそうな銀時を、新八は慌ててまあまあと宥める。

「そういえば桂さん。昨日会ったあと、近藤さんのお姉さんに追いつけられてましたけど、大丈夫だったんですか？」

「まあな。なんとか逃げおおせた…。まさかあの女が京より戻っていたとは、知らなんだ」

「…お前、姐御知ってんのか？」

姐御？ と桂から呟きが漏れた。

「お前に再会する前から、俺を追い掛けていた女隊士さ。あいつはなかなか、強い奴だった」

語る桂は楽しそうだ。

「奴はどうにも、幕府のために真撰組にいるようには見えなくなっている意味では、本当の侍と言えるかもしれん」

まるで旧友でも話すかのような顔で、桂は言う。銀時はふうんと、興味なさげに頷いた。

「俺のと濁いたわ。ぱつつあんも茶あ飲むか？」

「はい、ください」

「銀時、俺も飲むぞ」

「うるせえよツラのくせに！」

「ツラじゃない桂だ！！」

お決まりのやり取りを終えて、銀時は台所へ消えていく。

「そういえば、あの女の蹴りは凄まじかったな。青痣がなかなか消えなかった」

（ピンヒールの回し蹴り受けたんだ…）

「…その女性なんですが…。桂さん何かしたんですか？ 個人的に捕まえて殴りたいって言うてましたけど…」

「なにかと言われても…」

首を傾げて考えるような仕草をした桂は、ふと思いついたのか新八から視線を反らす。

「さ、さあ…。覚えがないなあ…」

桂の目が、泳いでいる。心当たりはあるのだろうか。

「まあ、気をつけて下さいね。あの人、桂さんを捕まえたがってましたから」

「ああ、気をつけよう。ま、奴も副長助勤だ。忙しくてそうそう顔を合わせることもあるまい」

「副長助勤？　いまは九番隊の隊長だと聞きましたよ？」

桂の眉が、ぴくりと釣り上がる。

「ほう、戦場に舞い降りた女神がなあ……」

「はい？」

「いや、何でもない」

ふるふると首を振る桂。新八が、首を傾げた時…。

「ぱつつあん、茶菓子持ってってー」

「はーい」

新八が立ち上がり、リビングをでていく。それを笑って見送った桂は、ずっと持ったままの湯呑みをテーブルに置いた。

好敵手と呼べたのは、彼女一人だった。彼女が遠征に行ってしまった。つまらないと正直思ったものだ。

「九番隊隊長か…。俺も気をつけなければな」

戦場に舞い降りた女神

それは

彼女が持つ、異名の一つ。

終

## 好敵手（後書き）

ピンヒールの靴で蹴り飛ばされると冗談抜きに痛いです。

## 翡翠のピアス（前書き）

まだ銀さんたちが真撰組に会う前のお話です。

## 翡翠のピアス

やつちゃった…。

ずるりと壁に背を預けて座り込むと、斬られた胸が痛み出した。短めの髪が、頬に張り付く。浅く速い呼吸音が繰り返され、血に染まった自分の胸を、まるで他人のそれのように見下ろした。

きつく巻いた晒は包帯の役割などしてくれやしない、この役立たず。

「甘かった……」

以前から探していた攘夷浪士の隠れ家を見つけたと、仕事中に連絡が入った。屯所にいたほとんどの隊士が駆け付けた。作戦を練り、中の人数と顔ぶれを確かめて、全員で乗り込んだ。

「……残党はいないと願いたいけれど、この私に傷を負わすなんて大したものね」

もちろん、生かしてはおかなかった。殺した人間の返り血と己の血が、皮膚の上で黒く凝固する。また人を手に掛けた。生きた人間を斬ったあのおぞましい感触は、まだ長刀を握った手に残っている。

「気持ち悪い……」

仲間たちと随分離れてしまったようだ。人通りの少ないこの道で助けを求めることなどできず、自分の弱さに自嘲する。

「屯所まで、歩けばいいなあ」

つぶやくと、操はふらつきながら立ち上がる。

「いたぞ！ 幕府の犬め！」

呪われないんですか神様。 こともあろうか、こんな時に浪士たちを送り込んでくるなんて！

刀を構えたが、痛みが酷く力が入らない。愛用しているこの長刀はいつから、こんなにも重くなったのだろう。

「死ね！ 幕府の犬！」

ああ死ぬのかと思ったその時、操と浪士の間割り込む風があった。

「同じ攘夷浪士として加担したいのはやまやまだが、貴様らのやり方は気に入らぬ。正々堂々、一対一で戦ったらどうだ」

背を向けられているため、顔は見えない。靡く黒髪が綺麗だなと思った。

眩暈。

膝から力が抜けて、地面に崩れた。

意識は急速に落ちていく。

髪、また延ばそうかしら。ざっくり切ったとき勲が泣いてたからな。そんなことを思いながら、操の意識は闇に飲まれていった。

口の中に、冷たい水が流れ込む。咳きこみつつそれを嚥下すると、操は重い目を開いた。

「大丈夫か？ 全く無理をする」

どうやら日の入らない路地裏の壁に寄り掛かっているようだ。ぼんやりと見つめた男の手には、小さな竹筒が握られている。

また闇に引き込まれそうな中、握っていたはずの長刀が手からなくなっていることに気付いた操は、慌てて跳ね起きた。同時に、胸にひどい痛みが走った。

「いつ……つつ」

「動くな。早く手当てしないと、悪化するぞ」

よくよく見れば、長刀は腰に下げた鞘の中に戻されている。安心して息をつき、冷静になったところで、自分を助けてくれたであろう男を見上げた。

「かつ……！」

「まったく、何故真撰組など助けてしまったんだか」

美しい黒髪を持った男は、指名手配中の攘夷浪士、桂小太郎だった。

「だ……きつ……！」

何故敵であるはずの彼が、自分を助けたのか。

「勘違いするな。正々堂々と戦わぬ浪士などもはや攘夷浪士ではない。そんな奴らに俺の敵をやられるのが気に食わなかっただけだ」

殺そうと思えば殺せるといった口調。敵に助けられたなど、とん

でもない屈辱だ。

「奴らはまいだが、まだ追ってきているようだ。しばらくここにいたほうがいい」

それから、桂は操の隊服に手をかけた。

「ちよっ……」

「手当してやるから早く脱げ。さっきから血の出が激しいぞ」

「そ、そんなのいらな……」

「早く脱げ！」

抗ったものの到底男の力には叶わず、ぱつと胸元をはだけられた。

「っ……！」

晒に漬された、豊かな胸。まさかそんなものが隠されていたとはつゆにも思わなかったであろう桂が、固まって呆然とつぶやいた。

「お前、女……」

短すぎる髪に、晒で覆い隠した女の体。少しばかり女顔の、頼りない男とも思っていたのだろう。

「なにすんのよこのド助平！」

「がふっ……！」

思わず拳を振るえば、もろにくらった桂が後ろに仰け反る。操は慌てて、服を直した。

「……男のくせに細い、軽いと思っていれば……」

殴られた頬を押さえ、桂はぼそりと呟く。

「女で悪かったわね」

怒鳴ったせいで傷に響く。裸を見られたなんて、助けられたことよりも更に屈辱だ。

「なるほど、真撰組に女がいると聞いたことはあったが……。お前のことだったか」

「いちゃ悪い？」

「女のくせに何をばかなことを、女として生きる道もあつたろうに……」

先が言えなかった。操がすさまじい速さで長刀を抜き、桂に突きつけたからだ。

「そうなのよ。みんな言うの、女のくせに、女だてらに……。女だから大事な子のそばにいちゃいけないの？ 侍の世界が男だけのものと思つたら、大間違いよ！」

何故彼にそんなことを言ったのかわからなかったが、言葉は口を滑り出ていく。

「私は悪い奴を捕まえたいだとか、貴方みたいな攘夷浪士を捕まえたいだとか、そんなものどうでもいいのよ！ 私はただ大事な者のそばで見守っていききたいだけなの！ それすらも許されないっていうの！」

操の気迫に、桂は押されたようだった。未だ重い長刀を下ろし、操は痛む胸に手をあてて蹲る。

「これはまた、威勢のいい女だ」

「それは褒めているの？ けなしているの？」

「褒めているのさ。これはなかなか、こんなに勇ましい女に会ったのは初めてだ。」

そんな男のような姿をせず、女として生きていけばいいではないか」

どうやら本当に褒めてくれていているらしい。嬉しくはなかったが、それでも彼の言葉はすっと胸に落ちてきた。

「私は強くなるの。あの子たちと同じ道を歩けるように……。真撰組を辞めるなんてできない」

「……それが、お前の道か」

「そうよ。後悔なんて……してない」

「なんだ今の間は」

していないと言えば嘘になる。真撰組になるために、大好きな人  
たちを傷つけた。

それだけが、ずっと後悔として残る。

「どこへいったあ！ 出て来い！」

遠くから声が近付く。追いかけていたのは本当らしい。

「オイ、どこに行く」

壁をつたって立ち上がった操に、桂は怪訝そうに声をかける。

「決まってるでしょ？ 斬りに行くのよ」

「馬鹿を言え、そんな傷で！」

「馬鹿って言ったわね！ これでもそこら辺の男よりはつよ……」

壁に押し付けられ、唇で唇を塞がれた。ぴきりと固まる操の遠方

で、数人の浪士たちが路地を通り過ぎていく。

「……にしてくれんのよ!」

手にした長刀を振るったが、ひらりと避けられた。

「お前が黙らなかつたから、黙らせただけだ。助けたことはこれでチャラだな」

「ふざけないで! 女の唇奪っておいて!」

「なんだ、初めてだったか?」

「違うわよ! 違うけど何で貴方に奪われなければいけないのよ!」

胸の傷が痛むのもお構いなしに、操は怒鳴った。桂は物陰で、くすくすと笑う。

「お前に対しての宣戦布告だ。強くなりたければ強くなるがいい。俺を捕まえられるように」

「なってやるわよ！　いつか貴方を捕まえてやるんだから！」

桂の口元がつりあがった。

「面白い女に巡り合ったものだ」

呟きと同時に、桂はひらりと屋根に飛び乗った。

「また会おう」

「あっ！」

屋根の向こうに桂が消える。  
いまさら傷が酷く痛み出して、胸を押さえながら路地を出た。浪士  
たちはいないようだ。

「みい姉さん！」

あちこちに傷をつくった原田がかけてくる。ほんの少し、安心した。

「原田君！　無事？」

「みい姉さんよりは無事だ」

胸から流れ落ちる血を、自分のものではないかのように眺める。

「ごめんなさい、数人逃がしちゃった……」

「大量検挙できたんだ。上出来だよ」

弱いから、こうなるのだ。強ければ、逃がすこともない。

「……悔しい」

「俺もだよ。早く帰ろう、みんな心配してる」

「私なんか、心配してくれる人いるのかしら」

「たくさんいるよ。全員が全員、みい姉さんを目の敵にしてるわけじゃない。乗るか？」

広い肩を示され、操はありがたく乗せてもらうことにした。

「ねえ原田君」

「んー？」

「私、男ぶるの辞めた。男になろうとしたって無理なもの」

何を言っているのかと不思議そうに操を見上げた原田は、柔らかくそうかと微笑んだ。

「女として、みんなについていくわ。フォローお願いね」

「おう、俺にできることならな」

言ってから、原田はあつと何かを思い出す。

「みい姉さん、俺思ったんだがよ」

「なあに？」

「真撰組……。何番隊とか作ったほうがいいんじゃないか？」

きょとんと首を傾げれば、良い考えだと思っけどなと見上げられた。

「隊長を作つてよ、一番隊、二番隊……、つて。で、今日みたいに全員がなだれ込むんじゃないくて、一番隊が突撃する、二番隊が控えて奴らを捕まえる、三番隊が出勤の時は四番隊は休み、みたいな感じでやれば、今日みたいなことにはならねんじゃないかなー」

成る程と、操は頷いた。いい考えだ。

「いいわね。勲と松平のオジ様に申告してみたら？」

「近藤さんはともかくとして、松平のつつぁんには関わりたくないんだ。みい姉さんが代わりに言ってくれよ」

「なんで私――？」

おどけて見せ、桂が消えていった屋根を振り返る。

いつか捕まえてやるんだから。

そんなことを恨めしげに呟いて、操は顔を元に戻した。

気付けば、夕日が沈みかけていた。

二月後。

「見つけたっ！」

逃走中の桂の前に突如として舞い降りた操。桂は足を止め、足場の屋根から落ちぬようバランスをとる。

「やっと見つけたわよ！　ちょこまかと逃げ回って！」

「……誰だお前」

ぴしりと、操の額に青筋が浮いた。

「忘れたっていうの！　人にキスしておいて！」

「冗談だ。ちゃんと覚えている」

人をからかうのが上手い奴だと、操は悔しくなった。

「聞いて！　わたし副長助勤になれたのよ！　情けなんかじゃないわ、実力を認められたの！」

実に嬉しそうに報告する操に、桂はきょとんとしつつも笑った。ほんの少し会わなかっただけなのに、髪も伸びて美しくなった。豊かな胸も晒で隠すこともなく、実に女らしくなった。二ヶ月前に男と間違えたなんて、信じられない。

「そうか、それはおめでとう。俺も気が抜けないな」

「その通りよ。貴方は私が捕まえるんだから！」

言つてのけて、何故こいつに報告しているのかと疑問が浮かんた。  
何をやっているんだ、自分は。

「それをわざわざ俺に報告しにきたというわけか」

「ついでに逮捕しにきたのよ」

桂がにっと笑う。お前には捕まらない、そう言いたげに。

「悪いが、まだ捕まる気はない」

「どうやって逃げる気？　ここは屋根の上よ」

にやりと笑った桂に、どきりと胸が鳴ったのは何故だったのだろ  
うか。

「今は時間が無い」

少しずつ足場を変える桂。操はそれに気付かない。

「いずれ決着をつけよう。何故だか、お前になら負けても悔いはなさそうだ」

「だったらいま負けておきなさい！」

刀を引き抜いた操の目前で、桂が飛んだ。ふわりと地面に着地し、そのまま駆け出す、

「あっ、こらーっ！」

「近藤操、楽しみにしているがいい」

桂は走りながら、操にそう言い残した。桂を追って地面におりた操は、そのまま追わずに呆然と呟いた。

「なんで私の名前知ってるの？」

その前に、何を楽しんでいるというのか。また逃がしたこともある、操は小さく舌を打った。

数日後、屯所の操あてに小包が届いた。差出人は不明だったが、操本人が受け取ったこともあって、誰にも怪しまれずに持ち込むことが出来た。

「……爆弾ではないのよね」

耳を近づけてみても、妙な音はしない。用心深く開けてみると、中からは綺麗な、翡翠のピアスが出てきた。

「……なにこれ」

こんなものを送ってくれる知り合いなどいない。訝しがっていると、ピアスの奥に手紙が入っているのを見つけた。引き出して、広

げてみる。

『副長助勤昇格おめでとう。手合わせできることを楽しみにしている。桂』

「はっ？」

あの桂から、昇格のお祝いだというのが。文机にそれを置いて、いやいやと首を振る。

「ありえないから、敵にプレゼントなんてありえないから。うん、ありえないありえない」

だが、よくよく見ても美しく、可愛らしい代物だ。こんなものを、わざわざ選んでくれたのだろうか。

「ないない、ありえない。絶対つけないもん。つけないもんねー」

その日一日、操の独り言は止まらなかったという。

「桂——っ！」

元気のよい声がして、桂は振り返った。だんだんっ、と音が響き、屋根から操が舞い降りてくる。

「今日こそ逃がさないわよっ！」

「毎回毎回、高いところから降りてくるのが好きだな」

「女は眺めがいいところが好きなのよ。今日こそ決着をつけてやるっ！」

そう言った操の耳には、あのピアスが輝いている。桂はふふっと笑って、今日も逃げた。

「桂——っ！ 待ちなさいこら——っ！」

からかい甲斐のある、女の声の背に聞いて。

終

## 翡翠のピアス（後書き）

桂さんは絶対こんなことしないんでしょーうねー…。  
つかしてたら怖いわ…。

女性は怒ると怖いから怒らせないほうが身のためだよ男性諸君（前書き）

長いタイトルですが、話も長いです。そして高杉さんや万斉さんが壊れてます。

女性は怒ると怖いから怒らせないほうが身のためだよ男性諸君

「攘夷浪士どもの集会？」

沖田が、間抜けな声を出した。毎朝恒例の真撰組の申し送り。各隊の連絡が終わって、終盤に差し掛かった時、近藤の一言で部屋の空気が引き締まった。

「明後日、攘夷浪士どもの大規模な集会が行われるという密告があった。山崎に調べて貰ったところ、かなりの大人数が集まるらしくてな」

腕を組んだ近藤は、にたりと笑う。

「真撰組の出番だ」

誰もが、唇を吊り上げた。

「全員で行きたいところなんだが、その日は運悪く將軍が公務に出かけるから、その護衛もしなきゃならん。そこで、御用改め組と護衛組、屯所に居残る組に分けたいんだが…」

「九番隊は、御用改め組に入りますわ。局長」

そう言ったのは、九番隊隊長にして、近藤の姉でもある、近藤操だった。

「大規模な集会とあらば、多くの攘夷浪士が集まる。一網打尽に出来れば、それに越したことはありませんわ」

「しかし……」

土方が洩る。副長と九番隊隊長という関係ではなく、プライヴェートでも操を慕っている彼は、操を危険な場所へ放り込みたくないのだ。

「心配は無用です、副長。任せて下さいな」

公の場では、彼女はトシ君ではなく副長と呼ぶ。仕事とプライヴ

エートを一緒にしない、彼女の拘り。

「よろしい？ 局長」

腕を組んだ近藤に視線が集まる。近藤もまた、仕事と私事を一緒にしない。

それを必死に抑えていることを、誰もが知っていた。

「指揮官は近藤に任せる。ただ、人数が多いに越したことはない。もう一隊連れて行ったほうがいい」

「なら、俺らが行きまさら」

沖田が名乗り出た。

「特攻の一番隊、慎重な九番隊。足りないところを補いあえるいい組み合わせだと思いやすがね」

近藤と土方を見て、にこりと笑う。俺が操を守るから、安心してくださいと言わんばかりだ。

「わかった。一番隊と九番隊に任せる。気をつけてな」

近藤も安心したのだろう。彼は安堵の息をつき、操は全く反対のため息をついた。

「無理しなくても良かったのよ、総悟君。私達だけでも、十分やれたのに」

当日、パトカーに寄り掛かった操は、キセルを燻らせながらパトカーの中でねっころがつている沖田に話しかける。

目の前には、集会が行われているという寺院が見える。。  
見上げれば、見事な満月が浮かんでいた。

「数が多いに越したことはありませんぜい。それに、みいさんを単独で行かせたら、近藤さんが心労でぶっ倒れまさら」

危険な任務につかせることを躊躇うなど、近藤には言い聞かせて

ある。なのに近藤も、そして土方も操が危険な任務につくことを躊躇する。そんなに頼りないのだろうか。

「みんな、みいさんが大好きなだけでイ。大好きな女性を、危ない場所にほっぱれるほど俺等は白状じゃありゃあせん」

「……」

所詮は女。女だからと見下されぬよう、今まで必死に努力してきた。そして今の地位についた。なのに未だ消えない。「女は弱い」というレッテルが。

「…行きましょうか」

キセルを逆さにして火種を落とせば、周りに待機していた隊士たちに緊張が走る。

不気味なほど静かな動作で、隊士たちが寺院を取り囲んだ。

「みんな、準備はいい？」

レシーバーに声を放り込む。沈黙は、OKの合図。隣に立つ沖田も、

門に向かってバズーカを構える。

「踏み込め！」

合図とともに用意していたトラックに設置しているライトが煌々とたかれ、隊士達が塀を乗り越えなだれ込む。沖田が門をバズーカで壊すと、操と共に中へ入りこんだ。

すでに隊士達と攘夷浪士達の斬り合いが始まっていた。操は襲ってくる浪士を、斬り捨てながら奥へ進む。

「総悟君、ここはお願いするわ！」

刀の血を振り払いながら建物の中に入る。

「了解っ！ あんまり無茶しないで下さいよ、みいさん」

「あら！ 私が無茶なんかしたことあったかしら？」

「数えきれねえほどありまさあ！」

楽しそうにいいながら、沖田は刀を振るう。邪魔をする浪士たちを

斬り捨てながら、操は割り込むように中へ進んだ。

数人の隊士が操のあとをつけ、彼女を庇うように浪士を斬っていく。ひとつひとつの部屋を調べ、ある部屋になだれ込んで、操は動きを止めた。誰も居なかったが、文机には行灯が置かれ、硯と筆が並んでいた。今まで誰かいたような、そんな気配。

（この匂い……）

操の背に、ぞくりと寒気が走った。慌てて部屋を飛び出す。

「みんな気を付けて！　ここに奴が……あつ！」

最後まで言えなかった。髪を引かれて仰け反った首に、冷たい感触。刀を押し付けられていた。

「クク……。　奴とは誰のことだい？」

舌打ちをする。完全に相手に後ろを取られ、刀を振るうことすらままならない。

「隊長っ！」

隊士たちが悲鳴に似た声をあげる。当の操は平然としていた。

「貴方のことよ。攘夷浪士の中で最も過激で、最も危険な男……。高杉晋助」

刀を突きつけたまま、高杉は楽しそうに笑った。

「久しぶりだなあ、真撰組九番隊隊長、近藤操。どうして俺がいると分かった」

「タバコの匂いよ。攘夷浪士の中でこの高級な銘柄を吸っているのは、私が知っている限り貴方しかないから」

「ほお、随分鼻が利く」

「仮にも幕府の犬だから」

隊士たちの空気が張りつめるなかで、二人だけが暢気な会話をしている。

「高杉、貴様あ！ 隊長を離せ！」

隊士たちが叫ぶが、操を人質に取られていては動くこともできない。

「髪を引っ張らないで。痛いわ」

「おや、失礼」

力が消え、手の上でさらさらと流されているのが分かる。

「綺麗な髪だ。黒髪は固いイメージがあつたが、存外柔らかいんだなあ。そっぴゃあいつの髪、触ったことねえや」

「なんの話してるの、貴方」

「クク、なあに。どうやってたらお前えを連れ出せるか、考えてんのだ」

するりと腰を抱かれる。

「細え腰だ」

操の額に、血管が浮く。もう首なんか飛んだっていいから、兎に角こいつを殴りたい！

「みいさんから離れろ！」

緊迫した空気を、打ち破る声でした。

「死ね！ 高杉！」

沖田がバズーカをこちらに向け、躊躇無く打ち放つ。操を解放し、外に飛び出した高杉は、着物についた土を払う。

「身だしなみより、背後に気をつけたほうが良いんじゃないの？」

さつきとは逆の体勢になった操が、刀を高杉の首に押し当てながら言う。

「おや、見付かっちゃった」

「残念でした。貴方は私が逮捕するわ。巫山戯た攘夷活動も、もう終わりよ」

クク……と高杉から含み笑いが漏れた。

「巫山戯てなんか、ないんだがな」

「よく言っわ。貴方は騒ぎを起こすこと自体を楽しんでいる、ただ破壊を楽しんでいるだけ」

刀を突きつけながら、操は一步高杉へ近づいた。

「貴方はただ、悪戯に破壊を楽しむ獣でしかない。私は貴方を、攘夷浪士として認められないわ」

高杉は声高らかに笑った。いきなり笑い出すので、操は流石に驚いた。

「ククク、ツラと同じ事を言うなんてな」

「……は？」

「操よ。どうしたらお前に認めて貰える？」

額の血管が、危うく切れかかった。

「名前を呼ばないで！ そうね、私から逃げられたら認めてあげるわ。……無理でしょうけど」

晴れた煙の中から、総悟が現れた。

「すっげえみいさん、流石！」

「総悟君、こいつに手錠をはめてちょうだい」

「はい」

手錠を取り出して、沖田は近づいてくる。高杉はもう一度、笑った。

「逃げられたら……ね。逃げてやるよ」

高杉は凄まじい早さで振り返り、操の間合いに飛び込んだ。息を飲

む操の顎を掴み、唇を重ねる。

「！！！！」

固まって目を見開く操。沖田の瞳孔が開いた。

「高杉イ！ テメエみいさんになんて事を……！」

「……にしてくれるのこの女ったらし！」

とうとうブチ切れた操が、刀を振り下ろした。ひょいと退いた高杉が今までいた地面が、大きく抉れた。

「おお、怒った怒った」

操の行動を、何から何まで楽しんでるようだ。操は猫が威嚇でもするかのように、フーツと鋭い息をもらす。

「公の場でいきなり接吻とはやってくれるじゃないの……。もう許さないわよ、この助平！」

「なんだ、照れているのか？」

「お黙り！ 女たらし！」

助太刀する暇もない。今の操は完全に怒っている。手を出さないのが身のためだと、沖田は襲いかかってきた浪士を斬り刻んだ。

「さっきのは訂正！ 逮捕じゃなくて斬り刻んであげるわ！」

次々と襲いかかる刀の攻撃を、高杉は軽々と避けた。操の反応が楽しくて仕方がないらしい。

「女をなめてかかると、痛い目見るわよ！」

一度振られた刀は美しい裸身を空中で鮮やかにひねり、上段から斬り下ろされた。流石に避けられる体勢になかった高杉が、始めて右目に焦燥を浮かべる。

ガキーン！

二人の間に滑り込む風があった。操の瞳が大きく開かれる。視界に飛び込んだのは、大きくうねる闇色のコート。そして、きらりと輝

く三味線の弦。

「真撰組に絶世の美女がいると珍しく晋助が褒めたと思ったら……。姫華のほうが美人ではないか。晋助」

操の刀を止めて高杉を庇ったその男は、厳かに言っただけだ。

「そうかい？ 同じくれえいい女だろう？」

「姫華のほうがいい女でござるよ」

「テメエはどんな時でも姫華じゃねーか」

止められた刀を跳ね返し、操は大きく跳躍した。十分に間合いをあけ、構える。

「……邪魔しないでいたきたいわ。人斬り、河上万斎！」

咆吼のような声が響く。

「私は高杉に用があるの。そこを退いて」

「……晋助、お主気の強い女は嫌いではなかったでござるか？」

「強いように見えて、実は脆いんだよ」

ぴしぴしと、操の額に血管が浮いていく。

「退いてって言うてるの！ 河上万斎！」

操が滑るように前へ出た。繰り出される攻撃を刀で弾いていた河上が、何故そこまでムキになるのかと首を傾げる。

「近藤操、お主なにをそこまで立腹している」

「公衆の面前でいきなり接吻されれば誰だって怒るわ！」

「せつぷ……」

絶句した河上に、一瞬だけ隙が出来た。操は横殴りの刀を繰り出し、河上を吹き飛ばす。

「さつきから言ってる姫華というのは貴方の恋人かしら？　一つ教えてあげるわ。女っていうのは怒ると恐ろしいの。怒らせない方が身のためよ」

「……拙者は既に何回も怒らせている故……」

「ああそう！　だったら殺されないように注意なさい！　美人な女ほど何をしでかすかわからないんだから！」

怒りの矛先が河上に向いている。勘弁してくれと、河上はため息をついた。

「そりゃあ恐ろしいな。まあ、怒った顔もなかなかのものが」

刀を抜いてかかってきた高杉を止める。ぎりぎりと錨迫り合いが続き、操は高杉を睨み付けた。

「いい加減その口を閉じなさい！」

「お前が閉ざしてくれりゃいいじゃねえか。操」

「名前を呼ぶなと言った！」

渾身の力ではねとばす。いつの間にか河上の姿が消えていたが、そんなことは知ったことではない。ただ高杉を斬る。それしか頭に無かった。

「なあ操。今宵はデケエ月が出てるな」

実際本当に美しい満月が出ているのだが、操にはそれを確認する暇はない。

「貴方の耳は飾り物？ 名前を呼ぶなと何度も言っただわ」

「満月にこんなに映える女は見たことねえ。あいつが白夜叉なら、お前は怒りに舞う狂天女か。綺麗なもんだ」

「なんでそんなに気に入られたのか、皆目検討もつかないわね」

「いい女だからさ。単純に」

遠くから、バイクの爆音が聞こえる。高杉はひらりと、塀の上に

飛び乗った。

「また会いにくるぜ。操」

「もう来るな！ 今度私の前に現れたら、本当に殺してやるわ！」

高杉はクク……と笑みを漏らした。その姿が月光を浴びて、闇夜に映し出される。

「あばよ。操」

高杉の姿が塀の向こうへ消えた。慌てて塀に登ったが、高杉の姿はない。代わりに、バイクが爆音をたてて去っていくのが見える。

「あつ！」

後部座席に、高杉の姿が見えた。

「高杉——っ！」

怒り任せに怒鳴る。

「貴方は私が捕まえてやるわ！ 覚悟してなさい！」

それが本人に聞こえていたかどうか、そんなことはどうでも良かった。怒りが体中を渦巻いている。この怒りを、屯所に持ち帰るわけにはいかない。

「ああ、腹が立つ」

操は塀から舞い降りた。怒り狂いし、狂天女と化して。

「覚悟してなさい！」

遠くから怒鳴り声が聞こえる。

「晋助、吼えているで」  
「おれらよ」

背中ごしに、クク……と苦笑が聞こえた。

「面白れえ、あんなに弄り甲斐のある女は始めてだぜ」

実に楽しそうだ。新しいおもちゃを見つけた子どものような顔に、河上は珍しいこともあるものだ、こっそり思った。

「どうしたんですかい？」

屯所。深夜だというのに縁側に座り、黙って煙管をふかす操に、沖田が声を掛ける。

「風邪ひいちまいやすぜ」

操はため息のように、煙を吐いた。屯所に戻ってからというもの、  
機嫌が悪くて誰も近寄れなかったのだ。

「ねえ、総悟君」

「へい？」

「私は、いい女？」

ぼそりと問う。

「……へ？」

「あいつに言われたの。私はいいい女だから、気に入ったんですって」

ばかばかしいと、逆さにした煙管を縁側へ叩き付ける。火種が、  
地に落ちた。

「いつか捕まえてやるわ。あの女たらし！」

怒りがおさまらないらしい。かりかりと煙管を嚙むのは、彼女が怒り心頭の時の癖。

「みいさんは、いい女でさあ。かつこよくて優しくて、戦いの女神みたいな女性でさあ。高杉のヤローは、そんなところに惚れたんでやしょ？ 言ってやりやいいんでさあ。私に惚れたら火傷するぜ、って」

操は思わず吹き出した。

「総悟君古いー。そうね、言ってるうかしら」

浮かんだ涙を拭く。少しは元気が出たようだ。

「ありがとう、総悟君」

「どういたしやして」

おやすみなさいと一言、そしておやすみのキスを操の頬に残して、沖田は部屋に戻って行った。操はまた煙管に火をつけかけて、止めた。

「いつか捕まえてやるわ」

それまでにせいぜい、私よりいい女を見つけるといい。

「私を気に入ったこと、後悔させてやるんだから」

それは高杉への、戦線布告だった。

「駄目だ、イライラする……」

幸いにも翌日はオフだったが、着物に着替えて外を出歩いても怒りはおさまらなかった。近藤や土方も気に掛けてくれたが、怒りの

理由は沖田とだけの秘密。

誰にも言えないことがこんなにも辛いとは思わなかった。

「あつ！ 姉貴ーっ！」

ぴょんと日傘を差した神楽が駆け寄ってくる。心のイライラが、少し晴れた。

「神楽ちゃん、こんにちは。お散歩？」

「お散歩ー。姉貴はあ？」

「私も気ままなお散歩。出てきて良かったわ、神楽ちゃんに会えた」

神楽も操に会えたことが嬉しいようで、にーっと歯を見せて笑っている。

「もし良かったら、一緒にお団子食べない？ 姉貴のおごりよ」

「食べるー！」

一拍もおかずに返事をした神楽に苦笑し、団子屋へ入った。誰か、女の子の話し相手が欲しかったのだ。

「姉貴ー。姉貴も意外と大食いネ。太っちゃうアルよ?」

「大丈夫。食べた分動くから……。神楽ちゃんも随分いっぱい食べるわね。流石成長期……。遠慮しないでもっと食べていいからね」

「うん!」

二人で計四十本は超えたか、あまりの食べっぷりに団子屋の親父も辟易していた。イライラしているときは食べるにかぎる。そうすれば高杉のことだって……。

「……っ!」

沖田の前での接吻を思い出してしまい、怒りがせり上がってばかりと串を折った。神楽が、不思議そうに見上げてくる。

「そついえば姉貴、今日の朝刊見たアルよ。攘夷浪士大量検挙、お手柄だったネ」

「……ええ」

「一人残らず捕まえたんでしょ？ 姉貴はやっぱしすこ……」

凄いいいかけて神楽は黙り込んだ。操の手がぶるぶると震えている。

「一人残らず、じゃないの。……私は二人ほど逃がした……」

イライラする。高杉の野郎、いつか絶対捕まえてやる。

「……姉貴？」

隣に腰掛けた神楽が、きゅつと袂を掴む。

「ごめんなさい。怖がらせたわね……」

「姉貴、辛いことがあったら一人で抱えちゃ駄目ヨ。私で良かったら聞くヨ。女は女同士にしかわからないこともアルね」

操は暫く考えて、柔らかに微笑んだ。

「じゃあ、聞いてもらおうかな……。誰にも言わないって約束してくれる?」

「する! 私の口は岩よりも硬いネ」

話そうとして、どこから話していいのか迷った。

「昨日ね、浪士たちを検拳したお屋敷に、私の嫌いな浪士がいてね。そいつに……」

懷に飛び込んできた高杉。唇を奪われるのに時間は掛からなかった。何故あのとき反応できなかったのだろう。

「接吻されたの。相手は浪士だし、私の嫌いな奴だし、総悟君には見られちゃうしでもう頭のなかぐちゃぐちゃで……」

「ええっ！ 姉貴にせつぶ……」

思わず叫びかけた神楽の口を押さえ、しいっと指をたてる。

「……本当に接吻されたアルか？」

ごしょごしょと、耳に口を近づけて確認する。

「本当にされちゃったのよ。もう頭にきて斬り裂いてやろうと思ったんだけど、あいつは強いし邪魔が入るしで……」

「誰ネ！ 天下の姉貴にそんなことする奴は！ 私がやっつけてあげるアル！」

神楽はぐつと拳を握ったが、操は首を横に振った。

「気持ちは嬉しいけど、あいつには関わらないほうがいいわ。高杉は本当に最低な……」

「高杉……！」

明らかに、神楽の瞳に怯えの色が写った。

「知ってるの？ 神楽ちゃん」

「知ってるヨ、銀ちゃんの昔の友達……。私、辻斬り騒ぎの時、何も知らずに喧嘩売っちゃったアル……。ヤバイ匂いがして、怖かった……」

神楽の声は震えていた。思い出すだけでこうなるといふことは、よほど怖かったのだろう。操は包み込むように、神楽を抱き寄せた。

「怖かったわね……。あの女ったらし、こんなか弱い子にまで敵意を向けるなんて……」

また腹が立つてきた。

「姉貴、無理しちゃ駄目ネ。あいつ本当にヤバイもん！ 昔友達だった銀ちゃんもゾラも殺そうとしたんだよ！」

「ゾラ？ そう言えば高杉もそんな名前を口にしてたわね。誰、その可哀想な名前の人」

「桂ネ。桂……えっと、小太郎！」

何故一瞬どきりとしたのか、よく分からなかった。

「その三人……友達だったの？」

「それだけじゃないアル。確か、じょーいとかいう戦争と一緒に出てたって……」

「ああ、攘夷戦争か……」

桂と銀時が、攘夷戦争を共に戦った盟友だということは、新八から聞いていた。まさか、高杉もいたとは……

「姉貴、止めようよ。高杉に関わっちゃ駄目ネ。死んじゃうよ」

着物を掴んで言う神楽は、本当に操を心配していた。操は安心させるように、にっこりと笑う。

「大丈夫よ、私は負けないわ。取り敢えずあいつを一発ぶん殴らないと気が済まない。あいつは私が捕まえる」

「でも、姉貴……」

「そんなに心配しないで。これでも真撰組九番隊隊長なのよ」

ぱちりとウィンク。神楽は心配そうにしつつも、頷いた。

「危ないから、貴女こそ首を突っ込んで駄目よ。何かあったら、私か旦那に言いなさい。ね？」

顔を包みこんで言い聞かせると、神楽はうんと頷いた。

「ああ、話せてすっきりした。聞いてくれてありがとうね、神楽ちゃん」

「ううん。姉貴も、話してくれてありがとう。私絶対誰にも言わないアル」

「私達二人だけの、秘密ね」

そうして二人でお団子を食べまくって、それぞれの家路についた。  
神楽は家に帰るなり、いつもの席でジャンプをよんでいる銀時のもとへ飛んでいく。

「銀ちゃん、ただ今！」

「おー」

「ねえ銀ちゃん、高杉って女たらしだったアルか？」

いきなり高杉の名が出て、銀時は飲んでいた苺牛乳を派手に吹き出した。

「はあ？ いきなり何をいうんだお前！」

「姉貴が、高杉は女たらしみたいな顔してるって言ってたネ。どうなの？」

銀時はしばらく昔のことを思い出して、ジャンプを閉じた。

「あいつは、女にやあまり興味が無かったな。戦うことしか頭に無かったし……。まあ、欲しい女は買ったりしてたが……。ああ見えて独占力が強かったからな。どうなんだろうな、あいつが心の底から惚れた女なんて見たことねえし……」

「そう……」

操が心配でならない。大丈夫だろうか、高杉の女にされたりしないだろうか……。

「姉御が言ってたのか？」

「う、うんそうヨ。昨日の騒ぎでちらっと見たけど、助平で女たらしそうな顔してたって」

慌てて出任せをいい、神楽は押入に飛び込んだ。これ以上いたら、口が滑ってしまう。

「……なんなんだよ、オイ」

銀時が訝しげに、呟いた。

一方、操も屯所に戻り、お気に入りの縁側でキセルをふかしていた。空を見上げながら、ぼんやりと考える。  
穏健派攘夷浪士の桂。過激派攘夷浪士の高杉。そして、攘夷活動には何も参加してない銀時らのこと…。

「随分道を違えているのね…」

神楽から、銀時は白夜叉と呼ばれ、敵からも仲間からも恐れられていたということをこっそり聞いた。

『あいつが白夜叉なら……』

高杉の言葉も納得がいく。彼はまだ、銀時のことも桂のことも忘れてはいないのだ。

「同じ道は進めなかったのかしら…」

自分と弟のように…。

「姉さん」

呼ばれて振り向けば、土方が笑って歩み寄ってくる。

「トシ君！ 休憩？」

「そつ。休憩」

にかりと笑う土方の口には、既に煙草がくわえられている。

「機嫌は直ったかい？」

「え？」

「昨日の騒ぎから、なんとなくイライラしてたみたいだからさ。姉さんは笑ってるのが、一番だよ」

心配してくれていたことを知って、操は嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう、ごめんなさいね。心配かけて」

「いいんだよ。気にすんな」

にかつと笑う土方は、昔と変わらない。

「…どうしたら長く一緒にいられるのかしらね」

「なんだイ？ 急に」

「いいえ。私は彼等みたいにはなりたくないから…」

ずっと、一緒にいたいから。

「？」

よく分からず、土方は首を傾げる。

「なにか、いいことでもあったかい？」

「ふふつ。まあね」

やはり女性一人ではいられないものらしい。神楽に話して、すつきりした。高杉らの身の上も知った。ならば、あとは捕まえてやるのみ。

「トシ君。私、攘夷浪士なんかには負けないわ」

意気込んで、立ち上がる。土方はキョトンとしたまま操を追った。

「私が絶対捕まえてやるの。それまで首洗って待ってろってのよ」

同じ牢屋で昔話でもすればいい。永遠に。

「……勇ましいなあ、姉さん」

「なあに？ 戦いの女神みたい？」

おどけて、先日沖田に言われたことを口にしてみた。土方は一瞬目を見開いて、笑う。

「女神さ。十分」

美しさも、強さも十分女神に匹敵する。ただし、いささか口の悪い女神だが。

「ああ、お腹空いた。今日の夜ご飯なにかしら」

「でた、姉さんの大食い」

「なによ。トシ君のも食べちゃうわよ？」

「えー、それは勘弁」

冗談よと笑いながら、操は歩を進めていく。やはりこの人には笑顔が一番だ。

土方はのんびり、そう思った。

終

こっちはバレてないつもりでも実はモロバレだから女風呂を覗く時は相当の覚悟  
長いタイトルの割に短いです。  
ご了承ください。

こっちはバレてないつもりでも実はモロバレだから女風呂を覗く時は相当の覚悟  
「どうしようもなく長い未来〜！」

真撰組の露天風呂に、気持ちの良さそうな唄が響く。午後五時から六時の間は、操だけが風呂に入れる時間。男と一緒に入るわけにはいけないので、彼女は夕食前に、風呂に入る形になっている。

「知りたいしたいこと〜、邪魔させやしない〜」

そんな操を、垣根の間から覗く四つの目があった。

「やっぱでかいよなー。操隊長の胸！」

「俺が見た中で最大だぜ」

新人の隊士が二人、操の風呂を覗いていた。

「まさにヴィーナスだよな。俺、操隊長を見るだけで入隊して良かったって思うもん！」

「美人だよなー。あれで三十こえてるなんて思えないぜ」

操は湯船のなかで、気持ちよさそうに身を躍らせている。いつもは下ろされている長い髪も今は結い上げられていて、白い頂がたまらなく色っぽさを感じさせる。

「隊長の胸のサイズ、いくつなのかな」

「さあ……。Fの七十五あたりじゃね？」

「いや、あれはGでも通るぜ！」

白熱していると、頭上から声が振ってきた。

「Hよ。Hの七十」

「H！？　すげえそんな数字始めて聞く……」

ふと我に変える新人たち。見上げれば、垣根の上から、操が覗き込んでいた。

「……操隊長……」

「そんなところにはいないで、こっちいらっしやいな」

操はにっこりと、笑顔を作った。

「折角だから、一緒に入らない？」

甘い言葉に、えっと新人二人は目を見開く。

「沈めてあげるわ」

次の瞬間、屯所内に悲鳴が轟いた。

二人分の断末魔の叫びを聞いた土方は、近藤に差し出しかけていた資料を持つ手を止めた。近藤が不思議そうに顔を上げる。

「ゴキブリでもでたかあ？」

「……また姉さんの風呂を覗いた馬鹿が鉄拳くらってんじゃないのか？」

新人が入った頃には、よくあることなのだ。

「そのうち姉さんが、ぼろぼろの男共を引きずってくるさ……」

暫くして、

「局長ー、副長ー、いらっしやる?」

ほら来たと襖を開ければ、ずたぼろになった隊士を二人引きずった、風呂上がりの操が笑っていた。

「ちょーつと殴りすぎちゃったから、手当てして差し上げて」

にっこり笑って、鼻血をだしている二人をどしゃっと床に落とす。

「あと、介錯もよろしく」

ああ、いい汗かいたわと操は清々しそうに去っていく。近藤は気の毒そうに、倒れ伏す二人を見下ろした。

「二人とも、大丈夫か?」

「……局長、すみませんでした……」

「姉さん、容赦ないからなあ……」

今までにも、操の風呂を覗いた隊士は沢山いた。そのたびに返り討ちにされ、天国と地獄を同時に味わうのだ。

「みい姉、全裸でお前たちのこと殴つたろう」

「……違う意味で鼻血が出ました……」

操は男の前で裸になることを、躊躇わない。

「みい姉は女性の自覚が欠如してるからなあ……」

「とりあえずお前等、一週間便所掃除な」

「……もうなんでもします！ 絶対隊長の風呂場覗きません！」

それは操の恐ろしさを、一度に経験する出来事。操に恥ずかしくないのかと問えば、彼女は不屈な笑みとともにこう言うのだ。

「だって、見られたって減るものじゃないでしょ？」

終

こっちはバレてないつもりでも実はモロバレだから女風呂を覗く時は相当の覚悟

本当に女子風呂覗いたりしないで下さいね（笑）

## 理解（前書き）

まだ真撰組が銀さんに会うずっと前のお話です。  
完全な捏造です。鴨太郎さんが少し壊れてます。  
意下さい。好きな方はご注

## 理解

君は分かっているだろう。僕がどれだけ君を見ていたか、どれほど、君を愛していたか。

己が器量を試すためと、真撰組に入隊することが決まったのは、紅葉が染まりかけた秋のことだった。未だ慣れぬ隊服に身を包み、顔合わせの会に出席するために縁側を歩いていると、ふと赤く染まりかけた紅葉が目に入る。

（今年も綺麗に染まったな）

ざあ……

強い風が吹く。銀杏が舞い散り、思わず腕を上げて顔を庇った時……。

「……！」

紅葉の下に、誰かいた。長い髪と、大人しめの着物の袂を揺らし

て、紅葉を見上げていた。

「……」

女中か、はたまた舞い降りてきた紅葉の精霊かと思った。美しい女は伊藤に気づき、にこりとした。

「こんにちは」

鈴を転がしたようなという声はこんな声をいうんだろうなと思った。心地よい、綺麗な声だ。

「こ、こんにちは……」

慌てて返すと、またにこりと微笑みが返ってくる。

「君は……」

誰だいと聞きかけたところへ……。

「先生、近藤局長が来て欲しいとのことですよ」

山崎が、後ろから声をかける。振り返って分かったと返事をしたものの、再び見た時は彼女の姿はなかった。

広い道場に、数少ない隊士が整列している。今期入隊者の隊士も伊藤の隣に並んでいて、局長である近藤によって一人ずつ紹介されていった。

「じゃあ一人ひとりに挨拶してもらおうか」

列の右から順に、それぞれが軽目の挨拶を済ませていく。

退屈だ、早く終わらないかと、思い始めたとき。

「……！」

ふわりと長い髪が揺れた。白い肌に紅い唇、豊かな胸は、シャツでは隠しきれない。

「副長助勤、近藤操です。よろしくお願いします」

先程見た、紅葉の精霊だった。

「隊士だったんだね」

解散する中で、伊藤は操に声をかけた。長い髪に隠されて、切れ長の瞳が釣り上がる。

「はい」

「僕はてっきり、紅葉の精霊かと思ったよ」

そういうと、彼女は至極嬉しそうに笑う。

「先生は冗談がお上手なんだから」

「冗談ではないよ」

今まで、女性との接点なんかまるでなかった。接するはずであった母でさえ、兄に取られて……。

「……先生？」

気づけば、操が下から覗き込んでいた。いきなり黙り込むから、心配してくれたのだろう。

「あ、すまない。僕は君みたいな勇ましい女性に、出会ったことがなくてね」

「ふふつ、勇ましくなんかありませんわ」

若々しくて、美しい。伊藤はこの時から、操に惹かれていたのかもしれない。

「姉さん、近藤さんが呼んでるぜ」

ひょこりと顔をだした土方が、その声をかける。

「はい」

「……姉さん？ 君は土方君のお姉さんなのかい？」

馬鹿げたことを聞いてしまった。この若さで、土方の姉であるはずがない。

「いいえ。彼が親しみをこめてそう呼んでくれているだけです。もう長い付き合いですので」

「なるほど……」

長い付き合い、その言葉に嫉妬してしまったのは、何故だったか。

「じゃあ私行きますね」

「ああ……」

背を向けた彼女の腕を、とっさに掴んでいたのは無意識のうち。  
操はきよんととして、振り向いた。

「……先生？」

「あ……。操君」

「はい？」

「そう、呼んでいいかな」

そう問えば、操は嬉しそうににこりと笑った。

「はい。是非に」

嬉しくて笑みがこぼれる。腕を離すと、操はまた後ほどと言って、退室した。

「……意外としっかりしてるんだな」

細く見える腕も、鍛えられていて筋肉が隠れていた。女性なのに隊士などと一瞬馬鹿にしまっていたが、これはなかなか、侮れないかもしれない。

その日から、伊藤はなにかと操に話かけるようになった。彼女はだれでありと、分け隔てなく話す。そしてなにより聡明で、どんなに難しい話をしてもついてくるのだ。こんな女性は、今まで近くにいなかった。

「君は不思議な女性だね」

「……不思議、ですか？」

「不思議じゃないか。男ばかりの世界にたった一人、女性として輝いている。あ、勘違いしないでくれたまえ。けして君を批難しているわけじゃない」

慌てて否定して、庭を見遣る。寒さでもう枯れかけて、些かみすばらしい。

「そんな中でも、君は埋もれることなく美しいんだなって、思ったんだ。母親のように、時に姉のように仲間を見守る、その姿はまるで、砂漠に咲く一輪の華」

褒められているのが分かっているので、操は顔を赤くし、かりかりと頬をかいた。

「そんなこと……。確かに世話やきですけど、そんなの勲の延長だし……」

「……え？」

「弟の勲が無鉄砲だから、ついみんなも同じように見ちゃって……」

停止しかける頭をフル稼働させる。今彼女は弟の勲と言った。四十人近くいる隊士の顔と名前すべて一致させている伊藤だが、隊士のなかに勲という名前を持つ男は一人しかいない。

「……近藤君の、お姉さん……なのかい？」

「ええ。あれ？　言ってませんでしたっけ？」

言っていない言っていないと頭の中で繰り返す。

「嘘だろう？　仮にも兄弟だとして、君の年なら妹じゃないか」

「私の年って、先生私の年いくつだと思いで？」

「てつきり、二十代前半かと……」

操が吹き出し、ころころと笑い出した。

「あははははっ！　やだもう先生ったら！」

そのままぺしぺしと叩かれ、伊藤は困惑する。そんなに予想とズレていたのだろうか。

「私、これでも三十路なんですのよ」

銃で撃たれた衝撃とはこんな感じなのだろう。

「……え？」

「え、って。信じてないでしょ先生」

「本当に三十路……？」

「はい」

「僕より年上？」

「はい」

「……」

ぐるぐるする頭と、操の肩を押さえつける。

「操君」

「はい？」

「……ちよつと、ここで待っていてくれたまえ」

「はあ……」

そついい残すと、伊藤は凄まじい早さで走って行った。

「？」

操が、不思議そうな顔をしていた。

「土方君！」

大声で呼ばれ、何事かと振り返った。伊藤が物凄い早さで駆け寄り、がしつと肩を捕まれた。

「うおっ！」

日頃嫌い合っている伊藤が何の用かと、流石に驚いた。

「ど、どうした……」

「土方君、君は操君が近藤君の実姉だと知っていたかね！」

「えっ、ああ。んなもん昔から……」

「じゃあ、やはり姉弟なんだね！」

「ああ……」

「じゃあ、彼女の年は……」

土方は考えるように、目線を上げた。

「俺より五歳上だから……今度の誕生日で三十一か」

「……あれで？」

「あれで」

伊藤はぽかんと口を開けたまま、土方の肩を離した。

「……世の中には不可解なことがあるんだなあ」

「不可解過ぎて謎だぜ。姉さんの美貌は」

二人の意見が合ったのは、後にも先にもこれっきり。

「ありがとう土方君。今しがた、操君に聞いてね。びっくりしてしまっただ」

眼鏡をあげ、背中を向ける。

「随分姉さんの近くにいたんだな」

少しだけ土方の声が曇る。嫉妬しているのか、伊藤はこの手の感情には強い。

「ヤキモチかい？」

図星のようで、土方の顔が赤くなる。

「ち、ちげーよ」

そのままふいつとどこかへ行ってしまうものだから、伊藤はおかしくてクスクス笑った。ふいに操を待たせていることに気づき、慌てて戻る。

「あ、お帰りなさい。先生」

そういう操は、キセルをふかしていた。

「……タバコ吸うんだね」

「あ、やっぱり駄目ですか？ 嫌なら消します！」

急いでキセルを逆さにしようとするので、伊藤はその手を掴んで止めた。

「いや、いい。僕も吸うから、そんなに気にならないよ」

「良かった。最近はタバコを毛嫌いする人もいるから」

「そうだね」

掴んでいた手を離す。相変わらず筋肉質だが、やはり男の腕より細い。

「さつきは、何処に行っていましたの？」

「土方君のところさ。彼は君のことをよく知っているからね。君がその……」

年のことを出しかけて、ごほんと咳ばらいする。男の自分から言い出すのは恥ずかしいものがあつた。

「三十路ですか？ それとも勲の姉だつてことですか？」

「どちらもだよ」

言い出してくれて助かったとばかりに、小さな息をつく。

「聞きに行つたんですか、トシ君に」

「だって、信じられないじゃないか。君のように美しくて若々しい女性が、既に三十路でしかも近藤君の姉ときた。たちの悪い冗談にしか聞こえないよ」

そんなものですかねえと、操から呟きが漏れた。

「なにより、僕より年上だろう?」

「まあ……」

「町の人に聞いてみようか。十人中九人が君より僕のほうが年上と答えるよ」

「そんな阿呆な……」

操から苦笑が漏れる。

「でも、褒めてくれてるんですね。ありがとうございます」

彼女はなんだかんだ言っで、伊藤の心を理解している。こんな女性、今までいなかったのに。

「土方君が、次の誕生日と言っていたが……。いつなんだい？」

「ふふ、私の名前です」

「名前？」

どういう意味だろうと考えて、ふと納得した。

「なるほど、三月の三十日か」

「流石先生」

にこりと笑みが返ってきたが、それはすぐに掻き消えた。

「来なくていいです誕生日なんか。三十歳の誕生日の朝、私落ち込みましたもの」

「ああ、三十路だ……って？」

ふふつ、と笑みが戻ってきた。

「先生もいずれ分かります。いつもは無頓着でも、流石に落ち込みますから」

操の笑みに、つられて微笑む。彼女といるとどうしてこんなに心が休まるのだろう。天才と唄われた伊藤も、流石にこの感情に名前を付けることは出来なかった。

「先生ー、起きてますか？」

十二月、久しぶりの休暇を貰ったものの外に出る気分でもなく、部屋に籠っていると廊下から操の声が響いた。

「操君かい？　おはよ……」

障子を開けて、伊藤は絶句した。操が綺麗な着物に身を包み、笑いかけていたからだ。いつも見る隊服ではない、美しさが際だっている。

「おはようございます、センセ」

一瞬何処の姫君かと思った。思わず見とれていた伊藤は、はっと我に返る。

「おはよう……。どうしたんだい？　君が訪ねてくるなんて」

「先生、今日お暇ですか？」

「え……。まあ、予定はなかったけど……」

操の顔が、ぱあっと輝く。思わずどきっとした。

「もしよければ、今日一日私とお出かけしてくれませんか？」

「……操君と？」

「ええ。折角のお休みなのに、きっと書類と睨めっこしてるんだろ  
うなと思って。私とデートしませんか？」

デートという言葉に、顔が赤くなる。恥ずかしい話、今までデー  
トたるものをしたことがない。

「僕なんかとかい？」

「先生とがいいです。ご多忙ですか？」

子猫のような瞳で見上げられ、ときどきなる心臓を抑えられない。

「……すぐ、準備するよ」

室内へ戻り、軽い身支度をする。操が部屋に入ってくる気配がして、  
はいと上掛けを延ばされた。

「今日は冷えるらしいから、忘れないで下さいな」

「……ありがとう」

袖を通すのを手伝ってもらった。丁寧に裾を伸ばされ、まるで夫婦みたいだなと思った。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

操の笑顔が、何故か嬉しかった。

「あ、みささん。伊藤先生も。おはようございます」

「おはようザキ君」

「おはよう」

門の前でミントンをしていた山崎が声をかける。二人して出掛けるのを見て、目を丸くした。

「……仕事ですか？」

「ううん、デート」

「デ……！」

「み、操君！」

男二人が、揃って顔を赤らめる。操は悪戯っぽく笑うと、立てた人差し指を口に当てた。

「勲やトシ君には内緒よ」

「は、はい……」

「行きましょセンセ」

「あ、ああ……」

門をくぐり、姿を消した二人に、山崎はありやうと間拔けな声を上げた。

「……すごい組み合わせだ」

「操君、あまりデートと広めるのは……」

「駄目ですか？」

「駄目じゃないが……」

あまり公に広められると、些か恥ずかしいものがある。

「いいじゃないですか。私、先生とのデート、楽しみにしていたんですよ」

それは嬉しいが、やはり免疫がないためこういう状況に慣れない。

「操君」

「はい」

「君は、僕にはお姉さんとして接してくれないんだね」

操から笑みが消えた。

「え……」

「僕にだけ敬語を使う。仕事でもプライベートでも」

「それは……。だって、先生は格上だし、失礼かなと思って……」

「失礼じゃない。せめてプライベートの時だけでも、僕を鴨太郎と呼んで、弟扱いしてほしい」

操は戸惑った様子を見せ、上目使いに見上げた。

「いいんで……いいの？」

「いいんだ」

頷けば、操はまだ戸惑っているかのように言葉を繋ぐ。

「無茶を言っただから……。か、鴨太郎は……」

彼女に名前を呼んでもらえて、とても嬉しくなった。女性に呼び捨てで呼んで貰ったのは、母親以来だ。

「んじゃ、行こうか。操君」

「もう！ あちこち連れ回してやるんだから！」

ぷくりと頬を膨らませる操に、流石にからかい過ぎたかなと可笑

しくなった。

色んな店を回って、他愛のないものをみて、昼食にとレストランに入った。食事をとって、ケーキを口に運ぶ操を、伊藤は微笑ましそうに眺める。

「美味しそうに食べるね」

「鴨太郎も食べる？」

「食べない。しかし、それだけ食べて細い体の何処に行くんだか」

前菜にメインディッシュ。更に白米がついてケーキまで食して、どうして太らないのか。ちなみに操は、すべて胸に行くと考えている。

「女の子は美味しいものが大好きなのよ。特に甘いものが」

口元にクリームがついていて、伊藤はクスクスと笑う。

「クリーム……」

口元をさして言うと、操は慌てて口を拭う。

「取れてないよ」

手を伸ばしてすくいにとってやると、操はふふつと笑った。

「恋人みたいね」

指についたクリームを舐めて、伊藤は顔を赤くする。どうして彼女は、こんなことをさざりと言えるんだろう。

「……なにを見ているんだい？」

操はさっきから、ちらちらと頻繁に空を見上げていた。なにかあるのかとつられて見上げる。

「何もないわ。ただ、真っ白だなあって」

確かに空は、和紙のように真っ白で、色がない。

「本当だ」

「空は不思議ね。色んな顔をするんだもの。怒ったり、泣いたり、忙しい」

ふふっと、操は笑う。

「色んな顔をして忙しいのは、近藤君もだと思っよ。操君のこととなると本当に忙しくなる」

「ただ慌てん坊なだけよ。あの子はトシ君や総悟君がなにかやらかしたって、忙しくなるもの」

伊藤は微笑んで、ふっと息をついた。

「……土方君、沖田君か。彼等は、本当に強いね。この間の任務、驚いたよ」

「でしょう？ 最強コンビよ」

「最強コンビといえば、近藤姉弟もそうじゃないかい？」

伊藤の言葉に、操はきょとんと首を傾げた。

「私たち？」

「ああ。背中を預けあって、暴れ回る姿はとても素晴らしかった。操君と近藤君、そして土方と沖田君の四人を総称して、真撰組の四天王と呼んでいる隊士もいるんだよ」

操が、のんでいた珈琲を吹き出しかけた。

「なんで私が……？ 私じゃなくてせ……、鴨太郎でしょうに」

「僕はまだまだ。君の足元にも及ばないよ」

「帰ったら、一手教授して」

「怖いからいやだ」

ぷつつと頬を膨らます操。まるで子供のようだ。

「君の強さは、みんなから沢山聞いているよ。戦場で刀を振り回す姿は、ひざまずくに等しいほど美しい……ってね」

操が顔を赤くし、あいつら……と呟く。

「僕も、美しいと思った。髪を揺らして、舞うように刀を操る姿はまさに戦いの女神のようだったよ」

操の顔が真っ赤になり、フォークを持つ手がふるふると震えた。

「褒めたってなにも出ないわよう……」

「それでも、美しかった。僕はそう思う」

水の入ったやかんをおけばすぐに沸騰しそうなほど、操の顔が赤くなった。

「……ありがとう」

そして嬉しそうに笑う。

「嬉しいわ」

実に幸せそうだ。伊藤もつられて笑った。久しぶりに心の底から笑えた気がした。

「今日は本当にありがとう。付き合ってくれて」

「こちらこそありがとう。楽しい一日だったよ」

夕方、とはいえ白い雲に覆われて見えないが、することも無くなつたので頼所に帰ることにした。てくてく二人して、歩を進める。

「……結局見られなかったなあ」

「え？」

足を止めた操を振り向けば、操は提げた袋から小さな包みを取りだし、伊藤へと差し出した。

「はい。誕生日おめでとう、鴨太郎」

一瞬彼女が何を言っているのか分からず、思考が停止する。

「……え？」

「今日誕生日でしょう？」

今日が何日か思い出して、伊藤はあつと声を上げた。

「今日だ！」

「……忘れてたのね」

ここ数年まともに祝って貰ったことなどなかったから、すっかり忘れていた。

「……僕に？」

「ええ」

怖々、受け取った。どうしていいか分からず、戸惑う。

「開けてみて」

言われて、丁寧に包みを開く。中には、綺麗な色の眼鏡ケースが入っていた。

「……わあ」

「何がいいのか迷ったんだけど、日頃使って貰えたらなって。鴨太郎には、いつもお世話になってるし」

祝いの気持ちが、形となって手元にあるのは嬉しいことだった。包み紙を懷に仕舞い、眼鏡ケースを手に持ったまま操を引き寄せ、抱きしめる。

「きゃっ……！」

「そのまま聞いてくれ、操君」

抱きしめたまま語りかける。彼女の髪を優しく撫でたが、操は動かなかった。

「話したと思うが、僕には双子の兄がいる。長子でありながら病弱で、両親は兄につきつきりだった。僕なんか生まれてこなければ良かったのにと、呟かれたよ」

胸の中の操が、ぴくりと反応する。

「僕に誕生日なんか存在しなかった。いつも永く生きられた兄の祝いに掻き消されて、プレゼントなんか貰ったことなかったんだ」

細い肩を、ぎゅっと抱きしめる。

「ありがとう、操君。生きて初めて、生まれて良かったと思っている」

「そんな、オーバーな……」

操は腕を抜けだし、伊藤の頬に触れた。

「私は、鴨太郎が生まれてきてくれて嬉しいと思ってる。そうでなくや、貴方に会えなかったもの。これからは毎年、私が祝ってあげるわ。ケーキも焼いてあげる。だからこれからも、よろしくね」

「ああ。ありがとう」

愛おしそうにその手に擦り寄り、伊藤は笑う。

「本当はね、もうひとつプレゼントがあったの」

「もうひとつ?」

「そう、雪よ」

伊藤は、無意識に空を見上げた。

「降るって言うってたのに……。鴨太郎に見せて上げたかった」

だからこそ、操は自分を連れ出したのだろう。籠っていては、雪にも気付かないから。

「これで十分嬉しいよ。ありがとう」

伊藤は笑って見せたが、操は納得していないようだった。ぷくりと膨れて、空をねめつける。

「もう、雪！ 降りなさいよ！」

「そんな怒鳴っても……」

「なんだっけなあ……。雪を降らせる呪文、昔御祖母様に教わったんだけど……」

ぶちぶち呟くものだから、可笑しくなってしまった。

「呪文？ そんなのがあるのかい？」

「ええ、確か……えーと」

必死に記憶を探っているようで、うーんと頭を抱える。

「移ろいし影　白き光の　舞姫よ　その手に扇　咲かせよ　雪の華」

刹那だった。辺りの音がやんだ。ふと空を見上げて見れば、白く小さな塊が、ちらちらと舞い降りてくる。

「あ……」

雪が、降り始めた。

「君は雪の精霊かい？」

「んな阿呆な……」

「だって、実際に降らせたくないか」

「偶然よ」

あれから、土手に佇んで降り積もる雪を見ていた。肩にうつすら雪の翼が出来るころ、伊藤はぽつりと呟く。

「綺麗だなあ。雪というものは」

「でしょう？　どうしても見せてあげたかったの」

「ありがとう。さあ、そろそろ帰ろうか。風邪をひいてしまつよ」

操の頭に積もった雪を払ってやる。操はそうねと笑った。その時だった。

ぞっ……

「……！」

数人の男が、二人を取り囲んだ。

「真撰組参謀伊藤鴨太郎、真撰組隊士近藤操とお見受けする」

「……だとしたら？」

「我等攘夷浪士が成敗してくれる。幕府に手懷けられた狗め！」

しゃきんと刀を突き付けられる。伊藤は操を庇いつつ、刀を抜いた。

「折角の気分が台なしだ。操君、君は逃げなさい」

「な、なに言ってるの鴨太郎！ 私だって戦えるわ！ 私が真撰組隊士だって忘れた？！」

「隊士の前に、麗しい女性だろう？ 男って生き物は、一生に一度はお姫様を護る騎士の気持ちを知ってみたいものなのさ」

操はぽかんと口を開け……。

「お馬鹿……」

「あ、馬鹿って言ったね」

「私はお姫様なんかじゃないもの」

なんとこの会話をしているんだと、浪士たちの額に血管が浮く。

「別れの挨拶は済んだか！」

「別れるつもりなんかないわ！」

互いに背中を合わせ、操は懷から、小刀を取り出して構えた。

「正々堂々、一対一で戦えないのかしら？」

操の言葉に、一人の浪士が反応する。

「血塗られた女神には、これだけ集まらなければ太刀打ちできないのさ！」

それは、皮肉を込めた嫌み。その浪士は、次の瞬間伊藤に斬られていた。

「……口を慎みたまえ。美しい女性に、そんな言葉を使うものじゃない」

「……鴨太郎」

「怪我なんかしないでくれよ操君。君をキズモノにしたら近藤君どころか土方君や沖田君にも殺されかねない」

自分を思っで斬ってくれたのだと分かっていたので、操は嬉しそうに笑った。

「大丈夫よ。だって私、四天王の一人なんですよ？」

伊藤はふふつと笑った。

「違うない」

人数が少なかったこともあって、簡単に彼等を倒すことができた。といっても、自分が相手にしていた浪士だけが……。

「操君！」

振り向いて、伊藤は絶句した。操は浪士の一人から刀を奪い、それを得意の逆手で握って、浪士たちを斬っていた。まるで舞っているかのような姿に、伊藤は見惚れた。

「全く、もう」

刀を鞘に納め、ぽいと放る。地に平伏した浪士たちは軽傷だ。だがみねうちを喰らって、立ち上がれずにいる。

「大丈夫かい、操君」

「ええ。平気よ」

「……血が」

彼女の美しい顔には、血が点々となっていた。顔だけではない、着物にも、多少ついてしまっている。

「大丈夫、返り血よ。……綺麗な着物なんか着るべきではなかったわね」

操は他人事のように、クスクスと笑う。

「血塗られた女神ね。……ふふっ」

操は至極楽しそうに笑った。

「上等よ」

ふと吊り上がった唇に、ぞくりと寒気が走る。女のくせに、などという蔑みの言葉は、彼女には通じない。

だって彼女は、

こんなにも気高いじゃないか。

「早く帰ろう。血を流さなくては」

手の甲で、頬についた血を拭う。

「……せつかくの気分が台なしだね」

ぶち壊した男共を見下ろし、操はそう言う。

「ねえ、もう少し散歩していきましようよ」

一度背中を向けた操だったが、くるりと振り返って笑った。

「ほら、雪が綺麗よ」

その笑みは雪のごとく、柔らかで儂い。伊藤はつられて、にこりとした。

「操君」

そして、続ける。

「こいつら、連れていかなきゃ」

「あー……。お疲れさまでした。二人に怪我が無くてなによりだ」

浪士たちを引きずって帰宅し、近藤に報告したものの、どこか近藤の態度がよそよそしい。弟の微妙な態度に、操は首を傾げる。

「局……勲。どうかしたの？」

近藤はしばらく落ち着かない態度で二人を見ていたが、やがてがくりと脱力した。

「二人が、今日デートしてたって言うから……」

操は伊藤と顔を合わせ、ばれてるとでも言いたげな顔をした。

「ザキ君から？」

「総悟から……。二人で仲良く歩いてるの見たって……」

「……総悟君」

「見られていたか……」

まさか予想だにしないところから情報が流れるとは……。

「安心したまえ近藤君。僕と操君は君が心配するような仲じゃない。籠もりっぱなしの僕を心配して、操君が連れだしてくれただけなんだ」

「……先生にみい姉を渡したくないってわけじゃないんだ、ただ……」

「心配なんだろう？　大事な操君に、男が出来るのが」

今にも泣きそうな顔で、近藤はうんうんと頷く。

「本当にもう。いいじゃない私が誰と付き合おうが……。　鴨太郎だつて素敵な男性でしょう？」

姉の言葉に、しぶとく反応する。

「……先生のこと名前で呼んでたっけ？」

しまったとばかりに口に手をやる操。

「先生、本当になにもないのかい……？」

「な、ないよ。なにも」

疑り深く自身をじっと見てくるので、伊藤は本当にとつなげた。

「いい加減になさい、勲。局長の座につく貴方がそんな心配性でどうするの」

「局長の前に、みい姉の弟だいつ！」

「……なんとかしてよ鴨太郎」

「あはは……」

なんとかしろと言われても、どうにも出来ない。

「本当に、なにもないから大丈夫だよ。近藤君。僕もみんなのように弟扱いしてほしくて、そう呼んでもらっていたんだ」

「弟扱い？」

「こんな綺麗なお姉さんを持つ君が、羨ましかったんだ」

姉を褒められ、そして姉を持つ自分が誇らしくて、近藤はにかつと笑った。

「そっか、そっか。……はは、安心した」

「心配しすぎなのよ。貴方は」

「操君が大好きなだけだよ」

操が苦笑する。じゃあ僕は戻るねと、伊藤は立ち上がる。

「あ、先生」

障子を開けて外に出かけた伊藤に、近藤は声を掛ける。何かと振り返った伊藤に、近藤はにかつと笑った。

「誕生日、おめでとう」

まさか彼からも祝いの言葉を掛けられるとは思わなかったが、やはり嬉しかった。

「ありがとう」

誕生日がこんなにも嬉しい日だとは、思わなかった。誕生日の素晴らしさを教えてくれた操に感謝しなければと思いながら、伊藤は自室に戻っていった。

「土方アアア！」

「伊藤オオオ！」

叫んで、駆け出す。すれ違い様に左肩を切られ、血が噴き出した。振り向けば、未だ構えを解かぬ土方と、自分が細い何かで繋がっている。それだけではない、自分を取り囲んでいる隊士たちとも、細い何かで繋がっている。それが『絆』であることに気付くのに、時間はいくらもなかった。

「が……とう」

ぼろぼろと、涙が零れ落ちる。

「あり……がとう」

もう立っていられなくなり、ドシャツと倒れ込む。

「操……君」

最後に会えなかったのが心残りだけれど。

ねえ操君。僕は君を、愛していたよ。

終

## 理解（後書き）

私は鴨太郎さんもさりげなく好きです。今アニメに出てる晴明さん  
って、鴨太郎さんに似てますよね！。

## 月見茶（前書き）

操が、京への遠征前に行ってしまう前のお話です。

## 月見茶

どうしてこうもこいつらは酒を飲むのが好きなのだろうか。なにかにつけては宴会を開き、ぐだぐだに酔っ払い、騒ぐ。今日は京に遠征に行く特別部隊の送会と称しての宴会だが、みんなべるべろに酔っ払い、送会どころではない。

主役であるはずの操も何処かに消えてしまい、いる意味もないと、こっそり部屋を抜け出した。

「はあ……」

静かな縁側に出て、ため息をつく。お上からの指令だか知らないが、よりによって操を含めた特別部隊を遠征に行かせなくてもと思う。唯一の心のよりどころが、無くなってしまっじゃないか。

ざあ……

「……いい風だな」

酒が入ってぼんやりする頭で見た庭に植えられた紅葉は、美しく

染まり風に流されて地に落ちる。そういえば操と始めて出会ったのも、こんな秋だったなと空を見上げた。

（綺麗だな……）

美しい満月が、雲間から顔を出している。かぐや姫でも降りてきそうだなと、のんびり思った時……。

「あら、鴨太郎？」

呼ばれて視線を流せば、お盆に湯呑みと急須を乗せた操が、不思議そうにこちらを見ている。一瞬、本当にかぐや姫が降りてきたのかと思った。

「……あ、操君」

「どうしたの？ 気分悪いの？」

心配そうに近付いてくる操に、いいやと首をふる。

「月の綺麗な夜だから、かぐや姫でも降りてきたかなと、思ったんだ。そしたら、操君だった」

「まあ、上手なこと」

クスクスと、操は笑う。彼女は真撰組一の酒豪。先程かなりの量を飲んでいたが、酔っているそぶりは微塵もない。

「君はどうしたんだい？」

「みんなヒートアップしてきたから、お茶でもどうかと思って煎れてきたの。もう、誰のための宴会なのかしら」

仕方なさそうな口調に、今度は伊藤が笑う。

「いいね、僕にも煎れてほしいな」

「月見酒ならぬ月見茶にする？」

ここで繋げる操に、伊藤はいいねと続ける。縁側に腰掛けると、操は優雅に腰掛けて茶を煎れ始めた。なにやら不思議な香りが漂う。

「……緑茶かい？　不思議な香りだね」

「白桃の緑茶なの。珍しかったから買ってきたのよ」

どうぞと差し出された緑茶の香りは、確かに白桃のものだ。

「そんなものがあるんだ」

「他にも葡萄とか、苺の緑茶もあったのよ」

それは珍しいと思いつつ、お茶を啜る。ほんの少しの白桃の甘味と、緑茶の風味が口内に広がる。

「うん、美味しい」

「でしょう？ 良かった、気に入って貰えて」

ふふつと操が微笑み、伊藤は庭を見遣る。

「……操君と出会ったのは、こんな秋だったね」

「ええ、紅葉が綺麗だったわ」

気持ちのよい風が、操の髪を撫でる。ふわりと靡くその髪を押さえ、操は天を見遣る。

「もう会えなくなるんだね」

「そんな……もう二度と会えないわけじゃないんだし……。一年後にはちゃんと帰ってくるわ。だから、それまで勲たちをお願いね」

「まあ出来る限り……」

「ぎやははっ！ もっと飲め飲めーっ！」

室内から近藤の声が聞こえ、二人して黙りこくる。

「本当に……」

「努力するよ……」

頭を抱える操に、伊藤は苦笑する。

「まったく……誰の送会だと思ってるのかしら。鴨太郎も些か酔っ

てるし」

「まあ、少しはね。主役の君は本当に飲んだのかい？」

月明かりに照らされた操の顔は、素面と言えるほど白い。

「飲んだわよ。総悟君から鬼嫁貰ったし……」

「あれだけ飲んで、どうして酔わないんだ」

細い肩に手をかけ、くんくんと彼女の香を楽しむ。

「酒の匂いなんかしないし……」

「ちよつとやだあ。犬じゃあるまいし」

「本当に飲んだのかい？」

ぐいと顔を近付ける。知らずうちに操に体重がかかってしまう。

「ちよつ……やめなさい！」

彼女に口と鼻を押さえられても、伊藤は顔を近付ける。体重のかかりすぎで、支えられなくなった操がずてつと倒れ、頭を打ついい音がした。

「いったあ……。ちょっと鴨太郎！」

「うあ……。……頭イテエ」

タイミング悪く、土方が障子を開けて出てくる。縁側にいる二人を見て、凍りついた。

「「あ」」

頭を打って、その痛みに泣いている操。その操にのしかかり、操に口を押さえられている伊藤。土方が何を思ったかは想像に固くない。

「……姉さんになにしてんだオメーはあ！！」

「なんだい土方君。大きな声を出すものじゃないよ」

「大声出さないでか！ 姉さんから離れろ」

「君もいい加減、操君離れしないとね」

「まずテメーが離れろ！」

「ちょっと止めてよ二人とも！」

酔っている二人を宥める操も、大変だ。

（でも、ここから当分の間離れなきゃいけないのか……）

それは些か、淋しいものがあつた。

数日後、操たち特別部隊は京へ旅立った。

伊藤に二度と会えなくなるとは露にも思わず、操は笑顔を浮かべていた。

終

## 月見茶（後書き）

鴨太郎さんはこんなことしないんだろうな。  
でもこういう展開大好きです。  
感想下さい。

## 絆（前書き）

動乱編直後のお話です。

## 絆

「操隊長！ 江戸から電話ですよ」

「はい。ありがとう」

京にきてもう何年たつか。未だ江戸にもどることは許されず、すでに京の空気が慣れてしまった。早く江戸に帰って、仲間たちの顔を見たいものだ。

「はい、お電話変わりました」

『やあ、操君』

懐かしい声が、受話器から響く。

「鴨太郎！ きゃあ！ 久しぶりね。元気？」

『ああ、元気だよ。君は……聞くまでもないね』

悪戯っぽい口調に、意地悪、と笑う。

『実は、武州に行くことになってね』

「武州に？」

聞くところによると、どうやらまた隊士の募集をするそうだ。今回は伊東も仕事为空いたため、ついていくという。

「また仲間が増えるのね。楽しみだわ」

『そうだね』

「みんなは元気？ 無理してないかしら」

『ああ……』

伊東はなにかためらったように言葉を濁した。操は不思議そうに首をかしげた。

「どうしたの？」

『いや、なんでもないよ。帰ってきたら話すから』

「いつになるか分からないわよ？　お上はいつになったら帰らせてくれるのかしら」

ぼやくと、受話器のむこうから笑い声が聞こえた。

『僕も、早く操君に会いたいよ』

「私もよ。みんなに会いたいわ」

それからしばらくの間、他愛のない話をした。仕事の忙しさを忘れられる、楽しいひと時だった。

「じゃあまたね。怪我なんかしないでね」

『ありがとう。……ああ、操君』

置こうとした受話器から、声が聞こえた。

「なあに？」

『……いや、なんでもない。ありがとう』

「うん、じゃあね。おやすみなさい」

受話器を置いた瞬間、形容し難い恐怖が操を襲った。もう二度と伊東の声を聞くことができないんじゃないかというような、そんな不安。

「……気のせいよね」

だがその不安は、的中することとなる。

それは、翌々日の夕方のこと。

『やあ……、みい姉』

久しぶりの弟の声に、疲れも吹っ飛んでしまった。仕事の邪魔をしてはいけないと、近藤は滅多に電話をかけてこない。そのかわり、これでもかというほど長い手紙をよこしてくるのだ。

「勲！　久しぶりね。元気？」

『う、うん……』

「……どうしたの？」

受話器の向こうから聞こえ始めたのは、噛み殺した嗚咽。豪快だが意外に陽気な弟だけに、いきなり泣き出されるとさすがに驚く。

「ちょ、どうしたのよ勲」

『……みい姉……。落ち着いて聞いてくれ……。先生が、伊東先生が……』

「鴨太郎が、どうかしたの？」

しばらくの間があった。やがて近藤は電話の向こうで鼻をすすったらしく、その音が耳元で聞こえた。

『先生が、亡くなった……』

ぐずぐずと鼻を鳴らしながら、近藤は説明してくれた。

伊東が内乱を起こしたこと。

半分の隊士が、伊東派にいたこと。

彼が、真撰組を乗っ取るうとしたこと。

自分を暗殺しようと、たくらんでいたこと。

鬼兵隊に利用されていたこと。

そして、

土方と刀を交えて、命を落としたこと。

『……みい姉たちには……。知らせないと思って……』

「そう……。辛かったわね……」

相変わらず向こうからは、鼻をすする音しか聞こえない。

「電話ありがとう……。特別部隊には、私から伝えておくわ」

『ごめんみい姉……。ごめん……』

「なんで貴方が謝るの？ 貴方は悪くないわ。今日はゆっくり休みなさい。ね？」

『うん……』

「じゃあ、お休みなさい。よい夢を」

そつと受話器を置く。その瞬間に、操はがくんと膝をついた。

「操隊長！」

タイミング良く通りかかった部下が、操に駆け寄った。

「大丈夫ですか？ お体の具合でも……」

「大丈夫。……お願い、みんなを集めてちょうだい。大事な話があるわ……」

真っ白な頭を抱えて、操は立ち上がった。

動乱の余韻もなんとか消え去った、真夜中。近藤の部屋には酒の匂いが充満していた。もういくつ瓶を空けたか分からない。誰もが寝静まってしまった時間。近藤はただ一人、酒を呷っていた。

コト……。

物音がして、ふと顔をあげた。こんな時分にだれだろう。気配を探っている、懐かしい声がした。

「勲？」

この声は……。

「勲、入るわよ」

京にいるはずだった操が、静かにふすまを開けて入ってくる。近藤はさすがに硬直した。

「みい姉……？ あれ？ 幻？ 俺酔ってる？」

「十分酔ってるようだけれど、私は本物よ。ああ、こんなに飲んで……」

仕方なさそうな口調は、まさしく姉のものだ。近藤は耐え切れなくなり、大量の涙を浮かべて操に抱きついた。

「うわあああ！ みい姉ええ……」

幼子のように泣きじゃくる弟の頭をなでてやる。こんなことだろうと思った。

だから特別部隊の隊士たちに事情を説明したあと、すぐに列車に飛び乗って帰ってきたのだ。

少しは落ち着いたのか、未だしゃっくりあげてはいるものの、近藤は子供のように泣いてしまったことを恥じているらしく、ぐしぐしと涙をぬぐっている。

「すまねえ、みい姉……。わざわざ飛んできてもらっちゃまって……」

「いいのよ。貴方も、怪我は？」

ぶんぶんと首を振られる。包帯が袖や襟もとから覗いているが、大事ではないのだろう。

「俺が、もっとしっかりしてたら……」

「貴方のせいじゃないわ。誰も貴方を責めたりしてない。そうですよ？」

近藤の瞳に、また涙が浮いた。

「みんな死んでいった！ 俺のせいだ！」

叫んで、拳を畳に叩きつける。大きな音がした。

「俺がもつとしっかりしてれば、先生だってあんなこと起こさずに済んだんだ！ 奴らも、俺を庇って死ぬこともなかったんだ！」

怒号、または悲鳴……。それは、誰かの上に立つが故の、苦悩。

「貴方のせいじゃないわ。私は貴方が……」

「俺なんか、大将には向いちゃいないんだ！ 俺は、俺なんか……  
…護られる資格なんか、どこにもなかったのに！」

伊藤派であれ近藤派であれ、沢山の隊士が死んだと聞いた。具体的に名前は聞いていない。伊藤だけだ。

「勲」

叫ぶ弟の顔を両手で包む。胸が苦しくて、気がつけば涙があふれていた。

「みい姉……」

「……貴方一人で背負っちゃダメ。人は誰しも同じ道なんか進めないのよ。貴方と鴨太郎の道が、どこかで分かれていただけ。それだけのことよ」

流れ出る涙を拭わず、操は弟の頭をなでた。

「人はいつか死ぬものよ。それが遅かれ早かれ、大事なのは……何を思って、何を守って死んだかでしょ？」

「みい姉……。泣かないで……」

「そうでしょ……？」

涙を流す姉を、近藤はそっと抱き締めた。自分のために、京からここへ飛んできてくれた姉が、たまらなく愛おしかった。

「辛いときは思い切り泣きなさい。誰も責めやしないわ」

よしよしと頭をなでられ、近藤はひとつ頷いて、姉の肩に顔を埋めた。

顔をあげると、姉はいなかった。きれいに纏められている酒瓶と、頭の下に敷かれた枕。体に掛けられていた毛布。そして一枚の手紙が、残されていた。

『勲へ。』

私は京へ戻ります。私が江戸に来たことは特別部隊のみんなにももちろん屯所のみんなも知らないから、貴方だけの秘密ね。誰にも言っちゃだめよ。

どうか一人で背負い込まないで、辛かったら私に電話して。いつだって私は貴方の味方なんだからね』

優しく流れる字に、涙が浮かぶ。ずきずき痛む頭も、こんな時は無視できた。

「p.s

帰る前に、鴨太郎に会って行きます。それぐらい、許されるわよね」

はっと顔をあげて、寝巻のまま部屋を出た。まだ早朝で誰も起きていないらしく、目的地につくまで誰にも会わなかった。

「失礼するよ……」

伊東の遺体が安置してある、彼の部屋。置かれた棺桶の中で、伊東は眠っている。

「……先生、みい姉は来たかい？」

そつと問うと、伊東が何かを握っているのを見つけた。近寄ってよく見てみれば、操が愛用していた木製の簪だった。昨夜までは、握っていたなかった。

「来たんだね……」

きつと操は泣いていったのだろう。泣いて泣いて、それでも別れのあいさつをして、大事にしていた簪を持たせたのだ。

「……」

そつと部屋を出る。枯れるほど流したのに、また涙が流れる。

「ありがとう、みい姉」

ほしい言葉をくれて。

先生に会ってくれて。

「ありがとう……」

会いに、来てくれて。

終

## 絆（後書き）

書き終わってから、私は鴨さんのことを「伊東」と「伊藤」の二つで表記してたことに気づきました。

正しくは「伊東」ですよね。

ファン失格です…

（□、∴）ギャー！

## 月下の君（前書き）

私は何がしたいんだか分からなくなってきました…。

## 月下の君

「なあ、今日はデケエ月が出てるな」

空を見上げれば、大きな月が雲に隠れようとしていた。

夜、気まぐれに散歩に出た。共もつけず、ただ愛刀を腰にさして。

煙管を煙らせながらぶらりぶらり歩いていると、不意に背後に気配を感じた。

「……」

感じたが、足を止めない。歩を進めれば確実に気配は後をつけてきて、面白いとばかりにかけた。だした。

気配が大きく揺らぐのを感じる。細い路地に入れば、気配は屋根の上を移動し、つけてくる。賢い判断だ。細い路地を追いかけては、いつ不意打ちをくらうか分からない。

月は隠れていた。

巡回中だった操は見知った人影を見つけて、あとをつけた。気付かれたのか駆けだされ、路地に逃げ込まれる。

路地をそのまま追いかけるのは危険とわかっていたので、屋根に登って追い掛けた。

人影が逃げたのは川のほうだった。月は相変わらず雲に隠れ、月明かりがないせいあたりは真っ暗で不気味だ。

「……」

川を渡す橋の上で、荒れた息を整える。

「なあ、今日はデケエ月が出てるな」

さあつと雲が晴れ、月明かりで欄干に腰かけていた高杉が照らされた。

「本当に。綺麗なこと」

ぶつきらぼくに答えれば、ククツと妖しい笑みが返ってきた。

「こんな夜にや、お前の酌で酒が飲みてえなあ」

操の額に血管が浮く。自身をからかって遊んでいるのは知っている。それでも、腹を立てずにはいられないのだ。

「相変らず綺麗だな。操」

「名を呼ぶなと言った。それから、貴方に言われたって嬉しくないわ」

操の手が、腰の刀にのびる。

「褒めてやってんだから素直に喜べよ」

「だから、貴方に言われたって嬉しくないの。そういうのは好きな人に言われてこそうれしいもの……なのよ!」

刀を引き抜き、斬りかかる。ひょいと欄干から降りた高杉は、刀を引き抜いて応戦する。

「どうやったら貴方に嫌われることができるのかしらね!」

「嫌いになんかなれねえさ。俺の惚れた女なんだからな」

ぎりぎりと鰐迫り合いが続き、二人して間合いをとる。

「お前えはやっぱり夜が似合うな。月の下で舞うお前えは天女みてえだ」

「わけ分かんないこと言っでんじゃないわよ！」

ひらりひらりと欄干を飛び移りながら、空中で刀を合わせる。甲高い音が、夜空に響く。

「断言してあげましょうか?! 貴方なんて大嫌いって!」

「んなこと言われたら、俺あ泣くぜ」

「一生泣いてるこの馬鹿總統!」

激しい打ち合いで、お互いぼろぼろになっていく。一瞬の隙をついて、高杉が刀を振り上げたとき……。

「みいさん！」

突如暗闇から現れた小刀が、高杉に向って飛んでくる。それを間一髪で避けた高杉は操の一撃を紙一重でよけ、欄干に飛び乗った。

「みいさん、大丈夫ですかイ？」

「……総悟君」

暗闇より走ってきた沖田に、操は茫然と口を開けた。

「おやおや、とんだ邪魔が入ったもんだ」

「デメエ！ 今度みいさんに何かしたら許さねえぞ！」

「大人の時間を邪魔するもんじゃねーぜ。ボウヤ」

ギロリと、沖田の瞳孔が開く。

「ボウヤと言っな！」

刀を抜きかけた沖田を、操は慌てて制した。

「総悟君、だめよ」

「みささん！　なんで止めるんでさあ！」

「随分と懷かれてんだな。操」

「名を呼ぶなと言った！　アンタなんか、構ってる暇ないのよ！」

高杉はくくつと笑って、妖しく首をかしげて見せた。

「そいつをお前えの目の前で斬ったら、俺のもんになってくれるか？」

「そんなことしたら、許さないわ！」

「怒るなよ。聞いたただけだろ」

高杉は刀を仕舞い、沖田を見下ろした。

「せいぜい大切にすることだ。お前らの大事な姉は、いずれ俺がいただく」

「ふざけんなデメエ！」

沖田が刀を抜いて駆け出したとき、高杉はふわりと欄干から川へ身を躍らせた。

「またな。操」

そのまま水に吸い込まれるかと思いきや、タイミングよく来ていた屋形船に舞い落ちる。

「待てコノヤローっ！」

叫んでも、屋形船は行ってしまっただけだ。どうにもならない。

「総悟君、もういいから！」

今にも川に飛び込んでしまいそうな沖田をおさえるのは、それはもう大変だった。

「あんのヤロー……」

恨めしげに呟いて、ぐるりと振り返る。

「みいさん大丈夫ですかイ？！ 怪我は！？ いくら相手にする価値もないからって、奴だけは殴ってやらにや駄目でさあ！」

まくし立てる沖田に、操は力無く笑う。

「ああいう奴は放っておくに限るのよ。それに、今日は隊服が破れたぐらいだし……」

「なんだってあいつあみいさんに突っかかってくるんでさあ。夕チが悪い……」

ボウヤと言われたことを根に持っているらしく、不機嫌丸だしで沖

田は言う。

「ホント、ずいぶん気にいられちゃったみたいね」

ひとつ息をつき、帰りましようと呼びかけた。

「みいさん、今度やつに会ったら、がつんと殴ってやりなせえ」

「そうね。思い切り殴ってあげましよう」

二度と会わなければ、それにこしたことはないけど、操は続けた。

月下の君（後書き）

結局なにがしたいんでしょうか、私は…。

闇に怯え

甘く見過ぎていた。

晋助様から、山荘で会談をしている思想の違う攘夷浪士を倒してこいと命令を受けたものの、意外と強かった。

私の銃弾もあっさりかわされる。こいつら、鬼兵隊に入ったほうがいいんじゃないッスか！

「死ねえ！」

慌てて小高い山の中へ進んだけど、あいつらはしつこく追ってくる。発砲しようとした瞬間足がもつれ、私は派手に転んだ。

「天誅！」

殺されてたまるかとかまえた瞬間、その浪士は後ろから襲われた。彼の首が飛び、まるで噴水のように大量の血を撒き散らした。

「女の子一人に男三人とは、感心しないわね」

言葉を失うほどに綺麗な、女性だった。長い黒髪を揺らして、手には浪士を斬った長刀が握られている。シャツに隠しきれない胸はとても大きくて、つい羨ましいなと思ってしまう。

（って、そうじゃないツス！）

見とれている場合ではなかった。

だって彼女、真撰組の隊服きてるんだもの！

（まさか私を……）

逮捕しにきたのかと不安になったけれど、違ったみたい。

「山荘で会談してる浪士を逮捕しにきたのだけれど……。貴方たちでいいのかしら？　なに女の子苛めてるの？」

「チツ……。幕府の狗め！」

「はいはい、聞き飽きた。私が狗ならあんたたちは獣よ。女の子は大事になさい。女の子がいなかったらあんたたちも生まれて来なか

「ったんだからね」

なんの話をしてるのつつこみたい。それでも彼女は私と浪士の間に立ちふさがり、刀を構えた。

「どうする？ 大人しく捕まってくれば許してあげるわ。牙を剥くというなら、容赦はしない」

浪士たちは舌打ちすると、それぞれに刀を構える。交渉決裂と言ったところか。彼女はへたり込んでいる私を見下ろして、優しく笑いかける。

「安心して。貴女は私が護ってあげるわ。怖かったら、目を閉じていなさい」

なんて優しい笑顔なのだろうと思った。姫華お姉様と同じくらい美人だなとか、あの刀すごい血の臭いがするだとか、そんなことを思ったのは一瞬のこと。

「死ねや！」

浪士たちが、一斉に彼女に襲いかかる。彼女は慌てなかった。

「容赦しないと云ったわ。……死んでも知らないわよ」

奴等は皆、あっさりと倒されてしまった。彼女は舞うかのように長刀を操り、かすり傷一つなく全員を地へ倒した。本当にお姉様みたいだとか、戦場で舞ってる天女みたいだったとか暢気に思っていると、ふとあることに気付いた。

（真撰組の女隊士って……）

真撰組に、女隊士は一人しかいない。近藤局長の姉で、確か九番隊の隊長。そして、晋助様のご執着の……。

（近藤操！）

とんでもない女に会ってしまった。このまま逃げるにも、分が悪すぎる。

「まったく……。女を甘く見過ぎなのよ」

血のついた刀をふり、鞘に納めてから、彼女は私の元へ戻ってきた。

「酷いものを見せてごめんなさいね」

「い、いえっ……」

「もう大丈夫よ」

そう言っで、彼女は私に手を差し出した。つい手を伸ばしかけて、慌てて引っ込める。

「だ、大丈夫ッス！ 一人で立て……っ！」

立ち上がると、右の足首に激痛が走った。思わず体勢を崩しかけて、彼女に抱きとめられる。

「ちょっと、足怪我してるじゃない」

気付かなかったが、足首が青く腫れ上がっていた。さっき転んだ時にやってしまったのだろう。私はそれよりも、彼女に抱きとめられていることで頭がパニックになってしまう。だって、胸が、彼女の胸が当たってる……！

「手当てしないと……」

彼女がそう言いかけたとき、遠くでごろごろと雷の音が響いた。空を見上げると曇天が広がっており、今にも一雨降りそうといったところだ。

「雨がきそうね。その足で雨の中山を下るのは危険だわ。暫く雨宿りしましょう」

有無言わず、肩に腕を回される。この人私の正体に気付いていないのかと思っただが、それもそのはずだった。私は名前こそ知られているものの、素性は知られていない。

私が名乗らなければ、彼女は気付くこともないかもしれない。それに、

（チャンスっす）

晋助様のお心を乱す奴は私が消してやるッス。

「危なかったわね」

彼女に連れられてきたのは、横穴の洞窟だった。入ってほんの少しの差で雨が降り始め、彼女は安心したように息をつく。

「さ、足見せなさい。辛いでしょう」

「え、あの……大丈夫ツスから！」

これ以上、彼女にやっかいになるわけにはいかない。

「遠慮しないで。さあ」

「本当に大丈夫ツスから……」

「ばちん！」

ひどい音がした。それが自分の両頬から発せられた音だということに気付いたのは、痛みがじわじわと広がってからだ。

「手当てぐらいさせなさい」

母親のような、柔らかで美しい目。彼女は私をひっぱたいて頬を包んだまま、言い聞かせるようにそう言った。私は頷くしかなかった。

大人しく手当てされている間、彼女は何も言わなかった。慣れた手つきで、私のはれ上がった足に裂いた布を巻いていく。

「あの……」

「なあに？」

せめて礼ぐらい言っておこうと思って、口を開く。

「助けてくれて、ありがとございました……」

「ふふ、どういたしまして。少し乱暴な救出になって、申し訳なかったけどね」

はい終わり、と彼女の手が足から離れる。

「……すごいッス、全然痛くなくなった!」

さっきまであんなにずきずきしてたのに、まるで魔法みたい!

「特殊な巻き方をしたの。応急手当に過ぎないけど、帰ったらちゃんと冷やしてね」

につこり笑う彼女からは、敵意もなにも感じられない。この人本当に真撰組なの?

「雨、やまないわね」

外を見やって、そう呟く。

「あ、わたし近藤操。分かってるかもしれないけど、一応真撰組隊士よ」

ええ、もう分かってます。

「貴女は？ その前にどうしてあんなところにいたの？」

（いきなりッスか！）

答えていいのか迷い、口ごもってしまう。数分間黙り込んでいると、そつと頭を撫でられた。

「ごめんなさい。答えられないなら聞かないわ」

まるで幼子を窘めるお母さんみたいだ。

「あの……」

「ん？」

「お姉さん、いくつッスか……」

何故いきなりそんなことを聞かれるのか、彼女はきょとんとしているようだった。

「どうして？ おばさんぽかった？ 事実おばさんなんだけど」

「違うッス。おばさんとか言ってるけどお姉さんにしか見えないッス……私もお姉様いるッスけど、お姉様と同じくらいにしか見えな  
いし……。でも、なんとなくお母さんみたい……その……」

なにをどう言っているのか分からず、また口ごもってしまふ。

「……そのお姉様、おいくつ？」

「お姉様は二十六ッス」

途端に、彼女の顔がほころんだ。

「嬉しい。そんなに若く見えるかしら」

ふふつと笑って、口元を隠す。

「これでもね、三十二なのよ」

一瞬彼女が何を言っているのか分からなかった。銃で撃たれた衝撃  
って、きつとこんななんだろうなと思う。

「うそーっ!」

「本当よ。残念だけどね」

仮にも本当だとして、どうやってこんな若さと美しさをたもてるんだろう。

「……綺麗ッス」

「ありがとう。嬉しいわ」

彼女は立ち上がり、空を覗くために洞窟の外へ向かう。私は手当てされた足を見た。こんなに優しいのに、あんなに綺麗なのに、どうして真撰組なんかやってるんだろう。どうしてその手は、血に汚れているのだろう。私はいたたまれなくなつて、隠しもつていた二丁の銃を、遠くへ放り投げた。

「?」

かちゃんと音がして、彼女が不思議そうな顔を向ける。転がったのが銃であることを確認して、目を丸くする。

「……また子ッス」

「え？」

「私、来島また子ッス」

真撰組なら、私の名前は知っている。案の定、彼女の顔が驚きに染まっていく。

「……貴女が、紅い弾丸？」

「巷じゃ、そう呼ばれてるッス」

彼女は鯉のように口をぱくつかせ、私を見る。

「あつらゝ……」

開いた口は、塞がらない。

「……紅い弾丸がこんな可愛い子だとは思わなかったわ」

「世辞なんかいらないツスよ」

「世辞じゃないわよ。普通こんな可愛くて綺麗な子が銃ぶつ放すなんて誰も思わないわ……。そう、貴女が紅い弾丸なの」

半信半疑のような顔だ。それでも、可愛いや綺麗とか言われて嬉しかった。

「逮捕するツスカ？」

「しないわ。今はそんな気分じゃない」

がしゃんと、私が銃を放ったあたりに刀が放られる。戦意はないということだ。

「驚いた。なんで名乗ったの？ 名乗らなければ分からなかったのに」

「助けてもらってばかりじゃ、割に合わないツス」

ふふつと苦笑が漏れる。

「律儀なこと。……ねえ、煙草吸っていい？ 軽いニコチン中毒なの」

「いいツスよ」

彼女は安心したように煙管と取り出し、葉を摘めて火をつけた。煙を吸い込み、実に美味そうに煙りを吐き出す。

「……煙草、美味しいツスカ？」

「美味しいわよ。慣れればね」

その吸っている姿が、晋助様のものと重なる。

「……晋助様も、煙草吸ってるツス」

煙がおかしなところに入ったのか、彼女は激しくせき込んだ。

「？」

「そ、そうね。げほっ……。貴女の総統だったわね、忘れてたわ」  
胸を叩き、彼女はやっと落ち着いたようだった。

「晋助様、貴女を気に入ってるみたいッスけど……」

「そうなのよね。なんで？」

「私が聞きたいッス」

最近の晋助様は真撰組相手の仕事から帰ると、いつも彼女の話をしていた。

からかい甲斐があつて面白いだの、戦い方が美しいだの……。楽しそうに話される彼女に嫉妬していたのは、内緒の話。

「私はただ遊ばれてるだけのようになしか思えないけどねー。こんな若くて可愛い子が近くににいるのに、なにを考えてるのかしら、貴女の総統」

すぱあと煙を吐き出す。

「貴女、高杉の恋人？」

「なっ、んなわけないツスよ！　ただお仕えしてるだけで……」

なにを聞くんだこの人！　晋助様は、ただ崇拜しているだけで……。

「ふうん。好きじゃないの？」

「好きツスよ！　大好きツス！　でも、その好きは男の人としてじやなくて……。多分、あの方の人柄に惹かれてるんだと思うツス」

言ってから、私なにを言っているんだろうと顔が赤くなる。

「私が好きなのは……」

流れる黒髪を思い出す。手を握って、優しく私の話を聞いてくれたあの人。いまはどこにいるんだろう。

「好きなのは？」

「……内緒ッス」

彼女は何故か微笑ましそうだった。つられて笑っていると、鼻の奥がむず痒くなってくる。

「はっ、くしっ！」

「寒い？」

「大丈夫ッス」

やはりこの時期は冷える。こんな格好でくるんじゃなかった。

「はい」

いつのまにか目の前にいた彼女が、私に隊服を差し出してくれた。

「……なんツスか？」

「着てなさい。そんな格好じゃ風邪ひくわ」

「い、いらないツスよ！ 敵の情けは受けないツス！」

とかいつて、もう何度も受けてるけど……。

「困ったなあ……。じゃあ、お願いとしてきいてちょうだい。私は暑くてたまらないから、貴女が着ていて」

「し、仕方ないツスね！ 着てやるツスよ」

憎まれ口をたたいたものの、また微笑まれた。袖を通すとふわりと温かく、彼女の温もりが残っていた。

（……暖かい……）

その時ふと、妙な匂いが鼻をついた。この匂いは……。

「……？」

「どうかした？」

「この服、血の臭いがするッス。どこか怪我してるッスか？」

ジャケットからは、かなりの血の臭いがしていた。彼女は薄く笑いながら、いいえと首を振る。

「さっきのに加え、今まで沢山の浪士たちを斬ってきたから、血の臭いがしみついちゃってるのよ。嫌？」

「嫌じゃないッス。私も同じようなものだし……」

私の紅い弾丸は、血の色に由来する。血を浴びすぎて赤く染まった手、服、私は血に染まっている。

「……そうか、可愛い顔して、沢山殺しちゃってるのよねー」

そうかそうかと頷かれる。

「もう慣れた？」

「なににッスか？」

「人を殺すことに」

「……」

「ああ、ごめんなさい。嫌みを言っているわけじゃないのよ。ただね、私は辛かったの。始めて人をあの刀で斬った日は、怖くて眠れなかったから……」

確かに、私も怖かった。

「私はね。初めて人を殺した時、自分のしでかした事に怖くなって、気持ち悪くなって、頭が変になるかと思ったわ」

人を殺して怯えていたあの頃を思い出して、私は黙り込んだ。

私も怖かった。どんなに逃げたって、罪悪感は追い掛けてくる。

「人一人の命の重さを考えて、とんでもないことをしてしまったと自分を責めたわ。大事な人を守るためだとか、言うことに事欠いて私はまた人を殺して、自分の傷を深くして、眠れない夜を長くするの」

彼女は淡々と語る。まるで人事みたいに。

「でもそれは私の仕事だった、私は斬り続けたわ。斬るたびに胸が裂けそうだった。全てのものが、奴らの血の赤に見えた時期もあって苦しんだ」

まるで私のことを語っているみたい。思うことは、誰も同じなんだ。

「私もツスよ。銃っていいのはいいツス。命を奪うときの感触が手に残らない。でも、怖かったツス。そんな私を、ある鬼が助けてくれたツス」

「……鬼？」

「晋助様ツスよ」

『来島、俺と共に来い』

そう言ってくれたのは、片目の鬼だった。その鬼は片方しかない鋭い瞳で、妖艶に笑った。

「私はその鬼を守るために、何も感じずに人を殺せる鬼になったッス」

「……鬼のおかげ、かぁ」

彼女は煙管をくわえて、しばらくのあいだ物思いに耽っていた。

「私の場合は……。辻斬りか」

「辻斬り？」

「岡田似蔵よ。知ってる？」

似蔵がと思って頷くと、彼女はそうよねと笑った。

「今は鬼兵隊にいるのよね。元気してる？」

「あいつは元気な時でも元気じゃないように見えるッス。でも最近  
は、傷も癒えて剣をふってるッスけど……」

「そう、じゃあ生きてるんだ」

はつとした。似蔵が生きていることを前提に聞かれるものだから、ついしゃべってしまった。

「ずるい！」

「あははっ、ごめんなさい。こっちも仕事なのよ、許して」

この人伊達に男ばかりの真撰組で生きてない。なんて人だ。

「私ね、まだ隊長になる前に、あいつと刀を交えたことがあるのよ」

「嘘！ よく生きてたッスね」

「ええ、今思うと奇跡みたいよね。でも、あいつのお陰で変わったの。感謝してるわ。だからあいつは私が捕まえてあげるの」

「それ、感謝してるって言うッスか？」

逆じゃないかとつつこみたくなる。

「感謝の裏返しよ。あいつが気付かせてくれなかったら、私は真摯組としてやってけなかったから」

「……なにがあつたツスか？」

もの凄く気になるツスけど……。

「それは岡田に聞いてちょうだいな。私から話すには、長すぎる」

本当にずるい人だ。

「それに……雨もやんだ。ほら見て、虹が出てる」

彼女の隣に立つてみると、成る程、大きな虹が出ていた。

「綺麗ツスね」

「綺麗ねえ」

暫く眺め、彼女は自分の刀と私の銃を拾い上げた。私はジャケットを脱いだ。

「はい、貴女の銃」

「ありがとッス。ジャケットも……」

「着てくれてありがとう」

優雅な動作でそれを羽織る。なんだかバスト部分がきつそうだ。

「今度会うときは戦場なのね、嫌だわ」

「私もッス。戦場じゃない場所で、またゆっくりおしゃべりしたいッス」

そう言うと、彼女はふふつと笑った。

「それまで元気だね」

「ッス」

「下まで行ける？　一緒にいきましようか？」

「大丈夫ッス。それに下まで一緒にいったら、仲間が見つかるッスよ」

彼女の仲間に。鬼兵隊の幹部と一緒にいるところを見られたら、流石に彼女も分が悪いだろう。

「そうね、じゃあ先に降りるわ。……お大事に」

「ありがとうッス」

彼女は私のことを気にしつつ、山を下りていった。私も暫くしてから山を下りた。

虹は、消えかかり、姿を消しかけていた鉛色の雲が、また広がり始めていた。

船に帰ってから、とりあえず浪士たちは片づけたと晋助様に報告した。晋助様はそうかと言って、ご苦労だったとつなげた。

「あ、晋助様」

「あん？」

「今日、近藤操に会ったッス」

晋助様が驚いたような顔をした。流石に黙ってはいられなかった。

「私が殺るはずだった浪士を捕まえる予定だったとかで……。正体を知らなかった私の手当て……。してくれたッス」

晋助様の視線は、布の巻かれた私の足に向けられている。

「で、どう思った。あの女」

「どうって……。変な女ッス。私の正体知っても、気分じゃないって私を逮捕しなかった……。うまく言えないけど、なんだか……。面

倒見のいい母親みたいな感じッス」

晋助様がくくつと笑った。私へんなこと言ったかな、

「そうかい。やはりな……。変な女だったろう。面白れえな」

また、笑い声。

「ご苦労だった。今日は休め」

「はい、失礼します」

晋助様の元を去って、私は自分の部屋でなくある場所へ向かう。船にある、大きな道場。似蔵はいつも、ここで刀を振っている。

「似蔵おー」

「……来島かい？ おかえり」

ぶんぶん我真剣を振る左手は止まらない。

「ただいまッス。似蔵、真撰組の、近藤操って知ってるッスか？」

「近藤……。局長じゃなくて、隊長のほうかい？　今高杉さんがお熱だっという……」

「……そーッス。一度刀を交えたって聞いたけど、本当ッスか？」

似蔵はやつと素振りを止め、私を見た。正確には、向いた。

「誰から聞いた？」

「本人からッス。アンタのお陰で変わったって、言ってたッス」

似蔵は笑うと、刀を鞘へ納めた。そして私に歩みより、唯一残った腕を差し出す。

「めくってくれるかい？」

訝しがりながらめくると、手首から二の腕にかけて、細い刀傷が残っていた。

「あの女にやられた傷さね。ありゃあ容赦なかった。お陰で、一月までもに使えなかったからねえ」

私は絶句した。仮にも人斬りと唄われている似蔵に傷をおわせるとは、彼女の腕はどれほどのものなのだろう。

「俺がまだここにくるまえの話さね。聞きたい？」

正直に頷くと、似蔵は小さな含み笑いを漏らして、壁にもたれ掛かった。

「真冬だったよ。雪でも降りそうな……。俺あ斬ることができりゃ、誰でもよかったからね、道行く者誰でも斬った。あの女は、俺が斬れなかったたった一人の人間さね……」

雪でも降りそうな夜。似蔵は人気のない道を歩いていた。最近人

を斬ってない、久しぶりに、魂の色が見たかった。

（おや？）

人気がない土手を、静かに歩く人間がいる。風にながれてくる匂いが甘く柔らかいことから、女だと分かる。

（おかしいねえ……）

着物のきぬ擦れがしない。恐らくジャケットに、ズボンだ。随分と珍しい格好をしている。

（まあいい）

どんな姿をしていようと、斬ることに変わらないのだ。

「お嬢さん」

静かに声をかけたつもりなのに、その細い肩はびくりと戦いた。そろそろと振り返る女に、似蔵は笑いかける。

「危ないよ。こんな時間に、女性が一人歩きなんて」

「ご心配ありがとう。でも大丈夫よ」

女の声は力強かった。刀をちらつかせているのに、怯えてもいない。

「そうかい。俺は忠告したよ」

似蔵はいい様、刀を握って走り出した。刀を引き抜き、振り上げる。

「危ないってね！」

女を斬ると思った刀は、するりと空を裂いた。まさか避けられるとは思わなかった似蔵は、さすがに驚いて眉を上げた。

「驚いたね。まさか避けるなんて」

「驚いたわ。いきなり斬りかかってくるなんて」

女は平然としていた。いや、そう思えて実は、心が沈んでいるだけか。

「俺の一太刀を避けたのはお嬢さんが始めてだよ。お嬢さん、何者？」

「名乗るほどじゃないわ。ていうか何者かなんて服を見れば分かるじゃないのね」

似蔵の目が見えていないことに気付いたらしい。

「見えないんだよ、お嬢さんの美しい顔も……。名前を教えて貰えないかねえ」

ざあ……と風が吹く。女は腰に提げているであろう刀を握りながら、言った。

「真撰組よ。人斬り、岡田似蔵」

名を呼ばれ、似蔵はくくつと笑った。

「おやおや、俺を知っていたのかイ？」

「盲目の人斬りって言ったら、貴方しか思い浮かばないわ」

「しかも女性隊士とは……」

「悪い？」

「いやと、似蔵は笑った。

「斬り甲斐がありそうだね」

言って、斬りかかる。女は鞘に納めたままの刀で似蔵の刀を止めた。

「くっ……！」

「俺の刀、どこまで止められるかな！」

駿速の連打を浴びせる。女はそれをことごとく避けたが、刀を抜こうとはしなかった。

「俺をなめているのかい？ いい加減、刀を抜いたらどうさね！」

横殴りの一撃を女は立てた刀で押さえたが、力に敵わず弾き飛ば

され、土手を転がり落ちた。

「きゃっ！」

下まで落ちた女に、容赦なく刀を振り下ろす。女はすぐに跳ね起きて避けたかに見えたが、刀はざっくりと女の左腕を斬りつけた。

「っあ……！」

痛みの悲鳴を押し殺しているのだろう。腕を押さえてうずくまる女に、似蔵はふふつと笑う。

「笑っちゃうね。天下の真撰組が、人を斬るのを躊躇らっているなんて」

女が、はっと顔を上げたのが分かる。

「闇に怯えているんだろう？ 何人か既に斬ったはずだ、その刀からは血の匂いがする」

女は、なにも言わなかった。

「重いだろう、人を斬るといのは……。だがね、そんなことに怯えていちゃ……」

女に向かって走る。

「死んでしまっよ」

女は避けようと動いたが、似蔵の刀は女の胸を浅く斬り裂いた。

「あ……」

女が、悲鳴を上げた。

「あああっ！」

がくんと崩れ落ちる女。もう不要と、似蔵は刀を納める。

「女は不便だねえ。その豊かな胸も、戦いの際には邪魔になる。それに、力も弱い。殺らなきゃ殺られる、そんな世界に、分かっていて入ったんじゃないのかい？」

女がはつと顔を上げた。次の瞬間には、声高らかに笑い出す。

「おお？」

痛みで気が触れたかと思ったが、違った。

「あはは……。殺らなきゃ殺られるか……。そうね、分かっていたはずなのに。私は分かっている、この道を選んだのに……」

女は立ち上がり、肩にかかる程度の髪をはらった。

「ありがとう、岡田似蔵。気付かせてくれて」

チキ……と鯉口をきる音がする。彼女が抜いたのだ。

「俺あ何かしたかねえ」

「ええ、してくれたわ」

女が動いた。先程とは比べものにならないスピードで。似蔵はとっ

さに刀を抜いて、彼女の振るった刀を押さえた。

「貴方のいうとおりよ。人を斬って、その重さに耐えきれなくて怯えていたの。どんなに叫んだって、逃げたって、罪悪感だけは私を追ってきた。とても苦しかったわ。でも、貴方が気付かせてくれた」

跳ね返し、間合いをとる。

「私は自分でこの道を選んだ。これが私の進む道なら、真っ直ぐ進んでやるわ。私は生きるために、人を斬る！」

先刻とはまるで違う。本当に同一人物なのか、視力を取り戻して確認したいぐらいだ。

「っ……！」

早い。自慢の俊速で受け止めるのが精一杯だ。しかも刀だけではなく。拳や足まで飛んでくる。彼女の全身これすなわち武器。彼女の回し蹴りをたてた鞘でブロックしたが、あまりの強さに吹っ飛ばされた。

「ぐっ……」

本当に女かと問いたい。なんて力だ。

「随分乱暴だねえ……」

「殺らなきゃ殺られると言ったのは貴方よ。私は人間であることを止めた。人を殺しても何も感じない、獣になるの」

女が構えている。その構えは、気配で伝わってくる。

「……なるほど、逆手か……」

「ご名答。このほうが力はあるのよ」

彼女が刀を持つのは逆手。似蔵は逆手が含まれるその流派を、聞いたことがある。

「天然理心流……。真撰組の中でこの流派を使うのは、確か……」

「私を含めた四人。ただし、逆手である逆理心を使うのは、私だけよ」

似蔵は、ふっと笑った。

「お嬢さん、そろそろ名前を覚えてくれないかい？」

「名前？ 大層なものじゃないわよ？」

女が駆け出す。雨のように降り続ける攻撃を必死になって弾く。

「俺あ、なにかしてあげたんだろう？」

「ああ、そうね。じゃあそのお礼に、教えてあげるわ」

目の前にいると思った女が、真横にいた。驚きと焦りで、僅かに反応が遅れる。

「ぐ……」

左腕をざっくり斬られた。血が噴き出し、似蔵は間合いを取って傷口を押さえた。

「私は操。近藤操よ」

「近藤……。あの局長の……」

「姉でーす」

これはとんでもない女を相手にしていたらしい。似蔵の唇が、ひくりとつり上がる。

「これはこれは……。真撰組にもとんだ戦いの女神がいたもんだ」

「お褒めに預かり光栄だわ。じゃ、名乗ったところで逮捕させて戴くわね」

にこりと笑う気配が伝わってきた。鬼だ、そう思った。

「オイ、そこでなにをしている！」

土手の上から、奉行所の人間の声が響く。舌打ちをしたのは、二人同時だった。

「邪魔なのが来たわね」

「アララ、逃げられるかな」

似蔵と操は、刀を振って鞘へ納める。

「勝負はお預けね。また機会があったらやり合いましょう」

「俺あもう嫌だね。お嬢さんを相手にしたら、俺あ死んじまうよ」

ふふつと、彼女は笑った。

「斬ってあげるわ。いつかね」

彼女の声を聞き、似蔵は背を向けて走った。同心から、そして彼女から逃げるために。

「ありがとう」

彼女の小さな声が、耳に届いた。

「ふふ……。恐ろしい女だったよ。あんなに強い女は始めてだった。人を斬ってもなにも思わない獣にしちまって後悔したさ」

銃を向けなくて良かったと、私はこっそり思う。似蔵ですら苦戦したのだ。自分などあっさりあの世行きだ。

「その足は、カノジョにやられたのかイ？」

私の足に布が巻かれているのを、すでに感じ取っていたらしい。

「彼女に……。手当してもらったッス」

似蔵は驚いたように顔を上げた。

「攘夷浪士に追われてたところを助けてもらったッス。私が紅い弾丸だと名乗っても、態度は変わらなかった」

もう大丈夫よと、優しく伸ばされた手。手当ぐらいさせなさいとひっぱたかれた時の彼女の目は、とても柔らかくて美しかった。

「変な女ッスよ……」

なのに、また会いたいと思うのは何故なのだろう。

「ははは。俺もう会いたくないね。殺されちまあ」

似蔵は至極楽しそうに笑う。「冗談ではなさそうだ。

「その話、晋助様は知ってるッスか？」

「知ってるよ。酒の席で話しただけが、思い出したように船をおりちまった……。あの時はどこに行ったんだか」

晋助様が実は彼女に会いに行っていたのを、私達は知らない。

「高杉さんはあの女のどこが気に入ったんだろうね」

「…… 弄り甲斐のあるところって言ってたッスけど」

鬼兵隊総統でありながら、人をおちよくって遊ぶという子どもじみた姿をみせる晋助様。確かに毎回おちよくって遊んでいる。

「あの女の話をしているときの晋助様、どうにも母親を困らせて遊んでる幼子にしか見えないッス」

「それ本人に言った？」

「ば、バカいつてんじゃないスよ！ 言ったら殺すッスよ似蔵！」

怒鳴り、私は慌ただしく出ていった。そんなこと晋助様に聞かれたら、それこそ斬られてしまうんだから。

似蔵はくつつつ笑って、刀を引き抜く。

「近藤操……。恐ろしい女だね。アンタとは二度とやり合いたくないよ」

それでも、また会ってみたいと思うのは、何故なのだろうか。

「……馬鹿馬鹿しい」

自嘲し、似蔵は刀を振り下ろした。

終

闇に怯え

(後書き)

そろそろ操さんに恋をさせたいと思うんですが、皆様どう思いますか？

ご意見ご感想お待ちしております。

隠された想い

前編（前書き）

操の恋愛話を書きたいのに、ベツモノになってしまいました。

「みい姉、準備出来たかい？」

「ええ、すぐ行くわ」

綺麗に着飾って部屋から出てきた姉を見て、近藤は苦笑した。

「そんなに綺麗にしくったって……」

「だあって、久しぶりに会うのよ。綺麗な私を見せたいじゃない」

姉のいうことにも間違いはないので、また笑ってそうだなと頷く。

「トシ君は？」

「やはり行かないとき。合わせる顔がないって」

「そっか……」

残念そうな操の肩に手を起き、近藤は笑う。時が過ぎるのは本当に早い。

「もう一年なんだな」

伊東鴨太郎が、殉職したのは……。

伊東の墓は、江戸の外れの小さな寺にある。一回忌である今日は、代表者が墓参りに行くことになっていたのだが、あまり大人数で行っても迷惑なので、近藤姉弟と土方が行くことになった。が、土方は最後まで渋ったらしい。

「トシ君と鴨太郎……。仲悪かったからなあ」

顔を合わせれば勃発する喧嘩。止めるのは、本当に大変だった。

「どうしてあんな仲悪かったんだ？」

「さあ……。似過ぎていたからでしょうね」

意味が分からず首を傾げていた近藤は、墓地の角に見慣れた後ろ姿を見て、目を見開いた。

「まっ……」

慌てて駆け出す。角を曲がったその背中を追ったが、角を覗いたとき、その姿は消えていた。

「……」

「勲ー？ どうしたの？」

不思議そうな操の声に我にかえる。

「あ、ごめんみい姉……」

思い過ぎなのだろう。だから、伊東の幻覚などみるのだ。

「鴨太郎―。来たわよ―」

墓石の前に座りこみ、声をかける。墓は綺麗に磨かれ、既に花が供えられていた。

「誰か来たのかしらね」

生前伊東が好んでいた茶菓子を供え、二人で手を合わせる。

「……………」

手を下ろして操を見た近藤は、姉が泣いているのをみて目を裂いた。

「……………鴨太郎、何を思って動乱なんか起こしたのかしらね」

「……………俺が、未熟だったから……………」

「自分を責めないの。貴方のせいじゃないわ」

立ち上がり、弟の胸をぽしっとたたく。

「私が言いたいの……………。鴨太郎により所はなかったのかなって……………」

誰かに認められたいと常に思っていた伊東。彼はただ、孤独だったのだろうか……………。

「先生は、  
みい姉のそばにいるときは、  
なんだか楽しそうだったけ  
どなあ」

「ええ？ まさか」

「本当だよ」

苦笑して、頭を下げる。

「鴨太郎、  
また来るわね」

近藤もそれに倣って頭をさげ、桶を提げて立ち去った。供えた菊の花と、線香の煙が寂しく揺れていた。

「なんだかなあ。私のいない間に、いろいろ起きちゃって……。何も出来なかった自分が情けないわ」

「みい姉は京で頑張ってくれてたじゃないか」

「だって……」

「起きてしまったことは、もう後戻りできんよ。先のことを見ないわけ」

操から、苦笑が漏れた。

「そうね、局長殿」

最近また男らしくなったと思う。

「なんかおかしい？」

「いいえ。全然」

操がごろごろ笑うので、近藤は不思議そうに首を傾げる。そうこうしている間に、屯所に戻ってきた。

「ただーいまー」

「お帰り近藤さん、姉さん」

土方が、縁側に腰掛けていた。相変わらずタバコを吸っている。

「どうだった？」

「鴨太郎怒ってたわよ。トシ君が来ないから」

煙が変なところに入ってしまったのか、土方は激しく咳こんだ。

「んなわけねーだろ！」

「いや、トシが来なくて泣いてたかあ？」

「近藤さんまで言うか！」

そういう土方の足元には、沢山の吸い殻が転がっている。ずっとここで、考えていたのだろうか。自身が斬った、伊東のことを。

「またそんなに吸って。体壊しちゃうわよ」

「平気へーき。そんなすぐに壊しやしないって」

そんなことを言っただけの土方に、操はダイブするように抱き着く。

「そんなこと言って！ 体力が無くなってきたから止めようかなって言っただのは誰よ！」

「うわぁ！ ちょっとオイ姉さん！ 胸！ 胸がダイレクトに……！」

「なによ照れ屋さんー！」

「照れ屋もなにも関係ねえっ！ 助けてくれよ近藤さん！」

後頭部に豊かな胸を押し付けられた土方が、顔を真っ赤にする。近藤は苦笑して、操を引きはがす。

「みい姉、トシだって男なんだから……」

「ちえー」

「ちえ、じゃねーよ本当によお……」

まだ赤い顔で、土方は息をつく。

「私着替えてくるわね。夜番だし」

「分かった。俺も着替えてこよう」

あとでねと手を振って、操は部屋に戻っていく。土方は未だ赤い顔を、片手で隠す。

「近藤さんよ。俺男として見られてねーのかな……」

「みい姉に女性としての自覚がないだけさ」

はははと近藤はから笑いする。

「さて、俺も着替えてくるかあ」

呑気に立ち去る近藤の後ろ姿を見送り、土方は再びため息をつく。  
この姉あって弟あり。近藤姉弟には敵わないのだ。

「みい姉！ みい姉ーっ！」

どたどたと廊下を走る音がしたのは、ハンガーからワイシャツを取

ろうつとした時だった。ようはズボンにブラジャー姿といったセクシーな姿で、何かと障子を開ける。すでに隊服に着替えていた近藤が、走ってくる。

「なによ勲、騒がしい」

「騒がしくもなるよ！ 大変な来客が……、うわあ！」

部屋から覗いた下着姿の操に仰天し、慌てて障子を閉める。

「みい姉！ なんて格好してんだ！」

「なんてって、着替え中だもの。それよりなんなの、そんなに慌てて」

「いいから服着て！」

「減るもんじゃないのに？」

「着て下さいー！」

「分かったわよ。うるさいわね」

仕方なく、シャツのボタンを閉めて、障子ごしに聞いてみる。

「で、大変な来客ってだあれ？」

「それが……」

神妙な弟の声に、操は首を傾げる。

「伊東先生の、兄上殿なんだ」

最後のボタンを閉めようとしていた操の手が、止まった。

続く

## 隠された想い

## 前編（後書き）

恋愛小説って難しいんですよー！！（；＿；）なんて、ちよつとスランプです。この話も恋愛っちゃあ恋愛の要素あるんですけどね…。

隠された想い

後編（前書き）

鴨さんのキャラが果てしなくぶっ壊れてます。  
なんでこんな話になったんだろう…。

（  
□  
・  
）

「いきなり来て申し訳ありません。鴨太郎の兄、鷹久といいます」

客間に通したお客は、伊藤本人ではないかと思うほど彼にそっくりだった。唯一違いがあるとすれば、眼鏡をかけてないことぐらいだ。

「……本当に、お兄様？」

「先生じゃありませんよね？」

近藤姉弟は信じられない様子だ。

「驚かれるのも無理ありません。私たちは本当にそっくりでしたから……」

土方は煙草を出しかけて、操に止められた。鴨太郎の兄、鷹久が病弱なことを、知っていたからだ。

「此度は弟の一回忌。弟の墓参りと、故郷より出てきました」

「……あ」

先程墓参りに来ていたのは彼だったかと納得する。どうりで、鴨太郎の面影を見るはずだ。

「近藤局長殿、土方副長殿、鴨太郎の手紙にあつた通りのお方たちだ。弟が人を褒めるなど滅多になかった故、どんな人物なのかお会いたくて仕方がなかったのです」

近藤と土方は顔を見合わせて、少しだけ顔を赤くした。

「そして、近藤操殿……。弟が夢中になるわけだ、こんなにも美しい女性だとは……。あの堅苦しい弟が、戦場の舞姫だ、戦いの女神だと毎回の手紙の半分以上を埋めるわけです」

「そ……」

顔を真っ赤にして、俯く操。まさかそんな風に書かれていたなど、

思いもしなかった。

「今日は、貴女に用があつて参りました」

「……私に？」

鷹久は頷き、一通の手紙を操に差し出した。

「送っていただいた弟の荷物の中にこれが……。自分になにかあつた時はこれを操殿に届けてほしいと書かれていたので、届けに参りました」

手紙を受け取り、戸惑つた様子で近藤と土方をみやる操。

「読んでみたら？」

はにかまれて、操はじゃあ、失礼してと手紙を開ける。

『拝啓 近藤操様

君がこれを読んでいるということは、僕は真撰組を自分のものにするという計画に失敗し、命を落としたのだろう。

操君、どうか馬鹿なことをした僕を許してほしい。万が一失敗したときのために、この手紙を残しておくよ。

僕はずっと誰かに認めて貰いたいと思っていた。ずっと、ずっとだ。兄に母を取られ、どんなに努力しても僕を見てくれる人などいなかった。だから僕は、僕自身を理解させようと真撰組の乗っ取りを企てた。機密裏に鬼兵隊とも通じた。

そこで言われたよ、僕が求めているのは自分を認めてくれる理解者なんかじゃない。僕は、ただ誰かに隣にいて欲しかったのだと。馬鹿げているよね。

己が器量試すために入ったこの真撰組、僕が何故いままで大人しくしていたか分かるかい？ 操君、君がいたからだよ』

操が息を飲み、近藤と土方は顔を見合わせる。

『始めて出会った時、君は紅葉を見上げていたね。僕は最初、舞い降りてきた紅葉の精霊かと思ったよ。君が隊士だと知った時は驚いた。近藤君のお姉さんで、僕より年上だと知った時はもつと驚いた。思えば君には、振り回されてばかりだったね。』

それでも、君の側に居られるだけで僕は幸せだったんだ。君は聡明で、優しく、そして僕が飢えていた年上からの愛情をくれた。君が甘やかしてくれて、本当に嬉しかった。そしていつの間にか、君のことを愛しく思っていたんだ』

操の手が、震え始める。

『母親のようで、姉のような君にどんどん惹かれていった。君が愛しくてたまらなかった。僕がどんなに君を想っていたか、君は知らないだろう。君に誕生日を祝ってもらった日は嬉しくて眠れなかった。君を想うと胸が苦しくなった。誰かに恋をしたのは、始めてだったんだ。』

だから君の側にいたかった。でも君は遠征のため、京へ行ってしまった。耐えられなかったんだ、君から送られてくる手紙だけでは。

君に会って、君を抱きしめて、

君に構ってもらいたくて、

どんどん苦しくなつて、僕はもう耐えられなかった。ならば思ったんだ。真撰組を僕のものにできたら、この思いをうち明けようつて。

大事な近藤君を亡くして沈んでいる君に優しい言葉をかければ、君は僕のものになってくれると一瞬でも思ってしまった。許してくれ。こんなことしか考えられない僕を許してくれたまえ。

僕は願うものはなんでも与えられてきた。でも本当にほしいものはなにも与えて貰えなかった。

馬鹿だろう？

君はどんなときでも、僕のそばで笑ってくれたのにね』

操の瞳から、ぼろぼろと涙が零れ落ちる。近藤も土方も、なにより鷹久もぎよつとした。

『でもこうなつた以上、僕の口からは伝えられない。僕と一緒に近藤君も死んでしまったのかな、土方君はどうしているのかな。もし二人が生きているのなら、謝っておいてくれたまえ。

そしてもし死してしまっているのなら、君に謝っておく。本当に申し訳なかった。

大好きな君から大事なものを奪おうなんてどうかしていた。僕は死んで当然なのかもしれない。僕は失敗するつもりなんかない。

でもこうして君がこの手紙を手に行っているのなら、やはり失敗したんだろう。馬鹿なことを考えた報いだ。こんな僕が、君に愛される資格なんかなかったんだ。最後に君に会いたかった。

君の愛らしい声で、僕の名前を呼んで貰いたかった。抱きしめて貰いたかった。でも、もう叶わないね、もし僕が生まれ変わったら、また君の側で生きたい。今度は真つ事に、君の隣にいても胸をはっていられるくらいに。

その時は、また僕の名前を呼んで、笑ってほしい。

最期に伝えておくよ。

操君。僕は君を愛していたよ。

我が君へ。

願わくは、君の心に、ずっと僕がいられますように

伊東鴨太郎』

耐えきれず、操は顔を覆って泣き出した。土方が慌ててその肩を支え、操が差し出した手紙を、近藤は読んでいいのかいと聞いた。

操が頷くので目を通した近藤も、息を飲んで目を見開いた。

「……弟は、貴女を愛していました」

土方が、顔を上げた。

「貴女がどんなに聡明で、どんなに美しくて、どんなに優しいのか手紙に書き連ねてあった。

まるで大好きなものを見つけた子どものように、その手紙を読んでいるときだけは、弟も普通の青年らしく見えた。貴女のお陰だ、操殿。ありがとう、弟に変わって礼を言います」

「私、私は……」

涙は止まらず、操はとぎれとぎれにつないだ。

「彼の側に……いてあげられなかった……。私がいれば……っ」

「弟は貴女がいて幸せでした。私に取り上げてしまった、本来なら手にすることの出来る幸せを、貴女は与えてくれた。ありがとう。弟が生涯唯一、愛した女性よ」

それは伊東本人から言われているようで、操は頷くしかなかった。

「これから、どうするんだい？」

門まで見送りに出、外に出た鷹久に声を掛ける。

「弟の眠る寺で僧侶となり、弟のために毎日経を読みたいと思います。大事なものを奪ってしまった、あの子にたいする報いです」

「おうちには、帰らないんですか？」

泣きはらして、少し赤い目で操が問う。

「私は、家を出てきました」

「え……？」

「弟が死んだと通知が来たときの、両親の反応は大変冷たいものでした。心配する私に、お前はそんなこと気にしないでいいと言ったんです。まさか弟をそんな邪険に思っていたなど知らなかった私は、両親に絶望しました。だから家を捨て、満足に構ってやることの出

来なかった弟のそばに、ずっといたいと思います」

そうかと、近藤は頷いた。

「先生も、きっと喜びます」

鷹久が、口元で笑う。本当に伊東にそっくりだと、土方は何気なく思った。

「弟に叱られてしまいますね。愛する女性を泣かせたと」

「私は泣き虫ですから……。先生はきっと、また泣いてると笑いますわ」

「……また弟に会いにきてあげてください。喜びましょう」

「はい」

それではまた、そう残して、鷹久は去っていった。操はまたこみ上げるものに耐えきれず、弟にしがみついて顔を埋めた。近藤はそん

な姉を抱きしめ、土方は近藤と操を挟み込むように、抱きしめた。

「私、知らなかった。……鴨太郎が私を愛してくれてたなんて……。これっぽっちも……」

「伊東は、姉さんのそばに居られただけで幸せだったろうよ」

「鴨太郎……っ」

操はそのまま、暫くの間泣き続けた。自分を愛してくれた男を想って、泣き続けた。

ねえ。勲、トシ君

ん？

なんだい？

鴨太郎のこと、怒ってる？いんや

俺も

私が京に行かなければ、鴨太郎はあんなことしなかったかしら

……さあな

どうかな……

ねえ

ん？

どうした？

愛されるって、幸せね

終

そ  
う  
だ  
ね。

……  
あ  
あ

隠された想い

後編（後書き）

恋愛小説ってホントに難しいですね。 悪戦苦闘中です。

許されない恋

(上) (前書き)

やっと操の恋話が書けました。

お相手はなんと彼です。

(笑)

## 許されない恋

(上)

「待ちなさい桂ーっ！」

江戸に帰ってから、彼のあとを追うことが格段に増えた。彼は江戸を拠点としているためそれも当たり前のだが、弟いわく最近出没の頻度が増えたらしい。

「誰が貴様なんぞに捕まるか」

「言ったわね！ 絶対捕まえてやるんだから！」

軽い身のこなしで屋根に上がる桂を追う。

「あなたちは下から追いかけて！」

ついていけない隊士たちに言い放ち、桂を追う。桂の足は早く、まるで忍者の如く屋根を移っていく。

「京で鍛えたこの足をなめんじやないわよ」

男の中にただ一人の女。だてに鍛えてはいない。

「見つけた！」

屋根を移っているだけあって、下の隊士たちが遠くなってしまった。仕方ないので自分一人でかかることにする。

「逃がすかあつ！」

刀を引き抜いて切り掛かった。桂は鞘のまま刀を受け止めたが、操が飛び掛かったせいで足を踏み外し、共々落ちた。

「！」

「きゃああつ！」

幸い下の路地はごみの袋が敷き詰めてあり、怪我はない。

「いたた……」

「……オイ」

なにか柔らかいものの上に落ちたらしく、体を起こせば桂の端正な顔が、不機嫌そうに歪んでいた。

「……」

綺麗な顔がすぐ近くにあり、どきりとする。

「……いつまでそうしているつもりだ」

端から見れば、操が桂を押し倒したような光景だ。

「……どきなさいよ！」

「貴様がどけ！」

我に返った操にツッコみ、桂は操を押しつけて上体を上げた。

「かなり落ちたようだな」

「ちょうどいいわ。そのまま頓所に来なさい」

「なにがちょうどいいんだ」

がしつと、桂の肩を掴んだとき……。

「怪我をしているではないか」

彼の手が、操の頬に触れる。痛みが走ったから、擦りむいたのかも知れない。掴んだ肩は意外にも遅しくて……。

「桂さんっ！」

小刀が飛んできて、操は慌てて飛びすさった。桂が顔を上げる。

「お前たち！」

攘夷党の男たちだ。桂は立ち上がり、男たちと交じる。

「待ちなさい！」

向こうに消えた桂たちを追い、ゴミ袋を飛び越えた操だったが、通りにでたとき彼等の姿はなかった。

「……また逃がした」

操は悔し気に呟いて、刀を鞘に納めた。

「……落ちたせいだわ」

何故か胸が苦しく、そして触れられた頬が、熱かった。

頓所に戻ったものの操の機嫌は悪く、キセルをふかす喫煙所には誰も近寄れなかった。

「ぴりぴりし過ぎだぜ。姉さん」

がりがりときセルに齒を立てながら振り返れば、タバコを加えた土方がいる。

「だって悔しいんだもの。あと少しだったのに」

「意気込むのはいいが、無茶しねーでくれよ」

軽い動作で、頬に貼付けた絆創膏に触られる。不思議なことに、いやこの寒さだから仕方ないのだろうが、彼の手はひんやりと冷たい。

「無茶なんかしたことないわよ」

「よく言っぜ。一番無茶をしているのは姉さんだろうっ?」

古くからの友人である土方は、操がどれだけ努力を積み重ねてきたかをよく知っている。だからこそ心配してくれているのを分かっている。操は嬉しそうに笑った。

「……どうかしたのかい？　みい姉」

昨日のことを引きずっていたのか、操は小さな失敗を犯した。攘夷浪士検拳の際、なにを焦ったのかバズー力を取り出し、屋敷ごと破壊したのだ。浪士たちは検拳出来たが、屋敷は崩壊。総悟じやあるまいと、土方は笑った。

「……」

「……」

黙り込んでしまう姉に、近藤は心配そうに首を傾げる。そして助けを求めるように、土方を見た。

「……姉さん、明日オフだっけか」

「えっ、うん……」

「んじゃ行くか」

腕をとって、ぐいと立たせる。

「トシ、どこに……」

「お妙さんのお店だよ。男にゃ分からない話は女に話したほうがいい」

「おっ、俺も！」

「馬鹿言つな。近藤さんは夜番だろう」

俺も行くー！ と騒ぐ近藤を置いて、土方は操を引っ張っていく。

「あ、トシ君……」

「無茶すんなって言ったろう？ お妙さんにでも、愚痴聞いて貰え」

「……うん」

操自身、いま自分に起こっていることが分からないのだ。女同士話をすれば、少し楽になるかも知れない。

「お姉様ー！」

「お妙ー！ おりょうも久しぶりー！」

店に着けば、操はあっという間にホステスに囲まれた。きゃいきゃいとはしゃぐ操や女の子たちは、本当に美しい。

「すみません土方さん。本来お相手しなければいけないのは土方さんですのに……」

オーナーが申し訳なさそうに寄ってくる。

「いい。俺はどうでもいいから、姉さんの話を聞いてくれるようにホステスに言ってくれ」

そのためにきたのだから……。

「ささ、どうぞお姉様」

「ありがとう」

個室に入って、操と妙のふたりきりになった。土方は別の個室で

飲んでいるらしいが、よく分からない。

「珍しいですね。お姉様が土方さんとご一緒されるなんて」

「私の様子がおかしかったから、気をきかせてくれたのよ」

妙がまあと、小さな声を上げた。

「なにかあつたんですか？」

「なにかつてわけでもないんだけど……。なんだか、昨日からおかしくてね。胸が苦しくて、食事もう喉を通らなくて……」

「ご病気ですかと、妙は心配そうに言う。

「まさか！ 診てもらったけど、そんなじゃないわ。ちょっと精神的に不安定になってるみたい。不意に涙が出たりするし……」

「そこまで聞いて、妙にはピンと来るものがあつた。

「……お姉様、最近どなたか素敵な殿方に会われました?」

「素敵な殿方? ……さあ、どうして?」

「お姉様、それは恋ですよ。どなたかに恋してるから、そんなに苦しいんです」

「……恋? 私が?」

はいと頷く妙。何故か不意に桂の顔が頭に浮かんで、操は有り得ないと言を振った。

「……恋か。馬鹿馬鹿しい」

頓所に帰って、布団に潜り込んで、操は一人呟いた。

この年で、なにを今更だ。今まで異性を愛したことなどなかった。それどころではなかったから…。

「恋なわけないじゃない。精神的に参ってるだけよ」

自分に言い聞かせる。きっとそうだ。妙は若いから、恋に繋がりたいだけなのだ。

「寝ましょ寝ましょ」

この話は終りとばかりに寝返りをうち、目を閉じる。するとまた、桂の顔が浮かんだ。操の額に血管が浮いた。

「だからなんでアンタが出てくるのよ!」

怒りに任せて投げた枕が、襖に当たって音を立てた。

続  
く

許されない恋

(上) (後書き)

恋愛話は難しいです。 (笑) まだまだ続きます。感想くださいー  
い!!

許されない恋

(中)(前書き)

ああ、もう滅茶苦茶です。

恋話って難しいんだもんよー！！

↑何度目だ…)

(

## 許されない恋

(中)

それから数日が過ぎても、おかしい症状は治まらなかった。むしろ日に日に苦しくなり、泣き出したい気分になる。

「…眠いわ」

目の下を擦り、大きな欠伸をする。キセルを吸っても眠気は飛ばず、もう一回病院に行こうかと思ってしまう。

「みい姉」

呼ばれて、振り返る。

「うわ、ひどい顔！　ちゃんと寝てるのかい？」

「ひどい顔ってなによ。失礼ね」

顔を覗き込んでくる弟に、笑いかける。

「とつつあんが、みい姉に来て欲しいんだって。天導衆に報告にいかないといけないんだとか…」

「あの馬鹿共なんて放っておきなさいよ…」

眠いのと疲れがたまっているのとで、近藤にことりと体を預ける。

「…本当に大丈夫かい？ みい姉。辛いなら休んでもいいんだよ？」

「…大丈夫よ。あいつらも適当に受け答えしてればいいんだし…。行ってくるわ」

おまけとばかりに、小さな欠伸を漏らす。

「無理しないでくれよ。みい姉」

心配してくれる弟に、操は一つ礼を言って、笑った。

「よく耐えたなあ、操ちゃん」

「反論する気力がなかっただけですわ」

本当に適当な受け答えをして、まともに話を聞いていなかった。

女の身で、女のくせになどごとく天導衆は操を怒らせるような発言をしたが、操は聞き流して耐えた。いつもなら笑顔で瞬殺するのだが、そんな気力がなかった。

「……なんか参ってるのかい？　操ちゃん」

よしよしと松平に娘のように頭を撫でられ、つい泣きそうになる。

「疲れてるだけですわ。最近ちょっと不安定で……」

「女の子は大変だからなあ。無理するんじゃないよ」

はいと頷いたとき、入り口の扉が開いた。入ってきた重色の髪をもつ女性は、操を見つけてあつと声を上げた。

「ミサー！」

「アヤー！ きゃあ！ 久しぶりーっ！」

猿飛あやめは、操が遠征に行く前からの女友達だ。操もあやめも忙しいため、なかなか会えないのだが……。

「久しぶりね、元気してた？」

「元気よ元気！ ミサは相変わらず綺麗。ちょっと痩せたんじゃない？」

「まさかあ、お腹ぶにぶによ」

楽しそうに飛びはねる二人を微笑ましそうに見ていた松平は、タバコをくわえながら笑った。

「二人で茶でも飲んできたらどうだい？　せつかく会えたんだから」

松平の言葉に、二人は有り難く従ったのだった。

「京都はどうだった？　美味しいもの沢山食べた？」

「食べたけど、仕事でそれどころじゃなかったわ。毎日毎日攘夷浪士との対決。お陰で力ついちゃった」

くすくす笑いながら街中を歩く二人は、粹な女性二人にしか見えない。ふと、あやめが携帯を落とした。

「あ、アヤ携帯……」

落ちた衝撃で開いた携帯の待受は、興味なさげに振り返った銀時の姿。

「……これ、旦那？」

「あわわわっ！」

慌てて携帯を奪い取るあやめ。その顔は赤い。

「……もしかして、旦那に惚れてるの？ アヤ」

熟れたトマトのように顔を染めるあやめに、操はまあまあと婆臭い台詞をはいた。

「ミサは、銀さんのこと知ってるの？」

「ええ、真撰組の腐れ縁だって。私は何度か会ったことあるけど……」

「……………」

あやめは愛おしそうに携帯を抱きしめ、顔を赤くした。入った喫茶店で注文した珈琲を、操は静かにすする。

「……………恋か……………。ねえアヤ、恋って、どんな感じなの？」

あやめはきょとんと首を傾げたのち、赤い顔で、ぼそぼそと繋いだ。

「……彼のことを考えると、胸が苦しくなって、きゅうっとなって……。銀さんを思うと、夜も眠れなくなるの。なんだか分からなくなつて、泣き出したい気分になって……。ふとした時に顔が浮かんで……」

恋をするあやめは、女の操から見ても美しい。

「……操は？　操は好きな人いないの？」

「私は……」

珈琲を飲みつつもないわよと言おうとして、また桂の顔が浮かんだ。

「つつ……！」

思わず珈琲を嘔き出してしまう。むせていると、あやめに不思議そうに首を傾げられた。

「……馬鹿馬鹿しい」

あやめと別れて、頓所への道を辿った。胸の奥に残る苦しさはまた酷くなり、泣きたい衝動が襲う。

「有り得ないわ……」

あやめが語った恋の症状は、いまの操にぴたりと当て嵌まる。だが浮かぶのは、敵である桂の顔だけ……。

「冗談でしょ。なんであいつに……」

桂に恋をしているとでもいうのか。有り得ない、何故、あいつなのだ。

「……っ」

泣き出したい衝動が襲う。

恋をしているというのか

桂に？

敵である彼に？

有り得ない

あつてはならない

だって彼は攘夷浪士で

自分は真撰組なのに

「違つわ」

違つなら、

何故ピアスをつける

敵である桂から贈られた

昇格祝いのピース

「苦しい……」

胸が裂けそうだ。重い鉛がたまっているような胸を押さえて頓所に戻ると、操はそのまま自室に戻って、倒れ込んだ。

「……？」

ボロボロと涙がこぼれる。その理由がわからず、操はただ苦しい胸を押さえて、目を閉じた。

「……頭痛い」

布団も敷かずに寝てしまい、翌朝ひどい顔で目が覚めた。胸の苦しさは治まらない。

「……」

ふと音がやんだ気がして、庭に繋がる障子を開けた。寒い寒いと思ったら、雪がちらちらと舞っていた。

「……全て、埋もれてしまえばいいのに」

この苦しさから逃れるには、方法の一つしかない。

傘をさすほどでもなかったので、そのまま見回りに出た。操の目は細められ、冷たい光を宿している。

『こちら三番隊！ 東に桂が逃走！ 応援を頼む！』

きたとばかりに駆け出す。手短な壁を辿って屋根に登り、桂が辿りそうな屋根を伝う。

今日でこの苦しみとおさらばだ。苦しみを捨てることが出来なければ、

もう

耐えられない。

ミスで真撰組に見付かってしまった桂は、屋根を伝って東に逃げた。雪の積もった屋根は歩きにくいことこの上ないが、地上よりまだ。

「……！」

不意に殺気がふってきて、桂は慌てて立ち止まって刀を引き抜いた。遠慮なくふりおちてきた操の刀を、頭上で止める。

「お前っ……！」

無表情の操から、刀を振りつつ間合いをとる。

「……どうした。今日はやけに不機嫌だな」

「そう？　いつものことよ」

相変わらず無表情のまま、操は構えをとって駆け出す。

キンッ！

刀が甲高い音をたてる。桂は何故操が怒っているのかわからぬまま、戸惑ったように顔を歪めた。

「なんだ、なにをそこまで怒っている！」

「怒ってなんかないわ。ただ、貴方を斬りたいだけよ！」

雪はまだやまない。それに加えて、嵐のような攻撃が桂を襲つ。雪で滑る足場で避けるのも一苦労だ。

「おかしいな。俺はそこまでお前を怒らせるようなことをしたか？」

「してないわ！　けど、貴方に惑わされる私にイライラするの！」

攻撃を避け続けていた桂だったが、雪に足を滑らせて受け身も取れ

ずに倒れた。

刀が降ってくる気配を感じたが、避けられない。

ガッ！

真横に刀が突き刺さる。のしかかった操の髪が頬を滑り、ついで雲が落ちてきた。操が泣いているのを確認し、桂は目を見張る。

「……苦しいの」

ばたばたと、涙は雨のように降りしきる。

「貴方を斬らなきゃ、この苦しみから逃れられない！」

刀が抜け、振り下ろされる。桂は間一髪のところを避け、操から離れた。

「俺を斬らねば苦しみから逃れられないだと……？ なんのことだ、どうしたと言うのだ」

わけが分からず、ただ戸惑う桂。

「分からないわよ！ 私だって……！ なんで貴方なの！ なんで敵の貴方を……！」

ボロボロと涙を流しながら、操は吐き出すように続けた。

「苦しくて、辛くてたまらないの！ 胸がはち切れそうなの！」

吐き出して荒い息のまま、操は真っ直ぐに桂を見た。

「貴方を、愛してしまったから……」

ボロボロと滝のように涙がこぼれる。

「愛したらいけないのに、許されないのに！ 貴方が恋しくて堪らないの！」

時が、止まったような気がした。

続く

許されない恋

(中) (後書き)

次回は桂さんの視点で書きたいと思います。桂さんのキャラがぶっ壊れるかも知れないので、その時はご了承ください…。

## 降り積もる思い（前書き）

ED「雪のツバサ」をテーマに、桂さんの視点で書いてみました。  
桂さんのキャラが完全崩壊しています。桂さん大好きな方は回れ右  
したほうがいいです…。

「意志を継ぐ者」の松光が少し出てきます。

降り積もる思い

鼓動が早い。

けしてあの女から逃げてきたからではない…。

疲れたわけじゃない。

理由は、分かっている。

己が信じられない。

こんな感情、こんな感情！！

俺は絶対に、認めない…。

「待ちなさい桂―っ！ 今日こそ捕まえてやるわ！」

威勢のいい声。俺を呼ぶその声に、心が躍る。

たった一人の真撰組女隊士。好敵手と呼べる、唯一の敵。

「誰が貴様なんぞに捕まるか！」

逃げながら軽口を叩けば、

「言ったわね！ 絶対に捕まえてやるんだから！」

いつもの言葉が返ってくる。

男たちの中の唯一の女が、今だけは俺だけを見ている。

それが、何故だか嬉しかった。

いつ頃かなんて考えたくも無い。      だけれど、何故かあの女が気になり始めた。

何故か、気が付くと視線があの子を追っている。そして、それに気付くたびにそんな己に驚く。

ふとした瞬間に彼女のことを考え、にこりと笑う彼女の幻で我に返る。

本当にどうしたというのだ。

らしくない。

らしく、いられない。

そんなある日だった。

「きゃああっ！」

屋根の上で足を滑らせたあの女をとっさに支えたら、支えきれずに俺も落ちた。

幸い下にはゴミ袋が敷き詰めてあり、丁度いいクッションになってくれた。

「いたた……」

目の前には、顔をしかめるあいつの顔がある。

相変わらず美しい顔だと思った。

「怪我をしているではないか」

すりむいて血の滲んでいる彼女の頬に触れたのは、一度その柔らかそうな頬に触れてみたいと思っていたからだ。

案の定、恐ろしく滑らかで、ふにふにと柔らかかった。

仲間に助けられてアジトに戻っても、あの女の頬に触れた感触は手に残っていた。

それになにかぼつつとして、胸が苦しかった。肺でも痛めたるうかいや、あれしきのことでそんなはずは……。

「桂さん、どうかしましたか？」

浮かない顔の俺に、仲間は心配して声をかけてくれる。なんでもない笑顔をつくって返しておいたが、胸の苦しさは、日に日に強くなっていった。

何日かして、また外へ出かけた。アジトに籠もっているだけ無駄だ。

唐傘を深く被って道を歩いていると、不意に目の前に白いものが落ちてきた。それは地にしばし留まったあと、姿を消した。

「……雪か」

いつその胸の苦しさを、覆い隠してくればいいのに…。

わけの分らない胸の苦しさは、いつまでたっても治まらなかった。

むしろ日に日に苦しくなる。

医者にかかってもよくならなかったで、兄に相談することにした。

先生の息子である彼なら、何とかしてくれるだろうと、そんな期待があった。

兄さんは俺の来訪を喜んでくれた。

相談があると言った俺に気を使って、銀時が新八君とリーダーを連れ出してくれた。

あとで礼を言っておかなければな。

「それで…。どうした？ 相談なんぞ珍しい」

新八君が用意しておいてくれた急須から、兄さんは器用に茶を注いでいく。

本当に見えていないのだろうか。時々本気で思っ。

「…最近、調子が悪くて…」

瞬間、兄さんは顔を上げた。

「病気か？ 医者にはかかったのか？」

己のことは後回しで、兄さんは俺らを心配してくれる。それが凄く嬉しかった。

「医者には行つたが、なんともないと言われた…。だから、どうしたらいいか分からなくて…」

「なんとかしてやりたいが…。どこがどう調子が悪いんだ？」

包み隠さず、話していた。

胸が苦しいこと。

不意に涙が出そうになること。

自分らしく、いられないこと。

兄さんは終始黙って聞いてくれたが、俺が話終わると口を開いた。

「…なにか、大事なモノでもできたかい？」

兄さんの言葉が、よく分からなかった。

「え？」

「お前の今のその症状は、誰かを愛しいと思うそれにぴたりと当てはまる。あくまでも例えだが、聞いておくれ」

兄さんはやんわりと笑って、続けた。

「戦が終わって、お前たちと離れていた数年間、お前たちに会いたくて会いたくてたまらなかった。お前たちに会って、肩を叩いて笑い合えたらどんなに幸せかと…、苦しくて苦しくてたまらなかった。胸の苦しみはお前たちを想うことにつらくなった」

胸を押さえ、兄さんはそう言う。

「会いたくてたまらなくて、何故お前たちが側にいないのか、悲しくて泣きたい時もあった」

「泣いたのか？」

戦争が終わってから、と言っても過ぎた時間は短かったけれど、兄さんが泣いたところなんか見たことがない。

兄さんは首を横に振った。

「この役立たずな目は、視力を無くしてから一度も涙を流さん。流したくても流れない」

兄さんはそう続けて、立ち上がる。

「そんな目でも、瞼を閉じれば見えるものがある。小太郎、お前たち弟の顔だ」

それが酷く嬉しくて、赤い顔で俯いた俺の目の前に兄さんは立つ。

「俺の大事なモノはお前たちだ。だから目を閉じればお前たちが浮かぶ。…小太郎」

兄さんはそっと、俺の目を覆う。温かい手だった。

「お前の中には、誰がいる？」

ふと浮かぶモノ。

たなびく黒い髪。

舞うような刀さばき。

とても年上とは思えない、無邪気なあの笑顔…。

何故あいつが…。

そんなわけがない…。

違う…。

「違う！」

いきなり立ち上がった俺に、兄さんはすごく驚いたろう。だが俺

には、兄さんを氣遣う余裕はなかった。

「あいつなわけがないっ！！　あいつは、あいつは敵なのに…！」

なにも考えたくなくて、頭を抱えて後ずさる。わけが分からなかった。何故よりによって、あいつなんだ！！

「こたろ…」

「絶対に違う！！」

伸ばされた兄さんの手をふり払って、おれは外に飛び出した。「小太郎！！」と俺を呼んでくれた兄さんの声が背に聞こえたが、足は止めなかった。

違う。

あいつなわけがない。

何かの間違いだ。

そうに決まって…。

「決まって…？」

知らないうちに涙が出ていた。滅多に泣くことなどないのに、一体俺はどうしたというのだ…。

「違う…」

呟いたが、もう何が違うのか分からなくなってきた。

涙は一向に治まらず、俺は路地裏で膝を抱えて、わけの分からぬまま泣いた。

空には半紙のように真っ白な雲が広がり、いつしかまた、雪が降り始めていた。

どれくらいたっただろうか。雪はやむ事を知らずに降り続けている。涙で濡れた顔を上げれば、冷えた涙にぶるりと身が震えた。

「…修行が足りないな…」

心頭滅却すれば火もまた涼し。寒さも似たようなものだ。寒いと感じるのは修行が足りないせいだ。

空を見上げれば、無数の雪が舞い落ちてくる。

しんと降り続けて、やがて積もっていく。

これは俺の想いなのか。

俺は本当に、あいつを…。

「馬鹿馬鹿しい…」

そんなわけがない。

いくらあいつを本気で愛したとて、あいつは気付かないだろうし、  
例えば想いを伝えても、あいつが俺を愛してくれるはずがない。

「…寒い」

すっかり冷えてしまった。早くアジトへ帰ろうと路地を出たところ  
で…。

ドンッ！

誰かとぶつかった。

「すみませ…」

「こちらこそ忝な…」

お互い言いかけて飛び跳ねた。ぶつかった相手は、こともあるつか  
真撰組…。

「桂!!!?」

慌てて踵を返して走り出した。後方で待てー！と怒鳴り声がしたが、待てと言われて待つ馬鹿がどこにいるのだ。

地上では見つきりやすいので、屋根に上がった。

思った以上に雪が積もっていた屋根の上は、美しい程真っ白だった。

雪はまだやまない。この純白さが俺のあいつへの想いなら、伝えるまでやまないのだろう。

あいつへの想いを断ち切らない限り、降り続けるのだろう。

今もまだ降むことを知らない。きっと、やむことなどないだろうと、

そう思っていた。

「愛したらいけないのに、許されないのに！ 貴方が恋しくて堪らないの！」

そう言われるまでは…。

続く

## 降り積もる思い（後書き）

恋する男性の気持ちってさっぱり分かりません…。誰か教えて下さい…（泣）次回操の視点に戻ります。感想ください。

## 許されない恋

(下) (前書き)

ぎゃあー!! (「□」;)!! ごめんなさいごめんなさい!!  
こんな桂さんありえない!! 絶対こんなことしない!! ごめ  
んなさい!! (↑エンドレス…)

…やっと「許されない恋」終わりです。…胸やけするぐらいべたべ  
たと甘いんですが、それでもいい方はお進み下さい…。

## 許されない恋

(下)

「愛したらいけないのに、許されないのに！ 貴方が恋しくて堪らないの！」

無我夢中で刀を振る操に絶句し、桂はなにも言えなかった。

いま彼女はなんと言った？

誰が、恋しい…と？

「貴方を斬らなきゃ、苦しくて耐えられない！」

突き出された刀を、桂は回し蹴りで払い落とした。息を飲む操の細い両腕を掴み、壁へ押さえ込む。ピアスが揺れ、音をたてた。

「きゃっ……！」

怯んだものの離せと怒鳴ろうとした操は、桂の真剣な顔が近くにある、息を飲んだ。

「……気付くのが遅かったな」

それは自嘲のようだった。独り言のように言い、桂はため息をつく。

「以前死にかけた時、何故かお前の顔が浮かんた。変えたい世界でも、浪士の仲間でもなく……敵であるお前の顔が……。そうか、だからか」

「なに一人で納得して……！」

怒鳴る操を黙らせるように、桂はその唇に蓋をした。操は目を見開いて硬直し、ずるずるとへたり込む。唇は離れなかった。

「……俺もお前を愛していると言ったら、信じるか？」

唇が離れ、ため息のように紡がれた言葉に、見開かれたままの操の瞳が、大きく揺れた。

「え……？」

音が消えた気がした。雪が降る、ただそれだけなのに、辺りは至極静かだ。

「何度も言わすな。俺はお前が愛しい、狂おしいほどに」

涙がとめどなくあふれる。桂を直視できず、操は俯いた。

「本気で…言っているの？」

「本気でなければこんなこと言わぬ」

操の瞳から、大粒の涙が零れ落ちる。

「私が真撰組でなければ……」

「俺が攘夷浪士でなければ……」

どちらかがその肩書を持つていなければ、叶った恋なのかもしれない。肩書を持つ二人だからこそ、叶わぬことのない恋。

「なんで貴方なんかに恋をしちゃったんだろ……。年下で、攘夷浪士で……私は真撰組なのに！」

ぼろぼろと流れる涙が、地に落ちて雪を溶かしていく。

「あの日、出会わなければ……」

「そんなこと言わないで。私は貴方がいたから、あの日出会えたから今まで頑張れたの。貴方に出会えなければ、私は真撰組なんて続

けられなかった。貴方を忘れようとした……でも無理だった……。遠征に託けて京に行ったって、頭の片隅に貴方がいた……。どうして……」

どうして、貴方なのだろう……。

「……お前と戯れるのが好きだった。表情をくるくる変えて俺をおいかけてくるお前を見るのが……。今思えば、お前に会いたいが為に、真撰組に喧嘩を売っていた気がする」

遠征に行ってしまった彼女。彼女がいない真撰組などつまらないから、喧嘩を売るのを止めた。

「苦しい。叶わぬ恋がこんなに苦しいなど思わなかった……いつそのこと、逃げてしまえばいいのに……」

「逃げないで。貴方は私が捕まえる！ 絶対……」

「この状態で何を言う。捕まっているのはお前だぞ」

両手首を掴まれ、壁におしつけられた状態は、未だ解かれていない。もちろん涙を拭うこともできず、操は淡く微笑んだ。

「お前じゃないわ……、操よ」

「操……」

動いたのは どちらからだっただか。雪の降りしきる中、白い世界で、二人は口付けた。貪るような激しいキスに、頭がくらくらした。

「操……」

「呼んで……もっと」

「操、操……っ」

いつしか手の戒めはとかれ、操の腕は桂の首に回されていた。

「……こんなところ見られたら切腹ものね……。攘夷浪士の桂と――」

緒にいるなんて……」

「桂じゃない」

「え？」

「小太郎だ。そう呼んでほしい」

操の瞳から、また涙が零れる。

抱き着いたまま、吐き出すように続けた。

「小太郎……。もっと早く会いたかった……」

「もっと早く想いを伝えれば良かった。こんなにも後悔するのなら……」

そのまま、桂は暫くのあいだ操を抱きしめていた。やがて互いの肩に雪のツバサが出来るころ、桂は操の額に口付けを落とす。

「生きているかぎり、俺はお前から逃げ続けよう。いつか俺を捕まえるがいい。色んな意味で」

「いつか捕まえてあげる……。私のものにしてあげる……。それまで逃げ続けて」

再び唇を重ねると、桂は身を離れた。

「また会おう、操」

「ええ。……また追いつけてあげる」

桂は操の頬を撫で、軽めのキスをする、屋根をつたって姿を消した。流した涙に風が凍みる。操は涙を拭わず、シーバーを取った。

「こちら近藤、桂が北に逃げたわ。追って」

『了解!』

桂が逃げたのは南。これで捕まることもあるまい。操は踵を返すと、ひらりと屋根から下りた。嘘であることを悟られないように、北へ走る。

「はあ……。はっ……。!」

何も考えず、がむしゃらに走った。何かを振り切るように、振り払うかのように。彼女の瞳からは、涙が零れていた。

ザッ……

「!」

操の前に数人の男が立ちはだかり、操は立ち止まざるを得なかった。間違いなく、過激派の攘夷浪士だ。

「真撰組九番隊隊長、近藤操とお見受けする。愚かな幕府に仕える

犬め！ 我等攘夷浪士が天誅を下してくれる！」

刀を向けられ、操自身も刀を抜いた。

「今日は早く帰って泣きたいの……。悪いけど、手加減できないわ」

運の悪い奴ら。涙を流した操から、悲しい呟きが洩れた。

応援の要請を受けて頓所を飛び出し、連絡があつた通り北へ向かつた土方は、寒さとは別の意味で背が震えた。攘夷浪士と思われる男が数人、血まみれになつて倒れている。その少し行つた先には、雪に埋もれて倒れている操がいた。

「姉さん！」

慌てて抱き起こす。操の体は雪に冷えて冷たく、ぬばたまの髪もぐ

っしよりと濡れていた。ところどころに血がついた顔は青白く、血の気をなくしていた。

「姉さん！ オイ！」

ぺちぺちと頬を叩くと、薄い瞼が微かに動いた。焦点の合わない目を開いた操は、ぼんやりと呟いた。

「……………」

「へっ……………」

いま名前と呼ばれた？ 彼女には、いつも「トシ君」と愛称で呼ばれていたのに。

「姉さん大丈夫か、しっかりしてくれ」

がたがた揺らすと、やっと操の瞳に土方が写った。

「トシ……君？」

「大丈夫か？ 怪我は？」

「大丈夫……。みんな返り血……。捕まえたと思ったのに……。逃がしちゃった……。奴ら、生きてる？」

目を開けていることさえ辛いのか、操は目を閉じて土方に体を預けた。

「恐らくは……」

みんな死んでいる。ここまで血を流して、生きているわけがない。

「むしゃくしゃして……。手加減できなかったわ……。捕まえたと思ったのに……。捕まえられない……」

操は何を言っているのか、恐らく桂を捕まえようとして、こいつらに邪魔されたのだろうと判断した土方は、上着を脱いで操にかけてやり、抱き上げようとした。だが操がまだ刀を握っていることに気付き取り上げようとしたが、がっちり掴んでいて離れない。

「姉さん、刀……」

手を離してくれと言おうとしたが、操が気を失ってしまい、仕方なく指を一本一本剥がしにかかる。どれもがっちりと握りにかかっていて、何があるうと刀を離さない操の執念を実感した。

「……姉さん」

操の瞳から涙が零れ落ちていた。そんなに悔しかったのだろうか、桂を逃したことが……。

「……寒い」

操に上着を貸してしまったうえ、この天候だ。土方は操の刀を腰の

鞘におさめ、軽々と抱き上げた。浪士たちの死体だけが、残された。

操が倒れたとの情報を聞き、近藤は操の部屋に飛んでいった。怪我はしていないものの衰弱が激しく、女中によって着替えさせられた操は布団に寝かされていた。

寒いだろうと火鉢をたいていると、微かな呻き声が出た。

「みい姉、大丈夫かい？」

ゆるゆると開かれた瞳が、近藤を確認する。

「いせ……」

「無理しないで」

微笑むと、操は力無い笑みを浮かべた。

「ごめんね……。迷惑かけて」

「いいんだよ。それより、今回は随分無茶をしたなあ……。桂追い掛けて他の浪士倒すなんて……」

「邪魔をする奴らが悪いのよ……。怒った私は手加減出来ないのに、不運な奴ら」

ははは、と近藤は空笑いした。

「……ねえ、勲」

「うん？」

「私は貴方の反対を押し切って……。貴方を傷つけてまで真撰組に残ったわ……。その時の傷は、まだ貴方の体に残ってる……」

「それは気にしないでいいって……」

「聞いて…。私は貴方を傷付けて…。後悔しないと誓ったわ。貴方を傷付けてまで選んだ道を後悔したら、貴方に失礼だって…。ずっと、思ってた」

ふらふらと伸ばされた手を、握ってやる。

「後悔したら、いけない……」

「したっていいじゃないか。たった一度の人生なんだから、一度や二度後悔したって、誰も責めやしないって」

操の瞳から、つつつと涙が零れた。姉の涙など久しぶりに見た近藤は、流石に飛び上がった。

「ちよっ……。！　　みい姉！　　大丈夫か？　　俺変なこと言ったか！」

「……。勲、正直に答えて……。私を辞めさせたい？」

近藤はしばらく黙り込んで、控えめに頷いた。

「みい姉は頑張ってるよ。でも、危ないことに関わってほしくない。みい姉に任務を言い渡すとき……俺の心臓は潰れそうだ」

涙を流したままの笑みも綺麗だなと思ってしまった。

「貴方にはいつも心配かけて……申し訳なく思ってる。でもこれは、私が選んだ道だから……」

「分かってるよ。みい姉の道なんだ、みい姉が選べばいい。俺が決める術なんて、持たんよ」

新しい涙が、操の頬を伝う。近藤は慌てて、それを拭った。

「どうしたんだよお、みい姉……」

「勲……。お願いがあるの」

近藤の手に顔を寄せ、操は目を閉じる。

「私はこの先も、真撰組に居続けるわ。後悔なんかしない……、で

ももし私が血迷って、辞めたいなんて言い出したら、その時は……」

操は、笑っていた。

「私を殺してちょうだい」

近藤は、姉がなにを言っているのか、分からなかった。

「で……出来るわけないじゃん！　みい姉を殺すなんて……。冗談にもほどがあるよ」

「冗談じゃ、ないの」

「なくても、そんなこといつちや駄目！　俺は嫌だからね！　ぜったい嫌だからね！」

ムキになる近藤に、操は力無く笑う。

「……貴方を見守ることができれば……守ることが出来れば、それ

でいいと思ってた……。私も所詮は、女なのね……」

「みい姉は立派な女性だよ。綺麗な女だよ」

「……がと、勲……」

瞳が閉ざされ、体から力が抜けた。眠りについた操の手を布団にしまい、火鉢を消した。

枕元に置かれている翡翠のピアスを見つけ、手に取る。綺麗な品物だ。

彼女がこれをつけたのはいつからだったか、そうだ。副長助勤を、任されてからだ。

「みい姉……」

そつと部屋を出る。障子を閉めると、声を掛けられた。

「どうしたんだろうな、姉さん……」

土方が、縁側に座っていた。外は未だに雪が降り積もり、やみそうもない。

「あんなみい姉……。始めて見た」

「そんなに悔しかったのかねえ……。桂に逃げられたことが」

「さあなあ……。ああ、俺にみい姉を殺すなんて出来るわけないじゃないか。相変わらず無理を言うんだから」

隣に腰掛けた近藤に苦笑し、土方はタバコを取り出す。

「弟も大変だなあ」

「大変だともさ」

盛大なため息をつき、近藤は目を細める。

『貴方を見守ることができれば……守ることが出来れば、それでいいと思ってた……』

操の言葉を思い出す。言う通り、彼女はいつだって自分を見守ってくれた。早くに亡くした母親の代わりに、母親代わりであってくれた。

「俺も、みい姉に依存してるんだろうなあ」

真撰組を辞めてほしいと願いながら、そばにいてほしいと思う矛盾。結局操を縛っているのは、自分自身。

「依存してていいじゃねーか。大事な姉さんなんだから」

荒れていた土方にさえ、臆せず接した操。土方にとっても、大事な姉なのだ。

「ああ……寒いなあ」

「寒みなあ」

雪が降る。

願いが叶うなら、どうかこの大事な時間を、

大事な人を、

どうか何も、壊さないで。

終

## 許されない恋

(下) (後書き)

本当にすみませんでした…。こんな桂さんと操さんを読んでいただいてありがとうございます…。すぐに他の方の作品を読んで口直ししたほうがいいです。でないと胸やけが残ります…。

昨日「アニメージュ」と「アニメディア」を衝動買いしてしまいました。理由はもちろん表紙が銀さんだからです。銀魂スタッフ、私を金欠病で殺す気か!!

ノ、□、ノ

ガッシャーン!!

傷ついたカナリアは空に歌う（前書き）

「許されない恋」の数日あとのお話です。  
です。

万斉さんが子供っぽい

傷ついたカナリアは空に歌う

特にこれといった任務も仕事もなかったので、久しぶりに自分だけの時間を楽しんだ。

姫華と居たかったがあいにく姫華は任務の真っ最中。会いたくて抱きしめたくて、いい加減禁断症状が出てくる。

（拙者も、弱くなったでござるな）

昔は一人でいても平気だった。むしろ一人であることを愛して……。誰かと時を過ごすなんて考えていなかった。

「ん……？」

気休めにと登った小山から、歌声が聞こえてきた。遠いので聞き取

り辛いが、綺麗な声だ。

（姫華……？ いや、姫華の声はもっと高い……）

なんでも姫華と結びつけてしまうのは悪い癖。近づくとぐんと聞き取り易くなり、綺麗な声は旋律をつぐみ続ける。しかしこの歌、音楽がないのが些か淋しい。

万斉は近くの岩へ腰掛けると、三味線を取り出した。

ベン……

音を拾って奏でていく。声の主は山から突然沸いた三味線の音に驚いたように声を切ったが、すぐに歌いだした。

歌はしばらくして止んでしまったが、どうやら子守唄のようだった。

（面白い……）

万齊も暇だったので、遊んでやろうと思った。声の主が歌えるか分からなかったが、昔からある京唄を奏でてみる。

「…東は白かせ嵐山……」

完璧な歌詞が聞こえてくる。知っていたか、ならこれならどうだと新しい唄を弾いてみたが、声の主はそれすらも完璧に唄ってみせたのだ。

遊んでやるつもりが、逆におちよくられている気分になった万齊は、即興で緩やかな曲を弾き始めた。

この唄に歌詞などない。さあどうする、声の主。

「いつも貴方の背中を見ていた  
ただ真っ直ぐ突き進む」

脇目もしないで歩いていく  
貴方の大きな背中が好きだった」

驚いたことに、声の主も即興で詩を唄い上げたのだ。

「貴方を守りたくて  
でも私は弱いから  
必死に強くなった  
ただ貴方の隣にいたくて  
ただそれだけのために  
私は強くなった」

これは声の主自身のことを言っているのだろうか。切なく、悲しい  
詩だ。

「それでも私は弱いから  
貴方をおいていくかもしれない  
貴方には迷惑をかけた  
大好きな貴方を傷付けた  
淋しい思いをさせた  
どんなに辛い思いをさせても  
貴方は私の好きな道を選ばせてくれた

私は迷わない  
迷わない……はずだった」

声が不意にやんだ。恐らくまた聞こえてくるだろうと、撥はとめなかつた。

「後悔しないと  
あれだけ誓っておいて  
私は後悔してしまった  
愛してはいけない人を愛した  
許されない恋  
実らせるつもりはない  
でも苦しい  
こんなに苦しいのなら  
いつそ……」

小さなため息が、聞こえそうだった。

「貴方の手で、死に逝きたい」

撥を止め、立ち上がる。こんなにも切ない唄を唄うのは誰だろうと、

好奇心にかられた。

一度会ってみたい。そんな衝動が体を動かした。ガサガサと草をかき分けると視界が開け、ちよろちよると流れる小川が目についた。

その脇の岩場に、女が座っていた。

女は煙管をふかし、飛び出した万斉を何事かと見ていた。

「「あ」「」

同時にお互いを指差した。女は、近藤操だった。

「晋助の女」

ガッ！

指差したままそう言った瞬間、隣の木に小石がめり込んだ。小石を投げた姿勢のまま、操は低く言葉をつなぐ。耳のピアスが、揺れて音を立てた。

「誰がなんですって……？」

大きな華が描かれた着物の袂が、風に揺れた。

「なんでもないでござるよ……」

怖いなとぼやく。操は万斉の手に握られている三味線を見て、目を丸くした。

「まさか……弾いてたの貴方？」

「唄っていたのはお主であつたか」

やってしまったとばかりに、操は頭を押さえる。

「あの唄。忘れてちょうだい」

「最後の唄か？」

「全部よ」

操は煙管を吸い、細く吐き出した。

「成る程、背中の大きな貴方とは、近藤勲のことか」

要約されて、操ははっと目を見開く。

「ならば許されない恋、愛してはいけない人というのは、晋助のこと……」

操から殺気が滲み出てきたので、言うのは止めた。

「変に要約しないでちょうだい。やらしいわね」

ため息のように、煙を吐き出す。

「叶わない恋をした女の子を唄っただけよ。私とはなにも関係ないわ」

果たしてそうかと思う。だてに音楽プロデューサーとして働いてない。唄に秘められた思いは、よく分かる。

「晋助は、相も変わらずお主を気に入っているでござるよ」

よいしょと、操から離れた岩に腰掛け、控えめな曲を弾きだす。

「趣味悪いのよ。高杉は私より年下でしょう？　なんでこんなオバサンを気に入るのよ」

「オバサンには見えないでござるよ。鬼ばばは童顔で年を取らぬというもの」

「フォローしてるのか、けなしているのかどっちかにして」

煙管を逆さにし、火種を落とす。

「暇があれば、またお主に会いにいくと言っていたでござる」

「来るなって伝えてちょうだい。女扱いされるのはごめんよ」

フフ……と万斉から含み笑いが漏れた。

「近藤操、お主は意外と初心でござるな」

「意外って言った！　今意外って言ったわよこの人！」

苛立ち紛れに煙管で岩を叩く。カンツと乾いた音が響いた。

「意外でござろう。今まで何人の隊士を誘った」

「聞き捨てならないわね。彼等は仲間よ、今まで男に抱かれた経験なんてないし、接吻だって貴方の主が三人目だったわ。始めてにならなくて良かった」

万斎は撥を止め、ほおと感心したような声をだす。

「それは晋助も残念だったでござるなア……。ふうん、あれだけ男に囲まれていながら、未だ経験がないとは」

立ち上がり、三味線を背負う。

「お主を抱いた第一号となれば、晋助も喜ぶでござろう」

「そんなことになったら舌嚙み切って死んでやるわ」

「なら、拙者は？」

ずっと岩に登り、顔を近付ける。操は怯みもしなかった。

「抱く気もないくせに」

「どうして分かる？」

「貴方には恋人がいるんでしょう？ 名前も綺麗な……そう、姫華さん。浮気したら殺されちゃうわよ」

一週間、怪我をして連絡が取れなかっただけで怒られた。浮気などしたら、確かに殺されそうだ。

「……それもそうでござるな」

「残念でした」

操は立ち上がり、万斎から逃げるように小川の向こうへ飛んだ。

「私の純潔を渡す奴はもう決めてるの。まあ、あいつは抱いてなんかくれないだろうけど」

ふわりと髪を揺らし、煙管に火を付ける。

「あいつ以外に抱かれるのは真つ平よ。貴方にも、高杉にもね」

煙を吐き出し、笑う。

「……勇ましい女だと思ったが……、なかなかどうして、着物姿も優雅なものでござるな」

「それはどうも。褒めたって何もでないけどね」

ふふつと笑って、煙を吸い込む。

「また三味線聞かせてちょうだいな」

「お主が、唄ってくれるのならな」

操は少し迷ったそぶりをして、まあいいかと呟いた。

「それより、何故お主はこんな場所に？」

「貴方に会いにきたのよ」

万斉は絶句して、ぽかんと口を開いた。

「冗談に決まってるでしょ。傷心の一人散歩よ。仕事で嫌なことがあったから。仕事中でなくて良かったわ。必然的に貴方を捕まえないとまらないもの。今はそんな気分じゃないわ」

戦うための、刀もない。

「それは良かった。お主の実力はこの間嫌というほど体感した故…  
…。もうお主とは戦いたくないでござるよ」

「ふふ、それはありがとう。私は帰るわ。じゃあね」

踵を返し、歩み去る。

「では拙者も帰ろう」

互い背を向けて、立ち去った。お互いなにもなかった、そんな足取

終

り  
だ  
っ  
た

## 傷ついたカナリアは空に歌う（後書き）

「許されない恋」で盛大にどん引かせてしまった皆様、本当にすみませんでした。書き上げた自分でもどん引きましたもん…。（↑  
んなもん投稿するなよって言う…）

逢瀬

(前書き)

映画ももう少しですね！  
楽しみで夜しか眠れないです！  
(当たり前)

## 逢瀬

早く戻れと、何度自分に言い聞かせただろう。

それでも足は止まらなくて…、

胸の苦しみは、期待と罪悪感のないまぜ。

空を見上げれば、夕暮れに似合わないどんよりとした雲が広がっていた。

なにをしているんだろうと自問する。

綺麗に着飾って、わざわざ化粧までし直して……。

『明日の夕方、5時に北の香取神社で待つ』

見つかった彼を追いかけて、罅迫り合いになったときの、彼の囁き。

聞こえないふりをしたかった。なのに、心が躍った。

想いを伝えてから、二週間ともに顔を合わせていなかった。喜んでいる自分に、嫌気がさした。

そうだ、聞こえなかったことにして、行かなければいい。このまま回れ右をして帰ってしまえばいい……。

そう思っても、できなかった。

会ってはいけないうとどこかで思いながら、早く会いたいと思う自分がある。

「……あ」

人気のない、古びた神社。

その境内社の手前にある大木に、桂が寄りかかっていた。

操を見つけるなり、安心と喜びの混じった表情を浮かべる。

形容しがたい罪悪感が襲ってくる。二人きりでは、けして会ってはいけない男。

好きだと想いを伝えた、男……。

「来ないかと思った」

桂は嬉しそうに、操を抱きしめた。

ふわりと、包み込むように。

(……温かい)

優しい温もりが、胸の中の不安を溶かしていく。

この男から逃げられないのはこの男がこんなにも温かいからだ。

操は無理やり桂のせいにした。

そう、桂のせいだ…。

最早なにが彼のせいなのか分からなくなって、

操はそつと、彼の背に腕を回した。

彼の逞しい胸板からは、少しばかり早い鼓動が感じ取れていた。

ザア…と激しい雨の音が聞こえる。

そう広いとも言えない境内社の扉を開けて外を覗いた操は、ぽつりと呟いた。

「雨、やまないわね…」

その言葉は、同じく中にいる桂にかけられたもの。

「これじゃ帰れないわ」

「ならば、帰らなければいい」

気配が近づき、そつと後ろから抱きしめられる。操は扉を閉めて、桂の胸に頭を預けた。

雨が降る前に、帰ればよかったのだ。

なのにずるずると、もっと一緒にいたいという素直な想いに負けて、こんな時間になってしまった。

屯所の人間には適当なところで飲んでくると伝えておいたから、帰りが明日になっても怪しまれはしないだろう。

（そんな問題じゃないのに…）

早く帰らなければ、もう二度と離れることができないのではないかという不安が、胸のどこかにあった。

「貴方、甘え上手ね」

十分以上の沈黙の後、口を出たのはそれだった。壁によりかかって座った桂は、足の間に操を座らせて後方から抱きしめている。ときおり肩に顔を預け、すり寄ってくる桂に正直に思ったのが、

「貴方、甘え上手ね」

だった。

「そうか？」

「そうよ」

二人の間に、長い会話はない。

桂はただ、操を抱きしめているだけだった。

操は温かくて、柔らかかった。最初は抱きしめられることに緊張していたのか、その細い体は強張っていたけれど、それがふつと力抜けて自分に身を任せてくる瞬間が、たまらなく好きだった。

「お前はいい匂いがする」

「…匂い？」

「香でもつけているのか？」

いいえと首を振られる。ならばなんの匂いなのか、桂は不思議でたまらなかった。

「温かくて柔らかくて、甘い匂いだ」

落ち着く…と腕に力を込めると、操が顔を赤くしたのが分かった。耳が真赤だ。

「貴方は…」

何かを言いかけて黙り込む。

「ん？」

「なんでもないわ」

全体重を桂に預け、すり寄ってくる操の額にキスを落とせば、彼女はくすぐったそうに身をよじる。その細身を逃がすまいと、桂は抱く腕に力を込めた。

目を覚ますと、意外にも逞しい腕が体に絡んでいた。

頭上では桂が呑気に寝息をたてており、彼に抱きしめられたまま、眠ってしまったことを思い出す。

（いま何時かしら……）

あまり長く屯所を空けては怪しまれる。絡みついている桂の腕からなんとか逃げ出し、境内社の立てつけの悪い扉を少し、開けてみる。

外は晴れていた。

憎らしいほど青い空が、地面にできた水たまりに移りこんでいる。濡れた地面に反射する太陽の光が、眩しかった。

（帰らなきゃ…）

帰らねば、いけないのに。

「う…」

桂が小さく呻いて、操は扉をしめた。桂は眠そうに薄眼を開いて操を見上げる。

「おはよう」

声をかければ、

「…おはよう」

子供のような口調で返ってくる。寝むそつに眼を擦った桂は、おいでとばかりに腕を伸ばした。操がその手を取れば、ぐいと引きよせられて抱きしめられる。

「…雨はやんでいたか？」

やはり眠いのか、言動がたよりない。操は桂の着物を掴んで、そつと寄り添った。

耳を押し付けた胸板からは、穏やかな鼓動が聞こえてくる。

帰らな、ければ…。

「いいえ。まだやまないみたい」

貴方と共にいられるのなら、

いつそ雨なんか

やまなければいい。

終

## 変わらない日常（前書き）

最近、桂さんと操をイチャイチャさせすぎたので、真撰組の話に戻しました。短いです。ごめんなさい…。

## 変わらない日常

「副長―、そろそろ起きて下さいね―」

廊下から、優しい声。毎朝彼らを起こすのは操の役目。

「局長―？ 起きてますー？」

襖を開ければ、局長である近藤はいまだ布団に突っ伏している。

「きょく……。ああもつ。勲、起きなさい勲！ 申し送りはじまつちやうでしょっ？」

「う……。あと一時間」

「長いわよ」

厳しい突っ込みを入れ、襖と窓をすべて開け放つ。まぶしい光が、部屋に差し込む。

「う……」

「起きなさいったら！ もう」

「おはようござ。みいさん」

ひょこりと現れた沖田に、操は目元を和ませる。

「おはよう、総悟君。貴方は寝起きがよくて本当にいい子ね」

よしよしと頭を撫でられ、へへっと笑う沖田。いまだ布団で丸くなっている近藤を見て、目を丸くする。

「ありゃ、まだ起きてないんですかい？」

「そうなのよ。なかなか起きないんだから……」

「じゃあ、近藤さんは俺が起こしまさあ」

「あら、お願いできる？ もう一人起こして来ないといけないから」

「はい！」

弟を彼に任せ、土方の部屋へ。土方を沖田に任せると十中八九爆発が起きるので、彼が近藤を起こすと言ってくれてよかった。

土方も案の定布団に沈んでいて、寝起き悪いんだからと息をつく。

「トシ君、おはよう」

「……おはよう」

「起きて。申し送りはじまっちゃっわよ」

「おーう……」

寝むそうに返事をしつつも、体を起こす土方。目下には、小さな隈。

「ねみい……」

「お疲れ様。昨日も遅かったんでしょう？　申し送り終わったらもう一回寝て……」

「ぎゃあっ……」

そう遠くもない場所で悲鳴が聞こえ、操は押し黙る。

「……なんだ？」

「今の、勲？」

あとから聞けば、なかなか起きない近藤に、沖田が面白がってダイブしたそうだ。

終

## 変わらない日常（後書き）

劇場版銀魂観てきました！ 面白くてかっこよくて、もう鼻血が出るかと思いました。（笑）

あのスタートの仕方は、流石銀魂です。

娘（前書き）

今週のジャンプのお登勢さんかつこよかったです！！  
夫なのかな…。 動いて大丈夫

娘

すれ違い様に、バッグをとられた。バイクだから一瞬のこと。だからって、逃がしなどしない。

「待てえええ！」

鬼の形相で追い掛けた。とはいえ、やはり人の足ではバイクには追いつけない。

ふと……

「りゃっ！」

路上から飛び出した女が、バイクを運転していた男に飛び蹴りをくわえた。バイクは横転し、土煙をあげる。

宙を舞ったバッグは計ったように彼女のもとへ落ちてきた。

「日本の宝であるお年寄りからひったくろうなんていい度胸じゃないの。女性だからってナメんじゃないわよ」

追いついた彼女の背中からは、危機迫るものを感じ取った。

「お母さん、お怪我は？」

「あ、いや……。ないよ」

不意に振り向かれて声をかけられて、声の上擦ってしまった。

「はいこれ。大事なバッグ」

「ああ、ありがとうね」

にこりと笑う女に、お登勢は見覚えがあった。

「……アンタ」

「このアマ！」

跳ね起きた男が、尖ったバイクのかけらで襲いかかる。女は軽々とその手を掴んだ。

「女だからってナメんじゃないわと言ったはずよ」

それは甘い囁き。女は足を振り上げて男の顎を掬い上げるように蹴りあげた。

宙に浮かんだその腹に、容赦ない蹴りを喰らわせる。避ける態勢にあるわけもなく、男はもろに喰らって吹っ飛んだ。

「女の敵は私の敵。女性を大切に出来ないのなら、滅びろ」

冷たい言葉に、成り行きを見守っていたギャラリーが拍手を送る。  
女は照れ臭そうに頭をかいて、やって来た同心に男を渡した。

「お騒がせしました」

振り向いてにこりとする女に、お登勢はぼかんとしたまま、ああと頷いた。お登勢の周りにも最強と呼べる女性は存在するが、それは天人やカラクリの話であって……。生身の女性がこんなにも強いなど、知らなかった。

「……アンタ、真撰組の近藤操だね」

「あ、はい。いつもお騒がせしております」

「アンタのことはよく新聞で見るよ。どんなお転婆娘かと思ってたら、こりやなかなか、頼もしいねえ」

操は嬉しいのか、また頭をかいてありがとうございますと言った。その手に血が滲んでいるのを、お登勢は見付けた。

「アンタ、怪我してるじゃないか」

「え……、あ。本当だ」

いつついたんだろうと、操は不思議そうだ。

「アタシん家においで。お礼といっちゃなんだが、手当てしてあげよう」

「いえ、でも……」

「いいからおいで。ババアの好意は受け取っとくもんさ」

言われて、操は大人しく頷いた。

「ああ、アタシや寺田綾乃。まあ周りの奴らにや、源氏名のお登勢で通ってるけどね」

「お登勢さ……、あれ？ 万事屋の旦那の……」

呆然と呟かれて、お登勢は知ってるかい？ と首を傾げて見せた。

「走ってるバイクに飛び蹴りくらわすたあ、度胸のある娘だねえ」

「お恥ずかしい限りです……。でも、女性に危害を加えようなんて考える男には、痛い目みせるのが一番なんです」

スナックに帰って、操の手当てをしてやった。差し出された彼女の腕は細く、どうしたらこんな細腕で刀を振り回せるのか不思議で仕方ない。

「ふふ。アンタ、男は嫌いみたいな言い方してるけど、ホントは違うんだろ」

「そりゃ、男性の中で働いてる身ですし……」

「いるんだろう、男も……。アンタみたいなタイプだと、年下かね」

途端に、操の顔が真っ赤になった。素直な娘だよと、お登勢は内心で笑う。

「ど、どうして分か……」

「こんな美人な女を、男共が見向きしないわけないさね。あとは勘、年の功ってやつかね」

操の顔はまだ赤いままだ。

「はい。終わったよ」

「ありがとうございます」

「強いのはいいけど、体は大事におしよ。アンタがいくら強いからって、怪我ばかりしてちゃまわりの奴らの心臓がもたんよ」

「はい」

頷いてから、操は店内を見回した。

「素敵なお店ですね」

「そうかい？ ただの小さくて小汚い店だよ」

そういつて笑ってから、お登勢はあつと気付いたように、

「アンタも休みの日にゃ、呑みに来てくれたっていいんだよ」

「えっ、私ですか」

「ああ。男数人連れてきてくれりゃ、嬉しいねえ」

悪戯っぽい口調にその意図を見いだしたのか、操はくすくすと笑った。遠回しに、客を連れてこいというのだ。

お登勢も、まるで悪戯を考えた子供のように、釣られて笑った。

数日後、

「こんばんは。お登勢さん」

店に現れた操に、やっぱり来たねとお登勢は笑った。

「やあ。いらっしやい」

「先日はお世話になりました。お礼といつてはなんなんですが、部

下を数人……」

「あははっ。律儀だね、ちゃんと連れてきてくれたのかい？」

操の後ろには、私服姿の男たちが、数人いた。操率いる九番隊のメンバーだ。

「今夜は千客万来だね。とびきりの酒出さないと」

この夜、操の部下が飲み過ぎて暴走し、上司にこっぴどい説教を食らったのは内緒の話。

「っづあ……。頭イテエ」

その日の朝、こりもせずに酔っぱらって店に入ってきた銀時は、重い頭をカウンターへ落とした。まだ準備中だったお登勢は、仕方なさそうにため息をつく。

「まったく飽きもせずにこの男は。酒呑んでねーでちったあ働けつてんだよ」

「酒提供してるババアに言われたか……」

むっとして顔を上げた銀時だったが、お登勢の顔を見て黙り込んだ。

「……ババア？」

「あん？」

「……いいことあったか？」

お登勢はくわえた煙草に火をつけ、分るかいと笑った。

「あたしにね。また娘が増えたのさ」

天人でも、カラクリでもなく……。

強くて美しい、人間の娘。

終

娘（後書き）

最近ぐだぐだです。小説も、私自身も…。

## 簪（前書き）

「逢瀬」の数週間後のお話です。  
せつかく玉兎さんがかつこいいと言ってくれた桂さんに、とんでもないことをしています…。

簪

『またね』

彼女はそう言って、名残惜しそうに振り返りながら己のいるべき場所に戻っていった。

桂はすぐにその場を離れることができなかった。

逢瀬の場となった境内社には、操の匂いが残っていた。

もう少しだけここにしよう、足を踏み出したとき、足袋をはいた足が何かを蹴った。

確認すると、それは碧色の飾りがついた、銀の髪飾りだった。

彼女の持ち物だろうか。

揺らしてみると、飾りが揺れてしゃらしゃらと音を立てる。

落としていったのは、この胸を貫く刃の代わりか…。

桂はしばらく、簪を揺らして遊んでいた。

似たものは数あれど、購入しようという気は起きなかった。

何日か前に大事な簪を無くしてしまっただらしく、どこを探しても見当たらなかった。

最後に手にした日も思い出せない。

副長助勤の仕事を与えられた時の、祝いの品。

任務の際は、お守りとして懷に忍ばせていた。

それほど思い入れは深く、ほかのものを付ける気にはなれなかった。

目の前に並ぶ、輝かしい簪や髪飾り。

似たようなものを手に取ってみたが、やはり買う気は起きない。

久しぶりに着た縹色の着物にも、合いそうにない。

「それがほしいのか？」

ハスキーな声をかけられ、顔をあげた。そこには、蒼い着物を纏い、片側で髪を結んだ、大きな女がいた。

「……！」

流石にびっくりして数歩後ずさる。女性にしては背の高いほづの操だが、自分より背の高い女性は見る機会が少ない。

「やあ」

軽いあいさつに、柔らかな笑顔。釣りあげられた口元に操は見覚えがあったが、“彼”とつながるまで数秒あった。

「……こた……！」

「しいっ！」

叫びかけた操の口をふさぎ、鋭い音を出す。ここで言わせまいとするのは、やはり肯定なのだ。

「な、なにしてるのよー！」

手を振り払って、小声で話す。

「小太郎！」

正体を暴かれたヅラ子こと桂小太郎は、にっこりと笑ってみせた。

「変装だ」

「それは女装っていうの！ ばれたらどうするのよ！」

「そう簡単にはばれぬ」

何故こんなにも平然としていられるのか、彼曰く変装している本人よりも操のほうが周りを気にしてしまう。

「どうして…」

「お前とは二週間も会っていなかったろう？ 会いたくてたまらなかつたんだ」

さらりと言われ、操は顔を赤くする。

「だからってこんな人通りの多い場所で…」

「…操は俺に会えて嬉しくないのか？」

置いてきぼりにされた子供のような顔をされるので、操はぐっと押し黙る。

「う、嬉しいに決まってるでしょう。でももし…」

「おっ、姉さん！」

言ったそばから、土方が元気よく手を振って歩いてきた。巡回中のだろうが、操はこれを一番恐れていたのだ。

「と、トシ君…」

しどろもどろになってしまふ操に、桂はそつと耳打つ。

「大丈夫。自然のままでいろ」

「でも…」

そつこうしているうちに、土方が歩み寄ってきた。

「買い物かい？　姉さん」

「え、ええ！ 買い物！」

ばれないか心配で、声が上ずってしまっ。

「トシ君は巡回中…？」

「そう、総悟の奴またさぼりやがっ…お？」

操の後ろに控えていた桂ことヅラ子を見て、目を瞬かせる。

「悪い。友達と一緒にだったか」

「え、ええ…」

「はじめまして」

につこりと桂が笑って見せると、土方はどうも、と頭を下げた。

「じゃあ俺仕事戻るわ。途中総悟見つけたら戻るように言ってくれ」

「分かったわ」

「んじゃ、お邪魔しました」

もう一度桂に頭を下げ、土方は仕事に戻っていった。

操は土方が見えなくなるまで笑顔で手を振り、見えなくなった時点で盛大な溜息をつく。

「…意外とばれないものなのね…」

「だから大丈夫と言ったろう？」

「言っただけど…」

よくよく見上げてみれば、確かに一瞬では男とは分らない顔立ちだ。着物が覆い隠す細い体も、幸いしたのdarou。

「それにしたって…」

悔しくなつて、ぐいぐいと彼の髪を引っ張つた。

「なんで私より綺麗なのよー！」

「いてて…。これ、髪を引っ張るでない」

そうしてふざけ合って、ふとした瞬間に視線が重なる。

「…会いに来てくれたことは、嬉しい」

そつと視線を離し、うつむく。掴んだ髪はそのままだ。

「でも無理はしないで。正体がばれたら不利になる…」

「そうだな。それにこの姿では、お前に口づけもできやしない」

操は顔が熱くなるのを感じ、それを反らすように桂の髪を解放する。

そしてその手を引いて、歩き出した。

「操。髪飾りは買わなくていいのか？」

「いいの。ただ見てただけだもの」

そのままてこてこ、街中を進む。傍から見れば、背の高い女性二人が一緒に散歩しているようにしか見えない。

「…大事な簪をね、なくしちゃったの」

ふと口を開いた操に、桂は視線を向ける。

「新しいの買おうかと思ったんだけど、どうしてもあの簪の代わりにはできなくて…」

「…誰か、男に貰ったのか？」

「え…。まあ…。さっきのトシ君と、勲と、総悟君にね。副長助勤就任のお祝いに、三人がプレゼントしてくれたの。いつも身につけ

てた…。任務の時も、オフの日も…」

操が悲しそうに目を伏せるので、桂は覗き込もうと、頭をもたげる。

「これは、私と貴方をつなぐ鉄枷」

彼女の耳に揺れるのは、桂が送った翡翠のピアスだ。

「あの簪は、私と真撰組を繋ぐ鉄枷だった…」

桂は空いている手で、懐を探った。そして俯く操の髪に、何かをぐさり挿し入れる。

「!!!?」

驚いて桂の手を離し、頭に触れた操は、己の髪に器用に留まっているものに触れて、思わず己の姿をショーウィンドウに写した。

なくしたはずの簪が、どういっわけか下ろした髪の中で光っていた。

「うそ…。私の簪…！」

思わずひきぬく。碧色の飾りがついた銀の簪は、間違いなくした簪だった。

「この間の境内社に落として行つた。男から貰ったものなら捨ててしまおうかとも思ったんだが、仕方ないな」

桂なりのやきもちだったのだろう。嬉しそうに自分を見上げる操の瞳に涙が溜まっていたので、桂は流石にとび跳ねた。

「おい…」

「ありがと…。もう戻ってこないかと思ってたの…。嬉しい…」

大事そうに簪を胸にあてる操に、桂は返してよかったなとつくづく思った。こんなにも、喜んでくれるのなら…。

「結ってみてくれ」

「え？」

「それで結び上げた姿を、見せてくれ」

操は少しだけ顔を赤らめ、簪をくわえて、髪を纏めた。

そして口から簪を取ると、魔法のように結び上げた。

「…どう？」

「綺麗だ」

まとりきれずに飛び出た髪をそつと耳にかけてやって、桂はそう言った。

操は更に顔を赤くして、逃げるように早足で歩を進めてしまふ。

桂は慌てて、操の後を追った。

「夢をね、見たの」

人気のない土手を歩きながら、操は呟いた。

「ん？」

「戦なんか、これっぽちもない世界で、勲は真撰組って名前の道場を開いてた。：私はその手伝いで、旦那はいつもどおり万事屋を、貴方は誰かと一緒に、呉服屋をやってた」

「また酔狂な…。誰かと一緒に、誰だろうな」

クスクスと、桂は笑う。あえてしている口元を隠す仕草は、女のそれに他ならない。

「松光殿じゃないかしら。髪は灰色だったけど…」

思い出すように空を見上げた横で、桂は足を止めた。

「…どうしたの？」

「いや…。幸せな夢だな…」

「ええ、幸せだった…」

二、三歩歩を進め、操は足を止める。

「夢のように、貴方と幸せに暮らしたい…。もし貴方がいいなら、私は真撰組を止めて、貴方と……」

言いかけた操の唇に、桂はそつと人差し指を置いた。

それ以上言つなというのだ。

この姿でなければ、桂はキスをして塞いでいたことだろう。

「バカを言うな。俺は真撰組隊士であるお前に惚れたんだ」

「…真撰組を止めた私になんて、興味ない？」

「そんなわけないだろう。お前が真撰組の肩書きを失えば、俺はお前を連れ去ってどこまでも逃げよう。俺はお前を手放せない。だからこそお前に、真撰組隊士でいてほしい」

桂は柔らかく笑い、操の頬をそつと撫でる。

「お前が真撰組でいてくれるから、俺は世界を変えようと思えるんだ」

「私は貴方の鉄枷？」

「悪く言えばな。よく言えば、夢への道筋だ」

「……ひどい男、私は貴方がいてくれたから、真撰組を続けられたのに」

すっと手を伸ばし、桂の頬を撫でる。

「お互い様だこの天女め。お前がいなければ、俺はこんなに夢中にならずにすんだのに」

「始めて会ったとき、私にキスした貴方がいけないのよ。あの時から、私は貴方のものだった」

愛おしそうに操の手にすり寄り、桂はその手に己の手を重ねた。

「…操。俺たちのことなんだが、兄さんにだけは、話した…」

操の目が、見開かれる。

「兄さんは信頼できる。絶対に他言することはない…。俺一人だけの胸の内に、秘めておくには重く…！」

「小太郎」

思わず感情的になりかけた桂を、操は静かに宥める。

「分かってる。…私たちだけで胸の中にしまっておくには、荷が重すぎるもの。誰か知ってくれている人がいるというのは、思いの最大のはけ口になる」

操は手を下ろして、静かに笑った。

「貴方のお兄さんだもの。私は嫌われてるだろうけど、大事な貴方

を陥れようなんて考えないわ」

「…嫌われて…いるのか？ 兄さんはそんなこと言ってなかったぞ？」

子供のように首を傾げる桂に、操はばかね、と笑う。

「松光殿のお父様を処刑した幕府側の人間よ、私は…。笑ってこそいえど、心の中では憎らしく思っているに違いないわ…」

「みさ…」

「正直ね、貴方との関係がバレて、一番怒るのは松光殿だと思ってた…。大事な弟を、幕府側の人間に取られて黙ってるわけないだろうな…。って。本当は貴方にだって、恨まれても仕方ない立場なのに…」

桂は暫く絶句してうつむいたあと、そっと操の手をとった。

「お前が先生を処刑したわけではない。…そうだろう?」

「そうだけど…」

「なら頼むから、そんなことを言わないでくれ。兄さんだって、恨むのは止めたと言っていた」

「恨むのを止めるのと許すのは違うわ!」

声を荒げて、操は桂を見上げる。

今にも泣き出してしまいそうな顔だった。

「恨むのは簡単…。でも許すのは、簡単なことじゃない…!」

「その簡単ではないことを、兄さんは今やろうとしてる。兄さんは俺らの関係を認めてくれてる……」

取り乱しかけた操の頬を、そっと撫でる桂。操は言葉を無くして、桂を見上げている。

「だから、兄さんを信じてくれ……」

「……分かったわ……」

こくりと小さく頷いた操に安心したのか、桂は薄い笑みを浮かべる。

「なにかあったら、兄さんに……。伝達役になってくれる」

「ってことは、万事屋に出入りしてるわけね。貴方は」

意地悪く笑って言えば、内緒だぞと笑みが返される。

まるで悪戯を考えついたかのように可笑しくなって、二人でクスクス笑った。

「では、俺は帰ろう。今日はお前に会えて良かった」

桂の言葉に操は寂しそうな笑みを浮かべる。握ったままの手は、離さない。

「また会える？」

「もちろんだ。お前が待っていてくれるなら」

嬉しそうに満面の笑みを浮かべた操に、桂はしばらく固まって、自嘲する。

「やはりこの姿で来るものではないな。キスをしたいのに耐えなければならぬとは、一体どんな拷問だ」

「冗談が面白いこと」

冗談ではないぞと言い、桂は操の手に口づけた。

「またな」

「ええ、…気をつけてね」

名残惜しそうに手が離れ、桂は背を向けて歩いて行った。

時折振り向く桂に手を振って、操は小さな笑みを浮かべたまま、見送っていた。

「お友達ですかイ？」

「きゃあっ！」

いきなり声をかけられて、心臓が飛び出るかと思った。

慌てて振り向けば、額にいつもの赤いアイマスクをつけた沖田がしよぼつく目をこすっていた。

「すいやせん、脅かしましたかイ？」

「そ、総悟君！　いつからいたの？」

「今でさあ……。あつちで昼寝してたもんで……」

眠いのか、くわっと大きな欠伸をする。

どうやら、聞かれてはいないようだ。

「新しいお友達よ。田舎から出てきたんですって」

「ありや。そりゃあ大変だ……」

どうにも眠いらしく、言動が頼りない。

操は己と対して背の変わらぬ沖田の顔を包んで、悪戯っぽく笑った。

「まあた仕事サボったわね。この悪戯っ子」

「このへんパトロールしやしたもん」

にかりと歯を見せた沖田に、操も笑う。

「帰りましょうか。トシ君怒ってるわよー」

「その時や、みいさんフォローお願いしやす。みいさんから何か言われりや、流石の土方さんも何も言えやせん」

「うわ、大役任された！」

ふざけ合いながら、土手を進んでいく。

手を繋いで仲良く帰路につく二人を、桂は微笑ましそうに、見送っていた。

二人の姿が見えなくなったあと、桂もアジトに帰ろうと、歩を進めた。

歩きながら、片側で結っていた髪紐をほどく。

さらりと流れる髪を払い、手の甲で口紅を拭い去る。

少しずつ、ヅラ子から桂小太郎に戻っていく。

無性に操に会いたかった。

会って、あの笑顔を向けて欲しかった。

出来ることなら、ここから連れ去って、自分しか手の届かないところへ連れて行って…。

「馬鹿だな。俺は…」

恋心に踊らされ、抗えない自分がもどかしい。

折れかけの筆で、この恋をなかったことにしようとした。

操と出会った運命を、少し変えようとした。

だが出来なかった。

出来上がったのは、

歪な喜劇だけだった。

終

## 簪（後書き）

まさかヅラ子にして出すとは…。

桂さんの恋のイメージソングは、ポルノグラフィティの「ジョバイロ」です。引用ばかりになってしまいましたね。（泣）

急なのですが、5月のスケジュールがドタバタ過ぎて、そしてネタが底をつきかけているので、しばらく操話の更新をお休みします。

スケジュールをやつついたら、そしてストックがたまったらまた戻ってきますので、その時はまたよろしくお願いします。>（―――）

<

## ミイラ取りがミイラになる（前書き）

操話も帰ってきましたー！ 月曜に投稿した松光の話があまりにも重かったので、こっちはほのぼの系です。

## ミイラ取りがミイラになる

凍えそうな、寒い朝だった。

冷たいすきま風に首をすばめながら廊下を進み、近藤はある部屋の  
ふすまをあける。

「やあ皆。おはよう！」

「おはよう、近藤さん」

「おはようございます」

部屋にいた隊長格が、口々に挨拶してくれる。朝恒例の申し送りの  
時間。忙しい隊長格が必ず集まる、唯一の時間…。

「ちょっと早いが、申し送り始めようか」

「あ、まだ操隊長が…」

来てないぞと、土方が言う。彼が操を「姉さん」ではなく「操隊長」と呼ぶのは、副長の立場で話す時だ。仕事とプライベートを一緒にしない、彼のこだわり。

「あれっ、来てないの？ 珍しいな」

いつもは早くこの場所に姿を現す操が、今日は来ていない。なにかあったのだろうか。

「昨日仕事で…、帰ってきたの夜中だったんすよ。もしかしたらまだ寝てるのかも…」

十番隊隊長の原田が教えてくれる。近藤はそうかそうかと何度か頷いた。

「開始まで時間あるとはいえ…よし、俺が様子を見てこよう。ちょっと待っててな」

起こされることはあっても、起こすことなど滅多になかった。

いつも誰よりも早く起きて、誰よりも遅く寝て…。

思えば、姉の寝顔を見る機会など物凄く少ないんだなと呑気に思いながら廊下を進み、姉の部屋の襖を叩いた。

「みい姉ー！ おはよー、起きてるかーい？」

返事が無いので、そっと襖を開けてみる。

綺麗に掃除された部屋の、真ん中に敷かれている布団の中で、案の定操は寝息を立てていた。

「みい姉ー、朝だよー。起きてー」

襖を全て開け放って朝日を取り込んでも、操は一つ唸って背を向けてしまう。

「おい、みい姉ー」

呼んでも、操は相変わらず寝息を立てている。よほど疲れているのだろうか。

（にしても…）

寝ている姉も、綺麗だなと思う。

切れ長の双眸は閉じられ、紅を塗ったように朱い唇は薄く開かれて呼吸を繰り返している。近藤の大好きな長い黒髪は枕に広がり、艶っぽさを引き立てている。

本当にこの美人が、自分の姉なのか。時折心底疑いたくなる。

（あ、見惚れてる場合じゃなかった…）

ここに来た目的を思い出し、姉の布団をべしべしと叩く。

「おい、みい姉ー！」

「…うっ…」

鬱陶しそうに唸って仕方なく目を開けた操は、自分を起こした近藤をぼうつと見上げ、一瞬の空白のちに至極幸せそうに笑った。

「珍しいわにえ…、あなたが私より先に起きるなんれ…」

眠いのか、言葉が頼りない。

「珍しいのはみい姉だよ。寝坊するなんて」

「寝坊？ いま何時…？」

「もうすぐ8時」

「8時…！？ なんれ？ なんれ目覚まし鳴らないの…」

枕元の、可愛らしい猫の形をした目覚まし時計。短針も秒針も、  
3  
を指して動きを止めていた。

「鳴る前に力尽きたみたいだね」

要は、電池切れ。

「…寝る前は動いてたのに…」

恨みがましく呟いて、ぼふりと枕に顔を埋める操。どうにも眠くてたまらないらしい。

「…今日は冷えるわね…」

寒さで布団から出たくないのか、ぎゅっと縮こまってしまっ

「そうだね。早めにコート出しておかないと…」

「…いしゃお…」

呼ばれて、未だに沈んだままの姉を見下ろす。操はちょいちょいと指で手招きした。

「…いらっひゃい…」

「なんだい？　どうかし…」

近づいてきた弟の腕を掴んだ操は、そのまま近藤を布団の中に引きずり込んだ。

「うわあ!？」

驚いて、近藤が悲鳴に近い声を上げる。操はそれを、半分以上寝呆けた頭で聞き流す。

「み、みい姉！ 起きないと、申し送り始まっちゃうよ!？」

ずぼつと必死に布団から顔を出した近藤だったが、姉にすりよられ、言葉を飲んだ。

「貴男はあつたかいわね……」

腕に抱きつかれて身動きがとれないまま、しかし姉の温もりは伝わってくる。

（ああ、…つたけえ）

疲れが溜まっているせいか、ついうとうとしてしまう。

また寝入ってしまった姉を見ながら、夢の中に引き込まれていく。少しなら、ちょっとくらいなら…。

寝ても許してよ

起こさないでよ

のんびり思って、近藤は意識を手放した。

「……ミイラ取りがミイラですかイ？」

数十分後、姿を見せない姉弟を不思議に思っ、土方と沖田が様子を見にきた。

光の差し込む中、顔を合わせて眠る二人は微笑ましく、起こすのも躊躇われる。

「仕方ねエ。二人抜きで申し送りしちまうか。たいした連絡もねえだろうしな」

「そうですねイ…」

返事した沖田がごそごそと懐を探るので、土方は少し黙り込んだ。やがて沖田が取り出したのは、Sのストラップがついたデジカメ…。

「なにやってんだ、オメー…」

「あんまり幸せそうなんで、残しとこうと思って」

パシャリとフラッシュが光り、沖田はデジカメにおさめた二人の寝顔を見て、にまりと笑う。

「…俺にも焼き増ししてくれ」

「やでさあ。何で俺が土方さんの為にわざわざ焼き増ししなきゃいけないんですかイ」

憎まれ口を叩いた沖田に、土方は額に血管を浮かせつつも、大好きな姉弟のためにそつと襖をしめた。

申し送りも、

自身は寝に来たのではなく起こしにきたのだということも忘れて、

呑気に眠る姉と顔を合わせて寝息を立てる近藤は、

至極、幸せそうだった。

終

## ミイラ取りがミイラになる（後書き）

劇場版銀魂での近藤さんの扱いは非道いと思います…。かつこいいんだから全裸で素振りなんかさせなくてもいいじゃん…。（泣）

感想下さい！

続・ミイラ取りがミイラになる（前書き）

「ミイラ取りがミイラになる」の続きになりました。ちなみに来週  
のよりぬき銀さんは、「ミイラ取りがミイラに」らしいです。  
キヤー、偶然！、（ ）ノ

## 続・ミイラ取りがミイラになる

操が起きたのは、30分後のことだった。

目の前にある弟の暢気な寝顔をぼんやり眺めて、ふわふわと何やら幸せそうに笑ってから、弟の腕に抱きついて目を閉じる。

変わりに目を開けた近藤は、目の前にある姉の幸せそうな寝顔を見て微笑んだ…。

が…。

己が何をしに来たのかを思い出し、がばりと顔を上げる。

「いけねー！　　みい姉！　　仕事ーお！」

「…五月蠅いわね…」

「起きてみい姉！ 仕事！」

腕に抱きつかれているので体を起こすことが出来ず、止まっていることを忘れて確認した目覚まし時計が3時15分をさしているのに気付いて、姉の腕を振りほどいた。

「ぎゃあああ！ もう3時ー！ 寝過ぎた！ 申し送り！ 仕事おー！」

「朝から騒々しい…」

「起きてみい姉！ 仕事しなきゃ！」

「私きよう非番…」

「って俺だけええ！ やべえー！ 仕事ー！」

どたばたと騒がしく部屋を飛び出す弟を体を起こして見送った操は、やはりまだ眠いのか、ばふりと布団に倒れ込んだ。

「眠い……」

「トシーー！ すまねえ！ 仕事！」

ばたんと襖を開けると、文机に向かっている土方がのんびりと振り向いた。

「よう、起きたかい？」

「すまねえトシ！　つい長時間寝ちまって…」

「長時間？　30分しか寝てねえよ？」

不思議そうに顔を上げる土方につられて時計を見れば、時計は8時半をさしている。

慌て過ぎて目覚まし時計が止まっていたことを思い出せない近藤は、ぽかんと口を開く。

「あれ？　タイムスリップした…？」

「は？ ああ、申し送りは終わらせただ。大した連絡も無かったから、あとで資料見といてくれ。姉さんの代わりは、九番隊の設楽に出してもらった」

「あ、うん。ありがとう……」

やっちゃったと頭を押さえつつ何気なく土方を見ると、彼が処理しているのは本来なら自分がやらなければならぬ書類だった。

「あ、トシ……それ……」

「ああ、変わりにやってるぜ。折角だから近藤さん、今日は休めよ。本来なら非番の俺と、交代」

「あ、いや……だが……」

「非番が重なるなんて滅多にないんだからよ。姉さんと、デートで

も行ってきたらどうだ?」

戸惑う近藤に構うことなく、土方は書類をさばいていく。

「構うこたねえよ近藤さん。明日は仕事、変わってくれよな」

煙草をくわえたままにかりと笑う土方に、近藤は有り難く、甘えることにした。

「みい姉とデートなんて久しぶりだな……」

どちらも局長と隊長という立場のため、忙しくて休みの日が重なるなんてことは滅多にないのだ。

毎朝申し送りで顔を合わせることは出来るが、構って貰えないと、些か寂しい。

「よしっ！ 今日を楽しむぞー！」

意気込んで、つい姉はまだ布団に沈んでいるのだとばかり決め付けて、勢いよく姉の部屋の襖を開けた。

「みい姉〜！ 今日はデー…」

操は確かに布団の上にいた。

座り込んだまま浴衣の袖を抜き、下着をつけているところだった。

「んっ？」

不思議そうに操が振り返り、近藤は開け放った時と同じ勢いで襖を閉めた。

「わー！！ ごめんなさい！」

「本当に騒がしいわよ勲！ 少しは静かになさい」

室内から叱責が飛び、近藤は襖に背を向けて息をつく。

「うめん…」

「なにか用？ あなた仕事は？」

「ああ、トシが変わってくれて、今日は非番になったんだ。だから  
みい姉をデートに誘おうと思って」

襖ごしに会話していると、一瞬間の間あと、襖が開かれた。

「貴男とデート!?!」

至極嬉しそうな操が出てくる。そう、と振り返った近藤だったが、  
着替え真っ只中の姉の姿を見てしばんと襖を閉めた。

「みい姉少しは魅力的な女性だって自覚持つてー!」

半分泣き出しながら叫ぶ近藤に、襖の向こう側から至って冷静な声  
が届く。

「相変わらず初心ねえ…。いいじゃない、減るものじゃないし」

「そういう問題じゃないの！」

誰か大胆不敵なこの姉をなんとかしてくれと、近藤は心の中で思った。

数十分後、お洒落をして綺麗な藍色の着物に身を包んだ操と、渋めの着流しに着替えた近藤が並んで歩く姿があった。

「ふふ、貴男とデートなんて、こっちに帰ってきて以来ね」

「デートって響きも、なんだかな…」

「私達を姉弟と知らない人には、そう見えるんじゃない？」

私達似てないものと、操は笑う。

「こんなことしたら、恋人同士にも見えるかもよ」

弟の逞しい腕に、ぎゅっと抱きつくと、近藤は顔を赤くした。

「わわわ…みい姉！」

「なによ照れちゃって。いいじゃないたまの休みくらい」

局長と隊長としてではなく、姉と弟として過ごす時間ぐらい大切に  
したっていい。無二唯一の、血の繋がった姉弟なのだから。

「しかし、私もやつちやつたな。申し送りサボるなんて」

「対した連絡もないから大丈夫だってトシも言ってたから、大丈夫  
なんじゃないかな。ちゃんと九番隊にも伝えてあるらしいし……」

「もう、それもこれも貴男が温かいせいよ」

「なんで俺のせい!!?」

おどける弟にくすくす笑い、冗談よと返す。

「……桜が咲くのは、もっと先かあ……」

道にたっている桜の木、春になったら、さぞや美しい花を咲かせるのだろう。

今はただ、葉のつかぬ枝がかさかと音を立てるだけ。

「お花見が楽しみね。みんなでどんちゃん騒がなきゃ」

「また止めるのが大変だなあ。特に、トシが」

好むくせに、土方は意外と酒に弱い。

「…私も、酔ってみたいなあ」

かなりのザルである操は、今の今まで酔ったことがない。酔うという状態がどういったものなのか、彼女は知らない。

「……？」

後ろから両肩に手を置いてきた弟を見上げる。近藤はなにやら、優しい笑みを浮かべていた。

「みい姉が酔ったら、誰がみんなを止めるのさ」

「……だから私酔えないのかしら」

ふふつと二人して苦笑が漏れる。操は近藤によりかかり、腕を引つ張って抱きしめてもらった。

「ねえ、勲」

「んー？」

「もし、もしもよ。私が誰かに、こんなことをされてたらどうするっ」

「誰かって？」

「だから、もしも」

近藤は暫く唸って、やがて答えた。

「斬る。みい姉は誰にもやらんよ」

操は再び笑うと、弟にすりよった。

「あなたって、本当にシスコンよね」

「ブラコンのみい姉に言われたくないなあ」

なんだかんだ言って、お互い大事な姉と弟だ。操は弟を男前だと思っ  
っているし、近藤は姉を世界一美しい女性だと思っている。ちなみ  
に妙は、世界一綺麗な女性だ。

「なあ、みい姉」

「なあに？」

「俺あ、みい姉の弟に生まれて良かったよ。こんな強くて綺麗な姉  
がいてくれて、俺あ幸せだ」

操は嬉しそうに笑って、弟を見上げる。

「私は嫌だったわ」

「えっ……」

「他人に生まれてれば、あなたとも結婚できたでしょう？」

近藤の顔が、みるみる真っ赤になっていく。

「なんて、冗談よ」

遊ばれたと分かり、近藤の顔が更に赤くなった。

「ちよっ…からかわないでよみい姉！」

「やーだ、真っ赤になっちゃって。あなたはいくつになってもからかい甲斐があるんだから」

弟の腕をすり抜け、駆け出す。近藤は何事か喚いて追ってきた。操は笑いながら、近藤から逃げた。

こんな日常が続けばいいなと、思いながら。

ねえ、勲

なんだい、みい姉

私も、貴男みたいな弟がいて幸せよ。私の弟に生まれてくれて、ありがとう

…どういたしまして

散々遊んで帰宅した二人が、沖田が朝に撮影した写真が屯所内に出  
回っていることを知って顎を外すのは、

また、別のお話。

終

続・ミイラ取りがミイラになる（後書き）

「操が起きた時の反応が面白そう」との感想を玉兎さんから頂きまして、操より近藤さんのほうが慌てふためきそうだな～と思ったところ、この話を思いつきました。

玉兎さん！ 貴重な一言をありがとうございました！      、（

）／

30過ぎたアイドルはアイドルって言わない。マドンナって言うんだ(前書き)

今週の「よりぬき銀さん」ザキさんの全力で盛大なツツコミが気持ち良すぎでした。土方さんの「作文んん!!？」は何度聞いてもツボです。

30過ぎたアイドルはアイドルって言わない。マドンナって言っただ

ねえ、

真撰組内に貴女を想っている人は、結構いるんですよ。

その中に俺も含まれているなんて、

貴女は露にも思っていないだろうけれど…。

あくる日、操と顔を合わせたのは、屯所の玄関だった。

外に出ようと扉に触れる前に扉が開き、気付いた操が笑みを浮かべる。

「あらザキ君。これからお仕事？」

巡回から帰ってきたのだろう。そのまま玄関を開けてくれたので、ありがたく外に出た。

「はい。割木屋について少し調べてきます！」

元気よくそう答えれば、そう、と淡い笑みが帰ってきた。

「気をつけて行ってきてね。けして無理はしないように」

「はい！　ありがとうございます」

気遣ってくれていることが嬉しくてにこりと笑みを浮かべれば、操は負けないくらい眩しく笑う。

「またお菓子を作ろうと思ってたの。ザキ君の好きな抹茶のプリンだから、早く帰ってきてね」

「やったあ！　みささんの手作りお菓子！　だったら仕事行くの止めようかな」

「だめよお。お仕事しなくちゃ。ちゃんと取っておくから、楽しみにしていてね」

じゃあ気をつけてねと、そう言つて踵を返した操の姿があまりにはなくて、山崎は不意に耐え難い恐怖にかられた。

まるでそのまま空気に溶けて消えてしまいそうな、そんな杞憂。

『操殿、山崎殿たちの知らないところで何かあつたのでしょうかね』

松光殿が変なことをいうからだ、松光のせいにする。それでも、母のように、姉のように慕う操が自身の手の届かないところにいつてしまいそうで恐ろしくて、山崎は操の隊服の裾を掴んでいた。操が驚いて、振り返る。

「ザキ君…？ どうしたの？」

彼女の不思議そうな声に慌てて我に返り、手を離した。

「あ…。ごめんなさい」

俯く山崎に操は首を傾げ、そつと山崎の頭に手を乗せる。

石段の上に乗っているため、操のほづが目線が高い。

「大丈夫？」

そつと撫でられ、山崎は顔を上げた。

「みささん、変わっちゃ嫌です！」

豆鉄砲でも喰ったような顔をして、操は硬直する。そして間拔けな声を出した。

「ほえ……？」

「みさんはみさんのままでいてほしいです…」

縋るような目に、操は目を瞬かせたのち、微笑んだ。

「何をいうのこの子は」

泣きそうな顔を顔を包んで、覗き込む。

「私は変わらないわ。近藤操のままよ」

そうしてもう一度、微笑んだ。

「私、何処が変わっちゃった？」

山崎はふるふると、首を振った。

「ただ旦那が…。みささん綺麗になったって…。俺らの知らないところで何かあったんだろって、松光殿も言ってる…」

「綺麗になったっていうのは嬉しいけど…」

なにかあったって言われてもねえと、操は首を傾げる。

「大丈夫。私は私よ」

ね？ と同意を求める。山崎はいと頷いた。

「いつてらっしゃい」

額に一つキスをして、操は屯所の中に入っていった。

山崎はキスされた額に手を当てて、嬉しそうに笑う。

その時だった。

「こんにやろうが！」

「いたっ！」

がつんと拳が降ってきて、山崎は頭を抱えて沈んだ。

ずきずきと痛い頭を押さえながら振り向けば、未だ拳を作っている原田を始め、何人かの隊士が物凄い形相を作っている。

「なにさりげなくデコチュー貰ってんだお前は……！」

ふるふると拳を振るわせるこのメンツは、  
“ 操ファンクラブ ”  
のメンバーだ。

ヤキモチでも焼かれているのだろう。

でなければ、抜け駆け禁止の忠告…。

「いいじゃん！　みささんがしてくれたんだから！」

「だからって抜け駆けはするいぞ！」

「俺らの操さんなのに！」

「知るか！」

屯所入口で、はた迷惑な乱闘が繰り広げられたのは言っまでもない。

「なんだか外が騒がしいな」

「なにかあつたのかしら」

喫煙所で柱に寄り掛かつて煙草をふかしていた土方が、ふと顔を上げる。となりにはたつたいま来た操が煙管をくわえて腰かけており、騒がしい声のする方向を見やっていた。

「…そうだ、トシ君」

「なんだい？」

「私、どこが変わった？」

一体何を聞くんだと、腰かけた操を見下ろす。

「なんだい？ 藪から棒に」

「うん…。さっきね。ザキ君に変わっちゃ嫌だって言われてね」

「はあ？ ザキの奴が？」

煙を吐き出しながら頷く操に、土方はまじまじと操を見つめる。

「…変わったところかわかんねーよ。姉さんは昔から綺麗なまんまだ」

「やだもう！ トシ君ったら！」

嬉しかったのか、べしいと土方の足を叩く操。

流石に痛かったらしく、土方は顔を引きつらせてその場所を摩った。

「本当に変わってねーよ。年取ってんのか？」

「取ってるわよ。もうお肌のハリも体力も落ちてきて、やんなっちゃうわ」

くすくす笑う操に、土方もつられて笑う。

「鬼ババは年取らないって言うしな」

「あつ、トシ君ひどい」

鬼ババの自覚はないこともないので、操はそうかもしれないと思  
いながらこころと笑う。

「ま、姉さんは姉さんのままでいてくれよ」

楽しそうに笑う土方に、操は分かったわと、浮かんだ涙を拭って頷  
いた。

外の騒動は、未だ収まる気配がなかった。

恋する女は美しくなる。

そんなことを言ったのは、

誰だったか…。

終

30過ぎたアイドルはアイドルって言わない。マドンナって言うんだ(後書き)

「よりぬき銀さん」で久しぶりに銀八先生が出ましたね。「レロレロキャンディー」れるれる舐めてるからだ」と銀八先生の口から出てきたのがチュッパチャプスじゃなくてデカいペロペロキャンディーだったことにスゲーびっくりしました。あんなのどうやって口に入ってるの…。。(。ロ。;)ノ

## 大好きな人（前書き）

やっぱりザキさんは動かしやすいです。近藤さんがぶっ壊れているのでご注意を…。

## 大好きな人

「みい姉はさ。好きな男とかいるの？」

そんなことを、軽々しく聞いてしまったのがいけなかった。

「いるわよ。大好きな男くらい」

操のこの言葉から、今回の事件は始まる。

「はあ？ 姉さんの好きな男？」

「ああ。どうやら俺の知ってる男らしいんだが、心当たりがなくてな」

机を挟んだ向こう側。腕を組んで真面目に言っただけの近藤に、土方はため息と同時に、煙草の煙を吐いた。

「…で、それを調べるためにザキを動かしてるってことか」

最近山崎の姿を見ないと思ったら、そんなことばかり出されていたらしい。なんとも、不憫な…。

「だが、ザキを動かしたところで何もわかりやしないだろ？」

「そんなことないぞ！　　みい姉は、毎日楽しくおしゃべりしてる人だって言ってたんだ！」

どすんと机を叩き、近藤は言う。そしてそのままの勢いで突っ伏した。

「みい姉は俺んだい！　　他の男になんかやらねー！」

「…近藤さん、その過度のシスコンをなんとかしようぜ…」

昔から母親変わりであつた操を、近藤はなによりも大切にしている。もし操が結婚するなど言い出したら、体を張って止めにいくことだろう。

「本当に心当たりないのかい？」

「強くて、優しく、己の信念を持っていて、少しおっちょこちょ

いけど、ずっとそばにいてあげたい可愛い子…なんて俺あ知らねえ…」

ぐずぐすとベそをかきながら、近藤はまだ机から顔を上げない。土方は呆然として、危うく銜えていた煙草を落としそうになって、慌てて灰皿へ押し付けた。

「…そう、姉さんが言ったのかい…」

「毎日話してるってことは隊士かと思ったんだけどさあ…。…だから山崎に、みい姉と親しそうな男を探ってもらってるわけよ…」

「姉さんと親しそうな男って言うても…」

「失礼します局長、いらっしゃいますか？」

ノックと共に、外から声がする。山崎の声だと分かり、近藤はがばりと顔を上げた。

「おお、ザキか！　なにか分かったか！？」

入ってきた山崎に、近藤は勢いよく声をかける。土方の隣に座りながら、山崎は首を振った。

「まるで分かりません。とにかくみささんの交友関係が広くて、ここ五日間毎日話をしている男は20人以上います」

「五日ア！？　近藤さんそんなに調べさせてんのか！？」

期間の長さに土方は思わず声を荒げたが、近藤はいたって冷静だった。

「くそう、誰だみい姉の好きな男っていうのは…」

あまりのシスコンぶりに口元を引きつらせた土方は、隣に腰掛けた山崎に同情の目を向ける。

「お前も大変だな」

「そうなんですよう……。もうストーカーやってる気分で、みささに申し訳なくて……」

ぐずぐずと半ベソをかいている山崎が持っている資料は、操がこの五日間で関わった男のリストなのだろう。さりげなく奪い取って、目を通して見る。

「……毎日話しているわけじゃねーけど、ほとんどの隊士と関わってんだな。隊士じゃねー男はい……」

隊士ではない男の名前が一人だけ。「吉田松光」の名前が、小さく乗っていた。

「いたし…」

「そうなんですよ！　ここ五日間、毎日外で松光殿としゃべってて…」

「なにい！　松光殿だと！？」

ずっと近藤が身を乗り出し、二人はびくりと飛び跳ねる。

「松光殿とみい姉が…！？　いやでも松光殿もいい男だし、強いし、みい姉とも釣り合うかもしれないけど…」

近藤の頭に、親しげに話している姉と松光が浮かぶ。

「みい姉はあげないぞ松光殿——っ！！」

己の妄想に暴走してぎしゃつと怒鳴る近藤にため息をつき、土方は新しい煙草に火をつけた。

「落ち着けよ近藤さん。松光殿だけは違うつて言いきれぬ」

「へ？」

近藤と山崎、二人分の不思議そうな声が重なる。

「どうしてだ？」

「姉さんは可愛い子と称したんだろう？ 年上にゃ “ 可愛い子 ” なんて使わねーよ」

忘れがちだが、松光は近藤よりも、そして操よりも年上なのだ。それともそうか、と頷いた近藤は、やがてあつと声を上げた。

「みい姉より年上の男を排除していけば、少しは絞れるんじゃない…」

「局長…、名案と言いたいところですが、そのみささんが真撰組最年長です」

「だめかあ…」

がくりと、近藤は肩をおろす。

「いまさらだけどよ、近藤さん。姉さんが好きになつた男なんだから、いい男に決まってるんじゃないのか？ そんな敵視しなくても…」

「甘いぞトシ！ 将来みい姉の夫になる男は、すなわち俺の義兄になる男だ！ 俺より弱い男なんぞにみい姉はやらん！」

誰かこのシスコンをなんとかしてくれと、土方と山崎は盛大なため

息をついた。

それから二日後、山崎はまだ操の後をつけていた。本当は大好きな操にこんなことはしたくないのだが、いかんせん局長命令…。もういつそ操が誰かとキスする現場でも目撃できれば、こんなことも早く終わるのだが…。

「…あれ？」

尾行していた巡回中の操が、消えていた。

(やべっ…。みささんどこ…)

慌てて駆け出した矢先、路地から不意に伸びた手が、山崎の腕を掴んで引きずりこんだ。

「わっ!？」

「つかまえた。ザキ君」

どんつと山崎を壁に押し付けたのは、他ならぬ操だった。

「み、みささん…!」

「ザキくん。ばれてないとも思った？　ここ一週間ずっと私のこと尾行してたでしょ」

「ば、ばれてたんですか…!？」

「誰の命令なの？ 松平のおじさま？ トシ君？」

言いませんよとばかりに首を細かく降る。胸倉を押さえられているので、逃げようにも逃げられない。

「まさかザキ君の独断じゃないわよね。あとは、勲か」

命令を下した近藤の名前が出て、どきりとする。

「勲なのね」

「なんで分かるんですかー!？」

見破られ、泣きたい気持ちにかられる。

「男の子の隠しごとなんて慣れてます。なんでまた私を尾行してたの？」

もちろん言えないので首を振ると、操は目を細めた。怒っているのだ。

「言えないの？」

「言えません……」

「そ。じゃあ……」

操の顔が近づく。操は背伸びをして山崎の耳に口を寄せると、まるで恋人にするかのように甘く囁いた。

「私にキスされると、白状するのと、どっちがいい？」

山崎が、心の中で声にならない悲鳴をあげたのは、言うまでもない。

「まったくもう、勲もそんなくだらないことでザキ君を使うなんて」

結局白状してしまい、二人で屯所に戻る事になった。尾行する相  
手に見つかり、さらに口を割ってしまうなど監察にあるまじき失態  
だ。

（まあ、そつちじゃないんだけどさあ…）

白状しないまま操のキスを受けるのは、本当は美味しい話だった。だがそれがバレてしまえば、操ファンクラブの人間に半殺しにされる上、近藤にトドメを刺されるのは目に見えていた。

（なんか、命拾いしたような損したような…）

「で？ 分かったの？ 私の大好きな人」

突然話を振られ、どきりとする。

「いえっ、それがさっぱり…。その好きな人と毎日話していると伺ったんですが、みささん交友関係広いし…」

「もう！ 強くて、優しくて、己の信念を持っていて、少しおつちよこちよいだけど、ずっとそばにいてあげたい可愛い子…、分かってくれなかったのかしら。勲は…自分のこと言われてるって、少し

は気付きなさいよ」

操の言葉に、山崎は思わず足を止めた。

「えっ、局長…だったんですか？」

「そのつもりで、あの子にも言っただけど…」

「で、でも！ 好きな…って…」

「好きにも部類があるでしょう？ 私が言ったのはlikeのほうよ。勲がloveのほうで聞いてきたから、からかってやろうと思っただけなのに。真に受けちゃって…」

頬に手を添えて、仕方のない子、とため息をつく。

「私にLoveのほうで好きな人なんて出来るわけないじゃない。こんなくだらないことでザキ君も振り回して…。ごめんねザキ君。大変だったでしょう」

「俺のほうがみささんに謝らないといけないんですけど…」

半ばストーカー行為だったのだ。いくら仕事といえど、操には申し訳なさでいっぱいだった。

「いいのよ、よく勲の言うこと聞いてくれたわ。私ザキ君のこと大好きよ」

そう言われて、嬉しかった。

「局長に伝えてあげて下さい。俺より弱い奴にみささんはやらんって、意気込んでましたから」

「そうね。じゃあ早く帰りましょうか」

軽い動作で手を取られて、屯所までの道のりを進んだ。

頭の中では、先ほど言われた「ザキ君大好き」の言葉が山びこのように繰り返されていた。

(でも、Loveじゃなくて Likeだもんなあ…)

いつか、Loveになれば…。

そんなことを考えてしまって、ないないと首を振る。

操が、一隊士である自分を愛してくれるわけがないのだ。

その日、操本人の口から真実を聞かされ、不気味なほど舞いあがっている近藤の姿が屯所にあつたという。

終

## 大好きな人（後書き）

私も兄貴に好きな人が出来たりしたら全力で止めるような気がします。（兄貴モテないから安心なんだけど…）

だってもし兄貴とその人が結婚したりしたらその人私の義姉じゃないっすか！　どうやって付き合ってたっけっちゅーねん。なんかやだ！

Σ（「□」）！

祭り好きもほどほどに

(上)(前書き)

もつすぐ近くの地区でお祭りがあるので、それにあやかりました。  
桂さんの誕生日ももつすぐですねゝゝ

祭り好きもほどほどに

(上)

申し送りを終わらせてからの操は、至極不機嫌だった。

縁側の柱に寄り掛かり、庭を睨みつけながら煙管を吸う。

恨めしげに煙を吐き出す滲み出る怒りのオーラに怯え、部下でさえも近寄ることができない。

「怒りのオーラが滲み出てんぜ。姉さん」

火のついてないタバコをくわえた土方が、口許に笑みを浮かべながら歩みよってくる。操は煙を吐き出して、言っただけだ。

「怒ってません」

「よく言っぜ。折角の美人が台なしだよ」

ぽつと丸い煙を吐き、操は笑う。少しばかり機嫌が直ったようだ。

「怒りたくもなるでしょ。どうしてわざわざ祭になんか出てくるのよ」  
「あの男」  
「は」

先程の申し送り。今度予定されている大規模な祭に將軍が参加するから、護衛をしろと上層部から命令がきたのだ。

私事で仕事を増やすんじゃないと、操は立腹していた。

「…姉さんだけでよ。將軍をあの男呼ばわりできるのは」

「いいじゃない。私はあの男の母親になりかけた女よ」

操はふふつと笑う。延ばされた煙管から火をもらい、土方は煙を吐き出す。

「…あんな真似はもうしないでくれよ、頼むから…」

「もうしないわよ。あれは、私も馬鹿だった」

それは、まだ真撰組が創立したてで、メンバーも十数人しかいなかったころの話だ。

前將軍、つまり現將軍徳川茂茂の父親は、よく創立したての真撰組に顔を出した。

そして操を気に入り、言い放ったのだ。

『そなたが気に入った。余の妻となれ。嫌というならここで腹を切るがいい』

あまりの言葉に他の隊士は抗議したが、操は解りましたと頷いた。優雅に正座し、短刀を引き抜く。

それが腹に刺さろうとした瞬間、その手を土方が止めた。

『お上よ。これだけは勘弁してくれ』

頼む、と複数の隊士が頭を下げる。そして硬直した。前將軍が、土下座したからだ。

『すまなかった。そなたの覚悟を確かめたかったのだ。試すような真似をして、済まなかった』

前將軍は今後も面倒を見ることを約束し、すまなそうな顔で帰っていった。代は代わってしまったが、操はあのことを引きずり、今でも將軍たるものが大嫌いなのだ。

「あん時は…。お上が試してたって分かったのか？」

「ううん。トシ君が止めてくれるって分かってた」

満面の笑顔に、敵わねえと呟く。

「將軍の護衛だなんて…。私もお祭り行きたいわ」

「ははっ。本当に近藤さんの姉とは思えねえ発言だな」

からからと、タバコをふかしながら土方は笑う。

「だって、ねえ……」

操は少しだけ笑って、煙を吐き出した。

「私は將軍を守るために真撰組にいるんじゃない。皆を見守るためにいるんだもの。当たり前でしょ」

彼女の言葉に、土方は笑った。

「で？」

祭当日も、操は至極不機嫌だった。それというのも…。

「なんで浴衣…！」

悪戯半分に浴衣を着せられ、動きにくいこと限りない。

「いいじゃんみい姉。綺麗だよ」

「私服警官ってやつさ」

「綺麗じゃないしいゝ！ 私服でもないしいゝ！」

ぶーぶーと文句を垂れるものの、和風美人の操に浴衣はよく似合う。

「どうせ、あの男の接待しろとかいうおじ様の命令なんでしょ」

近藤と土方の片頬がひくりと引き攣る。

「「ごめんなさい」」

「いいわよ。まともに接待なんかしてやんないし…。まあ、そよ姫にあえるから、よしとするわ」

將軍はともかく、その妹であるそよ姫は操が大のお気に入りだ。

「じゃあ、私はあの男とそよ姫になにか買ってきてきましようかね」

「あ、そう言ってトンスラしちゃだめですぜい」

沖田が笑い、去年のお前じゃあるまいしと土方にひっぱたかれた。

「総悟君も一緒にデートする？」

恋愛には初なため、デートという単語を出されると大概の隊士は黙ってしまう。

それは沖田も例に漏れず、彼は顔を真っ赤にする。

「なんてね、冗談よ。じゃあ行ってきます」

「気をつけてなー」

「はい」

操が立ち去ってから、沖田はふへえ…と小さな息をつく。

「みいさんの言ってることはシャレになりゃあせん…」

「多少喜んでたくせによく言っぜ」

「土方さんだつて、あんなこと言われたら嬉しっしょ」

その通りなので、まあなと流す。

「おいおい、みい姉とデートするのは俺だぞ？」

「アンタはその弟馬鹿をなんとかしよーぜ…」

操と結婚する男は、近藤を倒さねばなるまい。未来の操の旦那は大変だなど、土方と沖田は二人して苦笑した。

タコ焼きと、綿菓子と、あと何がいいだろう。普段食さない珍しいものがいいだろうと屋台を見回していた操は、ふと誰かに見られている気がして振り向いた。

「……！」

見慣れた男の姿が、人混みからはっきりと見えた。男は操と目を合  
わせると、薄く微笑んで背を向ける。

「待つ……」

人を掻き分けて走り出す。人混みを抜けだして追い掛けた先は、一  
般人立入禁止区域だった。

「小太郎！」

待っていた桂に、走りよる。

久しぶりに着た浴衣の裾に躓いた操を、桂が優しく抱きとめた。

「小太郎…」

「よく俺だと分かったな。あんな遠目で」

「わかるわよ。大好きな貴方のことぐらい」

どちらからともなく口づける。操の髪を梳いていた桂は、軽く口を離して囁いた。

「綺麗だ。浴衣姿も…」

「ありがとう」

「しかし、なんとなく太ったような…」

腰を支える桂の手が、するりと撫で下りる。操は顔を赤くして、桂の髪を引っ張った。

「太ってないわよ！ 下に隊服着てるだけ！ 久しぶりに会えたっていうのに言うことそれ！？」

「いたた。引っ張るでない」

機嫌を損ねたのか、操はぷいとそっぽを向いてしまう。桂はそんな操を、後ろから抱きしめた。

「すまん、冗談だ」

項を桂の唇が這い、操はふるりと体を固くする。

「気をつける。高杉が動く」

「え…？」

抱きしめられた形のまま、耳元で囁かれる。

「あいつはめっからの祭好きだ。去年もこの祭で、騒ぎを起こした」

「聞いてるわ。からくり職人と通じてたって…」

「今回からくりは演目がないが、高杉はきつと動く。あいつ単独ではなく、鬼兵隊ごとと思ったほうがいい。狙いは、將軍だ」

あの馬鹿殿が狙い、いつそのこと始末してくれとは言えない。

「それだけ伝えようと思ったただけだ。気を抜くな」

「…どうして、真撰組にそんな情報を…」

不思議そうに振り返ると、べしつと額を指弾された。

「たっ…」

「馬鹿を言え。お前だから話したんだ」

「…ありがとう」

痛いなあとぼやいていた操は、ふとあることに気付いた。

「そうだ、貴方に渡したいものがあつたの」

「ござござと、懐を探る。」

「？」

「はい。遅くなってごめんなさい」

差し出されたのは、綺麗にラッピングされた小箱。

「六月二十六日は貴方の誕生日だったでしょう？　ずっと渡したかったの、誕生日プレゼント」

桂は驚いて、目を開いていた。

「何故、知って…」

「真撰組の情報網をナメないで…。なんてね、松光殿が教えてくれたの。当日渡したかったんだけど、貴方なかなか出て来なかったし、

機会なかったし……」

ただでさえシスコン暴走した近藤のお陰で自由に動き回れなかった上、桂は桂で高杉の動向を探っていて、なかなか会える機会を作ることが出来なかった。

「会えなくて、寂しかったんだから……」

ぶつぶつと呟く操が愛しくて、桂はきつく抱きしめた。

「……ありがと。誕生日など祝ってくれるのは、お前が兄さんぐらいだ」

「松光殿にも祝って貰ったの？」

「兄さんは俺らの誕生日を盛大に祝ってくれる。兄さんの手作りケーキは絶品なんだ」

弟の誕生日に、嬉々としてケーキを焼く松光の姿が、容易に想像出来た。

「開けてみて」

小さな箱には、綺麗な深緑のリボンがはいつていた。

「おお…」

「貴方、髪を大事にしてるように見えて、実は鬱陶しそうな顔したりしてたから…」

「綺麗だ。…結んでくれるか？」

私ごと、目を丸くする。渡されたりボンを手に後ろへ回ろうとすると、肩を捕まれて元の位置に戻された。

「縛れないじゃない」

「このままやってくれ。一度やって欲しかったんだ」

ようは、抱きしめるように手を後ろに回して、結んでくれと言っただ。

「…子供」

「いいだろう？ それくらい」

仕方なく操は手を伸ばし、器用に髪を纏めていく。桂の顔がすぐ近くにあり、顔が赤くなるのを押さえられない。

「はい、できた」

「器用だな」

首の後ろできつちりと結わえられた姿は、いつもの桂とは違う青年に見える。

いつもとは違う桂に、操は顔を赤くした。

「…なんか変」

「変？」

再び手を伸ばし、たつぷりと余裕をもって下のほうで結わえる。いつもの桂だ。

「…こっちのほうが貴方らしい」

「どう俺らしいんだ？」

「分からないけど……」

もじもじしている操を、再び抱きしめる。

「ありがとう」

「ふふ、どういたしまして」

長いキスをし、離れた。

「じゃあ私、そろそろ行くわね。仕事戻らなきゃ」

「鬼兵隊にはくれぐれも気をつける。特に、高杉には」

うんと、操は頷く。

「分かってる。心してかかるわ」

高杉の危険さは、よく分かっているから。

「そうだ、これ食べて」

買ったばかりの、綿菓子差し出す。

「なんだ？　これは」

「綿菓子よ。食べたことない？」

ないと呟いて、桂は早速口に運んでいる。

「…甘いな」

「嫌い？」

「いや、うまい。柔らかくて甘くて、お前のようだ」

かあつと顔が赤くなる。どうしてこの男は、こんなことをさらりと  
言えるのだろう。

「じゃあ、…またね」

「ああ。」「ちそうさま」

ひとつ操に口づけて、桂は名残惜しそうに闇に消えていった。

その姿が完全に見えなくなってから、操は踵を返す。

「…甘い」

唇には、桂が口にした綿菓子甘さが残っていた。

続く

祭り好きもほどほどに

(上)(後書き)

ぐだぐだでしたね。すみません…。私もお祭りは好きです。色んな  
屋台を回るのが…。(人)

祭り好きもほどほどに

(中)(前書き)

最近暑いですね。兄貴はお昼の水分補給を忘れて熱中症で倒れかけたそうです。馬鹿でー。

祭り好きもほんとに

(中)

「小太郎には会えましたか？ 操殿」

振り向くと、呑気に林檎アメをくわえた松光がいた。

「松光殿！」

「今日は浴衣ですか？ 是非この目におさめたいものだ」

見えないにも関わらず、ここにいるのが操だと分かったのは気孔術の賜物か。

「ありがとう松光殿。ちゃんと会えたわ。やっと誕生日プレゼント渡せたのよ」

至極嬉しそうな操に、良かったですねと笑いかける。

「お仕事ではないのですか？」

「仕事よ。私服警官ってやつ。これから馬鹿殿の護衛かつ、接待しなきゃいけないの」

言うてから、はっと口元をおさえる。

もしかしたら彼は、世の誰よりも將軍を憎んでいるかもしれないのだ。

「それはそれは、大変ですね」

「ええ、大変よ」

並んでいた綿菓子のお店に、三つくれるように言う。

先程桂に渡してしまって、なくなってしまったのだ。

「もっと大変になるかもしれません」

「え…？」

「気をつけてください。晋助が動きます」

桂も言っていたその言葉に、目を見張る。

「それ、小太郎も言ってたわ…」

「ええ、銀時と小太郎が、二人で晋助の動向を探っていたのです。晋助はめっからの祭り好きですから、今日はきつと動くだろうと…。將軍の周りは気をつけてください」

神妙だが、どこか嬉しそうな松光に、操は眉を寄せる。

「気をつけると言っておいて、嬉しそうですね。松光殿」

「嬉しいですよ。晋助に会えるかも知れませんから」

そうだった。この男は、高杉の兄でもある人間だった。

「…分かったわ、用心する。教えてくれてありがとう」

「どういたしまして」

「はいこれお礼。旦那や神楽ちゃんたちと食べて」

買ったばかりの綿菓子差し出すと、松光の顔が和んだ。

「ありがとうございます。あの子たちも喜びましょう」

「…松光殿」

「はい」

「高杉に会いたい気持ちは分かるけど、戦場の最前線に出てはダメよ？ 貴方に怪我をさせたら小太郎だけじゃなく旦那にも合わせる顔がないわ」

松光はそれがさも可笑しそうに、クスクス笑う。

「攘夷戦争末期、鬼神と恐れられた俺が怪我なんぞするとても？」

「…そうね、むしろ敵さんの心配をしろってね」

松光は肩を揺らして笑い、それではお気をつけてと踵を返した。

「…気をつけないといけない対象は、高杉じゃなくて松光殿かも…」

ぼんやり、そう思った操だった。

沢山の袋を提げて櫓に戻ると、既に松平が到着していた。

彼がいるということは、あの馬鹿殿も到着しているのだろう。

「やあ操ちゃん。今日も可愛いなあ」

「こんばんは、おじ様。お上は到着されてますの？」

「ああ、櫓に妹姫というよ。早く行ってあげてくれ」

苦い顔ではあいと返した操に、松平は苦笑する。

「あんまり邪険にしてやんないでくれな。最近妹姫にも煙たがれて

落ち込んでるんだ」

「男性というのはそういうものですわ。おじ様もそのうち、栗子ちゃんにうざいと言われるてしまうかもしれないわよ」

冗談半分に言ったが、松平は面白いほどに凹んでくれた。

「そうなんだよなあ…そのうち言われちゃうかもしれないんだよなあ…」

「…まあ、栗子ちゃんはいいい子ですから心配無用と思いますが…」

さりげなくフォローし、それではと頭を下げる。

「ありゃ？ 櫓はこつちだよ」

「勲たちに一言言ってから行きますわ」

「ふうん、なんて？」

「ネズミが入り込んだから気をつけろ、と」

松平の顔から、笑みが消えた。

「おかえり、みい姉」

「ただいまー…ってなに食べてんの!」

呑気にヤキソバを咀嚼している近藤と土方に突っ込む。隣にいる沖田はチョコバナナをかじっており、緊張のかけらもない。

「いや、腹減って…」

「もう…」

「みいさんも食べやすい?」

差し出されたチョコバナナに、操は控えめにかじりつく。

「お上なら来てるよ」

「ええ、さっきおじ様に聞いたわ……。局長、副長」

ぴしりと二人の空気が張り詰める。彼女がこの呼び名を使うのは、仕事中に意見する時のみ。

一瞬にして九番隊隊長の顔になった操を見下ろす。

「見間違いかもしれない。さっき、高杉らしき人間を見ました」

沖田の空気までも、張り詰める。

「確かか？」

「確証はありません。でも、今どき女物の着物着流して、煙管くわえてる隻眼の男なんか奴しかいません。気を抜かないで下さい」

固唾を飲んで近藤と土方は顔を見合わせる。流石に桂と松光から教えて貰ったとは言えないので、多少偽造した。間違いは言っていないのでよしとする。

「分かった。警備を強化しよう」

「じゃあ俺は奴らに伝えてくる」

「ああ」

土方が立ち去り、沖田も不安そうに操を見遣る。

「何事もないにこしたことはないけれど…」

「いや、去年もどたばたあったからな。ありがとう操隊長」

「とんでもない」

そして操は、あっさりと九番隊隊長から姉に戻った。

「じゃあ、私將軍のところにいるわね」

「うん」

操は軽い動作ではじに置いてあった自身のヒールを掴むと、櫓へと歩いていく。

「…高杉のやつ、来るんですかねィ」

「分かんが、用心に越したことはない。それより…」

近藤が、がくりとうなだれる。

「みい姉と祭行きたいよお……」

「……」

この人は一生シスコンなんだろうなと、沖田は思った。

「操——！」

「そよ姫様、お久しぶりにございます」

櫓につくなり駆け寄ってきたそよを、操は抱きしめる。

操はそよの気に入りだ。操も今まで親しくしてきた少ない女性であったため、姉のように接している。

「しばらく会わないうちにまた美しくなったのではありませんか？  
そよ姫」

「操の美しさには敵いません」

「またまたあ」

二人してふざけていると、後ろからひよこひよここと茂茂が出て来た。

「やあ操。久しぶり」

「お久しぶりです。茂茂様」

真顔で返し、すぐにそよに笑顔を作る。

「そよ姫、お城を抜け出したんですって？　あまり迷惑をかけてはいけませんよ」

「はい、ごめんなさい…」

萎れるそよに、操はにこりと笑いかける。

「今度は私を呼んで下さいまし。江戸の珍しい場所を案内しましよ

う」

「本当ですか！」

「ええ、本当……」

「操、操、見て見て」

どうしても大好きな操に構ってもらいたいらしく、茂茂は会得したであろう「アイーン」のポーズをとった。

「……」

数秒白けた目で操とそよが固まり、操は何事もなかったかのようにそよに向き直る。

「本当ですよ、そよ姫様。約束しましょう」

「操、せめてなにかつつこんでほしい…」

どうしても構ってほしいらしい。操は息をつくど、静かにいつてのける。

「茂茂様、馬鹿なことを習得するひまがありましたら、仕事して下さいまし。江戸にはまだ問題がありますのよ」

「そ、そうだよね…」

「それから、スナックすまいるの女の子たちが、また茂茂様に来てほしいと言っていました。今度は私も連れて行って下さいまし」

茂茂の顔が、ぱつと輝く。けなしておきながらも、さりげなくフオーを忘れない。そよはこんな操が、すごいと思う。

「庶民の味なんですけど、出店でいろいろ買ってきました。いかがですか？」

「わあ、食べたいですっ！」

「なにがあるの？」

「ヤキソバ、林檎アメ、綿菓子にタコ焼き……」

結局それらをすべて平らげた茂茂とそよは、至極ご機嫌だった。操もけなしながら茂茂の接待をし、遠目に見ていた松平も微笑ましそうに笑っている。

「そろそろ、打ち上げ花火の時間ですわね」

「花火、綺麗かな」

「もちろん、一流の花火職人が作った……」

操がそう言いかけたとき、一発目の花火が上がった。続いて空に咲く大輪の花に、二人がわあと顔をほころばせる。

「綺麗ですね」

「ええ…！」

気配を感じて操が顔を上げた。同時にステージのほうで爆発が起き、白い煙が辺りを包み込む。

「なっ！」

「爆発か！」

松平が駆け寄ってくると同時に、操はヒールに足をつっこんだ。

「みんな櫓の周りを固めて！ ネズミ一匹通しちゃ駄目よ！」

とは言え、煙幕のせいでメートル先もよく見えず、混乱が生じているのが分かる。

「おじ様、お二人を連れて避難：！」

言いかけた操は、言葉を切って懷から出した小刀を振った。一秒後、弾かれた銃弾が地に落ちる。

「狙撃されてる！」

神経を集中し、刀を振る。

キン、キンツと金属を弾く音が立て続けに聞こえる。

「おじ様、急いで！」

「わ、分かった！」

「操も一緒に！」

泣き出しそうな顔でそよが叫ぶ。操は笑みを浮かべて言った。

「私は仕事がありますので…。あの約束、忘れないでくださいませね、そよ姫」

「操…」

心配そうな顔で、茂茂もそよも松平と共に消えていく。周りでは敵襲があったらしく、喧噪と刀のぶつかり合う音が聞こえている。

「あら、將軍は逃がしてしまいましたのね」

煙幕からゆらりと姿を現した女を、操は綺麗だと思った。

続  
く

祭り好きもほどほどに

(中)(後書き)

途中で將軍茂茂公がやってる「アイン」は、コミック27巻(でいいんだよね?)の表紙から頂きました。いい人だとは分かってるんですけど、どうにも將軍って「馬鹿殿」っていうイメージしかないですよー…。ごめんね、將軍。>(――)<

祭り好きもほどほどに

(下)(前書き)

ごめんなさいごめんなさい！　こんな展開にするつもりじゃなかったのに、こんな展開になってしまいました。(どんなだ)先に謝っておきます。高杉さんのキャラがぶっ壊れ、操が何様状態になります。高杉さんファンの方、気分を害されたらごめんなさい！

祭り好きもほどほどに

(下)

まるで煙から生まれ出たかのように、女はゆらりと操に歩み寄った。  
操と同じく黒い長髪が、さらさらと風に揺れている。

「やはり遠方から狙撃なんて考えなければ良かったですわ」

「愛らしい唇から、随分過激な言葉が紡がれるわね」

仕事ですから、黒い着物を纏っている女はそう言った。

風に揺られて、巻き付けた羽衣が美しく舞う。

「貴女、黒衣の死に神ね」

日頃噂になっっている鬼兵隊幹部の通り名を口にする。その通りだったようで、女はうつそりと笑みを作った。

「鬼兵隊の中ではそう呼ばれていますわ。そこを通していただけませんか？ 私、主の命令で將軍を殺さなければなりませんの」

女は両手に持った二丁の銃を操に向けた。先刻から発砲していたのは彼女だ。

「それは出来ないわ」

「何故ですか？」

「あの馬鹿を護るのが、私の仕事だからよ」

帯をほどき、浴衣を脱ぎ去る。着込んだ隊服が姿を表し、操は体に

くくりつけていた刀を引き抜いた。

「…驚いた。貴女が、近藤操ですか」

「ええ、何故か貴女の主に気に入られてる近藤操よ」

女は困ったなと言うように首を傾げた。

「この場合どうすればいいのでしょうか」

「私と戦ったら？ 私を倒せば將軍も倒せるわよ。というか、あの馬鹿殿はさっさと倒してほしいんだけど」

「真撰組の言葉ではないですわね」

女はくすくすと笑った。

「一個人、近藤操の台詞」

操は肩を竦めて見せた。鬼兵隊幹部と対峙しているにしては、随分と緊迫のない仕草だった。

「では、お手並みだけ拝見させて戴きましょう。晋助様の気を引く存在に相応しいかどうか…」

「私は相応しくないと思うけどね。なんとかしてよ、貴女の主」

「私にはなんとも」

出来ませんと呟き、女は駆けだし様に引き金を引いた。操も横に走りながら、刀を振る。

キンツ、キンツ！

銃弾は弾かれ、地に転がる。眼前に迫った操をひらりとかわし、女は引き金を絞り続けた。

「なんて強いこと」

何度目かの装填を行い、女は息も荒く呟いた。

「それはどうも。貴女もなんて正確な銃の腕なこと。弾いてなかったらの確に急所に叩き込まれてたわ」

互いの息が荒い。女は銃を下ろして、ふっと笑った。

「貴女の名前だけ知っているのでは不公平ですわね。私は姫華。鬼兵隊参謀補佐、芹沢姫華にございます」

「ひめ…」

操の顔から、笑みが消えた。その名前に、聞き覚えがあつたからだ。

「姫華あ！　じゃあ貴女が河上万斎の恋人！？　嘘！？　あいつにはもったいない！」

姫華の顔が、赤くなった。

「な、何故それを…」

「…以前彼と戦ったときにね。私を美女だと褒めてくれた貴女の主に対して、姫華のほうが美人だと言いやが…、まあ本当のことを言つてのけたのよ。あの河上万齊が褒めるからどんな女性かと思えば…。これはまた確かに美人だわ」

「…あの馬鹿…」

赤い顔のまま、ぼそりと呟く女改め姫華。

「ああ…、もうなんていうのか勿体ない…。何処が好きなの？ あ  
の男の」

「…っ。ああ見えてもいい男なのですよ。馬鹿ですけども」

照れているのか、赤い顔を逸らす姫華。

「そうね、何回も怒らせてる身…とか言ってたし。ねえ姫…華。男  
って生き物は甘やかかしちゃ駄目よ？　すぐにつけあがるし、甘った  
れるし、傲れるし…」

「馬鹿だし？」

「その通り。貴女は鬼兵隊で数少ない女性でしょうけれど、男を甘  
やかすとしてもないことになるから甘やかしては駄目。貴女の主  
が典型的な…」

「俺がなんだイ？」

薄れた煙幕から、のんびりと高杉が現れる。姫華は道をあけ、頭を  
下げた。

「久々だな、操。おめえの浴衣姿見たかったんだがなあ」

「残念でした。こうなるから、姫華。早い内に教育的指導したほうがいいわよ」

「どうということだい？ 操」

「そのままでしょ。いい加減名前呼ぶなっていつてんのよ」

不機嫌そうに言っただけの操。高杉はククッと苦笑し、軽く手を振った。

「姫華、ここはもういい。他のところを援護してやれ」

「晋助様の援護は？」

「いらねえ」

かしこまりましたと姫華は頭を下げ、

「さよなら、近藤操」

一つ呟いて、煙幕の中に消えていった。

「鬼兵隊って美女が多いのね」

「おめえも入るかい？」

「遠慮するわ。寝言は布団の中で言いなさい」

操はそう言い、刀を構えた。

「で、なんの用？」

「冷てえな。おめえに会いに来たつてのに」

「来てくれなんて頼んでないわ。貴方の大好きなお祭りなら、終わってしまったわよ」

「いやと、高杉は呟く。

「まだ終わっちゃいねーよ。最後の演目がな」

「チャキ…」と高杉の刀が音を立てる。

「そっいゃ、おめえとまともに手合わせしたことはねえと思ってよ」

「…したじゃないのよ。あの時…」

「あれはおめえが怒りを纏ってたからな。今度はちゃんとした、お前の得意技で戦ってもらおうと思ってよ」

怒りを纏わせたのは貴方でしょうがと言う前に、高杉が斬りかかってきた。

操はとっさに愛刀を振る。

キンッ！

甲高い音が響く。

「っ…」。私に構うのもいい加減にして！ 私は貴方に構ってられる

ほど暇じゃないのよ！」

「冷てえなあ。少しぐらい構ってくれてもいいじゃねえか」

「良くない！」

牙を剥きだして怒鳴り、操は高杉との距離をあけた。

「もう、今日という今日は手加減なんかしないんだから！」

「いつもしてねーだろー」

「だまらっしゃい！」

構えて、駆けた。高杉は何故か楽しそうに、笑っていた。

「流石だな。操」

「貴方に褒められたって嬉しくないわ。それから、名前を呼ぶなど何度も言った」

それから暫く刀を交えて、お互いぼろぼろになった。

肩で荒い息をしながら、ずっと考えていたことを口にする。

「ねえ総統殿。一つ答え合わせをしていいかしら」

「答えあわせ？　俺あおめえに謎々でも出したかい？」

「ええ、一つだけね。何故貴方が、私を気に入っているか」

高杉の眉が、ぴくりとつり上がった。

「私なりに考えていたの。どうして貴方のような人が、私のような女を気に入ったのか。強かったからとか、そんなことは抜きにして……。貴方は、ただ甘えたいだけなんでしょう？」

高杉の目が、細まる。

「貴方の周りの女の子は、貴方を崇拜し付き従う、目下の存在でしかなかった。でも私は違った。恐らく、貴方にこんなに強気に刃向

かう女なんて、私だけだったんでしょ。いままで貴方にきつくものを言う女なんていなかった。だから貴方は……」

「うるせえ、黙れ……」

「ただ母親のぬくもりを求めて、私を気に入っているに過ぎないのよ！」

「黙れ！」

高杉の刀が、操を襲う。操はそれをぎりぎりで避けて、怒鳴った。

「いつまでも甘えてんじゃないわよ！ この駄々っ子！」

「うるせえ！」

高杉の左手が伸びた。刀を持たぬ左手が。

「がっ…！」

その手が、操の首を捕らえて木に押しつける。首を絞められ、操の喉が鳴った。

「お前に、お前に俺の何が分かる！」

ぎりぎりと閉められ、操は空気を求めて口を開閉させる。苦し紛れに見た高杉の目は、

何かに怯えているようで。

置いて行かれた子どものように…。…。

(…貴方は…)

耳の奥で、きんつと音がする。

「お前に、この辛さが分かってたまるか！」

(何に怯えているというの?)

苦し紛れに、思い切り足を振り上げた。飛びすさった高杉に刀を向けながら、操はせき込んで肺に空気を送り込む。

「…怖いわね。ゲホッ…。もしかして当たりだったかしら？」

「うるせえ、…それ以上言つと…」

「何を怒っているの？ そんなに答えのど真ん中ついた？」

高杉が、ぎりつと歯を噛み締める。操でも分かる。彼はいま冷静を失い、完全に操のほうが優位に立っている。

「もう私に構うのは止めて。私と貴方は敵同士でしかない。私は貴方を斬らねばならない立場の人間なのよ」

痛む首を押さえて立ち上がる。

「…俺は、お前を…」

「晋助！」

遠くで声がする。この声は、恐らく河上万斎…。

「  
…」

なにも言わずに踵を返し、煙幕に消える高杉に、声を荒げる。

「待ちなさい！」

喧しいバイク音が遠ざかる。もう高杉がこの場にいないことが分かり、操はがくんとへたりこんだ。

「  
…怖かった」

正直、死ぬかと思った。あそこまで強気でいられたのは、理性がとんでしまったからに他ならない。

「  
…可哀想な人」

締められた首を押さえて、呟いた。

「高杉及び黒衣の死に神の存在から、首謀者は鬼兵隊とみて間違いはねえだろう。幸いお上にも妹君にも怪我はねえ。観客の怪我人も少人数に留められた。鬼兵隊の雑魚共は何十人か捕まえだが、問いつめたところそんな大した情報は持ってなかったそうだ」

屯所に戻って、局長、副長、隊長格でも申し送りが行われた。まと

めた書類を読み上げる土方の鼻には絆創膏が貼られており、無茶をしたことが分かる。

「去年に続いて今年もこんな騒ぎがおこっちゃあ、来年から祭りはなくなるかもしれないなあ」

同じく頬や額に絆創膏を貼り付けた近藤が、ぼそりという。

「なくなつたほうがいいでさあ。攘夷浪士の暴れ場なんか、元から絶やせばいい」

「まあ、祭はいいとして……」

全員の視線が、書類に目を落としていた操に向けられる。

操は視線に気づき、顔を上げた。

「んっ？」

「操隊長、どうしたんだい？ その首…」

「え？ 首？」

操の細い首には、締められたあとが生々しく残っていた。

「なにかついてる？」

「手形が不気味なくらいくつきり…」

「ああ。高杉の奴に締められた時に…」

「」「高杉に！」「」

恐らくほぼ全員の声がハモリ、全員が机に身を乗り出した。操はびくつと肩を竦める。

「あ、あの高杉と斬りあったのか!？」

「斬りあって無事だったっーのかい!？」

「よく生きてたな操隊長!」

「つつかあの野郎! 俺等のマドンナを傷物にしゃがって!」

「許さねーぞ! あんちくしょう!」

騒ぐ他の隊長格に、操はやれやれと大きな息をつく。

「…みいさん、最近あいつにちょっかい出されてないですかい？」

床をはってきた沖田が、操に耳うつた。

「ただ私のいた場所にあいつがいただけよ。心配しすぎ」

よしよしと、安心させるように沖田の頭を撫でてやる。

「…姉さん、止めてくれ」

土方に言われて顔を上げれば、打倒高杉を豪打する近藤を含めた隊長格たちが、円陣をくんでいた。

「倒すぞ高杉——っ！」

「おーっ！」

「みんな落ち着きなさいよ！ はしたない！」

「今に見てる高杉の奴ーっ！」

操の話など聞いてやしない。土方が大きな息をつき、操は小さく笑った。

「まあ、もう私のところになんか来やしないでしょっ」

あれだけスタボロに傷つけたのだから。

「今度こそ、嫌ってくれたでしょうっよ」

その油断が、数ヶ月後の大事件に繋がるとは思いもよらなかった。

終

祭り好きもほどほどに

(下)(後書き)

高杉さんの心情を詳しく書いたら？ とアドバイスしてくれたのは、今年大学の心理学科に入学した妹でした。心情書いたらとか言われてここまで高杉さんをぶっ壊す私も私ですが、高杉さんには何処か孤独が付きまといっているように見えて仕方ないので、こんな展開にしました。(↑ほぼ言い訳にしか聞こえない…)

本当にすみませんでした。>(――)＜ 良ければ感想下さい。

## 誰もが誰かを想ってる（前書き）

結局なにがしたいのか分からない代物になってしまいました…。  
今回のタイトル、「誰もが誰かを想ってる」ってどこかで聞いたことあるような気がするんだけど、何処だっけ…。

誰もが誰かを想ってる

早く逃げると、魂が叫ぶ。

それは生まれながらの本能。

無意識に伝わる、危険信号…。

「！」

背にしていた襖から生えた刀が、右の肩に突き刺さる。そのまま吹っ飛んできた襖を避けるように飛びすされば、刀が抜ける際に激痛が走った。

「…な…」

感じるのは甘く柔らかな、どこかで嗅いだことのある匂い。そして…。

「よくも、私の部下を…」

狂気的な、殺意。

話は、10分前にさかのぼる。

似蔵は高杉の命令で、街外れにある宿場で行われる攘夷浪士同士の会合に出席していた。

主に発言するのは高杉より直々に命令を受けてきた万斎なので、似蔵はただ付き添い人として、隅で大人しくしていた。

そんな時だ。真撰組が雪崩れ込んで来たのは。

「ご用意改めである！ 手向かえ致せば容赦なく斬り捨てる！ 無礼すまいぞ！」

太い男の声。会議の会場はあつと言う間に戦場に変わり、あちこちで怒号が飛び交う。

この場所では他の浪士たちも斬ってしまいそうだったので、襖を開け放って他の部屋へ移動した。

全面襖張りの部屋へ出た似蔵は、気配を感じて立ち止まった。

いつの間にか囲まれていた。部屋の出口を四方、刀を持った隊士が構えている。

数にして五人。どうやら、若い隊士のような。

「人斬り岡田似蔵だな！ 逃げ場はない、神妙にしろ！」

似蔵は唇を釣り上げた。人斬り岡田似蔵と分かっているながら、怯まぬこの根性。

誰に鍛えられたか、若いのに大したものだ。

「逃げ場なんて、作りゃいいだけの話さね」

「作れるものなら作ってみろ！ かかれ！」

闘志が一斉にかかってくる。

似蔵はひとまず手前にいた隊士を斬ってから、回転して振り上げられていた刀を叩き落とした。

獲物を無くして一瞬隙が出来た隊士の胴体を、思い切り斬り裂く。

「三ッ木イ！」

どこからか、悲鳴に近い声。

似蔵はその隊士をも斬り裂いて倒したあと、残っている隊士と鏖迫り合いになった。

「よくも、仲間を！」

どうやら、仲間を斬られて立腹しているらしい。

「何を怒っているんだイ？  
ぞ、覚悟の上だろうに…」

お若いの。仲間が斬られることなん

早く逃げろ。

「！」

自分の中で声がする。

己の中の本能が、危険をしらせている。

こんな弱い若僧共にな？ まさか…。

「そんなもんいつも覚悟してる！  
だが俺らが傷つけば…」

後ろに、殺気。

「あの人が悲しむんだ！」

まだ動ける隊士が不意打ちをかけてきたらしい。しかし瞬速の居合  
い術を持つ似蔵に、不意打ちなど効くはずがない。

「ちょこざいな」

罅迫り合いを続けていた隊士を一度突き放し、目に止まらぬ速さで  
不意打ちをかけた隊士に刀を突き刺した。

「尾高！」

その勢いを消さず、最後の一人に刀を振り下ろす。

「終わりだ！」

その時だ。襖から生えた刀が、右肩に突き刺さったのは…。

「よくも、私の部下を…」

怒りを帯びた女の声に、似蔵は聞き覚えがあつた。一旦刀を床に起き、片膝について右肩の傷に触れる。

左肩でなくて良かった。

「佐伯、無事？」

「はい、なんとか…」

低い女の声に、佐伯と呼ばれた隊士が答える。

「桐生、貴方は？」

「自分も平気です。…すみません、隊長…」

隊長と呼ばれた女が、小さく息をついたのが気配で分かる。

「謝らないで。無事なら、今すぐに周防たちを連れて、ここを離れなさい。早く3人の手当てを」

「なっ、出来ません！ 人斬り岡田似蔵の前に、隊長を置いていくなんて！」

目の前で何か一悶着起きている。似蔵は刀を拾って、立ち上がる。

「心配なら、3人を置いて早く戻ってくればいいだけのことよ。…  
お願いだから…」

隊長である女の声が震えている。ただその目は、真っ直ぐに似蔵を  
睨みつけている。

「3人を死なせないで…」

一瞬だけ沈黙があつた。直ぐに衣擦れの音と、重いものを持ち上げ  
る音。

「すぐに戻って来ます！」

「それまでご無事で！」

動ける隊士2人が、3人を連れて行つたのだらう。気配が5人分遠  
ざかる代わりに、女から向けられる殺気が強くなる。

「随分、好かれてるんだねえ…。従順で、真っ直ぐだ」

「大事な部下たちよ。貴方になんて殺させない」

女が刀を構える気配。しかしまあ、何故彼女なのだろう。真撰組隊士なんて、星の数ほどいるだろうに。

「…もうお嬢さんとは、会いたくなかったよ」

「あら、私は会いたかったわ。貴方は私が捕まえる。…私の部下を傷付けた罪は、何よりも重いわよ!」

びりびりと、肌を指すような怒号。しばらく見ない間に9番隊の隊長に就任したという彼女は、大層部下を大事にしているらしい。

相手にしていた隊士たちが、よりによって彼女の部下だったとは、とことんツイてない。

「手柔かに頼むよ…。お嬢さん、いや…近藤操」

。

約、10分前のこと。

10番隊と仕事するのは何回目か、操は思い出せる限り思い出して数えてみようと思ったが、両の指では収まりきらない数になって

早々に止めた。

恐らく、1番隊と同じくらいだろうと呑気に決めつけて、刀を振るう。

山崎が調べ上げた、攘夷浪士たちの会合。大量に浪士たちを検挙出来るであって、みんな意気込んだ。

そんな中で大役を任されたのが、操の9番隊と原田の10番隊だった。

「俺の手柄横取りしないでくれよ、みい姉さん」

「あら、原田君こそ」

そんな風に笑いあって、全員で突入した。

悲鳴と怒号が響く中で、操も原田も刀を振るった。無抵抗の者は峰打ちで気絶させ、手向かう者は容赦なく斬り捨てた。

半分以上斬ったかと、思った時…。

「三ッ木イ！」

どこからか、部下を呼ぶ悲鳴。慌てて顔を巡らせると、開いた襖の奥に部下が倒れ伏しているのが見えた。

「…周防…？」

9番隊最年少の周防も、床に倒れ伏していた。

…なにをしているの、貴方たち…。

今は昼寝の時間じゃ…。

思考が停止しかけた操の目に、佐伯と鰐迫り合いになる似蔵が飛び込んでくる。

幕末四大人斬りの一人である岡田似蔵を、平隊士の彼らが倒せるわけがない。

奴が、大事な部下たちを…。

それ以降は殆ど無意識だった。走り出し、襖ごと似蔵を刺したのも、握った刀に鈍い感触を感じたと共に怒り任せに襖を蹴り飛ばしたのも…。

操を我に返らせたのは、床に倒れ伏す4人の部下たちだった。

「よくも、私の部下たちを…」

一見無傷な佐伯と、顔をしかめて立ち上がる桐生は大事なようだ。

2人に重傷を負っている3人を連れ出して貰い、刀を握って立ち上がった似蔵と対峙する。

もう会いたくなかったと、似蔵は言った。

私は会いたかったわと、操は返した。

「私の部下を傷付けた罪は、何よりも重いわよ！」

いつでも動けるように、僅かに腰を落とす。

「手柔かに頼むよ……。お嬢さん、いや……近藤操」

「無理。貴方は絶対に許さないわ」

言い様、駆け出した操の刀が似蔵のものとぶつかり、甲高い音を立てる。ぎりぎりと鏑迫り合いが続き、似蔵は冷や汗を流しながら目の前の操に語る。

「随分勇ましくなったね…。お嬢さん」

「貴方のお陰よっ！」

間合いを取ろうとした瞬間右側から物凄い風圧を感じ、似蔵は勘だけで顔を仰け反らせた。

今まで顔があった場所を、操の足が風鳴りを上げて通り過ぎる。

彼女は全身これすなわち武器。

避けなかったらどうなったか、恐ろしくて身震いがした。

「私を、人を斬ってもなにも思わない獣にしてくれたのは貴方だったはずよ」

「そうだったねえ…」

「貴方にはずっとお礼がしたいと思っていたの。逮捕という形でね」

「お嬢さん、それお礼って言わない…」

「知らないわ」

冷たく言い放ち、操はまた刀を構える。

「隊長！　只今戻りました！」

先ほど感じていた気配が二つ。傷ついた者たちを運び出した隊士たちが、戻ってきたのだろう。

「貴方たちは下がっていて。こいつだけは私がやるわ」

彼女を倒して、また二人倒さなければこの場を離れることは出来ない。

参ったなとつぶやき、似蔵は刀を構えてかけだそうとした。

が…。

「似蔵殿！　逃げるでござるよー！」

怒号と共に、屋敷の中を煙幕が走っていく。一瞬にして、辺りは真っ白な煙に包まれた。

「なっ、煙幕！」

「隊長、避難を！」

隊士二人が叫ぶが、操は答えない。冷静に周りの気配を探り、似蔵が脱出したことを確認する。

（逃げるでござるよ…？）

そんな口調で話す人間を、操は一人しか知らない。そしてその人間が、今までどうやって現場から逃走していたかを思い出し、無意識に体が動いていた。

「操たいちよ…あれ？」

煙幕が消えかけた部屋には、操はいなかった。

一方、屋敷の外。運転するバイクの後方に似蔵を乗せた万斉は、そのまま真撰組隊士を蹴散らしてバイクを走らせた。それを確認し、原田が悔しそうな声をだす。

「くそっ、逃げられる…！」

「みんなどいて！」

怒鳴り声で振り向けば、操が自分の何倍もあるバイクに跨がっていた。

真撰組に数台あるうちの一台。大きいが、白バイのようなものだ。

「こ、近藤隊長！？」

「貴方たちはここをお願い！ 原田君！ 後は任せたわよ！」

いいさま、操はけたたましい音を立ててバイクを走らせた。

「おうよ！ 気をつけろよ！」

声の限り叫んだが、操に届いたかは分からない。

「まさか見つかるなんてねえ……」

「情報がどこかで漏れたか、まあ過ぎたことでござるよ」

バイクの後部座席に座っていた似蔵は、ふと何かを嗅ぎ付けて気配をよんだ。

「バイクが一台……」

「は？」

「追われてるよ」

サイドミラーには、確かに一台のバイクが映っていた。

「真撰組かイ…？」

「ああ…。それも」

参ったなと言わんばかりに、万斉は息をついた。

「近藤操でござる」

ひくりと、似蔵の顔が引き攣る。べしべしと急かすように、万斉の

肩を叩いた。

「逃げて逃げて。早く」

「そんなに彼女と刀を合わせるのが嫌でござるか？」

「万斉さんはやり合ったことがないから分からないんだよ、彼女の怖さ」

「いや、あるでござるよ」

「どう思った？」

問われ、万斉は黙り込む。

「…確かに、もう二度とごめんでござるな」

いいさま、万斉はアクセルをふかした。スピードを上げ、真っ直ぐ行くと見せ掛けて右へ急カーブ。

「おっと」と……」

一つしかない腕で、似蔵はバイクにしがみついた。

「っち……！」

曲がりきれずに直進してしまった操は、ふと坂道を見付けて目を細めた。

彼女に、江戸で知らない道などない。

「…まいたでござるか？」

「みただねえ…。あのままおびき寄せて高杉さんのところに連れていけば喜ぶだろうけど…」

「拙者は相手にするの嫌でござるよ」

似蔵は苦笑したものの、すぐにそれを打ち消した。

「…上だ！」

坂の上に、操のバイク。そのバイクが、落下してくる。

「うおっ！」

慌ててアクセルをふかす万斉。今まで二人のバイクがあつた場所に、操のバイクが落下する。

「っゝゝ！　なんて無茶するんだイあのお嬢さんは…」

「…エンジンが焼け付きそうでごさる…」

泣き笑い気味に万斉が言う。操のバイクは一定の距離を保ってすぐ後ろにあり、サイドミラーで彼女の顔が見える程だ。

「…おーっと…」

サイドミラーに写る操が、何かを取り出している。

「…やな予感がするんだけど、気のせいかイ？」

「いんや、的中でござるよ…」

操が取り出したのは、バズーカ砲だった。

「おわわ…！」

ドガンドガンと打ち放たれるバズーカから左右にバイクを走らせて避けたものの、近くで爆発する地面に辟易してしまう。

「お嬢さんは片手打ちしてるのかイ？」

「両手打ちでござるな。跨ったまま立ち上がってるでござる…。一体どこであんなテクニックを…」

伊達に出来る技ではない。強靱なバランス感覚がなければ、走行中のバイクに立ち上がるなど…。

「捕まってるでござるよ」

また急カーブ。森のある公園へ入っていく。一旦操をまくことに成功し、森の広場に隠したヘリへバイクごと乗せる。

「よし、出…」

ドガンっ！

爆風がドアの開け放ったへりを襲い、万斉と似蔵は手短な手摺りへ捕まる。

「私から逃げようなんて、いい度胸じゃないの」

バズーカを下ろした操がバイクを降り、草を鳴らして歩み寄る。

「もう追いついたでござるか」

「あれだけ大きなエンジン音響かせてれば、場所も分かるわ」

「随分乱暴な運転するんだねえ、お嬢さん」

「それでも真撰組一のライダーなのよ」

かわいらしく首を傾げて見せた操だったが、その目が、恐ろしいほどに怒りの感情をたたえて細められた。

「貴方にはまた会いたいと思っていたのよ、岡田似蔵。なのに逃げるなんて酷いじゃない」

「俺ももう会いたくなかったんだってば。お嬢さん」

「あら、いけず。そんなこと言われたら、泣いちゃうわよ」

がちやりと、バズーカを肩に担ぐ操。

「どこかであいまみえたことでも？」

万斉が、不思議そうに似蔵に問いかける。

「昔、一度だけね」

「檻の中で昔話でもしましょうか。とりあえず、お縄についてときなさい」

強気な操に、万斉はふっと鼻で笑った。

「…なにが可笑しいの？」

「いや、お縄につくのはお主ではないかと思つてな」

「寝言は布団の中で…」

その時、操とへりの周りをぐるりと浪士たちが取り囲んだ。見覚えのある面子から、鬼兵隊の雑魚共だと操は判断する。

「お主を連れ帰れば、晋助は泣いて喜ぼう」

「別の意味で泣かしてあげるわよ。大事な幹部が二人も逮捕されれば、流石の総統殿も泣くでしょうよ」

いいざま、操はバズーカのトリガを押した。万斉と似蔵は構えたが、砲弾は操の前方でなく後方の浪士の中へ飛んでいく。

ドガン！

「ぎゃあー！」

不意打ちを喰らった浪士たちが、悲鳴を上げた。

「  
…あ  
」

操は情けない声を出し、

「前後間違えた」

「お嬢さん、素でやってるのかい…？」

あっさりと緊迫した空気を破壊した操に、突っ込む似蔵。

「今度はそうもいかないわよ！」

今度はしっかりと構え、へりへ放つ。へりにぶつかりかけた砲弾を、似蔵が切り裂いた。

ドガン……！

砲弾が空中で爆発し、土煙が舞う。その土煙から、飛び立ったヘリが姿を現した。

操はもう一発放ったが、もはや届かない。

「ち……」

舌打ちして、バズーカを下ろす。そして自分を取り囲む大量の浪士に目をやった。

「どうする？ おいてかれたわよ？」

「貴様を倒して帰るだけだ！」

浪士たちは刀を引き抜き、操はまたバズーカを構えた。空を見れば、へりは空の点になってしまっている。

「…追い詰めたと思ったんだけどなあ」

ぼんやり呟いて、トリガを引いた。

ガッン！

砲弾は、また後方の浪士の中へ飛んでいく。

「あ…。また間違えた」

今日はどこか、抜けているらしい。

あつさりと倒した浪士たち全員を頓所に連れ帰り、操は一人、喫煙所の縁側に腰かけていた。

お気に入り煙管はその手にはなく、星がわずかに見える空をぼんやりと眺めているだけだった。

ふいに後ろからギシギシと木が軋む音がして誰か近付いてくると分かったが、土方ではない。

「珍しいわね。原田君が煙草吸いに来るなんて」

「たまに吸いたくなるんだよ」

よいしょと、原田は操の隣に腰掛ける。

「どうだい？ 隊士たちの容体は」

「血の出は激しかったけど、大事はないみたい。当分御用改めはお預けね」

ふふつと操は笑う。その笑顔に、元気がないことに原田が気付いた。

「そんな顔なんだなあ」

「え？」

「いや、前に9番隊の連中からみい姉さんの自慢話をたんまり聞かされた時にさ。神妙な面持ちで言ってたんだ」

『俺らが怪我すると操隊長が心配して悲しそうな顔するから、なに

がなんでも怪我はしないって決めてるんです！ 元気な姿を見せるだけで、操隊長は花が咲いたように笑ってくれるんですよ！」

最初は、ノロケかと突っ込みたかったが、操が彼らを大事にしているようにどれだけ彼らが操を大切にしているかを痛感して、絶句したのを覚えている。

「…彼らが、そんなことを言ったの？」

「おうよ。どんなにみい姉さんを大事にしているか、ひしひしと伝わってきたよ」

操は信じられぬように目を瞬かせていたが、やがて嬉しそうにふつと笑う。

「…バカな人たちね」

「そう言うなって。姉さんに陶醉しまくってるいい奴らじゃないか」

「そうね…。私なんかのためじゃなくて、自分のために自分を守ってほしいのに」

悲しそうに俯く操と対象的に、原田は手を後ろにやって全体重をかけ、のけぞって空を見上げた。

「じゃあ、みい姉さんはなんで真撰組にいるんだい？」

「私は…あ」

息を飲む操に、原田はにかりと笑いかける。

「同じなんだよ。みんな思うことは」

「…そっか」

操は肩を揺らして、ふふつと笑った。今度は心からの、嬉しそうな笑みだった。

「みんな同じか」

大事な人たちを見守っていたいから。

大好きな人に笑ってもらいたいから。

大切な人のそばにいたいから。

真撰組にいる理由は、みんな同じ。

誰もが、誰かを想っているからだ。

終

誰もが誰かを想ってる（後書き）

小説を書く上で何が一番面倒くさいかって、あまり登場しない脇役キャラの名前を考えることです。今回操の部下である9番隊隊士の名前はちよろつと遊び心を加えて名付けたんですが、やはり面倒くさかったです。（笑）

あ、「意志を継ぐ者」の松光がかまっ娘倶楽部で働いたらどんな源氏名になるのかを募集しています。（土曜日くらいまで）いい源氏名があれば、玖月に教えて下さい

> (――) <

## 隊長の威厳（前書き）

「誰もが誰かを想ってる」の後日談です。当分前に考えてた代物です。

そして短いです。

「BLEACH」に出てくる日番谷隊長と藍染隊長…？ の台詞を  
拝借（立派な引用です）しました。

## 隊長の威厳

「…え。みい姉？」

呼ばれて、ふと我に返った。

どうやらぼうつとしていたらしい。振り向けば、湯飲みを二つ持った近藤がいた。

「勲…。ごめんなさい。考え事してた」

「いいよ。はい」

笑顔で湯飲みを操に渡し、隣に腰掛ける近藤。受け取った湯飲みはじんわりと温かく、いい香りがした。

「九番隊の調子はどうだい？」

「順調みたい。さっき私が作ったお粥完食してくれたわ」

そう返すと、

「そうかそうか。それは良かった」

至極嬉しそうに笑い、俺も食べたいなあ、みい姉のお粥…と呟かれた。

「随分、深く考えてたんだね」

「どっしってっ」

「葉が燃え尽きてるよ」

ふと見れば、煙管の中で燃えていた葉が、既に灰になってしまっている。

「ああ……」

他人事のように呟き、煙管を逆さまにして葉を落とした。

「そんなに思い詰めることかい？」

「うん……。まあね……」

煙管を懷にしまい、操は呟いた。

「私には、まだ九番隊隊長としての責任を背負いきれてないんだって…ね」

そんなやりとりがあったのは、数日前のこと。

久しぶりに謁見した將軍に操は元氣かと聞かれ、近藤は無意識にあのやりとりを思い出した。正直、元氣とは言えない状態だが、將軍には言えない。

「はい。み…姉は変わらず、元氣でやっています」

「そっか…。良かった」

ほっと安心したように息をつく茂茂。彼もまた操を気に入っていることを、近藤は知っている。

「この間のご用改めで、部下を傷つけられて怒ったって聞いて…。心配してたんだ。落ち込んでるんじゃないかって」

「まあ、多少ふさがぎ込んではおりましたが…。その部下も順調に回復しておりますし…」

「いや、操自身のことなんだ」

よく分からず首を傾げると、茂茂はどう説明したらよいか分からないように頬をかいた。

「責任がどうか…言ってなかったかい？」

『九番隊隊長としての責任を背負いきれてないんだって…』

（あ…）

操の言葉を思い出し、はいと頷く。

「…以前、父に聞いた話なんだけどね…。まだ真撰組が創立したてのころ、私の誕生日を祝ってくれたことがあったじゃないか。君と、操と、土方で」

数年前、茂茂の誕生日会に三人して呼ばれ、何十人もの幕吏とともに大宴会をひらいた覚えがある。当時から將軍たるものが嫌いだった操は、終始不機嫌だったものだ。

「その時、父が操に言ったそうだ。『憎悪無き刃は翼無き鷲と同じ。』

責任感で振る刃は敵には届かない』って」

近藤は茂茂が何をいわんとしているのか分からず、ただ黙って聞いていた。

「操はなんて答えたと思う？」

「…なんと？」

「『責任だけを刃に乗せて、刀を振るのが隊長です。憎しみで刀を振るのはただの薄汚れた暴力です。私共はそれを、戦いとは呼びません』って」

近藤は成る程と頷いた。だから姉はあの時、あんなことを言ったのだ。

「だから操、落ち込んでないかと思って…」

杞憂だったねと、茂茂は笑う。なんだかんだ言ってこの人も姉を理解してくれているのだと、近藤は嬉しくなった。

「ふうん。あの馬鹿息子がね」

白い煙を吐き出しながら、操はそう言った。馬鹿息子、あの男、將軍たるものが大嫌いな操は、茂茂を本人の前以外で名前で呼ぶことはない。

「私のなにを理解してるつもりなのかしら、と言いたいところだけ

ど、理解されちゃってるようね」

屯所に戻って姉にそのことを話すと、不機嫌丸出してそう返ってきた。もともと將軍という単語も聞くのも嫌いな操だ。それに茂茂がそう話していたと加われば、不機嫌も底なしというものだ。

「この間の言葉は、そういうことだったんだね」

「…彼らが斬られて、頭の中が真っ白になった。その白はすぐに真っ黒になって…あの時私の刀に乗ってたのは憎しみだった。私はあの場所に戦いに行ったんじゃない。暴力で奴を叩っ斬りに行ったんだよ…。私はまだ隊長として相応しくない…。私はまだ、隊長の器じゃない…」

頭をかかえ、辛そうに吐き出す操。近藤はそんな姉の細い肩に、手を置いた。

「重いよな。責任ってのは」

でもと、近藤は笑った。

「その責任に耐えきることができるんだから、みい姉は立派な隊長だよ。俺なんか見てくれよ。みい姉の上に立つ立場なのに、この情けなさ！」

それは自嘲なのか、操は仕方なさそうに笑って、肩をおろした。

「でも貴方のその強さが、みんなを強くするんでしょう？」

全てを統べる力があるからこそ、上に立てる。

「貴方だから、みんなついてくるのよ」

その背に負うは、隊長の威厳。

選ばれし者しか背負うことの出来ぬ、

真撰組の、形ある誇り。

終

## 隊長の威厳（後書き）

もともとジャンプって銀魂とONE PEACEしか読まなかったんですが、あの回だけは台詞の格好良さに目が止まってしまいました。「この台詞を使って小説を書きたい！」と思い温め続けてきた小説がこれです。

私は「BLEACH」を読んだことがなかったので、あのキャラは誰なのか友人に聞いてみたところ、あれは「日番谷隊長と藍染隊長」であるとのことでした。なんで隊長同士で戦ってたんの？ と疑問が生じた私に友人が延々と語ってくれました。…いまいちよくわからなかったけど…。

## 記憶喪失 前編（前書き）

月曜日のより魂見ましたか？ あの話を見て、誰かを記憶喪失にさせるのもいいかなと思って検討したんですが、松光や姫華を記憶喪失にさせるとなんだか物凄く面倒くさいことになったので（↑コラ！）操になつてもらいました。 ほぼ「どうでもいいことに限って……」のドクターの台詞を頂いてます。それから短いし展開が早過ぎます。（↑ダメじゃん！）

それから、ちよつとしたR15要素を含んでいます。苦手な方は気をつけて下さい。本当に気をつけて下さい！（↑大事なことなので二回言いました）

## 記憶喪失 前編

子供の泣き声が聞こえる。

朦朧とする意識のなかで、無事だったんだとぼんやり思う。

（よかった……）

だが、なにがだろう。

「みい姉！　しっかりしてくれ！」

近くで声がする。そんなに大きな声出さなくなっただって大丈夫よ。

ところで、

みい姉って、誰のこと？

通行人を吹っ飛ばす勢いで、土方と沖田は病院の廊下を走った。病室の前で近藤が指を合わせて座っており、二人に気付いて泣きそうな顔をあげた。

「近藤さん！　姉さんが事故ったって…」

「ああ、飛び出した子供を庇って…」

「それで、無事なんですかイ？」

沖田が心配そうに聞いたとき、病室の扉ががらりと開いた。

「！」

「無事だよ。命に別状はない」

医者言葉に、揃って胸を撫で下ろす。

「だが…」

「みい姉！ 大丈夫か、心配したんだよ！」

話を聞かず、三人して病室になだれ込む。操は頭に包帯を巻いているものの、上体を起こしていた。

「みいさん、たいしたことなくてよかったでさあ」

「慌てて駆け付けちゃったよ」

操は何処かぼうつとした瞳で、三人を見比べた。そして信じられないことを言った。

「貴方たち、誰？」

空気が凍った。操の肩に手をおき、医者が説明する。

「怪我はどうってことないんだけどね、頭を強く打って、記憶を無くしているらしい」

「んな…マジかよ…」

息を呑み、言葉を失う土方…。

「事故前後の記憶が少し消えるってのはよくあるんだが、彼女の都合自分の存在も忘れちゃってるみたいだね。ちよつとやつかいだな」

「みいさん、俺のことも忘れちゃったんですかイ？」

沖田がベッドに近寄るが、操は目を細めて、首を振った。

「しめんなさい…」

「まあ、人間の記憶ってのは木の枝のように複雑に絡み合っている。その一本でもざわめかせれば他の枝も除除に動き始めて行きますよ。焦らず気長に見ていきましよう」

「ここが真撰組の屯所だよ。みい姉はここで暮らしてたんだ」

屯所に帰ると、操は物珍げに辺りを見回した。本当に自分がここに住んでいたとは信じられないらしい。

「大きなお屋敷…。私本当に、ここに？」

「うん。部屋に案内するよ」

操の部屋は、いつも綺麗に片付いている。操は部屋の中でしばらくキョロキョロしていたが、文机に置かれていた写真に手を伸ばした。

「これ…」

「ああ、みい姉が遠征から帰ってきた時に撮ったやつだよ」

写真の中では、操を中心に近藤や沖田、土方が酔って笑っている。

「いい笑顔。私、ここが大好きなのね」

まるで他人事のような口調。

「…なにも思い出さないかい？」

操はふるふると首を振り、「ごめんなさいと呟いた。

「気にすることあねえよ。町でも歩いてくればいい。姉さんは人気者だからな」

戸惑ったように近藤を見上げる操。近藤は笑って、手を伸ばした。

「行こうか」

「賑やかなのね」

「江戸でも、一、二を争う賑やかさだよ。よくデートしたんだ」

「まあ、誰と？」

そう問うと、近藤は照れたように顔を赤くした。

「…みい姉と」

きょとした顔が返ってきた。

「…姉弟なの？」

「ああ、うん。まあ…、なんて言うんだろ。ただ一緒に買い物行くだけなんだけど、みい姉はいつもデートだって…」

しどろもどろになる近藤に、操はクスクスと笑う。

「勲…さん。本当に私の弟なの？ 私の旦那様じゃなくて？」

「だっ、弟だよ！ 似てないけど、でかいけど、みい姉の弟だよ」

ほんとだよと繋げる近藤に、操はまた笑う。

「ごめんなさい、冗談よ。貴方があまりにも私を大事にしてくれるから…」

「うん、みんなからはシスコンだって言われる」

へへっと苦笑する近藤。操が小さな笑みを浮かべた時、こつんと何かで地を叩く音がした。

「おや、こんにちは。操殿、近藤殿」

松光が杖をつきながら、にこやかに笑う。

「おお、松光殿」

ちょうどいいとばかりに現れた松光に近寄り、近藤は手を引っ張って姉の前に連れて行った。

「わ…！ どうなさいました？ 近藤殿」

「みい姉！ 万事屋のお兄さんの、吉田松光さんだよ。なにか思い出さないかい？」

「思い出す？」

きょとんとした表情を浮かべる松光。

「子供庇って事故にあって、記憶を全部無くしちゃったんだ」

「えっ、本当ですか？ 操殿…」

松光は目を開けて、驚いたそぶりを見せた。

「で、どう？」

再度問うが、操は首を振った。

「ごめんなさい…」

そつかと残念そうに近藤は肩を落としたが、松光は優しく笑いかけた。

「心配することはありませんよ、操殿。大事な記憶というのは、心に突き刺さっているものです。そのうち思い出せましょう」

「ええ、ありがとう…。えっと…」

「松光。そう呼んでくれてありがとうございました」

「…松光さん、ありがとう」

にこりと笑みを浮かべ、松光は杖をつく。

「なにかあつたら遠慮なく言ってください。俺は万事屋におります故」

「ああ、ありがとう松光殿」

それではと一礼して、松光は杖をついて去って行った。

その後ろ姿に、操はきよんとする。

「目が見えないの？ 松光さん……」

「うん。見えないって本人は言ってるけど、でも見えてるような動きするんだもんなあ……。すごいよ、俺より強いんだよ。松光殿」

そうなの？ と操が笑う。少しずつ笑みが戻りつつある姉が嬉しくて、近藤もつられて笑った。

「小太郎！」

僧侶の姿で錫杖をついていた桂は、不意に名前を呼ばれて振り返った。

振り返った矢先ぐいと腰を引かれ、気づいた時には、松光に担ぎ上げられて屋根の上にいた。

「…兄さん！？ 突然どうしたんだ！？」

松光が真撰組であつたら、桂はあつと言つ間に捕縛されていた早業だ。

びつくりして目を瞬かせる桂を一旦屋根に下ろし、松光は弟の手を引いて屋根を渡る。

「ちょ…、兄さん！？」

「操殿が大変なんだ。詳しいことは人気がないところで話す」

不思議そうに眉を寄せていた桂が、はつと息を飲んだ。

「みい姉、ほらほら見て！ 駄菓子いっぱい！」

子供のようにはしゃぐ近藤を見て、操は目を細めて笑った。真撰組という組織の局長だと聞いたが、これではまるで子供のようなのだ。

「みんなになにか買って行こう！ 何がいいかな」

あちこち見て回る近藤にもう一度笑った操だったが、路地からのび

た手が彼女の口をふさぎ、腰を引いて路地へ連れ込んだ。

「！」

悲鳴を上げるにも口は塞がれ、手足をばたつかせても腰に絡んだ腕は解けない。

「操」

耳元で呼ばれ、びくりと体が強張る。大通りから見えないほど奥に連れ込まれ、やっと腕が離れた。

慌てて距離を置けば、そこには桂が立っていた。

「操、松光の兄さんから聞いたぞ！ 記憶を無くしたと…。俺のことも忘れてしまったのか！」

詰め寄られ、操は息を飲む。

「俺を、桂小太郎を忘れたというのか！」

名乗られた名前を、操は恐る恐る口にする。

「そうだ、小太郎だ。あんなに愛していると言ってくれたではないか」

泣きそうな桂に申し訳ないとは思いつつも、覚えていないのだから仕方がない。

「...ごめんなさ...」

言いかけた操の肩に手を起き、桂は顎を掴んで口づけた。操は目を見開き、硬直する。

「や…っ！」

抗おうとしたけれど、肩を押さえつけた手がそれを許さない。

「ん…あ…」

濃厚なキスに目眩がする。

自分は確かにこのキスを知っている。

知っているはずだった。

「嫌！」

振った手が、桂の頬を打った。乾いた音が響き、操は乱れた息を整えながら桂との距離を開ける。

桂は叩かれた姿勢のまま、動かなかった。

「お前を失いたくない…」

泣き出しそうな顔で操を見つめたあと、桂は路地の影に消えて行った。操は暫く呆然としていたが、自分と呼ぶ声で我に返った。

「みい姉ー！ みい姉ー！ 何処行っただー！？」

「ごめんなさい勲さん…。ここにいますわ」

ひよこりと路地から顔を出した操に、近藤は安心したのか涙目で歩みよってきた。

「いたあ！ ごめんなみい姉。俺夢中になっちまって…」

「いいのよ、勲さん。それより、あの…」

「ん？」

「勲さん、桂小太郎って人、知ってる？」

近藤の顔から笑みが消えた。

「知っているけど…」

「どんな人？」

「どんなって、攘夷浪士だよ。悪い奴ではないんだが、俺ら真撰組の敵さ」

敵…と呟いた操に、近藤が首を傾げる。

「どうしてだい？　まさか、会ったのか？」

操は慌てて、首を振った。

「違うの。通りすがりの人が呟いてて…。どこかで聞いたことあるような気がする…」

出任せを言つと、そうかと近藤は頷いた。

「みい姉は奴を追ってたからなあ。屯所に手配写真があるよ、見るかいい？」

「ええ」

頷く操の手を引いて、近藤は帰ろうと促す。

操はキスされた唇に手をあて、目を伏せた。

真撰組の敵なら、何故彼は…。

愛していたなんて、言ったのだろう…。

続く

## 記憶喪失 前編（後書き）

急いで書くと、展開が早くなっていけません。時間に余裕が必要で  
すよね…。すんません、マジで…（泣）

次回後編に続きます。これよりもマシなのが書ければいいです。

感想下さい。

## 記憶喪失 後編（前書き）

前編後編分けるところを間違えた気がします…。ちくしょー…。  
桂さんも色んな意味で壊れてるし…。ごめんなさい…。>（――）  
<

## 記憶喪失 後編

「酒が足りんぞ兄さん！」

「小太郎、もう止めておきなさい……」

その日の夜、桂は万事屋を訪れて酒を飲んでいた。銀時らは都合よく仕事で出かけており、留守番を任された定春が、床で丸くなっている。

操と桂の仲を知っているのは松光のみなので、ちょうど良かったなと松光は思う。

「あんなに愛していると言ってくれていたのに……」

「…あのなあ小太郎。不可抗力だろう？ 操殿だって忘れたくて忘れたわけじゃないのだから」

忘れられてしまったことが相当ショックだったらしく、桂はやけ酒に入っている。

「分かっている、そんなこと…」

それでも、悲しいのだ。

「…教えないほうが、良かったかな」

「後で知ったほうがよっぽどショックだ」

ぐいっと酒を飲み干し、桂は杯を、松光へと差し出した。

松光は ” 気 ” のおかげで杯の位置も、中身が空だということも分かるが、この弟は時折己の目が使い物にならないことを忘れていたのではないかと思う。

「本当に大事な記憶っていうのは、心に残っているものだよ。そのうち思い出すから、それまで待ちなさい」

杯に酒を注いでやり、松光は言う。桂は酒を飲み干し、静かに杯を机に置いた。

「…置いて行かれた気分だ」

泣き出しそうな桂。こんなに弱った弟を、松光は久しぶりに見る。

「操殿を信じなさい小太郎。操殿だって…」

「信じてるさ！ 信じてないわけがないだろう！」

がたんと机を叩く桂。定春が驚いて顔をあげ、きょんとして二人を見た。

「…記憶喪失なんざ時間が解決するだろうよ。少しは落ち着…」

ずいと杯が差し出される。注げというのだ。

「…もういい加減に…」

さらにずいと突き出され、仕方なく注いでやる。

「操がもし俺を思い出すことがなかったら…」

「かつたら？」

「俺は立ち直れん…」

今にも泣き出しそうな顔で、桂はそう言った。

「…操殿はすごいな。お前をここまで追い詰める女性なんて、見たことがないよ」

松光の言葉に、桂ははかなく笑って、そうだなと頷いた。

「兄貴、こんなところで寝たら風邪ひくぞー」

銀時に揺すられて、松光は目を開けた。といっても目に光は飛び込んでこない。

桂の愚痴を聞いていたら、ソファーに座ったまま寝入ってしまったようだ。

「ああ…。寝てしまった…」

変な態勢にしすぎてぎしぎし痛む首を押さえながら、イテテ…と呟く。

「お帰り銀時。いつ帰って来たんだい？」

「今さっきさ。疲れてたみたいだから、神樂はぱっつあん家で休ませてもらってる。…ってか、なんで俺がいないのに二人で酒飲んでるわけ？ 四男はハブですかコノヤロー」

「悪い悪い。小太郎が、二人で飲もうと言ってってくれてな」

「そのヅラも、こんなところで呑気に寝やがってよ」

桂もまた、ソファーの手もたれに頭を乗せて、寝入っていた。

「おーい、風邪ひくぞ」

べしりと銀時に叩かれて流れた桂の髪が、顔を隠して些か不気味だ。

「おーい、ヅラあ」

銀時が揺すつてもおきない桂に、松光はため息をつく。

「銀時、布団を一組出してくれるかい？」

「おー」

桂に肩をかし、ズルズルと和室に引きずっていく。

「出来たぜ、兄貴」

「ありがとう」

桂を布団に転がし、毛布をかけてやる。上掛けは流石に皺になって

しまつたろつとまめまめしく畳んでやった。

「なー、兄貴ー」

「んー？」

「茶あ飲むかー？」

「ああ、頂こうか」

のんびりとした呼びかけに答え、畳んだ上掛けを枕元に置いた時だった。

「う…」

眠っている桂が、何か呟いた。

「操……」

閉ざされた瞳から、涙が一筋流れ落ちる。それを気配で感じ取った松光は絶句して、静かに部屋を出た。

「重傷だなこりゃ……」

でかでかと息をつくとき、散乱したテーブルを片づけていた銀時が、不思議そうに声をかけた。

「どうかしたか？」

「んー？ いや、難儀だなと思ってな」

銀時は首を傾げたが、あまり気にしていないようで、ビール瓶を抱えたまま台所へ消える。

その気配を追ってから、大きな欠伸を一つ漏らす。正確に何時まで起きていたかは分からないが、かなり遅くまで桂の愚痴を聞いている。己も一眠りしたい。

「兄貴ー、茶あはいったぞー」

「ああ、ありがとう」

銀時が、盆に乗せた茶をテーブルに乗せた時だった。ピンポンとチャイムが万事屋に響いた。

「ほーい」

銀時が駆け寄り扉を開くと、そこには着物姿の操がいた。

「あ、姉御！」

「…おはようございます、…ごめんなさい、朝早くに…」

操は控えめに言った。

銀時が驚きのあまり、招き入れることも忘れて問いたです。

「姉御！ 記憶喪失って聞いたぜ？ 俺のこと忘れちゃったのか？」

「…ごめんなさい」

申し訳なさそうに肩を竦める操に、銀時はそっか…と淋しそうに肩を落とす。松光がその肩を引いた。

「困らせてはいけないよ、銀時。いかがなさいました？ 操殿」

「あ…、松光さんに聞きたいことがあって…」

俺に…？ と首を傾げる松光。銀時が、気を利かせて口を開く。

「兄貴、俺はババアのとこで朝ごはん食べてるから、姉御の話聞いてやってくれ」

「あ、気を使わせてごめんなさい。…えっと」

「旦那、そう呼んでくれた」

ありがとうと愛称を口にした操に銀時はにっと笑い、静かに玄関を閉めて出ていった。

「…優しい人…。松光さんの弟さん？」

「ええ、かわいい子ですよ。どうぞ、上がってください」

お邪魔しますと雪駄を脱ぐ操。ソファーに戻ろうとした松光の背中に、操は語りかける。

「松光さん」

「なにか？」

「桂小太郎って人、知ってる？」

茶をいれようと延ばした松光の手が、止まった。

「…はい？」

「知ってる？」

「知っていますが…。あの子がどうかしましたか？」

桂が寝ている和室のほうを、つい見てしまう。

「教えてほしいの。彼のこと」

「どうしてまた…。彼のことなんか…」

とりあえず座ってもらい、茶をいれた。

「昨日会ったの。松光さんと別れた後に…」

茶を飲みかけた松光の手が止まる。ということは松光が彼に操が記憶喪失だと知らせた直後のことだ。

（行動早え…）

「松光さんから私のこと聞いたらしくて…」

「ええ、話しました。…なんにもされませんでしたか？」

「路地に連れ込まれて、キスされた」

「ぶっ！」

ついむせてしまい、茶を吹き出してしまった。操が、きゃっと小さな声を上げる。

「あの子は…！ 操殿も随分平然としていますね！」

「え…。悪い人ではないって分かったから…」

桂も桂だが操も操だと、松光は頭を抱えた。

「あの人、私のことをよく知ってた。でもあの方は攘夷浪士で…真撰組の敵だって…。手配書も見たから間違いないの。でも…」

操は目を細めて、俯いた。

「愛してたって…」

「……」

操は顔を上げて、松光を見た。

「松光さんならなにか知ってるんじゃないかって、思ったの」

「知ってと言えば知っていますが…。話していいのですか？ 記憶を持っていた操殿にとっても辛い事実なのですよ？」

「…いいの。話してちょうだい」

どうしてまたと、松光は呟く。

「私の体は、彼のキスを覚えてた…。思い出したいのに、思い出せない。もどかしいの…」

「…分かりました。少し長くなりますが、聞いてください」

操は淡く微笑んで、頷いた。

「…許されない恋、か」

「操殿やこた…桂は酷く悩んでいました。ばれたらとんでもないことになる。それでも、愛しているのだと」

話が終わり、操はすっかりさめきった茶を啜った。

「そっか…。だからあんなに取り乱してたのね」

「…まだなにも、思い出せませんか？」

操は目を伏せ、首を振った。

「…彼ね、私が記憶を無くしたって酷く慌ててた。…悲しそうだった」

操自身が悲しいかのように呟く。

「泣きそうな顔をしていたの。まるで、おいていかれた子供のような…。あんな顔をさせているのは自分だって思うと、胸が苦しくなつて…。もうあんな顔させちゃだめだって思ったの」

「…」

「あの人に笑ってほしいと思っていたのは、そういうことだったんだわ」

記憶は無くしていても、恋心だけは体に残っているのだ。

「松光さん、もし彼に会ったら言っておいて。私は必ず思い出すから、それまで待っていてって」

「はい…分かりました」

松光は頷いておいた。

（言う必要は、ないと思うがな）

和室では、起き出した桂が襖に寄り掛かり、涙を流しながら聞き耳をたてていた。

数日後、自分あてに電話が来たと、仲間に起こされた。あれから酒  
浸りになってしまって、だるい体で受話器をとる。

『やあ、小太郎』

「…兄さん…」

『まだ酒を呑んでるのかい？ いい加減にしなさい。お前は失業し  
た親父か』

訳の分からぬことをまくしたてる松光。酒のせいで思考がまわらな  
い。

「兄さ…」

『今夜十二時、橋の見える土手下で待ち合わせだ。絶対来なさい、いいね』

有無言わず、松光は電話を切った。

「…なんなんだ」

わけのわからないまま、桂は受話器をおいた。

他ならぬ兄の言うことだから聞いておこうと、仕方なく言われた場所に向かった。

アジトに連絡してくるのだから、重要な話でもあるんだろうと思った。

月明かりしかない土手下は暗く、静かだ。

「兄さん、いない……」

いないのかと声をあげかけて、桂は口をつぐんだ。月明かりが指す場所、一人の女がいた。月を見上げていた彼女は、桂を見るなり華がさいたように笑う。

「小太郎」

一瞬思考が停止する。自分はまだ酔っているのだろうか、彼女が、操が、名前を呼んでくれた。

「み」

「小太郎！」

絶句した桂に、操が抱きつく。呆然としていた桂は抱きとめることができず、そのまま操に押し倒される形で土手に転がった。

桂の上に落ちた操は、嬉しそうに桂にキスを落とす。

「…操？ 思い出したのか？」

「ええ、全部思い出したわ！ 忘れてごめんなさい」

以前の彼女であることが分かり、嬉しくて、体を反転させて彼女を土手に押しつける。

「きゃっ！」

「落ち込んだんだぞ、この天女め！」

「不可抗力でしょ。だから謝ってるのに……」

操の言葉を遮るように、何度もキスの雨を降らせる。操は桂の首に手を回して、離れなかった。

「……小太郎」

「ん？」

「ものすごくお酒臭いんだけど…」

「誰のせいだ」

そんなもの知らんとばかりにキスを続ける。

「しかし、どうやって記憶を…」

「所詮は私もブラコンみたい…。勲と散歩してたら攘夷浪士に襲われて、私はなんだかよく分かってなくて勲に護られてただけど、でもあの子のピンチに黙ってられなくて…」

何をしているの？

早く

早く貴方の大事な者を護って

「心の中で声がして……。無くした記憶がなだれ込んできたの。次の瞬間には、浪士たち倒してた」

ふふつと苦笑が漏れた。

「運のわるい奴らだ」

「でも、彼らのお陰で思い出せたのよ。あと三日で思い出せなかったら、私を除隊させようって思ってたみたい、勲」

桂の顔から、笑みが消えた。

「…まだ、思い出さないほうがよかった？」

きっと近藤は、絶好のチャンスと思ったに違いない。大事な姉を危険から離すため、  
そして彼女が思い出すことができないのなら、それにこしたことはないと思っただけに違いない。

「…お前には、真撰組のままでいてほしい。お前が肩書きをなくせば、俺はお前を連れ去って何処までもにげよう。だからお前には…」

「枷であってほしい？」

「ああ」

キスを落とし、ふと顔を上げる。

「そういえば、何故お前がここにいるんだ？ 兄さんに呼ばれて来たはずなのに…」

「私が松光殿に頼んだのよ。いつ電話が盗聴されてるかも分からないでしょう？ だから遠回しに、貴方を呼びだして貰ったの」

「…ずるい女だ」

頂にキスされ、操はくすぐったそうに身をよじる。

「お前に忘れられて、とても悲しかった。もう全てがどうにでもなれと思った…」

「だからやけ酒？」

「お前が悪い」

額をあわせ、ふふつと笑いあう。

「小太郎」

「ん？」

「ただいま」

桂は一瞬不意打ちを食らったような顔をして、それでも笑った。

「おかえり。俺の天女」

終

## 記憶喪失 後編（後書き）

2日に富士急ハイランドに行ってきました！ 戦国BASARAの  
アトラクション楽しかったです。魔王な若本さんに久しぶりに会え  
たー！

ε Ⅱ ム（＊      ）ノ きゃほう！

最近、ONE PEACEのほうでも小説を書きたくて仕方ないで  
す。主役はオリキャラの女の子で、青キジの恋人で…（↑設定は出  
来てるけど、書く余裕がない…）

あ、感想下さい。（↑ついでかよ！）

## 三千世界の鴉を殺し（前書き）

最近操と桂さんをイチャコラさせすぎたかも…。（＊―＊；

あ！

高杉さん誕生日おめでとつづいてます！（一日過ぎてるけど…）

## 三千世界の鴉を殺し

カアカアと鴉の喧しい鳴き声で目が覚めると、隣にあった小さな頭がこちらを向いた。

「おはよう」

久しぶりに会った愛しい女は、にこりと笑ってそう言った。

彼女との逢瀬は、かれこれ二週間ぶりだった。

ある事故で彼女は一時的に全ての記憶を無くし、無事に記憶は戻ったものの、彼女を心配した弟が暫くの間引っ付いて離れなかった。

彼女の弟もやっと安心したのか操は久しぶりに一人で外出することを許されて、関係を知る兄に頼んで、呼び出して貰った。

逢瀬の場を選んだ、この神社の境内社。

今までにも幾度か使っていた場所。

古びた神社の奥にひっそりと建っているから、人の気配は皆無。

会いたくて仕方のなかった細い体を抱きしめて、その芳香を楽しんで、長い話をして、壁に寄り掛かって寄り添ったまま、眠りについた。

今何時だろうか。

外の鴉は、カアカアとやけに喧しい。

「…今何時だ？」

「もうすぐ5時になるところ」

「む…」

まだそんな時間かと、桂は眼をこすった。

鴉もなにも、こんな時間から活動しなくてもよいものを。

「早起きだな…」

「鴉に起こされたのよ」

そう語る操は随分楽しそうだ。桂は体をずらして、操の膝によいしよと頭を乗せる。

「…喧しいな…」

何か獲物でも見つけたのか、鴉の喧騒は留まることをしらない。もういつそ、朝食のカラ揚げにでもしてやろうかと思う。

「…」

操の指が、そつと桂の頭を撫でる。するすると流れる細い指は、眠気を誘うには十分な力があつた。

彼女が記憶を無くして、一度は離れてしまった彼女の手。

もう離してなどやらない。

なにがあるつとも。

「…三千世界の鴉を殺し…」

「え？」

操の手を取って、桂が何事かを口にする。

「主<sup>ぬし</sup>と朝寝がしてみたい……」

「……なにそれ、都々逸<sup>どどいつ</sup>？」

江戸末期、初代の都々逸坊扇歌によって大成された口語による定型詩の名前を口にした操に、桂は半分以上夢の世界に入っている声で呟く。

「温かい布団の中で、朝日の差し込むなか隣で眠るお前の寝顔を見ながら、再びゆっくり眠りにつくのも悪くない……」

「…そうね」

何を酔狂なと思う。

そんな日が来ることはない。時間も、誰の目も気にせず昼まで夢の中にいることなど、不可能に近い。

「…まあ、所詮夢など無いもの強請りだしな」

「貴方が世界を変えてくれたら、叶うかも」

「おお、それでは頑張らなければ…な」

うつうつと呟いた桂の瞼が、ゆっくりと下ろされた。

すうすうと気持ちのよさそうな寝息を立て始めた桂に手を握られたまま、操は小さく唇を吊り上げる。

「主と朝寝がしてみたい…か」

桂に抱きしめられて、温かい同じ布団で眠って、彼の寝顔を見て起きるのも悪くない。

そして彼の温かな腕の中で、また夢の中に誘われるのだ。

「…今はこれで十分よ」

空いている手で、桂の頭を撫でる。今はこうして時間を共に過ごせればいい。

そう、今は。

（眠…）

鴉に起こされたせいで、まだ些か眠い。

もう一眠りしようと思って、操は小さな欠伸をしたのちに目を閉じた。

誰にも邪魔されずに、誰の目も気にせず、何も恐れずに桂と過ごす時間。

それは考えないようにしていたことだった。

所詮それは、

儚い夢でしかないことなのだから。

終

### 三千世界の鴉を殺し（後書き）

作中に出てくる都々逸というのは、江戸末期、初代の都々逸坊扇歌によつて大成された口語による定型詩の名称です。七・七・七・五の音数律に従つて詠むらしいんですが、そんな中でも有名なもの（有名か？）

「三千世界の鴉を殺し 主と朝寝がしてみたい」です。

ちなみにこれを詠んだのが高杉晋作（桂小五郎の説もあり）で、「これ小説に使えんじゃね！」とテンションUPしたのはいいんですが、高杉さんに言わせても桂さんに言わせてもどっちにしろ「主」は操になつてしまうので、無難に桂さんに詠んでもらいました。（笑）使い方間違つてるかもしれないけど、まあいいや…。

## 記念日（前書き）

本日8月18日は、真撰組の創立記念日！ なので便乗して、創立記念日お祝いの話にしました。記念日なのにちよつと暗いです。そんなに凄まじく短いです。

シリアスにしたかったんだか、ギャグにしたかったんだか何がしたいのかさっぱり分からない代物になってしまいました…。

## 記念日

8月18日、夜。

真撰組屯所の宴会場は、いつにないほどガヤガヤと騒がしかった。

8月18日の今日は、真撰組の創立記念日だ。

この記念日を祝わないわけにはいかないと、近藤が隊士全員に召集をかけた。

夜番以外の隊士が全て集まり、今はどんちゃん騒ぎとなっている。

真撰組の創立を祝うというよりは、ただ単に酒が飲めればいいだけなのかも知れない。

「…ふう」

その喧騒の中から、操は逃げるように縁側に出た。

後ろ手にぱたんと襖を閉め、静かに息をつく。

かなりのザルである操は、いくら酒を飲んでも酔うことはない。

だからこそ暴走する弟や土方、そして部下たちのストッパーにならざるを得ず、物凄く疲れるのだ。

「はあ……」

再び、大きなため息。長い間江戸を離れていた操にとって、創立記念日は久しぶりだった。

前に祝ったのは、いつだったか。

その時は、まだ隊士の数も少なくて……。

そしてまだ……、彼がいた。

「……」

騒がしい歓声を背に、縁側に腰掛ける。

そして懷から、薄いフォトアルバムを取り出した。

簪、ピアスに続き、操がいつも持ち歩いている物の一つ。

1ページ目には、まだ幼い頃の自分と弟の写真。

2ページ目には、武州にいたころの土方と沖田。仲の悪さは相変わらず。二人とも互いをにらみ合っている。

そのままペラペラとめくると、何ページ目かにある写真が入っていた。

前回に参加した、真撰組の創立記念日。

酔っ払った近藤、土方、沖田、そして伊東が、赤い顔で写っている。

絡んでいるのは明らかに近藤で、土方は物凄く迷惑そうに押しのけようとしている。

沖田は酒瓶を抱えて幸せそうに笑っており、伊東も近藤に絡まれながらも、赤い顔で酒を飲んでいた。

撮影したのは操だが、この時はいい加減にしろと近藤に怒鳴る土方と、酔っ払ってゆらゆらしていた沖田。そしてそれを見て笑う伊東らの笑い声が、響いていたものだ。

少なくともこの時は、心から笑ってくれていた気がするの……。

伊東はこの中でも、自分の居場所を見つけれなかったのだろうか。

「……鴨太郎……」

ぽつりと呟いた時だった。

「み〜いさんっ！〜！」

「きゃあ〜！」

酔っ払った沖田に後ろから抱きつかれ、操は驚いて悲鳴を上げた。

心臓が飛び出すかと思った。

「総悟君！？　うわあ、お酒臭い。貴方は大人だけど未成年なんだから、ほどほどにしないと」

「ほろほろれすよう…」

すでに呂律が回っていない。仕方ないんだからと苦笑していると、沖田が手元の写真に気付いた。

「…それ」

「え？ ああ、何年か前の記念日に撮ったやつよ。この時も総悟君が酔っちゃって大変だったのよね」

茶化してみたが、抱きついたままの沖田は何も言わない。ただ、腕に込める力が強くなる。

「…総悟君…」

「へえ」

「鴨太郎のこと、怒ってる？」

「…」

沖田はなににも言わず、操の肩に顔を埋めた。

「奴あ、近藤さんを殺そうとしたんでさあ……」

くぐもった声に、操は目を細める。確かにそれは許し難いことだ。  
……だが……。

「けど、『打倒土方』の考えは一緒れたから……。もう一回奴と酒飲んで、土方さんをどう始末するか話し合いたかったね……」

「……ほどほどにね」

苦笑して、よしよしと頭を撫でてやる。

「…みいさん」

「なあに？」

「…奴を助けてやれなくて、ごめんなさい…」

操は一度目を見開いて、悲しそうな笑みを浮かべた。

沖田の頭を抱き寄せて、目を閉じて顔をすりよせた。

「いいのよ…。謝らないで」

しばらく言葉無く、2人は喧騒をBGMに黙り込んでいた。

自分が江戸を離れなければ、

もっと、話をしていたら。

何か変わったのだろうか。

「操隊長う。そんなとこにいないで、舞見せて下さいよー！  
男共じゃ盛り上がりなくってえー！」

障子がカラリと開き、ほどよく酔いつぶれた部下たちがへらへらと笑いながら言う。

「えー、舞うのお？」

「舞ってくださいえ、俺も見たいでさあ」

ねえねえいいでしょうとご機嫌な沖田に袂を引かれ、部下からもお願いしますよと笑みを浮かべられ、操は仕方無さそうに苦笑した。

「仕方ないわねえ……」

そして一言、大事なことを付け加える。

「変態局長が服を着てくれたら、いいわよ」

過去には戻れない。

いくら後悔したって、引きずったって、なにもできやしない。

だから前へ前へ、進むしかないのだ。

「勲！ 服着なさい！」

操の怒鳴り声の一つ、宴会場に響いた。

終

## 記念日（後書き）

ああもう、何がしたいのか何を言いたいのかさっぱり分からない代物に…。（□、；）ギャー！

途中で操が見ている写真は、銀魂キャラクターズブック2に載っているあの写真、という設定です。微笑ましかったので、ネタにさせてもらいました。

ちなみに現在近藤さんは酔っ払って全裸で騒いでいます。服着てくれないと操も流石に気まずいです。

…訳わからなくて本当にすみません…。>（―――）<

## 月は人を狂わせる（前書き）

どっかで聞いたことがあるタイトル……。操と桂さんのお話です。梨栖さんから頂いたネタを骨組みに書いた作品なんです。ちよつとベタベタさせ過ぎたかも……。甘々過ぎて気持ち悪くなったらすみません。他の方の作品を読んで口直ししてください。>（―――）<

## 月は人を狂わせる

「待ちなさい桂ー！！ 今日こそ捕まえてあげるわー！！」

「誰がお前なんぞに捕まるかー！！」

真撰組女隊士と攘夷浪士のこういったやり取りは、最近ではお約束となっていた。

時折、2週間に1回程の割合で真撰組隊士に見つかる桂小太郎は、己の最大のライバルである近藤操に必ずと言っていいほど憎まれ口をたたく。そうして彼女を怒らせるのだ。

「言ったわねこの男女ー！！」

攘夷浪士桂小太郎が江戸に姿を現したとなれば、必ずと言って追いかけてくるのがこの近藤操、沖田総悟、そして副長の土方十四郎。

今回後者の二人はいないものの、彼女の存在は桂にとって厄介なものだった。

「女は家に籠もって下手くそな料理でもしている!!」

「食べたこともないくせに下手くそなんて決めつけないで!!」

後方を走る操がバズーカを取り出し、構える。流石にこんな街中でぶっ放すなんぞしないと思ったが…、

甘かった。

「松光殿には謝っておくから!!」

バズーカが発射され、爆発が起きる。やったかと目を細めた操は、しかし気配を感じて顔を上げた。

屋根の上に、桂の姿があった。

「フン、お前の弟には謝っておこつ」

桂の手からポイと爆弾が放られ、操の上空で爆発する。

爆風に尻餅をついた操は、やっと追いついた部下たちに怒号を飛ばした。

「桂が南に逃げたわ！！ 早く追って！！」

「しかし、操隊長が……」

「怪我なんかしてないわ。あの男女、今日こそ檻の中に入れてやる！！」

立ち上がり、ぱんぱんと尻についた砂を払う。

「行くわよ!」

「はいっ!」

部下の威勢のいい返事を聞いて、操は走り出す。  
…桂が逃げた方向とは逆の方向へ。

そして思う。

こうして彼と、仲の悪いフリを演じるのは、何度目だろうと。

二人の仲が悪いということを、真撰組や江戸の人たちに見せておいたほうがいいとアドバイスをくれたのは松光だった。

桂が操に気を使って、攘夷浪士としての活動を控えてしまえば何かあったものだと思われる。

かと言って、そう真撰組としての操の前に姿を現しては、それこそ関係を勘づかれてしまう。

だから月に1、2度程度でいい。街中で盛大に喧嘩してはどうか。

松光はそう言ってくれた。お互い盛大に憎まれ口を叩いて、以前と変わらぬライバル関係を演じていれば、恋人関係になったことなど誰も気付きはしないと。

それもそうだと、二人は犬猿の仲を演じた。心にも無いことを口走り、お互いを傷つけない程度に攻撃しあつて…。

そんなことでしか人前で顔を合わせるのを許されないことが悲しくもあり、また会えたと喜ぶ自分がいる。

それは恐らく自分が、単純だからかもしれない。

「…さ、…みい姉さん？」

呼ばれて、操ははつと我に返った。ある日の巡回の時間、10番隊隊長原田と街を歩いていたものの、ぼうつとしていたらしい。

「どうしたんだい？　ぼうつとして」

「え、あ、考え事してた」

ごめんねと笑顔を見せると、原田は安心したように唇を釣り上げる。

「難しいことかい？」

「そう、難しいこと。多分解決策は…ないんじゃない…」

目の前の店から、一組のカップルが笑い声を上げて出てきた。仲むつまじく手を繋ぎ、2人とも幸せそうに笑っている。

「…」

「…みい姉さん、どうした？」

思わず魅入っていた操の顔の前で、ひらひらと手を振る原田。

「…いいなあ」

ぼんやりと呟いた操の言葉に、原田の手が止まった。

「みい姉さん…、まさか…」

「え？　なに？」

カップルに魅入っていて勘づかれたんじゃないかと焦ったが、原田の言葉は全く見当違いなものだった。

「真撰組に好きな男でも出来たか！？」

「…はあ？」

何を言うのかと、操は思わず間拔けな声を出す。原田は確かに操の心情を読んだらしいが、どうもその範囲が狭かったようだ。

「好きな男とあんな風に歩きたいんだろ！？ だからいいなあ、なんて…。真撰組の奴らはみんないい奴だけど、みい姉さんはやらないぞ！」

あまりにも必死の形相で言われたため、操はバレたのではないかという心配よりも、可笑しさのほうが勝ってしまった。

「原田君、勲じゃないんだから」

クスクス笑いながら言うと、原田はいいんだよと胸を張った。

「そんじょそこらの奴にみい姉さんはやりたかないね。みい姉さん

の男になる奴は真撰組の男全員倒した後に局長も倒せるぐらいの男じゃねーと」

弟とほぼ同じようなことを言う原田に、操はクスクス笑った。

「真撰組のみんなは大好きだけど、そういう関係の好きじゃないのよ。ただ昼間から仕事もしないでイチャイチャしていいわね、って僻んでただけよ」

「なんだ、そうだったのか」

「そうよ、…フフ、私の旦那になる人は大変ね」

「ま、みい姉さんの選んだ男に間違いはないだろうけどな」

二人して笑って、操はそつと息をついた。

本当に、大変だ…。

窓から眺めた地上には、腕を組んで笑いあっているカップルがいる。それを万事屋の2階から眺めていた桂は、ばしりと銀時に叩かれて顔を上げた。

「あんまり窓際によるんじゃないよ。見つかったちゃいけねー奴に見つかるだろうが！」

「気をつけてはいる」

「大体、こんなところから見えるもんもねーだろうが」

子供を叱る母親かと桂は苦笑して、窓から見えるカップルを指差した。

銀時もそれを目にして、けつと毒づいた。

「いいご身分だねえ…。こんな昼間っからイチャコライチャコラ…」

「そうだな…」

いつもなら「けしからん」と大口をたたく桂が自分に同意するので、銀時は驚いて桂を見た。

桂は窓際に肘をついて、目を細めてカップルを見下ろしていた。

「…羨ましいな」

銀時は飛び上がった。今この男は、なんと言った？

「兄貴！　ヅラがカップル見て羨ましいだつて！　お堅いヅラでも女と一緒に歩きたいなんて願望あるんだ！」

珍しいものでも見たかのように目を輝かせた銀時が、台所に立って

いる松光に報告する。

からかわれた桂は、顔を赤くしてそれを追いかけた。

「違つぞ銀時！ あれは誰の目も気にせず外を歩けたらと思つてだな」

「人妻にとことん惚れ込んだかあ！ 罪だねえ！ ツラ君！」

「違つと言っているだろう！ お前の耳は飾りものか！」

ドタバタと台所で追いかけてつこを開催する二人を、流し台に立ちながら背中に聞いていた松光だったが、しかし勢いよく振り返るなり二人の頭に拳を落とした。

「台所で騒ぐな！ 埃が舞う！」

「「はあゝい…」」

10日後。操の休みを聞きつけて、松光に呼び出して貰った。

あまり同じ場所を逢瀬の場にしては見つかる可能性がある、兄が  
気を使って旅館の一室を手配してくれた。

旅館にたどりつけば、既に妹さんが到着されていると教えられ、部屋に案内された。

桂は「吉田松光」として、そして操は「松光の妹」として部屋をとっていた。

極力顔を見せずにすれば、松光が遠方より訪ねてきた妹に会うために部屋をとったとしかうつらない。

こちらですと案内された部屋の扉を、女中がいなくなってから開ける。

「遅くなつてすまない」

広い室内のテーブルの側に、操は座っていた。桂を見るなり、ぱつと笑って立ち上がる。

「小太郎！」

いきなり抱きついてきた操に、桂は不意打ちを喰らって目を瞬いた。今まで抱きついたことは数あれど、抱きつかれたことはなかったからだ。

「……どうしたのだ操。こんな嬉しいことされては、理性が飛ぶではないか」

やっと我に返って、彼女の細い腰を抱き寄せる。操は顔を上げずに、ただ桂の胸板にそれを押し付けた。

「貴方に理性なんてあったの？」

「失礼な、あるぞ」

少しくらいはと続けられ、操はクスクス笑って顔を上げた。その頬は、朱色に染まっている。

「会いたかった」

「ああ、俺もだ」

そつと紅潮した頬を撫でれば、操は嬉しそうににっこりと笑う。

桂は不意打ちを喰らって手を止めて、やがて釣られて唇を釣り上げた。

「可愛いな、お前は」

瞬間、操の顔が更に赤くなった。

「なっ…！ 可愛いだなんて…。30過ぎたおばさんに使うもんじやないわ」

「いやいや、時折お前が年上だということを忘れる。こんな顔を見せられては、可愛くて仕方な…」

桂の言葉を遮るように、操は桂に口づけた。桂は驚いて目を見開いた後その目を閉じ、操を強く抱きしめる。

唇が離れ、熱い吐息が互いにかかる。操は更に紅潮した顔を、桂の胸に押し付けた。

「どうした。今日はやけに積極的だな」

「…貴方が可愛いなんて言うからよ」

「本当のことなのか？」

そう繋がれば、まだ言う？ と嬉しそうな笑みが帰ってきた。

「お弁当作ってきたんだけど、食べてくれる？」

そう言つて操が差し出したのは、大きな弁当箱。それを反射的に受け取つた桂は、不思議そうに首を傾げた。

「お前が作つてくれたのか？」

「だって…、貴方が下手くそな料理っていうから…」

この間、街中で大立ち回りを繰り広げた時に桂が口走ったことを気にしていたらしい。桂は嬉しくなって、操の額に軽いキスを落とした。

「口から出任せだったのに……。お前には下手なものなどないのだろう?。」

「あるわよ」

テーブルに広げられた弁当箱の中身は、どれも桂の好物ばかり。自然と桂の目が輝く。

「おお、俺の好きなものばかりだ!」

「お蕎麦も好きだって松光殿から聞いたんだけど、流石にお蕎麦な

んて持つて来れないし…、だから貴方の他の好きなもの頑張つて沢山作つてきたんだけど…。食べて…」

もじもじと俯いていた操が、食べてくれる？ と顔を上げた時には、桂はすでに料理を口に運んでいた。

「ふおっ？」

頬張ったのかハムスター並みに頬が膨らみ、いつもの精悍な顔立ちが面影すらない。その間抜けな姿に操はつい吹き出した。

「どう？ お味は」

「む、美味しい！ お前は本当に何でも出来るのだな」

誉められてまた顔を赤くした操は大きな安堵のため息をついた後、  
良かったと呟いた。

「夕食を食って来なくて正解だった」

「…食べてないの？」

「ああ、どうにも食べる気がなくなてな。いま思うと、操の手料理  
を食べる為に腹を空かしとけと予感していたのかもしれない」

いずれにしろ喜んで貰ったことは変わらないので、操はほっと肩の

力を抜いて隣で箸を動かす桂を眺めた。美味そうに食べてくると、頑張っ作ってきた甲斐があるというものだ。

「羨ましいな、お前の弟たちは…。こんなに美味しいものをいつでも食べられるのか」

「いつでも作るわけじゃないのよ」

「ならレアものか」

そういうわけじゃないけれどと言おうとしたけれど、何故かたまたまなく可笑しくなって、操はクスクスと笑い出した。

桂も釣られて、笑い出した。

「綺麗ね…」

弁当を食べ終えて一息ついたあと、二人は窓際に移動して夜空を眺めた。

大きな美しい月が、夜の街を明るく照らしていた。部屋の灯りは消され、月光のみが二人を闇の中へ浮かび上がらせる。

「月は何でも知っているのね、私たちが今こうして逢瀬を重ねているのも、なにもかも…」

感傷的になってしまっているのは、月のせいか。桂の位置から見える操の横顔は、とても悲しそうに見える。

「  
…操」

「え？ きゃあ！」

不意に立ち上がったと思いきや、桂は操の膝の裏に腕を差し入れ、腰を支えてひょいと抱き上げた。

「ちよっ…、小太郎！？」

あわあわと慌てる操を下ろさず、桂は窓枠に腰掛ける。そして操を自分の膝に下ろして、包み込むように抱きしめた。

「こたろ…」

「さっきは散々お前に撥られたんだ。今度は俺がお前を撥ってもいいはずだ」

「どんな理由…」

桂の膝の上で顔を赤らめていた操は、自分に絡みつく腕から逃れられないと分かるや否や、諦めて彼の胸に耳を押し当てる。少しばかり早い鼓動が伝わってくる。

「いつか貴方と…」

「ん？」

「手を繋いで、誰の目も気にせず外を歩けたらなあ……」

操も桂も以前見かけたカップルを思い出した。二人とも幸せいっぱいの顔をして、とても羨ましかった。

「そうだな」

すり寄る操の頭を撫でて、桂はその香りを楽しんだ。香水でもない、甘い匂いが鼻孔をくすぐる。

「明日など、来なければいいのにな」

「…うん」

月が沈めば明日がくる。

朝になれば自分のいるべき場所に帰らなければならない。

二人、共にいられるのなら、月でさえもこの手で壊そう。

そして闇の中に二人、この身を投じるのだ。

終

月は人を狂わせる（後書き）

なんつーかあのですね…。

調子に乗りすぎました。すみません…。>（――）<

もう最後何が言いたんだか分からなくなってる…

## 計算違い（前書き）

梨栖さんがご自身のオリジナルキャラ<sup>すどうれんか</sup>須藤恋歌と姫華のコラボ話を書いてくれました！ 私は梨栖さんの許可を頂いて、恋歌と操のコラボ話を書かせて頂きました。皆さん是非そちらも読んで下さい！ 玖月のはともかく、梨栖さんの作品はすごいんですよ！  
くくく / 姫華がめっちゃかっこいいんですよ！

URLです！ さあ飛ばうすぐ飛ばう！

玖月の作品

「もう一人の女隊士」 <http://ncode.syosetu.com/n4913n/>

梨栖さんの作品

「鬼の傍を舞う蝶」 <http://ncode.syosetu.com/n4912n/>

ねっ！ 凄いでしょ！（↑まだ読んでないよ！）

## 計算違い

時間も、風も、建物の配置さえも計算に入れた。完璧な計算から割り出したここは、確かに絶好のバンテージ・ポイントだったはずだ。

だがどうやら間違いだっただろう。

「残念だったわね」

計算式に、彼女の存在をいれるのを忘れていた。

警察庁長官、松平片栗虎が街での公務に出るといふ噂を聞きつけて、あの気まぐれな総統の命令がでた。

『いずれ邪魔になるだろうからな』

消しておくと、よりにもよって銃使いの女性達でなく、何故か自分に白羽の矢が立った。

一応はスナイパーとしてライフルの使い方も取得しているが、なんだって自分がとも思う。まあ、別に文句はないのだが。

「……」

がしやりとライフルを構える。下には、ビルから出てくる松平の姿。チャンスは彼が車に乗り込む、一回きり。

「悪いけど諦めて貰えないかしら。一応あれでも真撰組の父なのよ？」

ハスキーな声がして、ぱつと振り向く。誰もいないはずのビルの屋上に、一人の女の姿。

「…何故ここが…」

それは、流石に万斉でさえも予測しえなかった、招かれざる客。

「近藤操……」

腕を組んだ操が、そこにいた。

「長官であるおじさまが公務に出て、攘夷浪士が動かないわけがない。厳重な警備をくぐり抜けてもおじさまを暗殺しようなんて考えるのは、貴方たち鬼兵隊しかいないと思ったのよ。ま、大当たりだったみたいけど」

ちらりと見れば、松平は既に車に乗り込み、発車させてしまっている。最初で最後のチャンスが、消えた。

「何故ここが分かった…」

「私、分析って大好きなの。時間、風、建物の配置。距離、いろいろなものを計算式に叩き込んで、一番狙いやすい場所と瞬間をはじき出す。そしたら、この近辺が一番狙いやすいことが分かった。本当はお隣のビルが私の答えだったのだけど、スナイパーが貴方だつて分かったから、計算し直した。最初は姫華かまた子かと思ったわだから、距離はもう少し短くなるんじゃないかってふんでね」

「…下に部下がいたはずだが？」

「職務放棄して寝てるわよ？ 遠慮なく食らわせたから当分起きないわね」

恐らく、この操に峰打ちでも食らわされたのだろつ。その操はこつこつと、万斉のいるフェンスに歩み寄る。

「ここなら綺麗にねらえたわね。車に乗り込む、一瞬の隙を狙うつもりだったのかしら」

「…全ての計算は完璧だった。ただ一つの間違ひは、お主の存在を計算式にいれていなかったことだ」

「残念でした。さて、丸点けが終わったところで、早く行きましようか」

彼女の細い指で、手錠がくるくるとまわる。まずいなあと、万斉はライフルを手にする。

「姫華へお別れの言葉は残してきた？」

「いいや。そんなもの、残したくないでござるよ！」

いいざま、ライフルを発砲する。腰の長刀を引き抜いた操は、ことごとくその銃弾をはじき飛ばした。その隙に、万斉はフェンスを乗り越えて下へ降りた。

「あ！ 待ちなさい！」

操も負けじとフェンスを乗り越える。建物の屋根を飛び移り、万斉は取り敢えず逃げられるだけ逃げた。

（もう勘弁と思っていたが…）

よりもよって操だ。万斉の一番苦手な真撰組隊士が、よりもよって自分を捕まえにくるとは。

（晋助にばれたら殺されそうだが…）

迷っている場合ではない。躊躇えば、こちらが殺されるのだ。

（仕方ない）

ひょいと、随分下の屋根に飛び降りる。操は案の定あとを追って飛び降りてきた。

「空中では避けられまいっ！」

宙に降りた操へ、数発発砲する。不意打ちを食らった操は、バランスを崩して屋根を転がり落ちた。

「主に捕まるわけにはいかないのだな」

そのまま、背を向けて走り去ろうとしたとき…。

「私を撃ち落としたつもり？」

声がして、慌てて振り向いた。その時には大きく跳躍した操が宙に降り、うなりを上げるような回し蹴りを放つ。万斉は立てたライフルで防御するのが精一杯だった。

ガッ！

「…っ！」

万斉の手から、ライフルが吹っ飛ぶ。慌てて屋根の端に飛びすさり、間合いをあけた。

「私が銃弾を弾けること、姫華に教わらなかった？」

「…化け物か」

「なんとでも言えばいいわ。戦いの中で生きる術は叩き込んである

つもり」

につこりと操は笑う。無意識に背中への刀に手をやったが、この場で彼女と戦えば、高い確率で負けるのは目に見えている。

「…っち」

万事休すかと、舌を打ったときだった。

「万斉！」

自分と呼ぶ声と、けたたましいバイク音。

「早く乗って！」

下の道路を、自分の愛車に乗った姫華が走ってくる。

「させるものですか！」

意図に気付いた操が駆け出すが、姫華がバイクを操りながら発砲した銃弾を弾くのに気を取られ、その間に万斉は屋根から飛び降りた。

「あっ！」

万斉が飛び乗ったバイクが遠ざかる。操は悔しそうに歯がみした。

「もう少しだったのに……」

（ごめんなさいね、近藤操。他の雑魚共だったらいくらでもあげるけど、彼だけは渡すわけにはいかないのよ）

バイクを操りながら、姫華はそっと思う。心配になって見に来たら、万斉が追いつめられていて肝を冷やしたのだ。

「助かったでござるよ。姫華」

後ろに乗った万斉が、ほっとしたように呟く。

「まさか、近藤操に読まれていたとはね」

「拙者と同じ計算をしていたようでござる」

「今度から作戦をたてるときは近藤操も計算式に入れておくよう、先輩にいつておかなきゃ」

そのまま暫くのあいだ走行し、姫華は不意に呟く。

「ねえ万斉」

「なんでござるか？」

「これ、ブレーキは何処？」

万斉の口元が、ひくりと引きつった。

o

## 計算違い（後書き）

おまけ

「そっちのレバーを…」

「ああ、こっちな。これがブレーキでこっちがクラッチ」

「逆…」

なんだかんだ言って助けるから好かれちゃうんだよ

前編（前書き）

ギャー！（□、；）！！ごめんなさいごめんなさい！高杉  
さんをこんな目に合わせてごめんなさい！高杉さんファンの方に  
殺されそうぐらい酷いことをしています。高杉さんファンは回れ  
右したほうがいいかも…。

最後にもう一回！

本当にすみません！>（――）<

なんだかんだ言っただけから好かれちゃうんだよ

前編

「尾高、その資料取ってくれる？」

「はい」

本日の九番隊の仕事は、資料室の整頓。なんでこんなものをやらなくてはと思ったのだが、意外にも楽しくてすぐに終わってしまった。

「綺麗になったわね！。すっきりさっぱり！」

操が笑った時、操の携帯が鳴った。取り出してみれば、非通知になっている。

「誰かしら……。出なくてもいいかな」

非通知というのはろくな事がない。無視していても着信音は延々と鳴り続け、流石に操もイライラしてきた。

「ああ、もう！」

資料室を出て、携帯を耳に当てる。

「もしもし！」

『…』

ほらみたことかと、操はため息をつく。間違いなく悪戯電話だ。

『…よお、操』

操の顔から、表情が消えた。

待て、この声は…。

「…ちよつ、貴方！」

電話の向こうで、かたんと音がした。取り落としたのだろうか、何か聞こえる。

「隊長？」

「しっ！」

不思議がる隊士を黙らせて、耳を澄ませる。

『…なく、電車が…』

「…まったくもう！」

電話を切らずに下ろし、振り返る。

「ちょっと行って来るわ！ もう整頓も終わったし、あなた達は休んでいて！」

「え、はい…。でも…」

「ついてきたら承知しないからね！」

「…はい」

何故自分にかけてきたのか。

そもそも何故この番号を知っているのか、

かかってきた電話を通話の状態にしたまま、操は屯所を飛び出した。

耳にあてた携帯からは、電車の音と小さなアナウンス。

そして木々がざわめく音。

目を閉じ、集中して江戸中の駅を思い浮かべる。

聞こえてくる音。

そこにすべて当てはまる場所を探すのは、いささか困難な作業だった。

「……も違うか……」

先ほどから江戸中の駅を探し回ったが、電話の主は見あたらなかった。

操の勘が正しければ、電話の向こうの人物はとんでもない奴だ。

何故操にかけて、しかも放置しているのか分からないが、なんとなくほったらかしにしてはいけない気がした。

「……」

耳を澄まし、携帯の向こうの音を探る。

電車の走る音、

木々のざわめき、

そして、駅のアナウンス…。

『次の…は、と…えどま…の…』

「！」

今、当駅止まりと言ったか…。もしこの駅が江戸にあるのだとしたら、当駅止まりの電車が発生するのは一駅しかない。

「やった…」

何がやったなのか自分でも分からないまま、操は駆けだした。

江戸の外れにある、小さな駅。無人駅とも言えるほどに廃れて、利用者があるのかも謎だ。

「…おーいっ!」

めいっばい叫んでみる。耳に押し当てた携帯から、小さくおーいと声がした。

「ここで間違いないみたいだけど…」

発車する電車を見送り、携帯に集中する。携帯の中から聞こえてきた電車の音を計算して進むと寂れた神社の境内を見つけた。参堂にも雑草が生え放題で、随分長い間使われていないのが分かる。

「おーいっ!」

一拍遅れて、携帯から自分の声。どうやら近くのようだ。

「…おい！」

境内社を取り囲む森に入って、手当たり次第に叫ぶ。携帯から聞こえる自分の声が、だんだんと大きくなる。

「…なにこれ」

つんと嗅ぎなれた臭いが鼻をつき、操は眉根を寄せた。

濃い海の臭い。

深い磯の臭い…。

これは血の臭いだ。

「…っ！」

がさがさと草を分けて進んだ矢先、あるものを見つけて操は息を呑んだ。

あちらこちらに、男が倒れていた。胸や背中から血を流し、あるものは体の必要なパーツがないものさえいた。

「…何があつたつていうの？」

答えの返つてこない疑問を口にし、木に寄りかかるように倒れている男に歩み寄つて膝を折った。

（…この男…、指名手配中の攘夷浪士？）

攘夷浪士と思われる男は既に死んでいた。恐らく、周りの者も…。

（…なんて鋭い斬り傷…。仲間割れでもしたのかしら…）

生存者がいないか確認するために倒れている男たちの間を巡ったが、生存者は一人もいなかった。

（斬り傷はみんな同一犯のものだわ…。一人でこんなに斬つたつていうの…？）

死体は数にして約20人。こんな大人数を、一度に相手に出来るものなのだろうか…。

「あ、忘れてた」

繋ぎっぱなしの携帯。もう一度叫んでみる。

「おい！」

『おい！』

存外大きな声が返って来て、操は飛び上がった。そして音を頼りにもっと先へ進んだ矢先、もっと飛び上がった。

「な…」

蝶が描かれた、女物の紫の着物。

左目に巻かれた包帯…。

（ちよっ…！）

胸から血を流して草むらに横たわっていたのは、

操の宿敵、高杉だった。

（ちよっと待って！ ええっ！？）

想像していなかったというわけではなかったものの、まさか彼がこんな状態にあるなど露にも思わず、操は必死に混乱しかける頭を抑え込む。

「ちよっと、馬鹿総統?!」

傍らに膝をついて首に手を当てる。弱いが、心臓は動いている。

（良かった、生きてる…）

ほっと安堵の息をついてから、高杉が生きていたことに安心している自分に腹が立った。彼は、敵なのに…。

（そんなこと言ってる場合じゃないわ）

スカーフを取り外し、胸の傷を塞ぐようにきつく巻きつける。痛みが走ったのか一瞬小さな呻きが漏れたが、高杉は目を覚まさなかった。

胸からの出血に隠されて見えなかったが、銃創も確認できたのでそちらにもスカーフを伸ばして巻いておいた。

「血は固まってたみたいね…」

ほっと息をつき、納得した。

先ほどの男たちは、彼が斬ったのだろう。以前恋人の桂から、攘夷浪士を追うのは何も真撰組だけではないと聞かされたことがある。

攘夷浪士の中にも穏健派や過激派など思想の違うグループにいろいろ分かれて、時には衝突することもあるという。

特に危険な男として知られている高杉は、穏健派の連中が黙っていないのではないかと。

あいつは大丈夫だろうかと心配そうに目を細めていた最愛の人が目に浮かぶ。彼の心配は現実となって、高杉は思想の違う攘夷浪士に襲われたのだろう。

返り討ちにしたものの、己も傷を負って今に至る、そんなところだろう。

「…あ」

彼の顔色を伺おうとしたとき、頭の横に落ちている携帯電話を見つけた。

確認してみれば、通話中のまま。試しに電話を切って見れば、2時間16分の通話時間が表示される。

操の携帯も、切れた。

（斬られてから2時間以上…、危険ね…）

血の出は少ないものの、傷が深い。息は早く、浅くて苦しそうだ。

大体何故自分にかけてきたのだろう。

何故この番号を知っているのだろう。

そんな疑問を頭の片隅に、操は行動を開始した。

このまま放置したら、高杉は死んでしまう。

いくら敵であれ、それだけは回避したかった。

彼の兄、松光や桂のためではない。

自分が、嫌だったのだ。

続く

なんだかんだ言っただけから好かれちゃうんだよ

前編（後書き）

…マジですみませんでした…。何度謝ってるやら…。

この出来事が、「祭好きもほどほどに（下）」の最後、「あんな大事件に繋がるとは…」の重大事件です。操にとっても高杉さんにとっても大事件です。

…そういうことになって下さい…。…本当に。>（———）<

なんだかんだ言って助けるから好かれちゃうんだよ

後編（前書き）

ぎゃー！ すみませんすみません！ 高杉さんの扱い酷くてすみません！ （↑前にも同じようなこと言っただような…） 高杉さん  
ファンの方ごめんなさい。 >（―――）<

なんだかんだ言って助けるから好かれちゃうんだよ

後編

電話がかかってきたのは、丁度仕事が終わって帰ろうとした時だった。

久しぶりに姫華に会えるとうきつき気分だったのだが、相手が高杉と分かり脱力する。

また任務だろうか。

「はいはい、なんでござるか。しん…」

『河上ばんさーいっ！ 今どこにいるの今すぐ来なさーいっ！』

鼓膜が破れるかと思うほどの大音量。高杉の声ではなく、かといって姫華の声でもない。この声は…。

「じ、近藤操…?」

間違いなく彼女だ。しかしなぜ、彼女が高杉の携帯を…？

『今すぐに更科駅近くの古びた神社の本堂に来て！ 大急ぎよ！』

「ま、待て…。何故お主が晋助の携帯を…」

『説明はあとでじっくりしてあげるわ。いいから誰もいないこと確認して早く来て。早くしないと、貴方の総統死んじやうわよ』

万斉の背に、冷たいものが走る。

「晋助になにをした」

『私はなにもしてないわ。私はね』

携帯を耳に当てたまま、荷物をまとめる。

『強いていうなら助けた、かしら。心配しないで、これは畏じやない』

荷物をひつつかみ、慌ただしく外へ。

『…早く来てあげて』

ぶつんと電話が切れた。万斉はバイクに飛び乗ると、言われた場所へと走らせる。

しかし、なんだってまた彼女は…。

『強いていうなら助けた、かしら』

『早く来てあげて』

本当の話だとすれば、何故彼女は、高杉を構うのだろう。

「ったく……」

高杉から勝手に拝借した携帯を切り、操は手当てをして寝かせた高杉を見下ろした。

あれから息のある高杉を神社の境内社に運び、十数体の死体を目のつかぬ場所へ隠した。

松光に連絡したほうがいいと思って万事屋にかけたが、留守なのか出て貰えなかった。

ならば恋人の桂に連絡しようかとも思ったが、万が一のことを考えて互いの番号は知らせていないことに気づき、仕方なく高杉の携帯から万斉にかけた。

「……うう……っ……」

撃たれたからか、斬られたからか、彼は熱を出して魘されていた。濡らしてきた手ぬぐいで額に浮かぶ汗をぬぐってやると、その臉が細かく痙攣する。

薄く開かれた目は、暫くのあいだ宙をさまよう。

「  
…」

「大丈夫？　馬鹿総統」

目の前にいるのが操であることを確認し、高杉は目を見開いた。

「…ここは極楽か？　操に似た天女が見えらあ…」

「それだけ馬鹿言えれば大丈夫みたいね…」

起き上がろうとした高杉は、しかし傷に響いたらしく顔をしかめて横になった。

丸めたベストの枕が柔らかく、温かいと思えば、彼女の隊服がかけである。高杉は不思議そうにワイシャツ姿の操を見上げた。

「なんで、…おめえがいる」

「なんでですって？ 人の携帯に連絡してきたくせによくいわね。いつ私の携帯番号知ったのよ」

人が寝込んでいたって、彼女の態度は変わらない。高杉はおかしくて、クク…と力無く笑った。

「鬼兵隊にかかりや、赤の他人の番号の一つや二つ…調べようと思えば調べられる」

「あーら大変なこと。情報部に漏洩に気をつけろって言うておかないや」

そんなことを言うておいて、操は盛大な息をつく。

「それにしたってどうして私にかけてくるのよ。こんな情けない姿を私に見せたかったわけじゃないでしょう？」

「…ちったあ労るとかねえのかイ？」

「労ってほしいの？」

きっぱりと言われて、苦笑が漏れた。

「…どうして、ここが分かった」

「貴方が電話を通話中にしてくれていたお陰で、周りの音がよく聞こえたわ。近くの小さな駅のアナウンスもね。それで分かったわけ」

「なるほど…」

言ってから、苦しそうに顔を歪める高杉。その顔に浮かぶ汗を、操は拭ってやる。

「…おめえ、なんでここまでする」

「さあ、なんででしょうね。なんでも言えば、どうして私が貴方を助けなきゃいけないかったのかしら？」

感謝しろ感謝をというような目で見下ろされ、高杉は苦笑する。

「俺が恋しいから？」

「はらわたえぐり出すわよ」

本気で殺意が降ってきたので、高杉は小さく肩をすくめる。

「貴方を捕まえるのは、死神じゃないわ」

優しく汗を拭かれ、高杉は操を見上げる。

操の目は、真っ直ぐに高杉をみていた。

「貴方を捕まえるのは、この私よ。その他誰にも倒されることは許さないんだから。それまで生きてなさい、いいわね？」

「…そりゃまたなんとも…。無茶な注文だな」

「あら、貴方とあろう人間が、それぐらい出来ないんでも？」

喧嘩口調に、高杉は苦笑の入り混じったため息をつく。

「デメエは…」

「鬼兵隊の中にも貴方を心配してくれる人は沢山いるんだから、体大事にしなきゃだめよ」

ひどく頭がぼんやりする。たえきれなくて、高杉は重い瞼を下ろした。

「大体松光殿だつて貴方を心配して…」

説教臭くなっていた操だったが、高杉は既に意識を手放したあとだった。

言われた通り、駅の近くにある古びた神社にたどり着いた。

誰もいないことを確認し、境内社に歩み寄る。試しに小さくノックしてみれば

「誰？」

声が帰ってきた。

「拙者だ」

答えれば、しばらくして扉が開いた。どうやら中から鍵をかけていたらしい。

「随分遅かったわね」

現れた操は、暢気にそう言った。

「拙者として仕事が…」

寝かされている高杉を見、絶句する万斉。

「晋助…っ！…っ、お主が！」

「馬鹿をお言いでないわよ。私は彼に電話を貰って、駆けつけてきてあげたのよ」

声を荒げる万斉を、操は扉を閉めながらあしらった。

「電話？」

「私の携帯にね。貴方たち鬼兵隊にとっては調べることも雑作もないんでしょうけど、なんで私なんかにかけたんだか」

言いながら腰掛け、はいと万斉に何かを差し出した。

「なんで？」

「総統殿の体から出てきたものよ。外に十数人の浪士の死体があった。やりあったんでしょうね」

手を出せば、ころんと小さな銃弾が転がった。こんな小さなものが……。

「早く連れ帰って、ちゃんとした手当てを受けさせたほうがいいわ。私のじゃ、応急処置にしかない」

「…ぬし、何故晋助を助けた。そういうことをするから晋助が気に入るのではないか」

そう問うと、操はフンと鼻を鳴らした。

「いいじゃない。助けたくても取りこぼしてきた命の方が遥かに多いんだもの。少しは穴埋めさせなさいよ」

隊服が取り払われ、万斎は代わりに自分のロングコートを高杉にかけた。そして軽い動作で抱き上げる。

「真撰組のパトカー呼ぶから、早く帰ったほうがいいわ。貴方の総統が斬った浪士の死体、運ばなきゃ」

「いいのか…？」

「良くなきゃ助けないわ。今回だけよ。見逃してあげるのは」

「…助かるでござるよ」

境内社の扉を開け、操は万斉に出るよう促す。

「馬鹿総統に言っておいて。こんなことはこれっきりだつて」

「…分かった。…ありがとう。近藤操」

「どういたしまして」

高杉を抱えた万斉が外に消え、しばらくして気配が完全に遠のいた。

操は盛大なため息をついて、さっきまで高杉の携帯と繋がっていた自分の携帯を取り出す。

「もしもし？ ええ、近藤よ。更科駅近くの神社にパトカー寄越してちょうだい。多めにね…」

気がつけばそこは自室で、傍には万斉と来島がいた。

二人とも心配そうにこちらを覗き込んでいる。

「晋助様あ！」

「…なんだ」

「ははは。元気そうだなによりでござるよ」

暢気に万斉は笑う。来島は泣き出しそうな顔で、

「よかったッス晋助様！ 私、お姉様に伝えてくるッス！」

そう言つて嬉しそうに部屋を飛び出して行つた。

高杉は撃たれた挙げ句に斬られたところに手を伸ばそうとしたが、その腕に点滴のチューブが通っているのを見て手を止めた。

思つたより、傷が深かつたようだ。

「…あいつは？」

「あいつ？」

「操」

ぼんやりとした口調に、万斉は仕方なさそうに笑つた。

「拙者に晋助を渡して、帰らせただござるよ」

ちえと舌打ちが漏れる。その舌打ちが何を示すのかは、聞かないでおいた。

「ああ、こんなことはこれっきりだと言つていたでござる。晋助に

かかれば、これっきりなどいかないでござろうが…」

その通りだと、高杉は笑う。が、その笑みは瞬間にかき消えた。

「…万斉。姫華を外で呼び止めとけ」

「は？」

「あいつの説教だけはごめんだ…。しばらく立ち直れねえ…」

『鬼兵隊総統である自覚を持って、一人で出歩かないで下さいませ。なにかあつたらどうするのですか』

高杉が気ままな散歩に出掛ける度に、姫華はそう言い聞かせていた。

その言いつけを破ってこんな目にあつたのだから、それは凄まじい雷が落ちることだろう。

「ま、自業自得というもの…。説教は甘んじて受けるべきでござるよ。実質、近藤操がいなければ、危なかったでござるから」

だつたらまだ操に憎まれ口を叩かれていたほうがマシだと、高杉は盛大なため息をついた。

「嫌なことでもあつたかい？」

カウンターで喉を鳴らして酒を飲み干す操に、お登勢は唇を釣り上げる。

時折顔を出してくれるこの娘は、今日はどこか自棄酒に入っていた。

「嫌なことっていつか、自己嫌悪ですよ。甘い自分が馬鹿みたいで……」

後々冷静になって、何故高杉を助けたのか後悔しているらしい。

あの時そのまま屯所に連れて行かずに助けたのは、同情でもなんでもない。

ただ目の前で死んでほしくない、そんな甘さだった。

「なにがあつたかは知らんが、甘いのは、それはアンタが優しい証拠だろう？」

「でも…」

「強くて優しい、そんなアンタがいるから真撰組はやってけるんじゃないか。そんな落ち込むこたあないよ」

煙草に火をつけながらそう言ったお登勢の言葉が、妙に胸に染みだ。

「優しさと甘さは紙一重ってね」

お登勢はぱちりと、ウィンクをしてみせる。正直似合っていないかった。

「…そうですね」

ふと、天井からとたと足音が聞こえ、操は天井を見上げた。

「旦那たちが帰ってきたのかな」

「なんだかんだ言っておくせく働いてるからね。今日は松光も一緒に、江戸の外まで行ってたらしい」

「へえ…」

だから電話に出てくれなかったのかと納得する。江戸内なら誰がどこにいるか、得意の気功術で分かるらしい松光だが、流石に江戸の外に出ていては、高杉の存在は掴めなかったろう。

またすれ違いになった。タイミングが悪いというかなんというか…。

「ん？」

「んー？」

不意に首を傾げて妙な音を出した操に真似して、お登勢は不思議そうに操を見やる。

「そつえば…」

松光は、既に己の弟が鬼兵隊総統として攘夷活動を行い、普段は船上空にいることを知っている。

なら、高杉は…？

兄が、江戸にしていると知っているのだろうか。

（今度教えてやったほうがいいのかしら…）

そう思ってしまった、教えるためにはまた会わなければいけない事実  
に頭を抱える。

（嫌！ もう絶対会わないわ！）

ぶんぶんと頭をふると、アンタ大丈夫かいと、お登勢に額に手を置

終

か  
れ  
た。

なんだかんだ言って助けるから好かれちゃうんだよ

後編（後書き）

なんでこんなの考えたんだろうなあ自分…。（↑覚えてない）本当すみませんでした。謝ってばっかだ…。

怖さで暑さが和らぐでなし（前書き）

昨日から兄貴と喧嘩中です。原因はネットにつないでる唯一のパソコンの取り合いです。兄貴は仕事の関係上夜中までパソコンを使ってるんですが、私だってネットで遊びたいです。チャットにお邪魔だっと思っています。（ケータイでネット見るのにも限界がありますでしょ？）

で、その旨を兄貴に伝えたところ、

「お前が仕事の書類片付けてくれんならいいよ」

このクソ兄貴！ 仕事の書類なら仕事場でやれってんだ！

（なんてここで愚痴っても仕方ないんですが…）

怖さで暑さが和らぐでなし

「それでなあ、誰もいないはずなのに、廊下から聞こえてくるんだ。ひたひたひたひた…、足音が…」

いつの時代にも怪談で涼を求めようという考えは変わらない。むしむしと暑いこの日も、真撰組の屯所では部屋を閉め切って真っ暗にして、怪談が語られていた。

9番隊の周防が懐中電灯で自らの顔を照らし、実に妖しく語りつく。

「気のせいだっと思って、しばらく歩いてたら聞こえてくるんだよ。『遊ぼうよ』」

ごくりと唾をのむ音がする。土方は正直早くおさらばしたいのだが、いかんせん隣に座った近藤が痛いほどに腕を掴んでいて逃げ出せない。

震えているのを、悟らなければいいが…。

「俺怖くってさァ…。気のせいだ気のせいだと言ひ聞かせて、やっ

と自分の部屋に戻ったんだよ。ああ、何事もなく戻ってきた…って息をついた時さ。背を向けた扉の向こうに、誰かが立ってる気配をはっきりと感じ取ったんだ」

十数人いる隊士の息を呑むような息遣いと、固唾を呑む音が聞こえる。

周防は気にせずに続ける。

「家には俺一人しかいないはずなのに、何故かはつきり誰かがいるって分かったんだ。とっさに刀を掴んで、構えたさ。どれぐらい経ったか分からない、俺なにやってんだろってつい気が緩んだ時だ。いきなり襖が開いて…」

瞬間だった。

「勲！」

「ぎゃあああ！」

タイミング良く背後の襖が勢いよく開き、恐怖の叫び声がそこかしこから上がる。

叫び声を上げかけた土方だったが、近藤が恐怖に抱きついてきたせいで驚いて喉の奥に引っ込んでしまった。

「もう！　またこんなに部屋閉め切って！」

自らの登場で大切なオチを知らず知らずのうちに破壊した操は、すばんと素早く四方の襖を開け放つ。予期せぬ事態に思わず悲鳴を上げた隊士たちは、やっと落ち着いて息をついた。

「近藤隊長、タイミング良すぎですよ…」

「そう。少しは肝が冷えた？」

操は悪戯っぽく腰に手を当て、首を傾げて見せる。少しどころでなくかなり冷えたのだが…。

「勲も何よその驚き様は。とりあえずトシ君を解放なさい。死んじやうわよ」

しがみついた腕が土方の首を締め上げており、土方に苦し紛れに腕を叩かれた近藤は慌てて土方から離れた。

「すまん、トシ」

「いやいや……」

あー苦しかったとぼやく土方。近藤は自らを脅かした姉を、恨めしそつに見上げる。

「そもそもみい姉が脅かすから……」

「私のせい？ 死装束着て夜中に貴方の部屋に忍んであげましようか」

「えー、だったら布団持ってきて一緒に寝ようよ」

「……このシスコンが！」「……」

部屋中から鋭いツツコミが飛ぶ。部屋の隅にいた沖田が苦笑し、操も唇を釣り上げた。

「それもいいかも知れないわね。さっき松平のおじ様から電話があったわ。後でかけ直してって」

「はい」

「みんなも早く仕事に戻りなさいな。仕事さぼったら、夜中に私が化けて出るわよ」

じゃあね、と操が立ち去った部屋で、近藤、土方、沖田以外の隊士たちがほくっとならなく口元を緩めていた。

「近藤隊長ぐらい美人な幽霊なら出てきてもいいかも……」

どこかのぼせているような口調に、土方は阿呆かと呟いた。

そんな怪談話を聞いた日に限って、真夜中に目が覚めてしまうものだ。

早く寝てしまいたいのに、こんな日に限って尿意を催してしまう。

手洗いには行きたい、けれど怖い。

でも手洗い…、と何度か押し問答を続けて、仕方なくそろそろと廊下に出た。

いつも歩き慣れているはずの廊下はどうにも暗く、自分の足音がいに響いた。

足をつける度にぎしぎし鳴る木の音が、大きく聞こえる。

（馬鹿馬鹿しい。幽霊なんていないんだよ）

言い聞かせて、手洗いに駆け込んだ。早々に用を足し、手を洗って再び廊下に戻ったところで、土方は何か聞こえたような気がして顔を上げた。

ひた…、ひた…。

これは、何かの足音か。誰か起き出して来たのかと思ったが、つい昼間の怪談話を思い出してしまう。

『廊下から聞こえてくるんだ。ひたひたひたひた…、足音が…』

「…」

ごくんと固唾を飲み込む。何かいる。間違いなく、角の向こうに何かいる。

ひたひたひた…。

つくづく刀を下げて来なかったのを後悔した。以前屯所に出没した蚊のような天人も結局は斬ることは出来なかったが、刀を持っていただけマシだった。

もし今、前回のようになんか出たら…。

ひた、ひた…。

足音が近い。踵を返して逃げようかとも思ったが、竦んでしまった足が動かない。

そして次の瞬間、死装束を纏い長い髪をボサボサにした女が、ぬつと姿を現した。

「○ # % @ ↓ !」

「きゃっ！」

言葉に鳴らぬ悲鳴と、短い悲鳴が上がる。

パニックになる土方を我に返したのは、彼女しか呼ばない愛称だった。

「トシ君？」

落ち着いて見てみれば、髪の長い女は操だった。

死装束に見えたのは、薄い色の浴衣だったらしい。ボサボサの髪をかき上げて、操は笑う。

「どうしたの？　こんな夜中に」

「姉さんかよ…、びびった…」

質問には答えず、土方は大きな息を吐き出す。操は心意を汲み取ったのかくすくす笑った。

「ごめんなさい。驚かせたわね」

「いやいや、俺が勝手にびびっただけだ…。便所行きたくてよ」

「私もよ。トシ君に会ったたらちゃんと髪を梳いてくれば良かったわ」

先ほどまで寝ていたのだろう。素早く手櫛で髪を梳き、手洗いの扉を開ける。

「部屋まで一緒に戻りましょ。待ってて」

「ああ」

操が手洗いの中に消えて、土方はほっと息をついて壁にもたれかかった。

幽霊恐怖感の土方にとって、一緒に部屋まで戻ってくれるほど心強いものはない。それが「土方は幽霊が苦手」と知る者なら、尚更…。

以前、まだ武州で近藤の道場に厄介になっていた頃。今のように夜中にトイレに起き出して、まだ寝ていなかった操と鉢合わせたことがあった。

盛大に悲鳴をあげてしまって、操に幽霊嫌いを暴露してしまう羽目になった。

てつきり男のくせに、と笑われるかと思っていた。

だが…。

『誰にだって怖いものはあるわよ。恥ずかしいことじゃないわ』

操はそう言うてくれた。怖いままでいいんだと安心した。

『ちなみに私はゴキブリが怖いわ』

当時、余計なことを教えてくれた操を思い出し、土方は小さく噴出する。

彼女自身幽霊などは信じていないようだ。その精神が、土方はともうらやましい。

「お待たせ。戻りましょ」

出てきた操に、預けていた壁から背中を離れた。

しつとりと水気を帯びた手が土方の左手を包み、幾分気分が落ち着いていた。

「まだ怖い？」

「怖いね。平気な姉さんが羨ましいよ」

自分の手を引いて少し先に行く操が、今日は大きく見える。いつもは小さくて、儚く見えるのに…。

「どうやったら怖くなくなるんだろうなあ…」

「んー…、出てきても何も出来ないって言い聞かせてみたらどうかしら」

操は歩きながら振り返り、笑みを浮かべる。

「遠征中に古戦場で首のない落ち武者の霊を見たことあるけど、所詮は血肉なき者だもの。気合いで勝て…」

繋いだ手に力がこもり、操は立ち止まって土方を見上げた。暗がりで見える土方の顔はひきつっている。明るい場所で見たら、蒼白であることがわかるだろう。

「…寝る前にそう言う話は…」

「あ、ごめんなさい」

操が肩を竦めた時だった。

今し方過ぎ去ったばかりの角から、影がぬつと現れる。

「そこにいるのはみい姉さんかい？」

暗くて、二人にはよく見えなかった。驚いて悲鳴をあげかける土方の声をかき消すように、操は声を上げた。

「きゃあっ！ のっぺらぼう！」

腕に抱きつかれて、土方は驚いて息を呑んだ。おかげで情けない悲鳴をあげずにすんだが…。

「ひでえなみい姉さん。俺だよ」

姿を見せたのは隊服姿の原田だった。なんだお前かと土方はそっと息をつく。

「原田君！？ ああびっくりした」

「脅かしてごめんよ。しかしのっぺらぼうはヒデエな、確かにつつパゲだけだよ」

つるりと頭を撫でて笑う原田に、操も土方の腕についたまま笑いかける。そして小さくごめんなさいと謝罪した。

「今仕事帰りか？」

「ええ、ちよつとごたごたがあつたんで。副長こそみい姉さんと何やってんですか、こんな夜中に」

怖いので部屋までついてきてもらってるなど言えず口ごもっている、と、操が口を開いた。

「おトイレの前で鉢合わせて、部屋まで送ってもらってるの。お化け出そうで怖いんだもの」

「ありゃ、みい姉さんでも怖いものなんてあるんだ」

「私も一応女ですう」

笑ってそう言う操は、まだ土方の腕から離れない。原田は苦笑して、ちよつと遅かったなと呟いた。

「もうちょっと早かったら、俺がみい姉さんを送ってやれるのに」

「ふふ、今度送ってちょうだいな。原田君と一緒になら頼もしいわ」

「ああ、今度な。じゃあ俺は部屋に戻りますんで…。副長、みい姉さん襲っちゃダメっすよ」

「襲つか!」

ぎしゃつと怒鳴る土方に笑い、じゃあお休みなさいと原田は踵を返す。

お休みなさいと手を振る操を見下ろし、土方は小さなため息をつく。

「とてもさっきまで気合いで勝てるとか言ってた人の演技だとは思えねえな」

「原田君にバレてないかしら」

「ばれないばれない。アカデミー賞ものだったよ、ありがとう」

操が自分の幽霊嫌いを隠すために、わざと怖がり演技してくれたことに土方は気づいていた。操の優しさが、身にしみた。

「ふふ、じゃあ私たちも戻りましょうか。…眠いわ」

ふわ…と小さな欠伸をかみ殺す操に、土方はそうだなと笑った。

操は土方の部屋につくまで、その腕から離れなかった。

「ありがとう姉さん。助かった」

「どういたしまして。じゃ、お休みなさい」

「お休み」

いくつか先にある部屋に操が消えたのを確認し、土方は自室の襖をしめた。怪談話を聞いた日の夜は嫌な夢を見るのだが、今日はなんだか、いい夢が見られそうだった。

朝、目覚まし時計が鳴る前にぼんやりと目が覚めた。

悪夢は見なかった。かと言って、いい夢も見なかった。

いやに気持ちのよい朝だ。今日はいい日になると、ぼんやり思った。

が…。

「土方さん朝でさア！ 起きて下せエ」

沖田の声と同時に、部屋にバズーカ砲が放たれる。爆発と共に、土方は跳ね起きた。

「総悟てめえエエ！」

寢覚めは、最悪だった。

終

怖さで暑さが和らぐでなし（後書き）

私も怪談話苦手です。以前富士急ハイランドの「戦慄迷宮」に罰ゲームで一人で入らされたことがあるんですが、叫びっぱなし泣きっぱなし、結局お手上げで途中で退出したことがあります。そして3日間うなされました。もう嫌です。

最近スランプで、いい話が書けません。なので9月いっぱい休載します。>（――）<とりあえず来週で一時中断ということでは。

## 思い思われ（前書き）

思えば真撰組の隊長格って、総悟君と原田さん以外出てないですよ。…みんな登場してくれないかなあ…。（。―。）

思い思われ

「そうだ、副長」

「あゝ？」

「最近、局長とみささん仲悪くないですか？」

問われて、土方はくわえていた火のついていない煙草を取り落とした。

資料整頓をしている山崎は、それに気付かない。

「なんとなく、お互い無視しあってるっていうか……」

「……ザキ、それ本人の前じゃ言ってねーよな」

「は？」

再度煙草をくわえた土方が、苦々しい顔をしている。

「あの二人、喧嘩中なんだよ」

「ええっ！？ あの仲いい姉弟がですか！？」

素っ頓狂な声を上げる山崎を背に、土方はああと頷きながら煙草に火をつけた。

「次の任務受ける受けないでよう。近藤さんは姉さんを心配して受けさせたくねえ、姉さんは近藤さんを守りたいから受けるって…。姉弟愛も難しいよな」

「そんなに危ない任務なんですか？」

資料から顔を上げ、山崎は不思議そうに問いただす。土方は煙を吐き出しながら、ほらと書類を放った。

「あのガマがえるの護衛だよ」

「トシ、裏口は固めたか？」

「ああ。3番隊が」

「周りの高いビルの屋上には？」

「総悟が1番隊を動員してくれてる。大丈夫だ」

数日後の彼らの仕事は、幕府関係者、ガマガエルこと「禽夜」の護衛だった。

以前にも真撰組に「お世話」になったことのある禽夜は、また攘夷浪士に命を狙われ始めたらしい。

「まさか正面門から来るとは考え難いが、用心に越したことはないなあ……」

屋敷の見取り図を見ながら、近藤はうーんと一唸りする。

「近藤さん、あんまり悩むと眉間の皺が消えなくなるぞ」

「ははは、トシに言われたくないなあ」

近藤が苦笑したその時だった。廊下がきしりと軋む音がし、操が資料を手に持ったまま滑るように歩いてくるのが見えた。近藤の顔から笑みが消えたのを、土方は確認する。

「局長、屋敷西側の細道に接してる塀のあたり、低くて侵入するのも簡単だわ。細道だから人通りも少なくて侵入にはうってつけだと思うの。ここに何人が動員していいかしら」

「西側か、考えてなかった……。分かった、この場所に二人ほど警備を頼もう」

「よろしくお願いしますね」

操はそれだけ言って、持ち場に戻っていった。近藤の盛大なため息がひとつ、土方に届く。

今の二人は、局長と9番隊隊長の立場で会話していた。姉と弟の關係など微塵も感じさせない、

事務的な…。

「まだ姉さんと喧嘩してんのかい？」

「…」

「お互い意地を張るのはそろそろ止めるよ」

操と近藤が喧嘩してすでに一週間がたつ。姉弟仲良く笑ってくれる姿を見られないのは、土方としてもいささか寂しい。

「…分かってるんだ、みい姉が俺を思ってくれてるのは」

「でも俺だって、みい姉を心配してんだ…って言いたいんだろ？」

「  
…」

『お願いだから臍履しないで！ 私だって戦えるのよ！』

口論になった時の、姉の言葉を思い出す。

『臍履なんかしてない！ ただみい姉を心配してるんじゃないか！』

『それを臍履っていうのよ！ もし私が貴方と血のつながりもないただの女隊士だったら、貴方は同じことが言えるの！？』

お互いを心配するあまり、お互いの思いがすれ違う。

近藤は姉に危険な任務についてほしくない。

操は近藤を護りたいがために、近藤が出る任務にならついていく。

それは互いを思うが故の、すれ違い。

「…早く仲直りしてくれよ。アンタたち姉弟の笑い声を聞かねえと、

やる気が起きねえよ」

煙草をくわえて火をつけながら紡がれた土方の言葉に、近藤は小さく息をついた。

「仲直り、出来るかな……」

「みい姉さん、まだ局長と喧嘩中なのかい？」

塀に寄り掛かったままがりがりとかくわえた煙管に歯をたてる操に声をかけたのは、10番隊隊長の原田だった。操は気に食わないことがあった時、そして怒り心頭の時、無意識に煙管を噛む癖を持っている。原田はそれを知っていたのだ。

「…私が勲のそばにいたいがために真撰組にいるのなんて、あの子が一番分かってくれているはずよ。なのにあの子は、私が危険な任務につくのを躊躇う。あの子と同じ任務に就かせようとしてくれない…」

「そりゃあ、局長もみい姉さんが大事だからじゃないか」

煙管を下し、操は原田を見上げる。

「思い思われているから、どうしてもすれ違いが起きちゃうんだよ。局長がみい姉さんを危険な任務に就かせたくないのも、みい姉さんを大事に思ってるからだろ？」

「…私だって…」

「みい姉さんも局長を大事に思ってる、そんなの誰もが知ってるよ。でも、お互い少しは慎まなきゃ。思いの押し付け合いになっちゃうぜ？」

操は視線を落とし、肩を下した。原田はまるで幼子でも見るように淡い笑みを浮かべて、操の顔を覗き込む。

「早く仲直りしてくれよ。近藤姉弟が笑ってるのを見るのが、俺らのささやかな楽しみなんだからよ」

「…変な楽しみね」

操が苦笑し、原田はそう言わないと歯を見せた。

「ちょっと禽夜様！　あまりうるちよろ出歩かないでくださいよ。アンタ前にもこうやって出歩いて狙撃されたでしょうが！」

山崎のそんな声が聞こえたのはその時で、ふと顔を巡らせれば縁側にでている禽夜の姿があった。

「うるさい！　こつ何日も家に閉じ込められては脳が腐る！　もうウンザリだ！」

「こつちもそんなアンタを護るなんざウンザリですよ！　でも命狙われてんでしょ！　分かってんですか！」

山崎が止めてもどうにもならないことを知り、操はつかつかと縁側に歩み寄る。

以前身を挺して護った近藤に対して酷い暴言を吐いたというこの力  
エルを、操は好きになれなかった。

「命が惜しくなければ勝手にどうぞ。禽夜様」

庭から呼びかけ、禽夜はケロ？ と操へ視線を向ける。

「私どもは禽夜様をお守りするためにこうして仕事しておりますの。  
どうぞ勝手な行動は慎んで下さいませ。外に出られて禽夜様に何か  
あった場合、私どもはなんの責任も取れませんわ」

禽夜は縁側に立っているお陰で頭二つ分違う操を見下ろし、フンと  
鼻で笑った。

「女風情が、随分と偉そうだケロ」

操の眉が、ぴくりとつりあがる。

「女の身で剣を握るなど御苦労なことケロ。女の仕事は家の奥に引  
っ込んで家事をすることではないのか？」

「デメエ……」

腰の剣に手を伸ばす原田を片手で制し、操は禽夜から視線を外さなかつた。

「後ろに控えているだけが女の仕事ではありません」

「フン、その細身で何を護ろうというのだケロ。力を入れればポキリと折れそうなの腕で、護れるものなどなにも……ゲロ！」

いつの間にか禽夜の後ろにいた近藤が動いたのはその時で、近藤は左手で素早く禽夜の長い舌を掴むと、右手で首を抑えて壁に叩きつけた。

禽夜から情けない「ゲココ……」と悲鳴が上がり、操や他の隊士たちが驚いて息を呑んだ。

「聞き捨てなりませんな。禽夜様」

近藤の口は可笑しそうに笑っていたが、目は笑っていなかった。

「もがらび……！」

「姉はな、男ばかりのなか俺たちの側にいてくれるがために、見護つてくれるがために、言葉に出来ないような努力を積み重ねてきたんだ。アンタがどうこう言えるような、そんな生易しいものじゃないんだ！」

まわりの隊士は近藤をとめることなく、茫然としていた。ただ禽夜だけが、離せと言わんばかりにゲコゲコもがいていた。

「二度と姉を馬鹿にするな。今度姉を馬鹿にしたらどうなるか、分かりますな？」

禽夜がこくこくと頷き、近藤はまず掴んで引つ張っていた禽夜の舌を離した。ゴムのように伸びていたそれは勢いよく禽夜に戻り、まるでゴムパッチンのように禽夜の顔を強打した。

「ゲコ！」

近藤が首を押さえていた右手を離れたせいで支えを無くした禽夜が、顔を押しさえて床に崩れた。痛みにした打つ禽夜を無視し、近藤は果然と自分を見ていた隊士たちに笑いかける。

「さっ、みんな警護頼むぞー」

そして何事もなかったように立ち去った。近藤が縁側の角に消えてから、原田は啞然とする操の肩をぽんと叩いた。振り向いた操は笑っている原田に釣られて、その朱唇を釣り上げる。

嬉しさで今にも泣き出しそうな、そんな笑みだった。

月は、隠れていた。

深夜、禽夜の屋敷を取り囲む、複数の影があつた。

正面門や裏口は使わない、堀をよじ登って、一人、また一人と屋敷

内に潜入する。

こそこそと物陰を進む彼らは、己らが既に見つかっていることに気付かない。

「今日は雲が多いわね」

独り言ともとれるハスキーな声に、彼らは足を止めた。暗がりに目を凝らすと、一人分の影が座っているのが見えた。煙草でもふかしているのか、ふうつと煙を吐く音がする。

「こんな夜は月を見ながらお酒でも呑みたいのに……。そう思わない？」

雲が晴れる。

月明かりに照らされて闇夜に現れたのは、操その人だった。

「なつ、9番隊隊長、近藤操！」

「あら、私をご存知？」

細く煙を吐き出しながら、操は淡く笑って見せる。

攘夷浪士の一人が、鼻で笑った。

「女の身でちゃんばらごっこに手を出す哀れな侍もどきが！ 女はすっこんでいろ」

「…はあ」

ため息と共に煙を吐き出した操は、縁側の角に煙管を叩きつけて火種を落とした。

どいつもこいつも、本当に…。

「女が刀握っちゃ駄目なワケ？ 言っておくけど私、貴方たちより強いわよ」

「ほざけ！ 貴様に何が出来る！ この屋敷はすでに我ら天廻党が既に包囲している。幕府の狗はさつさと妍賊を差し出し、尻尾を巻いて逃げるがいいわ！」

操の唇が二日月につりあがったのを、見た攘夷浪士はいなかった。

「一人？ 誰が？」

その言葉を待っていたかのように、屋敷内から真撰組隊士がどやどやと出てきた。

不意を突かれて、攘夷浪士たちは戸惑う。

「貴方たちをこの屋敷におびき寄せるのは計算のうちよ。そのほうが楽でしょう？」

果たしてその「楽」が真撰組と攘夷浪士のどちらを示しているのかは謎だが、山崎や原田、攘夷浪士を囲む隊士たちが、しゃん…と鐸鳴りを立てて刀を引き抜く。

「私、今日は気分がいいの。貴方たちの相手なんかせずに、早く帰りたいわ」

操はにっこり笑うと、腰にさした愛刀を引き抜いた。

「というわけで、さっさとやられちゃって頂戴。くそバカ共」

それは、美しい笑みのまま紡がれる言葉ではなかった。

屋敷の中はなだれ込んだ攘夷浪士とそれを食い止める真撰組によって狂喜乱舞の戦場と化していた。

奥の部屋にいた禽夜はすでに腰がぬけ、四つん這いになりながらも部屋を移動しようとする。

「妍賊め成敗に参ったあ！ 天誅う！」

ふと気付けば一人の攘夷浪士が刀を振り上げていて、禽夜は思わず目を閉じた。

ガキイイイン！

それでも衝撃は起きず、ついで悲鳴が上がって恐る恐る目を開けてみれば、血に濡れた刀を握った土方と、その奥に倒れる攘夷浪士の姿。土方が禽夜をかばい、攘夷浪士を倒したのだ。

禽夜は今のうちにとばかりにそろそろと床を這ったが、眼前に土方の足がどんっと置かれ、「ひい！」と情けない声をあげて土方を見上げた。

「動いちゃ困るんですよ、禽夜様ア。この騒ぎに乗じてこの屋敷で大暴れする計画が台無しになる。…動くんじゃないぞねえぞ」

土方の目が据わっていてあまりにも恐ろしくて、禽夜は「ゲコー！」と間抜けな悲鳴を上げた。

一方広い庭でも戦鬪が続いていた。斬っても斬っても攘夷浪士の数は減らず、一体何人いるのか問いたくなる。

「まったく、ゴキブリか…」

毒づいた近藤の背中に、誰かが背中を合わせた。肩越しに振り向いてみれば、長い黒髪が揺れている。

姉であると気づくまでに時間はかからなかった。

「…私、謝らないから」

少しばかり息の切れた姉の言葉に、近藤は肩をすくめる。

「いないよ、謝罪なんて」

「ええ、だから…」

その時だけは、まわりが静かになった気がした。近藤は姉の言葉を、しっかりと聞き取ることが出来た。

「ありがとう…」

大好きな姉の、嬉しい言葉。最初は不意打ちを食らって目を見開いていた近藤だったが、じわじわと湧き上がる嬉しさに顔を綻ばせる。

「へへっ…」

背中越しで見えないが、姉もきつと笑っているはずだった。

「こいつら倒して早く帰りましょう。貴方とお酒が飲みたくてたまらないわ」

「みい姉がお酌してくれる？」

「はいはい、しますとも」

仕方無さそうに苦笑し、操は腰を落として刀を構える。

近藤も刀を構え、こちらに向かってくる攘夷浪士を見据える。

「怪我しないでね」

「みい姉こそ」

二人して駆け出した。次々に襲いかかる攘夷浪士をたたっ斬り、前へ進んでいく。

二人ともどこか、清々しそうな笑みを浮かべて…。

そして数えきれぬほど攘夷浪士を倒し、あたりが少しばかり静かになったころ…。

「総悟！ 作戦決行だ！ 遠慮なく撃て！」

「はいよっ！」

元気な返事をして沖田がバズーカを放った。

未だ向かってくる攘夷浪士の群れではなく、禽夜の屋敷へ…。

直撃をくらい、ガラガラと崩れ去る禽夜の屋敷。

この戦いで一番の損害を受けたのは真撰組でも攘夷浪士たちでもなく…。

この崩れ去った、禽夜の屋敷だったという。

任務を終わらせて、隊士たちが屯所に帰ってきたのは11時過ぎ。

それでもすぐに床に入る者は誰もおらず、宴会場で任務ご苦労様の打ち上げが行われていた。

誰もかしこも酔っ払って、声高らかに笑っている。

「しかし、騒ぎに乗じてガマガエルの屋敷破壊してやろうなんぞ、副長もよく考えましたね！」

「あのバカガエルにや鬱憤がたまってたからな。少しくらいいいだろ」

「バズーカの直撃食らって屋敷が壊れる時のあのガマガエル！ゲコー！だって！ざまみろっての！」

カラカラと上機嫌に笑っていた土方は、ふと豪快に笑っている近藤を見て唇を釣り上げた。

近藤の隣には操が座っており、沖田と一緒に楽しそうな笑みを浮かべている。

仲直りしたのだ。

「ふくちよ…？ あ」

黙り込んで近藤姉弟を見やる土方の視線に気づいたのか、山崎が嬉しそくに笑う。

「やっぱりあの二人は、一緒に笑ってるのが一番ですね」

「…ああ」

良かったと一息をついて、土方は杯の酒を飲み干した。

一方、3分の2が崩壊した禽夜の屋敷では…。

「禽夜様、もう賊はいなくなりましたから…」

「ひい…。人間怖い、人間怖いケロ…！」

軽く人間恐怖症に陥り、布団に潜り込んで出てこない禽夜の姿があったという。

終

## 思い思われ（後書き）

私は基本、携帯で小説をうつんですが、禽夜の口癖「ケロ」をうつと予測変換に「ケロ口軍曹」って出てきます。（ケロ口すげえ！）みなさんの携帯はどうですか？

休載前最後の操話にしては、いい話が書けたと思います。近藤さん大好きだあ！ ム（＾　＾）ノ

## L a s t   A n g e l（前書き）

大学の文化祭が終わって一息ついた玖月です。でも休んでる場合じゃないレポート地獄が…（悲鳴！）

復活後第一弾となるこの操話は、（勝手に決めた）操のテーマソング…キャラクターソング？ を元に書いてます。操のテーマソングは倅田來未の「L a s t   a n g e l」です。映画「バイオハザード3」の主題歌で、東方神起とコラボしているあの曲です。（\*^へ\*） いつもは綺麗な恋の歌しか歌わない倅田來未には珍しい戦いの曲なんですが、スゲエカッコいいんですよ！ 皆さんも聞いてみて下さいね！

## Last Angel

「なんだって言うんですか奴ら！　いくら操隊長が強くて信頼出来るからって、こんな週に一回は御用改めに入れなんて！」

屯所内、第2会議室。先ほどから9番隊隊士である桐生は、机に向かうことなく室内の端から端までを行ったりきたりしている。

「落ちつけよ桐生。操隊長だからこそ任されたんだから」

「だからって、頻度が高すぎる！　操隊長だって休みなく働いて疲労はたまるばかりだ！　天導衆の奴ら、操隊長を目の敵にしているんだ！」

こここのところほぼ週に一回の割合で、操率いる9番隊は天導衆の命令により攘夷浪士の御用改めに入っている。

御用改めとて、下準備が大切なのだ。

屋敷内の人数、間取りを詳しく調べ上げて慎重に作戦を練り、細かい打ち合わせの末に突入する。

その作戦を考えなければならぬ時間を含めると、操の休息の時間は限りなく少ない。

操を思い怒り心頭の桐生は怒りのやり場がないのか、あちらこちらに諸手を上げて胸中に渦巻いて爆発寸前の感情を持て余す。

はたから見たら踊っているような行動を楽しそうに眺めながら、操は唇を釣り上げた。

「怒ってくれるのはありがたいけれど、桐生、座りなさいな」

「でも、操隊長…」

「彼らが私を嫌っているのなんて昔からよ。どう足掻いても、私が彼らに好かれることはないわ」

テーブルに向かった桐生を含めた9番隊隊士全員が、不思議そうな顔をする。

「何故ですか？」

「私は真撰組局長の勲の姉よ。そして私が幕府に忠誠を誓っていないことなんか、誰もが知ってる。そうよね？」

9番隊隊士最年長の三ツ木が頷き、操は満足そうに笑った。

「幕府に忠誠を誓う弟と、幕府なんかどうでもいいと考える姉…。一緒にいたらどうなる？」

「…朱に交われば…」

「赤くなる、その通りよ佐伯。どちらが赤なんか一目瞭然よね、先に生まれたほうが影響力が強いもの。つまり彼らは、私によって勲が操りにくくなることを危惧してるのよ」

操の持った筆が、半紙にすりと線を描く。

「彼らから見れば、勲は操り駒の一つに過ぎないでしょう。勲はただでさえ幕府には忠実だから、恐らく相当扱い易いんでしょうね。その駒のそばに、幕府に忠誠を誓ってない人間がいたら…」

「局長の忠誠は、幕府から離れるかもしれない…」

部下、尾高の言葉にそうよねと頷きながら、操は筆を滑らせて半紙に線を描き続ける。

「彼らが裏で政権を握っているのは知っているでしょう？ 『あの男』なんか所詮はただのお飾りだもの。実質あの『バカ』に従っている勲を操るのは、私たち真撰組全員を屈服させるより容易い」

操は將軍たるものが大嫌いだ。なのであの男、あのバカという単語が將軍茂茂を示すのだと気づき、隊士たちは納得してうんうんと頷く。

「だからその操り駒を破壊するか、操りにくくしている私が邪魔で仕方がないんでしょう。あの子は彼らの遠巻きな命令よりも私の助言を聞いてくれる。自分で言うのもなんだけど、勲に与える影響力は彼ら天導衆よりも私のほうが上よ」

筆を置き、ぱたぱたと手扇で乾かす。

「だから、奴ら…」

「そう、手っ取り早く勲から私を遠ざけているのよ。私が京の遠征からなかなか帰って来られなかったのも、同じ理由でしょうね」

「なんて奴らだ！ 操隊長を何だと思って…！」

立ち上がって怒鳴る周防に、操は嬉しそうに苦笑する。自分のために、部下が怒ってくれるのはすごぶる嬉しい。

「いいから座りなさいな、周防。私だって彼らのいいようになっ  
ているつもりになってさらさらないわ」

今し方書き終えた計画書を、ずいっと部下たちに差し出す。

「明日の早朝、御用改めに入るわ」

「えっ！ しかし奴らから指示されたのは、明後日の夜…」

「そう、ターゲットの攘夷浪士たちはそう思っているでしょうね。  
前回の御用改めで気づかなかった？ 奴らが、待ち構えていたよう  
な動きを見せたこと」

「あっ！ 自分も何か変だと思いました！」

はいはいっ！ と手を上げる周防。鋭いわねと、操は笑う。

「奴ら、俺らが突入すること知ってたってことですか！」

「その通り。浪士の一人が自白したんですって。天導衆から大金を渡されて、私たちを抹殺しろと依頼されたって」

「奴らあつ！」

がたと机を叩いて立ち上がる桐生に落ち着きなさいと声をかける。桐生は怒りが収まらないように口をへの字にまげて、しぶしぶ座った。

「彼らも捨て駒だったんでしょ。私たちを抹殺出来るならそれでよし、失敗しても私たちが口封じで斬ってくれる…。調子いいわね」

フンと鼻で笑う。いつまでも彼らの良いように扱われるのは、まっぴらごめんだ。

「というわけで、彼らの裏について、明日の早朝に突入します」

「それは大いに賛成ですが、隊長…。奴らに何か言われやしません

か？」

「手をこまねいて見ているだけの彼らにどうこう言われたくないわ。何か言われたらその時よ。100倍に言い返してやるから」

ウフフ…と不気味に笑う操に、彼女の部下たちは上司の恐ろしさを痛感したのだった。

「貴様ら何故っ…！？　ぎゃあ！」

「大人しくしてくれれば命はとらないわ。刃向かうのなら容赦はない」

愛刀を振って血を飛ばし、操は静かに言っただけ。

太陽も顔を出していない早朝の御用改め。みんな安心して眠っていたのと不意を突かれたのが重なって、彼らはそれらしい抵抗も出来ないまま操率いる9番隊に捕縛されていた。

手錠をかけた上でロープでぐるぐる巻きにし、一つの部屋にかき集める。

「操隊長、こちらは確認OKです！」

「了解。意外とあっさり終わった…ん？」

ぐるぐる巻きにされてのびている者、恨めしそうに睨みつけてくる者の頭数を数えて、操は首を傾げる。

「ひい、ふう…おかしいわね。予定より一人足りないわ」

「えっ、あれ…。本当だ」

一人一人指を指して数えていた三ツ木が不思議そうに首を傾げる。

「まさか、取り逃がした…？」

「お前ら！ あと一人はどこだ！」

問いかけても捕縛した攘夷浪士は答えず、かかかと至極可笑しそうに笑っただけだった。

「なるほど我らは嵌められただけか、だがこのままでは終わるまいっ！」

「何を言って…！」

その時だった。操の後方の障子が勢いよく開き、残りの攘夷浪士が操に襲いかかった。

「ああああ！」

振り上げられた刀の先には、操がいた。

「隊長!？」

慌てて近くにいた桐生が刀を引き抜くよりも早く、操は勢いよく足を踏み出して振り下ろされる刀の鍔を蹴った。

最後の攘夷浪士が怯んだ隙について、操は彼の腕を掴んでその懷に踊りこむ。

「捕まえた」

まるで恋人に向けられるような甘い囁き。攘夷浪士が不覚にも動きを止めてしまったのは、操の美貌を間近で見てしまった故だったのだろうか。

「りゃっ！」

操の容赦ない蹴りが、攘夷浪士の胸に炸裂する。

構える間もなく胸に衝撃を食らった彼は、仲間たちが呆然と見ている中で思い切り後方に吹き飛んだ。

世界が目覚めます時間。

何か重いものが障子をはり倒して庭に転がる大きな音が、易々とその静寂を破壊した。

案の定と言えば案の定だったが、御用改めの翌日、操は天導衆に呼ばれた。

本部で深刻な顔をして松平が待っていたが、操の顔はどこか飄々としていた。

「彼らは相当わたしのこと嫌いみたいですわね」

「…操ちゃんは彼らが好きなのかい？」

「あはは、まさか。ゴキブリよりも嫌いですわよ」

満面の笑顔でさらりとそんなことを言うものだから、そうかい…と  
呟いた松平の唇が、ひくりと引きつった。

「続け様の此度の任務、遂行ご苦労であつた」

「お褒め頂き光栄ですわ」

貼り付けたような笑みを浮かべたまま、操は上空にいる彼らを見上げる。

心の中ではお互いの罵倒オンパレードだろうが、両者ともそれは口にしない。

「しかし、我らは明後日に突入せよと命じたはずだが？」

「昨日未明に逃走を開始するとの疑いが浮上したため、予定を早めたに過ぎません。それとも何か…？」

操は唇を釣り上げ、悪戯っぽく首を傾げて見せた。

「命じられた日にちに突入しなければならぬ理由でも？」

ちよつとちよつと、それはマズいんじゃないのぉ！　と言うような顔で隣に控えていた松平が操を見、天導衆のメンバーがぐっと言葉を無くした気配が伝わってきた。

この生意気な小娘が。

能無し共が。

息をするのも躊躇う静寂の中、松平には、両者の罵倒が聞こえるようだった。

「操ちゃんは怖いもの知らずだな」

天導衆をあとにして本部の広場に出ると、松平は肺の中の空気を全て出し切るような息をついた。

全く、第三者だと言うのにこちらが胃に穴が開きそうな張り詰めた空気だった。

「そうでしょうか」

「そうだとも。奴らはこの国の、真の支配者と言ってもいい。それを分かっていながら喧嘩を売るたあ……」

「国だろうが権力だろうが、私には関係ないことですわ。私はただ、勲たち大切な者を護るだけですもの。彼らが私を試すのは勝手ですけど、どうせ真の私が偽りの私かなんて彼らには分かりはしないでしょう」

松平は再び息をついて、仕方無さそうに笑った。

「女の子は強いねえ……」

「フフ。それではオジ様、私は帰りますね」

「ああ、気をつけるんだよ。奴らはどこで、邪魔者の操ちゃんを抹殺しようとするか分からないんだから」

大丈夫ですよと笑って、操は松平に頭を下げた。

ごきげんようと自分に笑いかけて本部から出て行く操を見送って、松平はちらりと中に繋がる扉を振り返る。

武装した怪しい人間は、もちろん出てきやしなかった。

外に出ると、気持ちのよい風が肌を撫でた。

隊服を脱いで肩にかけ、屯所への道を辿る。

一度嫌いになったものは、滅多な事がない限り好きになることは出来ない。

恐らく死んだとしても、操は天導衆を好きにはなれないだろう。

弟から一度刀を取り上げておいて、

良いように動かされるのは我慢ならない。

（壊せるものなら壊したいわよ…）

天導衆も同じことを思っているだろう。

真撰組局長近藤の姉である操がいなくなれば、どんなにうまく近藤を操ることができるだろう。

松平の言つとおり、いつかは抹殺される日がくるかも知れない。

（…来るなら来なさいよ）

その時は、受けてたとう。

だからおいで。

今すぐにも…。

終

## L a s t   A n g e l（後書き）

短くてすみませんでした…。本来御用改めのシーンはなかったんですが、昨日（2日）完成したものを読み返したらなかなか物足りない代物になってまして、ちょっと慌てて書き加えたのがあの御用改めシーンです。

書いててとっつぁんで思い出したんですが、今週のジャンプのとっつぁんカッコ良かったですね！ あのまま操をお邪魔させたいくらいでした。…それにしたって桂さんは本当に変装が好きだな…。（  
ーー；）

そうだ忘れてた。神楽ちゃん！ お誕生日おめでとう！

## 大好きなおい（前書き）

高杉さんがぶつ壊れてまーす。ごめんなさい  
> ( ( ( <  
↑  
壊れなかったためしナシ。

大好きなおい

こそこそと、誰にも見つからずに部屋を出たはずだった。

こっそり甲板に出、外出用の空中バイクに歩み寄った時だった。

「何処に行くおつもりですか？ 晋助様」

刺々しい声が飛んできて、高杉はぎくりと肩をすくめる。

彼女にだけは、見つかつてはいけなかった。

「…散歩だ」

「どちらへ？」

恐る恐る振り向くと、冷たい表情の姫華がこちらを見ていた。

「…江戸」

「…はあ」

姫華は何も言わず、ただわざとらしくため息をついてみせた。

ひと月前、高杉は江戸での散歩の最中に思想の違う攘夷浪士に急襲され、命の危険を伴うほどの大怪我を負った。

今はすっかり回復したものの、姫華はあのと看病にいた高杉に遠慮ない説教を食らわせて、多少なりとむやみやたらと出歩いたことを反省させた…はずだった。

どうやら、全然懲りてないらしい。

「二度はやられねえ…」

「誰が信用出来ますか！ 大体散歩なんて何処でもいいでしょうに、どうしてわざわざ危険な江戸…」

怒鳴って、姫華はあることに気付いた。そうだ、江戸には彼女がいる。

「…まさか、近藤操に会いに行くんじゃないでしょうね」

ぼそりとした呟きに、高杉はドキッとすする。

「あゝ、ついでだついで…」

「近藤操がいつぺん貴方をたたっ斬ってくればいいのに」

「なんか言っただか」

「いいえ何も。貴方になに言っても馬の耳に念仏だから、止めはしません」

さらりと言われたひどい言葉に、高杉の額に血管が浮く。

「突き落とすぞ…」

「気をつけて行って来てよ。貴方に何かあつたら心配する人間は沢山いるんだから」

同胞としての優しい笑みを向けられて毒気を抜かれてしまい、高杉は一本取られたと小さな舌打ちをして肩をすくめた。

笠を被って、比較的大人しめな着流しを着て、江戸に降りた。

姫華に再びの説教を食らうのはごめんなので、さり気なく人の多い道を選びながらあてもなくあちこちを歩き回った。

そして彼女がいるであろう場所を探して行く。

沈む夕日の見える土手に、腰掛けている着物姿の女が一人。

いた。

操だ。

すぐにもからかってやりたいところだが、からかっては離れるだけだと以前姫華が教えてくれた。

耐えて、煙管をくわえた操に歩み寄る。

「いるかい？」

マッチを擦って差し出せば、嬉しそうな顔が返ってきた。

「ありが…」

そして誰であるかを確認し、ぼろりと煙管を落とす。

「貴方！」

「よお」

「なにしに来たのよ!」

「いらねえのかイ?」

操は悔しそうに煙管で火を受け取り、最初の煙を吸った。高杉も煙管を取り出して火をつけ、操と少し離れたところに腰掛ける。

「…なにしに来たの?」

「散歩」

「ここに来なくなつていいじゃない」

彼女をからかう言葉なら沢山出て来るのだが、高杉はあえてなにも言わずに沈黙を貫いた。

操は煙をはいたのちに、静かに言う。

「怪我の具合は?」

「もう治った」

「そう。また急襲されるわよ、船に籠ってたら？」

高杉が沈黙を通せば、操は憎まれ口を叩くことしか出来ない。姫華の言った通りだ。

「……いだな」

「はい？」

「綺麗だな」

「ああ、夕焼けがね」

操がと言いたかったのに、さらりと流された。

「そういえば、始めて貴方とあいまみえたのも夕焼けの綺麗な日だったわね」

「ああ」

「あの時は私が貴方に火をあげた。それで、キスされたのよね……」

「してもいいかい？」

「殴るわよ」

きつぱりと言われ、高杉は肩を竦めた。全く、敵わない。

「じゃあこっちも質問。しよっぴいていい？」

「勘弁しろイ」

こちらもきつぱりと言い、煙を吐き出す。

「愛刀もないんじゃ、どうにもできねえだろ？」

「出来るわよ。やってみる？」

「やなこつた」

いつもとは違う高杉に居心地の悪さを感じているのか、操は身をよじる。

「帰るわ」

「なんでえ、行っちまうのかい？ 折角おめえさんに会いにきたのに」

「はいはい。ご無事でなによりよ。今度は私が斬ってあげるから、覚悟してなさい」

立ち上がり、操は尻についた砂を払う。

「じゃあね」

「操」

呼ばれて振り返った操に、高杉はひょいと何かを放る。操は飛んできたそれを、慌てて受け取った。

「…なにこれ」

「この間の、礼の品だ」

それは、黒翡翠のついた髪紐。包まれていないというのが彼らしい  
といえは彼らしい…。

「…」

「ま、いらなければ捨ててくれや」

立ち上がり、歩み去ろうとする高杉。操は手の中の髪紐をしばらく  
眺めて…。

「待ちなさいよ」

振り向けば、操は髪を一房まとめて紐で縛っていた。

縛り終わり、手を下ろす。

「どう？」

「…なかなかのもんだな」

「ありがとう、とりあえず貴方の宣戦布告として受け取っておくわ」

髪をかきあげ、高杉に背を向ける。

「じゃあね」

去っていく小さな背中。高杉は耐え切れずに駆けていた。

音もなく近寄り、細い背中を抱きしめる。

「きゃ…！」

「黙れ…」

やはり我慢などできやしない。硬直する操にそれだけ言い、首筋に顔を埋め、腰に手をはわせていく。

「…貴方ねえ…」

操の声に、怒りが混ざっているのが分かる。

でも仕方ないこと。

愛おしくてたまらないのだから。

「誰かに見られたらどうするのよ」

「誰もいねーよ。誰もいなかったらしてもいいのか？」

「そついう問題じゃないわ」

ぎゅっと腰にまわした腕に力を込める。操は警戒しているのか、その腕に手を添えてきた。

「おめえ、香か何かつけてんのか？」

「つけないわよ。どうせ汗と血で消されちゃうし…。どうして？」

「前から思ってたんだが、おめえはいい匂いがする」

甘くて、柔らかくて、頭がくらくらする。

「姫華とはまた違う匂いだ」

「…まさか姫華やまた子にもこんなことしてるんじゃないでしょうね。また子はともかく、姫華にやると河上万齊に殺されるわよ」

「その反応が楽しいからいいのさ」

「性格悪…」

ぼそりと呟く操。高杉は操の芳香を肺いっぱいにつまみ込むと、操の顔を押しさえて素早く頬にキスした。

「っ…！」

操の手が動き、懐に入れていた小刀を引き抜いた。高杉は大きく飛び退いて、間合いを開ける。

「この馬鹿總統…」

「おいおい、俺あ病み上がりだぜ？　少しは遠慮してくれよ」

「貴方に遠慮なんか不要よ！　病み上がりなら船で大人しくしてろつてのよ！」

「そう怒るなって」

操は相変わらず高杉に小刀を向けている。高杉は笑うと、踵を返した。

「操、好きだぜ」

操が、豆鉄砲をくったように目を見開いた。やがて歩み去った高杉の姿が消えると、操はため息と共に全身の力を抜いた。

「…不意打ちをくらうとは…」

いつも愛しているという言葉しか聞かない者にとって、「好き」と

という言葉は不意打ちにしかならない。

「……ずるい男」

一息をついて、操は刀を収めた。

「その分じゃ、近藤操より優位に立ってきたのね」

「分かるかい？」

船に帰ってからの高杉は、至極ご機嫌だった。甲板で煙管をふかす

高杉に、姫華は楽しそうに笑う。

「嬉しそつだもの。やっぱり近藤操は、好きって言葉に慣れていなかったようね」

操に好きと言ってみなさいと奨めたのは、姫華だった。同じ女同士、思ふことは同じだろうから。

「なによりだわ。貴方に怪我もないようだし、これで安心して眠れる」

姫華は本当に安心したようで、肩の力を抜いた。

「私部屋にいるから、なにかあつたら呼んでちょうだい」

そう言つて背をむけた姫華を、高杉はぐいと抱きよせた。ちょうど操にやったように抱きしめる。

「…ああ、やっぱりおめえとは違うな」

「…はい？」

「操は、いい匂いがした」

抱きしめられたまま、姫華は怪訝そうに眉を寄せる。

「香水の香りじゃなくて？」

「つけてないとよ」

ならばなんの香りなのか。女独特の匂いもあれば、シャンプーなどの匂いか。

「どんな匂いだったの？」

「…甘くて、柔らかかったな」

お菓子じゃないんだからと、姫華は笑う。

「ああ、あれだ。干した洗濯物の匂い」

男であれば、なにを酔狂なと笑うだろう。だが姫華はその匂いの正

体に気付いた。

「ああ……」

「なんだ。分かるのか？」

「ええ、それは恐らく……」

高杉が、彼女を気に入る理由のひとつ……。

「お母さんの匂い、でしょうね」

終

## 大好きなおい（後書き）

今週のジャンプ読みましたか？とつつあんと桂さんががかつこいいつたらない！ 本当に操をお邪魔させたかったです！

「オイ…次会った時はゲンコツじゃすまねーぞ、…桂」

とつつあんいつ桂さんだって気付いた！？

「フン…望むところだ」

フツの桂さんに戻った！ そしてなんだその不屈な素敵な笑みは！  
↑コイツうるせえ…。

（ （二人とも格好良すぎるっつう！！

失恋したらどうやって立ち直ればいい？（前書き）

あゝ、レポートウザッ！ レポート書いてるんなら小説書いてたず  
っとマシやんけ！（。Д、）、ペッ！！ …と果てしなくやさぐ  
れてる玖月です。一応レポートは終わつたし、3作品に投稿する話  
はストックから出せばいいんで困ってはいないんですが、やっぱり  
堅苦しいレポートより楽しい小説を書きたいって言う…。

失恋したらどうやって立ち直ればいい？

『兄さんが大事な話があるからと、お前を呼び出していたんだが…』

愛しい人からそんなことを言われたのは、昨夜のことだった。

いつものように息が苦しくなるほど抱きしめてくれた彼は、どこか不思議そうに言った。

『なんだか兄さんの様子がおかしくてな…。銀時曰わく兄さんが失恋したのだとうだの…』

独り言のように呟く桂に、操は目を見開いたのだった。

松光は土手の斜面に座り込んでいた。

巡回中だった操は斜面をおりて、松光に歩み寄る。

「おはようございます、松光殿」

声をかけても、松光は動かない。光を宿さぬ目は開かれているから、寝ているわけではないようだ。

操は首をかしげて、松光の肩を叩く。

「松光殿？」

思った以上にびくりと驚かれ、操もびっくりした。

「あ…、操殿…？」

「おはようございます…。珍しいですね、松光殿が気配を感じないなんて…」

よいしょと隣に腰掛けると、松光は力無くはは…と笑った。

「少しぼうつとしていたもので…」

ともすれば簡単に消えてしまいそうな儂い笑みを浮かべるものだから、操は不思議そうに首を傾げる。

「…彼から、松光殿が私に話があるって聞いたのだけど…」

「…ああ」

松光はさも今思い出したかのように頷いた。そしてたっぷり時間を取ったあと、ため息のように言った。

「…先日、鈴鳴りの君に会うことが出来ました」

松光の発言に操は流石に驚いて、松光を見た。

「江戸で…?」

「ええ、どうやら買い物を楽しんでいたようで」

「で、どうでしたの?」

操は鈴鳴りの君の正体を、知っているはずだった。もし鈴鳴りの君が “ 彼女 ” であるなら…。

「…フラれてしまいました。もう会えないと…」

肩を落とし、至極悲しそうに言う松光。操はやっぱりな、と失礼ながら思ってしまった。

「俺が銀時の兄であることが、いけないようで…」

「…でしょうねえ…」

それだけではどうにもならないわよと息をついた操に、松光が反応する。まるで、彼女を知っているような口調だ。

「確信に変わったわ。やっぱり鈴鳴りの君は私の知っている子。誤解を解かなければ、松光殿に会うことを控えてしまう子だわ」

「…誤解？」

「彼女が、松光殿は主のお兄さんでもあると知らされない限り…」

松光はひどく怪訝な顔をしていた。操の言っていることが、理解出来ないのだろう。

「私の勘が正しければ、鈴鳴りの君は鬼兵隊幹部の子よ。赤い弾丸という異名で指名手配もされてる」

松光が息を呑んだ。彼女が銃を使って人を殺しているのは匂いではなく気付いていた。

だがまさか、2番目の弟のもとにいるとは…。

「なんてことだ…」

「…松光殿にもう会えないと言ったのも、松光殿が高杉の敵となっ

ている旦那のお兄さんだと知ったからでしょう。主の敵の兄には会っ  
つちやいけない、いずれ松光殿も高杉の敵となるだろうから…って、  
考えたんじゃないかしら」

憶測だけど…と付け加える。松光は見えぬ目を開いて、しばらく黙  
り込んだ。

まるで、遙か遠くを見ているようだった。

「まだ、チャンスはあるってことですかね…」

せめてもう一度お会いしたいなと呟く松光に、操は会えるといいで  
すねと呟いた。

「…彼女の名前を、教えていただけないでしょうか」

彼女が自分の名前が嫌いだと言って名乗らなかったのも、自分の正  
体を明かせなかったからだろう。

「また子…。来島また子よ」

「また子…、良い名だ」

何度か舌の上で転がし、松光は小さく息をつく。いつもは飄々としている彼のあまりの凹みっぷりに、思わず苦笑が漏れた。

「きっとまた会えますわ。あまり落ち込んでいると、旦那や彼が心配します」

「ええ、昨日も散々心配をかけてしましまして…」

「兄貴ー！」

遠方から声がして、松光は不意に黙り込む。

息を切らした銀時が、土手を走ってくる姿が見えた。

「あ、旦那」

「兄貴！ やっと見つけた。ふられたショックで旅に出ちまったかと思っただぜ」

膝に手を起き、肩で息をする銀時。松光は唇を尖らせて、失礼だな

とぼやいた。

操はクスクスと、苦笑を隠せない。

「一回ふられちゃったくらいで旅には出ないわよ、旦那」

「出られてたまつかよ。一回ふられただけで旅に出られたら、俺は地獄まで旅立つちゃうよ」

それは、銀時が今までに何人もの女性にふられていることを言いたいのだろう。松光は立ち上がって、銀時のふわふわな髪を撫でた。

「女性たちが見る目がなかったただけだろう？　そうでなければこない男をふるわけがない」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられて、銀時は嬉しそうにへへっと笑った。

いい年をした銀時も、松光にかかればまだまだ子供だ。

「では、俺は帰りますね」

「ええ、お気をつけて。」

「じゃーな、姉御」

松光は銀時の肩に手を置き、杖もつかずに歩いていく。時折自分より僅かに高い兄を見上げる銀時の横顔は、とても楽しそうに笑っていた。

「知らなかったとは言え…、兄弟は似るものね」

愛してはいけない人を愛してしまった男たち。

しかし、心から愛される自分や彼女は幸せではないだろうか…。

(…また子、貴女は松光殿をどう思っていたのかしら)

一度だけ出会った、金髪の少女を思い出す。

本当に可愛らしくて、到底「赤い弾丸」と恐れられている攘夷浪士とは思えなかった。

「…」

どうして好きな人を愛してはいけないのか。

どうして、一緒にいられないのか…。

「…世界が変わったら、私たちは一緒にいられるのかしら…」

自分と桂も、松光と来島も…。

「世の中、どうかしてる」

少しずつ変わりつつある世界。

いつか愛する人と、人目も気にせず手を繋いで歩くことは、

できるのだろうか…。

終

失恋したらどうやって立ち直ればいい？（後書き）

銀さんって何だかんだ言いつつモテそうな気がするんですが、どうなんでしょう。（^| ^;）？姉上とかさっちゃんとか月詠さんとかその他たくさん美人な人周りにいるのになあ…。

でも本編で銀さんが誰かとイチヤコラしてる姿はあまり想像したくないって…。

あ、最後のほうに書いた操の台詞「世の中どうかしてる」っていうのは、私が映画を観に行った際に思ったことです。もう世の中恐ろしい…。

（（（（。A・・））））ぶるぶる…。

## 血に染まる指輪

### 前編（前書き）

人肌恋しくなってきましたね！そっぴや最近操と桂さんをイチヤイ  
チヤさせてないなあ…と思って、こんなん書いちゃいました。

（^^;）

雪が降りそうな、寒い日だった。

松光が用意してくれた安宿の一室で、桂と操は逢瀬を楽しんでいた。ただ言葉なく抱きしめ合って、共に食事をして、寄り添ったまま窓から覗く満天の星空を見上げていた。

「随分冷えてきたな」

「ええ、雪でも降りそう」

「…雪、か」

月明かりだけが差し込む室内がいささか寒くなってきたので、お茶でも煎れようと操は立ち上がる。

その背に、桂が声をかけた。

「肩…いや、右腕か。どうした」

「え？ どうしたって？」

振り向き、わざとらしく惚けて見せる操。これは何か隠しているなと桂はふんで立ち上がり操の腕を掴もうとするが、操は触らせまいとその手を逃れてしまう。

「血の匂いがするぞ。お前怪我をしているだろう」

「してないわよ、気のせい…」

桂の手が右の二の腕を掴み、操の顔が苦痛に歪んだ。

「っ…！」

「ほら見る。さっきから庇っていたから気になっていたんだ。…見せてみる」

「ちよっ…、大丈夫だから！」

「何が大丈夫なんだ！」

腕を掴もうとしても、操は桂から逃れるように身を引いてしまう。

端から見れば、図体の大きい子供がじゃれ合っているようだ。

「見せんか！」

操の細腕を捕まえて袖をめくろうとする桂だが、操は相当に嫌がっているようで身をよじった。

「やあ！ エッチ！」

「誰がえっちだ！」

何故そこまで隠し、そして確認しようとするかはもはや不明。

お互いムキになりかけて、桂は暴れる操の後ろに回って細い腰を抱き、動きを封じた上で座り込んだ。

「きゃ……！」

足の間に座り込んだ操を押さえ込み、袖を捲り上げる。

「あ……」

細くも鍛えられて筋肉を纏う二の腕には、白い包帯が巻かれていた。

範囲からして、かなり大きな傷であることが分かる。

「これは、刀傷か？」

後方から抱きしめたまま問うと、操は観念したようでごくりと頷いた。桂はため息をついて、

「大方、部下を庇って受けたのだろ？」

そう言ったとたん操の肩がひくりと揺れ、見開かれた瞳が桂を見上げてきた。

「なんで分かるの……？」

「お前ほどの剣士を傷つけられる奴などそうそうおらんかな。お前が隙を見せる時と言えば、部下に危険が及んだ時しか考えられん」

その通りだったので、操は適わないあと肩をすくめた。2日前に過激派攘夷浪士の御用改めに入って、斬られかけた9番隊の部下、周防を庇った際にざっくりやられた。

結果的に大したことはなかったものの、自分を庇ったことで操に怪我をさせたと周防は自分を責めて腹切って詫びると大騒ぎしていた。

止めるのは、それはもう大変だった。

「俺の操に傷つけおって…」

劣るように、そっと包帯を巻いたに口づける。

「…」

ぼっ、と顔を赤くする操に、桂は不機嫌極まりない表情で問いかけた。

「どのどいつだ、お前を傷つけたのは」

「えっ…、大聖党の…」

「許さん。俺が成敗してやる」

それは単に自分を思ってたのことだと分かったので、操は嬉しそうに笑って桂に身を委ねる。

「ふふ、無理よ」

「むっ、俺では出来んというのか？」

「違うわ」

操はさも可笑しそうに笑い、

「私がたたっ斬って牢屋送りにしたんだもの」

桂は一瞬きょんととして、小さく吹き出した。

「お前は本当に怒らせると怖いな」

「あら、女はみんなそうよ」

「頼むから、自身を大切にしてくれよ。お前になにかあつたら俺は生きていけない」

「まあ、オーバーなこと」

操がくすくす笑うと、桂も小さく笑ってオーバーじゃないぞと返した。

「お前がいるから、世界を変えようと思える」

そう言った桂の手に、操は月明かりに当たって鈍い光を放つ小さなものを見つけた。

月に照らされたそれは、シルバーのリングだった。

（え？）

どうしてそんなものを持っているのか、操は首を傾げなくなった。

「お前が俺への想いを伝えてくれて、もう一年だ」

そつと左手を持ち上げられる。彼の右手にあった指輪が、自分の指に近づけられる。

（ええ！？）

「ずっと側にいてくれて、ありがとう」

指輪が収まったのは、こともあろうか左の薬指。

（えー！）

驚いて硬直していると桂が頭上で楽しそうに笑う。

「礼の品だ。受け取ってくれ」

「…指輪、ですけど…」

「見れば分かる」

「薬指…よ？」

「お前は指が長いからな。薬指が一番映えると思ったんだ」

気に入ってくれたか？ と首を傾げられる。 操はこくこく頷いた。

世間知らずで天然ボケMAXなこの男は、左薬指にはめる指輪の意味を知らないようだ。

「素敵…。ありがとう…」

「俺もありがとう。いつも側にいてくれて」

桂が一年という長い時間を共に過ごしてくれたことへ感謝してこの指輪をプレゼントしてくれたことに気付いて、操は桂を見上げた。

「私、なにもあげられるものがないわ…」

「見返りが欲しくてやったわけじゃない」

「でも…」

私だって貴方に感謝してるのよと訴えれば、桂は操の髪に頬を寄せて笑った。

「なら、お前の指輪をくれ」

「…これ？」

右の小指にはめられていた、小さな石がついたピンキーリング。昔から休日につけていたものだ。

「でも、くすんでるし…」

「それはお前といた時間が長いからだろう？ 長くお前と共にいた指輪だ。いつもお前の側にいる気分になれる」

操が渋ってこれでいいのと聞くと、桂はいいんだと返した。

操が指から外し、ピンクリングを桂の指にはめようとするが…。

「…」

指は、彼の第一関節にも届かずに詰まってしまった。

「まあ、はまるわけがないか」

操の小指にぴったりはまっていたものが、桂の指にはまるわけがない。

「だがお前がくれたものだ。大事にするぞ」

小さなリングを握りしめ、桂は至極嬉しそうに言う。

操も嬉しくなって桂に寄り添うと、肩を抱かれて包み込まれる。

腕の刀傷が痛んだが、今だけはその痛みさえ愛おしかった。

それから五日後のことだった。

真撰組ほぼ総出の御用改めの中に、操率いる9番隊の姿もあった。

1番隊や10番隊に劣らず、次々と攘夷浪士を捕らえていく。

「周防！　あまり飛ばさないの！」

「隊長に刃向かう奴は全て排除しますっ！」

「……」

前回の任務で操に怪我をさせてから、周防はこんな感じた。

空回りというのか、操に恩義を返すとはかりに行動してまるで暴走した暴れ馬のようだ。

「邪魔だ邪魔だあ！ 操隊長のお通りだあ！」

一度走り出したら止まらない猪のような周防に、9番隊隊士佐伯が目を見くする。

「阿呆か、あいつは…」

「あははっ…。とりあえず私の仕事とられちゃったわね」

まあそれも構わないんだけどと笑った時、側に控えていた尾高が驚いた声を上げた。

「隊長、怪我を…！？」

「え？ …ああ」

操の刀はもはや血濡れ。隊服から僅かに覗くシャツも真っ赤になっている。

「大丈夫、みんな返り血…」

言いかけて、言葉が詰まってしまった。

シャツも血濡れなら、もちろん手も血で汚れている。

怪しまれぬようにと中指にはめ直した、指輪も…。

「…こたろう」

「はい？ 何か仰いましたか？」

思わず口にした愛しい男の名は、部下たちには届かなかった。

手が血に染まる。

指輪が染まる。

貴方も、血に染まる…。

続く

## 血に染まる指輪

## 前編（後書き）

桂さんが指輪なんか贈るわけないわ…と思いつつ、最後のくだりが書きたい故に指輪を贈ってもらった次第です。

後編は操と松光が主に出ます。前後に分けなくても良かったんじゃないかと今更後悔…。

## 血に染まる指輪

## 後編（前書き）

「血に染まる指輪」後編です。松光の性格の悪さが出てればいいな  
あとと思います。  
短いです。

「やっと落ちた…」

柔らかな布や水を使って、ようやく指輪についた血を落とした。

血というものは頑固なもので、乾いてどす黒くなった血はなかなか落ちてくれなかった。

この先またはめていれば、指輪は再度血に染まる。

それは、嫌だ。

「折角もらったのに…」

身につけることが許されないなんて…。

「あ、みいさんが指輪してねえや」

外したことに一番最初に気づいたのは、沖田だった。

煙管を持った左手に指輪はなく、沖田は操の手を取って残念そうに呟く。

「似合ってたのに、外しちゃったんですかい？」

「ううん、刀握るのに邪魔だったから外しただけ」

首にかけた鎖に通した指輪を見せると、沖田はホントだと目を瞬かせる。

「女性は機転がきいてすげえや。みいさん最初薬指にしてたから、誰かからプロポーズされたのかと思いやした」

「あははっ。私が誰に……」

「誰にされたの…？」

「きゃあ！」

ぬつと湧き出たように現れた近藤に、操は小さな悲鳴を上げた。

「みい姉が誰にプロポーズされたって…？」

「お化けみたいに登場しないでよ。不気味ね！」

文句を言えば、みい姉には誰にもやらないんだと反発される。苦笑する沖田と仕方無さそうな顔を見合わせて、未だ握られていた手を軽く振った。

「私にプロポーズしてくれる人なんかいないわよ」

してくれたとて、応えられるとは限らない…。

翌日、いつもの通りに巡回を終えてそのまま散歩に出かけた操は、橋の上でふと足を止めた。

欄干に近寄れば、この間逢瀬に使った安宿が見える。首にかけたあの指輪を無意識にいじっていると、ふいに声をかけられた。

「こんにちは。操殿」

「あら、松光殿」

煙管をふかした松光が欄干へ寄ってくる。

今日はその手に仕込み刀の杖はなく、代わりに三味線が背負われていた。

「こんな所まで、お仕事？」

「はい、銀時の手伝いをしていました」

煙を吐き出す松光の姿が、彼の義弟高杉と重なる。

そういえば初めて高杉と出会い、キスされたのはこの場所だとのんびり思い出した。

「おや、指輪をされてないんですね」

気配で感じたのか、口から煙管を離して松光は言う。

操がしているはずの指輪の存在は、弟から聞いているのだろう。

「首にかけてますの。はめていると、任務の時に血に汚れてしまつて…」

銀色の鎖に通した指輪を、胸元から取り出す。

「私の手が血に染まるのは一向に構わないの。でも指輪が染まるのは…。彼も血に染めてしまっているようで、胸が痛いのに」

松光は何も言わず、ただ煙を吸って吐き出すことを繰り返した。やがてため息のように…

「そのように思ってもらえて、あの子は幸せですね」

操が俯くと、松光は何かを思い出したようにあっ、と声を漏らした。

「そういえば小太郎が…」

ダイレクトに名前を出してしまつて、松光はおっとと口を塞ぐ。

どこで誰が聞いているか分からないのだ。

「あの子が、指輪を贈つた際に左薬指にはめたと」

どきつとして肩を竦める。そう、何も知らない彼が指輪をはめてくれたのは、左の薬指だった。

「まあお分かりかと思いますが、左手薬指にはめる意味を理解していなかったようで…、お恥ずかしい限りです」

「…やっぱり知らなかったんですね…。やけにあっさり渡してくれるから…」

「説明して理解した時のあの反応。わたたと慌ててそんな意味で渡したわけではないと……。誤解を解くために屯所に飛んでいきそうな勢いだったので止めるのが大変でしたよ」

大変とか言つて、松光は楽しそうだ。思い出し笑いなのか、煙管を持った手で口を隠して肩を震わせている。

「いや、ホントに……」

「……」

この男は、慌てる桂を止めるのも実際は楽しんでたに違いない。

本当に弟たちが可愛くて仕方ないんだなあと、のんびり思う。

「……ただ、左薬指の指輪が示すことが出来ずとも、何かあらば必ず操殿の側で操殿を護り通してみせると。そう言っております」

口元から手を離し、そう言った松光の言葉があまりにも嬉しくて、操は胸がぽかぽかと温かくなるようだった。

「まったく、一番映えるからと選んだのが左薬指とは…。俺の弟はやりますねえ」

「…あはは」

苦笑した時だった。松光の背中に、銀時が飛びつく。

「あーにき！ たこ焼き買って！」

「わっ！」

松光が欄干から落ちかけ、いきなり飛びつくなど銀時の頭をべしりと叩く。

「自分で買え」

「オレ金ないもん」

「えはるな」

いいじゃん、と頬を膨らませる銀時に、操はクスクス笑う。

「旦那、子どもみたいよ」

「姉御も食べる？」

「あ、じゃあ明太子チーズがいいわ」

「ちよつと操殿お！」

松光が困ったように笑い、仕方ないなあとため息をつく。

「では、3人で食べに行きましょうか」

イエーイと一人はしゃぐ銀時に松光は唇を釣り上げ、操に何事かを囁いた。

操は顔を赤くして、はいと小さく頷く。

そのまま、行きましようかと促されて兄弟についていった。

『操殿。どうか心だけは、小太郎の側に置いてやって下さいね』

終

なんか私の書く銀さんってな。子どもっぽいつていうかなんと言  
うか原作の面影もないっていう…。

そういえば、今週のジャンプ読みましたか？ 長谷川さんとファミ  
コンソフト取り合う銀さんが本当に小学生みたいで可愛かったです。  
あんたら子どもかつ！ って突っ込みたくなりました。（笑）

空知先生、そろそろシリアスに入っても罰は当たらないのでは…。

（^^;）

悪さをしなくても嫌いなものは嫌いなもの！（前書き）

タイトルでどんな話が察することが出来る方は少ないと思いますが、  
食事中の方は気持ち悪くなるかもしれないのでご注意ください。

> ( | | ) <

悪さをしなくても嫌いなものは嫌いなの！

ズボンを履き、ベルトでぎゅっとしぼる。

下着を付けた上で寝間着にしている浴衣を床に落とし、ワイシャツに片腕を通した。

「……！」

後方に、何かの気配。

気付いたことを悟られぬようにもう一方の腕を通した。

見られている。

視線を感じる。

侵入者？ まさか。真撰組屯所に一体何の用だ。

何食わぬ顔でボタンをかけるふりをして、ズボンのポケットに常に忍ばせているナイフを手取る。

手練れの攘夷浪士か。自分の部屋にくるとはいい度胸だ。

カサツと何かが動く音がして、操は振り返った。

「くせ者っ！」

そしてその侵入者を確認し、操は悲鳴をあげていた。

「っ…きゃああああー！」

甲高い悲鳴が、早朝の屯所内に響き渡った。

ある者は驚いて跳ね起き、ある者は煙草を取り落とし、ある者は放り投げていたシャトルが頭に当たって、悲鳴の持ち主の弟は慌てて廊下に飛び出した。

「みい姉！」

どたどたと慌ただしく、縁側沿いにある姉の部屋へと向かう。

角を曲がったところで向こうから来た姉とぶつかりかけ、慌てて抱き止めた。

「わっ、みいね……。ってわあ！　なんて格好してるの！」

下着にワイシャツを羽織っただけでボタンも止めていないというセクシー過ぎる姿の姉に飛び跳ね、急いで上着を着せる。

その際に見た姉は、涙目になっていた。

「みい姉、一体どうし…」

「姉さんどうした！ 賊か！？」

「何かあつたんですかイ！」

「みささん！ いまの悲鳴はっ！」

あちこちから土方、沖田、山崎が集まって慌ただしくなる。

操は涙目のまま弟を見上げ、自分の部屋がある方向を指さした。

「私に真っ黒な部屋のカサカサが…！」

「分かりませんが、落ち着いて下せえ」

寝起きなのか未だ浴衣姿の沖田が、よしよしと操の頭を撫でる。操は小さな息をつきながら…。

「わ、私の部屋にゴキブリが…」

震えたまま紡がれた単語に、土方はなんと肩を下ろした。

「ゴキブリかよ、てつきり侵入者かと…」

「でも朝からゴキブリ見るのは嫌ですよね…」

引きつった顔のまま、山崎はどこか安心した表情を見せる。

「カサカサ動き回るんだもの！ もうお部屋入れない！」

思い出したくもないようで、操はぶんぶん頭をふる。

「落ち着いてよみい姉。退治すればいいだけだろう？」

「近づきたくない…」

今にも泣き出しそうな姉に、近藤は小さく息をついた。

「もちろん俺らがやるよ」

お願い…と頷かれ、近藤は少しだけ安心する。

天衣無縫と思われる姉でも、ちゃんと苦手なものは存在するのだ。

「しかしみささんの部屋に出没するなんて、スケベなゴキブリですね」

「カサカサ天井を這ってるんだもの！ 気持ち悪くて…」

5人で操の部屋に向かっているのも些か滑稽な姿だったが、操が弟の腕にしがみついて離れないのも妙な姿だった。

「まあとりあえず、ちゃっちゃと退治しちゃいましょう」

沖田が操の部屋の襖に手をかけたところで、操の悲鳴が上がった。

「待つて！ ゆっくり開けてゆっくり！ いきなり飛び出してくるかもしれない！」

「そんなビビらんでも…」

土方が苦笑し、沖田は言われた通りそつと襖を開ける。

光が差し込んだ操の部屋は綺麗に片付けられていて、先ほど逃げる際に散らかしていた浴衣だけが床に落ち着いた。

「相変わらず綺麗なお部屋ですね」

「なんだってゴキブリのヤローもこんな綺麗な部屋に出るんだ？」

山崎が呟き、土方が答えの返ってこない疑問を口にした時だった。

「あ、ゴキブリ発見」

近藤が壁を指差してそんなことを言うものだから、操はパニックになって弟を突き飛ばした。

「いやあーっ！ 早く倒して追い出してー！」

床に転がる弟も気にせず、操は土方にしがみつく。

落ち着いてくれよと土方は操の頭を撫でた。

「しかし、でけえゴキブリ……」

壁に張り付いた大きなゴキブリ。拳大とまではいかないものの、そこそこの大きさだ。

「こんなもんチャッチャと殺虫剤で……」

「だめ！ 殺虫剤撒くと畳がつべつべになるんだもの！」

「みささん、つるつるとすべすべが混ざってます……」

最早涙目になりながらしがみついている操にため息をつき、土方は頭をかく。

「殺虫剤が駄目なら新聞丸めて潰して…」

「潰しちゃ駄目！ 中身が出て壁が汚れる！」

「「どーせーっつーの」」

厳しい突っ込みの後、山崎が良いことを思いついたようぽんと手を叩いた。

「そうだ、ちょっと待ってて下さいね」

そのままとたと出て行ってしまう。近藤は座り込んだまま壁に張り付いているゴキブリを見上げ、うーんと一唸りする。

「殺虫剤にしる潰すにしる、どっちにしる触らなきゃいけないからなあ」

「ちょうどいいや。土方さんが素手で搦んで下せえ」

「拒否する」

土方がきつぱりと断った時、山崎が戻ってきた。手には、丸めた新聞が握られている。

「お待たせしましたっ」

「ざ、ザキ君潰すの…?」

震える声で操が聞けば、山崎は縁側に通じる襖を明け放ちながら違えますよと笑う。

「この部屋なら触れず潰さず撃退出来ます。あ、ちょっと退いて下さいね」

山崎はそう言って、土方や操たちを部屋の端に避難させる。

そして新聞を持って、ゴキブリに歩み寄った。

「何する気だあ？ ザキ」

「まあ見てて下さいって」

言い様、山崎は止まっているゴキブリの真横の壁を強く叩いた。

起こった風圧でゴキブリが壁から離れ、下に落ちる。

そのゴキブリが床につく前に、山崎は丸めた新聞をバッド代わりに思い切り振った。

「うりゃ！」

ミントン仕込みのスウィングが、落下中のゴキブリをしたたかに打った。

打たれたゴキブリはボールのように吹っ飛んで部屋を飛び出し、彼方へと飛んでいく。

「これでよしっ！」

「……巧妙かつアホらしい作戦だなあ」

沖田の突っ込みもつかの間、操が山崎に抱きつく。

「ありがとうザキ君！ お陰で助かったわ！」

「いやいや……」

抱きつかれて顔を赤くする山崎に近藤がムツとしつつ外を見る。

吹っ飛ばされたゴキブリは何処まで飛んでいったのだろう。

「うわあ！ ゴキブリが飛んできた！」

「こっち来ないで！ きゃあ！」

「……」

遠くから悲鳴が聞こえ、5人は黙り込んだ。潰さず触らずのいい作戦だったが、どうやら近所迷惑だったらしい。

「…ま、一件落着として……」

話題を変えようと、近藤はぼてっと畳張りの床に寝そべる。

「本当にこんなきれいな部屋に、なんで出沒したんだろうなあ……」

「ゴキブリも居心地が良かったとか？」

ついでとばかりに沖田が座りこんだ時だった。

「なんですか朝から騒々しい……」

部屋の北側、操と隣接する部屋の襖が開き、寝相で髪を爆発させた男がのそりと顔を出した。

操の部下、9番隊隊士の桐生だ。

「ごめんなさい桐生。起こしたわね」

「いえいえ、それよりも先ほど操隊長の悲鳴が聞こえた気がしたんですが……」

しきりに目をこすっている仕草から、どうやら騒ぎで目を覚ましてしまったらしい。

「みささんの部屋にゴキブリが出たんだよ」

「ええ、隊長の部屋にですか？」

寝ぼけたまま問う桐生に近藤がそうだと頷いた横を、土方が通り過ぎた。

そのままつかつかと桐生に近寄り、襖をぱんと開け放つ。

「副長？ どうされました？」

「姉さん、これだよ。ヤツが出た原因」

「…」

桐生の部屋は一言で言えばゴミ屋敷。部屋の真ん中に敷かれた布団は恐らく万年床。

その周りを脱ぎ散らかした服や鞆、書類が占領しており、畳を覆い尽くしている。

仕事をするはずの文机には夜食で食べたであろうカップめんの残骸が置いてある。

いつのものなのか、コバエがぶんぶん飛び交っていた。

「  
…」

「生で見た…。腐界の森…」

沖田が絶句したところで、操がキレた。

「きりゆ…」

ゴキブリの発生源となったに違いない部屋の持ち主である桐生に、目尻を釣り上げる。

そして怒鳴った。

「今すぐにこの魔窟を掃除なさいっ！」

「えー！ 俺きよう非番なんですけど…」

「問答無用！ 今日中に掃除出来なかったら切腹よ！」

「そんな殺生な〜！」

情けない桐生の言葉に、近藤ら4人は深いため息をついた。

結局、桐生は貴重な非番を1日無駄にして、泣く泣く部屋を綺麗にしたのだった。

その後ゴキブリは、一度として出沒する事はなかったという。

終

悪さをしなくても嫌いなものは嫌いなの！（後書き）

この間うちで飼っている猫のギンがドタバタ廊下を駆け回っていて、何事かと見てみたらゴキの野郎を追いかけてました。

さらに違う日には黒猫のケイがちゃっかり捕まえて私のところに持ってきてくれまして、声にならない悲鳴というものを上げる貴重な体験をしました…。 あゝ、怖かったあゝ…。

（；・ー・）＝3

ちなみに私が設定した操たち9番隊の部屋割りはこの感じですよ。携帯じゃないと上手く表示されないかも…。

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 周 | ' |   | 尾 | ' |   | 佐 |
| — | — | — | — | — | — | — |
| 桐 | ' |   | 操 | ' |   | 三 |
| — | — | — | — | — | — | — |
|   |   |   | 側 |   | 縁 |   |
| — | — | — | — | — | — | — |

棒線は襖、ってことで…。（難しいっ！）操は部下たちに囲まれて生活してる感じです。ちなみに三ツ木、尾高、桐生は何かない限り操の部屋と繋がっている襖を開けません。理由は簡単、操に殺されるからです。（笑）

おやすみ

操編（前書き）

最近携帯に「非通知」で電話がかかってくるんですが、これって出ないほうがいいですよね（^| ^;） あんまりしつこくて怖くて…。

おやすみ

操編

書類を書き終えて筆を置いた。

ぐいっと伸びをして、首をコキコキと鳴らす。

鳴らしてから、しまったと肩をすくめて胡座をかいた足を見下ろした。

近藤の足には、長い黒髪が広がっている。

彼の足を枕にして寝入っている、隊服姿の操のものだ。

「…」

起こしていないと、ほっと息をつく。

夜中の任務の最中ある犯罪者をとっつかまえて、それを獄門島に送り届けて屯所に帰ってきたのが早朝。

そこから朝の申し送りに出て、任務の報告書を作成して持ってきてくれたのがついさっきのことだ。

『もう限界…』

操はそう言っただけ今日は非番だからという理由で弟の足を枕にし、泥のように寝入っている。

そうして今に至る。

「みい姉、風邪ひくよ？」

そつと声をかけても、操は起きる素振りもなく寝息をたてている。

相変わらず綺麗だなと思う。

小さな顔に長い睫。とおった鼻筋に薄く開かれた朱い唇は気持ちよさそうな呼吸を繰り返している。

「…」

そつと顔に触れてみる。

白い肌はまるでマシユマロのように柔らかく、そしてすべすべと滑らかだ。

髭の生えた自分とは大違い。

とても30過ぎとは思えない。

「ん…」

顔を撫でられてくすぐったかったのか、操が小さく身じろぎする。

長い睫毛が震えて起きるかなと思ったが、操はまた縮こまって寝息を立て始める。

そして一発の小さなくしゃみ。

「おつと…」

いかんいかん本当に風邪ひいちまうと慌てて、それでも枕にされている故動くことも出来なくて、近藤は上着を脱ぐとそのままふわりと姉にかけてやった。

首元までかけてやれば、温かったのか目が和んだのが分かった。

「…」

紫暗の綺麗な瞳。

いつも何かに囚われているような瞳。

その瞳が優しく自分を見上げてくれるのが、近藤は好きだった。

汚れない綺麗な瞳。

人を斬るその瞬間でさえも、それは変わらない。

「…本当は、危ない任務になんかついてほしくないんだぞ…」

細い肩に手を置いて、そつと囁く。

その時だった。

「こんどーさん、入るぞ」

「おー、どうぞー」

襖が僅かに開いて、黒の靴下をはいた足が突っ込まれる。何を行儀の悪いと思ったら、足で襖を開けた土方は重そうなダンボールを抱えていた。

「近藤さん、姉さん知ら…。いたし」

どうやら操を探していたらしい。一旦ダンボールを置き、静かに襖を閉める。

「なんだ？ その箱」

「姉さん宛てのファンレターだよ。全部な」

すっ、と近藤は思わず声を漏らす。ファンレターというものは以

前から屯所に届くもので、操を始めとする沖田やこの土方はよくフアンレターを貰う。

特に操へのフアンレターは男性からよりも女性からのほうが多く、痴漢を捕まえてくれてありがとうだとか、威張り散らす男をとつちめてくれてありがとうだとか、そんなことが書いてあったりする。

ちなみに近藤は、一枚も貰ったことがない。

「奴を捕まえたから、それを知った娘たちが送ってきたんだろ。朝刊にでかかと載ってたからな」

操が昨日捕まえた犯罪者は、娘たちの敵だった。

ダンボールの半数以上は、捕まえたことへの感謝の手紙だろう。

「みい姉は人気者だなあ」

「内でも外でもな。実質、総悟のせいで落ちる真撰組の人気は姉さんが引き上げてるようなもんだ」

そんな会話をしていたら、操がもぞもぞと身じろぎした。

瞳が眠そうに開かれて、のんびりと体を起こす。

長い髪が顔を覆い、些か不気味だ。

「おはよう、みい姉」

「おはよう、姉さん」

声をかければ、操は髪をかきあげていかにも眠そうな目を二人に向ける。

「まあ…、おはよ…お」

「すげえ眠そう…」

ゆらゆらと揺れて頼りなく、ともすればすぐに寝入ってしまいそうだ。

「あら、その箱なあに…？」

「ああ、ファンレターだよ」

姉さんのと土方が伝える前に、操は弟の肩をべしっと叩いた。

「いしゃお、良かったじゃない。やっと江戸の女の子たち貴男の魅力に気付いたのよ」

べしべしと弟を叩いていたのも束の間、操はまた近藤の足へ倒れ込んだ。

次の瞬間には、くーっと寝息が聞こえてくる。

「……」

「……みい姉が寝ぼけてる……」

すやすやと寝息をたてる操に引っ張り出した毛布をかけてやりながら、土方は苦笑した。

「よつぽど疲れたんだろうな。昨日は暴走したから……」

女性を侮辱された時の操の暴走は半端ない。

あの暴れっぷりは怖かったなと、土方は苦笑した。

「…そういや、姉さんの寝顔なんか滅多に見なかったな…」

武州時代でも、自分たちの身の回りの世話のために誰よりも早く起き、誰よりも遅く床についていた。

寝顔を見たことなど、土方は数えるほどしかない。

「総悟が撮った写真があるじゃん…」

ぼそりと近藤が呟いたのは、以前自分が操を起こしに行った際に逆に姉と顔を合わせて眠りこけてしまったのを、ちゃっかり沖田に撮られていた写真のことだ。

もちろん自分たちは写真に撮られたことなど知らず、写真の存在に気付いたのは屯所内に出回ってからのことだった。

「ああ、持ち歩いてるぜ？」

「持ち歩くなあ！」

今すぐ捨てなさいと怒鳴ると、姉さんが起きるぞーと笑って逃げられた。

「いいじゃねーか、微笑ましくてよ」

「みい姉だけならな〜…」

ため息をつく近藤に土方ははにかみ、じゃあ俺は仕事に戻るなど言って静かに部屋を出て行った。

文机に向かってさらさらと筆を進めていたが、自分の膝ですうすうと寝息を立て続ける姉の寝顔を見てふと思った。

自分は、姉の寝顔の写真を一枚として持っていない。

土方や沖田は持っているのに、狡い…。

「俺も買おうかな…。デジカメ…」

そうしたら一枚目に真撰組大集合の写真を撮って、

二枚目からは大好きな姉や仲間たちの姿を、メモリーいっぱい撮ってやるんだ。

終

おやすみ

操編（後書き）

操は酒には強いですが、寝起きは弱いです。寝るのは大好きなので睡眠を邪魔するものには容赦ない…。（笑）

お互いさま（前書き）

明日はサークルの飲み会！ 久々にお酒か飲めるー！ （  
きやはー！ （↑弱いけどお酒大好き！）

## お互いさま

「ジユウ、あんま遠くに行くなよ」

鬼兵隊の幹部しか知らない、ペットのジユウの存在。

焦げた茶色で、目だけが青色の猫は、高杉によく懐いた。

鬼兵隊の中でジユウの存在を知っているのは幹部だけ。万斉はあまり興味はないらしく、それでも表の仕事で地上に降りれば、餌や必要なものを買ってきてくれる。

猫アレルギーである武市は近寄らないが、ジユウを可愛がって笑っている姫華や来島を見るのは、嫌いではなかった。

今日は久しぶりに外に出してやろうと、一緒に散歩に出ていた。懐に隠し、小高い山の森の中へ。

ジユウは呼べば走り寄ってくるほど懐いているので、放し飼いにしても大丈夫…のはずだった。

「ジユウ？」

ジユウが耳をピクピクさせて辺りを見回したと思うと、何処かへ一目散にかけだしてしまった。

「待てジユウ！ 戻ってこい！」

流石に慌てた。自分は公に姿を見せられる立場ではないし、なにやりジユウは…。

「ジユウ！」

ざっと森を出た。目に飛び込むは大きな草原。そして、

「あ

「お

ジユウを抱き上げた、操がいた。

「  
…」

「  
…よお  
」

普段なら飄々と笑っているところだが、いかんせんジューウを見つけられてしまった。

「この猫、貴方の？」

「あ、ああ…」

「すり寄ってきたわよ。はい」

素直に操が渡してくれたジューウを受け取って、高杉はほっと息をつく。

「随分大事にしてるのね」

「ああ、まあな」

ジューウが定位置の懷に滑り込む。そしてひょこりと顔だけをだすものだから、操が噴出した。

「いつもの貴方とは思えないくらい可愛い姿だわ」

「可愛いってなんだ。可愛いって…」

「だって、ねえ？」

浮かんだ涙をふき取り、操はまだ笑い足り無そうに言う。

「いつもより素直じゃないの」

「いつもはひねくれてるってか？」

「違うの？」

酷い言い草に腹が立ったが、まあそうかもしれないと思い直した。ジユウがいてくれるからか、操が敵意を向けてこない。

「その子の散歩？」

「ああ。おめえは…さぼりか」

「その通り。だってこんなにいいお天気なんだもの。さぼりたくもならない？」

ゆらりと体を振り返す操が何故か儚く見えて、高杉はとっさに操の腕を掴んでいた。

「…なによ」

「おめえ…」

いつもの操ではない。なにかおかしい。だが、なにが？

「…！」

掴んでいる操の腕が、服越しても分かるぐらい熱かった。

「おめえ、熱いぞ」

「熱い？ どこがよ、寒いくらいよ。いいから離して」

腕を振り払い、操はふらふらと歩き出す。高杉は気になって、あとを追った。

「なんでついて来るのよ」

「俺の行きたいところにお前が向かってんじゃねーか」

「…ふん」

付き合ってられないといった風だ。ぷいっとそっぽをむいて歩く操

がどうにも気になって、高杉は再び操の手を掴む。

「なんだって言うのよ、馬鹿總統」

「馬鹿というな。お前、熱あんだろ」

「貴方には関係ないわ」

高杉を見る操の目は赤く潤んでおり、高杉が握る手も、やはり熱い。

「そんなに弱ってる姿見せると、誰につけこまれるか分かったもんじゃねーぞ」

「一番危険な貴方が言う？ いいから離して。熱があるのは分かっているけど自覚したくないの」

流石に言っている事がわからなくて、高杉は暫く硬直したまま思考をフルに回転させる。

「大丈夫だから離して…。私自分で熱があるって分かった瞬間に具合が悪くなるタチなのよ」

「そりゃまあ…何とも単純な…」

「五月蠅いわね！ 貴方に言われなくな…！」

手を振りほどいた操の体が、ぐらりと揺れた。倒れかかるその体を抱き止め、しゃがみこむ。

「オイ！」

「ほらあゝ…！ 貴方のせいで…え！」

べしつとひっぱたかれるも、何とも力ない平手だった。当の本人は憎まれ口を叩きながらほろほろと涙を流しており、いい加減高杉の思考が止まりそうだった。

「…」

これは誰だ。誰も答えてくれぬ疑問が、高杉に浮かんだ。

（こりゃ、ぐずりたくもなるわな）

流石にそのままにしてはまずいだろうと、気絶してしまった操を抱き上げて山を下りる。触れている操の肌はとても熱く、火傷しそうだった。

「…どうすりゃいいんだ？」

ふと足を止める。全く考えていなかった。どうすればいいのか。

「…お前は どうしたい？」

懷に入れていては潰してしまうので、操の腹の上に乘せていたジュウ。こちらを見上げ、ニャアと小さく鳴く。

「…しゃあねえか」

船に連れて帰りたいのはやまやまだが、彼女には借りもある。

それに、嬉しいことも…。

「まさか、捨ててなかったとはな…」

以前助けてくれた礼の品として贈った翡翠の髪紐が、刀の鐔の装飾に飾られていた。

敵から贈られたものなど、捨ててしまえばいいのに…。

「やはりお前は、嫌いにはなれねえ…」

やはりこのまま連れ帰ってしまいたかったが、姫華に盛大に叱られるのは目に見えていたので、止めた。

性懲りもなく土手で昼寝をしていると、誰かが近くに立った気配がした。

「オイ、餓鬼」

「なんでい、餓鬼じゃな…」

不機嫌なままアイマスクを取った沖田は、側にたつ人物を見て跳ね起きた。

「高杉っ！ …！ みいさん！」

高杉に抱きかかえられている操を見て、背筋に冷たいものが走る。

「デメエ！　みいさんに何をした！」

「なにもしてねえよ。お前らの姉貴、熱だして倒れたぜ」

緊張して立ち上がった沖田は、すぐに心配そうな表情になった。そんな沖田に高杉は歩み寄ろうとするが、沖田は警戒してその分下がる。

「早く受け取らねえと、このまま連れ帰えっちまうぜ」

沖田はぐつと齒を食いしばると、そろそろと高杉に近寄った。操を受け取り、一旦地に下ろして立てた膝に寄りかからせる。

「みいさん……」

「早く医者に診せて、薬でも吞ませるんだな。あとは温かくして寝てりゃそのうち治るぞ」

踵を返し、歩み去ろうとする高杉の背に、沖田は言い放つ。

「待てい！」

高杉の足が止まる。

「おめえ、何でこんな…」

「あん？ 操を助けたかつて？」

高杉は振り返り、煙管を銜えた。

「操にや死なれちゃ困る。何せ、俺の惚れた女だからな」

「なっ…」

「それに操にや借りがある。あまり邪険にしたら、嫌われるだろう？」

「…みいさんはもともとアンタが嫌いであ」

沖田の言い草に、高杉はククツと笑って、知ってるさと続けた。

「このことは誰にも言わないほうがいいぜ。操の威厳に関わるからな」

振り返り様に一瞬だけ、沖田は高杉の懷からひょこりと猫が顔を出したのをみた。

「じゃあな」

高杉の姿が完全に見えなくなってから、沖田は操を抱き上げた。

（あいつ、なんなんでもいい…）

こちらにも、誰も答えてくれない疑問を抱いて。

「操隊長が熱出して倒れたって本当ですか！」

「容態は！」

「大丈夫なんですか！」

屯所に連れ帰って、取り敢えずオフで仕事の無かった土方には連絡した。近藤は仕事で出かけているらしく、取り敢えず操を自室に運んで、女中に着替えさせて貰った。

「な、なにか飲み物を…」

「ああ、こんなに顔を赤くして…。痛々しい！」

「医者だ！　医者を…」

「おめーらうるせえよ！」

心配して駆けつけた九番隊隊士を土方が黙らせるためにがつんと殴れば、操がびくりと目を開けた。

「あ、悪い姉さん。起こしたか？」

「あれ、わたし…」

「熱だして倒れたんでさあ。だいじょ…」

「大丈夫ですか操隊長！」

「ほしいものありますか！」

「薬買ってきましようか！」

心配しすぎてぎゃあぎゃあ騒ぐ隊士達に土方の殺気が強まる中、操は力無く笑ってみせた。

「大丈夫よ。…それより、仕事が滞るのが心配だわ…。仕事、御願  
いしていい…？」

「もちろんッスよ操隊長！」

「治ったら…みんなで食事にでもいきましよう」

「はいっす！　よし！　操隊長の分も仕事するぞ！」

オーッとかけ声をあげて、隊士達はあっという間に部屋を出ていく。

「…奴ら、切腹させていいか」

「あはは…。ほどほどにね」

操は力無く笑い、重い頭を動かした。

「ごめんなさいね…。迷惑かけて…」

「いいんでさあ。最近働き詰めだったから、疲れが出たんでやしよ。今ぐらいゆつくり休んでくださあ」

「そうそう。姉さんはいつも無理しちまうからな」

恥ずかしいなといわんばかりに、操はへへっと笑う。

「看護人は呼んどいたからな」

「かんにん…？」

どたどたと廊下を走る音が聞こえたのはその時で、次の瞬間しばらく襖が開かれた。

「みい姉！ 熱だして倒れたって…」

「大きな音出すなよ近藤さん」

「きつと疲れが溜まったんでやしよ。みいさん昔から風邪引くとひどかったから…」

「…い」

操が、その重い体をあげた。

「勲だあ…」

また、ほろほろと涙が零れる。三人はしばらく硬直した。

「や、やだなあみい姉。いい年して…。ほら泣かないで。ねっ」

幼子をあやすように、近藤はよしよしと操の頭を撫でる。嬉しそうだと、二人はこっそり思った。

「じゃあ、俺等はそろそろ…」

「なにかあつたら言ってくだせえ」

「ああ、ありがとう」

二人が出ていき、近藤はそつと操を横たえる。姉のこんな力無い姿など、いつ以来だろう。

（そつだ、雪の日に桂を逃がした日以来だ）

熱を出すほどではなかったにしろ、操はこうして、寝込んでいたのだ。

（また、なにかあつたのかな…）

「いしゃお…」

操の力無い声で、はっと我に返る。

「ど、どうしたのみたい姉。苦しい？」

「きょうね。じゅうにあったのよ」

「じゅう？」

「ふわふわでね…。もこもこしててね」

じゅうって誰だという疑問の前にふわふわともこもこの単語を出されて、おそらく人間ではないなということは分かった。

「すっごくかわいかったの…」

「な、なんかの動物？」

「そう、こげちゃのね…」

猫かと納得する。それにしても、ジユウという名前は誰がつけたのだろう。

「あいつのふところからおだして…。わらっちゃったわ…」

「あいつって?」

聞いたが、操は既に眠りについていた。

翌日の夕方、操はふと目を開けた。目の前には汗を拭こうとしてい

た沖田があり、目を開いた操を確認して安心したように笑う。

「起きやしたかい？」

「うん…。今何時？」

「次の日の夕方であ。よく眠ってやしたよ、みいさん」

寝過ぎたわねと、操は笑う。顔色も大分良くなっている。

「勲は？」

「近藤さんと土方のヤローは松平のおっさんに呼ばれて出かけてや  
す」

「ずっと側にいてくれたの？」

「さぼってる暇があるならみいさんの側にいろって、土方さんが言  
ってくれたもんで」

へへっと無邪気に笑う沖田に礼を言う操。沖田ははっと笑みを消し

て、真顔になった。

「みいさん、倒れる前のこと、覚えてやすか？」

「倒れる前？ どうして？」

「誰にも言っなくなって本人からも言われたんですが、意識のないみいさんを俺の元まで連れてきてくれたのは、高杉のヤローなんですさ」

はっとして、操は上体を起こした。

「そうだわ、あいつ…」

そして眩暈が襲い、頭を押さえる。

「まだ寝てなきゃ駄目でさあ。熱下がつてないんだから…」

「そうするわ…。あいつ、何か言ってた？」

「俺の惚れた女だから、死なれちゃ困るって。やっぱりあいつ、危険でさあ！」

「そうね、やっぱり斬っておけばよかった…」

別の意味で頭が痛くなり、頭を押さえる操。

「あと、みいさんには借りがある、とも言ってやした。なにかしたんですかい？」

「…なにかしたかしら。覚えがないわ」

そうですかと張っていた肩をおろす沖田。まさか、死にかけていた彼を助けたあげく、見逃して帰したとは言えない操だった。

「このこと…」

「誰にも言つてやせん。俺とみいさんの秘密でさあ」

悪戯坊主のように笑ってみせるものだから、操も釣られてわらって  
ありがとうと言った。

「その変わり、今度一緒にお茶しに行きやしよ」

「ええ。元気になったらね」

操がにこりとしたとき、操の携帯がなった。画面を見てみれば、非通知となっている。

「誰かしら」

「仕事関係ですかい？　じゃあ俺はちょっと出てやすね」

「ありがとう」

沖田が出て襖を閉めたと同時に、操は着信ボタンを押した。

「もしもし」

『よう。元気になったか？』

操の顔から、表情が消えた。

「貴方！」

『昨日はいきなり倒れちまうから、驚いたぜ』

いちいち勘に触る口調からして、相手は高杉だ。

「なんでこの番号を……！」

『おめえが倒れた時にこっそりな。お前の壊れっぷりはなかなかだつたな』

携帯を握る手にぎりぎりど力がかこもり、操の額に血管が浮き始める。携帯がみしみしと悲鳴を上げた。

「まだ微熱よ。というか関係ないでしょう」

『そうかい？ 早く治して、会いにきてほしいんだがな』

額の血管が、ぷつんと切れた。

襖を閉めてしまったため、声は聞こえない。その分、操が高杉に気に入られている理由を考えるのには、十分な静けさがあつた。

(… あんな奴に、みいさんは渡さねえ)

そう思つた時だつた。

「…の、馬鹿―っ!」

屋敷ごと吹き飛ばすような、怒鳴り声がして、沖田は襖ごと吹っ飛んだ。

庭に落ちてきよんとしたまま部屋を仰ぎ見れば操は布団に立ち上

がつていて、壊れそうなほどの力で終話ボタンをおしていた。

「……みいさん？」

しばらく興奮しているようで肩で荒い息をしていた操は、やがてふうつと崩れ落ちた。

「みいさん！」

一方、怒鳴られてきんきんする耳を押さえていた高杉は、電話から漏れた怒鳴り声に驚いてキョロキョロと辺りを見回していたジユウの頭を撫でた。

「やっぱり、おもしれえ」

しばらく、この番号は消せそうにない。

「みいさん、大丈夫ですかい？」

「あいつ…いつか絶対斬ってやるんだから！」

布団の中で熱に魘されながら、操は悔しそうに言っていた。

終

## お互いさま（後書き）

体温計の数値を見て、熱があるんだと分かった瞬間に具合が悪くなることありませんか？ 私はいつもこんな感じです。

まあた高杉さんが壊れてるんだよなあ…。壊れてないニヒルな高杉さんを書きたい…。

熱（前書き）

前作「お互いさま」の続きとなりました。色んな意味で操も桂さん  
もぶっ壊れてます。（^^;）

熱

ひんやりしたものが当てられて、操は目を開いた。

相変わらずの高熱で頭はぐるぐるするが、視力はちゃんとある。

「…？」

目の前で、大好きな顔が笑った。

「操」

「…っ、こたろ…！」

恋人の桂が、自分の額に手を置いて微笑んでいた。

驚いて起き上がりかけて目眩に襲われ、倒れそうになるのを桂に支えられる。

「無理をするな。こんなに熱が高いのに」

抱きしめられ、桂の胸に体を預けた。

「…て？」

「ん？」

「どうして…いるの？　ここ屯所…屯所じゃないの？」

謔言のように呟く操に、桂は薄く笑って操の頭を撫でた。

「お前が熱を出して寝込んでいると聞いたからな。忍んできた」

「わざわざ…？」

「ああ」

「私のために…？」

「もちろん」

早く帰らなければ見付かってしまうという焦りもあったが、自分のために敵陣に忍び込んでくれた桂が愛おしくて、

とても嬉しかった。

「…たろ…お」

ぼろぼろと涙が零れる。それでも口元は笑っている操を見て、桂は驚いた表情をして笑った。

「どうした、ん？」

「来てくれて、…嬉しい」

「なら泣くな。泣きながら笑うとは器用な奴だな」

「…泣いてないもん」

「その顔で言うか」

こつんと触れた額が熱い。熱のせいで不安定になっているのだろう  
など、桂は操に口付けた。

「もう休むがいい。起きた時にはもう、熱は下がってしよう」

「…行っちゃうの？」

「また会える」

だから安心しろと頭を撫でれば、操がうとうとしだす。操の瞼が閉  
ざされずしりと体が重くなってから、桂はそっと操を横たえた。

廊下の奥から、誰かの足音が聞こえる。操の顔に張り付いた髪を払  
ってから、桂は部屋から出て行った。

翌朝目が覚めると、昨日の熱が嘘のように頭がすっきりしていた。三度も下がればそれもそうなのだが、今日も大事を取って休んでいることにした。

「みい姉、林檎剥いてきたよ」

「姉さん、氷枕代えねーと」

「みいさん、薬持ってきてやしたぜ」

皆心配して、様子を見てきてくれる。こうして甘えることが出来るなら、もう少し熱を出していてもいいかなと思ってしまった操だった。

「操は熱など出してはいかな。あんなに艶めいて見えるとは、どんな拷問だ」

玄関前の手すりに体を預けながら、桂は楽しそうに笑った。

松光は手すりによりかかり、小さな息をつく。

「操殿に、なにもしていないだろうね」

「病人に手出しできんよ。接吻を一度しただけだ」

「してるじゃないか…」

ため息まじりの台詞。彼女が心配だから屯所に侵入したと聞いて焦ったが、心配は無用だったようだ。

「お前も変わったなあ、小太郎」

厳格な彼が、喜々として女性のことを語るなんて…。

「そうか？ 昔とかわらん」

「いやいや、十分…」

「ねーねー、銀さん仲間外れ？ 二人でなんの話してんの？」

玄関を開けて、ひょこりと顔を出した銀時が膨れ面で出てくる。

あまりに放ったらかしにしたせいで、ふてくされているようだ。

「んー？ お前の寝相が最悪だからなんとかならんかと、小太郎に相談していたところだよ」

「なにそれなにそれ！ 俺そんな寝相悪くねーし！」

「朝起きたら、お前の足が腹に乗っていたと言っていたぞ？」

桂も便乗した嘘に、銀時は絶句する。

「マジでか！ 俺そんなに寝相悪いの！？」

「おお、悪いとも」

松光が笑いかければ、桂も笑った気配がする。

「さ、もう入ろう」

銀時の背中を押した松光が、こつそりと桂に囁いた。

「早く治ればいいな。操殿」

桂は目を細めて、ああと頷いた。

終

熱（後書き）

そういえば桂さんって、「ウィル・ミス」になって病気を治すことも出来るんですよね（そこらへん理解が曖昧…） 操の熱が一晩にしてひいたのは桂さんのお陰…ってことで。（笑）

## 謹賀新年

## 操編（前書き）

明けましておめでとうございます！（↑何度目？） 福袋を買ったら、あまり着ないボーイッシュな服ばかりが出てきてテンションがた落ちな玖月です。 ええ妹に取られましたとも！ 似合つて羨ましかったぞコンチキショー！

さて、盛大に騒いだところで。

「謹賀新年」シリーズの操編です。バイトの私に大晦日も元日も無かったよゝだ！ フンっ！（↑壊れてる…）

ゴォン…と除夜の鐘が鳴る。

参拝の為に集まる客たちを、操は腕を組んで見送っていた。

寒さに吐く息は白く曇り、コート手袋マフラーに身を包んでいるにも関わらず、操は寒そうに首を縮こめる。

何故大晦日にこんなことをしなくてはいけない。

何故、神社の警備なんかを…。

「姉さん、首の引っ込んだ亀みたいだぜ？」

煙草をくわえた土方にそう言われ、操は寒いんだもの、と返した。

「毎年だったの？ 神社の警備」

「毎年全員つてわけじゃなかったが、まあターミナルの警備はぼちぼち」

煙草を下ろし、土方は白い煙を吐き出す。

煙草の煙で白いんだか、寒さのせいで白いんだか分からなかった。

「ま、年末にこんなとこにいたくはないわな」

真撰組に仕事納めなんぞ存在しない。

与えられたのは江戸の各地にある神社と、ターミナルの警備の仕事だった。

「ホントよ。寒いったらもう……」

さらに首を縮め、愚痴った時だった。

「はい、みい姉」

ずいとう気のたつカップを差し出されて、操は驚いて顔を上げる。

にこやかに笑う近藤が、操に紙カップを差し出していた。

「勲…」

「はいっ、甘酒！ トシの分もあるぞ」

「おっ、ありがとう！」

凍えていた土方が、嬉しそうにカップを受け取る。

「仕事中にお酒なんて飲んでいいの？」

「屋台のおばちゃんがご苦労様、ってくれたんだ。有り難くもらおうよ」

はいと差し出され、操は中身をこぼさないように受け取った。

手袋越しに、じんわりと温もりが伝わってくる。

「ああ、温かい…」

「うん、なかなかうめエ」

ふうふう冷ましながら、操は甘酒を喉に流し込む。ほんのりした甘さが、口の中に広がった。

「美味しい…」

「な」。寒い中飲むとまた格別だよな」

近藤も気に入ったようで、寒さに身を縮めながらカップを傾けている。

一気におおってカップを空にした土方は、ふとあることに気づいた。

近藤と一緒に警備にあたっていた沖田が、いない。

「近藤さん、総悟の奴は？」

「ああ、総悟なら…」

甘酒を嚥下し、近藤はある方向を指さす。

「今川焼食ってる」

そこには、屋台の前で今川焼を頬張っている沖田の姿があった。

途端、土方の目がつり上がる。

「総悟てめー！ さぼってんじゃねー！」

空の紙カップをぐしゃりと握りつぶし、追いかけてきた土方に「やべ、見つかった」というような顔をした沖田は、大量購入した今川焼を抱えて逃げ出した。

「待てー！ 総悟ーっ！」

「土方さんも食いやすかー！」

「いるかボケエー！」

そんなやりとりをして追いかけて展開する二人を見送りながら、操は微笑ましそうに笑う。

「仕事は嫌だけど、二人のいつもの光景を見られるのは楽しいわ」

「喧嘩するほど仲がいいとはいうけどなあ」

くすくす笑っていた操は、何度目かの除夜の鐘を聞いて黙り込んだ。

年明けすぐの参拝に合わせて、既にたくさんの人が集まっている。

時計を見れば、新年まで5分を切っていた。

「今年ももう終わりかあ…。早いわね」

「早い早い。あっという間だもんなあ。色々あったなあ…」

姉が帰ってきて、

盲目の男と出会って、

そして沢山の出来事があった。

そんな怒涛の一年も、もう終わる。

「そうね、色々あったわね…」

江戸に凱旋出来て、

たくさんの可愛い妹分が出来て、

恋人も出来て…。

「…っ！」

事もあるつか、年下の攘夷浪士と恋に落ちたことを思い出してつい顔がボツと赤くなる。

近藤が、不思議そうに首を傾げた。

「どつたの？　みい姉」

「な、なんでもないわよ。寒いだ…」

ドドンッ！

「け…？」

操の言葉を遮って、太鼓の音が響く。続いてわあつと歓声が上がった。

「あ、年が明けたんだ」

あちらこちらで、新年の挨拶が聞こえる。

ガラガラと鐘の音も聞こえた。

新年を告げる太鼓を聞きながら、操はぺこりと弟に頭を下げる。

「明けましておめでとう」

「おめでとう。今年もよろしく」

「ええ、よろしく」

近藤もかしこまって頭を下げ、挨拶を交わす。

頭を上げた操は、何だか無性に可笑しくなってくすくす笑った。

「こういつ年越しもいいものね」

「そうだね」

あちこちで、「明けましておめでとう!」と声がしていた。

『そうだみい姉、お年玉は？』

『馬鹿おっしやい。あるわけないでしょ』

『ちえ〜…』

終

## 謹賀新年

## 操編（後書き）

実家以外で新年を迎えたことはありませんが、今年は携帯で小説打ってたらいつの間にか年が明けてたという阿呆な年越しを経験しました。パソコンがぶっ壊れたせいなんだだよ…。（そっちじゃない…）

ちなみに今日（水曜日）はバイトがお休み！ レディースデーだしまた「劇場版 BLEACH 地獄編」を観て来ます！ ちなみに劇場で観るの4回目です。古谷さん待っててね～！ ε||ゞ（＊

）ノ

…自分で言うのも難だけど、馬鹿だ私…。

## 桜の如く(前書き)

この時期に桜もなにもないとは思っていますが、まあ見逃して下さい。  
い。 > ( | | ) < 操と桂さんの仲がまだ悪かったときのお話です。

## 桜の如く

あれはまだ、真撰組が銀時に出会う前のこと。

桜も散りゆく四月の中頃。笠を深くかぶって気ままに散歩を楽しんでいた桂は、江戸の外れにある屋敷が妙に騒がしいことに気づいてこっそりと様子を見に行った。

黒い服を着た男たちが、張られた黄色いテープの中にいる。

確かあの屋敷は、己とは違う過激派攘夷浪士の拠点だったはずだ。

御用改めにも入られたのか、自分たちも気をつけないとなと思った時だった。

「……い……だ！　み……さんがいない！」

切羽詰まった声を背に、桂はその場を離れた。

隊士の誰かが姿を消してしまったのか、逃げ出した攘夷浪士を追っ

て江戸内を駆けるため、そんなの日常茶飯事だろうに…。

「あれしきで慌てるとは、くだらぬ」

そのまま物音立えず、現場を離れる。

御用改めのせいか大通りにはパトカーが多く走っており、用心のため人気のない神社を横切ってアジトに帰ることにした。

神社への通りは桜並木となっていて、風によって散る花びらが、まるで吹雪のようだった。

「ん…？」

人氣が消えてから、つんと鼻をつく匂いに気づく。

これは…。

「血か？…っ！」

登ろうとした石段に男が倒れているのを見つけ、慌てて駆け上がる。

人の通りがあれば助けも呼べるが、いかんせん神社の周りには誰もいなかった。

「おい、どうしたしっかりし…！」

揺り動かそうとしたが、彼が倒れている石段が血だまりになっているのを見て手を止めた。

この出血では生きてはいまい。

よくよく見れば、この男は先ほど御用改めに入られた攘夷浪士集団の一人であることに気づく。

ここまでの深手を負って、ここまで逃げてきたのか。

いや違う。男の手に血塗れた刀がまだ握られていることから、斬られたのはここだと判断するのが正当だろう。

ここで誰かと戦い…。

斬られたか…。

死体がまだここにあるということは、斬った人間がまだ近くにいます。ということだ。

自分の敵でもある、真撰組隊士が…。

「…」

そのまま石段を登って上までつくと、桂の足が止まった。

参道の脇に見事な桜が一本、満開になっていた。風に散る花びらはすさまじい量で、まるで雨でも降っているかのようだ。

だがそれ以上に目を引くのは、その桜にもたれかかって座り込み、満足げな顔で桜を見上げている隊士の姿だった。

『大変だ！ 操さんがいない！』

先ほどの隊士の言葉を思い出す。

自分が唯一名前を覚えた女隊士は、ここにいた。

美しい顔に返り血を、そして形のよい唇からは流れた血を一筋つけて、桜を見上げていた。

「…羽衣でも無くしたか、天女サマ」

皮肉を込めて声をかけると、彼女は今初めて桂に気付いたように顔を上げて、儚く笑って見せた。

「あら、オヒサシブリ…」

「こんなところで、何をしているんだ？」

「見て分らない？　桜を見ていたのよ」

「こんな血塗れで花見とは、風流にも程があるぞ」

少しずつ近づきながら言っと、いいのよと返ってきた。

「石段に倒れていた攘夷浪士を斬ったのはお前だな」

「そうよ。貴方のお仲間だったかしら？」

「いや」

彼女の傍らに立つ。相変わらず桜吹雪が凄まじく、彼女が花びらに埋もれてしまいそうなほどだ。

事実彼女の頭にも花びらは積もり、顔についた返り血によって顔にも張り付いていた。

「刀を取らんのか？」

「私を斬るの？ 放っておいても勝手に死にそうな人間にわざわざトドメを刺すほど、貴方は野暮ではないでしょう」

「…フン」

一本取られて、桂は鼻で笑った。

「お前、死ぬのか？」

「さあ…、でもちよつとヤバいかもね。足の傷と、…お腹」

よくよく見れば、彼女の伸ばされた足には傷があり、手に隠されて見えないもののわき腹にも刀傷があるはずだった。

腹を押さえる手が、血で濡れている。

「痛いわ」

まるで他人事のような口調だった。

「お前でも斬られることなどあるのだな」

「私だって最強じゃないわ。どんなに鍛えようと、やっぱり男性には適わないもの」

血の付いた口元に笑みを浮かべ、操は腹に当てていなかった右手を持ち上げる。

左手に負けず劣らず、血に塗れた手のひらに花びらが落ちる。

「綺麗ね…」

桂は桜を見上げた。満開の桜は確かに美しいと思う。

しかし、いずれ散ってしまうと分かっているのに、どうして咲き誇るのか。

いつか己等の命を桜のようと例えた兄の言葉を思い出す。

「散りゆくのを、怖いとは思わないのだろうか」

「…そう言うのも、人生なんじゃないの？ぱつと咲いて、ぱつと死ぬのも…、武士の生き様と思うけどね」

操は目を閉じ、長い息をついた。

「…おい、大丈夫か？」

「ダメ」

笑いながら言い、操は桂の着物の裾を引っ張った。

「ねえ…」

「なんだ」

「もしかしたら死ぬかもしれないから、聞いてもらいたいことがあるんだけど…」

桂は訝しげに首を傾げ、膝を折った。

「なんだ、愛の告白でもする気か？」

「…バカ」

操は目を閉じたまま、くすくすと笑う。

「…ピアス」

はつと息を呑む。彼女が副長助勤の地位を与えられたと聞かされた時に、祝いの品として送ったもの。

蒼い翡翠のピアスが、彼女の耳で揺れていた。

「…悔しいけど、腹立つけど、気に入ってるわ。ありがとう」

「ふん、思いの外、よく似合う」

「ふふ…、見る度に貴方を思い出すわ。もっと強くなるうって、貴方を捕まえようって、思えるの…。感謝してる…」

ありがとうねと呟いて、操の右手がぱたりと落ちた。

眠るように意識を手放した操の耳に手を伸ばし、ピアスに触れる。

しゃらんと幻想的な音を立てて、ピアスが揺れた。

「…さ。えさん！」

呼ばれて、重い目を開いた。土方と沖田が自分をのぞき込んでいて、  
気付いた操に目を和ませる。

「みいさん！ 良かったでさ！」

「…私…っ！」

体を起こしかけて、全身に痛みが走って止めた。

痛みで完璧に覚醒した頭で周りを見回すとどうやら自室のようで、  
私生きているんだとのんびり思った。

どうやら彼らによって助けられ、屯所に連れ帰ってもらえたようだ。

「いやあ良かった良かった。あの屋敷からいなくなったと思ったら、公園のベンチで横になってたんだ。心配したぜ」

「…公園？」

自分がいたのは神社のはずだ。なのに公園とは…。

「あ、まだ起きないほうが…」

ゆっくり体を起こすと、体のあちこちに鈍い痛みが走った。

それでもその痛みが、生きていることを教えてくれる。

「私もまだまだかあ…」

「3日間も眠ってやしたんですぜ？ 近藤さんが心配して心配して落ち着かなくて…」

沖田がそこまで言った時だった。廊下からドタドタと足音が聞こえ、ぱんつと襦が開く。

「みい姉！」

今し方噂していた近藤が駆け込み、良かったあと操に抱きついた。

瞬間に、痛いわねと操に殴られた。

そんな昔のことを、同じ桜を見上げながら思い出していた。

もう何年も前の話。この場所から公園まで運んでくれたのは桂だと判断して、次に会った時に礼を言っておいた。

その時桂は、元気になって良かったと言った。

死ぬかもしれないなと自分で思っていたから、助けてくれたことが嬉しかった。

「操！」

いきなり大声で呼ばれて、操はびくりとおののいた。

あの時と同じ、僧侶姿の桂がいた。

「小太郎！」

何度目かの逢瀬。誰も来ないこの神社の桜が綺麗だからこっそりお花見しようと言い出したのは操だった。

「小太郎！ 見て見て！ 桜がまんか…あ…」

嬉々として駆け寄ったら、腕を引かれて強く抱き寄せられた。

いきなりの行動に、目を瞬かせる。桂はそのまま肩に顔を埋め、持っていた錫杖を手放して操の腰に手を回す。

かしゅんと音がした。

「小太郎？ どうし…っ！」

そのまま強く抱きしめられる。腰に回された腕に力が籠もり、肺の中の空氣がすべて押し出されていく感覚。

操はその感覚が、嫌いではなかった。

「こたろ…？」

思い出したように呼吸してから、そつと彼の名を呼ぶ。

「どうしたの…？」

見上げれば、腕の力が多少緩んだ。そしてどこか縊るような目と視線がぶつかる。

唐笠のせいで、より影があるように見える。

「…お前は桜の下に立つな」

何を言うのかと、操は首を傾げる。

「どうして？」

「お前が消えてしまいそうで怖い。あの時のように、死んでしまうのではないかと…そんな不安に襲われる」

更に腕に力が籠もる。まるで操を意地でも手放さないという信念が伝わってくるようだった。

操は彼が言うことが分からなくて、ただ戸惑うばかりだ。

「あのとき、血まみれで桜の下にいるお前を儚いと思った。物音を立てればそのまま消えてしまうのではないかと…。今も同じだ。桜を見上げているお前が儚く見えた。今にも消えてしまいそうで無性に怖かった…」

散る桜の花びらがそう見せたのだろう。

杞憂だと分かっているても、怖いものは怖い。

愛しくて仕方ないから、消えないでほしい。

散らないでほしい。

この桜のように。

「私もあのときのこと思い出してた…。ああ死ぬんだなあって、でも最期に貴方の顔を見られて良かったなって思ったのを覚えてるわ」

「なんだ、やはりあの時言おうとしていたのは愛の告白だったのか？」

「告白が良かった？」

桂の返事は、優しいキスだった。

遠き昔の記憶は、この桜の下に永遠に眠り続ける。

終

桜の如く（後書き）

何と言いたかったんだかさっぱり…。操はいつから桂さんを意識してたんだろうなと自分でも分からなくなりました。つか、桂さんが送った翡翠のピアスの存在、すっかり忘れてたぜよ…。（↑ぜよ？）

## お願い（前書き）

姫華話に投稿した「月夜の戦闘」の続きとなりました。また銀魂キヤラがザキさんしか出てないっていう…。（へ、；）

お願い

「近藤隊長、お客さんだよ」

声をかけられて、操は書類から顔を上げた。

「お客？ 誰？」

操個人にお客など、滅多にない。だからこそ、操は不思議そうな声を出した。

「頬かむりして分かり辛かったけど、美人さんっぽい。暁さんって言うらしいよ」

暁という女性に、操は少なくとも心当たりがなかった。江戸にも、故郷の武州にも。

「ふうん…。分かったわ、ありがとう」

応接間に案内してあると言うので、身なりを整えて廊下を進んだ。

それにしたって、暁という名の美人は自分に何の用なのだろう。

「どこかで会ったかなあ……」

思い出せないまま、応接間の前に膝をつき、襖を開けた。

「失礼します。大変お待たせして……」

下げた頭を戻した操は、そのまま硬直した。背を伸ばして、頼かむりを取って座っていた美人は、確かに会ったことのある女だった。

それも、戦場で。

「こんにちは。近藤操」

停止していた操の思考は彼女の、……姫華の一言で動き出した。

「○↑ # % @ = !」

声にならない悲鳴をあげて後ずさる。座っていたため、ひっくり返りそうになった。

「怨霊でも見たような声を出さないで下さいませ。失礼ですわ」

ぱくぱくと口を開閉させる操に、姫華は飄々とした口調で言っている。

「あ、貴女…」

まだ信じられないといったように声を絞り出す操。現在真撰組で鬼兵隊の ” 黒衣の死に神 ” こと芹沢姫華の顔を知っているのは操だけだ。それはいいとして、何故鬼兵隊の彼女が、敵陣である真撰組の屯所を訪ねてくるのか…。

「貴女、ここがどこだか分かってるの…?」

「己がどこにいるか分からないほど、落ちつづけてはいませんわ」

「…私に、何か用?」

恐る恐る聞くと、姫華は座布団からおり、床に手について頭を下げた。長い黒髪が、さらさらと床を撫でる。

「お願いが、あつて参りました」

「お願い…？ 貴女が、私に…？」

姫華は顔を上げ、はいと頷いた。その真剣な表情に、操は戸惑って廊下を探った。

「何をお願いされるか分からないけど、兎に角ここじゃまずいわ。外に出ましょう」

姫華の手を取って立たせた操は、そのまま廊下に出た。…が。

「あれ？ みささん出掛けられるんですか？」

盆に急須と湯飲みを乗せた山崎とぶち当たり、操は慌てて姫華を影に隠した。

「う、うん！ 久しぶりだから二人で遊んでくるわ！ お茶淹れてくれたのにごめんなさいね…！」

「いいんですよ。気をつけて下さいね」

にこりと笑う山崎に再び礼を言って、操は姫華を引っ張って慌ただしく出て行った。

残された山崎は、盆を持ったまま暫く立ち尽くしていた。

「よほど嬉しかったんだなあ……」

そのまま、踵を返す。

「結局顔見れなかったけど、誰なんだろう……」

問答無用で姫華の手を引き、屯所を出て幾つかの角を曲がった操は、やっと立ち止まって大きく息をついた。

「貴女なにを考えているの？ 敵陣に乗り込んでくるなんて……。飛

んで火にいる夏の華もいいところよ!」

「言いましたわ。貴女にお願いがあつて来たと」

「だからって…」

姫華の真剣な表情に、操は息を飲む。

下手をしたら捕まるかもしれないことを、姫華は十分承知の上だったのだろう。

なのに操に会いに来ることを選んだのは、その ” お願い ” が彼女にとってとても大切なことだからだ。

己の運命を賭けてでも、解決したいことだから…。

「なにも私に頼まなくても…」

「鬼兵隊の船で生活している私にとって、このお願いを出来るのは貴女だけですから」

真っ直ぐに見つめられ、操は大きな息をついた。

「ずるい子…。そんなこと言われたら断れないじゃないの」

姫華が淡く笑い、操はあたりを見回して誰もいないことを確かめる。

「取りあえず誰もいない所に移動しましょう。貴女、このこと彼は知っているの？」

素直に首を横に振られ、操はそれもそうよねと肩をおろす。

真撰組隊士に会いに行くなど言ったら、姫華命のあの男は意地でも止めるだろうということは、安易に想像することが出来た。

「……なら平気でしょっ」

ターミナルから少し離れたところにある、豪華な料亭。

個室であるため、誰にも姿を見られることはない。

「…素敵な場所ですわね」

「2ヶ月に一度くらいはお世話になるの。ここのお刺身御膳は美味しいのよ」

持ってきて貰ったお茶をすすりながら、操は目の前に座った姫華に答えてやる。

姫華はあまりこういった場所に来ないのか、珍しそうにキョロキョロしていた。

「で、お願いってなんなの？」

いきなり本題に入れば、姫華の表情が強張った。戸惑っているように俯いてしまう姫華が言葉を発するのを、操は辛抱強く待つ。

「…以前、吉田松光の名を口にされましたよね」

「ええ、したわ」

「彼を、知っているのですか？」

どこか縊るような表情だった。操は怪訝そうに眉を寄せて、首を傾げる。

「知っているわ。よく彼から、弟たちの自慢話を聞かされるの」

「では、彼は江戸にいますね？」

「？ ええ」

姫華にほっとしたような今にも泣きだしてしまいそうな表情が浮かぶ。良かったと、小さな呟きも聞こえた。

「お願いします。彼の居場所を教えてください」

「…悪いけど、出来ないわ」

操の答えに、姫華が打ちのめされたように息を飲んだ。

「…何故ですか？」

「忘れてる？ 私たちは敵同士よ？ そうでなくとも貴女は鬼兵隊という過激派攘夷集団の一人。松光殿に危険が及ぶかもしれないつていうのに、教えられるわけがないわ」

いささか冷たい言い草だったが、間違ったことは言っていない。姫華は叱られた子供のように肩をすくめて俯いた。

「…彼に危害を加えないことは、誓います」

「それをどうして信じろというの？ 貴女が総統殿に松光殿の何を聞いたか知らないけれど、私には江戸の住民の安全を守る義務があるわ」

「…」

泣き出しそうな姫華に言い過ぎたかと思ったが、松光を危険にさらすわけにはいかない。銀時どころか、恋人の桂にまで顔向けが出来なくなる。

「…彼には、ただ晋助に会いに来てくれるよう頼みたいだけですわ」

「そんなの松光殿だつて…え？」

松光も高杉に会いたがつていることを伝えようとした操は、ふと気になって言葉を切った。いま彼女は、自らの総統をなんと呼んだ？

「…晋助？」

「はい？」

「貴女いま総統殿を呼び捨てにしたわよね…」

誰にでも敬語を使い、真摯な態度を崩さない彼女からは信じられない台詞だろう。

姫華はああと頷いた。

「本人から呼び捨てるように言われています。昔のように」

「…昔？」

「…教えてほしいとお願いしているのですから話すべきですわよね。私は幼少の頃に、晋助を含めた吉田松光の弟たちと親交がありますの。もちろん彼…松光兄ちゃんとも」

「…」

操は目を瞬かせて、なんだってと言わんばかりにテーブルに手をつき、身を乗り出した。

「…は？」

「私は当時男装して、松光兄ちゃんの父親である吉田松陽先生の塾に通っておりましたの。銀時や小太郎たちとは、よく遊びました」

「…ちょっとタンマ」

「銀時も小太郎も私を覚えていてくれて…」

「タンマ！」

操の怒号で、姫華は黙り込んだ。

「なんですか大きな声を出して…」

「いろいろ一度に聞きすぎて混乱してきたわ…。幼少期に親交があった？ 貴女と松光殿の兄弟たちが？」

「ええ。正確には吉田親子と、その兄弟たちとですけど…」

操は信じられないように目を瞬かせて、そうだったの…と呟いた。

「当時は男装していたので黙っていたのですが、つい口が滑って晋助にはバレてしまって…」

「…じゃあ、総統殿は貴女を学友として扱っているわけね」

姫華は頷き、二人きりの時だけですけどつながる。

「え？ 旦那や…桂は？」

「もう知っています。鬼兵隊参謀補佐芹沢姫華が当時共に学んだ峰岸流加であるということは…。まだ晋助にバレていないと思っていた頃に、銀時の首をとってこいと命令されたことがあります…」

操が息を呑む。姫華は苦笑して、首を傾けた。

「もちろん私に銀時を殺すことなど出来なくて…、晋助もそれを知っていて私を向かわせたそうです」

「…何度も本人に言ったけど、性格悪いわね…」

「私もそう思います。晋助は昔からひねくれ者でしたから」

くすくすと笑い、姫華は目を伏せる。

「銀時には、その時に正体を明かしました。昔の私を覚えてくれて…嬉しかった」

「…桂は？」

「銀時に話すようお願いしていたので、銀時の口から…。小太郎もちゃんと覚えていてくれました」

嬉しそうな笑みを浮かべたのもつかの間、それはすぐにかき消えた。

「晋助は大事に思っていた松陽先生を亡くして、悲しみに狂いかけています。今までは私が支えてきたけれど、それももう限界に近い…。だから松光兄ちゃんに会って、晋助を助けてくれるよう頼みたいんです」

操は暫く呆けて、やがて「そう…」と肩を下ろした。

「旦那や桂と、接触はしてないの？」

「攘夷浪士の小太郎はともかく、銀時は攘夷のじの字も興味のない一般人。そして二人は、晋助と対立している…。私が無闇に彼らと接触すれば、危険が及ぶだけですわ」

「それもそうだね…」

なんだか色々聞きすぎたわと操は頬を掻き、小さく息をつく。

「まあ、一回くらい旦那に会っても罰はあたらなと思うけど…。アレでしょ？ 松光殿のお父上の塾に通ってたってことは、やっぱ

り松光殿も兄弟として扱ってくれてたんでしょう?」

「ええ、可愛がってくれていました」

「ということは、血の繋がりこそ無かれど貴女は旦那や桂とは兄弟…弟子みたいなものよね。旦那も貴女に会いたいんじゃないの?」

悪戯っぽく問えば、さあ…と首を傾げられた。

「銀時とは兄ちゃんを取り合って喧嘩ばかりしていたものですから…」

「一回ぐらい会ってみるべきよ。松光殿もそこにいるから」

操の言葉に、姫華はキョトンと首を傾げた。いじめすぎたかなと、操は内心苦笑する。

「松光殿は、旦那と一緒に万事屋にいるわ」

姫華の目が見開かれ、ずいとテーブルに身を乗り出す。

「本当なんですか？」

「本当よ」

姫華が脱力し、テーブルに伸びた。そしてふるふると小刻みに震える。

「私の行動は一体…」

「お疲れさま。灯台もと暗しとはこのことね」

意を決して敵陣まで乗り込んだのに、まさかそんなに近くにいたなんて…。

「どうする？　呼び出しましょうか？」

「いえ、今日はもう戻らなければ…。それに兄ちゃんは男装していた私しか知りませんので、いきなり会っても…」

そう、と操は頷いた。そしてお茶を飲み干す。

「じゃあ、私が出ることはここまでね。頑張つて、松光殿も総統殿に会いたがつていたから」

「はい。ありがとうございました…」

床に手をつき、深々と頭を下げた姫華にどういたしましてと返事をして、操は立ち上がった。

「私は先に帰るわ。貴女を尾行したりしないから、安心してちょうだい」

「はい」

じゃあねと手を振って個室を出かけた操は、しかし姫華に呼ばれて足を止める。

「近藤操」

「なあに？」

「お礼に、一つよいことを教えて差し上げます」

姫華が教えてくれた「よいこと」に、操は目を見開いたのだった。

『一月後、我ら鬼兵隊は宇宙海賊春雨と共に江戸を襲撃に向かいます。これは決定事項…、どうぞお気をつけなさいませ』

姫華が教えてくれた情報を信じるべきか信じないべきか、操は屯所までの道のりを悩んで進んだ。

あの姫華が嘘をつくとは思えないし、理由がない。

その襲撃を止めるために、高杉に松光を会わせたいのだとすれば…。

「あ、お帰りみい姉！」

縁側に座っていた近藤が、きゃっきゃと笑って手を振る。

到底30を間近に控えた男の仕草だとは思えない。

「ただいま。ねえ勲、最近鬼兵隊の情報って入ってる？」

「え？ …いや、最近はまったく…」

「そう…」

姫華の狂言なのか、嵐の前の静けさなのか。

「どうして？」

「最近大人しいから、気になっただけよ。このまま大人しくしてくれればどんなにありがたいか」

肩をすくめて見せると、近藤はそうだねと言って、笑った。

（松光に止めてもらおうって寸法か…）

松光に会えば、高杉もバカな考えを改める…姫華はそう考えたのだらう。

果たして、松光ひとりに止められるか…。

（何も起こらないことを祈るだけだけれど…）

操に出来ることはただ一つ。

彼女が、

馬鹿總統が、

松光に会えるよう、願うことだけ…。

終

## お願い（後書き）

ここんとこ私の実家あたり雪が降りっぱなしで、雪かきが大変です。で、性懲りもなく「雪」シリーズで小説書こうかと思ったんですが、当分先まで投稿する話決まっちゃってるといふ…。3月になっても大丈夫かな…。（？―？；

## 天女狂舞

(上) (前書き)

タイトルの「天女狂舞」は「てんによくるいまい」と読みます。え  
？ どうでもいい？ (。D。)

## 天女狂舞

(上)

ある寒い日、銀時は妙に呼ばれて恒道館に向かった。

日も出ていない朝っぱらから、

『どうしても来て欲しいんです』

と電話で叩き起こされ、それでもそんな早朝から連絡するくらいだから大事な用があるのだろうと上着を羽織って志村宅へ足を運んだ。

「おい、銀さんが来ましたよー」

寒さに肩をすくめながら声を上げると、いらっしゃいと妙が顔を出した。

どうぞと招かれて中に入れば、外界とは違う温かさに力が抜けた。

「で、朝から銀さん呼び出して何なの？ 大事な用事？」

「ええ、これを返そうと思って」

そう言つて差し出されたのは、銀時の赤いマフラー。数日前に寒がる彼女に貸してやったことを思い出す。

「ああどうも…」

受け取りかけて、ふと思った。

「…これだけ？」

「はい？」

「はい？　じゃなくて。これ返すただけに俺呼び出したわけ？」

妙は不思議そうに首を傾げて、銀時を見上げた。

「そうですけど、おかしいですか？」

「おかしいでしょう！　普通こついう時は自分から返しにくるの

が常でしょお妙さん！　じゃなければっつあんに頼むとか！」

「だってお姉様から必要最低限外に出るなって言われてるし、新ちゃん今日はお通ちゃんのリライブで朝からいなかったんですもの」

至極さらりと流されて、銀時はがくりと脱力する。悪気があって言っているわけではないようだ。

「なら別にこんな朝早く呼ばなくても…」

「私いま仕事から帰ったんですよ？　寝る前に返しておきたいじゃないですか」

「あゝ、そうだね…」

帰りは温かいからいいやと息をついて、ふと気になった。

「姉御が外に出るなって？」

「ええ。ほら、最近若い女性の誘拐事件が横行してるじゃないですか。だから気をつけなさいって」

「お前みたいなゴリラ女誘拐しようだったって、逆に誘拐されるのがオチ…」

ゴッ…！

「おぶっ！」

妙に強烈なアッパーを喰らい、銀時はどしゃつと床に沈む。

「なんか言ったか天パ…！」

「なんでもないです…」

ぜってえこのメスゴリラを誘拐出来る奴なんかいないえ！ 銀時はそう断言して、ばたりと気絶した。

『江戸から女が消える!』

そんな見出しが新聞を飾ったのはいつだったか。

昼夜問わず、いつの間にか女性が姿を消し始めたのだ。

それも一桁どころではなく、二桁…。

事態を重く見た真撰組は特別捜査本部を設置。女性は極力一人歩きをしないように声をかけた。

それでも女性は次々と姿を消していき、真撰組屯所内ではピリピリとした空気が流れ始めていた。

そう、一人の女のせいで…。

「被害者は十八歳の里見朱蓮<sup>さとみしゅれん</sup>さん。買い物に出たきり帰って来ないことを心配した双子の姉が、捜索願いを出しています」

ずらりと隊士たちが並ぶ会議室。9番隊隊士三ツ木が読み上げる資料を、操は腕を組んで聞いていた。

眉間にはシワが寄り、一語一句聞き逃すまいと切れ長の双眸は閉じられている。

「今回で江戸から消えた女性は18人。すべての失踪の関連はまだ不明ですが、事件、事故の両方で調べを進めています」

死体があがるわけでもなく、そもそも誘拐と呼ぶににしては犯行声明すら出ていない。

あまりに静かな事件のため、マスコミの間では『神隠し』とも言われ始めた。

「操隊長、犯人の目星は？」

特別捜査本部本部長を勤める操は、真撰組副長土方の問いにやっと目を開いて立ち上がる。その目は怒りにつり上がっていた。

「犯人の目星は、まだついておりません。しかし被害者が女性のみであること、死体が一切出ていないこと、それらから推測するに人身売買が関係しているのではないかと考えています」

「そうか…。なんにせよ早く解決しないと…、何かあればまた声をかけてくれ」

胡座をかいていた近藤がそう言い、操は捜査本部長としてはいと頷いた。

「報告は以上です。解散して下さい。ただし、9番隊は残るように」

「はい！」

9番隊を除いた隊士たちがわらわらと出て行き、会議室を後にした近藤は土方の隣で大きなため息をついた。

「みい姉が怖い…」

「被害者が女のみである上、人身売買が絡んでるとありやな…。怒るのも無理はねえよ」

女性を蔑ろにされることを嫌う操。特別捜査本部本部長の座についたのも、早く事件を解決したいからに他ならない。

それと合わせて全く解決への進展がないことへの苛立ちを隠せず、操は終始ピリピリしているのだ。

「早く解決できりゃいいんだけどな…」

世間的にも、真撰組内の安全の為にも…。

「残ってもらったのは他でもないわ。人身売買の疑いが浮上した以上、吉原にも捜査の足を広げます。三ツ木、佐伯、尾高は吉原西側を、周防、桐生は東側を重点的に搜索、聞き込みをしてちょうだい。私は吉原の遊女たちに接触して、最近怪しい人間の出入りがないか聞いてみるわ」

「はい！」

「なんとしても次の被害者が出る前に手掛かりを掴みたいわ。心してかかって」

9番隊隊士5人は再び元気よく返事をする。正直彼らも早く解決したかったのだ。

いつまでも操がピリピリしていても、彼らの胃がキリキリしっぱなしだ。

事件解決が先が自分たちが倒れるのが先が、それは時間の問題だった。

男は天国女は地獄。地上とは別の法で縛られた一個の国、吉原桃源郷。

女達<sup>モ</sup>が売られ囲まれ商品として扱われる女の牢獄。

操はこの世界が、耳にするだけでも嫌いだった。

女を何だと思っている。

女を買う男の精神も分からない。

なにより腹立たしいのは、この吉原に幕府が一枚咬んでいること。

地上の常識など通じない吉原は、中央暗部の触手に支えられ幕府に黙殺される超法規的空間。

自分がその幕府の関係者であることが、腹立たしくも悔しい。

自分にもっと力があつたなら、ここにいる女性たちを助けてやれるのに。

「…収穫なし、か」

檻とも言える店の中から、女たちは嘘のように明るく笑いかけている。

何不自由なく地上を歩ける着物姿の自分を、彼女らはどう思っているのだろう。

「ちょっとヤダ！ 離しな！」

「女郎如きが武士の魂である刀を足蹴にしおって！ 手討ちにしてくれるそこになおれっ！」

「そつちが勝手に落としただけだろっ？ そつちのをいちゃもんつて言うんじゃないのかい？」

「なんだとこのクソアマ！」

どうやら男が落とした刀が、運悪く遊女の足に当たってしまったらしい。

男は遊女の細い腕を掴んだままぐいと乱暴に引き寄せる。

操は頭の中で、派手に何かが切れる音を聞いた。

「遊女風情が、武士を愚弄するな！」

遊女に向かつて振り下ろされた拳を、操は後ろから掴んで曲げてはいけない方向に捻り上げた。

「コルア」

メギツと嫌な音がして、男が奇声を上げた。

「か弱い女の子に手を上げるの？ 貴方如きが武士？ 刀が泣くわよ」

「な、なんだ貴様は！」

腕を締め上げられたまま、男は顔を歪めて怒鳴る。

やっと男から解放された遊女が、きょとんと着物姿の操を見上げた。

「女郎如き？ 遊女風情？ 彼女たちはそれでも気高く生きているのよ？ アンタみたいな下衆が無闇に触れていいものじゃないの」

「い、イデデデ！」

更に締め上げられ、男は顔を歪ませる。

「き、貴様自分の立場を…！ 遊女が侍に手を出していいとも思  
つておるのか！」

「残念、私は遊女じゃないの」

ギシギシと男の骨が軋む。男の顔が徐々に苦痛に歪んだ。

「それにアナタは侍でも何でもない」

男は操の低い声を耳元で聞いたと同時に、自分の腕が嫌な音を立て  
て折れる音を聞いた。

「ぐあ、あああっ！」

痛みに崩れ落ち、男は地面でのた打つ。操はそれを、ゴミでも見る  
かのように見下ろした。

「貴方はただの外道…。侍を名乗るには百年早いわ」

冷たい視線を注いだまま、操は続ける。

「私、いま物凄く機嫌が悪いの。さっさと私の前から消えてくれるかしら」

そこまで罵られて、男は流石に黙っていらなかったようだ。

折れた腕の痛みを耐え、刀を握む。

「貴様、黙っていれば…！」

男は始めて操の顔を見た。そして怒りの表情から、怯えの感情を顔に出した。

「長い黒髪に紫暗の瞳…。まさか貴様、…真撰組近藤操…」

「あら、私をご存知？」

成り行きを見守っていた遊女たちが、ぽかんと目を瞬かせる。何故

真撰組がここに？　とても思っているのだろう。

「私今仕事中でね、いま帰ってくれたら見逃してあげる。刃向かうと言っなら公務執行妨害で逮捕させていただくわ」

「っ…！　ひいっ！」

情けない声を上げながら、男は見苦しく立ち去っていった。

操はフンと鼻で荒い息をしてから、未だ啞然としている遊女に声をかける。

「貴女、大丈夫？」

「え？　ああ、私は平気さ。それよりアンタ、本当に真撰組の近藤操なのかイ？」

「そうよ」

さらりと返ってきた答えに遊女は目を瞬かせて、呆然としたままそ  
うなのかい…と頷いた。

「助けてくれてありがとうよ。でもここに何しに来たか知らないが、あまり騒ぎを起こさないほうがいい。ここは地上うえとは別の世界だ。いくらアンタが真撰組だろうと…」

「分かつてる。吉原きちの法律には通用しないと重々承知よ。逮捕する気も毛頭なかった…。だってム力つくじゃないあの薄らハゲ！女をなんだと思ってるのよ！」

そう思うでしょう？　と同意を求められ、遊女は可笑しくてクスクス笑った。

操のことは新聞などで知っていた。真撰組に身を置いているからてつきり堅苦しく融通の効かない女と思っていたが、これではまるで無邪気な子女のようだ。

「助けて貰ったんだ、何か礼をさせとくれよ」

「いいわよお礼なんて…」

「そう言わずに、さ」

ぱちりとウィンクされ、操は困ったなあと思われ笑いする。

「そもそも天下の真撰組が、こんなところに何しに来たのさ。アンタまさか…」

妖しい目で見つめられ、操は彼女の言っていることを理解して盛大に否定する。

「ちがつ…、違うわよ！確かに女の子は大好きだけど私にそ（・）っ（・）ち（・）の趣味はありません！仕事よ仕事！事件の手がかりがないかって調べてたの！」

「事件？」

きょとんと首を傾げられて、操は素直に話してしまうことにした。

もしかしたら何か、手がかりが掴めるかもしれない。

「江戸中で女が消えて、もしかしたらここに売られてるかもしれない…ねえ」

二人並んで道を歩きながら説明すると遊女、（みどりというらしい）は呟くように言った。

「あくまで予想なんだけどね。そうあってほしくないけど、事件解決のためにそうあってほしいと思うちゃう…。あ、私って最低…」

出来ればこの吉原にいてほしい。

自分の手の届くところで無事にいてほしい。

たとえ地獄と変わらない場所であろうと、ここならいつか自分が助けてやれる。

頭を抱える操に、みどりはにっこりと微笑んで見せた。

「アンタ、本当に女の子大好きなんだねえ。私も何か手伝ってやりたいけど、吉原全体を把握してるわけじゃ…そうだ、月詠の頭なら何か知ってるかも」

ぽくつと手を叩いたみどりに、操は首を傾げる。

「月詠の頭？」

「この吉原のNo.2さ。あの人ならこの吉原全体に詳しい。おいで、連れてってあげるよ」

ぐいと手を引かれ、操はありがとつと礼を述べてついていった。

手を引かれて連れて来られたのは、「ひのや」という小さいながらも洒落た茶屋だった。

キャバクラ、ソープのお店が周りに立ち並ぶ中、比較的まともなお店だ。

「日輪さまア！ いらっしゃいますかー！」

みどりが元気に声をかければ、はいはいと奥から返事が返ってくる。

中から車椅子に乗って出てきた美女に、操の思考が止まりかけた。

凜とした佇まい。まるで太陽のような温かい笑顔を浮かべる女性に見惚れてぼけっとしているうちにみどりが操を紹介してくれ、月詠の頭がどうのこうのと説明しているのが聞こえた。

「月詠なら中にいるよ」

「じゃあ私呼んできますね！」

みどりが中に消えてしまい、車椅子の女性がこちらを向いてにこりと笑う。

綺麗な人だなあとか、この人私より年下よね…と思っていると女性が再びにこりとした。

「はじめまして、私は日輪。貴女、真撰組でしょう？」

「うえっ！ はい、真撰組の近藤操です！」

なんだか緊張してしまって、ぴしりと背を伸ばす。その反応がおかしかったのか日輪はクスクスと笑い、ついで悲しそうな笑みを浮かべた。

「地上<sup>うえ</sup>から…来たのよね」

消えてしまいそうな笑みにはっとする。ここは女にとっては地獄の世界。

地上へ行き来できる自分が、羨ましくて仕方ないのだろう。

「ここはどこ？」

「どっつて…。えっと、その…」

散々迷って、来た際に思ったことを口にする。

「…江戸の街みたいだなって思いました。私が住んでるところと変

わらない…。唯一違うとすれば、美人さんがいっぱいいることくらいで…」

しどろもどろになっていると、日輪がまたクスクス笑った。

「そりゃあ良かった。前は腐ってたけど、私たち女が子どもに恥ずかしくないように少しずつ変えていこうって、頑張ったもんだからさ」

キャバクラやヘルスがある時点で子どもに恥ずかしくないなど言えない気がするが、それでも以前とは違うのだろう。

道行く女性たちが笑っていることで、それだけは分かるのだ。

「日輪様ー！ 連れてきたー！」

みどりが、奥から長身の女性を引き連れて戻ってくる。

ご苦労様と振り返った日輪が笑い、みどりの後ろにいた女性の姿が操に見えた。

「ぬしか？ わっちに用があるというおなごは」

（うわ… あ！ 超絶美女さん！）

網タイツにスリットの入った片腕の着物。顔には二本の傷があるが、彼女の美しさを引き立てる飾りでしかない。

薄い金色の髪はクナイの形をした簪でとめられ、紫の瞳は操のそれよりも明るい。

「…おい、どうした？」

ぼけっとしたまま自分を見つめる操の目の前で、彼女はひらひらと手を振る。

吉原に来てから沢山の美女を見てきたが、これはまた並外れた美貌の持ち主だ。

いるところにはいるんだなあと、操は頭を振って自分を正気に戻したのだった。

終

## 天女狂舞

(上) (後書き)

実は当分前(去年の話)に、烈火竜さんから「月詠さんを出してみ  
て」とリクエストされていて、「月詠さんって言ったら吉原…」  
と考えに考えて出来上がった作品です。ちょっとしか月詠さん出て  
ないけど、中と下でちゃんと出ますからね！ 来週も読んで下さい  
ね！ (↑強引…)

烈火竜さん！ 貴重なネタの提供、ありがとうございました！

ゞ ( ^ ^ ) ノ

## 天女狂舞

(中) (前書き)

もうすぐバレンタインなので意気込んでチョコレートケーキを作ろうと思ったんですが、見事に失敗しました。兄貴に笑われてムカついたので失敗して焦げたチョコケーキを兄貴の口の中へ突っ込んでやりました。ふーんだ！ ( - | - # )

## 天女狂舞

(中)

「なるほどな。地上でおなごが謎の失踪…。それでこの吉原に売られているのではないかと踏んだか」

「ええ、死体も犯行声明もないの。それ以外ないと思って」

月詠と名乗るこの女性は、吉原の自警団「百華」の頭領だという。

こんなにも優雅に煙管をふかす女性を、操は始めて見た。

「ふむ…」

煙管を逆さにしてコンツと盆に叩きつける仕草も、目を奪われるほどに優美なものだ。

「その事件が起き始めたのは…、よもや一月半前とは言つまいな」

その通りだったので、操は驚いて目を見開く。

「何か知っているの？」

「その事件に繋がりがああるかは分らんが、一月半前から売られてくる女が格段に増えていてな。売られた女共は怯えて何も語ろうとせんが…。あまりにも数が多い故、気になっておったのじゃ」

「数が多いって…、売られてきた女の子の数、分かる？」

「ああ…」

月詠が口にした数は、江戸で行方不明になった女性の数より多かった。

江戸以外からも連れてこられた女性も含めるとすると、やはり女性たちがここに売られてきた可能性は高い。

「そういつた事件に巻き込まれて売られてきた女共は、よほどのことがない限り地上に返せる…。よければ、わっちも協力させてくれんか」

それは嬉しい申し出だった。地上の警察と地下の警察が連携すれば、それよりも心強いものはない。

「本当！？　ありがとう！　月詠殿！」

ぱつと目を輝かせて言えば、「月詠でよい」と苦笑混じりに返された。

「しかし、主は本当におなごを大事にしているのだな。男が嫌いなのか？」

「嫌いつてわけじゃないけど…、女性が蔑ろにされるのは許せないだけよ」

操の言いぐさに、月詠は可笑しくてたまらなそうに笑った。

何かわかったら連絡すると月詠と別れて一週間後、操は幕府のお偉いと呼ばれて警察庁に足を運んだ。

通された部屋には松平とその他数人の長官がいた。

「そうか…。まだ分からねえか…」

「申し訳ありません。特捜部も全力で解決にあたっていますとしか言いようがありません…」

肩を落として報告を終えた操に、松平は気にすんなと微笑んだ。

「大丈夫だよ操ちゃん。いずれ解決できる」

「はい、努力します。おじさまも栗子ちゃんには重々気をつけていただきますよう…」

「当たり前だい」

松平の声が太くなり、鼻からふんつと煙草の煙が出た。

「栗子にはどこへ行くにも護衛を4人つけてる。…少ないかな」

「…十分では…」

呆れて操が突っ込んだ時だった。

松平の隣に座っていた長官が、オドオドと口を開く。

「あ、こ…近藤…」

「はい」

彼はけして震えているわけでも怯えているわけでもない…はずなのだが、気が弱くてこういったどもる発言しか出来ないのだ。

「き、君もきき、気をつけるんだだよ…」

彼は那須孫左衛門なす まござえもんといい、通称、孫左まじろ。現在数人いる長官としては最後にその地位についた男だが、なかなか頭がきれる。

ただし気弱で時に何もないとところで盛大にすっ転ぶという天然も見せてくれるため、屯所内での愛称は「ぼけ那須」。

「まあ、わたくしの心配もして下さるのですか。孫左さま」

私より自分の心配をしたほうがいいのではないかと思ったが、口にできなかった。

「消息をたっているのは…そ、その、びび美人ばかり…なんだろう？」

「ええ」

「みみ操も…びっ、美人だもの…。きつ気をつけて」

頼りないが、天導衆とは違って隊士たちを信頼してくれるこの男が操は嫌いではなかった。

操は嬉しさでにっこり笑うと、ありがとうございますと頭を下げた。

警視庁の建物を出た時には、あたりはすでに暗くなっていた。

さあ帰って調べ直すかと伸びをしたところで、携帯が着信を知らせた。

この着信音は9番隊からだと思って取り出すと、『着信 周防』と表示されていた。

着信ボタンを押して、耳へあてる。

「もしもし？ どうしたの」

『ああっ 操隊長！ 大変です大変なんです！』

「ええ、貴方の慌てっぷりも大変」

『お妙さんが、お妙さんが今回の事件に巻き込まれて…』

そこまでしか聞かなかった。携帯を切り、屯所へ走り出す。

犯人め、私の妹を傷つけたら…。

ただじゃおかないんだから。

人をひきかねない勢いで屯所に戻れば、ひとまず妙は無事のことだった。

待たせてあるという部屋に慌ただしく駆けていき、すぱんっ！と勢いよく襖を開けた。

「妙！」

「きゃっ、お姉さま！」

中の座敷には妙と、妙に支えられるようにして座り込んでいる女性の二人がいた。

操は妙にかけより、その肩をがしつと掴む。

「妙！ 貴女が巻き込まれたと聞いて…。怪我は！？ 無事！？」

「落ち着いて下さいお姉さま。私は無事です」

「お妙さんは、新たな被害が出るのを食い止めてくれたんですよ」

そろそろとお邪魔した山崎が教えてくれる。

妙はとなりにいるこの女性が、無理やり車に乗せられようとしているのを見て助けてくれたらしい。

しかも犯人を一人捕まえたというのだ。これは表彰ものだ。

「そうだったの…」

ほっと安堵の息をつき、被害者である女性に視線を向ける。

操はこの女性に、見覚えがあった。

「貴女、里美水蓮さんね」  
さとみすいれん

18人目の被害者、里美朱蓮さとみしゅれんの双子の姉だ。

水蓮は震えながら、小さく首を縦に振る。

よほど怖かったのだろう。自身を抱く腕は、震えたままだった。

「貴女も怪我は？」

ふるふると今度は横に振るわれたものの、恐怖を思い出してしまったのかじわりと涙が浮かぶ。

大丈夫よと妙に抱かれて泣き出した水蓮に操は目を細め、入り口で恐縮していた山崎を見上げた。

「ザキ君、犯人一人捕まえたって聞いたけど」

「はい、いま尋問員が情報を聞き出していますが、何分口を割らないみたいで……」

「そう……。案内してくれる？ 二人は落ち着くまで、ここにいてください」

女性二人に声をかけ、こちらですと案内された部屋に向かう。

部屋の前では、尋問員がお手上げだというような顔をしていた。

「あつ、お疲れ様です。近藤隊長！」

「お疲れ様。何か吐いた？」

首を横に振る仕草からは、あからさまにもう限界ですという意志がにじみ出ていた。

どんなに洗練された尋問術を駆使しようと、情報は聞き出せなかったらしい。

「…私に任せてもらっていい？」

「ええっ！？ ですが…、危ないですよ」

大丈夫よと、操は山崎を見た。

「ザキ君がいてくれるわ。何かあったらお願いね」

「はいっ！」

問答無用で付き添いを強制されたにも関わらず、山崎は元気な返事

をする。

「なにかあったら俺がお護りします!」

「ありがとう。何か掴めたらすぐに調べてちょうだい」

「はい!」

そんな会話をして、二人は犯人がいる部屋へ入っていく。

「なあ、近藤隊長で大丈夫なのか…?」

「今は隊長に賭けるしか…」

そんなことを尋問員が呟き、約5分が過ぎた時…。

「ぎいやああああ!」

地獄の底から這い出るような断末魔の叫びに、全員がびくりとおののいた。

何がどうなつてんだとオドオドしていると、不意に扉が開いて不機嫌極まりない操が出てきた。

ついて出てきた山崎に、操は冷静に言い放つ。

「ザキ君、下調べお願い。私は吉原に連絡するわ」

「はいよっ！」

そのままスタスタと行ってしまう操を呆然と見やり、尋問員たちはその間抜け面のまま山崎を見た。

「吐いたんですか？」

「うん、吐いたよ。全部」

「一体何したんすか…」

是非教えて下さいと詰め寄られて、山崎は困ったように頬をかいた。

「知らないほうがいいと思うよ」

操を、恐怖の対象として見たくないのなら…。

その後、水蓮は夜道を一人で歩いていった。

近藤操という名前の女隊士は家まで送ってくれると言ってくれたが、あまり迷惑もかけられない。

双子の妹朱蓮は必ず私が助け出すからと言ってくれて、多少安心した。

だからこそ、自分にかまっているより仕事に専念してほしかった。

人通りの多いところを通れば大丈夫だろうとビクビクしながら歩いていたが、時間帯のせいなのか自宅までの一本道は人っ子一人いなかった。

やっぱり送ってもらえば良かったか、急げば大丈夫かなと恐々、早足で自宅に向かう。

「…」

その足も、だんだん駆け足になる。

足音が一つ、着いてきている。

それはどンドン、水蓮に迫る。

全速力で走っても、足音はただ大きくなるだけだ。

「いやあっ！ 誰か…っ！」

口を布で塞がれ、ぐいと引かれた。

つんとした薬の臭いが鼻をつき、意識が遠のく。

そのままどさりと地に倒れこんだ水蓮を、数人の男が取り囲んだ。

「……っ！」

どさりと畳に叩きつけられて、水蓮はズキズキする頭を押さえて上体を上げた。

周りを見回せば、見たこともないほど雅な襖張りの和室。

そして自分を取り囲む、布で口元を隠した5人の男たち。

「やっとお目覚めかい？ お嬢さん」

舌なめずりするような口調に寒気が走り、床を這うようにして後ずさる。

「あ…、貴方たちが女性失踪の犯人たちね！」

強気に聞いたが、声は震えていた。

「だとしたら？」

覗いている目が、にたりとつり上がる。完全に見下した態度だった。

「妹を…朱蓮を返して！」

「ほら、やっぱり姉妹じゃないっすか。似てると思ったんですよね」

「お前よく顔覚えるな」

水蓮の言葉を見殺して、男たちは楽しそうに談笑する。このすきに逃げられないかとあたりを探したが、感づかれた。

「止めときな。どうせ逃げられやしないさ」

「…どうする気？」

「どうするも何も、綺麗に着飾ってやるのさ。どんな女も、着飾ればこの吉原ではいい値で売れる」

うつそりと笑った一人の男に、水蓮の合点がいく。

「そうやって誘拐してきた女性たちを…妹を売り飛ばしたのね！」

「そういうことさ。さあ、おしゃべりは終わりだ。脱がせろ」

男たちが近付き、腕を押さえ込まれる。

恐怖に背が震え、水蓮は叫んでいた。

「いやあっ！ 離して！」

帯に手をかけられ、水蓮はなお叫び、身をよじった。

「誰か！ 助け…！」

バンッ！

瞬間に襖が室内へ倒れこみ、水蓮の着物の帯を外そうとしていた男を押しつぶした。

「…」

暴れていた水蓮も、水蓮を押さえつけていた男たちの動きも止まった。

呆然と、襖を蹴破った女を見つめる。

「あゝら失礼。まさか潰しちゃうとは思わなかったわ」

飄々と言つてのける操の後ろには、彼女と種類の違う黒い制服を着た男が5人。

誰もかしこも、腰に刀をさしていた。

「き、貴様！ 真撰組の近藤操！？」

一人の男が叫ぶ。操は表情ひとつかえなかった。

「みんな大人しくお縄についてもらっわ。それから、その娘こから汚い手を放しなさい」

低く呟いた操の目が、すうつと細まった。

「それがレディに対する態度？」

続く

## 天女狂舞

(中) (後書き)

ちなみに最後の操の言葉、「それがレディに対する態度？」は、「バイオハザード4 アフターライフ」の主人公アリスの言葉です。もとも大好きなシリーズだったんですが、劇場で聞いて惚れてしまいました。(＊ ＊) 私が「戦う女性」好きになった原点かもしれません。(↑どうでもいい…)

## 天女狂舞

(下) (前書き)

「天女狂舞」最終話です。

もう少し月詠さんを活躍させたかったなあ…

そういえばいま銀魂の第3回人気投票が開催中なんですよね！ (

\*^|^\*^ さて困った誰に入れよう…。

## 天女狂舞

(下)

男たちがざわめいた。何故、真撰組が吉原にいるのか…。

「…やはり高田が…」

一人が、先日捕らえられた仲間の名前を口にする。操はそういつことよと頷いた。

「あなた達のお仲間が全部教えてくれたわ。捕まったらどんな拷問を受けたって口を割らないように訓練してたみたいだけど、甘い甘い」

につこり笑いながら、操はわきわきと手を開いたり握ったり…。

にじみ出るオーラが恐ろしくて、男たちが息を呑んだ。

「…隊長、ホントに奴に何をしたんですか…」

「企業秘密」

とびきりの笑みを浮かべてから、操はすぐにそれを打ち消した。

「まあと言っわけだから。…さっさとその汚い手を離せ」

地を這うような低い声にがらりと変わった操に、布から覗いている男たちの目元が引きつる。

「お前ら！ 奴らを止める！」

リーダー格なのか、水蓮の腕を掴んでいた男が叫んだ。そのまま、水蓮の腕をぐいと引く。

「来い！」

「きゃっ！」

水蓮が部屋の外へ連れ出されたと同時に、残りの男たちが9番隊に刀を向けた。

「隊長は彼女を追って下さい！」

「ありがとう、そうするわ!」

奇声を上げてかかってくる男共を隊士たちが止め、操はその間をすり抜ける。

水蓮を助け出すのはもちろんのことだが、操は水蓮を連れ去ったあの男にも、用があった。

転がるように階段を降り外へ飛び出した男は、そのまま水蓮を引きずるように吉原を南に逃げた。

操も建物を飛び出し、全力で後を追う。

「操!」

はっと気付けば、真横を月詠が走っていた。

「ここから先は道が入り組んである。路地に逃げ込まれたら厄介じゃ…。わっちが先へ行って足止めしよう」

「そんなの出来るの…！」

走りながらも驚いた表情でそう問うと、月詠は美しい極上の笑みを浮かべた。

「吉原自警団、百華の頭領死神太夫をナメたらいかんぞ」

瞬間、月詠は軽々と立ち並ぶ店の屋根へ飛び乗り、凹凸の激しい屋根を平面を走るように進む。

重力などまるで無視の跳躍力に、操は驚いて足を止めかけた。

「すいっ…」

「操！　主が追っていた悪人じゃ。殺さぬほうが良からう！」

「ええ！ 女の子だけ助けられればそれでいい！ 4分の3殺しでお願い！」

ほとんど死んでおると苦笑し、月詠はスピードを上げた。

地上よりも屋根の上が走りやすいのだろうか、あっと言う間に二人との距離をつめる。

操は足を止めなかったものの、キラキラと目を輝かせて呟いた。

「かつこいゝい！」

水蓮を引きずるようにして駆けていた男は、目の前にずくりとクナイが突き刺さって慌てて足を止めた。

見上げれば、目の前の屋根の上に金髪の美女がいる。

その手には、地に刺さるものと同じ、クナイ…。

「待ちなんし。この吉原で騒ぎを起こして、無事に帰れるとも思  
うたか？」

男が逃げずに動きを止めてしまったのは、その美しい笑みを見てし  
まった故だったのか…。

「逃げなくてもいいじゃない」

呆然としていた男は、後ろから響いたハスキーな声に我に返り、水  
蓮をぐいと引き寄せた。

「きゃっ!？」

悲鳴を上げる水蓮の首に短刀を突きつけ、自分から十数歩しか離れ  
ていない操を操を睨みつける。

「止まれ！ この女がどうなってもいいのか！」

操はその場で足を止めた。それを確認しても、男はまだ水蓮を解放

しない。

「脇に退け。道を譲れ！」

この命令には、操は従わなかった。

目を細め、僅かに首を傾げる。

「そんな喋り方も出来るんですね。…その邪魔な布を外したらいいかがです？」

先ほどとは打って変わった丁寧な口調に、男は自分の正体がバレているのを知った。

観念して、口元を隠す布を取り払う。

下に隠れていた顔は、警察庁長官の一人…。

那須孫左衛門のそれだった。

「いつから俺の正体に気付いた」

「お仲間が教えてくれただけです。信じられませんでした。真撰組の優秀な監察方が調べてくれたことで今回の事件の首謀者が貴方だと分かりました。…こんなにも早く接触出来たのも、彼女が勇気をだして囹を買って出て、わざと捕まってくれたおかげです」

那須は自身が捕らえている女を見下ろした。

狙った獲物は逃がさないがモットーだったが、失敗だったようだ。

「さ、彼女を離して下さいまし」

「それは出来ないな。もはや女を売り飛ばして金を得ることは出来ないが、この女を連れて逃げることは出来る…。さあ、そこをどけ！」

喉元に短刀を突きつけられて、また水蓮の喉がひつと音を立てる。

操は目を細めた。

「分かりませんわね孫左様。いいえ、那須孫左衛門。何故そんなことを」

「女なんてなあ！ 家の奥で男のために働いてればいいのさ！ 全ての女は男のために存在するんだ！」

操の眉間に皺が寄る。那須は構わずに続けた。

「お前は目障りだったよ近藤。女の身で刀など持ちやがって、本当はお前を真っ先に売り飛ばしてやりたかった。女にしてはなかなかの上玉、きつと高く売れたろうよ！」

「…女が刀を持つてはいけない？ 随分女を馬鹿にしているけど、男より女のほうが気高く、そして強いのだよ」

瞬間、那須は後方から強烈な殺気が降ってくるのに気づいた。

慌てて振り向いて見上げれば、高い屋根から高く跳躍した美しき死神がいた。

「……！」

操がくつと唇を上げる。空中の死に神は、目にも止まらぬ早さで腿に固定したホルスターからクナイを引き抜いた。

「自己紹介がまだでやんした。吉原自衛団百華が頭領、月詠でありんす」

「水蓮ちゃん！ こっちへ！」

月詠に気を取られた那須の隙について、水蓮が那須から逃げ出した。水蓮が操の腕に飛び込んだのを見届け、月詠は安心して笑みを浮かべた。

これで、「容赦」をしなくて済む。

「以後よしなに」

那須の足元にカッ！ とクナイが刺さったのを皮切りに、那須の上空にクナイが雨のように降り注ぐ。

「ひいひいっ！」

月詠が小さな音を立てて地上に降り立った時には、那須は地に突き刺さるクナイの真ん中で頭を抱えてへたり込んでいた。

水蓮を背後に庇っていた操は、思わずひゅうつと口笛を吹いた。

「やっぱり素敵」

恐る恐る頭を上げた那須は、一歩間違えば自分が串刺しにされていた事实に気付いてまたひいっと悲鳴を上げた。

そんな那須に、操は一歩近づく。

「さあ、大人しくお縄につくのね。どうせ元の地位にも戻れないんだから」

手錠を指先でくるくる回し、操是那須の間合いに入った。那須はそれを待っていた。

「くそっ！ お前だけは！」

突き刺さっていたクナイの山から一本を引き抜き、操へ突き出した。

「操！」

「操さん！」

月詠と水蓮の悲鳴のような声が飛ぶ。

瞬間に月詠から放たれたクナイが那須の手に突き刺さり、那須が小さな呻きを上げてクナイを取り落とす。

操は慌てず、腰にさしていた刀を引き抜いた。

「貴方を慕っていた自分が、バカに思えるわ」

武器を無くした那須の懷に踊り込み、刀を振り上げる。

ドッ！

振り下ろされた刀が鈍い音を立て、那須がどうと床に倒れ込んだ。

そのまま苦しそうに、操を見上げる。

「お前みたいなのがいるから…、世の中退屈なんだよ…」

「あんたみたいなのがいるから、世の中変わらないのよ」

一度空気の漏れたような音を発した後、那須は目を閉じて動かなくなつた。

月詠が那須を見下ろしながら、操へ歩み寄る。

「ありがとう月詠。助かったわ」

「いや…。斬つたのか？」

「いいえ、峰打ち。こんな奴斬る価値もないわ」

刀をしまって手錠をかけるためにしゃがみこんだ操を一瞥してから、月詠は水蓮に視線を向けた。

「あの建物に戻りなんし。ぬしの妹が来ておる」

水蓮ははっとして、操に目をやった。操が行きなさいと意味を込めて頷けば、水蓮ははやる気持ちを抑えるように踵を返して走っていく。

月詠と操は顔を見合わせて、微笑ましそくに笑った。

「水蓮――！」

「朱蓮！ ああよかった！」

あの建物に戻ると、二十数名の女たちがいた。

その中には水蓮の双子のいもつと朱蓮もあり、同じ顔が手を取り合

い同じ表情で笑う。

「隊長！ 江戸から消えた女性18人及び、江戸以外からも誘拐され売られたと証言した女性5人が集まっています。百華の女性たちがつれてきてくれました！」

「ええ、お疲れさま。…随分コテンパンにのしたのね…」

部屋の隅っこで、縄でぐるぐる巻きにされている男たちを見やる。

誰もかれも目を回して、頭には盛大なたんこぶをいくつも作っていた。

「八つ当たりしました」

「はあ…」

操が不思議そうな顔をしたと同時に、水蓮朱蓮の双子が揃って頭を下げた。

「本当にありがとうございました！ なんとお礼を言ったらいいか…」

「いいえ、私たちだけの力じゃなにも出来なかった。お礼なら、彼女に」

操が向いた先には、優雅に煙管をふかす月詠の姿。

「わっちは何もしとらんわ」

「またまたあゝ」

「しかし、双子だけあって本当にそっくりなんですね！」

しげしげと双子を見やっていた9番隊佐伯が、物珍しそうに言った。

「妹さんが無事でよかったですね、水蓮さん」

「違うぞ佐伯、そっちは朱蓮さんだ」

そんな光景を、月詠と操は優しい笑顔を浮かべて見守っていた。

こうして事件は、幕を下ろしたのだった。

「無意識にこいつだけはある得ねえと決めつけてたわ…、あのボケ那須がなあ…」

「あの天然が全て演技だったとすると、相当用意周到だったのでしょう…。屯所内でも波紋が広がってますわ」

数日後、解決報告のために警察庁を訪れたものの、幕吏から犯罪者が出たとあってどこもかしこもてんやわんやだった。

ただこの松平の長官室だけは、二人きりとあって静かなものだった。

「まあ何にせよ、事件が解決してよかったなあ…。どうだい操ちゃん、事件解決祝いに、今夜」

そう言って、松平はカップを傾ける仕草をする。

「嬉しい申し出ですけど、これから行かなくてはいけないところがあります」

「ありゃ、どこだい？」

ふられちまったなと、松平は問いかける。

操は唇を釣り上げた。

「吉原です」

「こんばんは」

その後、操が9番隊の隊士5人を従えてやってきたのは、吉原の日輪の店、「ひのや」。

店先に出ていた日輪があらと笑顔を見せ、そのわきから八つほどの少年が顔をのぞかせる。

「あら、近藤さん」

「忙しいところすみません。先日のお礼にと参りました。月詠はいらっしゃいますか？」

「まあまあ、ご丁寧に。晴太、月詠を呼んできてくれるかい？」

晴太と呼ばれた少年がはいと元気よく返事をして、中へかけていく。

「可愛いだろ。晴太ってんだ、私らの子どもさ」

「ええ、無邪気で可愛い」

私ら（・）という複数形に疑問をもちつつ、操は笑う。

「良かったねえ、事件解決して」

「はい、吉原の皆さんのお陰です！」

日輪がにっこり笑い、操の後ろにいた周防が脱力しながら口を開いた。

「本当ですよ。女性ばかり被害者で操隊長がピリピリしちゃって、お陰でこっちは胃がキリキリキリ……」

「お前、犯人たちに一番八つ当たりしてたもんな！ お前らのせいで操隊長が怖いんだって！」

桐生が笑い、操は笑って目を細める。

「すお〜う。あとで覚えてらっしゃい」

「え〜、そんなあ」

周防がぼやいたと同時に、奥から晴太に手を引かれた月詠が姿を現した。

「母ちゃん、月詠姉連れてきた！」

「ああ、ありがとうね」

操と目がい、月詠の唇がつり上がる。

「やあ、来たのか」

「お礼に来たの。お世話になったから」

甲高い悲鳴が上がったのは、律儀じやのと月詠が笑った時だった。

「きゃあ！ 三ツ木様よ！」

「尾高様もいるわ！」

外を歩いていた遊女二人が駆け込んできて、それぞれ三ツ木と尾高の手を取った。

「三ツ木様！ 先日の御用改め見てました。とてもカッコ良かったです！」

「尾高様も素敵でしたわ！ 拳で刀に立ち向かうなんて！」

キヤアキヤアと騒ぐ二人に、三ツ木と尾高がにへらと表情を崩す。

「先日の御用改め、みんな見ててね。二人のファンクラブが出来てるよ」

笑顔の日輪の言葉に、佐伯や周防、桐生がむっとする。するとまた外から歓声が上がった。

「きゃあ本当にいる！」

「周防様！ 桐生様！ 握手して！」

「佐伯様も！」

どうやらファンクラブが出来上がっているのは彼らも同じらしい。もはやアイドルと変わらない数の女性たちに囲まれ、5人もまんざらでもない様子だ。

だらしく表情が崩壊する5人に、操はまったく…と息をつく。

「周防様！ 是非私のお店で飲んでいつて下さいまし！ もちろんお代はいりませんわ」

「ずるい！ 三ツ木様も是非お店に来て下さいな！」

「えー、参ったなあ…」

デレデレと赤面する部下たちを、操が一括する。

「ちょっと貴方たち！ 今日はお礼に来たのであつて飲みに来たんじゃ…！」

「まあまあ、折角じゃ。ぬしも飲んでいけ」

「えー、でも…」

「なんじゃ」

月詠がずいと顔を操に寄せる。綺麗な顔が間近にあつて、操は息を

飲んだ。

「わっちの注いだ酒は飲めんのか」

「そ、そういうわけじゃあ……」

「いいじゃないですか隊長！」

「そうですよ折角だし、ね！？」

「何が、ね！　なのよう！」

しょうがないなあと操は息をつき、月詠に頭を下げた。

「じゃあ、ご馳走になります」

「ん」

そうしろそうしろと、月詠は嬉しそうに笑った。

吉原ほぼ全員とも言える女たちが集まって、吉原の頂点に立つ日輪も混ざって、盛大な宴が開かれた。

三ツ木たちは女性たちに囲まれて上機嫌で酒を飲み、操は酒の入って人が変わったように暴走する月詠と、女性同士の会話を楽しんだ。

事件を解決したことや、部下たちの楽しそうな表情を見られたこともあって微笑ましく酒を飲んだ操だったが…、

一番嬉しかったのは、日輪や月詠という素敵な女友達が出来たことだった。

その夜。

日付が変わろうとする時間、就寝の準備をして手洗いから出てきた近藤は、三ツ木、佐伯二人の首根っこを引っ付かんでずるずると引きずっていく姉を見て目を丸くした。

その後ろには尾高、周防に肩をかした原田と、桐生に肩を貸した山崎がいた。

操の部下たちは全員酔っ払っているのか、寝ているようだ。

「……どつたのみたい姉……」

「ああ勲、ただいま。みんなが酔っ払っちゃったのよ、二人に運んでもらってるの」

原田と山崎が苦笑しながら見せてくれた彼女の部下たちは、酔いすぎでぐるぐると目を回している状態だ。

「……お礼しに行ったんじゃない……」

「そうなのよ！ 私もうみんなとは吉原行かない！ 私一人で行っ

てお酒飲むわ！」

ほらしっかり歩いてと部下二人を引きずりながら、操は彼らの部屋へ歩いていく。

「いつものみい姉さんに戻ってよかったツスね、局長」

そういう原田は、苦笑を隠せない。

最近は部下がどんなにドジを踏もうと、ただ目をすがめるだけでも言おうとしなかった彼女が…。

いつもの世話焼きに戻っている。また彼女のおせっかいとも言える声が屯所内に響く。

「みい姉は真撰組の母じゃなきゃな」

「俺も酔ったらあんな風にお世話してくれますかね」

山崎が、そう言って笑った時だった。

「あーもう！ 貴方たちいい加減になさい！」

一拍後、イテッ！ という男の声。

「…ちょっと乱暴だけだな…」

原田がぼそりと呟いた。

男のほうが強いなど誰が決めた？

女は弱いなど誰が言った？

いつの時代もいつの世も、

女は気高く美しい。

終

## 天女狂舞

(下) (後書き)

偶然なのかなんと今日は月詠さんのお誕生日！ 月詠さんおめでとう！ そしてあまり活躍させてあげられなくてごめんなさい…。

そしてネタを下さった烈火竜さん！ 本当にありがとうございました。お陰でとても楽しみながら書けました。また機会があればネタ下さい。 > (――) < ↑とことんがめつい奴。

## バレンタイン

操編（前書き）

いま「より魂」で放映中の柳生編！ 私も大好きなお話です！ 戦う女性大好き！、（ ）ノ

ということ、九ちゃんと東条さんの登場です。（↑これ決してダジャレではない…）

まあ、なんて言うのか久しぶりに操を誰かと戦わせたかったという…。

## バレンタイン

### 操編

「ミルクチョコと、ホワイトチョコと…。あとアザラン！」

肌寒い二月の十三日、喜々としてチョコレートを買う操の姿があった。

翌日。

「腹減ったー。おばちゃん、B定食よろしくー」

「俺もー」

「はいはい」

ぐだぐだと寝惚け眼で食堂に姿を見せた隊士たちを軽くあしらい、食堂もおばちゃん達は支度に取りかかる。

「ああ、そうだ。名前教えな」

「は？　なんで？」

「操ちゃんからのプレゼント預かってるからね」

顔を見合わせて、とりあえず名前を口にする。

はいよと目の前に置かれたのは、星形のチョコレート。

「今日はバレンタインだろう？　操ちゃん、隊士全員分の作って、あたしらにも作ってくれてねえ。美味しかったよ」

普段はもてない隊士たちが、飛び上がって喜んだのは言うまでもない。

「旦那と、神楽ちゃんと、新八君と、松光殿…」

チョコを入れた袋をさげ、指を折りながら町中を進む。もともと料理は好きなので、ありったけ作ってしまった。先程お妙に持っていたばかりだが、飛び上がって喜んでくれると本当に嬉しい。

「ふふつ。旦那喜んでくれるかしら」

「まさかあんなに喜ばれるとは…」

彼のことだから喜んでくれるだろうとは思っていたが、まさか涙流して拜まれるとは思わなかった。神楽も新八も喜んでいたし、松光は松光でお礼にとばかりに手作りだというマフィンをご馳走してくれた。

バレンタインは世話になった人に感謝を込めて菓子を作るというのが、彼の定義らしい。

それにしても、松光のマフィンは美味しかった。

「さて、あとは」

もう一人、渡さなくてはいけない人間がいる。

階段を昇ると、威勢のいい声が響いていた。相変わらずやってるなあと、思いながら、ふいに出てきた門下生であるう男に声をかける。

「こんにちは」

気付いた男は隊服姿の操にぎょつとして、慌てて中に引っ込んでしまった。

「…なによ。失礼ね」

ただでさえ隊服は目立つ。そしてにじみ出る威厳と、権力。

「怖いのは分かるけど、そうあからさまに逃げなくてもいいじゃない」

さてどうしたものかと、首を傾げたとき。

「ようこそ。近藤操殿」

道場から姿を現したのは九兵衛の世話役、東城歩。

「こんにちは、東城さん。九はいらっしゃ」

「いません」

「私最後まで言ってますんですけど」

「いないっいたらいないんです。分かったらさっさと帰ってください」

虫でも追いつくように、しっしつと手を振る東城。操も流石に力チンとくる。

「随分な扱いですわね。なにかお気に障るようなことしましたかしら」

「別になにもしていませんよ。別に……」

そこまで言って、東城はくわつと目を見開いた。

「若がことあらば妙殿と貴女の話ばかりしてて羨ましいなあコノヤローとか、若は私のものだぞコラ！　なんてこれっぽっちも思っちゃいませんからー！」

「思い切り口に出てますけど。相変わらず九命なんですね。いい加減にしないと嫌われてしまいますわよ」

「大丈夫です！　若に限ってそんなことはありません！」

「どこからそんな自信がくるのか教えて貰いたいものですわね」

ちゃきつと、東城はおもむろに刀を抜いた。

「これ以上貴女を近づけては若が私から離れます」

「九のためじゃなくて己のためですか」

「なので、もう若に会うのはお止め下さい」

「人の話聞け」

珍しく思い切りつつこんだとき、東城の近くで爆発が起きた。土煙が舞う中、目を瞬かせていた操が爆発の原因を知るのは数秒後のこと。

「ねえ様！」

バズーカ砲を抱えた九兵衛が、操に駆け寄った。

「九！ 会いたかったわ！ 相変わらず勇ましい姿なこと」

妙に紹介してもらった、弟のような妹分…。

「大丈夫ですか？ あいつに何かされていませんか？」

「大丈夫よ。何もされてないわ」

にっこりと笑い、下げていた袋を漁る。

「今日はバレンタインデーでしょう？ だから貴女に届けにきたの」

九兵衛の顔がぱあつと輝いた。

「わあっ！ いいんで…」

「若ーっ！ そんなもの貰って餌付けされてはいけませぬぞ！」

手渡そうとした瞬間、怒鳴り声が聞こえた。

「バレンタインなどにかこつけて、なにをしでかすか分かりませぬぞー！」

「東城！ それ以上ねえ様を侮辱するな！」

厳しく言われても、東城は引かなかった。

「若がなんと言おうと私は許しませんよ！ さあ若、早く中へ」

興奮していたのか、東城はなんの躊躇いなく九兵衛の肩に手をおいてしまった。

「うがあああ！」

もちろん東城は容赦なく吹っ飛ばされる。激しく土煙が舞った。

「バカなの？ あの人はもしかしてバカなの？」

「もしかしなくてもバカです」

冷たく、九兵衛が言っただけ。

「もう分かり申した！」

がばつと立ち上がった東城は、鼻血を出していた。

「この東城歩、若の御身を護るが生涯の務め！ 近藤操殿、私と勝負しなさい！」

「「はあ？」」

操と九兵衛から、まぬけな声が漏れる。

「貴女は若とふれ合うに相応しくない！ 私に勝てなかったら二度と若の前に現れるでないわ！」

「ふざけるな東城！ ねえ様の何処が相応しくないと言っただ！」

「そやつがいたら若の心は私から離れます！」

「バカだ。お前はバカだ」

冷たく言い放つ九兵衛。操は肩で大きなため息をついて、笑った。

「いいわ。受けてたちましょう」

「ね、ねえ様！」

「九に会ったび邪魔されちゃたまらないし、それに……」

操はにたりと、不屈な笑みを東城に向ける。

「一度どちらが強いかはつきりさせるのも、悪くはないでしょう」

その朱唇を吊り上げる。

「ねえ？」

九兵衛はおろおろと二人を見比べたが、二人の間の火花はおさまらない。

「私が勝ったら、二度と若に近づかないで下さい」

「いいでしょう。じゃあ…九。私が勝つたらどうする？」

聞かれて、九兵衛は戸惑ったあと…。

「ねえ様が勝つたら…。東城、お前二度と僕に近寄るな」

東城は一瞬とてつもなく重いもので殴られたような顔をして、それでも平静を保った。

「わ、分かりました…。いいでしょう。そんなもの、私が勝てばいいだけのこと…」

くるりと背を向け、東城は中に入っていく。

「ねえ様、あんなこと言ってしまったけれど、大丈夫ですか？ あれでも東城は柳生四天王の一人です」

「心配しないで。剣術には自信がある…。それに」

操は九兵衛の耳に口を寄せ、何事か囁いた。九兵衛が、何かに気付く。

「私は彼より強いのだよ」

操ははっきりと、言っていた。

「勝敗は一本勝負。異存はありませんね」

「ええ。ないわ」

急遽道場を貸してもらい、借りた木刀を持って向かい合う。道場の端には先程まで修行を続けていた門下生が、ずらりと並んでいる。

あの東城さんに挑もうたあ、真撰組もバカだなあ。

柳生四天王の一人に敵うわけじゃないか。

あちらこちらから、こそこそと囁きが聞こえる。ぴしぴしと、操の額に血管が浮いた。

「柳生四天王ねえ。貴方、筆頭ですって？」

「そうですが、それがなにか？」

「いいえ」

操は木刀を下ろしたまま、手で口を隠し、優雅に笑ってみせた。

「その筆頭が、うちの勲に負けたんですってね」

はっと東城が顔を上げる。そう、彼は一度、近藤に一撃で負けたことがある。

「確かに近藤勲殿には負け申した。それが、貴方とどう関係が？」

「あら、大ありよ。私は勲の姉なんだもの。貴方が柳生四天王の一人ならば、私は真撰組四天王の一人。同じ四天王の一人である勲に倒せたのに、私に倒せないわけないでしょう？」

道場内がざわりとざわめいた。この状況で、彼女は東城を挑発しているのだ。

「…随分な自信ですね」

「そう？ これでも緊張してるのよ。万が一貴方に負けたら、九に逢えなくなっちゃうもの」

きり…と東城は唇を噛んだ。それは、東城自身も同じだからだ。

「先に言っておきます。私は負けません」

「先に言っておくわ。女をなめんじゃないわよ」

二人して構える。

「始め！」

合図で、二人ともかけだした。

「破あああつ！」

木刀を振り上げる東城。操は避けるため、ふっと左へ反れた。

（バカめ、避けられることなど見越してのこと！）

振り下ろした刀を、そのまま操へ。

（終わりだ！）

操に届くはずだった木刀は、しかし彼女が逆手に持った木刀で止められた。

「！」

「だから言ったでしょう？」

まるで恋人を相手にしているかのように優しく囁く。そして懷に躍り込んだ。

「女をなめんじゃないわよって」

くらいかけた一撃を、東城はとっさのバックステップでよけた。体勢を立て直し、妖艶に笑う操と対峙する。

「…少し貴女を甘く見ていましたか」

「それはどうも」

「もう、手加減はしませんよ」

「しなくていいわ。私もしないから」

腰をおとした操の目は、

間違いなく本気だった。

「ごめんなさい、ねえ様。東城が迷惑をかけて…」

「いいのよ。私も久々に本気で戦えた。真撰組内じゃ本気で戦ってくれる人なんていないのよ」

結局操が勝利し、昏倒している東城をおいて外にでた。九兵衛は申し訳なさそうに、肩を竦めている。

「本当はね。勝てるか自信なかったのよ。いくら勲が一度倒した人だからって、私にも倒せるかなんて分からない。だから、ちょっとした賭だった」

「…どうして」

「だって、大好きな貴女にいつだって会いたいもの。認めてほしいと思うじゃない」

ね？ と可愛らしく首を傾げる操に、九兵衛は敵わないなあと肩を竦めた。

「はい。今度はちゃんと渡せるわね」

差し出したチョコレートの箱を、九兵衛は嬉しそうに受け取った。

「ありがとう。ねえ様」

「どういたしまして。東城さんのことだけど、罰則は軽くしてあげてね。貴女がいないと死んじやいそうだから」

「はい…。あ、ねえ様。よかつたら、一緒に夕餉を…」

「ごめんなさい。うれしいけど、これから行かないといけないところがあるの。また今度誘ってね」

九兵衛は少し残念そうな顔をしたものの、笑って頷いてくれた。

「じゃあ、またね」

「はい。本当にありがとう、ねえ様」

手を振って九兵衛と別れ、待ち合わせの場所へ向かう。古びた神社の、本堂の裏。

誰も来ない、絶好の逢瀬の場。

「小太郎！」

「遅いぞー」

先に来ていた桂が、おどけてみせる。数ヶ月前に、今日この場所で会おうと約束していたのだ。

「ごめんなさい。ちょっとドタバタしてて…」

「にしては嬉しそうだな」

「そう？　きつと久々に暴れたからね」

クスクス笑う操を、桂はふわりと抱きしめる。久しぶりに会う時、

彼は必ず操を抱きしめる。なんの言葉もなく、ただ、包み込むように。

「小太郎」

「ん？」

「今日は、何の日か知ってる？」

「今日？ ああ、あれだろう？ ばれんたいん、とかいう」

失礼だが、この世間外れな男はバレンタインなど知らないと思っていた。

知っていて、本当に失礼だが内心少し驚いた。

「どういつ日か知ってる」

「菓子を作る日じゃないのか？」

至極真面目に答えられて、操は思わず吹き出した。

「そうね、松光殿はそういう考えの持ち主だものね。本当はね、女の子が好きな男性にチヨコレートを渡して、想いを伝える日なのよ」

教えてやると、桂はそうだったのかというような顔をした。

「だから昔、兄さんはあんなにもチヨコレートを貰っていたのだな」

「まあ、松光殿モテたのね」

クスクス笑って、大事なことに気付く。

「貴方は？」

「ん？」

「貴方は貰った？ 女の子に」

桂は首を傾げたが、操にとっては大事なことだ。

「…もらっ たな」

「告白されたの？」

「いや、いつも世話になっているからと…。そういえばどうにもどもっていたような…」

告白したかったのよソレ…。と突っ込むのは止めておいて、操は桂から離れた。

「私も作ってきたんだけど…食べてくれる？」

「もちろんだ。操がくれたものなら俺はなんでも食うぞ！」

宣言され、操は嬉しそうにチョコを差し出した。桂が受け取り、箱を開けてみると、ハートの形をしたチョコが姿を現す。

「おお、食べていいか？」

「ええ。食べて」

桂は喜々としてチョコを手にとり、まじまじと眺める。

「すごいな……。桃の形とはまた斬新だ」

「ハート形！」

冗談だと操の額にキスを落として、桂はおもちゃを与えられた子ど  
ものような顔で一口、口に運んだ。

「む、うまい」

桂の幸せそうな顔を見ることが出来ただけで、操は嬉しかった。

「そうだ、操」

「なあに？」

返事をしたのに、桂はもくもくとチョコレートを頼張って暫く何も  
言おうとしなかった。

操は桂の言葉を、辛抱強く待った。

「その…、すまなかった」

「…何が？」

「最近俺の元気がないことを、気にかけてくれていたろう。お前にいらぬ心配をかけてしまった」

確かに最近、桂には元気がなかった。何かあったのと聞いても、何でもないと返される。

「少し、悩みがあったんだ。それももう解決した。心配かけて悪かった」

「…解決したならいいわ。良かった」

桂は笑い、チョコレートを口に運ぶ。いつもは精悍な顔が頬張ったチョコレートによって膨れ、普段の面影すらない。

美味いぞ、お前も食べてみると差し出され、お言葉に甘えてチョコレートにかじりつく。

愛する人のために作ったチヨコは、

何よりも甘くて美味しかった。

時間の許す限り一緒にいて、別れた。別れるのは嫌だったが、別れ際の桂のキスはとても甘く、まだ唇に甘さが残っているようだ。

（九にも渡せたし、小太郎にも会えたし、もう幸せ！）

笑みを浮かべたまま門をくぐり、廊下を進む。

「ただいまー、副長」

「おお、お帰り」

喫煙所にいた土方が、くわえていた煙草を下ろす。

「…なにかあったかい？」

「え？ どうして？」

「嬉しそうだぜ」

そんな顔に出てたかなと、操は顔を覆う。

「ああ。チョコ貰ったよ。美味かった。ありがとな」

「どういたしまして」

「あんなスゲーもん。どうやって作ったんだい？」

隊士全員に作ったチョコは、土方や近藤の含まれていた。きっと昼食あたりにでも、食べたのだろう。

「ふふ。企業秘密」

笑って、人差し指を口にあてる。

「隊士全員分作って、大変だったろう」

「そんなことないわ。すっごく楽しかった」

「近藤隊長！」

呼ばれて振り向けば、数人の隊士がいた。

「何？ どうしたの？」

「チョコ、ありがとうございます！ 美味しく食べさせていただきました！」

「ああ、いえいえ」

喜んでくれたのだと、嬉しくなった。

「みんな貰えた？ 女の子に」

ずうんと、空気が沈んだ。

「近藤隊長だけでした。…くれたのは…」

「あはは」

苦笑いを浮かべる操。自分が作ったチョコが、全くモテず誰一人からもチョコを貰えなかった男たちの心を支えたのだということを、たった今知ったのだ。

もしあげていなかったら、一個ももらえず、落ち込む隊士をそこら中で見ることになったろう。

「…あげてよかった」

操の呟きに、土方は小さく笑った。

年に一度のバレンタイン。貴女は誰に、渡しましたか？

終

## バレンタイン

### 操編（後書き）

ちなみに途中で操が口になっている「私は彼より強いだよ」の彼は近藤さんのことです。東条さんを倒したところのある近藤さんよりも強い操は、東条さんを倒せる自信があつた…というわけです。ゝ（・  
-・\*）

柳生四天王で思い出したんですが、私自分の話で近藤さん、土方さん、総悟君、操の4人を「真撰組の四天王」と称していたのをすっかり忘れていました。第11部の「理解」以来です。それ以来一度も書いてなかったという…。（・・・；）

そういえば、操話を読んで下さっている男性ってどれぐらいいるんでしょうか。（・・・）皆様チョコレート貰えましたか？私の兄貴は職場で一個も貰えなかったらしく、結局貰えたと言えば妹である私たち二人からだけだったそうです。

ものっそい凹んでました。（笑）いや、笑っちゃ駄目か…。

## 復讐（前書き）

明日24日は「唯一の女隊士」誕生日です！ もう投稿を始めてから一年経つんですね。しみじみ（つA、）

珍しく近藤さんたちが武州にいたころのお話です。近藤さんたち3人を初めて下の名前で書いてみました。

## 復讐

周りは田畑だらけの小道を、男三人がテクテク進んでいた。

3人とも肩に担いだ竹刀に荷物をくくりつけ、言葉もなくもくと歩を進める。

久しぶりの出稽古。

弁当を持って別の道場と合同練習をするのはまだ10にも満たない総悟には遠足気分だったらしく、意気揚々と勲の隣を歩いている。

もちろん歩幅が違ったため、ついて行くのに必死だが…。

「そっいえばこんどーさん。みいさん、やけに機嫌が悪かったですねー」

小さな総悟がそう言い、十四郎は無意識に出かける時の操を思い出した。

用事があつて出稽古に來られなかつた操は、それでも自分たちのためにお弁当を用意してくれた。

何故か一人ずつ手渡し。

自分や前を歩く幼い少年に渡すときは笑顔だつたのに、弟に渡すときは無愛想だつた。

「ああ…、みい姉と喧嘩してな」

「へえ…、仲のいい姉弟が、喧嘩ねえ」

まるで仲むつまじい夫婦のような二人が、喧嘩なんて想像もつかない。

一体喧嘩の原因はなんだつたのだろう。

「こんどーさん。お腹すきやした」

「おおそつか、ここらで弁当にしようか」

ぐいぐいと袖を引いてきた総悟ににこにこ笑って、勲はわき道にあった木々の木陰に腰を下ろす。

十四郎もいい加減腹が空いていたので、大人しく弁当タイムに従うことにした。

「わあっ！ タコさんウィンナー！」

それぞれの好みにあわせて、操は弁当の具材を変えてくれている。

総悟が開いたお弁当箱には、ウィンナーやらハンバーグやら、子供が大好きなものばかり。

そしてマヨラーの十四郎には、十四郎が更にかけることを知ってマヨネーズに合うものを選んでくれている。

本当にありがたいものだ。

「…ん？」

弁当箱の上に、小さな紙切れ。

『トシ君へ。勲にマヨネーズを渡さないで下さい。』 操

「……？」

首を傾げていると、小さな総悟が箸を取り出しながら不思議そうに聞いた。

「そっぴゃこんどーさん。みいさんと喧嘩した理由って何だったんですかイ？」

十四郎も気になって、勲を見た。

「ああ、俺が……」

カタカタ……。

「……？」

勲が取り出した弁当箱が、何か音をたてている。

食材をぎゅっぎゅっに詰めた弁当なら、こんな音はしないはずだ。

3人して不思議そうな顔を見合わせて、勲は弁当箱をぱかっと開いた。

「…」

「…」

「…」

弁当箱には、9つの玉子が敷き詰められていた。

誰もが言葉を失い、真っ白な玉子を見下ろす。

「…これ、生卵ですかねィ…」

「いや、茹でてはあるだろう…。じゃなきゃ割れてるさ…。近藤さん、本当に喧嘩の原因は何だったんだ？」

「…卵焼き飽きたから、もう入れなくてくれって頼んだんだ。そし

たら…」

『我が儘言わないでよ！ 作るこっちの身にもなって！』

そりゃ怒りまさと、総悟が呟いた。

「弁当作るのだって楽じゃないんだから…」

近藤さんが悪いなと思っていた十四郎は、玉子に黒い染みがあるのを見つけた。

一つを手にとって見てみれば、白い玉子には黒々とした墨で、

『馬鹿』

と書かれていた。

「…」

総悟も勲もそれに気付き、玉子を手取る。

総悟のは『阿呆』、勲のは『唐変木』。

どうやら一つ一つ、筆で書いてらしい。

「ひと手間加えてよって言ったら…」

「まあ、ひと手間加えてあるな…」

「しかも塩もないんですねイ…」

箱をひっくり返しても、調味料の類は何もない。

先ほど見つけた、『マヨネーズを渡さないで』のメモのワケがよく分かった十四郎だった。

「帰ったら謝んなよ、近藤さん」

「そうする…」

少しばかり反省した勲だった。

弁当を作る者を怒らせるべからず…。

お弁当でどんな報復にあつか、分からないよ…。

終

## 復讐（後書き）

ちなみにこれは同じように「卵焼き飽きたから入れるな」と言われた我が家の弁当担当の妹が、作るこっちの身にもなれと実際に兄貴にかました報復方法です。

ほかにも日の丸弁当のみだったり、兄貴の嫌いなものフルコースだったり妹を怒らせたら弁当での仕返しが怖いです。（＾－＾；

## 忘れ雪（前書き）

「桜の如く」のお話しを書いておきながらまた雪に戻るのもどうか  
と思うんですがね、はは…。

（――…） 短いです。

## 忘れ雪

昨日から、しんしんと雪が降り続けていた。

雪を見ると、一年前のことを思い出す。

一年前、愛しい女は雪の中で自分が好きだと告白してくれた。

涙ながらに訴えてくれた彼女が、まるで昨日のようにありありと思  
い出せる。

縁側に腰掛けて、雪に埋もれて真っ白な庭を眺めていたら、ふわり  
と肩に上掛けをかけられた。

驚いて振り返れば、そこにも真っ白な…。

「エリザベス…」

『風邪をひいてしまいますよ』

エリザベスが素早く見せたプラカードには、そう書いてあった。

「すまない、少し昔を思い出してな」

『どなたか、女性ですか？』

くるりとひっくり返ったプラカード。桂は驚いて目をみはり、笑った。

「エリザベスはエスパーか」

『なんとなく思っただけですよ』

そう、操のことはこのエリザベスにも言っていない。

桂が真撰組の近藤操とつき合っているなど知ったら、エリザベスは  
どう思うだろう。

「…すまん、エリザベス」

『何がですか？』

大きな体ごと小首を傾げたエリザベスに、桂はなんでもないと返した。

相棒であるエリザベスに真実を明かさないのは心苦しい。

だが、兄以外には誰にも…。

そう、このエリザベスにも…。

伝えることは出来ないのだ。

冷たい指に息を吹きかける。

それでも濡れてしまった手は温かさなど取り戻せなくて、未だに降り続ける雪で冷えすぎて痛みさえ訴える指先を無視して、屯所の庭に降り積もった雪をすくい取った。

朝起きたら、外がやけに静かだった。

襖を開けて真っ白な庭を見て、真っ先に一年前のことを思い出した。

想うことが苦しくて、その苦しさから逃れるために彼に刀をむけて、そして想いをぶちまけた。

今までまともな恋などしたことがなかったから告白の仕方すら分からなかったけれど、桂はその想いを受け止めてくれた。

馬鹿だったと思う。

馬鹿で良かったと思う。

男性を愛しいと思う感情を、知ることが出来たから…。

「よしっ」と

柊の葉と赤い実の目をさせば、固めた雪の塊が雪兎に変身する。

池のほとりに、大きなものと小さなもの。桂と自分に見立てた、2匹の兎。

「…貴方たちは、ずっと一緒ね」

共に居られぬ自分たちのかわりに、どうか一緒にいてほしい。

雪がとけても、いつまでも。

「みいさん！ 今日鍋ですぜ！」

縁側から楽しそうな声をかけられて、操は肩に積もる雪を払ういきおいで振り返った。

「本当！？ 私味噌ちゃんがいい！」

操が縁側に駆けていってしまっても、

池のほとりにたたずむ2匹の雪兎は、お互いの存在を確かめるように寄り添っていた。

こんな日にも会えないから、

どうか貴方が、

お前が、

同じ雪を見ていますように。

終

## 忘れ雪（後書き）

エリー初登場！…遅っ。思えばエリザベスは、私の話の中では操話にしか登場させるのが難しいんですね。（松光はエリーのプラカード読めないし、姫華は滅多に江戸に降りないし…）操にエリーを会わせたらどんな展開になるのかなあ…。（↑妄想爆走中）

そうだ、姫華と言えば…。

明日3日は姫華の誕生日！なんですが、お祝いコメントで梨栖さんに言われるまですつきりさっぱり忘れていた玖月です。生みの親としてどうなの…。

（つA、）ごめんね姫華。

猫 操編（前書き）

どうでもいいことですが、私は映画に限らず黙ってテレビを見ない人がだいつ嫌いです。

兄貴は偏屈でひねくれているので、どんなテレビ番組を見ては「なんだこの女可愛くねえ」

「国会なんかどーせもう終わりだろ」

とぐちぐち文句をいいます。そりゃ私だって女の子が被害にあった事件を聞いたときは犯人に対して過激な発言をしますが、いつもいつも愚痴るのは止めてほしいんですよね、マジで…。

ま、ここで愚痴っても仕方ないんですが…。 （「」）

## 猫 操編

ふと視線を感じて、教本から顔を上げた。

操と逢瀬に使っている錆びれた神社。誰も来ないこの場所は読書にはうってつけの場所で、境内社の階段に腰掛けて読みなれたぼろぼろの教本を読みふけていた。

「なー…」

視線の持ち主は黒い長毛の猫で、極力体を小さくしてこちらを伺っていた。

「んなー」

「…どうした？」

人に慣れているのか、おずおずと近づいてくる。桂は教本を閉じて、懐にしまった。

「なにやにやあ！ なーご！ なにやにや！」

なにやら必死こいて訴えてくるが、流石に人間のままでは猫語は分からない。こんな時は、ふたたび猫になりたいなと思う。

「…腹が減っているのか？」

「なー！ なにやにやにやにや！」

「…」

目をつり上げて、怒っているのだけは分かる。どうやら腹が減っているわけではないらしい。

「すまん、猫の言葉は分かん」

「なー、にやー…」

黒猫があからさまにうなだれた。この猫は人の言葉が理解できるのだろうか。

「…お前、なんとなく操に似ているな」

「なー！ なにやご！ なにやにや」

うなだれた頭を上げ、黒猫はまた何かを伝えようとする。

「んなーあ！」

「分かって。許せ」

素直に謝罪して、黒猫をひょいと抱き上げる。

しげしげと見つめてみれば、黒猫の紫暗の瞳がこちらをじっと見ていた。

そのまま膝の上へ下ろし、毛並みを撫でてやる。

「やはり操に似ているな」

「なー」

「お前も知っているか？」

こちらを見上げてくる黒猫に問えば、「な」と返ってきた。

「お前と同じ、紫暗の瞳と黒髪を持っていてな。俺の恋人なんだ。あいつの仕事柄なかなか会えないが…」

黒猫の首筋をわしわしと掻いてやりながら、桂は寂しそうに目を細めた。

「美しく気高くて、優しい女だ。時折何故俺なんかを選んでくれたか分からなくなるが…、あいつが笑ってくれるから、俺も世界を変えようと思える。…何故俺はお前にこんなことを話しているんだろうな」

後ろ足で立たせた黒猫の前足を握って、顔を近づける。

肉球がぷにぷにと柔らかかった。

「な—」

「内緒だぞ？ 操に言っではいかんぞ」

「なっ！」

まるで返事をするかのように黒猫が一鳴き。

そのまま鼻をこすりつけてくるものだから、冷たくて笑ってしまった。

「…操に会いたいな」

前足を離せば、黒猫はちょこんとお座りしたままこちらを見上げてくる。

「時折歯止めがきかなくてな。操にもっと触れていたいだとか、キスしたいだとかもう一人の俺が暴れる。こんな欲望高い俺を、操は愛し続けてくれるかどうか…」

くしゃくしゃと頭を撫でていた黒猫が、桂の胸板に前足をおいて立ち上がった。

そしてちゅっと、桂にキスした。

キスと言っより舐めたに近いのだが…。

「…！」

桂はなにやら驚いた顔をして黒猫を見つめ、その黒猫は桂の膝の上で丸くなった、

「お前、まさか…」

「な〜あ」

野暮なことは言いつゝ無し。まるでそう言われたようで、桂は黙り込んだ。

しばらく黒猫の耳がピクピク風にそよいだ後、ずしりと膝が重くなる。

「…」

黒猫に舐められた唇に手をやって、膝の毛玉を見下ろした。

操のキスに似ていたと話したら、この黒猫はどんな反応を見せるだろう。

いや、言っても通じないのがオチかと一人で納得して…。

ポカポカと差し込んできた日だまりが暖かくて気持ちよくなってきた。

こんなところで寝ても誰も来まい。

丸まった黒猫の上にそっと手を置いて、

昼寝を決め込んだ桂は、静かに目を閉じた。

次に目を開けた時には、あたりは夕暮れになっていた。

随分寝たんだなと寝呆けた頭で、ふと膝の上が温かいことに気付く。

さっきの黒猫かと思ったが、にしては妙に重い。

自分はいま何に手をおいている？

なにやら固い、布の感触…。

そして先ほどから小さく響く気持ちよさそうな寝息…。

慌てて見下ろすと、そこには自分の膝を枕にして気持ちよさそうに眠る操の姿があった。

「○＋￥％＄／↓＃！」

つい声にならない悲鳴が漏れる。

何故操が、一体いつ…。

「操、操！」

手を乗せていた肩を揺ると、操は小さな呻きをあげてもぞもぞと身じろぎした。

そして顔を上げ、桂と目をあわせるやいなや幸せそうに笑う。

「ああ、小太郎……」

「ああ、じゃない。いつからここにいたのだ」

「いつ……？」

操は自分の手を不思議そうに見つめて、そしてがばりと起き上がったかと思うと不思議なことを言い出した。

「戻ってる！ 戻ってるわ！」

「はあ？」

嬉しそうに笑って抱きつかれたが、桂にはなにがなんだか、さっぱり分からなかった。

万が一見つかったはいけないので、境内社の中に移動した。

操は先ほどから上機嫌で、桂に寄り添ったまま離れようとしな

「しかし驚いた。一体いつからいたんだ？ 起こしてくれば良かったのに…」

「あら、私ずっといたのよ」

だからいつからだと聞くのは野暮のような気がして、桂は黙り込んだ。

「猫が…」

「なあに？」

「猫がいなかったか？ 黒い長毛の…」

操が首を傾げるので、知らないのだと判断した。

きつと操が来る前に、どこかへいつてしまったのだろう。

「なかなか懐っこい奴だな。俺に何かを伝えようとしきりに鳴いていたが…。俺には理解できなんだ」

「一生懸命伝えようとしたのに」

ぼそりとした操の呟きが聞き取れず、桂はん？ と操を見下ろした。

操は何でもないわと首を振った。

「…その黒猫がな、俺にキスしてくれたんだ。キスと言うより舐めたに近いんだが、お前の接吻と似ていたような気がして、正直驚いた」

「…え？」

「だからな。その時、こいつはお前が姿を変えて会いに来たんじゃないかと思ったんだ。…馬鹿みたいだな」

桂は肩を揺らして苦笑している。

操は何を思ったか、桂の肩に手を置き、ちゅっと触れるだけのキスをした。

先ほどの黒猫と変わらないキスに目を丸くしていると、眼前で操がにこりとした。

「似てた？」

悪戯っぽい眼差しが何を示しているのか分からなかったが、押し倒したい気持ちを必死に抑えて…。

桂は顔を近付けた。

「もう一度所望だ」

長いキスをして、

久しぶりに会った彼女は、

抱きしめた操は腕の中で小さく呟くのだ。

「貴方のキスを楽しめるのなら、やっぱり人間の姿のほうがいいわ」

終

## 猫 操編（後書き）

またまた気づきましたか？ 読書中の桂さんに何かを伝えようとしていた黒猫は猫になってしまった操です。

ネタバレ

・操、起きたら猫になってた。 ←

・パニックって屯所を飛び出しかぶき町を徘徊。

←

・神社で桂さんを発見。「私は操だ」「何故かこんな姿になった」と訴える。…けど伝わらない。

←

・桂さんが自分のことを話してくれているのを聞いて猫も悪くないと思い始める。

…というわけです。書いてて楽しかったです。（ω）

ホワイトデー

操編（前書き）

「ホワイトデー」シリーズ第二弾です。

## ホワイトデー

### 操編

「待ちなさい桂！　いつもいつもちよこまかと！」

「待てと言われて待つ馬鹿が何処にいる！」

ある晴れた日。江戸の街。

不意に見つかってしまった桂が近藤操に追いかけられるのは、もはや半月に一回の恒例となっている。

9番隊の部下二人を引き連れて、操は桂を追って屋根を渡る。

「もう！　バズーカぶっ放したい！」

「沖田隊長みたいなことしないで下さい操隊長！」

ムキになって叫んだ操に、彼女の部下である尾高が慌ててつつこむ。

「俺たちはこのまま追います！ 操隊長は地上から奴の前に回り込んで下さい！」

「ありがとう、そうするわ！」

近場の屋根から、軽い動作で地上に降りる。

その際ポケットから何かがこぼれ落ちたことに、操は気付かなかった。

「ええ！？ 見失った！？」

『すみません操隊長…。恐らくどこかに潜伏されたものと…』

レシーバーから響く申し訳なさそうな部下の声に、操は小さく息をつく。

「分かったわ…。今日はもう戻ってきなさい。いいわね」

『はい、了解です…』

レシーバーの通信が切れ、今度は安堵のため息をついた。

こうして街中で仲が悪いことを見せつけるたび、桂が街中へ顔を出すたび、操は心臓を冷たい氷の手に握りしめられるような感覚に陥る。

万が一捕まってしまったら…。

その時は操がヘマをして逃がしてしまったとか、操を人質に取ったふりをして逃げるとか色々策は用意してあるが、やはり捕まってほしくはない。

「…」

本当は、人目も気にせず共に街を歩きたい。

当然のことが、二人には許されない。

「はあ……」

もう一度、ため息をついた時だった。

ちよんちよんと肩を叩かれて振り返り、操はぎょっとして飛び上がる。

そこには、真っ白いペンギンのお化けのような、見たことのない生き物がいた。

まん丸な瞳に、黄色いくちばし。

宇宙生物だろうか、思わず絶句して一歩下がると、その不思議な生き物が右手で何かを差し出し、左手でプラカードを見せた。

『落とし物ですよ』

差し出されたそれは、桜柄のハンカチだった。

「…あつ！」

慌ててポケットを探る。

先日のホワイトデーのお返しに、桂から貰った桜柄のハンカチ。

入れておいたはずのポケットにない。

「ありがとう、気付かなかったわ」

受け取って礼を言つと、プラカードがぐるりと回って『どういたしまして』と言葉が出てきた。

どこから追いかけてきてくれたのだろう。

貰ったばかりなのに、なくさなくてよかった。

「大切なものの、本当にありがとう」

そう言うと、またプラカードがぐるりと回転する。

『どなたか、愛しい殿方からですか？』

待ていつ書いたというツツコミも忘れ、操の顔がかあつと赤くなる。

「や、あ…その…」

しどろもどろになる操の前で、もう一度プラカードが回る。

『女性をこんなにも赤面させてしまうとは、ずるい男ですね』

いつだって欲しい言葉をくれて、

こんなに素敵なプレゼントもくれて、

誰よりも何よりも愛おしい優しい男…。

「ええ、ずるい男よね」

頬を赤く染めたまま操は笑い、ハンカチを大事に懐へしまった。

「じゃあ私帰るわね。何か困り事があったらいつでも真撰組屯所へどうぞ」

操はもう一度ありがとって、背を向けた。

「さようなら、ペンギンお化けさん」

笑顔で手を振ってくるものだから、不思議な白い生き物はつられて手をふりかえして、やがてひょいと新しいプラカードを出した。

『ペンギン…?』

アジトに戻って読書をしていると、誰かが帰ってきた音がした。

ずっと背を向けていた襖が開き、桂は本を置いて振り返る。

「お帰り、エリザベス」

『ただいま帰りました。桂さん』

鮮やかな程に出されたプラカードを見て、桂はにっこり笑う。

四六時中行動を共にしているわけではないから、やはりこの相棒が無事にここへ来てくれると安心する。

「今日は遅かったな」

『ええ、途中で貴方を追いかけている近藤操を見かけましてね』

桂の肩がびくりと震える。ここで心配すべきは操との関係がエリザベスに悟られたかではない。

「やり合ったのか？」

『いえ、落とし物をしていたので、足止め代わりに届けただけです。もちろん桂さんと関係があることは悟られていませんよ』

操と自分に関係があることも悟られてはいないようだ。

桂はひとまず安堵の息をつく。

「敵である真撰組に落とし物を届けるとは、エリザベスは優しいな」

『そんなことないですよ。ただ足止めに声をかけただけです。男だらけの真撰組にいるのに、なかなか女性らしいものを持っています』

「それは、どう足掻こうが女は女だからな」

エリザベスは操を、桂を追う宿敵としか思っていない。

貶し過ぎず誉め過ぎずの発言は本当に気を使う。

『恋人がいるらしいですよ。恋人からもらったというハンカチを所持していました』

くるりとひっくり返ったプラカードに、桂の眉がぴくりとつり上がる。

「ほ、ほう……。あの男勝りに恋人が、随分物好きがいたものだ」

『桜柄のハンカチを持っていたんですよ。なんだかんだ言ってやっぱり女性なんですネ』

桜柄のハンカチ。

間違いでなければ、自分が先日贈ったものだろう。

持ち歩いてくれているのが嬉しくて、つい表情が綻ぶ。

「エリザベス、今日は幾松殿のところで蕎麦を食わんか？」

『いいですね。何かいいことでもありましたか？』

大きな体ごと首を傾げたエリザベスに、桂も倣って首を傾げる。

「何故だ？」

『桂さんが幾松さんのところで食事しようと言つ時は、たいていは良いことがあつた時ですから』

「そうか…？」

エリザベスは洞察力が強い。

いずれは操との関係も看破されてしまうかもしれない。

その時はその時か…。

バレてしまった時は、正直に話そう。

「幾松殿になら、相談も出来るしな」

呟いたら、何か言いましたかと首を傾げられた。

そうだ、幾松殿に相談してみよう。

女が誕生日に貰って嬉しいもの。

二週間後には、愛しい女の誕生日が迫ってきているのだから。

終

## ホワイトデー

### 操編（後書き）

はい、ホワイトデーっぽくないエリザベスと操の初対面話でした。操が口にした「ペンギンお化けさん」というのは、銀魂を知らなかったころの私が始めてエリーを見た時に素直に口にしてしまったことです。ペンギンっぽいですね…。（＊＾．＾＊）

2週間後は操の誕生日！ 誕生日話書けるかなあ…。（、□、）

何がほしい？（前書き）

私はラーメンも蕎麦も大好きですが、食べる時の「ずるずるずる…」  
って音が苦手です。特に仲の悪い兄貴がたてている音はもう耳障りで  
「もっと静かに食べらんないの！」  
「うつせえな！ どうやって麺を音たてないですすれってんだよ！」  
と毎回喧嘩になります。なので兄妹揃ってる時に親は麺類出してく  
れません…。（泣）

何がほしい？

ガラガラと入り口が開く音を聞いて、反射的に「いらっしやい」と口にした。

顔を上げて入り口を確認し、にっこりと笑う。

「あら、久しぶりだね」

入り口には、黒い隊服を身に付けた似ても似つかない姉弟がいた。

「こんにちは、幾松さん」

笑い返した操に、幾松は相変わらず若いなあとのんびり思う。

初めて出会った時は、この女性が自分より年上だなんて信じられなかった。

もちろん彼女の隣にいるゴリラ男の姉であるという事実も…。

「何年ぶり？ とりあえず座っておくれよ」

そう声をかければ、姉弟は目の前のカウンターに歩み寄ってきた。

「私が遠征に行つて以来だから、3年ぶりね。ラーメン下さい」

「はいよ、局長さんは？」

「俺もラーメンください！」

にかりと少年のように笑う顔は子どものようで、本当に自分より年上かと疑いたくなった。

「しかし、相変わらず綺麗だね。操姉さん」

そう言つて笑いかけたら、またまたあ…と笑い返された。

「幾松さんのほうが綺麗じゃない。本当に年とってる?」

「あはは、とりたくないけどとってるよ」

慣れた手付きで麵の湯切りをしながら、幾松は楽しそうに笑った。

「局長さんも鼻高々だろ。こんな美人なお姉さんがいて」

「そりゃあもう！ 時々っていうかいつも姉だって信じてもらえないけど、自慢の姉ですよ！」

「あら、アリガト」

近藤と操が顔を合わせて笑い、幾松は本当に仲がいいんだからと微笑んで二人の前に出来上がったばかりのラーメンを置いた。

「はいよ、ラーメンお待ちっ！」

「わあっ！ 久しぶりの幾松さんのラーメン！ いったっきまーす！」

二人して手を合わせ、姉弟は嬉しそうに箸を動かす。

一人で切り盛りしているこのラーメン屋で、こんな嬉しそうな顔を見られるのはこちらとしても嬉しい。

「んー！ やっぱり美味しい！」

ずぞぞぞと音を立てて麺をすすする近藤の隣で、操は終始笑顔のままスープを喉に流し込む。

こんな無邪気な顔した女が三十路を過ぎているのだ。

世の中おかしい…。

「そっいえば、操姉さんもうすぐ誕生日だろ？ 何がほしい？」

唐突にそう問えば、きょんとした顔が返ってきた。

「あら、幾松さんもプレゼントくれるの？ いいのよプレゼントなんて…、お祝いの言葉をもらえるだけで嬉し…」

横からの視線に耐えかね、操は黙り込んだ。

操の隣では麺をすすり途中の近藤が、麺をくわえたままじいっとこちらを見ていた。

「…ちゃんと食べなさい」

「ふあい」

素直に言うことを聞いて、近藤はずっと麺をすする。

幾松がクスクス笑った。

「その様子だと局長さん、まだ操姉さんの誕生日プレゼント決まっていななんだ」

咀嚼中の近藤が、うんうんと頷く。

ごくんと盛大に飲み込む音がした。

「何がほしいか聞いても、いつものらりくらかわされるか何でもいいつて言っんですよ!」

「本当に何でもいいんだもの。この年で貰えるだけありがたいんだから」

「それが困るんだってば」

目の前で繰り広げられるやりとりがおかしくておかしくて、幾松は苦笑を隠せない。

「男性から女性につてのは、確かに迷うよね。…あ、そう言えばあの男も迷ってたな」

「お客さん?」

操が首を傾げれば、そうさと幾松が頷く。

「時折来てくれる客なんだけどさ、聞いておくれよ。初めて会った時は困ってたみたいだからラーメン出してやったのに、蕎麦のほうが好きだとか言いやがるの！」

「まあ！ 失礼しちゃうわね」

「だろう？ まあそのあと紆余曲折あったから許してやったけどさ」

スープをすすりつつ、近藤は壁に掛けられているメニューに「そば」が加えられていることに気づく。

もしかしてその失礼な男のために増やしたのだろうか。

「そいつがさあ、ついこの間来て『女が誕生日に貰って嬉しいものは何か』って聞いてくんの。親にかと思ったら恋人にだって言うもんだからびっくりしちゃったよ」

だっていかにもって言うモテ男じゃないんだもんとカラカラ笑う幾松に、近藤は麵をすすりながら手厳しい……と思った。

「女の欲しがるものなんて人それぞれだしねえ……。アクセサリーとかどうかって薦めたら、もういくつかあげてるって」

「あら、女の子にアクセサリー渡すなんて大した男ね。宝石とか渡しちゃったのかしら」

「それはないとき。宝石なんかで飾り立てる女じゃないって豪語してた」

「へえー！ 乙女心わかってる！」

女性二人が揃ってクスクス笑う。

近藤は咀嚼を繰り返しながら不思議そうに聞いた。

「え？ 宝石駄目なの？」

「駄目ってわけじゃないけどね、宝石つけたくてもつけられない女性だっているじゃない」

「私とか、操姉さんとかさ。私が宝石のついた指輪なんてしてたら調理できないし、操姉さんも刀持つ手には邪魔だろう？」

ああそうかと、近藤は納得して頷く。

「まあそいつのカノジョが何をしてるのは聞かなかったけど、見る目はあるってことだよな」

「センスが問われるから選ぶのも大変だしねえ……。あとは消耗品とか、日常品？」

「無くなるのは悲しいけど、一生懸命選んだものならねえ」

きやあきやあと楽しそうな会話を耳を大きくして聞いていた近藤だったが、結局参考となるだけで姉の欲しいものを知ることには出来なかった。

「局長さんは操姉さんに新しい刀でも新調してあげたら？」

「あ、それいいアイデア！」

「受け取れないわよそんな高価なもの。私の相棒はこの子で充分」

そう言って操は腰の刀をぺしぺし叩く。

真撰組結成当時から操が愛用している刀。

近藤とは違って、操は今まで一度も刀を折ったことがない。

「いい考えだと思ったのに……」

「大変だね局長さん。局長さんから贈られたものなら操姉さん何でも喜んでくれるって」

そこまで言って、幾松は大事なことを思い出す。

「操姉さん、私からも何か贈らせとくれよ」

「いいいったらもう……」

苦笑して歯を見せてから、操は考え直した。

「……じゃあ、この美味しいラーメン奢って」

予期せぬ申し出にぱかんとして、幾松はクスクス笑う。

「そんなんでいいのかい？ 操姉さん」

「だって美味しいもの」

適わないなあと呟いて、幾松は菜箸を手にとった。

分厚く切っていたチャーシューを数枚はさんで、操のどんぶりの中へ。

「はい、チャーシューもプレゼント。誕生日おめでとう、操姉さん」

「きゃあ！ ありがとう幾松さん！」

「あ、俺にも…」

「局長さんはプラス50円だよ」

満面の笑顔で言われ、ですよねえ…と近藤は肩を落とした。

「その男の人、結局なにをあげるのかしらね」

分厚いチャーシューを嬉しそうに頬張りながら、操は何気なく口にする。

「さあねえ……。局長さんはどうするんだい？」

近藤はお茶をぐびぐび飲み干して、ムキになって姉を見た。

「だからみい姉は何がほしいのさあ！」

「なんでもいって言うてるでしょ！　そんなに言うなら30日は  
1日一緒にデートしてよ」

「あ、それいいかも…」

二人のやりとりに、幾松が耐えきれずに笑った。

終

何がほしい？（後書き）

そついや幾松さんっていくつなんだろうなあ……。 （^| ^ ;） 個  
人的に桂さんたちよりちょっと上希望なんです……。 個

## 嬉しいこと（前書き）

速報！ 梨栖さんが操の誕生日お祝いコラボ話を、3話も書いて下さいました！ 操は幸せ者やなあ…。（つA、） ↑嬉しい泣き。私のワガママで全部投稿して下さったので、皆さんそちらも読んでみて下さいねっ！ どれも素敵なお話ですから！  
それでは、

「操の誕生日話だけど何故かメインは近藤さんという不思議なお話」  
をお楽しみ下さい。m（――）m

嬉しいこと

昼、屯所の廊下を巡回帰りな2人の隊士がテクテク歩いていた。

ポカポカと暖かく差し込む日差しに、これから仕事の操が気持ち良さそうにぐいっと伸びをする。

「最近やっと春って感じね」

「そうだな、温かすぎて眠くなっちゃうよ」

操の隣を歩いていた、10番隊隊長の原田が同意する。

原田は大きなマスクをしていて、時折そのマスクの下でスン…と鼻をすすっていた。

「でも花粉がなあ…。へつくしいー!」

「原田君、花粉症だものね…」

盛大なくしゃみに操が苦笑する。

花粉症の辛さは当人にしか分からない。

分かってもらえないから、なおさら辛い。

「任務中にくしゃみ連発したら嫌だなあ……」

「あはは、原田君なら大丈夫よ」

原田の言葉に口元に手をやってくすぐす笑っていた操は、唐突に顔を歪める。

「いつ……」

血こそ出ていないものの、操の左薬指の第二関節がぱっくりと割れていた。

それ以外にも、今にも切れてしまいそうな裂け目がいくつもある。

「あ、大丈夫かい？」

操の手を覗き込み、原田が心配そうに言う。

「暖かいけど、手が荒れるのよね…」

空気が乾燥しているだけでなく、水仕事や刀を握って血まみれになったりとなにかと仕事で手を駆使する。

荒れるのも致し方がない。

「そうかあ？　綺麗な手だと思うけどなあ。俺の手のほうがボロボロでヒデエゼ？」

ほらと原田が手を見せると、操は覗き込んで、そうかしらとその手を取った。

「働きの素敵な手だと思うけど…」

そうかいと嬉しそうに笑った原田は、しかし操の後方、廊下の角からものすごい形相でこちらを睨みつけてくる部下や数人の隊士にぎよっと肩をすくめた。

「何さりげなく近藤隊長に触ってもらってんですか…！」

ぱくぱくと動いた部下たちの口はそうつぶんでいた。

操は存在を知らない「操ファンクラブ」。

抜け駆けは会員であろうがなかるうが禁止事項…。

ちなみに原田は会員の一人。

あとで殺されそうだなと口元をひくつかせて、しかし折角二人きりになったこのチャンスを逃すわけにはいかないと操の手を握る。

「みい姉さん、今日は姉さんの…。」

遠くから、何か聞こえ始めたのはその時。

「…い…え…！ …ねーえ！」

何事かと二人で顔を上げた先、廊下の向こうから近藤がウハウハと

駆け寄ってくるのが見えた。

しかしその頭からは血が流れ、顔面は真っ赤だ。

「みい姉、みい姉！ 聞いてー！」

異様な姿で駆け寄ってくる弟に、操はつい悲鳴を上げたのだった。

「っ…きゃあああ！」

ガッ！

「おぶおー！」

ついでドガシャンと大きな音。

副長室で仕事をしていた土方、その後ろでサボって寝転がっていた沖田は二人して顔を見合わせ、何事かと部屋を出た。

「おい、なんの騒ぎだ」

「あ、副長…。いや、実は…」

しどろもどろになる原田の隣で、操が手の甲をさすっていた。

「勲が顔面血まみれにして突っ込んでくるものだから、つい驚いて…」

操は控え気味に肩をすくめて、庭を指差した。

「裏拳でぶっ飛ばしちゃった…」

「…」

庭にある小さな池にはまるで「犬神家の一族」よろしく、波立つ水面から突き出した近藤の足があった。

「なんでいきなり裏拳かまされないといけないのさあ……」

「お黙んなさい。いきなりゴリラ顔の貴方が顔面血まみれにして突進してきたら誰でも驚くでしょう」

部屋に戻って手当てを施す近藤に、操はぴしゃりと言つてのける。

ヒデエなあもう……、と愚痴っていた近藤は、それでも大人しく額の傷の手当てを受けていた。

「で、何があったの？ あんなに嬉しそうに帰ってきて」

「そうだ、聞いて聞いて！」

よいことでもあった子供のようにはぐはぐと腕を振るものだから、操は手当てに苦戦して怒鳴りつけた。

「聞くから大人しくしなさい！」

近藤の話によると、お昼からの巡回に出ていた彼は街中で愛しい志村妙を見かけて声をかけたそうだった。

以前姉に諭された「美人な女性には大事に丁寧に接すること」を守り、突撃することなくただ声をかけるだけにしたらしい。

「あら近藤さん、ちょうど良かった。買い物に付き合ってもらえませんか？」

妙にそう言われて、近藤はデートのお誘いのようだと感極まった。

妙が近藤を連れ込んだのは大江戸スーパーで、もちろんデートなんてもものではなく…。

「はい、近藤さん。持っして下さい」

一人一袋限定の安売りの米を買いだめしたかったらしい。

近藤はそのまま40キロの米袋を二つ担いで志村邸まで向かうことになった。

とうの妙は自分の鞆以外何も持っておらず完全な荷物持ちと化していたが、彼女と一緒に時間を過ごせるだけでよかったのだそうだ。

米袋は、そりゃ重かったが…。

「そう言えば、お姉様はお元気ですか？」

唐突にそう聞かれて、近藤は元気ですよと返した。

「またお妙さんとお茶がしたいって言っていました」

「まあ、嬉しい」

嬉しそうに笑う妙の笑顔に、近藤も嬉しくなって笑った。

何が理由であれ、好きな人が笑ってくれるのは嬉しい。

「今日はお姉様の誕生日でしょう？ 明日にでもプレゼント渡したいんですけど、近藤さん、何かお姉様のほしがってるものありません？」

「いやあそれが、姉に聞いても『祝ってもらえるんだからワガママ言わないわ、なんでもいい』って言うんですよ！ なんでもいいが一番困るのに」

「本当ですね、お姉様らしい」

妙は可笑しそうにクスクス笑う。

わあ、いま普通にお妙さんとおしゃべりしてる…。

帰ったら姉に報告しなければ！

そんなことを考えていたらいつの間にか志村邸に着いてしまって、米はそこに置いて下さいと言われて玄関に米を置いた。

「ご苦労様でした近藤さん。助かりましたわ」

「いえいえ、これぐらいお安いごよ…って！」

手に痛みが走って見てみれば、ひび割れやあかぎれのひどい指の付け根あたりがぱっくりと開いてしまっていた。

血は出ていないものの、痛い。

「手荒れですか？」

「あはは、ずっとほったらかしにしてたものですから……。まあ手なんて荒れても別に……」

恥ずかしくて照れ笑いしていると、妙は何を思ったか静かに踵を返した。

「ちょっと待ってて下さい」

「はえ？」

「帰ったら許しませんから」

そのへんに座っていて下さいと言い残し、そのまま中に引っ込んでいく。

何事かと大人しく腰掛けていたら、妙はハンドクリームの小さなチューブを持って戻ってきた。

「近藤さんの手は、みんなを守る手でしょう？」

隣に腰を降ろした妙がチューブからクリームを出し、近藤の手を取る。

「お妙さ…」

そのまま近藤の手に塗り始めた妙に、近藤は目を瞬かせる。

「誰かを守る、働き者の強いお待さんの手じゃないですか。この手でお姉様の手も繋ぐんでしょう?」

温かい手が近藤の手を滑っていく。

指の間も丁寧にクリームを塗り終えた妙は、その手を近藤の膝に戻してにっこりと笑った。

まじまじと手入れされた手を見下ろせば、先ほどまでかさついてガサガサだった自分の手とは思えないくらいきれいな手になっていた。

もちろんひび割れはどうしようもないが、さっきよりは随分マシだ。

「荒れてもいいなんて言わないで、大事にして下さい」

その言葉が嬉しくて、

わざわざハンドクリームを塗ってくれたことが嬉しくて、

近藤はつい、妙に抱きつきかけた。

「お妙さん大好…！」

「調子に乗るな！」

鉄拳を食らって、吹っ飛ばされた近藤は志村邸の門前にあった電柱に額を強打したのだった。

「最後まで我慢出来れば良かったのにねえ…」

「つい理性が…」

てへてへと頭をかく弟の額に、操はため息をついて包帯を巻いていく。

ぎりぎりまで理性を押さえていただけ対したものだ。

「まあ良かったじゃないの。お妙とおしゃべりできて」

「うん！ 良かった！」

実に嬉しそうに笑う弟に苦笑して、結び終えた包帯から手を離す。

「…それにしても」

離してから、ぎろりと近藤を睨みつけた。

「なんで貴方だけお妙にお手入れしてもらってるのよ！　ずるい！  
私にも塗ってもらったクリーム寄越しなさい！」

そう言っでとられようとした手を、近藤は慌てて上げて姉から遠ざけた。

「嫌だい！　もう一生洗わないで大事にするんだ！」

「それはダメ！　ちゃんと洗いなさい！　その前に私にも寄越しなさい！　私これから巡回で外に出るんだから！」

ドタバタとあちこちを駆け回る音と騒がしい声が屯所ないに響く。

それを副長室でサボリの最中に聞いた沖田は、いつもの赤いアイマスを外した。

「…仲良しですねい」

それはけして独り言ではなく、文机に向かって黙々と仕事をしていた土方への言葉。

「羨ましいほどな。つか、仕事しろ」

「やでさ」

間髪いれずに返ってきた言葉に土方は額に血管を浮かせ、チツと舌打ちをしてくわえた煙草に火を灯す。

そして煙を吐いて口を開いた。

「そつえば、姉さんの誕生日今日だろ。お前なに渡す？」

「俺は柘植櫛にしやした。土方さんは？」

「俺は匂い付きのハンドクリームにした。手が荒れるとか愚痴ってたから」

「他の奴らとかぶらなきゃいいんですがねィ」

沖田の呟きに、ああとため息が漏れる。

何を渡したって喜んでくれるとは分かっているが、せめて他の奴とは違うものを渡したい。

「ま、十中八九ひとりぐらかぶるんだろうな」

「何か被らない方法無いですかねえ…」

ふむ…と腕を組んで考える二人がいる部屋の廊下を、

二人曰わく仲良しな姉弟がどたばたと駆けていった。

「待ちなさい勲！ 私にもちよつとは分けなさいよ！」

「嫌だい！俺だけのモンだ！」

遠ざかるその喧騒を、二人は苦笑交じりに聞いていた。

終

## 嬉しいこと（後書き）

何故操の誕生日に近藤さんの話を書いたんだかなあ私…。

まあいいや。お祝いコラボ話を書いて下さった梨栖さんの他にも、沢山操に誕生日おめでとコメントをくれたユーザー様がいらっしやいまして、操愛されてるなあと感極まっちゃった玖月です。

皆様、本当にありがとうございます！

そして操、私のもとに生まれてきてくれてありがとうございます！

ハッピーバースデー！ ム（＾ ＾）ノ

## 素敵なプレゼント（前書き）

4日に発売されたはずの「銀魂あにめパラパラ館」がどこ行っても  
売り切れなんですけどぉ！ 先輩から絵が綺麗だよって教えて貰っ  
たのになんで無いんだよバカヤロー！

ノ、□、ノ

ガシャーン！

## 素敵なプレゼント

銀時がその茶屋の前を通りかかった時、操は外にある椅子で幸せそうに汁粉を食べていた。

手にはよく見えないが何か模様の入った箸が握られ、それでつまんだお餅を口に頬張る嬉しそうな顔はまるで子女のよう。

ぐいと箸で引つ張るものの伸びた餅が千切れず、みょくと伸びた餅に苦戦する様は到底30を過ぎた女のものとは思えなかった。

「あーね」

やあと挨拶すると、やっと餅を千切って咀嚼出来た操は手を振って挨拶を返した。

頬を餅で膨らませて、目を細める姿はまるでハムスターのようだ。

「隣いいかい？」

操がコクコク頷いてくれるので、銀時は操の隣に少しスペースを開けて腰掛ける。

「今日は仕事休みか？」

隊服ではなく着物姿の操にそう問うと、

「…そうよ。久しぶりのお休み！」

ごくんと餅を嚥下して、そう返してくれた。

「幸せそうな顔してお汁粉食っちゃって。親父ー、団子一個くれ」

最後のは、奥にいる禿頭の店主への言葉。

すぐにあいよと返事が返って来て、銀時はあることを思い出す。

「そっぴや姉御、こないだ誕生日だったろ」

「え？ ええ」

3月の下旬、街中ではったり会った真撰組局長近藤勲に、もう少しで姉の誕生日なんだと自慢された。

それはもう喧しいほどだったから、よく覚えている。

「おめでとうさん。今年でいくつになったんだい？」

操は素直にありがとうと言い、苦笑する。

「女に年齢聞いちゃだめよ」

「だってそのナリで俺より年上だろ？ ていのいい詐欺だぜ」

遠回しに若く見えると誉められて、操は嬉しそうに笑った。

「アレだろ？ やっぱ盛大に誕生日パーティー開いてもらったんだろ？ ゴリラとかドSさんたちに」

「ええ、開いて貰ったわ。この年で祝って貰うなんてちょっと恥ずかしかったけど」

「さぞかし盛大だったんだろうな…。姉御のためならとことんやりそうだもん、ゴリラ」

へいお待ちと持ってきて貰った団子を口に運ぼうとすると、操の仕方無さそうな苦笑が聞こえてその手を止める。

「なに？ 楽しくなかったの？」

「ううん、楽しかったわよ。それに嬉しかった…。でもね、勲が飲み過ぎて裸踊り始めたり、トシ君が喧嘩始めちゃったり…」

誰のための宴会だったんだかと、操はため息をつく。

姉の誕生日とはやはり建て前で、男共は酒が飲める機会が出来ればそれで良かったのかもしれない。

裸踊りを初めて彼女に叱られる近藤が、ありありと目に浮かぶ。

「さぞかし沢山プレゼント貰ったんじゃないの？」

「そうなのよ、みんな素敵なものばかりくれて…。あ、このお箸

も頂き物なのよ」

彼女がお汁粉を食べるのに使っていた箸はどうやら操自身の持ち物のようで、ちょうど真ん中で組み立てるタイプの持ち運び可能な箸だった。

木製の風情あふれる代物で、可愛らしい兎まで描かれている。

「可愛いでしょー！」

ニコニコと自慢してくる彼女の笑顔から、本当に嬉しかったのだなと分かる。

「この髪飾りは部下の佐伯が。こっちの桃色の簪は2番隊隊長の子がくれたのよ。綺麗でしょう?。」

自分の黒髪を飾る簪や髪飾りを指し示して、操は実に嬉しそうに語る。

こんなに喜んで貰えて、渡した人間も本望だろう。

「良かったじゃん。欲しいものねだったのか?。」

「ううん。これが欲しいっていうとんでもないことになるから、なんでもいいって言い張ってた」

銀時の口に運ばれようとした団子が、また目の前で止まる。

「とんでもないこと？」

「ええ、真撰組が結成して初めての誕生日だったかな。勲に何が欲しい？　って聞かれて、何も考えずにヘアケア用品って答えたの。そしたらみんなそれをくれて…」

思い出したのか、クスリと苦笑が漏れる。

「シャンプー、リンス、コンディショナーはもちろん、椿油や高級ヘアパックまで大量に貰っちゃって、使い切ったのは次の年明けだったわ」

半年以上経っても使いきれなかったのだから、相当な量だったのだろっ。

銀時は団子にかぶりつくのも忘れ、呆然と口を開けた。

「それ以来、欲しいものは言わないことにしたの。大量に貰ってもすぐに使えないのは悲しいし、それに、一生懸命選んでくれたものってそのぶん心がこもってるから嬉しくて」

「なるほどね。で、他に何をもらったんだい？」

「簪が全体の4分の1」

「…」

彼女の言う「全体」がどれほどなのか銀時は知らないが、4人に一人は彼女に簪を贈ったということは、彼女は相当な数の簪を贈られたことに…。

「あとねえ、ラベンダーのいい香りのハンドクリームも貰ったの。おかげで手がスベスベになったわ」

嬉しそうに手を空にかざす操に口元をつりあげ、今度こそ団子に食らいつこうとした銀時だったが、

目の前でひょいと奪い取られた。

「真撰組の女神と二人でお茶たあ、いい度胸ですねイ旦那」

団子をかつさらったのは沖田で、操が楽しそうに笑う。

「総悟君はおしゃれな柘植櫛をくれたのよ」

楽しそうな顔のままそう言われるものだから、銀時はふうんと小さく呟いて彼女を見やる。

本当に嬉しそうに話すものだ。

そうしている間に、沖田が操と銀時の間に腰を下ろす。

「なんの話してたんですかい？」

沖田はそう言って、銀時から奪った団子を口の中へ。

それ俺の団子…と銀時が抗議するが、まるで無視。

「お誕生日にみんなに何を貰ったのか旦那に自慢してたのよ。素敵なものばかり貰ったから」

ね？ と同意を求められ、沖田は団子を咀嚼しながら嬉しそうに目を細める。

その時だった。

「サドーっ！」

突然大きな声で叫ばれ、驚いた沖田が団子を喉に詰まらせた。

慌ててどんと胸を叩く沖田に、銀時はほらとお茶を差し出して顔を上げた。

そこには、仁王立ちした神楽がいた。

「おお、神楽」

「サド！ この神楽様との対決中にとんずらするなんていい度胸アル！ 今日こそ決着……」

そこまで怒鳴って、神楽は沖田の隣で自分に手を振っている操に気付く。

途端にはっと目を輝かせて、操に抱きついた。

「姉貴ー！　姉貴ヨ久しぶりネ」

「久しぶりね神楽ちゃん。相変わらず可愛いわ」

操も神楽を抱きしめて頬ずりする。

その横でようやく団子を嚥下した沖田が、銀時に大丈夫かと聞かれていた。

「姉貴この間誕生日だったんデシヨ？　おめでとアル！」

「ありがとう、嬉しいわ」

「プレゼント何もあげられなくてごめんなさい……」

「あら、今お祝いの言葉を貰ったわ。それだけで十分」

ふふつと額を合わせて笑いあう二人は、見ていて微笑ましい。

そうしているうちに、神楽が操の細い手首を飾るあるものに気づいた。

銀色の光を放つブレスレット。

操の手を取って、神楽は目を輝かせる。

「綺麗アル。これもプレゼント？」

途端、操の頬がぼつと赤くなった。

ええそうよと答える操の笑みが今まで自分に向けられていたものは明らかに違って、銀時は沖田の耳に口を寄せる。

「ねーねー、総一郎くん」

「総悟でさア。何ですかい？」

「姉御にあのブレス贈ったの誰？」

ちらりと横目で見れば、操は神楽と手を繋いで何事か笑いあっている。

「何故でさ」

「見なよ姉御のあの笑顔。あんな嬉しそうに笑っちゃって…。きつとあのブレスを贈った奴が姉御の好きな奴だ」

団子に食いつきかけていた沖田は、「なぬ!？」と目を剥いて操を見た。

「姉御!。そのオシャレなブレス、誰からのプレゼント？」

銀時がさり気なくそう問うと、操の頬がぽつと桜に色づいた。

散々もったあと、唇に立てた指をあてて、

「秘密」

その答えに、銀時はほらなほらな！ と沖田の肩をばしばし叩いた。

「想い人だから言えないんだよ、言ったらバレるから！」

「あとでザキに調べさせやす！」

見えないところでぐつと親指を立て合った男二人に、操と神楽は不思議そうな顔をする。

「二人とも何を話してるの？」

「えっ、いや…。あの…」

慌てる沖田に、銀時がとっさの嘘を思いつく。

「俺も姉御にプレゼントしたいなあと思ってよ。総一郎くんに姉御がほしそうなもの聞いてたんだ」

「そ、そうなんです」

「まあ、旦那もくれるの？ いいのよ別に。おめでとぅって言うってもらえただけで嬉しいわ」

何とかごまかせたものの、そう言われてしまつては男がすたる。

「そう言つなつて。何か欲しいもの銀さんに言つてみ」

胸を張つてそう言つたら、思いもよらぬ返事が返つてきた。

「じゃあ神楽ちゃんが欲しい！ 妹にするから！」

神楽をぎゅうつと抱きしめて、操は言う。

神楽もきやは！ と嬉しそうに笑つて、銀時は飛び上がった。

「駄目ー！ 神楽ちゃんは万事屋の子なの！」

「えー、駄目なの？」

「そこ！ 残念そうな顔しない！」

もちろん本気ではなかったであろう操はそれでも残念そうな顔を  
して、いい考えだと思ったんだけどなと神楽を解放する。

沖田も何故だかいささか残念だった。

「だったら姉貴、銀ちゃんにお団子奢って貰えばいいアル！」

「あら、それもいいわね。旦那、それでいい？」

幸い大きな仕事後で懷も温かいし、それぐらいならいいだろうと銀  
時は笑顔で頷いた。

「おうよ。好きなだけ頼みな」

「やったあ！　ありがとう旦那！」

操の笑顔にいいってことよと返した銀時だったが、返してから大事  
なことを思い出す。

彼女は確か大食らいじゃ…。

「すみませーん！ お団子20本下さい！」

「ええっ！？ 姉御頼みすぎ…」

「オヤジー！ 私も20本！」

はいはいと神楽が手を上げ、銀時はまた飛び上がる。

「神楽！ お前も頼んでいいとは…」

「オヤジー！ 俺は30本でお願いしまさア」

「って何さり気に注文してんだああ！」

ぎゃああと悲鳴を上げる銀時を尻目に、3人がたいらげた団子の数は100を軽く超えたのだった。

『旦那、今日はごちそうさまでした』

『いえいえ、どういたしまして…』

終

## 素敵なプレゼント（後書き）

先週の水曜日、3月30日は操の誕生日でした。沢山お祝いのコメントをいただき、さらに一部の方は操にプレゼントを贈ってくれました。（＊ ＊） 作中で操が自慢していたのはほぼユーザー様（一部ユーザー様のオリジナルキャラ）から頂いたものです。マジで嬉しかったです！ 皆様、本当にありがとうございました。操に代わってお礼を！

ゞ（＾ ＾）ノ

正義なんてただの名前だけ

(上) (前書き)

銀魂のED「サムライハート」素敵ですよ！ 月曜から頭の中で  
エンドレスで再生されてます。

ゞ( ^ ^ )ノ あの曲を元に小説かけないかなあ…。 (↑コラ！)

今回の操話は、3部作の1話目です。ちょっぴり区切るところ間違え  
たんですが、(↑毎回同じこと言ってるような…) まあいいかなあ  
…って。(笑)

正義なんてただの名前だけ

(上)

その日土方が、月末報告を済ませて屯所に帰ってきたのは6時を過ぎた頃だった。

一息つくために喫煙所に足を運べば、見慣れた細い背中が煙管をくゆらせていた。

「ただいま、姉さん」

声を掛ければ、振り返ってにこりと微笑んでくれる。

真撰組内に喫煙者は少ない。更にその中でヘビースモーカーの部類に入るのはこの操と土方ぐらいだ。

「お帰りなさい。月末報告お疲れ様」

「うん、疲れた…。あ、姉さん。奉行所でお妙さんにあっただぜ」

「お妙に？」

煙管を下ろし、不思議そうな顔が返ってくる。

月末報告のために赴いた奉行所の待合室にいたのは、操が妹のように可愛がっている志村妙だった。

機嫌はすこぶる悪く、滲み出る怒りのオーラが恐ろしかった。

「何かあったの？ 痴漢？ 強盗とか？」

操の顔は真剣そのものだ。本当に彼女を大切にしているんだなと実感する。

「いや、あの女なら痴漢も強盗も自分で捕まえて突き出すと思うがな……」

ぼそりと呟くと、だから突き出したの？ と聞かれた。

「いや、ふんどし仮面に……」

「取られたの！？ パンツ！」

「頼むからその綺麗な顔でさりとパンツとか言わないでくれ……」

美しい娘から下着を盗み、それをモテない男に配るという、義賊を  
気取った変質者。

以前お妙が捕まえたのだが、奉行所より逃げ出した悪事を働いて  
いるという。

一度自分の手で捕まえただけあって、再び下着を盗まれるなど妙に  
は我慢がなかったのだろう。

だから奉行所に被害届を出しに来たのだ。

「なんて奴！ 私のお妙からパンツを盗むなんて……」

「だから止めてくれ……」

「こうなったら私が捕まえなくちゃ。全世界の女の敵よ」

「あー…。姉さんも気をつけてくれって言ってたぜ」

そう伝えれば、きょんとした顔が返ってきた。

「私みたいなおばさんからなんて取らないわよ。大体ふんどし仮面  
って、綺麗な娘からしか取らないんでしょ？」

「だから心配してたみたいだが…」

ふふっと、小さな笑い声が返ってきた。

「私の何処が綺麗な娘？」

翌朝、申し送りを始めるための会議室。まだ何人か来ていないものの、土方は伝えることも多く、沢山の資料を携えて席についた。

まとめた資料は、ことごとく隣が定位置の沖田にごちゃまぜにされる。

「…?」

沖田がふつと顔をあげた。土方もつられて顔を上げた。なにか重々しい空気が近づいてくる。

「…なんだ?」

がらりと音をたてて障子をあげたのは操で、その眉根は不機嫌そうに皺を刻み込んでいた。

「おはようございます」

彼女に似合わない、低い声。怒りを帯びている、二人にはすぐに分かった。

「…おはよう」

「おはようござあ…」

自分の席に腰掛ける操は不機嫌極まりなく、しかも殺気立っている。

「…みいさん、どうし…」

「操隊長、いるかい？」

からりと入ってきたのは三番隊隊長の斉藤で、手に何かを持っている。

「…なに？」

「これ、俺の部屋にあったんだけど、もしかして操隊長の…」

斉藤の大きな手からはみ出しているそれは、女性ものの下着だった。

「お前かーっ！」

操によって机がひっくり返し、土方と沖田はひいっと小さな悲鳴を上げて後退る。とうの斉藤は、飛んだ机にぶつかって庭におちた。

「盗んだ家の住民にまき散らすなんて、いい度胸じゃないの…。絶  
対捕まえてやるわよ、あのウスラハゲ…」

「…姉さん、まさかやられたんじゃない…」

操の殺気が、高まった。

「真撰組の屯所に入るなんてホントにいい度胸じゃないの。捕まえ

たら血祭りにしてやるわ」

「姉さん、怖い…」

あれから巡回に出たものの、下着を取られた操の怒りはおさまらない。隣で怒りに燃える操が怖くて、土方は少しだけ距離をあける。

「大体、どうやったら真撰組屯所内に女がいるって分かるのよ」

「いや、姉さんは有名だから分かるだろうよ。何度も新聞に載ってるし…」

「大体なんで三十路過ぎた私から…」

ふと、操は立ち止まった。なにやら怒鳴り声が近づいてくる。

「って…ろ…！ …の白髪頭ああ！」

「これ、お妙の声…」

きょんとしていると、目の前の角から銀時が飛び出した。何かか

ら逃げているかのように慌てていて、小石に躓いてつんのめった。

「わっ！」

銀時がダイブした先は、操の豊かな胸の上。

「あ、あれ…これは…」

銀時がそのままの体勢でふにふにと操の胸を揉んでしまっなか、後方にいた土方が煙草をとりおとし、銀時を追い掛けてきて角から飛び出したお妙も、絶句して目を見開いた。

「姉さんに」

「お姉さまに」

二人の声が、重なった。

「「なにしてんだあああ！」」

「おぶお！」

銀時は二人同時に鉄拳を受けて、地に転がった。

「…なんで被害者の姉御じゃなくてお前等にやられるわけ？」

「黙れ、テメーが悪い」

「お姉さまも怒らなきゃ！　なんで平然としてるんですか！」

「…だってねえ」

もとより操は男の前で平気で全裸をさらすほど、自分の体を公衆にさらすことに抵抗がない。

「触られても平気だし…」

「お姉様…。もう少し綺麗な女性だって自覚を持ちましょうよ…」

「女だって自覚はあるわよ。それより、殺気立って旦那追い掛けて、どうかしたの？」

問われ、お妙は大事なことを思い出したようだった。

「あつ！ 聞いて下さいなお姉様！ 銀さんったら、泥棒捕まえるのに協力してくれないんですのよ！」

「泥棒？」

「…パンツ盗んでく変態の奴だよ」

殴られた頭を押さえて立ち上がる銀時の言葉に、後方で聞いていた土方の顔が、げつと歪んだ。今そいつの話を、操にはいけなかった。案の定操の顔から笑みが消えた。

「…そうか、お妙の下着盗まれたのよね」

「お姉様は大丈夫ですか？ 私が盗まれてお姉様が盗まれないなんておかしいことが…」

口元は笑っていても目は笑っていない操の顔を見て、銀時と妙は黙り込んだ。

「まさか…」

「やられたんだ」

ひゅうつと、風が吹いた。

「結局のところ、二人はどうしたいんだよ。下着が戻ってくればいいのか？」

「下着を取り戻した上で奴を血祭りにしたい」

女性ふたりの言葉に、銀時も土方も同時に息をついた。喫茶店に入

って落ち着いたはいいものの、女性二人の怒りはおさまっていないようだった。

「私は取り敢えずそいつをしょっぴいて、獄門島に押し込めたいわ」

一度は捕まったふんどし仮面だったが、同心のもとから脱走していまにいたるのだ。

「同心になんか、おしつけられない」

「…姉御、怖いよ」

目の前の二人から滲み出る怒りのオーラが恐ろしい。

土方はくわえていた煙草に火をつける気力もなく、肩で大きな息をつく。

「だからと言って、どうやって捕まえる気だよ。お妙さん、アンタ以前待ち伏せして奴を捕まえたらしいが、同じ手はそうそう利かねーだろ」

「変態には二度もクソもありませんよ」

妙のあまりに冷ややかな口調に、男二人の背にぞわりと冷たいものが走る。

今すぐにも逃げ出したいところだったが、怒りの矛先は向けられたくないと思うことも出来なかった。

「…前回と変わり映えないけど…。本当に来るのかよお妙」

「変態はバカなことしか考えてないもの。それぐらい銀さんなら分かるでしょ？」

「オイ待て、それは俺が変態だとも言いたいのか…？」

ひくりと唇をひくつかせる銀時に構わず、妙は手にしている薙刀をぶんつと振って風を切る。

日付が変わった深夜、妙の実家。

縁側にはこれ見よがしに下着が一枚、ぶら下がっている。

それを4人、草原の影から見張っていた。

前回と同じ作戦だが、違うのは新八や神楽、近藤がいない代わりに操、土方がいること。危険なので地雷は仕掛けていないこと。

そしてぶら下がっている下着は妙のものでなく操のものであるというくらいだ。

「しかし、本当に来るのかねえ……」

「来なくても捕まえるだけよ」

真撰組二人は隅で煙草をふかしている。銀時が操の隣で、草原から

こっそりと縁側を覗いた。このぴりぴりした空気を、なんとか破壊出来ないだろうか

「しかし姉御、随分セクシーなパンツはくんだな」

黒地の布に、赤い糸で刺繍が施してある下着。

おいおいそんなこと言つなよと土方が慌てた顔をするが、銀時は気づかない。

「あつ、もしかして勝負パンツだったりし」

ジャコッ！

「て……」

次の瞬間、銀時の横顔にバズーカが押し付けられていた。

銀時を見ないままバズーカを突きつけていた操は、煙管を下ろして煙を吐き出した。

「旦那、セクハラ」

「はい…。…えっと姉御。この危ないのどかそう？　まだ旦那に向いてるよ…。？」

「引いてもいい？」

「だめ！」

操がやっとバズーカを下ろしてくれて、ほっとする銀時に土方が囁く。

「あんま姉さんを怒らせるなよ。女を侮辱された時の姉さんの怒りは半端ねーんだから」

「先に言って…。」

再び息をついた銀時を横目に土方は煙草を取り出したが、胸ポケットに入れていた煙草の箱には、一本も入っていなかった。

「…っち」

その舌打ちが操にも聞こえたのだろう。眉間に寄っていたシワが消えた。

「あんまりぴりぴりしてても仕方ないし、一人ずつ休憩しましょうか。トシ君、先に行ってきた」

「サンキュー。俺煙草買ってくるわ」

「あ、俺パフェ的な何か」

ちやっかり注文する銀時に、土方の額にびしりと血管が浮く。

「なんでお前のまで買ってきて来ないといけねーんだよ!」

「いいじゃん、ついでついで」

丸めこまれて、土方はチツと舌を打った。打ってから、女性陣に視線を向ける。

「他になにか買ってくるか?」

「じゃあ私ハーゲンダッツ」

「じゃあお茶を。よろしくね、トシ君」

任せとけと言って、土方は背を向ける。なにかあったらレシーバーで連絡してくれと言い残すのも、忘れない。

「姉御、もしかして多串君に買い出し行かせるために休憩挟んだ？」

「まさか。まあ煙草買ってきてどうぞってことでトシ君を先にしたけど、旦那が買い出し頼むとは分からなかったわよ」

煙管を取り出した操に、職業柄の癖なのか妙がさつとライターを差し出す。

操はありがとうと礼を述べて、火をつけて貰った。

「奴、来ますかね」

流石に妙も、二度も同じ手にかかるか心配なのだろう。操は大丈夫よと笑った。

「来なかったら、毎日張り込めばいいだけの話よ。女の敵は私が捕まえるから」

安心してと妙の頭を撫でる操。本当に女を大事にしてるんだなあと、銀時が思った時だった。

「！」

何かの気配を感じ、銀時が顔を上げた。ついで顔を上げた操は、屋根の上に佇む人影を見つけて眉間にシワを寄せた。

「来たわね……」

女の宿敵、ふんどし仮面の姿がそこにあった。

「パンツのゴムに導かれ今宵も駆けよう漢 浪漫道！」

「あんにやる！ とうとう来やがった！」

赤いふんどしで顔を隠し、ブリーフー丁姿の変態が、屋根の上にいた。

久しぶりに見る変態の姿に銀時は怒鳴るが、操が何かをしていたのには気付かない。

「怪盗フンドシ仮面けんざ…！」

ドガン！

操が構えたバズーカ砲が火を吹いた。

砲撃がフンドシ仮面を襲い、瓦屋根の上で爆発が起きる。

銀時は呆然としたまま、操を見た。

「…姉御、登場台詞ぐらい言わせてやろつよ…」

「嫌よ、あんな奴の声なんか聞きたくもない」

操はそう言い、バズーカを下ろした。

そのまま信じられない跳躍力で、まるで忍者のように屋根へ上がる。

すげー跳躍力…と銀時が啞然としてみると、後頭部に衝撃が走った。

「銀さん邪魔ですっ！」

「ぶっ！」

妙にジャンプの足場にされたこととは知らず、銀時は地面に倒れて気絶した。

屋根の上上がった妙は、もうもつと煙を上げる屋根を見つめる操に歩み寄る。

「お姉様…」

「ああお妙、ごめんなさいね。遠慮なくぶっ飛ばしちゃって」

「いえいえ…」

さてさっさと捕まえましょうかと、操が手錠を取り出した時だった。

「天下の義賊フンドシ仮面も見くびられたものよ。こんなものじゃ俺は倒れない、全国の変態たちが俺の帰りを待っているんだ」

瞬間、土煙から小刀が唸りをあげて飛んできた。

それは妙に向かって一直線に飛んでいく。

「！」

「妙っ！」

妙と小刀の間に滑り込んだ操が、刀を引き抜いてその小刀を弾き落とした。

落としてから、ギツと晴れる土煙を睨みつける。

「危ないわね……」

晴れた先には、片膝をついたフンドシ仮面がいた。

「こんなところで負けるわけにはいかない、最後に笑うのは俺よ」

「ほざけ。アンタだけは絶対に捕まえるわ」

彼の目元がつり上がり、笑ったのがわかった。

嘲笑、かんに障る笑みだった。

「言ってくれる。女の弱点を知り尽くしている俺に、適うと思っ  
ているのか」

「思っているわ。少なくともここにいる女の子が一度貴方を捕ま  
えたことを忘れちゃいけない」

刀を構え、操は変態を睨みつけながら言う。

「お妙、貴女は下がっていて」

「いいえ、私も戦えます」

薙刀を構える少女を巻き込みたくはなかったが、どうやら言っても聞かないようだ。

「…怪我しないでちょうだいね」

「もちろんです」

女二人対変態一人。

銀時は気絶したまま。

土方はまだ、戻らない。

続く

正義なんてただの名前だけ

(上) (後書き)

本当は長い話書いてそれを区切って分けることで、ストックを貯めているのは内緒の話です…。

だって最近ネタが切れかかってんだもん。(↑言い訳言い訳)

正義なんてただの名前だけ

(中)(前書き)

レポート嫌い！　なんで授業開始早々レポートがあるのさ！

ノ、□、ノ　　ガシャーン！　レポート書いてるなら小

説書いてたほうが楽しいっつーの！

(ん？　私前にも同じ事言った？)

正義なんてただの名前だけ

(中)

流石いままで逃走を続けてきただけあって、フンドシ仮面の動きは素早かった。

操と妙の連続攻撃も、ひよいひよいと避けられてしまう。

操はすでに邪魔な隊服を脱ぎ捨て、ワイシャツにベスト、スカーフ姿になっていた。

そんな軽い服装でも、フンドシ仮面に攻撃を加えることはできなかった。

「どうした、俺を捕まえるんじゃないのか？」

気持ちの悪い笑みを浮かべ、変態は聞いてくる。

操は黙れと言わんばかりに刀を振るったが、それも避けられた。

「貴方こそ、女の子の弱点を知っているとか豪語しておいて何の手だしもしないのね！ 知ったかぶりじゃないのっ！」

妙の横殴りの攻撃を身を反らして避け、変態男はにたりと笑う。

「使ってもいいというなら使うが？」

「ムカつくこの薄らハゲ！」

操の言葉に再び笑うと、フンドシ仮面はどこから取り出した小刀を操へ突き出した。

どうやら彼は、小刀の扱いに長けているらしい。

「女の弱点その1」

眼前に振られる刀を避けて一歩下がったものの、変態の連続攻撃を避けきれずに隊服が僅かに裂ける。

「その小刀どこから出したあ！」

「女は常に女の味方」

「お姉様から離れるこの変態！」

標的が操に絞られたせいでのけ者になっていた妙が、フンドシ仮面に薙刀を振るう。

彼はそれすらも避けて見せた。

「女の弱点その2　女は女を蔑ろにされると怒る」

不意に変態が、標的を妙へ変えた。

「妙！」

操が叫んだ時は遅く、フンドシ仮面は妙の目の前で沈んだ。

不安定な屋根の上に立つ細い足を、見事な技で払う。

「きゃっ…！？」

バランスを失った妙が、屋根から転がり落ちた。

「妙ーっ！」

操の悲鳴のような声が響く。屋根から落下し地面に叩きつけられそうになった妙の体は、しかし妙と地面の間に滑り込んだ土方によって難を逃れた。

「きゃっ！」

「おっとっ！ あぶねえ！」

妙が無事であることにほっと胸を撫で下ろし、操はぎっと変態男を睨みつける。

「私の妹に、なんてことしてくれんのよ！」

振るわれる刀をひよいひよい避けながら、変態は覗いている目をにやりと釣り上げる。

「ほらな、女は常に女の味方。女を傷つけられれば憤慨する」

「喧しい！」

なぎ払われた刀の切っ先を鼻先に感じながら、変態男はにたにたと笑う。

「女など単純な生き物。所詮女は男に貢ぐ生き物でしかないのだ」

「その薄汚い口を閉じないと本当にたたっ斬るわよ」

操の額には血管が浮き、瞳孔も開いている。

「おっと忘れていた、女の弱点その3を教えてやろう」

こいつ絶対殺す、フンドシ仮面を睨みつける操の目は、そう言っていた。

「土方さん！ ちょっと登場が遅いんじゃないですか！ この役立

たず！」

助けて貰った礼もそこに、妙は土方に言いつのる。

「コンビニから焦って戻ってきたんだから、文句言っな……。それに役立たずはこいつだろうが」

辟易しつつ、地面に伸びている銀時を見下ろす。

「おい起きろ万事屋！」

「起きて下さい銀さん！ お姉様の一大事なんですよ！」

一方、屋根の上ではまだ戦いが続いていた。

操が怒り任せに刀を振り回し、それを避けつつ弾きつつ、フンドシ

仮面は操をおちよくっている。

刀と小刀がぶつかり合う、甲高い音が響いた。

「そろそろ女の弱点その3を教えて貰えないかしら！」

瞳孔が開いているのが分かる。怒りで頭がズキズキする。

この男だけは許さない、

この男だけは…！

「いいのか？」

またフンドシ仮面に笑み。

ぶつつんと頭の中で何かが切れる音を聞いた。

「いっぺん死ね！」

刀を突き出した操の懷に、フンドシ仮面が滑り込んだ。

「女の弱点その3、女は…」

悔しいながら、操は繰り出された小刀の軌道を追うことが出来なかった。

フンドシ仮面が何故か首に巻いていたスカーフを素早く奪っていき、何故そんなものと疑問に思ったがその疑問もすぐにとけた。

変態が間合いを取って離れた瞬間、操のベスト及びワイシャツがビリビリに破れた。

下着に覆われた豊かな胸が丸見えになり、フンドシ仮面は奪ったスカーフを風に靡かせながらにやりと目を細める。

「女は裸を見られることを恐れる」

むき出しになった胸を抱いて、しゃがみこんだ操が悲鳴を上げた。

「きゃああああ！」

屋根で悲鳴を上げた操に、やっと気がついた銀時が土のついた顔を上げる。

「姉御！」

「お姉様！」

妙も再び屋根に戻ろうとするが、その腕を土方が掴んだ。

「待て！」

「何するんですか！ あのままじゃお姉様が！」

「おかしいんだよ！」

土方が言い放った言葉に、妙だけでなく銀時も不思議そうな顔をし

た。

「何がだよ、多串君…」

いつもなら土方だと反論するところだが、今回ばかりは土方も何も言わなかった。神妙な面もちで呟く。

「大体、姉さんは…」

胸をかき抱いてしゃがみ込んでいる操に、フンドシ仮面は揚々と近づいた。

操は震えたまま、立ち上がりうともしない。

「それ見たことか。真撰組唯一の女隊士も、下着姿にされただけでこれだ。所詮女は弱い…」

そこまで言って、変態男ははっと気がついた。

操の口元がつり上がっている。

震えているのは下着姿にされたからではない。

笑っているからだ。

「！」

突如下から突き上げられた刀を、フンドシ仮面はぎりぎりですぐ避けた。

目潰しとばかりに奪ったスカーフを投げつけたが、それもばっさり斬り裂かれる。

そのまま振り回される刀の連続技を何とか避けていたものの、不意打ちで繰り出された回し蹴りに吹っ飛ばされ、危うく屋根から落ちそうになった。

口の中に広がった血を吐き出して見上げれば、あらわになった胸を隠そうともせず、月をバックに堂々とかちを見下ろしている操が

いた。

「くそ、貴様…」

「知らないようだから教えてあげるわ。女の弱点その4、女は嘘をつくものよ」

操は目を細め、妖艶に笑って見せた。

続く

## 正義なんてただの名前だけ

(中) (後書き)

実は

「操のシャツが破かれてから操が悲鳴をあげて、震えていると見せかけて急襲。最後の決め台詞『女は嘘をつくものよ』」

までのシーンは、ある漫画から借用したものです。と言っても、なんの漫画だかタイトルすら知らないんですが…。

もう2、3年(それ以上前かも)くらい前にジャンプだかサンデーだかマガジンだかで連載されていた漫画だと思っんですが、多分アクション系の漫画です

・黒いショートヘアの女性が戦ってた。

・もう一人(こっちは長髪の)女性が戦ってた気がする…。(こちらの方は服だけ破かれたわけではなく上半身裸にされてた…)

うる覚えすぎてよく分からないんですが、なんでかそのシーンだけ強く記憶に残っていてこのセリフ操に言わせたいと思って、書いてしまいました。

セリフと特徴だけでタイトルが分かった方いますか? どんな漫画か読んでみたいので、分かった方はタイトル教えて下さい。出来れば何巻の何話かも教えて頂ければ嬉しいです。

> (――) <

正義なんてただの名前だけ

(下) (前書き)

前回までのあらすじ。

打倒ファンドシ仮面のために行動した操だったが、彼の予想外の戦略に苦闘を強いられる。

いま、彼の言う「女の弱点」によって追い詰められたと思わせた操の反撃が始まる…。

妹「姉え、これあらすじなの？」

私「聞くな。私はこういうの書くの下手なんだから」

妹「ド下手の間違いでしょ」

私「お前…(怒)」

正義なんてただの名前だけ

(下)

「ほら、どうしたの？ わたしを倒すんでしょう？」

上下左右から自在に刀を操り、操はさらけ出した胸を隠すことなく妖しく笑う。

瞳孔は開き、口元はつり上がり、その姿はまるで般若のように恐ろしい。

風を切って唸りをあげる刀を必死に避けながら、フンドシ仮面は操を相手にしたことを後悔した。

自分が知るどんな女とも当てはまらない。

極めて男に近い女。

こんな女は初めてだ。

「女の弱点を知っていたってなんの役にも立たない。残念ね」

うつそりと笑みを浮かべ、操は変態から間合いを取った。

荒れた息を整えつつ、フンドシ仮面はいつ操が動いてもいいように構える。

「男の弱点など知らない貴様に、言われたくは…」

「あら、知ってるわよ。蹴り上げてあげましょうか？」

「そっちの弱点じゃないわ！」

追い込まれたこの状況でも、変態はついツツこんでいた。

「お姉様かつこいい…」

屋根を見上げている妙が、恍惚とした表情で呟いた。

「やっぱりな…。姉さんは俺らの前でも平気で裸になるから、悲鳴上げた時におかしいと思ったんだ…」

仲間には平気で裸を見せる操が、奴にはぎ取られただけで悲鳴を上げるなどおかしかった。

「お妙、そろそろその危ないものどかしてくんない…?」

屋根に背を向けた銀時と土方の背中には、妙の薙刀が突きつけられていた。

「駄目です。振り向いたら絶対に許しませんからね!」

操の裸を見せぬように配慮した妙の判断だったらしい。

「いやでも、姉御助けにいかねーと…」

「助太刀無用って言ってたろ…。お前まで死ぬぞ、ブチ切れモードの姉さんは近藤さんでも止められねえ」

『助太刀は無用よ！　っていうか邪魔したら斬るから！』

先ほど狂気的な笑みを浮かべた操にそう言われて今に至るのだ。

助けに行くなど、自殺行為…。

振るわれた小刀をバックステップで避け、ついた右足を軸に体を回転。そのままの勢いで逆手に持った刀を振るった。

握りで殴ってやろうと思ったが、ぎりぎりでかわされる。

舌打ちして間合いを開けるためにバック転。

のけぞって屋根に手を着くや否や、足を思い切り振り上げた。

「くっ…」

慌てて飛び退いた変態の顎を、ヒールの固いつま先と踵が唸りをあげて掠めていく。

そのまま一回転して屋根に降り立った操は、忌々しそくに再び舌を打った。

「顎粉碎してあげようと思ったのに、避けないでよ」

「避けないでかあ！」

フンドシ仮面の涙目のツツコミもなんのその。操は聞かずにただ羽織っているだけのワイシャツとベストを見下ろした。

先ほどから彼女は、一度としてさらけ出された胸を隠そうとはしていない。

それどころか…。

「邪魔ねコレ。いつそ脱いじゃおうかしら」

こんな過激な発言もするほどだ。

フンドシ仮面の後悔はつくづく底をつかない。

「…羞恥というものはないのか」

「その言葉そっくり返してあげる。私が羞恥を抱くのは愛しい殿方の前だけよ。分かったら…」

さっさと終わりにしましょう。操はそう囁いて駆け出した。

空気に焦げ目を残す勢いで振るわれた刀を何とか避け、後方へ下がる。

そのまま避け続けていたら、不意に後方へ出した足が空を踏んだ。

下がり過ぎて落ちると気づいた時には、もう遅い。

「あ……」

「あゝあ」

地獄に堕ちろ、落ちる瞬間に見た操は、そう言っているような笑みを浮かべていた。

もちろん誰も受け止めてくれるはずもなく、フンドシ仮面はどしゃりど地面に落ちた。

いててと打った頭に手を添えて起きあがると、銀時と煙草をくわえた土方が、鬼のような形相でこちらを睨みつけていた。

「よくも姉さんにあんなことしてくれたな……」

「俺なんか頭を足場にされただけでなんの出番もなかったじゃん……。どーしてくれんだよコノヤロー……」

二人でゴキゴキと拳を鳴らされる。

直後、変態男の断末魔の叫びが響いた。

その叫びを聞いてから、操は屋根から軽々と地面に降り立った。

瞬間、妙が着物と共にがばっと抱きついてくる。

「わぁ、お妙」

「お姉様早く！ これ着て下さい！」

さらけ出されている操の胸を隠すように、妙は着物を広げてくれる。

操は一つ礼を言って、着物に袖を通した。

「姉さん、お手柄だな」

数発殴って気絶させた上、縄でぐるぐる巻きにしたフンドシ仮面を引きずりながら土方が上機嫌でやってくる。

銀時も殴らせて貰ってすつきりしたのか、いささか清々しそうだ。

「あとはこいつを奉行所に…」

「だめ」

土方の言葉を、操が遮った。

「一度そいつを逃がした奉行所なんかには任せられないわ。私が直々に獄門島に連れて行く」

「そつえばそんなこと言ってたね…」

姉御怖えようと銀時が呟く。操は一度目を回しているフンドシ仮面に目をやると、小さくため息をついた。

こうして、静かには言えないが、この事件の幕は閉じたのだった。

朝、と言っても事件解決から数時間後。

土方は眠い目で起き出した。

あの後、獄門島に連行するという操に付き添いを買って出たが、操は大丈夫よと優しい笑みを浮かべた。

『トシ君は今日もお仕事でしょ？ だから少しは休んでちょうだい』

でもと渋る土方に、操は「私は非番だから」とやんわり言い聞かせた。

確かに自分でも徹夜明けで仕事は無理だと思っていたので、ありが

たく先に返らせてもらうことにした。

とはいえ睡眠時間はたったの数時間だったが、操はもう帰っているのだろうか。

「あ」

「あ」

寝ぼけ眼で廊下に出ると、タイミングよく操と鉢合わせだ。

操は少しばかりやつれた顔で、にっこりと笑う。

「おはようトシ君。眠れた？」

「ああ、おかげさまでな。姉さんは今帰ったのかい？」

ボサボサの頭をかきながらそう問えば、そうよと返ってきた。

「向こうでの手続きに時間がかかったちゃって、今帰ったところ」

「じゃあ一睡もしてないんじゃないか…」

「まあね…」

操は控えめに笑い、

「でも申し送り出て報告書書いてあとはバタンキューだから、もう少しの辛抱よ」

「あんま無理すんなよー」

「うん、分かってるわ」

とはいいつつ、申し送り後の報告書作成に随分と時間がかかってしまった。

襲い来る睡魔のせいで局長室への道のりを間違える始末だ。

「局長、失礼します」

「はい」

中からの気の抜ける返事に脱力しそうになったが、何とか耐えて襖を開ける。

文机に向かった近藤が振り向いて、驚いた声を上げた。

「うわぁ、ひどい顔。大丈夫かい？」

「大丈夫と言いたところだけど、そろそろヤバいわ…。これ未明の事件の報告書」

おっ、ありがとうと笑って、近藤は早速局長印を捺そうとする。

「あ、軽く確認してくれる？ 睡魔と戦いつつ書いたから、とんでもない日本語書いてあるかもしれないわ」

「分かったよ」

報告書に目を通す近藤の横に座り込み、ぽてっと寄りかかる。

すぐにでも寝てしまいそうな姉を、心配そうに見下ろした。

「大丈夫かい？ トシが昨夜は大暴れしたって言ってたけど…」

「だって頭にくるんだものあの薄らハゲ。…女をとことん馬鹿にしてくれちゃって」

「はは…」

怖いなあと苦笑して、報告書に目を通す。多少歪んでいる字はあるものの、間違いは見あたらなかった。

「よしっオッケ！ はい、受理したよ」

近藤がぽんっと局長印をおすのを見届けて、操は安心したように笑う。

これで全ての仕事が終わった。

「もう休んで大丈夫だよ、みい姉」

「そうするわ」

寄りかかっていた肩からずるずると操がずり落ち、そのまま胡座をかいていた近藤の足に頭が乗せられる。

「…みい姉？」

「なあに…」

「…何しての？」

「寝るの…」

このまま夢の世界に旅立ってしまう勢いだ。流石にこんなところで寝てはと、近藤は慌てた。

「いや何もこんなところで…」

「休んで大丈夫って言ったじゃないの…」

「言っただけだ…。こんなところで寝たら風邪ひくよ」

そう言うと、操はもそもそと身じろぎして縮こまった。口元と目元がわずかに緩んでいる。

「お部屋戻るの面倒くさい…。それに貴方あったかいからだいじょうぶ…。もう限界」

すう…と寝息が聞こえ、そのまま寝入ってしまった姉に硬直する。

どうする。布団を敷いて寝かせてやるべきか。

いやいや、自室に連れて行ってやるべきか。

しかしどちらにしても起こすか動かしてしまうことになる。

折角気持ちよさそうに寝ているのを起こすのは気が引ける。

仕方ないので、このままにいることにしよう。

操の気持ちよさそうな寝息だけが、室内に響いていた。

操が見事な寝ぼけっぷりをかましてくれるのは、

また、別のお話。

終

正義なんてただの名前だけ

(下) (後書き)

以上、操の暴走話でした！ (笑) このお話から、随分前に書いた「お休み 操編」のお話に繋がります。こんなことがあったから、操は近藤さんの膝を枕に大爆睡してたんですね。

(、艸、) ププツ。

そうだ。この間の銀魂見ましたか？ 待ちに待った山崎さんのあんパン話！ 超面白かったっ！ ぐ(ゝゝゝ)ノ まさかテレビで恐怖のあんパン画像を見られるなんて思わなかった…。

寝不足＋寝起き〃？（前書き）

「正義なんてただの名前だけ（上）（中）（下）」↓「おやすみ操編」↓「寝不足＋寝起き〃？」の順に読んでいただければ話がつながります。まさかフンドシ仮面ネタでここまでお話が書けるとは思わなかった！ フンドシ仮面に感謝！ でもやってることは認めないっ！（人） ふんっ。

寝不足＋寝起き”？

昼近く。

操は局長室で、まだ弟の膝を枕に寝入っていた。

すうすうと相変わらず気持ちの良さそうな寝息をBGMに、近藤は書類をさばいていく。

姉に枕にされているから動けない。

それ故、やれることと言えば事務仕事。

サボることも出来なくなるから、いつもこうして姉に捕まえておいてもらえば仕事もはかどるのではないかと思ってしまう。

ちらりと目線を流せば、床に置かれた一つのダンボール。

先ほど土方が持ってきたあの箱の中には、数え切れないほどのファインレターが入っているという。

全て操宛て。

昨晚激闘の果てに女の敵フンドシ仮面を逮捕したことは、朝刊の一面をでかでかと飾った。

その感謝の手紙なのだろうと土方は推測していたが、こんな時、近藤は姉の人気の高さを痛感する。

俺のまい姉なのに…とヤキモチを灼いてしまうのは、内緒の話。

「…ん？」

なにやら、外が騒がしい気がする。

気のせいかと思いたかったが、どうやら気のせいではないらしい。

小さいが、誰か怒鳴っているような…。

「局長！ 局長大変です！」

廊下から声がして、失礼しますっ！ とかけ声と同時に襖が開く。

息を切らせた山崎が、部屋に駆け込んできた。

「おお…。どつたのザキ…」

咄然とする近藤を余所に、山崎は局長室に設置されているテレビを付ける。

パツと映し出された光景に、近藤は絶句した。

どこかで見たことがある…程度のものではなかった。

己らが今いるこの屯所。

その正門が、テレビに映し出されている。

それも、大勢の男たちと一緒に…。

「な、なにこれ…！」

「未明にみささんが捕まえたフンドシ仮面の釈放を求める男たちのデモです。数十人は集まっています」

どこのチャンネルを回しても、屯所の正門が映し出される。

男たちの顔には皆、モザイクがかかっていた。

「近藤さん！ てえへんだ、大江戸テレビつけて下せえ！」

ドタバタと駆け込んできた沖田が、慌てたようにそう言う。

操がすうすうと寝ている中でチャンネルを変えてみれば、臨時のニュースが流れていた。

「えー、今日は通常の番組内容を変更し真撰組屯所前で起きたデモの情報をお伝えいたします。ただいま真撰組屯所前で、小規模ですがデモが起きています。危険ですので、近づかないようお願いします」

草野キヤスターが無表情で淡々と伝える中、外の騒ぎは大きくなっていく。わあわあど怒鳴り声が、やかましい。

その喧騒に睡眠を邪魔された操が、もそもそと身じろぎしてのんびり上体を上げた。

「うるさいわねえ、なんの騒ぎ…?」

寝起きのため言葉が頼りない。

「あ、みい姉…。それが…」

「局長やベエ！ 足止めしてる門番ももう限界だ！」

慌てて駆けてきた原田に近藤がなにい！ と声を上げる中、操は寝ぼけ眼でテレビを見た。

テレビではまだ草野キャスターが、中継がつながるまでの取り次ぎをしていた。

『あつ、中継のほうがつながった模様です！ 結野アナ！』

パツと画面が切り替わり、屯所の正門を背にした結野アナがマイク

を持って姿を見せた。

『ハイ、こちらデモが起きている真撰組屯所前です。ご覧ください、逮捕されたフンドシ仮面を釈放するようデモを起こした男性約50名が、口々にフンドシ仮面の釈放要請を訴えています！ あっ、お話お伺いしてもよろしいですか！？』

結野アナが、近くにいた男にマイクを向ける。

画面に映る男はことごとくモザイク顔になっていた。

『今回のデモで、フンドシ仮面が釈放されると思いますか？』

『釈放されなければ困る！ 彼は、我らモテない男にとって心の支えなのだから！』

『そつだそつだ！ 彼だけが俺らの味方だ！』

『ちょ、ちよつと！』

結野アナを押しつけて、モザイク男たちがカメラに向かって叫び立てる。

『釈放！ 釈放！ 釈放っ！』

「……」

操の目が、ずっと細まった。

しかし真剣な顔で話し合いをしている近藤、山崎、原田はそれに気付かず、気付いたのはテレビを見ていた沖田のみだった。

「10番隊はいつでも出動可能ですぜ」

「いや、大事にしないほうが……」

「私が行くわ」

立ち上がり、名乗り出た操に誰もが絶句した。

「無茶だ！ あんな所に飛び込んで行くなんて…」

「大丈夫よ。テレビ中継で流されてるんですもの、まさか民衆の前で仮にも公務員に手を出したりしないでしょ」

「でも、万が一ってことがあつたら…」

心配そうに詰め寄る原田に、操はにっこりと笑いかける。

有無を言わせない、凄みのある笑顔に原田は黙り込んだ。

「その時はその時。助けてちょうだい。どうやら私が原因で勃発した暴動みたいだし、責任はとらなくちゃ」

「でも、みい…」

「ザキ君、お願いしたいことがあるの」

弟の声を遮り、操は山崎の耳に口を寄せる。

「裏口からそつと出て…」

聞こえたのはそこまでだった。

あとはごしょごしょと内緒話になり、山崎の顔から血の気が引いた。

「そ、それは…」

「あら、いいでしょう？ こんな騒ぎを起こしたんだもの。オトシマエつけてもらわなきゃ」

というわけだからよろしくねと、操はにっこり笑って部屋を出た。

かと思いきや、すぐに戻ってきた。

「一晩中シリアスモードでテンションの上げ方加減が分からなくなってるかも知れないわ。変なこと口走っちゃったら止めに出てきてちょうだい」

よろしくと一言残して、操は玄関へと向かう。足音が遠ざかり、しばらく啞然としていた沖田が口を開く。

「ザキ、お前みいさんに何を言われたんですか」

「そ、それが…」

山崎が口にした、操からの指示を聞いて…。

室内にいた3人は絶句したのだった。

江戸の上空。

雲よりも上を飛ぶ戦艦の自室で、隻眼の男は寝転がったまま読書をしていた。

傍らでは焦げた毛色の猫が、気持ちよさそうにのびている。

扉がノックされ、失礼しますと耳に心地よい声と共に扉が開いた。

「晋助様、食堂へ来ていただけますか？」

姿を見せた黒髪的女を見て、猫がニャアと鳴く。

男は覗く右目で、ちらりと女を見た。

「飯か？」

「いいえ。お昼ご飯はまだです」

「なら呼ぶな」

書物に目を落としてしまう男に、女は意地悪く笑う。

「あら、残念ですこと。テレビでとっても面白いものが見られますのに」

「  
…」

江戸の街にある、一軒の万事屋。

銀髪頭の男が、テレビを見ながら呑気にお茶を啜っていた。

何気なく見ていたテレビには、見知った場所が映っていて、そして  
大好きな結野アナまで出演していた。

「兄貴ー、ツラー」

「ツラじゃない桂だ！ ……なんだ」

兄と共に台所にいた長髪の男が、目くじらを立てて顔を出す。

「見ろよ、真撰組の屯所が映ってるぜ」

指さされたテレビを見た長髪の男は、驚いたように目を見張る。

それが屯所ではなく、門から姿を現した女を見たからということに銀髪は気付かない。

「あ……」

「なんだいなんだい？ 真撰組の屯所？」

「わ……！」

これまた長髪の、こちらは首の後ろで一つに束ねている長身の男が先ほど銀髪に「ヅラ」と呼ばれた男にのしかかる形で姿を現す。

ここに集まる3人は一応は兄弟の関係なのだが、この黒い長髪の二人が一番似ていると銀髪は思っている。

「よく分かんねーけど、デモが起こってるらしいぜ」

弟の言葉に、長身の男はもう一人の弟にのしかかったままおやおやと笑った。

「天下の真撰組に喧嘩を売るとは、見上げた根性だな…」

「どうすんですか局長！　　みい姉さん行っちゃったぞ！」

「どうすんだと言われても…。みい姉が何を考えてんだか…」

近藤がオロオロしていると、廊下からドタバタと走ってくる音が聞こえた。

それは徐々に近付き、こちらへ向かってくる。

「近藤さん！　　どうすんだこの暴動！　　辞めさせんなら今すぐ俺が…」

慌てた土方が、部屋に駆け込んでくる。

その気迫にたじろぎながら、近藤は控えめに、

「いま、みい姉が…」

それだけ言った。土方が驚いて、目を見開く。

「姉さんを行かせたのか！？ さっきまで寝てた姉さんを！？」

「そ、そうっすけど…」

原田が頷いた時、テレビの中の怒鳴り声が更に大きくなった。

見てみれば操が門から出てくるところであり、男たちが次々に文句をぶちまける。

『あつ、見えますでしょうか！ たったいま真撰組屯所から、一人の隊士が姿を現しました。あれは…、近藤隊長です！ フンドシ仮面を逮捕した張本人、真撰組唯一の女性隊士近藤操さんです！』

結野アナの解説が飛び、ズームアップで操が綺麗に映し出される。

「…これ録画していい？」

「この状況でよくそんなことが言えますね…」

姉のテレビ出演につい口にしてしまった近藤に、山崎がびしりとツッコむ。

「こともあろうか今の姉さんかよ…」

「なんか問題でもあるんですかい？ 土方さん」

土方は再び息をついて、頭を抱えた。

「忘れたのかよ。寝起き＋寝不足の姉さんは…」

土方は一度、言葉を切った。

土方が言いたいことに気付き、近藤があっ！と声を上げる。

「寝起きと寝不足が合わさった姉さんは、ドSだ…」

操が門を出た瞬間、門の前にいた男たちが口々に思い思いのことを口にした。

何故フンドシ仮面を逮捕したなの、

早く釈放しろだの、好き放題言ってくれる。

操は内心で息をつき、まあまあと男たちをなだめる。

「ちゃんと話は聞くから、一人一人しゃべってちょうだい！ 私は聖徳太子じゃないんだから聞き取れないわ！」

大声で言い聞かせれば、やっと男たちが静かになる。

今度はあからさまな息について、手前にいた男を指さした。

「ハイ、まず貴方」

「わつ、我々は先日逮捕されたフンドシ仮面の釈放を要求する！  
彼は我々の心の支えだったのだ！」

いきなり指名された男が、どもりつつも強気に訴える。

操は大して気にせず、隣の男を指した。

「ハイ次、貴方」

「彼は確かに窃盗犯だったが、我々にとっては義賊だった。釈放される価値はある！」

「…お隣さん」

「我々は彼が悪いことをしたとは思っていない！ 故に彼は犯罪者ではない！ 逮捕される理由もないはずだ！」

「そつだそつだ！ 彼の逮捕は不当だ！」

そつだそつだとあちこちで声が上がる。

いい加減ため息も尽きてしまった。

「女の子の下着を奪っていく人の、どこが犯罪ではないというの？」

操の言葉に、男たちがしんと静まった。

「誰にとつても下着は大事。そんな大事なものを彼は平気で女の子たちから奪っていくのよ？ 中には生活に困っている女の子だっているの。余分な下着なんか買えないわ。…それでも犯罪者ではないと？」

「…」

男たちはぐつと引き下がって…。

それでもなお言い募る。

「しかし、彼はその盗んだ下着で俺たちモテない男の心を支えてくれていたんだぞ！ 誰にも相手にされない気持ちだが、お前に分かってたまるか！」

そつだそつだと、また男たちの声が重なる。

操の額に、血管が浮き始めた。

「確かにそんな気持ちは分かりません。でも一つだけ分かるわ」

キロリと、操は不機嫌そうに男たちを見回した。

「貴方たちは彼から下着を貰った。そしてそれを盗難品と知っていながら、奉行所に届けなかった…。それって犯罪なんじゃない？」

操の言葉は、男たちの心に見えない矢を突き刺した。

だが、それだけではへこたれないのが彼らだった。

追い詰められた男たちは、とうとう開き直りに出た。

「だからなんだ！ どうせ我々モテない男は相手にされないのだから、女から奪った下着ぐらい貰えてもいいはずだ！」

「そうだ！ 奪われなければ俺たちを相手にしろ！」

またギャアギャアと騒ぎ始めた男たちに構っているのが、操は物凄く馬鹿馬鹿しくなった。

寝起きと寝不足が背を押して、ここにいる男たちの心をへし折ってしまうような一言を口にする。

「貴方たち、そんなことを言っているからモテないんだってまだ分からないの？」

ビキッと何かが折れる音がした。

空に浮かぶ戦艦の一室でテレビを見ていた隻眼の男は、

「ククッ…」

思わず、吹き出して…。

江戸の街にある万事屋では、

「姉御辛辣…」

銀髪の男が、テレビに向かって呟いて…。

「あ、言っちゃった…」

操が背にする屯所の局長室では、操の弟がぼそりと呟いた。

「…」

心が折れた男たちを、言っちゃったと言わんばかりの顔をして眺めた操は、とどめの一発をお見舞いした。

「そうそう、言い忘れてたわ。さっきある人に頼んで、あなた達の後ろにいるマスコミ各社の方々をお願いをして貰ったの。正午になったら、あなた達が映ってるテレビ画面のモザイクを全て消して下さいって」

男たちが、さあっと青ざめた。

モザイクが消える、それすなわち素顔がさらされるということだ。

操が先ほど山崎に頼んだのは、このことのようなのだ。

「遠巻きにも女性に下着を寄越せとぬかす変態さん達の顔が全国ネットで流れるまであと30秒ね」

時計を確認しながらさざりと言つてのける操に、男たちがあわあわと慌てた始める。

そんなことをされたら…。

素顔がさらされてしまったら…。

「一生モテない男でいたくなければ、早く立ち去ることをオススメするわ。ほら、時間が迫ってる」

あと25、24…と笑顔でカウントする操をよそに、男たちは悲鳴を上げて去っていった。

最後の男の後ろ姿が見えなくなつてから、操は小さく息をついた。

「傑作……！　ククツ……」

「晋助、笑いすぎ……」

「姉御怖え……」

「……美しい」

「……っ！」

「みいさんが鬼だ…」

「寝不足だと機嫌悪くなるからなあ…」

局長室でそんなやりとりがある中、操はテレビの中で結野アナにインタビューを受けていた。

結野アナに向ける笑顔は、先ほど男たちに向けられていたものとは比べものにならないくらい優しいものだった。

「また姉さん宛てのファンレターが届きそうだな…」

「変なこと言ってみい姉さんを怒らせないようにします…」

テレビの中の操を眺めながら、各自がそれぞれのため息をついた。

『では最後に、もしまたフンドシ仮面のような義賊が出現したらどうしますか？』

再びマイクを向けられ、操は少しだけ首を傾げてうーんと呟いた。

そしてはつきりとした口調で、答えた。

『もちろん捕まえるわ。それによって多くの男性を敵に回すとしてもね』

テレビの中で操は静かに、それでも強く、笑って見せた。

しばらくのあいだ江戸の女性たちの会話の種が、

この全国放送された操であったことは、言うまでもない。

終

寝不足＋寝起き〃？（後書き）

この程度でドSとかないんだろうなあ……。男性に対して酷いこと連発させてますが、けして男性嫌いってわけじゃないですからね！

コミック4巻の「ああやつぱり我が家が一番だわ」の近藤さんの台詞、「特にモテない男になまじ人気があるため……」を「盗まれたパンツを貰って喜んでいる人がいる」と勝手に解釈して、勝手に頭に來て勝手に操に言いたいこと言わせてるだけです。（笑）

## 子守歌

### 操編（前書き）

銀魂キャラクター人気投票結果発表見ましたか？ さすが我らが銀さん！ 3回連続ぶっちぎりの1位！ そしてぱつつあんも3回連続の8位！ これはもう奇跡としか言えません。もう8位はぱつつあんの永久欠番にすればいいと思います！

ゝ（ ）ノ（ ↑はしやぎすぎてもはや言ってることが意味不明…）

子守歌

操編

今宵も会ったし母さまの

お膝に揺られて眠らんせ…。

月に一度行われる合同誕生日会は、伊東も嫌いではなかった。

男共の誕生日などどうでもいいが、やはり酒を飲めるのは嬉しい。

愛しい女が酌をしてくれるなら、なおさら…。

「勲、止めなさいったら！」

酔いが回って、裸踊りを始めてしまった弟を叱り飛ばす彼女は先ほども相当な量の酒を飲んでいたが、素面と変わらない顔色をしていた。

一度彼女を酔わせて、頬を桜に染めた姿を見てみたい。

弟を止めようとする姿をじっと見つめていたら、不意に顔を巡らせた彼女と目があつた。

彼女は目を細めて微笑み…、

それに見惚れてしまったからなのだろうか、いつもより酔いが早かった。

「…たし…まの…。ざにゆら…てんせ…」

誰か歌っている。

この歌を知っている。

遠い昔、一度だけ母が歌ってくれた子守歌。

ああ、

懐かしい…。

目を覚ました時には、宴会場となっていた室内は薄暗かった。

重い体を上げた瞬間、耳元で銅鑼を叩かれたかのような衝撃が頭を襲う。

飲みすぎたと後悔して辺りを見回せば、酔いつぶれた男共があちこちで雑魚寝していた。

ビール瓶を枕に大の字になっている者、酒瓶抱えて縮こまっている者、一人一人に毛布がかけてある。

気付けば自分にも毛布がかけられていて、自室に戻る気力もなかった。そのままた横になろうとした。

「鴨太郎、寝るなら部屋で寝ないと風邪引くわよ」

名を呼ばれてそちらを向けば、壁に寄りかかった操がわずかに差し

込める月明かりに見えた。

「操君…」

何故起きているんだろうと疑問が浮かんで、すぐに消えた。

雑魚寝する隊士全員に毛布をかけてくれたのは、きっと彼女だ。

「…」

その操の膝では、土方が赤い顔でいびきをかいている。

何故か、ムツとした。

「…痛たた…。飲みすぎた…」

ズキズキ痛む頭を押さえて呟くと、操がくすくすと笑った。

「薬持ってくる?。」

「いや、いい…。僕にも膝を貸してくれないかな」

操は一瞬きょんとして、どうぞと空いているほうの膝を叩いた。

嬉しくて、そつと彼女の膝に頭を乗せる。誰かに膝枕をしてもらうなど、初めてだ。

「…ふう」

「大丈夫？」

「大丈夫…でもないかな。大分楽になったよ」

そつ答えれば、良かったわと笑みが返ってくる。

ああ、頭を合わせている土方さえいなければ、彼女を独り占め出来るのに。

「そついえば、さつき歌っていたのは君かい？」

「あら、聞かれちゃった？ トシ君がなかなか落ち着かないから聞

き流す意味で歌ってたのだけど…」

土方のためと知って盛大に気持ちよく寝ている頭を殴りたくなつたが、起き上がる気力もなくなっていたのでやむなく止めた。

「昔聞いたことがある。子守歌かい？」

「そうよ、みんな一度は歌ってもらう歌」

そう、伊東も母に歌ってもらった記憶がある。

たったの、一度きりだけねど。

「…歌って聞かせてくれないかな…？」

思わぬリクエストに操は目を丸くして、それでも丸くした目を和ませて、静かに歌い出した。

「今宵も会つたし母さまの、お膝に揺られて眠らんせ。愛しくなつたら眠らんせ」

三味線がないのが些か寂しいが、それでも彼女の声は、よく通った。

「恋しくなったら眠らんせ。お声も聞けない母さまの、お膝に揺られて眠らんせ…」

操の歌に、ついウトウトしてくる。

柔らかなまどろみの中、最後に確認したのは、

操の、優しい笑顔だった。

「うっ。あゝ……。頭イテエ……」

「もう、トシ君も調子に乗るからよ」

翌朝、宴会場に転がる男どもの世話を、操が行っていた。

水と二日酔いに効く薬を一人一人に渡し、水に浸して絞ったタオルを額に乗せてやる。

「……」

「鴨太郎も大丈夫？」

二人とも飲みすぎ！ と叱られて、土方が笑った気配がした。

笑ってる場合じゃないのよと操が土方を覗き込み、構われている土方にまたムツとする。

だが、別にいい。彼女が介抱してくれるのは土方君、君だけではないのだから。

「ちゃんと休んで、お仕事ちゃんと出てよ」

そつと額に濡れタオルを乗せられ、分かっているよと返す。

操が必要以上に構ってくれるから。

彼女が自分を見てくれるから。

やはり酒が飲める機会は、大好きだ。

終

## 子守歌

操編（後書き）

ひさつびさの鴨太郎さん話！ 鴨さん忘れられずに27位にランク  
イン出来て良かった！ そしてこんな扱いしてしまっでごめんな  
さい…。――（・・）――

占いて信じる？ 信じない？（前書き）

皆さん朝のニュース番組の占いて信じますか？ 私は普段あまり気にしないタチなんです、試験とか大事な日は信じちゃうタイプです。そういう日に限って最悪だったりするんですけどね。（笑）

占いつて信じる？ 信じない？

『全国的に気持ちよい晴天となるもようでございますが、一部夏日となる地域もありますので、お召し物は夏モノがよいと思われます』

「夏モノなんて隊服にはないのよ、結野アナ」

隊服に着替えながら、自室で朝の準備をしていた操はテレビの中の女性アナウンサーに語りかける。

最近めっきり暑くなってきたが、真撰組の隊服には夏服も冬服もない。

暑い時は、ただ上着を脱いでスカーフを外すしかないのだ。

『それでは結野アナのブラック星座占いでございます。今日一番ツイてない方は…』

パツと結野アナが消えた画面から視線を外し、文机に並べた沢山の簪の中から一つを選ぶ。

『おひつじ座のアナタです。今日は災難に見まわれるでしょう』

「あらら、大変」

操はおひつじ座。それでも大して大変とも思わず、髪をまとめて簪で結い上げる。

『特におひつじ座でいま黒い長髪を赤い簪で結い上げている方、今日は面倒な殿方に絡まれないようお気をつけ下さいね』

「え…」

手を止めて、結いかけていた簪を引き抜く。

選んでいた簪は、赤色。

「…」

『運命を切り開く呪文はわたくし結野クリステルの名前。ウツザイ男性にこの名前出してわたくしの番組教えてあげて下さいませね』

「それ番宣！」

『それではよい1日を』

「過ごせるか！」

結野アナに勢いよくツツこんで、テレビを消した。

「面倒な男性って…」

若干男性の敵となっている操には、面倒な男性など沢山いる。

戦闘にでもなるのだろうか。

「あゝ、観なければ良かったわ…」

一つため息をついて、部屋を出た。

念のため簪の色は、赤でないモノにしておいた。

「暑い…」

ジメジメジメジメと蒸し暑い中、巡回のために江戸を歩き回る。

汗は出るわ、脇に抱えた脱いだ隊服も邪魔だわ、全く災難だ。

「結野アナの占いって本当に当たる…」

早く帰りたいわと愚痴った時、ふと前方を横切っていく男が目についた。

柔らかい黄色の髪に、切れ長の瞳。

隣にいる誰かと話しているようだが、あれは…。

「鴨太郎…？」

今は亡き伊東によく似ていた。

似ているというよりも、瓜二つ。

本人…？ まさか。彼は死んだはず…。

「鴨太郎！」

冷静になれずに走り出す。

角を曲がって、伊東に似たその男を追いかけた。

「待つて！ 鴨太郎！」

慌てて手を掴んだら、その男が何事かと振り返った。

似てはいたが、

やはり伊東ではなかった。

「…なにか？」

戸惑った様子で、その男は問いかけてくる。

操ははっと我に返って、掴んでいた手を離れた。

「ごめんなさい！ 知り合いと見間違えてしまって…」

伊東が生きているわけがない。

ちゃんと遺体にも対面したのだ。

なのに、どうかしている…。

「…」

しゅんと肩を下ろす操を男は何か不思議そうな顔をしていたが…。

「ほら見イ清明、貴様が俺に冷たくするから真撰組が捕縛しに来た」

彼の隣を歩いていた黒髪の男にそう言われ、ムツとした表情を作る。

「それだけのことで捕縛されてたまるか！」

「分からぬぞ、貴様の冷たさと意地悪は度がすぎておるからな」

なにおーと喧嘩を始めてしまった男二人に、操は慌てて静止に入る。

「あの！ 本当にごめんなさい！ 間違えただけなの、別に捕縛なんかしに来たんじゃ…」

間に割り込めば、伊東に似た男がほらなと口にする。

黒髪の男がなんじゃつまらんと呟いて、つまらんとはなんじゃとまた喧嘩が始まりそうになる。

操はクスクスと小さく笑って、仲がいいなあと正直に思った。

（それにしても…）

随分珍しい出で立ちをした二人だった。

伊東似の男は白い狩衣姿、黒髪の男は黒い直衣姿だ。

好みなのか、遠征先の京ではよく見た姿だが江戸ではあまり見かけない。

「お前さま、真撰組の近藤操殿でございますな」

黒髪の男にそう言われて、はいと頷く。

「いつもお騒がせしております」

「ちょうどいい、市民を助けると思って相談にのってはくれませぬか」

私がですかと首を傾げると、伊東似の男がまた馬鹿なことをと呟くのは同時。

黒髪男はいちいち馬鹿ではないわと返して、操に向き直る。

「例えばですぞ。ある男が親友の妹に恋をした、男は親友の妹にお近づきになりたいが、妹バカの馬鹿に邪魔されて…」

「道満、誰がバカの馬鹿じゃ！」

「貴様はいちいち喧しいわ！」

仲がいいやら悪いやら、話が一向に進まない。

それでも内容は大体掴めた。

この黒髪の男は、伊東似の男の妹に恋をしているのだろう。

しかし彼曰わく兄バカの親友が、なかなか関係を許してくれずにどうしたらいいか分からない…と。

「その妹さんは、男の方をどう思っているのでしょうか」

「それはもう好…」「嫌っておる」

二人の声が重なり、二人はギンツと睨み合う。

厄介な人たちだなあと思って、ふと朝の占いを思い出す。

『面倒な殿方に絡まれないようお気をつけ下さいね』

（面倒な殿方って、この人たち…？）

面倒と言うより、面倒くさすぎる。

「妹さんがどう思われているかは分かりませんが、少しずつ距離を縮めていったらどうでしょう。その親友さんも、妹に恋する親友が悪い人ではないと分かっているはずですし…」

ほら見ると言わんばかりに、黒髪男は隣の親友を見る。

伊東似の親友は、どこか苦々しい顔をしていた。

「親友と妹さんと、3人でお出かけして親交を深めるのもいいと思います。少しずつ焦らず、あまりしつこいと恋する殿方もお兄さんも嫌われてしまいます」

それは二人とも自覚があったようで、二人して「むむむ…」と唸る。

「そうか、ありがとう。少しずつ焦らず、か」

いえいえ、こんな一隊士の戯れ言を聞いてくれてこちらこそありがとうと思っていると、黒髪男にガシツと手を握られた。

「一度女性に相談したかったのだ。おかげで気が楽になった、男の親友も少しは優しくなってくれるだろう」

「こら、わしは優しくないとほざくか」

伊東似がぴしつと額に血管を浮かせるのを苦笑して見ていた操は、ふと気になって聞いてみた。

「お兄さんにも一途な殿方にも愛される妹さんは本当に素敵な方な

んでしょうね、どんな方かお会いしたいわ」

それが、いけなかった。

「それはもう！」

「美しく聡明で、非の打ち所のない女子おなじで！」

急に意気投合し饒舌になった二人に、操はしまったと思った。

「気立てもよく才能豊かで何よりいつも浮かべているあの笑顔の愛らしいこと――」

「更にその笑顔のままかまされる天然ボケがまたいじらしくて！」

「はあ……」

踏んではいけない地雷を踏んづけてしまったらしい。

あーそーですかと聞き流そうとして、また結野アナの言葉を思い出す。

『ウツザイ男性にこの名前出してわたくしの番組教えてあげて下さいませね』

番組を教えてやれとは、どういうことだろう。

分からなくて、

「結野アナの番組…」

ストレートにそう言ったら、二人がハッと黙り込んだ。

「道満、いま何時じゃ!？」

「3時40分、まずい! クリステルのニュース番組に間に合わない!」

帰るぞと、黒髪男が踵を返して走り出す。

待たんかと後を追いかけてかけた伊東似の男は、そうだと操の元へ戻ってきた。

「そうそう、礼代わりに」

そして操の耳に口を寄せ、囁いた。

「危険なお遊びに手を伸ばすのも構わんが、ほどほどに……」

「……え？」

どういう意味？ と聞こうとしたが、彼は「ではな」と片手を上げて、そしてあつという間に去ってしまった。

「……」

あまりの速さに絶句して呆然と突っ立っていると、後方から声をかけられた。

「みい姉ー、みい姉ー！」

力の抜けそうな声音で振り返ると、自分と同じく隊服を脇に抱えた近藤がウハウハと無邪気に走り寄ってくる。

「ああ、貴方も巡回当番だっけ」

「うん、いま終わらせたとこ。…いやしかし暑いな」

パタパタと手団扇で汗の浮かぶ顔に風を送る弟に操は苦笑して、

「暑いわね」

それは外気が暑いという意味と弟の存在自体が暑苦しいという二つの意味で言ったのだが、近藤がそれに気付く様子はない。

「ね、喫茶店入ってアイスでも食べようよ」

「あら、いいわね」

「みい姉の奢りで！」

「なんでよー！」

勢いよくツツこんだら、いいからいいからと笑顔で流された。

なにソレ、と文句を言いながら、操は間違いなく弟も面倒な男だと思った。

結野アナ、貴女の占いて本当によく当たるのね…。

今度は私の恋愛運でも、占ってほしいものだワ…。

終

占いて信じる？ 信じない？（後書き）

陰陽師トリオ大好きです。とくにニイニイと道満さんの仲の良さが！（ ） また出てきてくれないかな。

あ、ちなみにニイニイがジャンプで初登場したとき、「あれっ、鴨さん！？」と驚いたのは懐かしい思い出です。

## ランキング

### 操編（前書き）

「ランキング」シリーズ操編です。短いです。めっさごっさ短い

しよっぱなから桜を使っているのは、舞台設定がめんどくさかったからです…。（x|x:x;）エー。

桜が舞い落ちる。

春ももう終わる。

そんな庭を眺めながら、操は屯所の喫煙所にいた。喫煙所となつて  
いる縁側からは、花びらをひらひらと舞い散らせる桜の木が、一つ  
見える。

「暑くなつてきたなあ」

「そうねー。隊服に夏用つて出来ないかしら」

庭から視線を外さず、自分に語りかけてきた声に返す。

ぎし…と縁側を軋ませてやってきたのは、既に煙草をくわえた土方  
だった。

操の隣に腰掛けた土方は煙草に火を点けて、操が握っているあるも

のをみつける。

「なんだい？ そりゃ」

「この間のランキング表よ。みんなすごいなあと思って。トシ君も2位にランクインするなんて流石ね」

この間行われた、キャラクターの人気投票。

この土方は前回沖田に負けていた3位から、見事主人公坂田銀時に次ぐ2位に登りつめた。

「ははは。なんてことねえよ」

結局万事屋には負けちまったからなと、土方は笑う。それでも嬉しそうだ。

「総悟君も4位、ザキ君も9位。みんな凄いけど、問題は5位と6位なのよね。腹立つわ」

5位と6位は高杉と桂だ。真撰組の天敵。

「そうだな。まあ、前回のランキングにやとんだ目に遭わされたが…。ランキングなんて本当はいらねえんだよな」

「前回のつて、ザキ君？」

土方がああと頷き、大変だったらしいわねと操は続ける。

「でもそのザキ君も変動なしだし、凄いと言えば凄いと思うけど…」

「ソレ、ザキじゃなくて万事屋の小僧に言ってやんなよ」

そんなこと言われても…と苦笑した操は、そのまま笑みを消して空を見上げる。

「いいなあ、ランクイン…」

羨ましそうな口調に、土方はやべ、と肩をすくめた。

「…悪い、そういう意味で言ってたんじゃない…」

どう足掻いても、操がランクインすることはない。土方はそれに気付いて、申し訳なさそうに言う。

しかし操は、笑っていた。

「いいのよ。それにね、もし私がランクイン出来たとして、どこから入れるかどうか考えてみたの」

「うん、どこら辺だった？」

「まあ、よくて100位かなーって」

ぶっ！

もう無くなりかけていた煙草が、1メートルほど前方へ飛んだ。

「なんだそれ！」

「だって、私が旦那やトシ君に勝てるわけないし、勲にも勝てないだろうし、ってやってたら、100位まで落ちちゃって……」

「…姉さんだつたら、10位以内にランクイン出来ると思うがな」

立ち上がって吹っ飛ばしてしまった煙草を拾い、土方は辟易しながら戻ってくる。

「そうかしら」

「ああ、俺あそう思う。きつと上位3位も夢じゃねーよ。万事屋も蹴り落としちまうかもしれねーぜ」

「流石に主人公を蹴り落とすのは…」

くすくすと、操は苦笑する。

「でもまあ、私に1票でも票をくれる人がいるなら、それにこしたことはないわ。それだけで嬉しいもの」

操の笑顔に、土方はつられて笑った。

「俺の1番は、姉さんたち姉弟だけだな」

ランキングなんてどうだっていいじゃない。

全ての人に理解してもらおうなんて難しいこと。

大事な人に認めて貰えれば、それで幸せだと思わない？

終

## ランキング

### 操編（後書き）

結局遠まわしに操はランクインしないことを言いたかったただけなん  
ですけどね…。

…どうも操相手の真撰組隊士だと、土方さんが一番動かしやすいと  
感じてしまう…。なんでだろう、2位の貫禄？

羞恥（前書き）

今日から6月！ 今日には神威の誕生日！ おめでと神威！（

） 君をお話に書きたいけど難し過ぎる！ 誰かヘルペスミー！

…今回桂さんががぶっ壊れてます。壊れてるっていうかがぶっ飛んでる…？ マジでごめんなさい…。ファンの皆様に殺されそう…。

## 羞恥

久しぶりに操と会えることになった。

兄が用意してくれた、江戸の外れの安宿。

あまり同じ場所を使つては怪しまれるから、何度か場所を変えている。

もう何度目だろう。そのうち使える宿がなくなってしまうかもしれない。

女将の話ではもう”妹”は到着しているらしいが、ワクワクと心を踊らせて入った室内には、操の姿はなかった。

荷物はあるのに何処へ行ったのだらうと首を傾げていると、風呂場のほうから音がした。

「操、いるのか？」

声をかけたら、驚いた声が帰ってきた。

「えっ小太郎！？　ちよつと待って開けないで！」

「何をして……」

カラリと脱衣所の扉を開ければ、立ちのぼる湯気のなか裸に一枚バスタオルを巻いただけの操が、髪を結び上げているところだった。

「待つ……」

「あ」

二人して硬直していたが、先に動いたのは操だった。

「きゃああっ！　エッチ！」

操によって放られた桶が、桂の頭でスッコーン！　といい音をたてた。

「なんで桶を投げつけられなきゃいけないんだ…」

桶が直撃した頭をさすりつつ、桂はぶちぶちと文句を並べている。

ドライヤーで髪を乾かしていた操は、桶を投げてしまったことを反省しつつ顔を背ける。

「待ってって言ったのに小太郎が開けるからでしょう…!」

「だからって投げることはないじゃないか」

「…ごめんなさい。だって見られなくなかったんだもの、裸…」

ドライヤーを止めて、しゅんと肩を下ろす操。

流石に痛かったこともあって、桂は多少意地悪をしたくなった。

「随分扱いが違うな。銀時には下着姿を見せたのだろう」

ぎよつと肩をすくめて、操は桂を見た。

「だ、誰から…」

「銀時本人からだ。あの義賊を捕まえた時のことを教えてくれてな。…他の男には見せて俺には見せないんだな」

つんとそっぱを向いてやると、操はすくめた肩をまた下ろした。

「違うの、貴方には見られたくない。こんな傷だらけの体…」

ちらりと横目で操を伺えば今にも泣きそうな顔をしていて、少しやりすぎたかなと胸が痛んだ。

「貴方に始めて助けられた時の傷も、岡田似蔵とやり合ってついた

傷も、あちこちに残ってる…。他の誰に見られたって構わないけどこんな醜い体…、貴方には見られたくない」

目を伏せてしまった操を、包むように抱きしめる。

そのままよしよしと頭を撫でた。

「すまなかった。言い過ぎた、許せ」

「うん…」

すり寄ってくる操の頭をなで続けながら、まだ少し湿っている髪に頬を寄せる。

「お前の体は醜くなどない。幾度の戦いを生き延びてきた、美しい体だ」

抱き締めた操が、ぴくりと体を強ばらせた。

「美しくなんか…」

「傷はお前を引き立てる飾りだ。強いお前である証だ」

こめかみにそつとキスすれば、やっと操の顔に笑みが浮かんた。

「ありがとう…」

「しかし、銀時がお前の下着姿を見て俺が見ていないというのは、  
なんだか癪だな」

ぼそりとした呟きに操がぱつと顔を上げた。

「…見る気？」

「見せろ」

「そんなはつきり真面目に言う！？ エッチ！」

「今日二回目だぞ！ 誰がエッチだ！」

自分の胸から逃げようとする操をそうはさせじと捕まえておこつと  
するが、操も必死なように身をよじって逃れようとする。

じれったくなつて細い肩を掴んで押し倒したら、頭を強打したよう  
で「痛っ」と声が漏れた。

もがいていたのを押し倒したものだから、掴んだ肩の着物がはだけ  
てしまっていた。

操はそのことに気付かないようで、痛いわねと抗議している。

「…小太郎？」

自分を組み敷いたまま何も言わない桂を見上げて、操は不思議そう  
に首を傾げる。

はだけた白い肩には確かに傷があった。

刀傷だろうか、随分と古いが…。

ずっと親指でなぞれば、操の体がびくりと強張った。

「あ、あの小太郎…」

何か言わんとした操にキスしようと顔を近付けたら、もう一度「小太郎」と呼ばれた。

「ん？」

「あの、遅くなったけど、キャラクターランキング6位おめでとう……」

キス寸前で硬直して、そんなものがあつたなと思い出す。

先日邪魔した万事屋で、上位ランクインおめでとうと兄が大層喜んでくれたものだ。

「おめでたくないぞ、高杉に負けた」

「貴方の真上だったじゃない。次は追い抜ける位置にいるわ」

笑ってくれた操に一つキスを落として、額を合わせて微笑んだ。

「ありがとう」

「それにしても弟たちが20位以内に入るんだもの、松光殿は鼻高々でしょうね」

「ああ、喜んでくれた。お前こそ真撰組が10位内に3人もいなかったか？」

「そうよ。誇らしいわ」

笑顔で語られる彼らが羨ましくて、

妬ましくて…。

「妬けるな」

「私にしてみれば貴方が1位だもの。それじゃダメ？」

「…十分すぎる」

キスし直そうとして顔を近付けたら、そう言えばとタイミングを外され桂は脱力すると共にキスをお預けされることとなった。

「なんで高杉はそんなに出番がないのに上位に入れるのかしら。やっぱりカリスマ性？」

「お前この状態で高杉の名前出すか…」

操を組み敷いているこの状態で、高杉の名前は聞きたくない。

「だって気にならない？」

「うるさい」

黙らせるようにキスを落とせば、

湯上がりの火照った腕が、首に巻きついてきた。

「そういえば、屯所前で男共を蹴散らしたお前は、本当に勇ましかったな」

「み、見てたの…！」

「当たり前だ。お前の勇士を俺が見ないで誰が見る」

「…恥ずかしい…」

終

## 羞恥（後書き）

今日から私のオリキャラたちへの「インタビュー企画」の質問の募集を開始します！ 皆さんからオリキャラたちへの質問を募集して、3人にインタビューしちやおうという企画です。詳しくは私の活動報告をご覧ください！  
ヽ（ ）ノ

## 以心伝心（前書き）

小説家になろう運営より←

『玖月 様

いつも小説家になろうをご利用頂き、ありがとうございます。小説家になろう運営です。

お問い合わせいただきました利用規約改訂のお知らせに関してですが、ユーザの方に必ずご覧いただきたい非常に重要なお知らせとなりますので、現在のように目立つ形での掲示を行なっております。

利用規約改訂のメッセージに関しましては、一ヶ月程で掲載を終了する予定となっておりますので、何卒ご理解ご了承の程、お願い申し上げます。

今後とも小説家になろうを宜しくお願い致します。』

…ってメール来たじゃん！（「□」；）！！

5月24日にメールくれたじゃんいつ消えんのあの邪魔臭いお知らせは！

## 以心伝心

しゃん、と錫杖の涼しげな音が、江戸の町に響いていく。

笠を目深に被り、僧侶姿で江戸を歩き回っていた桂は、江戸の外れがいやに騒がしいことに気付いた。

何か事件かとそちらへ足を向けてみれば、やけにパトカーが多く大通りを走っている。

顔を深く隠して用心深く先へ進めば、ある安宿の前に野次馬が出来ていた。

その奥では張り巡らされた黄色のテープの内側にここからは入らないで下さいと声をかける、自分の敵真撰組。

「何があつた？」

さり気なく野次馬に聞いてみれば、

「テロリストの大量検挙だってよ。この安宿、テロリストたちの拠点だったらしい」

物好きそうなオヤジが、そう教えてくれた。

確かにここは、自分と同じ攘夷浪士たちのアジトでもあった。

何度か会合に出席したことがあるから分かるが、随分とがさつな集団だった。

「……！」

笠を少し上げたその先、黄色のテープの向こうに彼女がいた。

顔に張り付いた髪を払おうともせず、豊かな胸を抱えるように腕を組んで仁王立ちしている。

戦いの女神と呼ばれる彼女の開き気味の瞳孔は、真っ直ぐ安宿の中を睨みつけている。

紅を塗ったような赤い唇の横に、乱暴に血を拭ったあとがあった。

「…！」

視線に気付いた彼女がこちらを向き、自分に気付いた。

一瞬驚いた表情をしてすぐに視線を反らした彼女は、数秒後にまた視線を戻してきた。

瞳孔はまだ開き気味のまま。無表情だがこちらを、ともしれば睨みつけているような視線が、

なにか底知れぬ冷たい美しさを放っていて、目が反らせなかった。

ゆっくりと首を振られる。

「ここにいちやいけない」

目がそう言っていた。

「敵を逃がすのか？」

目でそう語ってみる。果たして伝わるだろうか。

「今は手加減できそうにないの。それに貴方には、借りがあるし」

瞳孔が開いている目が、一瞬だけ和んだ気がした。

「だから、ね？ 早く行つて」

そう言われたような気がして、桂は踵を返した。

流石に捕まるのはごめんだ。

彼女の言葉に甘えて、今日は立ち去るとしよう。

人込みをかき分けて野次馬の群から抜け出し、もう一度振り返ってみたが…。

彼女の姿は、どこにもなかった。

「そんなことまだ覚えていたの？」

同じ布団に潜り込んで俯せで同じ書物を読んでいたら、桂が不意に思い出したことを口にした。

まだ仲が悪くて、本当の敵同士で…。

そして操が遠征にいく前の、ずっと前の話…。

「そんなことって、お前も覚えているじゃないか」

「あとで後悔したんだもの。貴方を逃がしちゃったって」

「お前が見逃したくせによく言う」

「だって戦闘モードのまま貴方と戦ったら、手加減出来ないの目は見えてたもの。大怪我したくなかったでしょ」

そのまま、同じ布団に入っている桂の足を軽く蹴り飛ばす。

「冷たっ！　オイお前の足冷たいぞ」

安宿で逢瀬を交わして、二人で夜を明かしても、布団は二組も必要ない。

二組並べて眠っていたとて、翌日にはどちらかの布団にどちらかが潜り込んで寄り添っているからだ。

敷くだけ無駄…。

「冷え症だもの、仕方ないじゃない」

「だったらちゃんと温かくしろ。女は体を冷やしてはいかん」

「きゃははっ！」

はざりと布団をかけられ、操は嬉しそうに笑う。

そのまま寄り添ってくる操を布団で包むように抱きしめて、シャンプーの香りが漂う彼女の髪に頬をすり寄せた。

『お前、あの時はもう俺が好きだったんだろ』

『違うわよ』

『ならいつからだ？』

『…教えてあげない』

終

## 以心伝心（後書き）

6月26日は桂さんのお誕生日なんですが、誕生日当日のおめでとう話って意外にも体力と思考力使うんですよ。（↑私だけ）でも桂さんのお誕生日お祝いしたので、来週も桂さんお誕生日特集として「桂操」をお送りしたいと思います。…桂操って名前みたいだ。（^ - ^）

ちなみに今日（8日）はサムライハートの発売日！早く聞きたいです！ヽ（ ）ノ

## 後・あと・痕（前書き）

もうすぐ桂さんの誕生日なんで「お誕生日特集」として書いたんですが、こんなもの書いて良かったんだかもうゝ…。（＼／）  
書いていてこっちが恥ずかしくなっていました。ごめんしゃい…。

…これってちょっぴりR15？

## 後・あと・痕

「操」

名前を呼ばれて、操は目を開けた。

しよぼつく目が真っ先に捉えたのは、薄く開かれた彼の整った口。

寝ぼけた頭で、また安宿で彼と逢瀬を交わして一緒に眠りに着いたことを思い出す。

そして今、彼の腕を枕にして眠っていたというわけだ。

「…操」

彼の口が動いた。

なあに？ と頼りない口調で返事をしても、それきり彼は何も言わない。

何だろうと見上げてみれば彼の目は閉ざされていて、規則正しい寝息が繰り返されている。

(…寝てる?)

だが今確かに呼ばれた。

(…まさか寝言?)

その疑問が、次の瞬間に確信に変わった。

「…みさお」

ふにゃふにゃした声が漏れ、ぎゅっと抱きしめる。

自分の夢を見てくれているのだろうか、

だったら嬉しい。

「もう、なによう」

嬉しくて夢心地に頼ずりしたら、桂も分かったのか嬉しそうにふわふわ笑って、操をぎゅっと抱きしめる。

「わわ…」

彼の肩に顔を埋めるような形になってしまった。

寝惚けていたし、

寝惚けていたので…。

これはきつと夢だと思い、まあいいかと寄り添って目を閉じる。

そしてふと不安に襲われる。

夢なら覚めないでほしい。

いつまで、こうして彼の側にいられるのか…。

関係をなかったことにするのならいつでも出来る。

その証拠に、この関係になって丸一年、操は一度も桂に抱かれていない。

体の関係まで持ってしまえば、もう後戻りは出来ない…。。

以前怯えたように言った桂を思い出す。

『俺はもうお前を手放すことなど出来ない。これ以上お前を闇に引きずり込むことも、出来ない…』

あるときも布団の中で、こうして抱きしめられていた。

『俺は臆病者だ。俺はどうなっても一向に構わない。だが俺と関わったことでお前まで命の危険に晒すのは…絶対に嫌だ』

だからお前は抱けないと、桂は言った。

もう戻れなくなる、それが怖いから…。

「…別にいいのよ、滅茶苦茶に抱いても…」

私は貴方のものだから、貴方がどうしようと貴方の勝手。

そばにいてくれるだけで嬉しいけれど、私だって貴方がほしい。

女って欲深い生き物なのよ？

「ねえ小太郎…」

もうすぐ貴方の誕生日。

当日に渡せそうにないからさつき渡したけど、貴方は少し早い誕生日プレゼントを喜んでくれたわね…。

折角だからもう一つプレゼント。

私は貴方のものだけど、貴方も私のものだもの…。

夢だからと、操も大胆になっていたのだろう。

寝惚けていた操は、桂の肩口に顔を埋めて、目を閉じた。

「おはよう、操」

「おはよう」

上体を起こして伸びをする桂の首にあるものを見つけ、二度寝していた操は完璧に目を覚ました。

夢だと思っていたのに…。

私、寝ぼけてとんでもないことを…！

「…？ どうした？ 操」

頭から布団に潜り込んでしまった操に、桂は不思議そうな顔で首を傾げる。

「ちょっと自己嫌悪…」

「？」

布団から漏れた言葉に、桂は更に首を傾げたのだった。

「づっ、ツラァ!？」

「ツラじゃない桂だ。なんだ、デカい声を出して」

昼間、万事屋に顔を出して茶を飲んでいた桂の脇を通り過ぎた銀時が、素っ頓狂な声を出した。

銀時はそのまま、桂の髪をのけて首をさらけ出す。

「なんだ、何をやっているんだ貴様は」

訝しげに聞いてくる桂には答えず、銀時は先ほど自分が見たのが幻覚ではないと確信した。

それは確かにあった。

桂の女のような細い首筋に、紅い痕。

「…桂さん、コレ…なに？」

テンパって、呼び方も桂さんになってしまっている。

桂は自分の首筋などもちろん見えないわけで、不思議そうな顔をしていた。

「これ、とは？」

「痕だよ！ この紅い痕！ まさかお前！」

「なにアル？ 私にも見せるヨロシ！」

騒ぐ銀時に興味をそそられたのか、神楽がひょこりと覗き込む。

慌てたのは銀時だ。

「ダメー！ 未成年はまだ見ちゃダメー！」

そのまま神楽の目を覆うとしたが、神楽も負けてはいなかった。

「銀ちゃんだけずるいアル！ 見せるネ！」

銀時の手をすり抜けた神楽が、桂の首筋に残る紅い痕を見つける。

そして不思議そうに首を傾げた。

「リーダー、何があるんだ？」

「バツ…ツラ…！」

「ここにポツツと紅い痕があるヨ。虫にでもさされたアルか？」

神楽がそれを指先でつついてくれたので、桂はやっとその存在に気付くことが出来た。

後ろで騒いでいた銀時は、「え、虫…？」と大人しくなった。

「痒くはないのだが…」

「ふうん、随分ヘンな場所にさす虫アル」

「そうだな」

なんだよ虫かよと安心してフラフラと台所に入った銀時は、茶菓子を出していた松光とぶち当たる。

「おっと。どうしたんだい？ 銀時」

「いや、ツラの首に紅い痕があつて…。その、キツ…キ…」

「キスマークかと思つたのかい？」

躊躇っていたその単語をあつさり出され、銀時は飛び上がる。

「そーゆーこと言わない！ 未成年の神楽に聞かれるから言わない！」

「分かつた分かつた」

騒ぐ銀時を宥め、松光はクスクス笑う。

「虫さされか何かだろう？ 俺もこの間刺されたからな」

「…ならいいけどな」

「なんだい、小太郎に彼女が出来るのが不満かい？」

そう聞いたら、別にイと返された。

「ただ妬ましいだけだし…」

「それを総称して不満と言うと思うが…。まあいい、これ持って行つてくれ。みんなで食べよう」

「おっ、くず餅！」

皿を受け取り、くず餅だぜーと楽しそうにリビングに消えた銀時に苦笑して、

松光は小さくため息をついた。

桂の首についていたという紅い痕は、十中八九キスマーク。

つけられる人間など、ひとりしかない。

(…貴女も大胆ですね、操殿)

どうやら関係はうまくいっていることに安心して、

松光はそっと、そう思った。

終

## 後・あと・痕（後書き）

読者様の中には神楽ちゃんと同じ年の健全で純粋な方もいてくれるの  
のに一体なんてモノ書いたんだ私……。 （、□、）

ちよつと苦手な…（前書き）

もうすぐ（26日）桂さんの誕生日ですが、もう梅雨だし（？）あまり（桂さんと操が）ベタベタしてるのもアレなので今回はかなり前に書いて操フォルダに突っ込んであった「操とトッシー」のお話です！ かなり長いです！（^^）v

ちょっと苦手な…

あれはもう、2年も前のこと。

伊東が動乱を起こして沢山の隊士と共に死んだと連絡を貰った時、操は京への遠征中だった。

弟から電話を貰って伊東の死を知らされた後、弟はきつと沈み込んでいるだろうと誰にも言わずに江戸の屯所に帰ったらやはり落ち込んでいて、

思う存分泣かせてやって、伊東の遺体と対面して、

誰にも知られずに京へ戻ってきた。

部下たちは操が一晩で江戸と京を往復したなど思いもしないで、

多少目の赤い操を心配して、無駄に明るく振る舞ってくれた。

あまり心配かけてはいけないかと思いつつも通り笑ってはいたが、胸の奥の悲しみは消えやしなかった。

（私が江戸にいたら…）

何かが変わったかもしれないと何度も考えて、

そんな操を、部下たちがそっとしておいてくれていた…、夜。

「隊長！ 操隊長！ 大変です！」

湯上がりの浴衣姿でぼうつとしていたら、部下の一人である設楽がドタバタと廊下を駆けてきた。

その顔は引きつり、お化けでもみたような顔だった。

「どうしたの？ 設楽」

「大変です！ と、屯所の前に…！」

京での屯所として借りている寺、磯<sup>いそ</sup>富<sup>とみ</sup>寺。

新しいと言える寺ではないが、本当にお化けでも出たのだろうか。

「ひつ、土方副長が…！」

息を飲んだ操は、そのまま弾かれたように立ち上がった。

雪駄に足を突っ込んで急ぎ足で境内を渡ると、古びた門を見上げるようにして着流し姿の土方が立っていた。

足を止めた操に気付き、淡く微笑む。

「…姉さん」

いつもは受話器越しに聞いていた声に安心してしまい、操の瞳に涙が浮かぶ。

自分のいないところで彼らが壮絶な戦いを繰り広げたことが、

自分も参加出来なかったことが悲しくて、

操は土方の腕に飛び込んでいた。

「トシ君…っ」

「姉さん…、ごめん…」

ぎゅっと抱きしめてくれる土方の胸に顔を押し付けて、小さく首を振る。

謝るのは、彼ではない。

「謝らないで…。トシ君が悪いんじゃないわ」

顔を離して見上げると、日頃見ない懐かしいとも言える精悍な顔がそこにあった。

「久しぶりね。…トシ君全然変わってない。色男のまま」

ほつれ髪を耳にかけてやると、やっと土方の顔に笑顔が浮かんだ。

「人間早々変わりやしねーよ。…姉さんも相変わらずだな、安心した」

流れた涙をそつと親指ですくい取ってくれる土方に、操は鼻を嚙つて笑いかけた。

彼の言う「相変わらず」が何を指すのかは分からないが、今はそれどころではない。

「列車で来たの？」

「ああ。本場ならなんとかなると思ってた…」

「本場…？」

よく分からぬ単語に首を傾げた操は、彼が腰にさしている刀を見て目を丸くした。

以前彼が使っていたものではない。

「トシ君、その刀…」

土方は操の問いには答えなかった。

代わりに、何か手紙のようなものを操に差し出す。

「なあに？」

「驚くかもしれねエが、それ読んで理解してくれ…。もう限界だ」

「え…？」

土方の顔が一瞬辛そうに歪み、次の瞬間には俯いてしまう。

具合でも悪いのかと心配になって覗き込もうとしたら、ガシッと手を握られた。

「おお！ 貴女が十四郎の言っていた近藤操氏でござるか！ いやあこれはまた美しい！」

操に向けられた顔は確かに土方のものだったが、なんだか言動がおかしい。

近藤操…氏？      ござる…？

「…は？」

「あ、拙者トッシーでござる。この刀のせいで生まれた第二の人格と言っても過言ではないでござるが…」

なにやら説明してくれるが、操にはよく分からない。

トッシー…？

刀のせいで生まれた人格…？

「…あ」

これは誰だ。

厳格な土方はこんな言動は取らない。

「操氏、 ONE PIECE の蛇姫に似てるでござるな。 もう少し際どい服を着てお化粧もしたら…」

もう限界だった。

何がどうなったという疑問よりも、これ以上こんな土方を見たくない  
いと頭が切り替わってしまったらしい。

操は握られていた手で土方の胸ぐらを掴むと、くるりと背を向けた。

「っ…きゃああっ！」

「のああっ!？」

背負い投げでぶん投げられた土方が、寺の池に落ちて高い水飛沫を  
たてた。

まだ様子のおかしいびしょ濡れの土方を風呂に入れている間、操は一室で土方から受け取った手紙を広げていた。

恐らく現れる妙なヘタレの自分は「トツシー」と言って、自分の第二の人格であること。

自分が所持していた妖刀、「村麻紗」の呪いによってそんな人格が生まれたこと。

「トツシー」が表にいるときは自分は精神の内側で眠っていて、時折なんの前触れもなく入れ替わってしまうこと。

いきなり「十四郎」から「トツシー」に成り変わって、操が驚かないようにこの手紙を残しておいてくれたらしい。

にわかには信じられなかったが、彼がこんな手のこんだイタズラをするとは考え難かったので信じるしかなかった。

（妖刀ね…）

京で仕事をしていると、妖だの幽霊だの話はよく聞く。

この屯所の近くには、陰陽師のお屋敷まであるほどだ。

（本当にあるんだ…）

妖刀など、物語の中の話と思っていたのに…。

「…ハア」

思わずテーブルに肘をついてため息をついたら、ふと襖からの視線に気付く。

部下たち数人が、ひょいと顔だけを覗かせてこちらを伺っていた。

「どうしたの？」

「隊長、土方副長どうしちゃったツスカ？ あんな副長初めて見た…」

土方の異常に、部下たちも戸惑っているらしい。

操は安心させるように笑いかけた。

「妖刀の呪いで、ヘタレオタクの幽霊に取り憑かれてしまったんですって。私たちに害はないみたいだから…」

「じゃああの副長は…」

「トシ君の姿をした赤の他人と思っていいみたいね。詳しいことは本人から聞き出すから、あなた達はもう休んでいて」

洩る部下たちに明日も早いからと続けると、部下はしびしび肩をすくめて、お休みなさいと呟いた。

お休みと操が返事をすれば、名残惜しそうにそれぞれの部屋に散っていく。

気配が遠退いてから、操は小さくため息をついた。

伊東が動乱を起こしたこの時期に、土方は相当な苦勞をしていたら

しい。

これからどうするのかなともう一度ため息をつく、廊下から陽気な鼻歌が聞こえてきた。

操もメロディーくらい知っている。

「  
…」

これはプ。キュアのオープニング曲だ。

なんでこの曲！？と絶句していると、タオルを首に引っ掛けた土方…いや、トッシーが上機嫌に現れた。

手には妖刀という刀が握られている。

「お風呂出たでござるよ」

「見れば分かるわ…」

見た目はほとんど土方と相違ない。

なのに、精神はまったくの別だなんて…。

「トシく…今はトッシーね。そこに座って」

「はいはい」

テーブルを挟んだ操の向かいに腰掛けるトッシー。

キリツと冷たい刃のような雰囲気を漂わせる土方とは違って、どうもこのトッシーは脱力を誘う。

「トシ君が残してくれた手紙から、大体のことは理解しました。…本当に妖刀の呪いなの？」

「そーでござるよ」

トッシーはニコニコと笑いながら、上体を左右に揺らした。

「僕はこの村麻紗の呪いによって生まれたもう一つの人格。十四郎は僕を自分の体から離そうと躍起になってるでござる」

「…どうやったら離れるの?」

「さあ、それは拙者にも…」

ゆらゆらと絶え間なく体を揺らしている動作が、どうも勘に触った。

「ゆらゆらしない! 背筋は伸ばす!」

びしりと言われ、トッシーはしゃんと背を伸ばす。

そして操が怒っていないかおどおどと伺って、口を開く。

「僧侶や陰陽師に頼めばなんとかするのではないかと、十四郎はここまでやってきたでござるよ。京には本場の陰陽師もいるだろうと」

「ああ、だから” 本場 ”…」

先ほど土方に会ったときの、「本場ならなんとかあると思って…」という言葉が気になっていたのだ。

どうやらそういつことらしい。

「時に、操氏」

テーブルから身を乗り出され、ずいと顔が近づく。

真面目な顔がそこにあつて、土方に戻ったかなと一瞬思った時だった。

「コスプレなんかに興味は？」

操の額に血管が浮き、テーブルに乗り出しているトッシーの後頭部に手を伸ばすや否や、その顔をテーブルに叩きつける。

ゴンっという音がした。

「痛いでござるよ操氏いゝ」

「お願いだからトシ君の顔で馬鹿な発言止めてちょうだい」

不機嫌な口調でたしなめると、トッシーは理不尽に怒られたかように肩をすくめて見せた。

「操氏はオタクが嫌いでござるか？」

「いいえ」

「だって僕には冷たい……」

しゅんと叱られた子供のように肩を落としたトッシーに、少しだけ言い過ぎたかなと罪悪感が浮かぶ。

「べ、別に嫌いじゃないわよ。いくら色白でメタボでシャツをズボンに突っ込んでシャツの胸ポケットにはキャラクターフィギュア入れててポスターが突き出たリュック背負ってたって！ その人それぞれなんだからいいでしょう！」

「随分古典的なオタクでござる……」

「もちろん貴方のことだって嫌いじゃない！ けど、貴方が入っているのがよく知るトシ君の体だってことが違和感ありすぎるの！ セーラー。ーンのうさ。ちゃんが、ドジっ子からいきなりガリ勉の優等生になったら貴方だって違和感抱くでしょう！？」

「おつ！ 操氏もセー。ームーン世代でござるか！ 僕ね、う。ぎちゃんよりどっちかっていうとレ。ちゃんのほうが…」

呑気に語るトッシーにだんだんイライラが増して、操はとうとうテーブルを叩きつけた。

「おだまんなさい！！」

ひっと小さい悲鳴と共にトッシーがびくりと身をすくませる。

「…とにかく貴方のことはよく分かったわ。とりあえず今日はもう遅いし、貴方も休みなさい」

私も寝るわと一言残して部屋を出て、小さくため息をつく。

全く何故、こんなことになったのだろう…。

翌朝、あまりよく眠れずふらふらする頭で洗面所までいくと、すでに土方が顔を洗っていた。

いや待てトッシーかもと警戒していると、顔を上げた” カレ ”  
が操に気付いた。

「姉さん、おはよう」

呼ばれた愛称で、土方であると気付く。

彼らしい彼にホッと息が漏れた。

「良かった。トシ君だ…」

「昨日は悪かったな。…驚いたろ」

少しね、と肩をすくめると、土方は少しだけ口角を釣り上げる。

「いきなり成り変わっちまうんだ。俺にもどうしようもなくてよう」

「知り合った陰陽師さんを紹介してあげる。そこでトッシーが離れてくれればいいけど…」

どうだかなと、土方は笑う

あまりトッシーのことを気にしているようには見えない素振りだ。

「そっぴゃ、トッシーの奴隷しそっだつたぜ？　こんな美人さん久しぶりに見たって」

「会話できるの？」

「夜眠つてるときにな。どちらかが表に出てる時はどちらかは寝てて会話も出来ねえが、体本体が寝ちまえば二人とも精神の狭間で起きてられる。…そっぴゃ美人だけど怖かつたって言つてたな。何したんだ？」

怒鳴つたりど突いたりしたことは黙つていよう。

「とりあえず陰陽師のとこや寺を回つて、除霊して貰おうと考えてる。こいつも成仏…」

土方の言葉がふいに止まった。

どうしたのだろうと目を瞬かせていると、土方の顔がふっ…と下を向く。

…まさか。

「おはよーでござるよ操氏い！」

陽気な声と同時に、ぱつと腕を広げられた。

操の額に血管が浮いた。

「おはようのハグを〜！」

「いきなり出てくるなこのヘタレオタク！」

胸ぐらを掴んで飛ばされたトッシーが、洗面所の扉に激突して崩れ落ちた。

それから2日間、土方兼トツシーは数々の神社仏閣をたずねあらゆるまじない念仏を唱えてもらったものの、土方とトツシーは離れることは出来なかった。

夜、縁側でしょぼくれているカレに熱燭を持って行くと、肩を落とした背中がいつもより寂しそうに見えた。

「今はどっち？」

「…操氏…」

「トツシーね」

こちらに向けられた顔は元気がなく、色も冴えなかった。

小さなため息も、とめどなく漏れる。

「結局成果はナシでござる…」

「そんなに落ち込みなさんな。お酒飲める？」

「…少しは…」

熱燗を乗せたお盆を縁側に置き、杯の一つをトッシーへ。

とくとくと注いでやると、トッシーは恐縮した様子でいただきますとつなげる。

「成仏するかもしれないっていうのに、貴方もなんとかしたいと思っっているのね」

「あまり十四郎にも迷惑はかけられないでござる…。それに操氏も、早く十四郎から僕が消えてほしいでしょう？」

自分の杯に酒をつぎ、ぐいと飲み干した操はまあね…と呟いた。

「確かにトシ君から出て欲しいのは本心だけど…。でも、折角仲良くなれたのにトッシーが消えちゃうのは嫌よ」

杯を傾けようとしていたトッシーが、驚いたように操を見た。

操は薄く笑っていた。

「トッシーだって、トシ君と離れるのは少し寂しいでしょう？」

トッシーは俯いて、それは…と口ごもる。

「トシ君も貴方と向き合おうとしているし…。もう足掻くのはいいんじゃない？ お別れの時が来るまでトシ君と一緒にいても」

「…十四郎には、僕存在は重すぎるのでは…」

「馬鹿言いなさんな。私たち真撰組の体は、とうの昔に霊やら祟りやらで定員オーバーよ。今まで踏み越えてきた敵や仲間たちの怨念でね。今更呪いの一つや二つ増えたところでなにも変わりはないわ」

きつと土方は、トッシーを重荷だなどと思っていない。

きつと土方は…。

「トシ君に聞いてみなさいな。トシ君はきっと、貴方を背負っていき氣よ」

「…僕は…」

「まあ、照れ屋なトシ君は絶対そんなこと言わないでしょうけど」

杯に酒を注いで飲み干すと、トツシーのぼそぼそとしたつぶやきが聞こえてきた。

「拙者は十四郎が羨ましいでござるよ。男らしくて強くて、自分の意志があつて…。僕とは正反対だ」

そうねとトツシーの杯に酒を注ぐとしたら、彼の杯はまだ酒を減らしてはいなかった。

「僕、もう少し十四郎の元で」侍「とは何かを学びたい」

「お別れはそれからでも、遅くはないと思うけどね。トシ君にお願いしてみたら？」

トッシーの顔に、やっと笑みが浮かんだ。

「そうするでござる」

操も安心して何度か空になった杯を酒で満たし、それをトッシーの前へ掲げる。

意図に気付いたトッシーが、一度として空にしてはいなかった杯を掲げて嬉しそうに笑った。

「乾杯〜！」

チンッと杯が澄んだ高い音を立て、二人して酒を飲み干した。

…そのときだった。

カラン…。

トッシーの手から杯が落ちた。

どうしたのだろうと俯いてしまった顔を覗き込んだら、その顔がガバツと上げられた。

「うわっ！」

「きゃっ!?!」

びつくりして小さく悲鳴を上げたら、一番びつくりしていたカレが目を瞬かせた。

「戻った…」

「あれ…、トシ君？ 入れ替わったの？」

「そうみてえだ…。今まで寝るまで戻るなんてなかったのに…。姉さん奴に何かしたか？」

特にこれと言って何かした訳ではないのだが…。

「あ、トッシーお酒飲んでたわ」

「酒え！？ あいつそんなに酒弱いのか？」

「みたいね。お猪口一杯で”寝ちゃう”なんて」

くすくす笑って、落ちた杯を布で綺麗に拭う。

土方とトッシーの共通点はないと思っていたが、「酒に弱い」のはどうやら同じらしい。

「…姉さん。俺、アイツを追い出すの諦めようと思う」

突然の告白に、操は杯を拭く手を止めた。

「なんだかんだでアイツも悪い奴じゃねエし、俺の中には他の奴の呪いで定員オーバーで、奴ぐらい増えたって変わりやしねえ…」

「…そうね。トッシーも喜ぶわ」

杯を渡し、酒を並々と注ぎ込む。

「トッシーのこと、お願いね」

「ああ…」

「勲や、真撰組のことも…。トシ君がいてくれないと勲泣いちゃうわ」

「…ああ」

酒を飲み干し、小さく頷く土方。

明日、帰ろうと思う。

不意に紡がれた言葉に、操はええと微笑んだ。

「気をつけてね…」

そんなことがあって土方は江戸に戻ったが、しばらくしてトッシーが成仏したと手紙を貰った。

何やら生きた証として「オタク道」を極めた後、満足しての昇天だったらしいが、操にはよく分からない。

トッシーが操宛に残したという手紙が同封されていたので読んでみると、「トッシー」という自分を認めてくれた仲間が沢山出来て、そして自分と向き合ってくれた土方と出会えて幸せだったと書かれていた。

自分はいつかきつと成仏出来るだろう。それも、操と再びあいまみえる前に…。

あの時さよならも言わずにお別れしてしまって、実は心残りがあったそうだ。

操に一つお願いしたいことがあったらしい。

『蛇姫のコスプレをして、見下し過ぎて見上げてるのポーズをして欲しかったでござる。それで拙者と写真を…』

「阿呆かーっ！」

そこまで読んで、手紙を破りたくなった。

「30過ぎた女にコスプレさせるなこのヘタレオタク！」

「た、隊長どうしたんですか！」

空に向かって怒鳴ったものの、その怒鳴り声が天のトッシーに届いたかは…。

トッシーのみぞ知る話である。

終

ちょっと苦手な…（後書き）

皆さんこの間のアニメ銀魂観ましたか！ いやいやもう銀さんはかつこいいわ次郎長さんは渋くて素敵だわ懐かしい面子が揃ってるわでハシャギまくってたんですが、一番テンション上がったのがEDのテロップを見た時…

「平賀源外

青野武」

青野さんだあ！ 〵（ ）ノ やっぱり源外さんは青野さんでなくっちゃー…。と騒いだんですが、でもこれといって長い台詞なかったし（台詞どころかちつとも喋ってくんなかった…）ちゃんとアフレコ現場に来れたのかなあ…。帰ってきてほしいなあ青野さん…。（――；）

## クールビズ（前書き）

今週のお話は、旭日千冬さんが提案して下さった「クールビズ」のお話です。5月末には提案していただいたにもかかわらずこんなにも投稿が遅くなったのは、クールビズを詳しく理解していないすつとことつこいな玖月のせいです。旭日千冬さん、遅くなってすみませんでした。m（――）m

あ、「意志を継ぐ者」40万アクセス突破しました。皆様、本当にありがとうございます！、（――）／

## クールビズ

じりじりと照りつける太陽が熱い。

じめじめとまとわり付く湿気がうっとおしい。

涼もつと日の当たらない縁側に座っていても、時折ふく熱風が汗をさそう。

暑い、

とにかく暑い。

「熱いわね……」

ハスキーな声がして振り向けば、簪で髪をアップにした操が扇子で顔に風を送りながら歩いてくる。

彼女も暑さに参っているようだ。

「みい姉の髪型涼しそう」

「そう？ はい、差し入れ」

差し出された缶コーヒーに目を輝かせ、一つ礼を述べてから受け取った。

キンキンに冷えた缶は、手がいたくなりそうなのだ。

姉が隣に座る中でプルタブを開けて喉に流し込めば、歯が浮きそうなほどに冷えたコーヒーが喉を滑っていった。

「まだ7月にも入ってないのに、この暑さはないわよね……」

同じくコーヒーを口に運ぶ姉に、うんうんと同意した。

「日射病で倒れちゃうよ」

「ねえ、いつそのこと私たちもクールビズしない？ このご時世だもの。反対はされないと思うけど」

それはいい案だ。

無理してかつつりした格好でいるより、多少ラフなほうが動きやすい。

それに熱中症対策にもなる。

「ジャケットを脱いで、スカーフも外して…」

「ワイシャツも半袖にしていんじゃない？」

「そうだね、あとはみい姉の制服をミニスカートに…」

冗談をかましたら、止めてよと苦笑された。

「三十路過ぎてミニスカートはないわよ」

「そうかなあ」

時折浴衣の裾から覗く姉の足は、とても綺麗だと思うのだが…。

「これで少しは涼しくなればいいけど。ただでさえ暑苦しい貴方も少しはマシになるかも」

コーヒーを飲み干しながらさり気なく飛ばされた冗談まじりの言葉は…、

彼女の弟の心にぐっさり突き刺さった。

「と！　　いうわけで！　　真撰組にもクールビズ導入します！」

翌日の申し送りでそう言い放った近藤の目には、うつすらと涙が滲

んでいた。

原田が不思議そうに首を傾げて、操に耳打つ。

「みい姉さん、なんだか局長半泣きになってないかい？」

「そうね、どうしたのかしら」

自分のさり気ない一言が、弟を凹ませていたとは知らない操だった。

翌日から、近藤の言うとおりクールビズが実施された。

暑苦しいジャケットを脱ぎ、スカーフを外し、

ベストは来ているが、ワイシャツは半袖になった。

たったそれだけのことだったが、前よりは随分楽になったらしい。

清々しそうな顔をしている隊士たちに満足していた近藤だったが、聞くに耐えない意見を聞いてしまった。

「なあなあお前見た？ 操隊長の白い二の腕！」

「見た見ためっちゃほせーの！ 手首も力入れたら折れそうだし！」

またある時は…。

「簪で結い上げてる近藤隊長の項、エロいよな」

「汗で首に張り付くおくれ髪がまた色っぽくて！」

姉の美しさを自慢出来るのは大いに結構なのだが、姉の「色っぽさ」

を見られて鼻の下を伸ばされるのはどうにも我慢がならない。

いつかは姉の色気に惹かれた隊士の誰かに、姉を渡さないといけな  
いかもしれない。

それだけは嫌だ。

姉は自分だけのものだ！

「やっぱり廃止！ クールビズ廃止！」

更に翌朝の早朝、近藤は目をつり上げて、ばしばしテーブルを叩き

ながら宣言した。

えーっとブーイングが上がっても、「駄目！ 廃止！」と目をつり上げたまま譲らない。

「それから近藤隊長は髪を結い上げちゃいけません！ 局長命令です！」

「何それ!？」

暴動に近い近藤の命令に、操は目を剥くしかなかった。

いつもは隊士たちの最大の理解者である近藤が、珍しく使った「局長の権限」によって、

真撰組のクールビズはたったの1日で無くなってしまったそうだ。

終

## クールビズ（後書き）

いやいや、近藤さん暴走させるの楽しかったっ！（ ）

そう言えば今週のアニメ銀魂「お控えなすって！」は観ましたか！  
？ 最後の椿親子のやりとり、思わず泣いてしまいました。本当にいいお話…。（つゝ）

あと、病院を急襲しようとした華蛇さんの衣装に大きなスリットが入ってて、「あ、姫華の戦闘服みたい！」と一人ではしゃいだのは内緒です。

次回は「丁か半か」ですよっ！ 待ってました高杉さん！（ ）

とにもかくにも、旭日千冬さん、ネタの提供ありがとうございました。またネタ下s…（がめついで強制終了）

## 七夕 操編（前書き）

「七夕シリーズ」操編です。短いです。m（――）m

ちなみに今日（6日）は真撰組10番隊隊長の原田さんのお誕生日です！

さらに明日（7日）はお登勢さんと陸奥っちゃん。さらにさらに8日は総悟君の誕生日です！ 7月はお誕生日ラッシュや！ゝ（――）ゝ／

## 七夕

### 操編

7月7日、七夕のこの日に空が晴れる確率は極めて少ない。

折角の夜なのに、空は薄い雲に覆われ星どころか月さえ見えやしない。

彦星と織り姫は、雲の上でちゃんと出会えたのだろうか。

（二人に比べれば、私たちなんかまだ幸せか）

縁側に腰掛け、煙管をふかして空を見上げながらぼんやり思つ。

会おうと思えばいつだって会える。

ただし、二人きりで… だけれど。

「あいにくの天気だな」

声をかけられて振り返れば、火のついてない煙草をくわえた土方が歩みよってくる。

途中、柱にくくりつけられた飾りだらけの笹の葉をちらりと見て、土方は操の隣に腰掛けた。

「ねえ、折角の七夕なのに」

「これじゃあ願い事なんか叶いやしねーよ」

操もちらりと、後方の笹の葉を見やる。

イベント大好きな弟がどこからか調達してきた見事な笹の葉。

はいコレに願い事書いてと勧めてきた近藤は、無邪気な子供のようだった。

「そうだ姉さん、ものは相談なんだが…」

「なあに？」

「明日、総悟の誕生日だろ？　誕生日プレゼント用意したか？」

そう、7月8日は沖田の誕生日。

プレゼントは何がいい？　と聞いたら近藤姉弟と3人でお出かけで  
できればいいと言われ、困った。

「ええ、用意したわ」

「あいつ何が欲しいのかねエ…。まあ、俺からは受け取らねえだろ  
うけどよ」

「そんなことないわよ」

クスクス笑って、土方も主役の一人だった5月の誕生日会を思い出  
す。

沖田は珍しく土方に有名な酒を贈ったと思ったら、ちゃっかり自分  
も飲んでいた。

「で、姉さんは何を贈るんだ？」

「教えな〜い」

「意地悪すんなよ、教えてくれよ」

軽く肩を押されふふっと笑った操は、土方の耳に口を寄せてこそそそと囁く。

「ああ…、なるほど。姉さんらしいな」

「明日まで総悟君に言っちゃだめよ」

分かったと頷いた土方は、それでも操の答えが参考にならないことにため息をつく。

「本当にあいつは何が欲しいんだかなあ…」

「あ、短冊に書いてある願い事を叶えてあげたらどう？」

煙管を懐にしまい、操は立ち上がる。

その後に土方も続き、沖田が書いた短冊を探した。

「なんだが嫌な予感がするんだけどな」

「大きな野望が書いてあったりして」

どこだどこだと探して、操が下のほうに括られていた沖田の短冊を見つける。

「あつ、あつ…た…」

「なんて書いてある？」

ひくりと口元をひきつらせた操の後方から短冊を覗き込んだ土方は、

操と同じように口元をひきつらせた。

『土方死ネ』

沖田

「…これは、流石に叶えてあげられないわね」

「あのクソガキヤ……」

ふるふると拳を振るわせる土方に苦笑し、操は短冊をひっくり返した。

「……お酒でも買ってあげたら？」

「姉さん、あいつ未成年……」

「いいじゃない誕生日くらい。無礼講よ無礼講！」

短冊を離して立ち上がる操に、土方は酒かぁ……と考え込んでいる。

操は沖田の短冊を見下ろして、嬉しそうに笑った。

沖田の短冊には、裏側にも願い事が書いてあった。

ささやかで、素敵な願い事…。

『またみんなで酒が飲みたい』

終

## 七夕

### 操編（後書き）

皆さんアニメ銀魂「丁か半か」観ましたか？ 本当に高杉さんも万  
斉さんもかっこいい！ さらに勾狼さんに色々ツッコむ阿伏兔さん  
が渋くて素敵過ぎる！

（ω）（b 画面の前でニヤニヤしっぱなしでした。新EDも（  
色んな意味で）素敵だったし、満足満足！

## 名前に騙されるな

(巻) (前書き)

以前烈火竜さんから「操に隠し子疑惑!？」 的なお話を書いたら?」  
と提案していただきまして、そのお陰で完成したお話です。いやいや長い長い! (・・・;) 今まで最高でも(上)(中)(下)の3話完結だったのが、3話なんかじゃ終わりそうにありません。  
(笑)

## 名前に騙されるな

(巻)

深夜、眠らない街かぶき町に怒号と悲鳴が響き渡る。

闇を斬り裂く、黒と金色の隊服。

手に持つ刀は月明かりを浴びて、纏わりつく血潮と共に鈍い光を放つ。

『奴は捕らえたか！？』

『それが、奴とその他数名の部下たちの姿が見えません！』

『くそ、逃げられたか！ 探せ！ 真撰組の名にかけて、絶対逮捕するんだ！』

怒鳴り声が静寂を破壊する。

夜が明けるのは、まだ少し先だ。

早朝、操は洗面所に行くため浴衣姿のまま自室を出た。

昨日、というより今日は深夜に過激派攘夷浪士の大量検挙の仕事があつたが、まだ疲れが取れていない。

歩きながら漏れる欠伸を手で隠していると、遠くからドタバタと廊下を走る音が近づいてくる。

何事かと足を止めたのと、前方の角から原田が飛び出してきたのはほぼ同時。

原田は何か、妙に深刻そうな顔をしていた。

「原田君、おはよ……」

「みい姉さん！ 相手は一体誰なんだい！？」

いきなり肩を掴まれてそう聞かれ、操はぽかんと口を開いた。

「は？」

「いや、言わなくていいすぐにでもたたっ斬りに行っちまいそうだ」

何やら混乱しているように見える原田は、未だに操の肩から手をどかさなない。

「あの、何の話……」

「ああっ！ 操隊長！」

原田が来た方向から、数人の隊士。

操の部下も混ざる隊士たちは、一生に操を取り囲む。

「隊長！ 相手は誰なんですか！」

「つつか一体いつ!？」

みんなして混乱していてそして同時に話すものだから、

操も混乱しそうになった。

「あの…だからなんの話？」

「いいんですよ近藤隊長！俺らに気を使わなくったって…もう覚悟は出来て…う…！」

「なんで何も言ってくれなかったっすかあ…！？」

ぐずぐずとベソをかく隊士たちに案内され、操は廊下を進んでいく。

さっきから話の趣旨が見えないのだが、彼らは一体何を勘違いしているのだろう。

ふにゃああ…。

「ん？」

どこからか猫の鳴き声のような声が聞こえてきて、操はふと頭を上げた。

「猫？」

「しらばっくれしないで下さい隊長！もう分かってるくせに！」

何故か部下の佐伯に涙目で怒られ、何なのよと身を竦める。

ふあああ…。

「え、ちか…」

どうやら鳴き声の主は屯所内にいるらしい。

こつちだよと神妙な面もちの原田に引つ張られてある部屋の前にたどり着いた時、扉がすぱんと勢いよく内側から開いた。

「あつ、お前ら遅すぎ！」

飛び出してきたのは山崎だった。

その腕には何故か赤ん坊が抱きかかえられていて、赤ん坊は火がついたように泣きじゃくっている。

「ちよっ…。ザキ君どうしたのその子！」

「どうしたもこうしたも、さっきから泣き止んでくれなくて…！」

どれほど長時間泣いていたのか、赤ん坊の顔は真っ赤だ。

「あらあら…。ちょっと貸して」

山崎から赤ん坊を受け取り、よしよしと宥める。

「よしよし。どうしたのー？」

体を揺らしてぽんぽんと背を叩いてやると、赤ん坊はやっと落ち着いたようで、静かに泣き止むと「うー」と小さく呟いた。

「はあ…。流石お母さんだ…」

相当苦戦していたようで、山崎は息をつく。よっぽど大変だったらしい…のは置いておいて…。

「お母さん？」

不思議そうに首を傾げたら、また部下や原田たちに怒鳴られた。

「とぼけないで下さい！」

「一体いつ産んだんですか！」

「父親は誰ですか！？」

口々に言われ、操は少しずつ状況を理解した。

何か物凄い勘違いをされているような…。

「待つて、この子私の子じゃないから」

「ええっ！？ だって…！」

原田が話してくれたことによると、今日未明に攘夷浪士が何かに追われている女性を見付けて助けたのだが、彼女は既に斬られて虫の息で、この赤ん坊をミサオに会わせてとだけ呟き、息を引き取ってしまったのだという。

側に役人もいたというのに真撰組である自分に頼んできたことから、

女性のいう「ミサオ」は操のことだと思い込み…。

「この子は私の子、と判断したわけね…」

騒ぎ立てる部下たちの行動に納得し、こくこくと小さく頷く。

「え、違うんですか…?」

山崎の言葉の直後に頭のどこかでぴしつと音を聞いて、

操は赤ん坊を片手に抱き直して、ちょいちょいと指で部下や原田、山崎を手招く。

「ちょっと耳かして」

不思議そうに顔を見合わせて、耳を向けてきたその隊士たち一人一人に、

操は強烈なピンタをかましておいた。

「私はこの一年間、ずっとこの屯所でみんなの側にいたはずでしょう！？ 私がいつ妊娠して赤ちゃん産んだっていうの！？ 勘違いも甚だしいわ！」

「「ごめんなさい……」」

顔に操の手形をくつきりとしらえた数人の隊士たちが、赤ん坊を抱いたまま腰掛けた操の前に鎮座していた。

「だいたい！ ミサオなんて男か女か判断つかない名前の人なんてあちこちにいるでしょうが！ くだらない勘違いで朝から騒いで！」

「「面目ないです……」」

一息ついて、赤ん坊の前で怒ってはいけな思考え直した。

腕の中の赤ん坊を見下ろせば、目が合つてにぱつと笑われる。

うん、可愛い。

「まあその話はおいて…。その亡くなった女の人お母さんだったのかしら。可哀相に…」

「一応寺で弔つて貰いました。けど身分を証明出来るものは、何も…」

「そう…。ミサオって誰なのかしら、早く見付けてあげないとね」

そう語りかけると、赤ん坊はうーと小さくないた。

「この子の名前は？」

「それが分からなくて…」

「困ったわね」

だんだん腕が辛くなってしまつて、一旦赤ん坊をしいた座布団の上に寝かせた。

生後何ヶ月くらいなのだろうか、寝返りは出来るようだ。

小さく息をついてから原田たちに向き直る。

「とりあえず私たちで」 ミサオ 「さんを探しましょう。それまで面倒見ない…」と

話している間、ころんと寝返りをした赤ん坊がそのままハイハイしてきた。

操の膝をぺしっと叩いて、きゃつと笑う。

「可愛いわ…」

クラクラする頭を押さえていたら、原田が赤ん坊の足に括られている札を見付けた。

「なんか書いてあるぞ…。湖太郎？」  
こたろう

偶然過ぎる名前に、びっくりと操が肩を震わせる。

「湖太郎っていうのか。どっかで聞いたことあるな」

「私とりあえず仕事…」

うろたえているのを悟られないように立ち上がると、その腕や浴衣の裾を全員の隊士に掴まれた。

「みい姉さん俺らに押し付ける気かああ！！？」

「はあ！？」

「俺ら子守りなんて出来ませんよ！　ここはやっぱり女性の操隊長があー！」

「ちょっと！　子守りは女の仕事とか古典的な考えで私に押しつけないでよー！」

とはいえ、がさつで独身の彼らに予守りなど出来るわけがない。

結局は私がやるのかと、操はため息をついた。

床の上で、湖太郎が楽しそうに笑った。

湖太郎の面倒で暫く仕事に出られいと報告するため、着替えて近藤の部屋へ赴いた。

湖太郎は操の髪を弄ったり手を振り回したりして上機嫌のようだ。

「局長ー、いらっしやるー?」

「はいー。どうぞー」

失礼しますと襖を開けると、中にいた近藤、土方、沖田が硬直した。

「朝からごめんなさい、実はこの子を…」

言いかけて、三人が動かないのを見て言葉を切った。

「局長?」

「あー」

湖太郎が言葉を発したと同時に、

近藤が勢いよく倒れた。

「きゃあー!」

「びつくりした…。てつきりみい姉が赤ん坊産んだのかと…」

「馬鹿ね。私が誰の子を産んだって言うのよ。誰もかしこも…」

あれから説明して、なんとか三人も状況を飲み込んだらしい。

「俺も姉さんの子かと…」

「もっ」

そこまで心配するかとため息が零れる。

「でも、みいさんお母さんみたいです」

沖田が湖太郎を覗き込み、べろべろばーと舌を出す。湖太郎は嬉しそうにきゅきゅと笑った。

「暫くこの子の面倒を見るために、勤務から外してほしいの」

「まあ、みい姉が一番適任だしなあ」

「それまでは俺が姉さんの代理をするよ」

名乗り出てくれた土方に礼をいい、腕の中の湖太郎に微笑みかける。

「良かったねえ湖太郎ちゃん」

「その赤ん坊、湖太郎っていうんですかい？」

「ええ、らしいわ」

ふつんと呟いた沖田は、とんでもないことを言っただけだ。

「桂と同じ名前なんですネィ」

操の心臓がどきんと鳴ったのは、言うまでもない。

「ごめんなさいね、ザキ君。折角の休みなのに買い物手伝って貰っちゃって」

「いいんですよ。俺らもみささんに押し付けちゃったんだからそれぐらいしないと……」

山崎の両手には、沢山の袋がある。赤ん坊のために、ミルクやらオムツやらを購入した帰りだった。

「少しの間だけよろしくね、湖太郎ちゃん」

操の髪で遊んでいる赤ん坊に話しかける。豊かな胸が邪魔で正直抱きにくいのだが、この際仕方ない。

「そつえば、” 紅い海 ” の連中は、どうなった？」

深夜にご用改めに入って、数人逃がしてしまった過激派攘夷集団の名前を出す。

逃走した数人のメンバーの行方を、隊士たちが追っているのだ。

「どこかに潜伏されたようで、まだ…。でもまだ江戸からは出ていないようです」

そつ…と息をつく操を横目で見て前方に視線を戻した山崎は、見知った人間を見つけて、あつと声を出した。

「旦那だ。旦那ー！」

袋をガサガサ言わせて、店から松光と共に出て来た銀時に声をかける。

松光と話途中だった銀時は山崎に気付いて手を挙げかけたが、操の手に赤ん坊がいるのを確認し、驚いて硬直した。

「おや山崎殿、操殿。こんにちは」

「こんにちは松光殿」

「…いつ産んだの？ 姉御…」

銀時のぼそりとした言葉に、操はキッと目をつり上げた。

「私の子じゃないから！」

銀時は暫くぼけっとして、

「違っの？」

「違うの。私が誰の子産んだって言うのよ」

操がそう言い、何も見えない松光が首を傾げる。

「何の話だい？ 銀時」

「姉御が赤ん坊抱いてんだ」

へえ、と松光は見えぬ目を開き、くすりと笑う。

そして操の耳に唇を近付け、二人に聞かれぬように…。

「小太郎との子ですか？」

瞬間、操の顔が赤くなった。

「違っつたら！ たたっ斬るわよ松光殿！」

「あはは、失敬失敬。しかし、そうでなければどうしたというのです？」

「成り行きでね。暫くのあいだ真撰組で預かることになったの」

そりゃ大変だねえと呟き、銀時は赤ん坊を覗き込む。

「よう。姐御に抱っこされてるなんてうらやましいねえコノヤロ  
」

「湖太郎って言っんですよ」

「ふん、どうかで聞いたことある名前」

銀時が呟いて、松光は使えぬ目を開いて操に向けた。

偶然よ偶然と、操は必死に弁解した。

これから巻き起こる大事件に関わったなど知る由もなく、

操の子守り奮闘記は、こうして始まったのだった。

続く

名前に騙されるな

(壱) (後書き)

いつもぼちぼち入力しているせいか、「こたろつ」と入力すると真つ先に桂さんの「小太郎」が出てきます。「湖太郎」と分けるの大変…。

まあそんなことはさておき、烈火竜さん！ 貴重なネタをありがとうございました！  
うございました！ おかげでもの凄い長いお話が書けました！、  
( ) /

名前に騙されるな

(弐)(前書き)

今日は雨が降ったので、そんなに暑くはありませんでしたね。でも  
湿気がジメジメジメジメ…、快適に過ごせるのはまだ先ですね。( ;

- ( - ) || 3

名前に騙されるな

(貳)

仕事を終えて、やっと寝ようかと自室に戻ろうとした時だった。

ふと屯所の庭先から、小さな歌声が聞こえてきた。

時刻はもう、日付が変わる頃。

まさか幽霊かと体を強ばらせて、それでも自室は庭沿いのためそろそろと気配を消して縁側の角から庭先を覗き込む。

小さな池がある屯所の庭に、人一人分の人影があった。

体を揺らして、何か歌っている。

うわぁなんかいる！ とびびっていると、歌声がやんだ。

「誰かいるの？」

気付かれたと緊張して背筋に冷たいものが走ったが、

ふと冷静になつてみる。

あの声は…。

「…みい姉!」

恐る恐る覗けば、庭先にいたのは浴衣姿の操だった。

腕に赤ん坊の湖太郎がいるから、寝かしつけていたのだろう。

「勲! 今仕事あがり?」

につこり笑われて、近藤はやっと角から姿を見せた。

「なかなか寝てくれないのよ。寝たかな、って思うとすぐ目を開けちゃうの」

湖太郎を抱いたまま縁側に腰掛けた操の隣に座り込む。

湖太郎という名前のこの赤ん坊の世話を操が引き受けてから、今日で3日だ。

そのあいだ彼女が子守りに奮闘している姿を何度も見た。

それでもやはり母性というものがあるのだろう。

その姿は様になっていて、そしてどこか手慣れているようで、

見えていて微笑ましかった。

「みい姉もいつか、結婚して子供持つのかなあ」

「あはは、いつかの話ね」

「そっぴや、みい姉にはいないの？」

不意に何の前触れもなく聞かれ、操はきょとんと首を傾げた。

「なにが？」

「好きな男<sup>の</sup>」

かあつと操の顔が赤くなったが、星空を見上げていた近藤は気づかない。

「みい姉もいつかは結婚しちまうんだろっなあ……。する前は俺に紹介してくれよ、俺と総悟とトシを倒せるような男じゃないとみい姉はやらんぞ」

「そんな鬼みたいな人いないわよ」

クスクスと操は笑って、

その笑みは束の間で消えた。

彼ら3人を倒すどころか、紹介すら出来ない想い人。

自分の愛しい男が真撰組の天敵だと知ったら、弟はどんな反応をするのだろう。

「…あ」

腕がずしりと重くなる。

すぴすぴと眠る幼子の寝顔に、少しだけ気分が落ち着いた。

「寝た？」

「うん、やっと寝てくれた」

随分苦闘だけあって、安堵感は生半可なものではない。

ほっと息をつき、静かに立ち上がる。

「じゃあ寝るわね」

こそこそ声でそう言つと、近藤もこそこそ声でおやすみ、と返してくれた。

なるべく静かに部屋に戻り、赤ん坊をそつと布団へ寝かせる。

あどけない寝顔に小さく息をついて、自分も布団に転がった。

小さな欠伸がひとつ、あとは夢の世界に旅立っただけだった。

「ミサオさんいないねえ、湖太郎ちゃん」

湖太郎を腕に抱いて、着物姿で江戸を歩く。それが操の日課になっていた。

地味だが、聞き込みほど有力な情報を得る方法はない。

「ミサオって人知らない？」

湖太郎の子守りをし始めた頃は、そう聞いて回っていた。

答えは「知らない」どころか、

「いつ産んだの！」

「父親は誰！？」

と驚かれるが常だった。

住人たちも事情を理解してくれてそんなことは言わなくなったが、流石に驚かれるのももう慣れた。

今では客に「ミサオって人を知らないか」と聞いてくれるまでになったが、ことごとく「ミサオと言えば近藤操でしょ」と返ってくるらしい。

自分が意外にも有名だったことに多少喜びを感じたが、あまり素直には喜べなかった。

「早く見つければいいねえ、湖太郎ちゃん」

自分の髪で遊んでいる赤ん坊を見下ろし、声をかける。

湖太郎は言葉が分かるのか、操を見てにぱつと笑った。

「でも貴方とお別れするときになったら、私泣いちゃうかも…」

そこまで言いかけて、操はふと何かの気配に気付く。

「…」

あとを付けられている。それも一人や二人ではない、かなりの数だ。

（気のせい…？）

試すために多少早足にしてみたが、気配は確実に自分を追って来ている。

（違う、追われているのはこの子だわ！）

湖太郎を抱え直し、駆け出す。

後方で大気が大きく揺れたのが分かった。

（どうしよう。ここからじゃ屯所は遠いし、住人を巻き込むわけには…！）

大通りを進んでいては危険と判断し、狭い路地裏へ進む。

迷路のような路地裏の影に隠れていると、追ってきた人間の姿が伺えた。

至って平凡な男が1、2、3…。帯刀しているが、幕府関係者では

ない。

(…攘夷浪士?)

離れているため、会話している彼らの声は聞こえない。

もっとよく聞こえたらと身を乗り出した時、影から伸びた二つの手が操の口を押さえ腰に巻きつき…。

あっさりと奥へ引きずり込んだ。

「見つけたか！」

「いや、見失った。足の速い女め…」

「くそ、やっと見つけたと思ったのに！」

一人が悔しそうに、近くにあったゴミ箱を蹴り飛ばした。

ガタンと大きな音がした。

「早く見つけねえと、またお頭にどやされちまう」

「人使い荒いぜお頭もよう」

そんな声を、操は逞しい腕の中で聞いていた。

気配が遠のいて、やっと自分を抱きしめている腕の力が緩む。

「もう大丈夫だ」

解放されて見上げれば、そこには…。

「小太郎…」

愛しい桂がいた。

彼がいなければ、逆方向から来ていたあの男たちに見つかる場所だった。

「ありがとう」

素直に礼を言えば、桂はいいやと笑う。

その笑顔にほっとして、先ほどから大人しい赤ん坊を見下ろした。

「貴方もよく泣かなかったわね」

桂と自分の間に挟まれて、苦しくなかつたろうか。

湖太郎はあまり気にする様子もなく、んーと腕を延ばしている。

「…お前、その赤ん坊…」

何やら疑わし気な目で見下ろされ、はっと気付く。

「違うわよ私の子じゃないからね！ 成り行きで真撰組で預かっている子よ！」

ムキになって言えば、

「そうなのか？」

肩の力を抜いて、安心したような声が漏れた。

「すまん」

「いいわよもう慣れたもん」

ヤケクソ気味につぶやく。隠し子疑惑をかけられたのはこれで何度目だろうか。

「あ、このこ湖太郎っていうのよ。湖の太朗だから貴方とは漢字が違っけど…」

「ほう、同じ響きなのか」

自身を覗き込む桂に怯えもせず、湖太郎は目元を和ませる。

きやつきやと声を上げて笑い出した湖太郎に、桂の目元も和んだ。

「ね、抱っこしてみない？」

「俺か？ いや、俺は…」

「はい湖太郎ちゃん。このお兄ちゃんも小太郎っていうんですよ」

最後まで話を聞かず、操は桂の腕に湖太郎を渡した。

どう抱けばいいのか分からない桂に、こうようと腕を添えて教えてやる。

すっばりと桂の腕に収まった湖太郎を見て、操はくすくす笑った。

「小太郎と湖太郎！」

「楽しむな！」

「でも小太郎、そうしていると本当にパパみたいよ」

そんなことを言われて、桂はまんざらでもなさそうに腕の中の湖太郎を見下ろす。

あーだのうーだのよく分からない言葉を発する湖太郎に、つい笑みがこぼれていた。

「…赤子とはふにゃふにゃしていて抱きにくいな」

「そつでしょう、コツがいるのよね」

「まるでお前みたいだな」

そんなことを言われ、操はムツとして桂の両頬をつねった。

「なによー！ 私が太つてお肉でふにゃふにゃとでもいいたいの  
！」

「ひぎゃうひぎゃうー！」

抓られたまま違う違うと否定した桂は、解放してもらって痛みを訴える頬を無視した。

「お前も温かくて柔らかくて、ちゃんと捕まえていなければ腕からするりと抜け出してしまうだろう？」

桂の言葉に赤面してうつむいていると、桂がちゅっと音を立てて額にキスしてくれた。

照れ隠しに微笑んで、背伸びをして再びのキスをねだる。

湖太郎を片手で抱き、操の顎に手を添えて口づけた桂だったが…。

「だー」

「…」

小さな湖太郎に頬を引っ張られ、変顔のまま操を見下ろした。

「見りよ、保護ひゃのおみやえがこーゆーここをひゅゆひゃら…」

桂の変顔が楽しいのか、湖太郎はきゃっきゃと楽しそうに笑う。

操も苦笑して、肩を揺らした。

「操。先ほどの男たち、アレは恐らく攘夷浪士だ。廃刀令のご時世に堂々と帯刀する者などお前たち真撰組かそれに仇なす者の他おるまい」

「うん、なんでこの子を追っていたのかしら……」

ねえ、と首を傾げて見れば、湖太郎もうー？ と首を傾げてくれる。

本当に可愛いったらない。

「よくは分らんか、用心することだな。…銀時のようになりかねん」

最後の弦きは操には届かなくて、なあに？ と不思議そうな操に桂は何でもないと返しておいた。

「あ、ねえ。ミサオって人知らない？」

「…」

何を愚問を、という顔をされ、操は違うわよと慌てて首を振った。

「私じゃなくて！」

「ああ、お前じゃないのか。…いや、ミサオという名前はお前しか聞いたことがない。そのミサオがどうかしたのか？」

「私たちにこの子を預けた女性が、ミサオに会わせてって伝言残したのよ。ミサオってだけじゃ男かも女かも分からないし、江戸中聞き込みしても情報ないし…」

困ったなあと肩を落とすと、気に病むなとそっと抱きしめられた。

腕の湖太郎ごと、包み込むように。

「いつかきつと見つかる。それまでお前が湖太郎の母親だ」

「ん…」

「お前も、あまり操を独り占めしてくれるなよ。操は俺のだぞ？」

「だうっ」

返事をして笑った湖太郎に苦笑した桂だったが、次の湖太郎の発言に口元が引きつった。

「ふあ…、ぱあぱっ…」

「…パパ？」

操が目をつり上げたのを見て、桂は湖太郎を抱きながらギョッと肩をすくめる。

「…まさか湖太郎は貴方の子…？」

操から滲み出るオーラが恐ろしくて、桂はじりじりと後ずさる。

操はその分距離を詰める。

桂は自分に非はないにも関わらず、あわあわと慌てだした。

「そ、そんなワケないだろう…！ 己の子に己と同じ響きの名前なんてつけないよ…！？」

口調までおかしくなっている。

それもこれも、操が刀に手をかけているからだ。

「だってパパって呼んだじゃない…」

「よ、呼んだのではなくて…。あ、あれだ！　パンと言いたかったんだ！」

「乳飲み子がパンなんて言うかあ！　小太郎のバカー！」

涙目でとうとう刀を抜いてしまった操から誤解だー！　と逃げ出す桂。

その腕で元凶の湖太郎が呑気にキヤツキヤと笑い…。

待ちなさい小太郎！　と、とんでもない勘違いをした操がその誤解を解くのは、もう少し後の話だった。

「だあう！ あー」

「あ？ なんだよ」

「あー、う！」

「分かんねーよ」

夜、近藤の部屋にいつもの3人が集まった。

子守りでくたびれて沖田の膝を枕に寝転がっている操の変わりに、土方が湖太郎の面倒を見ていた。

湖太郎がしきりに何かを口に出しているのも笑いを誘うが、それにクソ真面目な顔をして真面目に答える土方も苦笑を誘った。

「トシもなんだかんだで面倒見いいよな」

「姉さんばかりに押し付けてらんないからな」

ひょいと抱えた湖太郎に頬を引っ張られて変顔になりつつ、土方はそう返す。

そのまま泣き喚かれて苦戦すりゃあいいのにと黒いことを考えていた沖田は、

伸ばした片足に頭を乗せてくれている操を見下ろした。

「しかし、昼間みいさんをツケてきたって奴らはなんだったんでしようねい」

「ねえ、湖太郎ちゃんを狙ってたみたいだったけど…」

「もしかしてとんでもない子だったんじゃないのかな、この子」

3人の目が湖太郎に集中する。

土方はまた湖太郎を抱え上げて、聞いてみた。

「結局どうなんだ、坊主」

「あー、う！」

湖太郎の手がべしんと土方の額を叩いた。

湖太郎を下ろすことなく、土方の叩かれた額にシワが寄る。

「デメエ……」

土方の低い声にも臆することなく、湖太郎はきやつきやつと手足をばたつかせる。

土方が畳の上に下ろせば、湖太郎はだ、だ、と何事かを言いながらはいはいを始めた。

「おいでおいで〜！」

上機嫌に手を伸ばす近藤を見向きもせず、湖太郎は真っ直ぐに操の元へ。

「……」

「やっぱりみいさんが好きなんだ」

顔の側まではいはいしてきた湖太郎に手を伸ばし、操は嬉しくて微笑んだ。

「なあに？ 湖太郎ちゃん」

「だー」

ぺちぺちと操の頬を叩く湖太郎と、それに対して笑っている操は見ていて微笑ましい。

「みい姉、本当にお母さんみたいだなあ」

「あんまり仲良くなっても、お別れするとき寂しくなりやすぜ」

逃れられぬ事実を突きつけられて、操ははっと笑みを消した。

「…そうね、ずっと一緒にいたいと思うのは私のエゴよね…」

湖太郎の小さな頭を撫でながら、操は淋しそうな笑みを浮かべる。

誰もが黙り込んでいずれはやってくる別れを想像する中で、

何も知らない湖太郎だけが、無邪気な笑い声を上げていた。

続く

名前に騙されるな

(弐) (後書き)

ちなみに最後のほうの「湖太郎がパパ発言」は、感想で「そんなことがあったら…」と書いてくれた旭日千冬さんのお言葉から考えついたネタです。本当はちょっと違うシーンだったんですが、書き直しました。暴走するカンチガイ操書くの楽しかったっ！

旭日千冬さん、ありがとうございました。 m ( | | ) m

名前に騙されるな

(参)(前書き)

このタイトルを付けるにあたって、壹、弐、参とかの表記を調べていたんですが、私の「玖月」の「玖」は数字の「九」に相当するところが分かりました。

玖月…、九つの月…。(´へ´;) うん…。

名前に騙されるな

(参)

「ええ！」      「ミサオ」が見つかった!？」

翌朝、朝一番で入った情報に操は声を裏返した。

湖太郎を真撰組に託した女が言った、      「ミサオ」      が名乗りを上げたと言っただ。

情報を持ってきてくれた土方の話だとミサオは男性で、湖太郎の父親だという。

あまりにも突然な出来事に、操は湖太郎を抱きながらしばし絶句していた。

「…こんなに早くお別れがくるなんてね」

腕の中の湖太郎は何も知らず、きゃっきゃと笑って腕を振り回している。

そんな操を見て、土方が目を細めた。

「寂しいだろうけど…」

「いいのよ、覚悟はしてたから…。湖太郎ちゃん、パパが迎えに来てくれるって。良かったねえ」

湖太郎は口元を釣り上げたまま、うーと小さくないてきょとんと首を傾げている。

やはり分かっていないようだ。

「ただ、ちょっと様子がおかしいんだ」

「おかしい？」

「ガキの受け取り場所に、町中を指定してきた。普通は大事な息子ですぐにでも迎えにくるだろう？」

「…そうね」

湖太郎を畳の上に下ろすと、待つてましたとばかりにはいはいを始める。

「だ、だ」と何事が言いながら、しかしそのはいはいの早さはかなり早い。

「町中でないといけない理由がある…ってこと？」

「そう考えるのが妥当だ。何かおかしい」

そうね、と真剣な顔で頷いたら、足をぺしつと叩かれた。

「あー」

湖太郎が無邪気な笑みで見上げてくる。

操は顔を近付けて、こつんと湖太郎の額と自分のを合わせた。

「貴方のために大切な話をしているのよ、湖太郎ちゃん」

操の笑顔がどこか悲しげなもののように見えて、

やっぱり別れは寂しいんだろうなと土方は思う。

だが操は、笑ってサヨナラを言うのだろう。

ちゃんとお別れできれば……、だが。

「ああ、湖太郎！」

指定された場所は何故か川にかかる橋の上。

近藤、土方、操の3人でその場所に行くと、二人の人間がそこで待っていた。

湖太郎を迎えに来ていたのは、包帯で巻いた右腕を首から下げた細身の男だった。

その隣には、何故か浮かない顔の小柄な女性がいる。

「湖太郎の父親の、美佐男みさおといいます。怪我をして働けない私の代わりに、妻が働きに出てくれて…」

美佐男曰わく、働けない彼の代わりに田舎から妻が湖太郎を連れて江戸に働きに出たものの、妻と息子の消息が絶たれてしまい心配していたのだという。

江戸に探しに出て、新聞を見て始めて、

妻が死に息子が真撰組に保護されているのを知ったのだという。

「こいつは妹です。俺ひとりじゃ湖太郎を育てられないってついて来やがって。なあ？」

いきなり話を振られ、妹と言われた女はびくりと跳ねて、ええ…と頷いた。

「大変でしたわね」

「本当です。生きた心地がしなかった」

操の言葉に返す美佐男の言動が、土方にはいちいち演技のようで勘に触った。

何故だろう、わざとらしいというか…。

「さあ湖太郎。パパだよ」

美佐男が左腕を差し出して湖太郎に触れようとした瞬間、湖太郎は顔をくしゃりと歪めてぐずり出した。

「湖太郎ちゃん、貴方のパパよ？」

抱き抱えていた操が不思議そうにあやしたが、湖太郎は何か嫌がっているようで泣き出す寸前になっている。

「しばらく離れていたから、お父さんだっ て忘れてるんじゃないかな」

さり気ない近藤の言葉に傷付いたのか、美佐男がぐくりとうなだれ

た。

「父親なのに…。おい、お前が受け取ってくれ。お前なら大丈夫だろう?」

うなだれていた顔を上げて妹にそう言うと、妹はまたびくりと跳ねて「ええ…」と力なく頷く。

やはり様子がおかしい。土方が眉を寄せる中で、操があやした湖太郎を妹に渡そうとした。

「屯所にいたときはあまり泣きもせずがいい子だったんですよ」

「本当に、お世話になりました…」

湖太郎を受け取ろうとした妹は、しかし何を思ったのか受け取るはずの湖太郎を操へ押し返した。

「いますぐ逃げて! 早く!」

「えっ! どういうこと!?!」

操や近藤が哑然としている中で美佐男が動いた。

「お願いします！ 早く！」

声を張り上げる妹の後方でするりと首から下げていた腕を外し、美佐男は包帯をむしり取る。

それに気付いたのは土方だった。

「姉さん！」

「くそアマ！」

土方と美佐男の声が重なり、美佐男のほどけた包帯の中から姿を現した銃身が、火を吹いた。

バンッ！

「きゃあっ！」

放たれた銃弾は妹の肩に命中し、妹は反動で湖太郎を抱いた操に覆い被さるように倒れ込んだ。

「なっ、なんなの！？」

湖太郎を抱えたままでは倒れる女性を支える事が出来ずにへたり込む操に、美佐男が持つ銃口が向けられる。

「そのガキを寄越せ！」

「みい姉！」

操に向けて放たれた銃弾は、しかし操と銃口の間に入り込んだ近藤の肩へと吸い込まれた。

「ぐっ……！」

「近藤さん！」

ドサッと地に倒れた近藤に土方が駆け寄る。

操の瞳が酷く揺らいたことには、誰も気付かない。

「ちっ…！」

銃を隠すために巻いていた包帯を捨て、男は踵を返して走り出す。

「待て！」

崩折れる近藤を支えながら怒鳴った土方は、しかしいつの間にか立ち上がっていた操に湖太郎を渡され慌てて彼女を見上げた。

「…姉さ…」

「…ヤロウ！」

突如低く叫んだ操が、美佐男を追いかけていった。

湖太郎を抱いて啞然としていた土方は、「イテテ…」と撃たれた傷口を押さえて起き上がる近藤に我に返る。

「大丈夫かい近藤さん！」

「大丈夫だ。大したことない…。それよりみい姉が…」

「あれは怒ってたぜ？ 声も顔も夜叉みてえだった…」

はは…と苦笑した近藤は、その笑みを消して先ほど撃たれた女へ駆け寄った。

気絶してはいるが、銃弾は急所を外れている。

とりあえず命に別状はないと分かったら、撃たれた肩が酷く痛み出した。

「お頭！ 失敗した！ あの女裏切りやがった！」

川沿いを駆けながらかけた電話の先には、彼が仕える主がいる。

とりあえず帰ってこいと命令され、分かりやしたずらかりますと返事をした矢先に彼は足を止めた。

渡ろうとしていた橋の欄干に、黒い隊服を着た女が寄りかかっていった。

腕を組んだ操が…。

「…どこにずらかるって？」

地を這うような低い声。

そして開いた瞳孔。

「貴方には屯所に来てもらうわ。いろいろ聞きたいことがあるし…。」

欄干から背を離し、操はコツコツと男に近付く。

どうしたと電話の向こうから主が聞いてきて、男は慌てて携帯を川へ放った。

その軌道を、操は見えていなかった。

ばしゃんと携帯が川に沈んでから、男はにたりと笑う。

「これでお頭の場所は分かるまい……」

「分からなくて結構。そんなもの貴方に聞かなくても、優秀な監察方が調べてくれるわ。…別に貴方が何処の誰だろうが私にはどうでもいい」

コツンと足音を立てた操が間合いに入った瞬間に、男は懷から先ほど二人を撃った拳銃を取り出した。

しゃああ…ん！

しかしその銃口が操をとらえる前に操の刀が刀身を表し、男の手から銃を弾き飛ばした。

飛んだ銃は携帯の後を追って川へ落ち、ばしゃんと音をたてる。

武器を無くした男に切っ先を向け、操はじりじりと詰め寄る。

「私ね、女をバカにする男も大嫌いだけど、もう一つ嫌いなものがあるの」

顔をひきつらせて後ずさる男に合わせて操は前進。

首筋に刀を突きつけながら、その態勢を崩さない。

操の開いた瞳孔は、射抜くように男を睨みつけている。

「私の弟を傷つける人…。誰であろうと絶対に許せないわ」

「ま、待て！ 降参だ、降参する！ 武器も持たない相手を斬るのか！？」

「…そうね」

パニックになる男の言葉に、操は刀を下ろす。

男はほっと力を抜いたのも束の間、またぎよつと肩をすくめた。

操の射抜くような視線は、変わっていないからだ。

「…斬りはしないわ」

次の瞬間、刀を逆手に握りかえした操の拳が、したたかに男の顔を殴り飛ばした。

「あの男、攘夷浪士の一人でしょうね」

「ええ、何故湖太郎ちゃんを連れ去ろうとしたかは全くの謎だけれど、とにかく湖太郎ちゃんが危険なことに巻き込まれているのは分かっただわ」

屯所の廊下を山崎と並んで歩きながら、操は不機嫌そうに腕を組ん

だ。

先ほどの男を連れて屯所に戻ってきてから、彼女はイライラしっぱなしだ。

「あとは奴から聞き出すしかないわね。早く起きないかしら」

「…当分無理かと…」

「あら、どうして？」

操が連れ帰った美佐男と名乗っていたあの男は、現在気絶中だ。

それもこれも…。

「みささんがボッコボコに殴ったんですから、当分気付けやしませんよ…」

弟を傷つけられた怒りを、操は思う存分男にぶちまけた。

最早ただの暴力でないかと思うほどに殴って蹴り飛ばして、

ボロボロになった男を引きずって帰ってきたのだ。

「だって腹立つんだもの。勲を傷付けて」

まだムカっ腹が収まらないらしく、鼻息荒く言っただけ。

操が見境もなく完全に「キレる」理由として2つ、1つは女性を蔑ろにされた時。

そしてもう1つは、弟の近藤を傷付けられた時だ。

ブラコンだなあと苦笑していた山崎は、笑顔の種類を寂しそうなものへ変えた。

「羨ましいなあ、局長は。みささんにこんなに思ってもらえて」

「あら、私ザキ君が傷付けられたって怒るわよ？ ザキ君だって私の大切な人の一人なんだから」

その言葉が嬉しかったのか、山崎はありがとございますと言って

にっこり笑った。

「そうだ、みさん。この間とり逃がした” 紅い海 ” の残等なんですが、近いうち発見できるんじゃないかと思っています」

「本当!？」

湖太郎と出会った日の朝に任務で数人を取り逃がした過激派攘夷集団、” 紅い海 ” 。

操や原田には、そちらの仕事も残っていた。

「右<sup>う</sup>之の奴が、もし残等を発見しても俺たちに任せて、湖太郎さんの事件に専念してくれって」

「わあ、有り難いわ。原田君にお願いねって伝えておいて」

「はいよっ」

よろしくと山崎に手を振って、やがてある部屋にたどり着いて、操は襖に手をかける。

「入るわよ勲。どう？ 傷の具合は」

中に入れば、近藤が土方の手当てを受けていた。

何も纏わない上半身の肩口に、土方によって包帯がするすると巻かれていく。

「大事なかった。骨にも筋肉も異常なしだ」

「大したことないよ、ホラ！」

心配かけまいと近藤は肩を回したが、傷に響いたのかイテテ…と顔をしかめる。

土方に大人しくしてろよと近藤が叱られる横で、沖田が湖太郎の面倒を見ていた。

「しかし、ここまで大事になるとコイツが随分危険なガキだっということが分かりやしたねイ」

かいた胡座の上に湖太郎を座らせ、沖田はぼつりと言う。

足の上にちょこんという湖太郎は沖田を見上げたままニコニコ笑っていた。

「そうね、あとは彼女に詳しいことを聞くしかないけど……。彼女の様子は？」

男の妹だと称されていた女性は幸い命に別状はなく、今は手当てを受けて別室で眠っているという。

「あの女性<sup>ひと</sup>が本物のミサオなのかしら」

さあ……と湖太郎以外の全員が首を傾げる。

その湖太郎は沖田の足から畳へ降りると、ぼてぼてと近藤のもとへはいはいする。

それでもみじのような小さな手で、ぼしっと近藤の足を叩いた。

「だあ、ぶ」

眩かれた湖太郎の言葉に、近藤がキラキラと目を輝かせた。

「ね！ いま「大丈夫？」って言ったよね！」

「まあ……」

「聞こえなかつた……」

「こんなオッサンを心配してくれんのかぁー！ ありがとな湖太郎！」

嬉しそうに抱き上げて頬ずりしたら、髭が痛かったのか湖太郎の手がばしんと近藤の額を叩いた。

「やぁ〜」

「お髭が嫌だつて」

可笑しくて皆してクスクス笑つて、操はふと笑みを消した。

この小さな赤ん坊がどんな事件に巻き込まれているかは分からない。

とりあえずはあの女性が目覚めるまで待つしかないのだろうと、  
操は小さく息をついた。

続く

名前に騙されるな

(参)(後書き)

ちなみに近藤さんを撃つて操にボコボコに殴られた「美佐男」は、偽名であつて湖太郎を預けた女性が口にした「ミサオ」とは違います。(笑) ちなみに彼の妹だと紹介されていた撃たれた女性も「ミサオ」ではありません。(↑+↑) ムフフ…(↑キモイ！)

名前に騙されるな

(肆)(前書き)

「利用規約改正のお知らせ」まだ消えないし！ 一体いつになった  
ら消えるの邪魔なものっ！

ノ、  
□、  
)ノ

がしゃーん！

ことの起こりは、ある姉妹が同時に一人の男を愛してしまったことから始まる。

男は野性的で逞しく、何人もの部下を持つ過激派攘夷集団のトップだった。

仲の悪かった姉妹は先を競うように男に寵愛を求めた。

男が過激派攘夷浪士でも構わなかった。ただ姉から、妹から奪ってやりたかったのだ。

当時の二人はそれほどまでに仲が悪かった。

とうの男は姉妹の不仲には無関心で、二人を平等に愛した。

そして二人は同時期に妊娠した。

二人の懐妊を喜んだ男は、身重の二人を呼び出し、宣言した。

「二人の子のどちらかに、攘夷浪士集団のトップを引き継がせる」と。

十月十日の間、姉妹は互いの子を流産させようと何度も試みた。生まれてさえこなければ、攘夷浪士トップの座は我が子のものなのだ。しかし二人の策略も叶わず、姉は男児を、妹は女児を無事に産み落とした。

子どもの父親は子どもの誕生を喜び、分け隔てなく可愛がったものの、姉妹の仲の悪さは相変わらずだった。

将来どちらかの子が攘夷集団のトップを引き継ぐ。その母親とならば寵愛は独り占めだ。

トップの母親、そして元トップの男に一心の寵愛を受ける女。

これほど優越感に浸れることはない、姉妹は考えていた。

あの日までは…。

ある日、拠点としていた宿に真撰組が押し入り、攘夷メンバーの多くが検挙され、または斬り捨てられた。

姉妹はそれぞれの子を連れて逃げおおせたものの、目の前に広がった光景を思い出してスツと頭が冷えた。

どちらの子がトップの座を引き継ぐと、攘夷浪士としての肩書きを背負う以上あのように危険な目に合うことは避けられない。

可愛い我が子を危険な道に進ませる親がどこにしよう。

冷静になった二人は、子どもが生まれて始めて膝を突き合わせて話合った。

子どもを危険な目には合わせられない。

いつそ二人で逃げようと。

両親の待つ田舎に逃げ帰って、あの男のことなど忘れようと。

生まれてからずっと仲の悪かった二人が今更に意気投合するのはいささか皮肉な話だったが、二人は別々に拠点となっている屋敷を出て、駅前で待ち合わせることにした。

そのまま電車に乗ってしまえば逃げられる。そう思ったのだ。

先に待ち合わせ場所についたのは妹だった。

女兒を胸に抱きあやしながら、いくら待っても姉は来なかった。

やがて待ち合わせ場所に現れたのは…。

夫と呼んでよいか分からない男の部下たち。

「お前たち姉妹がしようとしていたことは分かっている」

「お前たち姉妹がどうなろうと構やしない。我々に必要なのは子どもたちだ」

刀を向けられながら言われ、妹はやっと理解した。

男は自分たち姉妹などいなかったのだ。

欲しかったのは、自分の跡取りとなる自分の血を継ぐ我が子。

自分たち姉妹は、ただ跡取りを生む機械に過ぎなかったのだ。

妹は連れ戻され、娘の子守役として生かされることになった。

ただ屋敷の一室に幽閉され、授乳の時間だけ娘に会えるという娘を人質に取られているような状況で、

姉は斬り捨てられ死に、姉の息子、つまりは甥っ子が真撰組に保護されていることを聞かされた。

自分が一度は愛した男は、もう一人の跡取り候補を取り返したいらしい。

どちらかは出来損ないでも、どちらかは使えるだろう。

そんなモノでも扱うような言葉を聞いて、妹の背に冷たいものが走る。

この男は、どちらかを跡取りと決めればどちらかをお役御免と斬り捨てるだろう。

「湖太郎の父親の妹」として甥っ子を取り返してこいと命じられたが、妹の頭にはそれしかなかった。

甥っ子連れ戻してはいけない。

そう思った彼女は、身を呈してあのような行動を取ったのだ。

「いますぐ逃げて！ 早く！」

娘が、人質に近い状態であるにも関わらず…。

それが、全ての真相なのだという。

湖太郎が巻き込まれた、忌まわしい事件の全貌なのだという…。

「…大変だったわね」

意識を取り戻した妹から全ての話を聞いた操は、いたわるようにその言葉をかけた。

姉の忘れ形見である甥っ子、湖太郎を胸に抱きながら、最後はしゃっくり上げて途切れ途切れに説明していた妹は、今は静かに涙を流している。

「お願いです、…娘を助けて下さい。まだ彼らに捕らえられているんです…」

「分かってるわ。貴方が証言してくれた” 紅い海 ” の行方を、いまウチの監察方が調べてくれているから。男も跡継ぎが欲しいのならそう簡単に殺しはしないでしょう。私たちに任せて」

自らが教えた攘夷集団の名前を出された妹は、涙が残る顔でコクンと頷いた。そのぐちゃぐちゃな顔を不思議そうに湖太郎に触れられ、やっと笑顔を見せた。

「湖太郎、お前は姉さんにそっくりだねえ…」

「だ…ぶ！」

妹の腕の中につこり笑う湖太郎につられて、操も笑った。

「貴女が泣いているから、大丈夫かって聞いてくれているんだわ」

「ありがとうね…」と甥っ子に頬を寄せた妹に少しばかり安心した操だった。

まだ分からないことがいくつかあった。

「じゃあ、貴女が」 ミサオ ”さんでいいのかしら？”

「いいえ、私の名前は美里…」 ミサオ ”は、私の娘です」

それは予想だになかった返答で、操は小さく息を飲んだ。

てつきり大人だと思っていたら、まさか湖太郎の異母兄妹で、

かつ赤ん坊だったとは…。

「貴女のお姉さんは、湖太郎ちゃんの幸せを考えていたのね。異母兄妹でも、本当の兄妹として育って欲しくて…」

でなければ、姪っ子に会わせようなど思わないだろう。また涙を流す美里の肩をそっと叩いて、安心させるように笑いかけた。

「ミサオ」ちゃんは絶対に助け出すから、安心してちょうだい。貴女はここで湖太郎ちゃんと一緒に保護…なんだか自分の名前呼んでるようで変な感じ」

彼女の娘の名前が「ミサオ」であることが原因で、当初は隠し子疑惑までかけられた。

複雑な顔をしていると、美里が鼻を嚙りながら笑う。

「ミサ才は、貴女の名前から頂いたの…」

「私から？」

驚いて間抜けな顔を見ると、そうよと美里が笑う。

「字は”美””しい”砂”と一”緒”で違うけれど、貴女のように強く気高い女性になりますようにって、名付けたの…」

一瞬でも攘夷浪士のトップを引き継がせようと思った子に真撰組隊士の名前をいただくのはどうかと思ったのだけどと笑う美里。

強く気高いなどと誉められ、ぼうつとのぼせている操の頭に、ドタバタと廊下を走る音が聞こえた。

「みささん！」　　”　　紅い海　　”　　の潜伏場所分かりました！　　いま副長たちが作戦考えてます！」

「ザキ君でかしたわ！」

操の顔がぱつと輝き、ぐるりと美里へ向き直る。

「美砂緒ちゃんは私たちが必ず助け出すわ。貴女にはここで、湖太郎ちゃんと待っていてほしい。いい？」

はいと頷いた美里の腕で、湖太郎が小さくないた。

その紅葉のような手を取り、操は笑いかける。

「すぐに美砂緒ちゃんを助けってくるからね。待っててね、湖太郎ちゃん」

「だ、う！」

小さな手でぎゅっと指を握りしめてくれた湖太郎に笑いかけ、操は振り返ってその笑みを消した。

「ザキ君、出動準備を！ 副長や原田君に伝えて、特攻は私たち9番隊が担うわ」

「はいっ！」

山崎が元気に返事をし、廊下を駆けていく。

操は傍らに置いていた愛刀を持って立ち上がった。

自分と同じ名前の赤ん坊を、取り戻しに行くために…。

深夜、波が押し寄せる港に数人の人影があつた。

注意深く辺りを探つては、素早い動きで新しい物陰へ移動する。

そのうちの一人の腕には、小さな赤ん坊がいた。

「ふえ…え…」

「おい、泣かせるなよ」

ぐずりだした赤ん坊を抱く男に、長身の男が厳しく叱咤する。

「そんなこと言ったって…」

赤ん坊は今にも泣きそうな様子だ。先ほどから苦戦しているが、どうも落ち着いてくれない。

ひとに任せないで父親の自分があやせよと、子守役の男はいらいらしっぱなしだ。

「くそつ、泣くなよ…」

泣き止まないから虐待に踏み切るという親の気持ちが見えなくもない。

いっそ、殴って気絶させようかと思った時だった。

「赤ちゃん泣いてるじゃない。あやし方がなつてないわね」

ハスキーな声がして、数人いる男たちが足を止めた。

ほぼ同時に、パツとスポットライトに照らされ男たちは眩しさに腕で目を庇う。

「その赤ちゃん、私に渡してくれないかしら。…貴方たちを捕まえるのはその後にしてあげるから」

スポットライトを逆光にゆらりと現れたのは、操率いる9番隊…。

「なつ、真撰組…！」

「オヒサシブリとでも言おうかしら。まさか取り逃がしていた貴方たちが、湖太郎と関わっていたなんてね…」

湖太郎と出会った日の明朝に逃がした残等たちに切っ先を向けて、目を細めた。

「大人しくお縄についてもらうわ。その前に、私と同じ名前のその

赤ちゃん、渡してもらっけどね」

男たちに向けられた刀が、スポットの明かりを受けて妖しく煌めいた。

続く

名前に騙されるな

(肆)(後書き)

操の出番少なかったですね。まあ来週大暴れさせるので…。

一応(壱)の冒頭のご用改めから話を繋げたりもりだったんですが、皆様理解していただけたでしょうか。文才なくてホントにごめんなさい…。m(――)m

## 名前に騙されるな

### (伍)(前書き)

なんか新しく歌詞掲載のガイドラインなんてものが出てますが、いつになったらユーザーページが綺麗になるんでしょう。なんもないまっさらなページに戻ってよう…。

はい、そんなどうでもいい話は置いて！　とうとう「名前に騙されるな」最終話です！　途中でぶった切ろうかと思ったんですが、流れるに微妙になるので最後までドーンと！　おかげで物凄く長いです。

ゆっくり気ままに読んで下され。

名前に騙されるな

(伍)

本来なら波の音しか響かぬ夜の港が、今夜はがやがやと騒がしい。

逃走していた過激派攘夷浪士集団” 紅い海 ”の残等と、それを捕まえんとする真撰組。

船で海に逃げようとする彼らの先回りをして仕掛けていたスポットライトが、煌々と刀を交える彼らを照らしている。

わあわあと騒がしい喧騒の中を、ひととき大きな声で泣きじゃくる赤ん坊を抱いて走り抜ける男が一人。

この男こそ攘夷浪士集団” 紅い海 ”のトップにして、抱いている赤ん坊の父親。

湖太郎の母親、そして腕の中の女兒の運命をかき乱した張本人。

「っ…チクシヨウ！」

喧騒の人ごみを抜け出し、止めてあつた船に飛び乗る。

火がついたように泣きじゃくる娘にイラつきながら、片手でエンジンをかけにかかった。

娘と息子を生ませた姉妹には手を焼かされたが、己の血を引く跡継ぎが生まれれば彼女らはもういらぬ。

真撰組に保護されてしまった息子は諦めよう。

腕の中で泣きじゃくる娘も出来損ないであれば、始末してまたどこかの女に産ませればいい。

そんなことを思いながら、起動に時間がかかるエンジンに苦等していた時だった。

「赤ちゃん泣いてるじゃない。早くあやしてあげなさいよ」

ザツ…と足音と共に現れた人影に、男は慌てて振り向いた。

目もくらむような眩しいスポットライトをバックに、4人の人影。

「なんなら私があやしてあげましょうか？」

逆光の中やっと確認したのは、真撰組の四天王と呼ばれる4人。

何故よりによって彼らが…。

エンジンはまだかからず、彼らに気付かれぬよう気丈に振る舞う。

「何故ここが分かった！？　やはりあの女か！？」

「ああ。そのガキの母親のお陰だよ」

端にいた男、鬼の副長土方がそう言う。口には煙草がくわえられ、ゆらゆらと煙が揺られている。

「勇気を持って証言してくれた。大人しくお縄につくんだな」

厳つい男、真撰組局長近藤勲がきっぱりと言い放つ。

「どっちみちここまで来たんじゃないやもう逃げられねえでさ」

「痛い目見たくなければ、さっさと船から下りてその子を返しなさい」

隊長格の沖田と操に言われ、万事休すかと思われた時だった。

後方で、ブルーンと音がする。

エンジンがかかった！

形勢逆転、もうこちらのものだ。

「そんなにこのガキが欲しけりゃくれてやる…」

にたりと嫌な笑みを浮かべて、

「受け取りなっ！」

男はこともあるつか、泣きじゃくっていた赤ん坊を、暗い宙へと放り出した。

「！」

4人が息を飲んだのも束の間、4人揃って駆け出す。

男は急いでアクセルを踏み込み、船を発進させた。

一方、4人の中で棧橋から跳躍したのは操と土方の二人。

土方は船へ、操は赤ん坊へ。

「っ……！」

赤ん坊を抱き止めた操は、そのまま空中でくるりと反転。

棧橋に残る弟へ自分と同じ名前の女兒を放り投げた。

「勲！」

棧橋であわあわと慌てていた近藤はしっかりと墜ちてきた赤子を抱き止めて、

反動でぼてっと尻餅をつく。

それを見届けた操が、淡い笑みを浮かべたまま水しぶきを上げて海に吸い込まれた。

「逃げんじゃねえよ…」

なんとという跳躍力か、棧橋から離れようとする船に飛び移ってきた土方の低い声に、男はびくりとあどさうさした。

後ずさってから、腰の刀を引き抜く。

港から離れる船の上だ。剣術では勝てずともふり落とすことさえすれば、逃げることは出来る。

と、思っていた。

が、

「俺らから逃げるなんざ、１００年早いっ！」

栈橋近くに積まれたコンテナから飛び降りた沖田がその勢いのまま船に降り立ち、男の後方にあつたエンジンに刀を突き刺した。

小さな爆発が起きて、船が栈橋の数十メートル先で停止した。

土方は男が見せた隙を逃さず、彼が握っていた刀を刀で弾き飛ばす。

ガキィ……ン。

男の手から弾き飛ばされた刀が、ぼしゅんと暗闇の海へ沈んだ。

「さあどうする。もう逃げられねえぜ？」

前方には土方、後方には沖田。

海に飛び込めば何とか逃げおおせるか、

混乱する頭では、そんなことも考えられない。

ガッ…と右足を掴まれた気がして、慌てて足元を見下ろす。

足首に、白い指が絡まっていた。

指は手首につながり、手首は黒い腕につながっている。

その黒い腕は、海から生えていた。

「っひ…！」

男が小さく悲鳴を上げ、沖田も土方も息を吞んだ。

チャプ…と海面から顔を出したのは、操だった。

「赤ん坊を…、しかも女の子を海に放り投げるなんていい度胸してるじゃないの…」

女を蔑ろにされたことで、操は怒り心頭のようなのだ。

地を這うような声音は確かに怖かった。

だが何よりも、海水で顔に張り付き目を覆い尽くしている髪が怖い。

「ひっ…濡れ女！」

逃げようと上げた男の左足を、操は空いている手で掴んだ。

足をすくわれた男が派手に倒れ、べしゃっと叩きつけられた。

その体が、ずるずると海へ引きずり込まれる。

「ひっ…！ 助け…！」

甲板に爪を立てて嫌な音を立てた抵抗も空しく、男は引きずり込まれて海へ沈んだ。

あぶくがぼこぼこ出てきて、土方と沖田は絶句した表情を見合わせる。

数秒間ジャクジーのように出ていたあぶくは仕舞いに数が少なくなつて、

やがてぶくんと一つ出てからというものの、水面が静かになった。

「  
…」

水面下で何が行われているんだと恐る恐る見ていたら、不意にあの男がプカ…とうつ伏せに浮き上がってきた。

ぴくりとも動かないから、気絶しているのだろう。

でなければ、

「…こいつ死んでるのか…？」

それを確かめようと、水面を覗いた時…。

「ぷは…っ！」

「わあっ！」

操が水面から顔を出し、二人は驚いて飛び跳ねた。

「みいさん！」

顔を振るって張り付いた髪を払う操に、沖田が手を伸ばす。

操は気絶している男の服をひつつかみ、空いている手で沖田の手を掴んだ。

「大丈夫か！？ 姉さん！」

「大丈夫。ああ、こんなに潜ったの久しぶり」

引き上げてもらって、小さく息をつく操。

土方が荷物のように引き上げた男は、ぐるぐると目を回していた。

海水で流されたか、もしかしたら泡も吹いていたかもしれない。

「姉さんコイツに何したんだ？」

想像したくはなかったが、気になって仕方ない。

操は沖田に隊服をかけてもらいながら、

にっこりと妖しい笑みを浮かべた。

「秘密」

知らないほづがいいわよ。

まるで遠まわしにそう言われているような気がして、

二人はもう、何も聞かなかった。

「だあ、ばっばっばー！」

「あぶーぶ！　うきやーあ！」

事件が解決し、屯所でやっと再会できた湖太郎と美砂緒の従兄妹は、彼らしか分からない言葉で何やら会話していた。

自分に起こった出来事を話し合っているのだらうと、操と美里は微笑ましく見守る。

「本当に、なんてお礼を言ったらいいか……」

恭しく畳に手をついた美砂緒の母親である美里に、操は気にしない気にしないと手を振った。

「お礼を言うのは私たちのほうよ。お陰で過激派攘夷集団一つ潰せたんだから」

まさか取り逃がしていた残等と湖太郎が関わっていたなど考えもしなかったが、結果オーライ、終わり良ければ全てよし。

何も気にすることはない。

「貴女もよく頑張ったわね、美砂緒ちゃん」

自分の名前と同じ響きの赤ん坊に話しかけると、

「だっ…ば！」

キャッ…と笑って元気な返事。

自分と同じで肝が座っているわと、操は微笑んだ。

同じ名前同士気が合うのか美砂緒は操に対して警戒する素振りもなく、先ほどから操に笑顔を向けてくれる。

ちなみに受け止めてくれた恩人である近藤に抱っこされている間は号泣していたくせに、抱き手が操に変わった途端ピタリと泣き止んだ。

やはり何か通ずるものがあるのか、美砂緒は湖太郎と共にぽてぽてとハイハイを繰り返して、操の膝をぽしっと叩く。

「あー」

「なあに？　美砂緒ちゃん」

見下ろして首を傾げて見せれば、またにぱつと笑ってくれる。

可愛らしくて、抱き上げてギュッと抱き締めた。

「あーもう可愛い！」

すりすりとお頬を撫でていたら、美里がクスクス笑った。

「もう立派なお母さんね。貴女、素敵な母親になれそうだわ」

「ふふっ、いつのことやら」

ねえ？　と人事のように美砂緒に語りかけ、彼女をそつと床に下ろ

す。

「貴女にはいないの？」

「何が？」

「恋人」

ぼつ、と操の顔が赤くなり、思わず離してしまった美砂緒が後ろに倒れ込んだ。

それを慌てて支えた操は、水から出された鯉のようにパクパクと口を開閉させる。

「い、いないわよそんな男<sup>の</sup>！」

「いないって。絶対うそね、湖太郎」

「聞きなさいったら！」

抱き上げた甥っ子に楽しそうに語りかける美里にツッコむ操。

こんな話を女性とするのは久しぶりだ。

「でも貴女だったら、きっといい妻になるんでしょうね。私たち姉妹みたいに愛しちゃいけない男を愛しちゃだめよ？」

グサツと、操は見えない矢に射抜かれた気分になった。

現在進行形で、その愛してはいけない男と交際中なのだから。

「…私は、誰とも結婚するつもりはないから…」

既に真撰組に嫁いでいるようなもの。

彼と夫婦生活なんて、送れやしない。

ならいつそのことこの身、汚れぬまままで…。

「女の幸せは、愛されることよ？ 私は愛されることなんかなかったけれど」

貴女は愛されてる？

そう聞かれて、ふと桂を思い出す。

彼は自分を愛してくれている？

いつも言葉もなく抱きしめてくれる桂。

彼の愛は、本物？

「…」

黙り込んで考えていたら、美里がにたりと意地悪く笑った。

「やっぱりいるのね、恋人」

のせられたことに気づき、操はカーツと顔を赤くした。

「ずるい…」

美里が楽しそうに笑って、操もそれにつられて笑い出して、

やがて浮かんだ涙を拭って操は切り出した。

「そう言えば、これからどうするの？ 住む場所がないなら真撰組<sup>こっち</sup>で探すけど…」

美里が首を振る。

それは、必要はないというサイン。

「両親の待つ実家に、帰ろうと思うの…」

『奥州に両親が待ってる。湖太郎と美砂緒を連れて、帰るわ。江戸<sup>こっち</sup>には辛い思い出が多すぎるから』

美里の言葉を反芻し、操はごろんと寝返りを打った。

夜、子どもたちを美里と挟んで布団に潜り込んだものの、操はなかなか寝付けずにいた。

美里が子どもたちを連れて帰郷する、それすなわち湖太郎との別れを意味する。

突然突きつけられた別れを、なかなか受け入れられずにいた。

『湖太郎は美砂緒の双子の兄として私が育てるわ。…姉の分まで』

美里の言葉が耳から離れない。

助けた二人の赤ん坊の幸せを願うことは当たり前のこと。

ずっと一緒にいたいと願うのはエゴだ。

ふ…うええ…。

突然隣で寝ていた湖太郎が泣き出し、操と美里が同時に体を起こした。

貴女は休んでいてと囁けば、美里はありがとうと礼を述べて体を横たえる。

ぐずる湖太郎をそつと抱きかかえて部屋を出、縁側から庭へ降りた。

空には、綺麗な満月が浮かんでいた。

「今宵も優しき母様の、腕かいなに揺られて眠らんせ」

湖太郎が好んでくれた子守歌を唄って体を揺らせば、ぐずっていた湖太郎がだんだんと静かになっていく。

「愛しくなったら眠らんせ…」

操が歌い終わる頃には湖太郎はすっかり目を覚ましていて、操の腕の中で元気に手を振り回していた。

「…私たち、もうすぐお別れなんだって。湖太郎ちゃん」

柔らかな頬に頬ずりしながら語りかけても、湖太郎はきゃっきゃと嬉しそうに笑うだけだ。

操の心情など、理解してはいないだろう。

「分かってたはずなのよ、いつか貴方とお別れする日がくるんだって…」

覚悟は、していたはずだった。

なのにいざとなったら、この様だ。

「ねえ湖太郎ちゃん。貴方さえ良かったら、私と、小太郎と…」

どこか遠くへ。

自分のことなど誰も知らない、遠くへ…。

「うっ？」

腕の中の湖太郎が不思議そうな声を上げ、操はハッと我に返った。

何を考えているのだろう。折角平和を掴んだ赤子に対して…。

「ごめんね、なんでもないわ」

チュツとこめかみにキスを落として、縁側に腰掛ける。

湖太郎の小さな手に指を添えれば、ぎゅっと掴んできた。

「またきつと会えるから、さよならは言わないわね」

「だゝあ」

「貴方と過ごした数日間、本当に楽しかったわ。ありがとう」

礼を言われているのが分かるのか、湖太郎はにぱつと破顔して笑う。

数日後に迫る別れを考えないようにしながら、

操はいつまでも湖太郎を腕に抱いていた。

月が高くなっても、

湖太郎が寝てしまっても、

ぽんぽんと軽く背を叩いて体を揺らしながら、

いつまでも湖太郎の寝顔を見ていた。

そして、別れの日。

列車を使って帰るといふ親子を、操は駅まで見送りに来ていた。

付き添いには、山崎と原田。

特急列車が来るまでの間、操は美里に抱っこされた湖太郎から離れなかった。

ちなみに美砂緒は、美里の背に背負われている。

『間もなく、特急列車が…』

そんなアナウンスが入って、美里はかしこまって頭を下げた。

「本当に、お世話になりました」

「いいのよ。こちらこそ手助けしてくれてありがとう」

「道中お気をつけて」

「元気でやって下さいね」

3人の言葉に笑顔で頷く美里。

原田は美里の背中にいる美砂緒をひよいと覗いて、笑いかけた。

「元気でなー、美砂緒ちゃん。みい姉さんみたいな美人になるんだぞ」

「おだてたって何も出ないわよ、原田君」

操がくすりと笑った時、列車がホームへと入ってきた。

わずかな風を巻き起こしながら、耳障りな音を立てて停止した。

「では…」

「ええ、元気でね」

乗り込んでボックス席についた美里は、すぐに二人の赤子を腕に抱いて窓から顔を出した。

操も山崎も極力列車に近づいて、赤ん坊の手を握る。

「バイバイな、湖太郎、美砂緒ちゃん」

「気をつけてね」

窓に近付く操に笑いかけ、湖太郎が身を乗り出した。

そして操に、小さなもみじのような手を伸ばす。

「あゝ、ぶ」

「またね湖太郎ちゃん。立派な男の子になるのよ」

握手した小さな手が操の手を離れ、操の顔をぺたぺた叩く。

「うー、ばあーぶ」

今日はやけにおしゃべりな湖太郎がニコニコ笑う中、操はその小さな頭を撫でてやった。

「また会いましょうね」

「あー…、うゝ」

「何か言おうとしてるみたいだ」

原田が笑ったその瞬間だった。

とうとう湖太郎から、ある言葉が紡がれた。

「マア、マア……」

操が、

見守っていた山崎と原田が、

確かにその言葉を聞いた。

操を「ママ」と呼んだその言葉を聞いた。

扉が閉まりますというアナウンスと共に扉が閉まり、ガタンと列車が動き出す。

湖太郎や美砂緒を抱えて窓から身を乗り出した美里がさようならと手を降り、やがて3人を乗せた列車はホームから出て行った。

手を振ることなく列車を見送る操の背中を見ていた山崎が、そっと操を呼んだ。

「みささん……」

操が振り返った。

彼女は今にも泣きそうな顔で、笑っていた。

「どうしよう、嬉しい…」

ほんの少し一緒にいただけの赤ん坊。

年端もいかないその赤ん坊が、自分を「ママ」と呼んでくれた。

「嬉しい…のに…」

操の顔が顔がくしゃりと歪んだ。

耐えきれずに涙が流れ、操は顔を覆った。

「寂しい…」

指の隙間から、涙が零れ落ちた。

ただの世話役に過ぎなかったはずなのに、

移った情は、あまりにも大きい。

「みい姉さん…」

肩を震わせて涙を流す操を、山崎と原田が包むように抱きしめた。

震える細い肩を、そっと叩いてやる。

「…また、会えますよ」

「…うん」

頷いた操の頬から、また涙が零れ落ちた。

流さないと決めていたはずの涙は、遠慮なく浮かび流れていく。

その涙を拭ってやって、原田は淡い笑みを浮かべた。

「みい姉さん、本当に」 お母さん ” だったもんな…」

「また会えたら…」 ” ママ ” って呼んでくれるかしら…」

「呼んでくれますよ。きっと…」

二人の赤子の幸せを願って、

操は静かに涙を流す。

そうして、いつかまた会える日を心待ちにするのだ。

元気でね、私と同じ名前の女の子。

せめて貴女が、私のような女性にはならないように。

またね、愛しい人と同じ名前の男の子。

いつかまた会えた時、

ほんの少し共に過ごした私を…。

ほんの少しでも覚えていてくれたら、嬉しい…。

終

名前に騙されるな

(伍) (後書き)

以上、操の子育て奮闘記(?)でした。

如何でしたでしょうか、「唯一の女隊士」始まって以来の長編でした！ 土台となった「操の隠し子疑惑!？」は烈火竜さんが、最後の「湖太郎ママ発言」は影夜叉さんが提案してくれたネタです。私の作品って本当にユーザーの皆様に支えられてるなあ…。(つд、)

長々しいこの話を読み続けてくれたユーザーの皆様！ そしてネタをくれた烈火竜さん！ 影夜叉さん！ 本当にありがとうございます！  
した！ ヽ(＾ ＾)ノ

そして高杉さん！ 誕生日おめでとう！

## 会いたい（前書き）

やっと「操の子育て奮闘記」が終わったので、久しぶりに桂さんとイチャイチャ話……。イチャイチャ？  
操が京に遠征に行くときのお話です。

（ ； ）

会いたい

特別部隊の隊長として京へ遠征に行けとの辞令が来たとき、真っ先に感じたのは喜びか。

寂しさか。

（あいつに会えなくなる…）

そう思ったのだから、後者だったのだろう…。

「私、京へ遠征に行くのよ」

街中で見つけた桂を追いかけて、屋根の上で刀を交えていたその時に、操は彼に打ち明けていた。

自慢したいわけじゃない。むしろ…。

「ほう、京にな」

「大嫌いな幕吏の命令なんだけどね、しばらく戻れないみたい。当分貴方に会わないと思うと清々するわ」

心にもないことが口から漏れた。

屋根の斜面でバランスを取りながら、操は自分の口の悪さに自己嫌悪する。

「それは好都合。お前がいなければ俺も動きやすい」

お前などいなければいい。遠まわしにそう言われた気がして、何故か胸が痛む。

本当はなんと言っただけだったのか、操は分からなかった。

「…しかし、京か」

「なに？」

「いや、京には俺の知人が潜伏しているはずだと思うてな。お前も知っていよう、元鬼兵隊総統、高杉晋助を」

確かにテロリストとしてよく知る名前だった。

しかし知るのには名前だけで、どこにいるかは知らなかった。

「ふうん。京にいるの」

情報を漏らしたことに、桂は気付いたのだろう。

しまったとばかりに口を押さえる。

「き、聞いた話だ！　あくまで噂だ！」

「はいはい」

必死になって弁解する彼を、操はつい可愛いと思ってしまった。

生意気な彼でも、こんな表情をするのだ。

「高杉晋助が捕まったら、貴方には痛手かしら？　同じ過激派攘夷浪士のお仲間だものね」

「ふん、あいつとは野望が違う。一緒にしないでくれ」

ふいとそっぽを向く桂。ますます子どもみたいだわと思う。

「知人って言ったじゃない」

「…そうだな、知人だ」

ふと桂の顔が影つたのを、操は見た。

だがそれも一瞬のことで、見間違いかな…と首を傾げる。

「もし会うことがあったら、貴方がよろしく言っていたとでも伝える?。」

「…そうだな、俺は元気だと伝えてくれ」

なんとなく寂しそうな口調だったのは、気のせいなのだろう。

「分かったわ。伝えついでに逮捕すればいいのね」

「たわけ！ お前に高杉を捕まえられるか！」

「分からないじゃないそんなの」

痴話喧嘩になりかけて、我に返った操は刀を鞘へ戻した。

「…斬らんのか？」

「京の遠征から帰ったら斬ってあげるわ。私が帰るまで他の誰にも

捕まらないでよ」

フンと桂の鼻息が聞こえる。

「お前を含めた誰にも捕まる気はない」

「そう？ 案外簡単に死神に捕まるかもよ」

俺は捕まらん。そう呟いた桂も刀を腰の鞘に収める。

「お前こそ捕まるなよ」

「捕まらないわよ。死神なんか追っ払ってやるわ」

「いや、高杉にだ」

高杉晋助に気をつけろと…。彼は一体高杉の何を知っていると言っ  
のだろう…。

「あいつは俺より危険な男だ。せいぜい目をつけられぬよう気をつ  
けるんだな」

「なにアナタ、私のこと心配してくれてるの？」

それが少し嬉しくて聞いてみたら、桂も自分の言動に気付いたよう  
で赤い顔をこちらへ向ける。

「誰がつ……！」

「はいはい」

今日はやけに可愛い姿を見せてくれるなとクスクス笑って、

その笑みはつかの間で消えた。

「……私が帰ってきて、貴方を殴るまで、死なないでね」

「殴られたら死んでいいのか？」

「……イヤ」

ざあと風が吹く。

操の泣きそうな顔が、桂に見えたかは分からない。

ただ彼よりも高い場所にいる操を見上げる精悍な顔に、多少の驚きが浮かんだ。

「…貴方は私のライバル。おいそれと死なれちゃ困るわ」

「勝手にライバルにするな」

「あらいけず。なら貴方のライバルは誰？」

桂は少し考えて…。

「…お前だな」

その答えが嬉しくて、操はとびきりの笑みを浮かべる。

なにがそんなに嬉しいのかと、桂が不思議そうに目を瞬いた。

「…いつ帰ってくるんだ？」

「さあ…。天導衆がいつ戻してくれるか分からないから…。早くて一年、長くて五年ってトコかしら」

「…長いな」

「ええ、長いわよね」

天導衆が自分を嫌っていることは知っている。

何か大きな理由がない限り、戻っては来れまい。

「…」

何かを言いかけて口を開いたものの、言葉は紡がれずに操の口が閉じる。

「…じゃあね」

踵を返して、屋根から飛び降りようとした時だった。

「…行つてらっしゃいとても、言えばいいのか？」

驚いて振り返った。

風が桂の長髪をさらさらと逃がしていく。

操は目を瞬かせて、それでも嬉しそうに笑った。

「行つてきます」

「隊長、操隊長！」

呼ばれて、はっと我に返る。

どうもこの呼び名が、自分のものだと思えない。

「あ、私か」

「もう操隊長、京<sup>けい</sup>に来てひと月近く経ってるんですから少しは慣れて下さい」

「だって私が隊長だなんて……ねえ」

特別部隊の隊長に任命され、各隊から選出された隊士たちを引き連れていても、どうしても自分が隊長の器であるとは言い難い。

「そんなこと言わないで下さい。俺は操隊長だからこそ着いて来たんです」

「ありがとう、嬉しいわ」

そう言ってくれるのはやはり嬉しい。

けれど、やはり江戸に戻りたいという思いも強い。

京の治安は江戸と対して変わらない。

いや、江戸より悪いか。

それは操にとって仕事のやりがいを起こさせる事実だが、

ただ、江戸とは明らかに違うものが一つあった。

（あいつがいない…）

いつも追いかけて、刀を交えていた桂がいない。

つまらない。

桂と戦うことを実は楽しんでたと自分の心に気づいて、愕然とした。

（馬鹿馬鹿しい。張り合いがあるのが奴だけだったのよ）

京にはもっと強い男がいるわと自分に言い聞かせて、操はしばらくの間は桂を忘れることに専念した。

（あいつに会いたい…）

時折そう思ってしまふ頭を振って、桂を思考から追い出す。

桂への降り積もる想いに操が気づくのは、

ずっとずっと、あとの話だ。

終

## 会いたい（後書き）

操話のストックがヤベーです。ネタはたっぷりあるのに夏休みのレポートが忙しくて書けない！ 誰か時間プリーズ！

水着はビキニ派？ ワンピース派？（前書き）

こんな寒々しい時期に「水着」も何もないでしょうけど、炎天下の日に考えたので許して下さい。 m ( \_ \_ ) m

でも最近の水着って、なんとなく露出をおさえてるのが多くないですか？ 気のせいかな…。

水着はビキニ派？ ワンピース派？

ジリジリと日差しが眩しい。

眼下には、キヤアキヤアとはしゃぐ水着姿の客たち。

小さな波が打ち上げるこの浜辺で、数え切れないほどの客が涼を求めている。

今日の仕事は、そんな浜辺を管理するライフガード。

水着に薄手の羽織り姿でハシゴと椅子がくつついたようなイスに腰掛けて、銀時は双眼鏡で辺りを見回すことを繰り返す。

わりかし給料も良かったし、松光は海の家の手伝いも出来るからと引き受けた。

何か大事件でも無い限り、自分はここに座っているだけでお金が貰えるだろう。

が、

「暑い…」

その座っているだけが苦痛だ。

灼熱の太陽はジリジリと容赦なく銀時に降り注ぐ。

パラソルでも用意してくればよいものを、そんなもの一切ないものだから…。

銀時は何処かの漫画の主人公よろしく麦わら帽子を被ってしか、日光から逃れる術はない。

「…しかし、ガキばっか」

海ならば少しは色っぽい女がいると期待したが、大きな間違いだった。

どこを見ても大概はちびっ子が、その父親。

母親がいたとしてもプリプリではないし、浜辺に敷いたレジャーシ

ートに座っているものだから腹の肉が鏡もちになっている。

これでは目の保養にもなりやしない。

どっかにイイ女いないだろうか。

「旦那、可愛いコいる？」

不意にそんなハスキーボイスを投げかけられて、銀時は双眼鏡を覗きながら声のほうに視線を落とした。

「なかなかいいーもんだなあ…っ」と

双眼鏡に飛び込んで着たのは、水色のビキニに支えられた大きな胸の谷間。

その美乳の持ち主は…。

「姉御！」

双眼鏡を下ろして、つい叫んでいた。

麦わら帽子に薄い色のサングラス。

へそ出しビキニの上に薄い上着を羽織って、腰には長い足を覆うように同じ色の布が巻かれている。  
バレオ

そんな際どい出で立ちで微笑んで見せたのは、真撰組9番隊隊長、銀時もよく知る近藤操だった。

「ハアイ、旦那」

サングラスを外して微笑んでくるものだから、銀時は驚いてハシゴ

兼イスから飛び降りた。

「姉御じゃん！ 何やってんのそんなキワドイ格好で！」

「お仕事よ。最近この浜辺で置き引きが頻繁に起きてるから、パトリールしてるの。勲と、トシ君と総悟君とで」

「何も水着じゃなくても…」

覗く谷間にドキドキしながら言うと、覆面警官ってヤツよと返ってきた。

「似合う？」

ひらひらとスカートのようなパレオを振って、くるりと回転。

その仕草は、まるで無邪気な子女のようだ。

「そりゃ似合ってたけど…。ちょっと大胆過ぎねえ？」

胸の谷間から覗く細い傷痕は、恐らく刀傷。

そんな傷でさえ、彼女の美しさを際だたせる飾りでしかない。

「そう？　これでもパレオ巻くの渋ったのよ。なのに勲が…」

『駄目ー！　そんな露出しちゃ駄目ー！』

「涙目で猛反対するから仕方なく巻いたのよ」

「目に浮かぶ…」

姉の色っぽい水着姿を、近藤は見たいと思ったのだろうか。

自分だけではなく他の男も見てしまうことに抵抗があったのだろうか、なんとも不憫な…。

「しかし変装してるとはいえ、そんな露出度高いの着てたら妙な男が寄ってきやしないかい？」

「うん。もう5人ぐらいに一緒に泳がないかって声かけられたわ」

「…」

よく名前も何処の誰かも知らない女と泳ごうとするわよね、男の人の考えていることはさっぱりだわ。

そんなことを一人ごちる操に、銀時は言葉を無くして黙り込む。

彼女は、自分が魅力的な女だということの自覚がないのだろうか。

「旦那はお仕事？」

「おうよ、ライフガードのな。少し先に行けば新八がいるし、あの海の家じゃ兄貴と神楽が働いてら」

「あら、じゃあ後で行かなきゃ。この辺一帯のパトロールさつさと終わらせちゃおう」

楽しそうに笑う操に苦笑して、銀時は意地悪く唇を釣り上げる。

「姉御、あんまり太陽の下にいたら珠のお肌が焼けちゃうんじゃないかい？」

「大丈夫よ。日焼け止めたつぷり塗ったから。背中も塗ってもらったから安心安心！」

につこり笑う操にふうんと生返事をしかけて、ふと思う。

塗って、もらった？

誰に？

「誰に塗って貰ったの…？」

「勲よ。総悟君やトシ君に頼もうと思ったたらまた勲が騒ぎ出して…」

「みい姉の柔肌に触っちゃ駄目ー！…ってか？」

近藤が言いそんなことを想像してふざけてみたら、操がきょとんと首を傾げた。

「なんで分かったの？」

「  
…」

実際にその目に見たわけではないが、近藤のシスコン度は半端ないらしい。

「俺、姉御がいなくなったらゴリラは生きてけないと思う…」

「うん、私もそう思うわ」

あっさりと、操は言っていた。

日も傾いてきて、やれやれやつと過ごしやすくなったと休憩所から戻ると、

波打ち際で数人の男女が言い争いをしていた。

ひよろ長の男にビキニとワンピースの女が詰め寄って…。

なにやら喧嘩しているようだ。

「どーしたの？」

「この男が私たちを隠し撮りしたのよ！ ちゃんとシャッター音聞いたもの！ なのに撮ってないってしらばっくれちゃって！」

「だから本当に撮ってねえって言ってんだろ！ お前らの貧乳撮って何が楽しいんだ！」

「言っただわねこのひよろ長！」

銀時を無視して、ギャアギャアと女2人vs男1人の喧嘩が勃発する。

こんな騒ぎを鎮めるのもライフガードの仕事だ。

銀時は小さくため息をついた。

「だったら証拠に見せてやればいいじゃん。それだろ？ 撮ったつていちゃもんつけられたカメラ」

男の手には、小型のデジタルカメラがある。

銀時にしてみれば男のほうに味方したにも関わらず…。

男はカメラを引いて躊躇っていた。

「ホラ！ 早く見せなさいよ！」

「撮ってないんですよ！」

女2人に詰め寄られ、男はとうとう逃げ場がないことを悟ったのか、

大事なカメラを波打ち際へ思い切り放り投げた。

「「「あつ！」「」」

カメラが海に沈む…。

そう思われた時だった。

パシッ！

波に浚われる前のカメラを、一人の女が空中で受け止めた。

それは先ほどと変わらない水着姿の、操だった。

「カメラ落としたわよ」

悪戯っぽく、ともすれば妖艶に笑った操は…。

そのまま絶句する銀時らの前でぽちぽちとカメラを起動する。

データの中には、ここにいる女性二人を含め、カメラ目線ではない

水着女性が数多く写っていた。

「アングルがなってないわね、女の子たち笑顔じゃないし…。決定的な証拠ね、隠し撮ってたんでしょ？」

カメラにつけられていたストラップに指をかけてくるくる回した操に、冷や汗をかいていた男が開き直った。

「う、うるせえ！ 人前でそんな格好してんのが悪いんじゃないか！ 色気ねえ体でも高く写真裁いてやってんだから感謝ぐらいしろ！」

女2人が何それ！ と目くじらを上げる中で、啞然としていた銀魂の手に操がぽんとデジタルカメラを落とす。

持っているというのだ。

「感謝なんぞなくてよし。私の前でこんなこと仕出かしたのが運の尽きね」

女2人の前に出、男と女2人の間に割って入る操。

開き直りに出ていた男は、ムキになって操に啖呵を切った。

「さっきから何なんだテメエは！ テメエの写真も高く売りさばいてやるのか！」

「売りさばかなくても、私はいつも無断で新聞に載せられてるわ」

操の目がキラリと光る。

「女を大事に出来ないのなら、滅びろ！」

久しぶりにその台詞を聞いた銀時がマズいと思った時には、遅かった。

ガッ！

突如炸裂した操の拳が、見事に男の額にヒットした。

アップercutを食らって歯がカッンと音を立て、

男は目を回して、浜辺に倒れ込んだ。

「何だテメエはですって？ 私は真撰組9番隊隊長、近藤操だけど？」

それが何か？

誰もが絶句する中で、

操だけがただ一人、笑っていた。

『しかし姉御、容赦ないねえ……』

『あんな男に容赦なんかいらないわ。本当は蹴り上げてあげたかったけど、可愛い女の子たちの前だったし…』

それでも抑えたのよと、操は笑う。

蹴り上げるって何を…とは流石に聞けなかった。

終

水着はビキニ派？ ワンピース派？（後書き）

ビキニが似合う女性ってマジ憧れます。なんせ私、貧乳なもんですから…（泣）

## 哀傷（前書き）

レポート終わってのんびりゆったりな玖月です。肩の荷が降りるってこんな気持ちなのねん（「」）フフン。（きもい…）

今回は過去の空想から始まります。近藤さんの出番果てしなく少ないです。

## 哀傷

「みさ子！ 勲！ ホレ、鍛錬始めっぞ！」

年のわりには意外にも元気な義父に言われ、勲は生返事をしながら袴の帯を絞めた。

鍛錬とか言つて、正直鍛錬とは言えないことばかりしてるじゃないかと愚痴を零しても、義父は聞きやしない。

お陰で門人も自分と姉だけ。

何とかしないと、道場の経営が難しくなってしまう。

「…あれ、みい姉は？」

道場に赴けばそこには竹刀を杖代わりにしている義父しかおらず、きよときよとと周りを見回す。

「まだ来とらん。というか、さっきから見かけない」

「え、いないの…？」

「みたいだな、みさ子もちったあ休みは欲しいだろ」

彼しか呼ばない愛称を口にし、義父はホレと木を削った棍棒を渡してくる。

「それ素振り千回、みさ子の分もな」

「ちょっと！ それおかしい！」

「いいから振らんかい！」

みい姉頼むから戻ってきてくれと涙目になりながら、

勲は渋々重い棍棒を振り上げたのだった。

「誰が戻るかつての」

街中にある団子屋で一人団子にがつついていた操は、咀嚼を繰り返しながらぼつりと呟いた。

鍛錬とは言えない鍛錬。

あんなもので力がつくわけがないのに…。

「私が甘いのかしら…」

そんなことを思っ  
て串に刺さる二つ目の団子に食らいつづつとした…。

「きゃあ…！」

短い悲鳴が聞こえ、顔を上げた。

「止めて下さい…！」

見れば亜麻色の髪の毛、儂げな印象の女性店員が男性客に対して顔を赤くしている。

「手が滑っただけだろ？ デカい声出すなよ」

「滑ったって…」

女性が自分の尻に触れていることから、撫でられるなりなんなりしたのだろう。

言いつのろうとした女性の尻を今度は近くに座っていた別の男がするりとなで上げる。

「きゃっ！」

「おっと、滑った滑った」

ケタケタと笑う男たちに更に女性が顔を赤くし、

操の目が血走った。

「滑っただけ滑っただけ……」

また女性に手を伸ばした男の額に……。

ガンッ！

「けっ！」

団子の皿が投げつけられる。

固い音を立てた額には、皿についていたであろうみたらしのタレ……。

女性が驚いて見やった皿が飛んできた方角には、

不機嫌そうな操が腰掛けていた。

「ごめんなさい、手が滑ったわ」

悪びれもせず、操は団子をもふもふと咀嚼する。

皿をぶつけられた男が立ち上がり、ムキになってがなった。

「この女ア！<sup>アス</sup> 何しやがる！」

「やかましいわね、手が滑ったって言ったじゃない。アンタたちの下らない言い訳と同じだけど？」

「うるせエ！」

殴りかかってきた男に、操は傍らにあった湯のみを握って振るった。

中のアツアツのお茶だけが慣性で飛んでいき、男の顔にばしやりとかかる。

「あ、あつづあゝ！」

「あゝらごめんなさい。また手が滑ったわ」

顔を押さえ、男は慌てて店を飛び出していく。

呆氣にとられていた女性の横で、

どさくさに紛れて彼女の尻を触った二人目の男に罵声が浴びせられる。

「アンタもさっさと出て行きなさい！ 早く出て行かないならその薄汚い手に突き立ててやるけど？」

まだ団子が残る串を突きつける操の迫力に怖じ気づいて、男はそそくさと出て行こうとする。

しかし操はその後頭部に容赦なく空になった湯飲みを投げつけた。

ガンツと、いい音がした。

「痛っ！」

「食いつぱぐれる気？ お代払って行きなさいよ」

ぎろりと睨みつけられ、男はヒツと喉を鳴らして…。

懐を探ったと思いきや、必要以上の小銭を女性の手のひらへ落としたりした。

「こっ、これで足りるだろ…！」

「多すぎですよー！」

いいいいいよ取っておいてくんなどペコペコ頭を下げながら、

男は逃げるように去っていった。

やっと馬鹿がいなくなったと一息ついて最後の団子にかぶりついた操は、先ほどの女性が傍らに立ったことで顔を上げた。

「あの、助けていただいてありがとうございます」

ぺこんと丁寧に頭を下げる女性に、操はいいのよと微笑んだ。

「女を大事にしない奴にはあれぐらいしなきゃね」

「あの、なにかお礼を…」

律儀にそんなことを言い出した彼女に、流石に慌てた。

「いいのよ、お礼なんて」

「でも…」

引き下がらない彼女に困ったなあと頭をかいた操は、

「じゃあ、お茶のおかわり下さいな」

一瞬きよんとして、次の瞬間花のように笑った彼女の笑顔を、

操は可愛いと思った。

女性の名前は、沖田ミツバ。

弟と二人暮らしで、家計を支えるために働いているという。

他に客もおらず隣に腰掛けて語ってくれた彼女改めて沖田ミツバに、操は心を打たれた。

なんて健気な娘なのだろう。

自分など好きなことをして、弟と共に剣を振るう毎日なのに。

「…ミツバちゃん、いい子ね…」

「いえっ…！ そんなことはありません！」

自覚なしの全否定。

ますますいい子だと、助けたお礼にと貰った団子の山に手を伸ばす。

「弟くんもこんな健気なお姉ちゃんがいて幸せね」

「いえ、そーちゃんは…」

ミツバの顔にふと浮かんだ影。

そーちゃん？ と操は首を傾げる。

「私が甘やかして育てたから、身勝手に頑固で負けず嫌いで…」

「そうだったの…。どこへ行っても弟って扱いにくいのね」

ミツバがキョトンと首を捻るものだから、操はにこりと笑う。

「私にも2つ下の弟がいるの。もう私より大きいけど、性格はお子様なのよ」

「まあ、操さんの弟さんなら、とてもハンサムで素敵な方なんですよ」  
「うね」

「あははっ！ ハンサムどころかゴリラよゴリラー！」

店内に、二人の明るい笑い声が響いた。

「ミッちゃん！」

「あつ、操お姉さま！」

それから操は、ときおり道場での鍛錬をすっぱかしてミツバの働く団子屋に足を運ぶようになった。

剣術バカであり女友達がおらず、そして下の兄弟は熱しきいなか  
った操にとって、

ミツバは友人であり、妹のようでもあった。

だから、彼女に会うことを何よりも楽しみにしていた…。

のに…。

「えっ、ミツちゃんいないの!？」

性懲りもなく鍛錬をサボって、団子屋に立ち寄ったある日のこと。

「ミツバちゃん、体壊しちゃってね。今日はお休みをあげたんだ」

店主にそう言われ、以前「体が少し弱い」とミツバから教えて貰ったことを思い出す。

「弟さんと二人暮らしだって言ってたな…」

大丈夫かなと心配していたら、店主がニコニコと笑いかけてくる。

「団子食ってくかい？」

「うっん、ミツちゃんがいらないならいいわ。お見舞いに行ってくる」

そのままとんぼ返りしてしまった操に、店主はちえつと舌を打った。

「食べてきゃいいのに。ケチ…」

そんなことを、ぼつりとぼやいたら…。

「ねえ！」

操がひょこりと顔を出し、店主は聞かれていたかと飛び上がった。

「ミツちゃんのお家ってどこ！？」

「…いないのかしら…」

家の場所を教えてもらって、来た方がいいがチャイムを押しても返事はなく、

まさか中で倒れてるんじゃないかと不安になる。

(どうしよう、蹴破るべき?)

いないだけか、それとも倒れているのか。

どうしたもんかと迷っていたら、ふいに声をかけられた。

「あら? 操お姉さま?」

箒を持ったミツバが庭先から出てきて、操は文字通り飛び上がった。

「ミツちゃん!! あなた体調壊してお仕事休んだって…!」

「ええ、折角お休みを頂いたので、お庭の掃除でもと…」

ケホツと小さく咳をするミツバの顔は赤い。

息遣いも若干辛そうで、操は心配より先に怒りがこみ上げてきた。

「病人だつて言うのに何やってんの！ 早く布団に戻りなさい！」

「えっ、でも…」

「でもじゃない！ 早く寝なさい！」

戸惑うミツバの腕をひっつかんで、問答無用で中に引っ張り込んだ。

「もう！ 病人が一体何を考えてるのよ！」

「折角お休みを貰ったわけですし…」

「家事をやるためのそーゆーお休みじゃないでしょ！ 家事をしなきゃいけないのは分かるけど病気の時ぐらい静かにしてなさい！」

押し倒すように布団に寝かせたミツバの布団を整えながら、操はぎやんぎやん怒鳴る。

大人しく控えめな娘だと思っていたら、病気で貰った休みを家事に使うとは…。

「弟くんは？」

「今お薬を買いに行ってくれてます…」

ついでケホツと咳をするものだから、操はまた小さく息をついた。

「家事は私がやってあげるから、大人しく寝てなさい。いいわね」

「はあい」

横になった彼女の首もとまで布団をかけてやって、用意した水をはった桶から手ぬぐいをすくい取る。

固く絞ってから彼女の顔に浮かぶ汗を拭いて、それを彼女の額へ乗せた。

「ホントに、手の掛かる妹ね」

操が仕方無さそうに笑えば、ミツバも目を細めて微笑んだ。

「ふふっ、ごめんなさい」

ああ可愛いわあとよしよし頭を撫でて、操は腰を上げる。

「お粥作ってくるから、待っててね。大人しくしてないと許さないからね」

ぱちりとウィンクすれば、ミツバがまた笑う。

台所借りるわねと、操は部屋を後にした。

米が柔らかくなるまで煮込んだ鍋をコンロから下ろし、お茶を用意していると、

ただいまーと大きな声がした。

「姉上ー！」

元気な声がミツバの部屋に消えていき、盆に鍋と湯飲みを乗せて持つて行けば、

お薬買ってきましたと元気な声が聞こえた。

「おかえり、弟くん」

顔を見せたら、弟が硬直してその手から薬が落ちた。

ミツバにそっくりな、それでいて勝ち気な目をした少年だった。

「随分遅かったわね」

近くに腰掛けてお盆を置いたら、硬直していた弟がやっと我に帰った。

「お…」

絞り出した言葉は、

「おばさんは誰ですか!？」

ミツバがぎよっとして目を瞬かせ…、

操の額に血管が浮いた。

「初対面でオバサン呼ばわりたぁいい度胸じゃコラー!」

両頬をぎゅうつと挟んで怒鳴ったら、痛エ痛エと小さな体が抗議する。

「そーちゃん、私のお友達の近藤操さんよ」

「えっ、姉上のお友達…？」

大事な姉の友達ということで、弟はかしこまってちょこんと正座した。

抗議していた時の態度とは大違いだった。

「姉上の弟の、沖田総悟です！」

「近藤操です。よろしく」

二人してぺこんと頭を下げ合ったのが可笑しかったのが、ミツバがクスクス笑った。

。

「出会って早々オバサン呼ばわりはきつかったわあ」

「…みいさん、まだ根に持ってた…」

自分のやらかした失言を思い出し、沖田は肩をすくめる。

ふわりと線香の香りが、鼻孔をくすぐっていく。

「ミツちゃんは呑気に笑ってるし、総悟君はお粥食べちゃうし…。  
ねえ、ミツちゃん」

語りかけたミツバは、何も語らない。

唇を釣り上げることも、目を細めることもしやしない。

「姉上も、みいさんみたいなお姉さんが出来て喜んでましたねィ…」

「うん、私も可愛い妹が出来て嬉しかったわ」

ザァ…と風が吹く。

静かなこの地に線香の香りを巻き上げて、

操と沖田の髪を揺らして行った。

「…トシ君も何で一人で来ちゃうかなあ」

声掛けてくれればいいのに。苦笑混じりにそう呟く。

供えた激辛せんべいの隣に、ちょこんと置かれていたマヨネーズの容器。

彼が来た何よりの証拠。

「ホントにいけすかねえ奴でさあ」

不機嫌そうに言い、しゃがみ込んでいた沖田が立ち上がる。

「姉上、また来ますね」

「またね、ミツちゃん」

最後にもう一度手を合わせて、水の入った桶を持って、二人はその場を去っていく。

線香の独特な香りが立ち上るこの場所。

ミツバの墓に供えられた花が、二人との別れを惜しむように風に揺れた。

終

## 哀傷（後書き）

なんか展開早いなあ……。 （―――#）むう……。

実はコレ、「操とミツバさんが会話してるところが見たい」と言ってくれた梨栖さんのお陰で出来た作品です。梨栖さん、リクエストありがとうございます！ こんなグダグダな上にテンポ早くてごめんなさい。 m（―――）m

## 約束事

## 前編（前書き）

4日は近藤さんと栗子ちゃんのお誕生日でした！　というわけで（  
どいうわけで？）今回は近藤さんお祝い話！　まあお祝いと言え  
るのか謎なんですが…。

## 約束事

## 前編

まだ姉の背も抜かせていない、幼い頃のことだった。

自分が生まれたと同時に亡くなった母のかわりに、自分を見守っていてくれた姉…。

『ねえねえ、みいねえ』

『なあに？』

隣を歩く頭一つ分高かった姉を見上げて呼びかけると、いつものように優しい笑顔が返ってくる。

『ぼくね、いまよりもっと大きくなってね…』

些か歩く速度の早い姉の手を握って、必死について行きながら言葉を繋ぐ。

『ぜったい…』

その後、姉になんと言ったかは思い出せない。

ただ、自分の言葉を聞いた姉が、嬉しそうににっこり笑って…。

『約束ね』

そう言ったことだけは、覚えてる…。

「私が貴方より大きかったって、一体いつの話よ」

「それが分からないんだって。俺だってなんであんな夢見たんだか

…」

早朝、屯所の食堂で姉弟仲良く隣り同士に腰掛けて朝食をとっているときの会話。

ずっ…と味噌汁を吸いながら、近藤は何かを思い出そうとするように首を傾げる。

「何か約束したような気がしたんだけどなあ…。あ、納豆半分ちょうだい」

「カラシ入ってるけど？」

「いいよ」

はいと渡された小鉢から納豆を白米に落としていると、約束ねえ、と隣の姉が笑う。

「約束なんていくつもしてるじゃない。このあいだ貸した千円、週末には返すとか言っておいて」

「あつ、忘れてた…！」

「いつでもいいわよ」

焼き魚に醤油をかけながら、そんなものどうでもいいと言った口調。

近藤はそんな姉に、梅干しの入った小皿を差し出した。

「梅干しあげる」

「やったあ、ありがと」

そんなテンポの良い会話をしている姉弟の周りで、他の隊士たちが微笑みながら食事を続ける。

毎朝、ではないが息のあった微笑ましい姉弟の会話をこっそり聞くのが、彼らのささやかな楽しみとなっている。

「夢の内容を思い出すのもいいけど、しっかりしてちょうだいよ。今日はトシ君たちと任務でしょ？」

「うん、頑張る」

ガツガツと納豆かけご飯をかき込んで、ごちそうさまと手を合わせる近藤。

「あ、ししとう食べて」

箸でつまんで、はいと差し出してくる姉に、近藤は苦笑する。

「好き嫌い駄目だよみ姉」

「だって辛いんだもの」

しょうがないなあと嬉しそうに笑って、近藤は「あーん」と口を開く。

操はその拳でも入りそうな大きな口に、ししとうを運んでやった。

仲の良い夫婦じゃないんだから。

食堂の隅で食事していた隊士が、肩を揺らして笑った。

『やくそくだよ。ぼく、きつと...』

「近藤さん、着いたぜ」

がくんと車体が揺れて、近藤は目を開けた。

麻薬取引グループの潜伏場所に向かうまでのパトカーの中で、腕を組んだまま居眠りをしていたらしい。

先ほどまで見ていた夢を思い出して、近藤は小さくため息をつく。

幼い自分は一体、姉に何を約束したのだろう。

その約束は果たせたのだろうか。

たかが夢なのに、どうも気になってしまう。

「ここが麻薬取引グループがねぐらに使ってる宿屋だ。ザキが調べた情報によりや、人体実験の怪しい薬も作ってるらしい」

パトカーから降りた土方が、煙草をくわえながら言う。

今は大事な任務時。夢の内容は一時忘れよう。

近藤は気合いを入れるためパチンと両側の頬を叩いて、

パトカーから降りた。

「ご用改めである！ 容赦すまいぞ！」

念入りに立てた作戦通りの配置につき、いつせいになだれ込んだ。

こんなとき作戦を考えてくれるのは土方だ。

彼がいなくては何も出来ないなあと自嘲したところで、取引グルー  
プの男が奇声を上げながら斬りかかってくる。

出した左足を軸に、腰の刀に手を伸ばしながら回転。

鞘から引き抜いた刀で、男を両断した。

「ぎゃあっ！」

断末魔の叫びを背に聞きながら、宿屋の中をひた走る。

刃向かう者は容赦なく斬り捨てた。

抵抗しない者には峰打ちを食らわせておいた。

どたどたと階段を駆け上がって広間に出ればそこは既に血の海、死  
体の山で…。

土方が二人の男を相手に、踊るように刀を操っていた。

「ぐああ！」

一人が斬られ、どうと倒れ伏す。

鏑迫り合いになっている最後の男が土方に斬られるのは時間の問題だろう。

安心しかけたところで、近藤はあることに気づいて飛び上がった。

床に転がっていた男の一人が、震える腕で銃を持ち上げている。

銃口の先には、未だ鏑迫り合いを続けている土方が…。

「トシ！」

夢中になって土方に向かって走り出す。

最期の力で引き金が落とされ、放たれた銃弾は…。

近藤が必死に伸ばした左腕に命中した。

「つつ！」

「近藤さん！」

土方が鎧迫り合いを続けていた男を突き飛ばし、その胸を斬り裂く。

銃を向けていた男がぱたりと力尽き、静かになった広間で土方は近藤へ駆け寄った。

「近藤さん大丈夫か！？」

「ああ、平気だ平気！」

ほらねとヒラヒラ振った左腕の肘あたりには血がシミを作っていて、

どう見ても「平気」ではなかった。

「何が平気だー！」

飛び上がった土方の怒号が、静かになりかけた宿屋に響き渡った。

「まったく何やってんですかい土方さん。一人相手にして他の奴に気付かないたあ」

生き残った取引グループを縛り上げ、一つの部屋に纏めて人数の確認を隊士たちがしている間、

土方はその部屋の隅で近藤の手当をしていた。

銃弾は貫通して、骨にも異常はない。

が、

「情けないったら……」

「うるせエな！ 俺だって反省してんだよ！」

傍らでぐちぐちと沖田がイヤミをたれるものだから、近藤の腕に包帯を巻きながらぐわつと怒鳴っておいた。

「まあまあ総悟、俺も大したことなかったわけだし」

「いやいや、土方さんは反省すべきでさ。…左腕斬って」

「それ反省以前に罰になってるから！」

そんなやりとりをしていたら、縛り上げていた男の一人が、肩を揺らしてくつくと笑った。

「あの銃弾を受けたか。もう終わりだな、真撰組局長殿」

その言葉に鋭く反応したのは、沖田…。

「どういふことでイ」

「我々が使う銃の弾には、我々が独自に研究した薬品が塗りつけてある。人体を変えてしまう程の強力な薬がな。…まだどのような変化が起こるか確かめてはいなかったが、そう遠くない未来に貴様は死ぬだろう」

男の言葉を、3人は黙って聞いていた。

人体を変えてしまう薬…。

もし、男の言うことが本当だったら…。

「…」

近藤は包帯を巻いて貰った腕をまじまじと見つめ…。

「今はなんともない！ きつと失敗作だったんだな！」

歯を見せて、にかりと笑った。

「『何そのポジティブシンキング!』」

土方、沖田、そして男から、盛大なツツコミが飛んだ。

「あの男の言うこと、本当なんですかねィ」

「どうだかな、麻薬以外にもヘンな薬が押収されてる。本当なんだか嘘なんだか…」

パトカーまでの道のりをてくてく歩く間、沖田と土方の心配はつきない。

それもこれも、銃弾を受けた本人の近藤が飄々としているからだ。

「まあまあ、そんな心配するな。今はなんともないんだから」

「今は大丈夫だからって…！」

呆れたように振り返った土方は、ふとあることに気付いて近藤に詰め寄る。

「どつたのトシ」

「…近藤さん、アンタ縮んでないか？」

手を添えて確かめてみても、土方と近藤の背は大して変わらなくなっている。

いや、土方のほうがデカい。

「トシがでかくなったんじゃないか？」

「この年で伸びるか！ 総悟、来い」

ぐいと彼を引き寄せて比べてみても、近藤は沖田よりもわずかに高い程度で…。

「やっぱり、縮んでる…」

「一体なにが…っ！」

ドゲン！

心臓を冷たい手で鷲掴みにされたような感覚に、近藤は胸を押さえて崩れ落ちた。

「ぐっ…！」

「近藤さん！」

体が燃えるように熱い。

心臓を掴まれた感覚もまだおさまらぬまま、そのうち近藤の体から

しゅうつと白煙が立ち上る。

「近藤さん！」

沖田の泣きそうな悲鳴。

土方はうずくまる近藤の体の変化に、目を見開くしかなかった。

「……りゃあ……」

立ち上る白煙が薄くなり、やがて胸も痛まなくなった近藤は、

なんだっただろうと顔を上げる。

そしてやけに服がだぼついていることに気付き、自分の手を見てみたら……。

自分のものとは思えないくらい、小さかった。

「は……？」

近藤の体の変化をみた土方と沖田は、しばらくなにも言えなかった。

どんどん体が小さくなったと思ったら、

へたり込む近藤の体は、いまや子どもと変わらぬほどに縮んでいた。

いまは大きすぎるワイシャツと隊服が、申し訳程度に肩にかかっている。

「あー……」

言葉を探していたら、沖田がくるりと背を向ける。

「さあて、今日の晩飯はなにかなあ…っ…」

「オイコラ、現実逃避すんな…」

その肩を土方が掴み、ぽかんとしたままへたり込んでいた「小さな」近藤は…。

「あれ、なんでお前らデカくなってんだ？」

「「違う!」「」

アンタだと、ツツコミが響いた。

「それにしても、ちゃんと元に戻るんですかねえ……」

パトカーを運転しながら、山崎がぽつりと言う。

助手席には沖田、後部座席には土方と、小さくなってしまった近藤が座っている。

「戻るらねえと困る」

隊士たちには見られてしまった。

志気を下げないためにも、一刻も早く戻らければ……。

「……みいさんにどう説明しやしょう……」

一番重要なことを思い出して、近藤を除いた3人がはっと息を飲む。

「案外『カワイイ!』とか言って抱きしめてくれるかも!」

小さな手足をばたつかせる近藤に、山崎がはは…と乾いた笑いを漏らした。

「局長、その前向きさには感服します…」

「いくら姉さんだつて常識人だ。今日は怪我して入院してくるってことにするぞ。絶対姉さんに姿見せるなよ」

「え〜」

「えー、じゃねえよ！ こっそり入って部屋に隠れてろよ」

少しふてくされ気味な小さな近藤を3人で囲み、玄関を潜る。

まるでスパイ映画さながらに周りに操がないことを確認しながら中へ進んだ。

「このまま行けば近藤さんの部屋に行けまさあ」

「ねー、ホントにみい姉に会っちゃ駄目なの？」

今はぶかぶかのワイシャツだけを着てちょこちょこ歩く近藤は、些か不満気だ。

「今の状況考えましようよ、局長…。下手に姿見せてもみいさんを驚かせるだけですって…」

山崎が言い聞かせた、その時だった。

「私かなあに？」

ハスキーな声が響いて、4人はびくうと飛び上がる。

前方ばかり気にしていたものだから、後方から現れた操に気付かなかった。

「おかえりなさい。あら？ その子だあれ？」

がつつり見つかってしまって、3人はどうしようと動けず近藤の目の前で膝をついた操を止められない。

浴衣姿の操は恐縮する小さな近藤にこんばんはと微笑んで…。

そして笑みを消した。

「あら？ この子…」

バレた！ 近藤を含めた全員がそう思った。

…が。

「かつわいー！」

そんな心配をよそに、操は小さな近藤をぎゅっと胸に抱きしめる。

「ねえ何このカワイイ子！　ところで勲は？」

操の胸の中でジタバタもがく近藤を見下ろし、もう駄目だと、全員が諦めた。

「…それが近藤さんでさあ…」

操は一瞬キョトンとして、腕の中の子どもをじっと見つめる。

へへ、と小さく笑って、近藤は恐縮したまま言った。

「ただいま、みい姉」

操は言葉を無くし、しばらく動かない。

そしてやっと出た言葉が、

「は…？」

の、一言だった。

「8、9歳の頃の勲そのままね…」

あれから操は事情を聞き、近藤の部屋で小さくなった弟に着物を着せた。

ため息のように呟いてから、腰掛ける。

「9歳の子どもにしちゃ大きいように見えますが…。ちょっと局長、

何さり気なくみさんの膝に座ってんですか」

どさくさに紛れて姉の膝にちょこんと腰掛けた近藤にツッコむ山崎。

操は大して気にせず、懐からあるものを探る。

「勲は昔から体が大きかったから……」

ほらと見せられたのは、彼女がいつも持ち歩いているフォトアルバム。

ページの最初のほうには、幼い姉弟の写真があった。

「私が13歳の時には、もう背丈は追い抜かれてたわ」

操が見せてくれた写真には、幼い操と今の姿と変わらぬ近藤が写っている。

どちらも無邪気な笑みを浮かべていた。

「姉さん幼いな」

「近藤さんは昔から近藤さんだったんですねい」

写真を覗き込んだ二人が、思ったことを口にする。

「それにしたって貴方、トシ君を守るためとは言え銃弾受けるなんて…」

「しょーがないじゃないか。とっさだったんだから」

そんなやり取りをする姉弟をよそに、そもその原因となってしまう土方は申し訳なさそうに肩をすくめる。

「すまねえ姉さん、本来なら俺が受けるはずの銃弾を…」

「いいのよ、トシ君のせいじゃないわ。…まあトシ君のちっちゃい姿も見てみたかったけど…」

勘弁してくれと土方が苦笑し、沖田が小さく息をつく。

「早く元に戻ればいいんですけどねい」

「そうね、とりあえず今日はもう休みましょうか。みんな疲れてることだし」

「みい姉、一緒に寝よう!」

操の膝にいた近藤が姉を見上げ、そんなことを言う。

こちらの心配もなんのその、子ども姿を満喫している近藤に、3人はそろって息をついた。

続く

## 約束事

## 前編（後書き）

総悟君や土方さんの小さい頃はもう本編で描かれてましたが、近藤さんの小さい頃ってまだ描かれてませんよね…。空知先生、いつか描いてくださーい！

…当時からゴリラっぽかったらいやだな…。

## 約束事

## 後編（前書き）

今週のジャンプ読みましたか！ もう土方さん格好良すぎる！  
（＾　＾）ノ　早くアニメでやってくれないかな。

あ、総悟くんと信女ちゃんのセクハラ会話を誰か止めてくれ（笑）  
と思いました。…あれ、作文？　（　　；）

## 約束事

## 後編

『ぼくね、いまよりおおきくなつてね、ぜったい…』

絶対、なんなのだろう。

何度考えても、そのあと自分がなんと口にしたか思い出せない。

姉に何を約束したのだろう。

その約束は果たせたのだろうか…。

ああ、思い出せないことがもどかしい…。

ぐっ

「ぐえ…」

首を絞められて、チビ近藤は目を覚ました。

息苦しくて確認してみたら、首には細い腕が二本巻きついていた。

その他に見えるのは白い布団。

（あ、そうか）

子ども姿にかこつけて、姉と一緒に寝たことを思い出す。

寝息が首筋に聞こえるし、この腕は姉のものだろう。

どうやら抱き枕にされているらしい。苦しいのも相まってジタバタともがいてみたが、子どもの力では姉の腕はほどけない。

「みい姉、みい姉！ 起きてー！」

暴れてみても姉は起きてくれず、「んゝ…」と唸っただけで更に腕に力をこめられてしまう。

「みいね…、死んじゃう…」

このままでは冗談抜きに殺されそうだったので、ジタバタもがいてすぽんと操の腕から抜け出した。

「ふう…」

助かったと息をついて、未だ寝息を立てる姉を見下ろす。

まだ起床まで時間はある。

もう少し寝かせてあげようと、首もとまで布団を引っ張ってあげた。

「おはようございます、局長」

「おはよー」

この姿になってからかれこれ3日。

隊士たちも慣れてしまって、普通に接してくれている。

ただやはり子どもが屯所内をうろついているのは異様な光景のよう  
で、

時折ギョツとされてしまうが…。

「…届かない…」

廊下を進んでたどり着いた洗面所。

毎度のことながら流しが高く、子どもの姿になっている近藤にはつま先立ちぎりぎりで届く高さだ。

ふんぬと気合いを込めて背伸びしていたら、「局長、局長…」とかたなさそうに呼ばれた。

「おおザキ！ おはよう」

「おはようございます…。ホラこれ、副長が準備してくれたでしょうっ。」

そう言って山崎が見せてくれたのは踏み台。

奮闘する近藤を見かねて、昨日土方が用意してくれていたものだ。

「あ、忘れてた」

「はい、どうぞ」

山崎が置いてくれた踏み台にヒョイと登って、

やっと届いたと嬉しそうに歯磨きを開始する。

その様子を、山崎も歯磨きをしながら横目で見ていた。

「戻りませんねえ……」

「そうやな。えも、悪ひここふあはりりやないんやほ」

口の中を泡だらけにしてモコモコ喋るチビ近藤に苦笑する山崎。

何を言ったのか、イマイチ分からない。

「そうだな。でも、悪いことばかりじゃないんだぞ……ですか？」

要約したら、「ほう！」と泡まみれの返事が返ってきた。

ガラガラとうがいをして、ぺっと吐き出す。

にいつと歯を鏡で確認するチビ近藤に、山崎は首を傾げた。

「いいこともあるんですか？」

「もちろん！」

子ども特有の無邪気な笑みを浮かべて、チビ近藤は自慢げに言うてのけた。

「みい姉と一緒に寝てくれる！」

「あーそれは幸せですね」

このシスコン…。

口には出さなかったが素直にそう思ってしまった山崎は、見事な棒読みで返しておいた。

朝だよーと襖を開ければ操はすでに起き出していて、

翠色の綺麗な着物に着替えていた。

「あら、おはよう勲」

「みい姉、出かけるの？」

「ええ、折角のお休みだし」

チビ近藤の目がキラキラと輝き、チビ近藤はとたとたと姉の部屋に

侵入する。

「俺も行く！」

「はあ？ 駄目に決まってるでしょう？ 外でいきなり元に戻った  
らどつするのよ。留守番してなさい」

「え〜！」

断られ、チビ近藤はふてくされて頬を膨らませる。

小さな抗議を無視し、操は澄ました顔でチューブからクリームを取り出し、手に塗りつける。

ハンドクリームなのか、ふわりとラベンダーの香りがチビ近藤の鼻孔をくすぐった。

「ねえ、みい姉〜。折角のお休みに実の弟とデートしたくないの〜  
！」

「そりゃしたいわよ。でもその姿じゃどうにもならないでしょ、元  
に戻った時の事を考えてごらんなさい」

大騒ぎになるわと操は弟を無視し、鏡を覗く。

取り付けた翡翠のピアスがしゃらんと音をたて、着物とのコーディネートに満足がいったのか鏡の中の自分に向かってにこりと微笑む。

「今回は諦めて大人しく…」

大人しく留守番してなさいと言おうとした操だったが、

小さな弟がどたと床に突っ伏してびくりと飛び跳ねた。

「やだやだやだ！　　みい姉とお出かけするんだ！　　するんだったらするんだ！」

そのまま駄々っ子のようにコロコロ転がる幼子（体だけ）を白けた目で見下ろし、操は小さく息をつく。

「我が儘の仕方も昔とそっくり…」

体だけでなく精神も子どもになってしまったか、

操は再びため息をついた。

「分かったわよ、一緒に行きましょう」

「やったっ！」

途端に転がるのを止め、嬉しそうにがばりと起き上がるチビ近藤。

「ただし、いろいろと条件があるわよ」

「条件？」

キョトンと首を傾げたら、

そうよ、と仕方無さそうに腕を組まれた。

着飾った姉の手を握って、小さな近藤はてけてけと歩を進める。

彼が着ているのは大人の男用の着流し。

それを腹のところで大きくたくし上げて、一回り太っているように見える。

『いつ元に戻るか分からないんだから、大人用の着物を着て行きなさい。いきなり戻ったらあなた素っ裸よ』

姉が出した条件の一つが、大人用の着物を着ていくこと。

そしてもう一つ、けして真撰組局長近藤勲とは名乗らないこと。

威厳を守るためらしいが、この姿で近藤勲だと宣言したとて十中八

九信じてくれないに決まっている。

二つの条件を飲み、一緒に出掛けることを許してもらった。

「まい姉とデートなんて久しぶりだ！」

「そうね」

本来なら姉に腕をとってもらってエスコートしてやればよいのだが、この姿ではそれもできやしない。

それが、ひどく悔しい。

「昔もさ、こんな風に手え繋いで歩いたよね！」

「よく覚えてるわね」

そりゃそうさと言わんばかりに姉を見上げたら、その姉が記憶の中の姉と重なった。

そう、あのときもこうして、手を繋いで…。

『も……て……か……ね……』

夢にも見る、こうして手を繋いだ姉と交わした約束。

もうすぐ思い出せそうなのに、思い出せない。

「あら？」

ふいに姉が声を上げて前方を確認してみると、

川に掛かる橋の上、欄干にもたれかかって煙管をふかしている長髪の男がいた。

「松光殿」

操が明るく声をかければ、松光は顔を上げておやと微笑む。

「操殿、おはようございます。ご姉弟でお出掛けですか？」

「そうなの、お休みが重なっ…て…」

答えかけた操は、松光が口にした「ご姉弟」という単語に言葉を切った。

何も発していないのに、近藤がここにいることが分かるのか…。

「…見えてるのか？」

絶句した姉の代わりに、チビ近藤が聞いた。

「見えませんよ、何もね」

いつもの返事をし、松光はおやと不思議そうに首を傾げる。

「近藤殿、お声が高くなりましたね」

「はは、成り行きでね」

笑った近藤に、松光はまた、おや…？ と不思議そうに呟く。

見えないはずの目が、小さな近藤を見下ろした。

「…近藤殿、縮みましたか？」

「遅っ…！」

近藤が思わず突っ込んだ。

「怪しい薬で小さく、ですか…」

「そうなのよ、なかなか元に戻らなくて…」

「でも悪いことばかりじゃないぞ！」

欄干に寄りかかって操が説明していたら、近藤が横から口を挟んできた。

「近藤殿はその姿になったことを楽しんでおられる」

松光が可笑しそうに口になると、近藤はおう！ と胸をはった。

「滅多にない体験だからな！」

「人の気も知らないで…」

まったくもう、と操が頬を膨らませた時だった。

「兄貴ー」

疲れ果てた声が響いて、松光は来た来た、と嬉しそうに笑う。

「松光殿、勲のことは内緒でお願い」

慌てて操が言うのと、橋の向こうから銀時、妙が姿を見せたのはほぼ同時…。

「やあ、お帰り」

「疲れた」

うだうだと呟く銀時の両手には複数の紙袋がある。

おおかた、妙の買い物につき合わされて荷物持ちにされているのだろっ。

「みい姉、みい姉！ お妙さんだ！」

「お願いだから大人しくしてなさい。正体バレちゃダメよ！」

小声で叱咤して、操は妙に笑顔を向けた。

彼女に会うのは久しぶりだった。

「妙ー、お久しぶり！」

「お久しぶりですお姉様！」

二人してきゃっきゃとはしゃぐ姿に微笑んでいた近藤だったが、ふいに視線を感じて顔を上げた。

紙袋を提げて脱力していた銀時が、じっとこちらを見ていた。

「…」

もしかバレたのではないかと、こそこそ姉の後ろに隠れる。

それは銀時には、ただの人見知りの激しい子どもの行動にしか写らなかったようだ。

「姉御ー、その可愛くないガキだあれ？」

銀時の一言で、妙もチビ近藤の存在に気付いたらしい。

「まあ、可愛い！」

子どものゴリラに近い近藤に言い放ち、妙は膝を折る。

大好きな妙の顔がすぐ近くにあつて、近藤はドキドキして姉の背に隠れた。

「親戚の子よ」

「坊や、お名前は？」

笑顔で聞かれ、近藤はたじろいだ。

まさか本当の名前を言うわけにもいかないし、偽名も用意していなかった。

戸惑って姉を見上げたら姉まで困っているようだ…。

「ふふ。勇くん<sup>いさみ</sup>、綺麗なお妙殿に照れてしまっていますよ」

松光が助け船を出してくれ、近藤は胸を張って、

「こつ、近藤勇ですっ！」

「自己紹介出来るなんて偉いわね。はいこれ、あげる」

袋から取り出されたまんじゅうを差し出され、チビ近藤はぽかんとしたままそれを受け取る。

この妙から、頂き物をするなんて…。

「ちよつとお妙！ それ俺のまんじゅう！」

「いいじゃないですか、まんじゅうの一つや二つ」

銀時が抗議する中、操はぽかんとしたまままんじゅうを見下ろしている弟を見下ろしてくすりと笑う。

「良かったわね勇、ありがとうは？」

「あつ、ありがとう！　お妙さん！」

どういたしましてと妙が微笑む中で銀時が俺のだぞと抗議を続け…。

何か色々可笑しかったのだろう。

松光が肩を揺らして、クスクス笑っていた。

「子ども姿っていいね！　みい姉！」

「良かったわね…」

まんじゅう片手にうはうはと嬉しそうな弟の側を歩きながら、操は苦笑する。

よほど嬉しかったのだろう。貰ったまんじゅうを高く掲げたりくるくる回ったり、子どもがオモチャを手に入れた時と同じような顔をしている。

「家宝にしよう！ 毎日手を合わせて拝むんだ！」

「バカなこと言っでないで食べなさい」

びしりと一蹴したら、近藤はひどく残念そうに肩を下ろし…。

やがてぱくりとまんじゅうに食いついた。

そして幸せそうに顔をほころばせる。

「うまい！ みい姉も食べなよ」

ホラと差し出され、操は膝を折って、弟が持つまんじゅうを一口噛みちぎった。

「うん、美味しいわね」

「お妙さんがくれたものだから美味しさ100倍だ！」

ウキウキとスキップして先に行く弟に苦笑がやまず、もういつそのことずつとあの姿のままでいればいいのにと思ってしまう。

はしゃぎ回る弟を唇を釣り上げながら追いかけていた、その時だった。

「……！」

嫌な気配がして、操は辺りを見回した。

人影もなくひっそりしているこの場所に、殺気が立ちこめている。

「いや……」

名前を呼びかけて、一つの影が素早く蠢いたのを見た。

「勲！」

切羽詰まった姉の声に不思議そうに振り返った近藤を、飛び出した男が乱暴に抱え上げた。

「わっ！？」

首に腕を回し、近藤の足が地面から離れそうなほどに持ち上げる。

「勲！」

「動くな！」

懷から短刀を取り出しかけた操は、弟の首筋に刀を突きつけられて動きを止めた。

「ガキを殺<sup>や</sup>られたいくなければ、動かないことだ」

間近に見る切っ先に、近藤も硬直した。

「その子を離さない！　傷つけたら容赦しないわ！」

操は懷に手をつ突っ込んだまま怒鳴るが、近藤を捕まえている男は動じずニヤリと笑う。

「ほう、どう容赦しないというのか」

…ザッ。

操を3人の男たちが取り囲み、身動きのとれない近藤は目を見開いた。

どの男の腰にも刀が差してある。

こいつら、攘夷浪士だ。

「幕府に屈する狗め。貴様らなど侍の国には必要ないのだ」

男たちが刀を抜き、操は手を下ろして僅かに腰を下げる。

「まずは貴様からだ、9番隊隊長近藤操。後で部下共も送ってやる

故、安心して死にに逝け」

「みい姉！」

3人の男たちがじりじりと操との間合いを詰める中、身動きのとれない近藤の叫びが響く。

操は男たちの動きに注意しながら、

それでも笑っていた。

「すぐに助けるから、大人しく待ってなさいな」

近藤を捕まえている男には、その余裕綽々とした操の笑みが気に入らなかったのだろう。

ぎりつと歯ぎしりの音が、近藤は頭上に聞こえた。

「かかれ！」

怒鳴り声と同時に、3人の男たちが一斉に操に斬りかかった。

操は慌てず、自分に振り下ろされる刀をひらりと避けていく。

時にはのけぞり時には刀の握りを掴んで刀を回避するが、懐の中にある短刀は使えない。

下手をすれば、捕まっている近藤を傷つけられる。

「みいねっ…、離せこの野郎！」

ジタバタ暴れても、大人しくしてると首に回された腕に力を込められ、締め上げられてしまう。

つま先立ちぎりぎりだった足が、ついに地面から離れてしまった。

「つつ…」

苦しくてもがいていたら、ばたつかせていた足が男のすねに直撃した。

「だっ…！」

一瞬だけ出来た隙を見逃さず、自分の自由を奪っていた腕に思い切り噛みついた。

「ぎゃあっ！」

悲鳴と共に腕が緩み、近藤はくるりと反転して男に殴りかかった。

バシッ！

「！」

しかし振るった拳はやすやすと握り込まれ、

拳を掴まれたまま勢いよく持ち上げられる。

「このクソガキ！」

ダンッと地面に叩きつけられ、目の前に火花が散った。

「ガ…ッ！」

ついで憎しみと共に草履を履いた足で踏みつけられた。

「このガキ…！」

「勲！」

踏みつけられた弟に気を取られた操に、一瞬の隙が出来る。

それは見逃されず、一人の男が放った蹴りが、操の腹へたたき込まれた。

「かは…っ！」

吹き飛ばされ地面に叩きつけられた操の懷から短刀がカランと音を立ててこぼれ落ち、

苦しそくに顔を歪めた操が、やがてぱたりと意識を失った。

「みい姉！」

駆け寄ろうとしたが踏みつける男の足は退いてくれず、刀を下ろした男3人が操を取り囲む。

「いくら隊長の座についているとは言えしょせんは女、我ら男に刃向かうとは100年早いわ」

含み笑いを頭上に聞き、身動きの取れない近藤はぎり…と唇を噛んだ。

「子ども姿っていいね」とつい数分前に口にしたが、いったい何が  
いいものか。

子どもの体では力が足りないのだ。

頭では分かっているはずなのに、体が着いてこない。

この姿では、姉を護ることすら出来ないのだ。

「…!？」

護る？

前に伝えた、

姉に、護ると…。

…いつ？

「…」

びりびりと体が痺れる。

まるで体に電流が流れているようだ。

『…護って…らね』

そう、幾度考えても思い出せないあの夢で…、

「…」

体中が熱い。

電流の流れたような痺れた感覚も消えず、まるで血がたぎっているようだ。

「…なんだ…？」

近藤を踏みつけていた男が怪訝そうに眉を寄せる。

近藤の小さな体から、しゅうつ…と蒸気が上がっていた。

『ぼくね、いまよりおおきくなつてね、ぜったい…』

思い出した。むかし交わしたあの約束…。

「…！」

近藤の体の変化を目の当たりにし、近藤を踏みつけていた男が目を見開いた。

彼の体が、少しずつ大きくなっている。

蒸気の中で急速に元の姿に戻りつつある近藤は、腕だけの力で勢いよく跳ね起きた。

踏みつけていたままだった男が反動で後ろに倒れ、完全に元の姿に戻った近藤は今まさに姉に刀を突き立てようとしている男たちへ走り寄る。

『ぼくね、いまよりおおきくなってね、ぜったい……』

あの約束を、果たすために。

『ぜったいみいねえよりおおきくなって、みいねえをまもってあげるからね!』

操が取り落とした短刀を拾い上げ、ひとりの男の懷に滑り込みながら抜刀。

慌ててこちらに刀を向ける男を両断し、その男を盾にする形で次の男へ。

倒れかける最初の男の体を蹴り飛ばし、渾身の突きを二人目の男へ

叩き込んだ。

「ガッ……！」

刃が体を貫く嫌な感触が、手に伝わってくる。

「死ねや！」

後方で振り上げられた刀を見据えながら、二人目の男に突き立てていた短刀を逆手に引き抜く。

ずるりと嫌な音がして二人目が崩れ落ちるのを見届けずに、三人目が振り下ろす刀の側面に横殴りに握った柄を叩きつけた。

ガキン！

甲高い音がして刀身が折れ、刀を折られたことに動揺する男の体を、近藤は袈裟掛けに斬り裂いた。

「ぎゃああっ！」

操を囲んでいた3人全員を斬り倒し、近藤は血の付いた短刀を握ったまま肩で荒い息をする。

息を整えながら気絶している姉の傍らに片膝をついて、そつと様子を窺う。

怪我もなく、どうやらただ気絶しているだけということに安心した。

「な、何故あのガキが貴様に……！ 一体何をした！ 真撰組局長、近藤勲！」

先ほどまで小さかった近藤を踏みつけていた男がへたり込んで、子どもが彼に姿を変えたことに腰を抜かしていた。

「……何もしてないさ。あのひ弱な子どもが俺だった。それだけのこと」

短刀を握ったまま、へたり込んでいる最後の男に歩み寄る。

男はその分、尻で後ずさる。

近藤の目が恐ろしい。

射抜くような、威厳高い真撰組局長の瞳には何が宿っていたのか…。

「こつ、降参する！ なっ？ ホラ、逮捕してくれ！」

男は両手首をつけ、近藤に差し出した。

斬られるよりは大人しく逮捕される道を選んだのだろう。

だが近藤は、その手を羽虫でも払うように払いのけた。

「悪いが、今は手錠を持ってない」

逮捕はしないと男も理解したのだろう。

ホッと男が安堵の息を漏らした時だった。

「逮捕なんぞしてやらない。俺は今、真撰組局長の近藤勲じゃない」

カランと血にまみれた短刀を捨て、近藤はバキバキとその手を鳴ら

した。

何をされるかに気付いた男が、ひっと息を飲んだ。

「俺はみい姉の弟だ」

次の瞬間、まるで羅刹でも見たような男の断末魔が、日の傾いた空へ響き渡った。

右手が腫れるまで男を殴って、近藤は姉に駆け寄った。

周りに死体がうつ転がっているのも気にせず、そつと姉を抱き起こ

してぺちぺち頬を叩く。

「みい姉、みい姉…」

薄いまぶたが細かく痙攣して覗いた紫暗の瞳が、ぼうつとしたまま弟を捉えた。

近藤がホッと安心するのと操が目元を和ませたのはほぼ同時で…。

「…ほらね、大人用着てきて正解でしょ？」

「うん…」

そうだねと微笑んで、静かに姉を横抱きにしたまま立ち上がる。

「俺、やっぱりデカいほうがいいや。みい姉を護られるから…」

「そうね、護ってもらえるから…」

姉弟二人して、お互いの無事に安心して、笑った。

「それにしたって、女性のお腹蹴るなんて最低な奴らだな」

姉のお陰で「女性は敬う存在」の定義が染み着いている近藤は、操を横抱きにしながらてくてくと屯所への道を進む。

先ほど屯所に連絡して、あの場所に放置した死体3体とゾンビ1体の処理を頼んでおいた。

自分たちは帰っても問題はない。

「赤ちゃん産めなくなったらどうしてくれるのさ」

ぶんぶんと不機嫌のまま自分を下ろそうとしない弟に苦笑し、操は弟の逞しい胸板に耳を押し当てる。

そうして弟の鼓動に聞き入って、そつと近藤の頬を撫でた。

「…貴方、やっぱりコッチの姿のほうがいいわね」

「イケメン？」

「ハンサムと言いなさい」

『ぜったいみいねえよりおおきくなって、みいねえをまもってあげ』

るからね！』

幼い頃の約束、

まもれていて、良かった…。

終

## 約束事

## 後編（後書き）

以上、10日も過ぎてるけど近藤さんのお誕生日お祝い話でした。  
原作での扱いはヒドいけど、でも近藤さんはいざって時は格好いい  
男気溢れる殿方でいてほしいと思います。  
近藤さん、誕生日おめでとうでした。

勘違い ↓ 仲直り（前書き）

今回は以前投稿した「名前に騙されるな」の中間話です。時間軸は（忒）の後半、湖太郎ちゃんが桂さんに対して「パパ」と言葉を発してしまい、湖太郎ちゃんの父親は桂さんだと操が勝手に勘違いしたところからです。

勘違い ↓ 仲直り

「ふぁ…、ぱぁぱっ…」

湖太郎がそんなことを口にするから、全てが始まってしまったわけ…。

「だっ、だから違うと言っているだろう！ 俺がいつ別の女孕ませたんだ！」

「そんなもの知るかぁ！ 小太郎のすけこましー！」

涙を浮かべて刀をぶんぶん振り回す操から、桂は狭い路地をなんとか逃げ回る。

その腕では、元凶となった赤ん坊がキャッキヤと呑気に笑っていた。

こちらの気も知らないで！

操ではなく自分が泣きたくなりながら、桂は狭い路地から屋根へと飛び乗った。

操は勘違いを解いてくれない限り、刀を振り回すのを止めてくれな  
いだろう。

自分が一児の父親？ そんなこと考えたこともなかった。

「違うぞ操！ 俺はこいつの父親じゃない！」

「だってパパって言ったじゃない〜！」

涙目というよりすでに涙を流して、操はムキになって追いかけてくる。

これは言っても聞かんとって、彼女と話をするため人気のない場所へ導こうとした。

「操、地上へ降りるぞ！ けして名を呼んではいかんぞ！」

「分かつてるわよ馬鹿ー！」

返事を聞き、軽々と地上へ降りる。

腕の中の湖太郎は何が楽しいのかさっきから笑いつぱなした。

「まったくお前のせいで……！」

責任を取れ責任をと無茶なことを言って走り出す。

一拍後に、操が舞い降りてきた。

「待ちなさい！ 桂！」

大丈夫、ちゃんと名前は呼べている。

怒りに我を忘れていたわけではないようだ。

「誰が待つものか！」

いつも街中で喧嘩して見せているのと同じように、憎まれ口を叩く。

「なんだなんだ？」

とか、

「またやってる」

とか公衆の目を気にしつつ、街中を走り抜ける。

早く二人きりになって、ちゃんと話がしたい。

勘違いを解いてもらいたい。

目を吊り上げて追いかけてくる操をちらりと確認し、桂は角を右へ曲がった。

みんな出かけてしまつて退屈だったので、散歩でもしようと外に出た。

もう9月も半ばだというのに、銀時お氣に入りのお天氣お姉さんはまだ猛暑日が続くと言っていた。

熱いなあと杖をコツコツ言わせながら街をぶらりぶらり歩いていたら、ふと知った氣配がする。

ついで、喧噪が近付いてきた。

「待ちなさいって言ってるでしょ！」

「誰が待つか！」

前方の角から飛び出してきた弟とその恋人に、松光はおつ、と口元を和ませる。

「やあ、こた…」

「やあ兄さん！ 済まないこいつ頼む！」

挨拶もそこそこに何やらふにやふにやした重いものを渡され、松光は、へ？ と流石に戸惑った。

「勘違いして怒ってしまったんだ。ではな！」

「あつ、小太郎…」

啞然としたままオイ…と立ち去る弟の背中に声をかけたら、今度はハスキーな声が後方からした。

「松光殿お久しぶり！ そのコ屯所に連れ戻しておいて！」

「えっ…？ 操ど…」

「桂ーっ！」

ほんの少しスピードを緩めて松光に頼みごとをしただけで、全力疾

走ってしまう操の気配をぽかんとしたまま見送る。

彼女の弟に対する口調は、演技ではなかった。

「だあ…う！」

弟に預けられたものが不意に声を発して、松光は驚いてそちらに顔を向けた。

「うー」

もしかしくなくても、これは赤ん坊のようだ。

そういえば4日ほど前、銀時と出会った操が赤ん坊を抱いていた気がする。

あの時は確か「成り行き」で預かることになったと…。

そして確か赤子の名前は、「こたろう」。

そつだ。小太郎との子かと彼女をからかった記憶がある。

「街中で夫婦喧嘩するとは、度胸のあるパパとママだねえ」

抱きなおして語りかければ、腕の中の赤子がキャッキヤと笑った。

「お姉様、これなんてどうツスか？」

「あら、渋くていい色。先輩喜んでくれるかしら」

町娘の格好をして、出店を覗いている女性が二人。橙色の着物を身につけた金髪の少女が、若草色の着物を纏った女に対して一枚の羽織を広げて見せていた。

「お姉様から贈られたものなら先輩も喜んでくれるツスよ」

「選んでくれたのはまた子よ。二人の女性からプレゼントされるな

んで、先輩も罪な人」

くすくす笑ったお姉様、もとい姫華は、ふとかぶき町の喧噪が酷く  
なったような気がして顔をあげた。

「？」

気のせいかしら、と大通りを見回したら、かなり遠くに見知った顔  
がある。

必死の形相で近づいてくるその人と、それを追いかけているのは…。

「…また子、来て！」

羽織を選んでいた来島の手を掴んで、店を離れる。

お姉様？ と不思議そうな声をかけられたが、答えず彼女と共に路  
地へ隠れた。

「お姉様、どうしたツスカ？」

「しーっ」

不思議がる彼女を黙らせ、そつと大通りを覗く。

その時だった。

「だから誤解だと言っているだろう！」

そんなことを叫ぶ桂が目の前を横切り…、

「そんなこと知るかぁー！」

一拍後、そんなことを叫んで操が通り過ぎた。

「…あれ、桂と近藤操ッスよね…」

喧騒が遠ざかってから、絶句していた来島がぽつりと言う。

「…何やってんのかしら…」

小太郎、貴方もしつかりしてよと、姫華は小さなため息をついた。

「だから…、あの赤子の年と…、十月十日を合わせて…も、お前は、まだ遠征中だろう…」が」

「そ、そうね…」

「それに…っ、いくら表記が、違うとはいえ…、子に自分と同じ名は…普通、つけん」

「そ…ね」

江戸の外れにある、古びた神社。

馬鹿げたことに、ここまで全力で追いかけてここをかましてきた。

二人して四つん這いになって、ゼエゼエと荒れた息を整える。

「何度も、言うが…、あれは俺の、子じゃあない…」

「うん…、信じるわ…」

はあと肩で大きな息をついて、操はぺたりとへたり込んだ。

「貴方が誰か別の女性を抱いたって考えたら、頭ぐるぐるしちゃって…」

「いや…。いい」

しゅんと肩を落とした操を、桂は優しく抱き寄せる。

耳を押し付けた逞しい胸板からは、少し早い鼓動が聞こえてきた。

「本当なら今すぐにでもお前を抱きたい。お前をぐちゃぐちゃに泣かせてやりたい…、だがそんなことをしたら俺もお前も…もう戻れなくなる」

お前をこれ以上の闇に引きずり込みたくないから、

だから抱けない。

「……いいの。貴方が側にいてくれるなら、それでいい」

「すまない」と「ありがとう」。

桂はどちらを操に伝えようとしたのか。

ただ無言で操を抱きしめ、その額にキスをする。

しばらく髪や頬を撫でてくれる桂の手の温もりを楽しんでいた操は、やがてずるずると彼の腕をずり落ち桂の膝へ頭を乗せた。

「走ったら疲れちゃった」

「年か？」

「一応あなたより6つも年上よ」

くすりと笑った桂に言い返し、操は桂の膝にすり寄る。

「私、自分がこんなに嫉妬深いとは思わなかったわ」

「独占欲も高いしな」

そつとマシユマロのような頬を撫でれば、操は目を細めて桂を見上げる。

「だがそれはお前が俺を愛してくれているが故。お前は俺のものが、俺もまたお前だけのものだ。お前以外愛さぬと誓おう」

「もし万が一浮気されたら、怒っちゃうかも」

「それはこっちの台詞だぞ、この天女め。男だらけの場所で生きているお前が、いつ他の男に奪われるか考え出すと夜も眠れん」

操はくすくす笑って、そつと桂の顔に手を伸ばす。

顎を伝って、覗く鎖骨へ…。

「大丈夫よ、私は32年間彼氏なしだった女だもの。誰も見向きやしないわ」

「それなんだよな。何故お前のような女がその年まで独り身なのか、皆目見当もつかん」

俺はそれで良かったがと不思議そうな桂に唇を釣り上げる桂に操はまた笑い、桂の肩に手をかけてよいしょと起き上がった。

「きっと、貴方に会うために神様がチャンスを作らなかっただけよ」

「ならいいが…」

操と鼻が触れ合うほどに顔を近づけて二人で笑い、やがてそつと唇が重なる。

桂は操をきつく抱きしめて、

操は桂の首へ手を回した。

せっかく整えた息がまた荒れるころ、操は熱い吐息の中で大事なことを思い出す。

「…そう言えば、湖太郎ちゃん…」

「兄さんが屯所に届けてくれたさ。今日ぐらい湖太郎の母でなく俺の女でいてくれ」

桂の発言に驚いて一瞬目を見張った操の返事は、

YESでもNOでもなく、

甘くとろけるような、情熱的な口づけだった。

「…何やってんだい？」

巡回から戻った土方は、自分の部屋に続く縁側に異様な光景が広がっていることに足を止め、目を瞬いた。

縁側に足を放り出して茶をすすっている男が2人。

その後ろを、赤ん坊が「だ、だ」と何事か言いながらハイハイで行き来している。

「おおトシ、お帰り！」

「お帰りなさいませ、土方殿」

にこりと笑った長髪の男が何故この屯所にいるのか、土方は不思議でたまらない。

「なにしてんだ？ 松光殿」

「操殿から湖太郎くんを預かりましてね。お返しに来たら近藤殿が是非お茶にと誘って下さいまして」

「湖太郎が松光殿に懐いてしまつてな。松光殿が帰ろうとすると泣くから、みい姉が帰ってくるまでいてもらつたことになつたんだ」

近藤が説明している間に湖太郎がぼてぼてと松光にハイハイし、「だ！」と松光の膝を叩く。

「本当に懐いてら」

もともと人見知りのしない赤子であつたが、こんなすぐに慣れてしまつていいのだろうか。

「それにしても、なんで姉さんはアンタにそのガキを預けたんだ？」

「怒気のはらんだお顔で愚弟を追いかけて回していましたよ」

きつと失礼なことを言つて怒らせたのでしようと、松光は呑気に茶をすすする。

「……みい姉が桂を捕まえるとは思わんのか？」

移動してベシベシ膝を叩いてくる湖太郎を足の上に乘せて、近藤は神妙な面もちで聞いてくる。

土方も、その答えが気になった。

「その時は、その時ですから」

弟たちが捕まった時、松光は真撰組の敵となるだろう。

己が命に変えても、彼らを助け出そうとするに違いない。

「その時が来ないことを祈りますがね」

「俺もだよ」

意味がよく分からない近藤が不思議そうな顔をする中、松光は喉を鳴らして、お茶を飲み干した。

『まあ、もう捕まっていますかね』

『あ？　なんか言っ  
たか？』

『いいえ、なんにも…』

終

勘違い ↓ 仲直り（後書き）

実はコレ、旭日千冬さんが「操の勘違いが解けて仲直りのお話なんてどうですか」と言って頂けた故に出来上がった作品です！ 街中を喧嘩しつつ駆け回ったり、なにより松光と姫華も合わせて出せたのでスッゴい楽しかったです！

旭日千冬さん！ ネタの提供ありがとうございました！ ム（ハ  
ハ）ノ

## ラストクォーター（前書き）

皆さん、今週のジャンプはもう読みましたか？ まさかあの人が出てくるなんて思いもせず…。いつもは立ち読みなのについ購入してしまいました（笑）

ちなみにあのお話がアニメになったら、見廻り組の美人さん「信女のぶめちゃん」の声優さんは坂本真綾さんで決まりだと思うのは私だけでしょうか。

## ラストクォーター

「ねえ小太郎、峰岸流加って覚えてる…?」

操がそんなことを桂に聞いたのは、秋も深まる9月の終わりのこと  
で…。

「  
…」

江戸の外れにある安宿。

灯りもつけず窓から差し込む月明かりだけで、操に膝枕をして  
貰っていた桂がゆるりと目を開く。

「…兄さんから聞いたのか?」

「うつん、… 本人から…」

桂が驚いたようにこちらを見上げ、目を見開く。

「本人から…？ まさか！ あいつは…」

「鬼兵隊の黒衣の死に神…、でしょ？」

黒衣の死に神こと、鬼兵隊参謀補佐の芹沢姫華。

彼女は松光の父、松陽の塾に男装して通っていた経験があるらしい。

峰岸流加は、彼女が幼いころ松光や桂の前で名乗っていた偽名だと、

彼らの前では男の子として生きていたことを話してくれた。

兄と慕った、松光の居場所を教えるのと引き換えに。

「…お前、あいつと…」

「真撰組隊士の立場でない限り、私は基本女の子には手を出さないの。だからただの女の子としては、姫華とはおしゃべりするのよ」

桂の額をそつと撫でて、操は目を細めた。

「…彼女、松光殿に会いたがってたわ。総統殿が狂ってしまう前に会ってほしいんだって」

「…姫華が…」

「学友が鬼兵隊幹部にいて、悲しい？」

未だ自分の額を撫でる操の手を捕まえて、そつと口づける桂。

その瞳は、憂いを宿していた。

「最初はな…。だがあいつは、高杉の側にいてくれている。高杉を支えていてくれている。そう思うと、嬉しかった」

火薬の匂いを纏わせて、人差し指の引き金を引くだけで、人の命を

奪ってきた彼女。

たとえ手を血に染めていても、桂は姫華が高杉の側にいてくれることに安堵した。

姫華の存在が、高杉を闇の淵から引き上げてくれるだろうから。

「俺らは奴の側にいられない…、流加に頼るしかない」

握った手を離さないまま目を閉じる桂に目を細め、操は窓から見える月を見上げた。

半分以上が欠けた月、

それでも地上を明るく照らしてくれている。

「…もし高杉が松光殿と再会することが出来たら…、高杉は心変わりすると思う?」

「…どうだろうな。俺には分からん」

高杉を止められるのはきつと、松光だけ…。

「…また兄弟全員で、お酒が飲めればいいわね」

「ああ…」

「…姫華は、松光殿に会えたのかしら」

握られていた手が緩む。

するりと抜け出してみれば、桂の手はぽすと彼の胸の上に落ちた。

「…あいつは、一度死んだことにして先生の元を去って行ったんだ」

「え…？」

「峰岸流加は死んだことにして、村への未練を断ち切って…、芹沢姫華としての生活を始めた。だから俺たちは、再会するまであいつは死んだものだとばかり思っていた」

気付かなかったわけではないのだ。

名前を変えて姿を見せた彼女を見たとき、ちゃんと” 流加 ”  
の面影を見た。

「生きていてくれてよかったと思う。兄さんもあいつを可愛がっていたから…、だが高杉のみならずあいつまで鬼兵隊にいると知ったら、きつと悲しむ…」

だから兄さんには伝えないでおこうと銀時と約束したんだ。

目を閉じながら呟く桂の前髪を撫でつけながら、そう…と小さく声を漏らした。

「じゃあ、私も言わないわね」

「ああ…」

すう…と寝息を立て始めた桂の顔から手を離し、操はまた、空を見上げた。

下弦の月が、雲に隠れようとしていた。

「…欠けてるくせに、キレーなもんだな」

ため息のように煙管の煙を吐き出した高杉の言葉に、姫華はちらりと月を見上げる。

闇が月を食らい尽くすとき、それは江戸が破壊される時だ。

あのまま消えずにいればいいのに…。

「…もうすぐなのね」

「ん？」

不思議そうな高杉に、姫華は何でもないわと首を振る。

鬼兵隊と春雨が共謀して江戸を襲撃するまで、一月を切った…。

「今日は月が綺麗だなあ」

弟の肩に手を置いて二人で帰路についていた松光が、唐突にぼつりと呟いた。

兄に肩を貸していた銀時が、不思議そうに兄を見上げる。

「…見えてるのか？」

「見えてないよ、なにも。ただ、今日は月の声がよく聞こえる」

「月の声ねえ…」

空を見上げても、月は半分以上欠けている。

しかも風が連れてくる雲が、その姿を隠してしまう。

「俺はまん丸お月さんのほうが好きだけどねえ…」

「欠けた月も、いずれは満ちるよ」

弟の肩に乗せていた手でガシャガシャと頭を撫で、松光はクスクス笑う。

銀時は大人しくされるがまだ。

「神楽ちゃんは今八君の家に泊まっていることだし、折角だから飲みに行こうか」

途端、銀時の顔がぱつと輝いた。

「やっぴい！　兄貴の奢りね！」

「お前なあ……」

人を何だと思ってるんだとグチグチ呟いて、松光はそれでも笑って、弟に手を引かれていった。

月も想いも、

家族も欠けた。

でもいつかは月のように、満ちる時がくるはずだと信じたい。

終

## ラストクォーター（後書き）

なにこれー！ Σ（□、）！

結局なにが言いたかったんだか分からないシロモノ……。同じ月をみんなが見ている……的なことを書きたかったはずなのに何故どうしてこうなった……？ （、；）

思うことは同じ（前書き）

兄貴が今月の頭から鼻風邪を引きまして、

「腹出して寝てるからだよー。阿呆だなー」

と妹二人でからかっていたんです。しかし今日、からかっていた矢先に

「ふえつくしょん!!」 ↑ 私

人のこと言えませんでした。

思うことは同じ

「みい姉、みい姉！」

「何よもつ、うるさいわね」

屯所内を近藤が姉の後ろを着いて回るのは、もはや日常茶飯事。

何が楽しいのか近藤は終始笑顔。

操も迷惑そうに見えて、実際は弟との時間を楽しんでいる。

そんな微笑ましい様子を眺めながら、山崎と原田はのんびりと縁側に腰掛けていた。

「毎度のことながら、仲がいいよなあ……」

「姉弟ってあんなもんなのかね」

「さあね」

任務の時はどちらも近寄りがたい威厳を放つのに、二人でいる時はまるで子どものよう。

あんな関係もいいなあと思っていたら、山崎が不意に口を開いた。

「そっぴやさあ。俺、みささんに出会ったのは真撰組が設立してすぐのことだったけど、最初は局長の姉だとは思ってなかったんだよね」

そりゃあそつだ。

姉弟ですと言われて、一体誰が信じよう。

「副長が」 姉さん ” って呼んでるものだから、てっきり副長のお姉さんかと思つてさあ」

「まあそつちのほうが妥当だな」

「更に酷いことに、みささんの名前を ” みいね ” と勘違いしてつた」

瞬間、原田が腹を抱えて、こりやたまらないといった風に豪快に笑った。

「なんだそりゃ！」

「笑い事じゃねーよ。局長が呼ぶ」  
「あい姉」  
「を」  
「みいね」と聞き間違えてたんだよ。沖田隊長も「みいさん」  
「って呼ぶもんだからてつきり」。だから最初は局長の恋人なのか  
「と思ったよ。みささんも局長のこと呼び捨ててたし」

「恋人よりかは兄と妹だろ。たまに年上の兄弟を名前で呼び捨てる人もいるし」

「あの二人が家族だってことはまず思わなかったな」

そっくりなわけでもなく、よくよく見れば確かに面影が感じられる程度。

並んだ二人に血のつながりを見つけられる者はそうそういまい。

「こんなところで何をサボってんだお前らは……」

ぬつと現れた土方にぎょつとしつつも、この人はどうだったんだろ  
うと真つ先に思う。

「副長は、武州時代には局長たちに出会っていたんですね」

「ああ」

「近藤姉弟を見てどう思いました？ 姉弟だって気づきました？」

土方は何かを思い出すように視線を上げ、やがて…。

「俺は夫婦だと勘違いしてたな」

夫婦！

それは流石にないと二人で絶句する。

「当時から近藤さんは」      「      みい姉」      の愛称を使ってよ。俺  
はそれを」      「      みいね」      と聞き間違えてたんだ」

あんまり仲がいいもんだから夫婦ってこんなもんかと思ってな。

二人にバレた時のあの笑いよう、恥ずかしかったぜ。

そんなことをぶつぶつ言う土方を無視し、山崎と原田は顔を見合わせる。

誰もかしこも、思うことは同じのようだ。

「沖田隊長はどうだったんでしょうね」

「あいつはまず姉さんに ” おばさん ” 呼ばわりして怒られたらしい。いまじゃ笑い話さ」

「…昔から度胸あったんですね、沖田隊長…」

今の操に「おばさん」など言ったらどうなるか、

命の危険を感じて、山崎はぞわっと身震いする。

「ま、あの二人は揃うことでお互いが成り立ってるからな」

「もし、どっちかが欠けたら…」

「んなこたあさせないさ。…俺たちがな」

土方にとっても、近藤姉弟は大事な家族だ。

世の中よりも、幕府よりも、

何よりも最優先に護るのは、大事な家族だ。

「あつ、トシ君たち！ 今おヒマ？」

何やら書類のファイルを大量に抱えた操と近藤が現れ、縁側の3人に笑いかける。

近藤が抱えるファイルは既に限界ギリギリの量で、山崎は慌ててこぼれ落ちそうなファイルを受け取る。

「こいつらはヒマ」

「ひどっ！ 副長もヒマでしょうが！」

「ヒマなら書庫の整頓手伝って……」

もう疲れたよと力ない近藤に、操がだらしないわねえと仕方無さそうに呟く。

「退屈そうだったから手伝わせたのに」

「まさかあんな量やるだなんて思わなかったんだもん！」

せめてもう少し整頓されてさあ！ ほんのちよつと手を加えるだけでいいもんだと思ってたんだい！ と言いつつ近藤に、土方が耐えきれずに笑い出す。

つられて山崎が、そして原田が笑い出し、

近藤姉弟はいきなり笑い出した3人にキョトンと首を傾げた。

「そんなに面白かったかしら」

「さあ…」

もはや何が可笑しくて笑っているのかも忘れ、土方は笑い過ぎて浮かんだ涙を手の甲で拭った。

「姉さんたち本当に変わらねーな」

「そうかしら？」

「これからずっとそのまま置いて下さいね！」

茶化され、姉弟は顔を見合わせて不思議そうに首を傾げた。

終

思うことは同じ（後書き）

「みい姉」を「みいね」と聞き間違えるネタは、実はかなり最初の方に万事屋メンバーに言わせようと思っていたネタでした。ずっと書きたかったネタだったので書いて良かったです。（ω）

## 手合わせ願わん（前書き）

銀さんのお誕生日お祝い話、操編です！

ちなみに昨日（１１日）は銀さん役の杉田智和さんとぱっつあん役の坂口大助さんのお誕生日でした！ 二人ともおめでとうございます！

## 手合わせ願わん

その日、巡回から帰ってきた操が連れていたのは、珍しい男だった。

「…何やってんだオメー…」

「出会って早々な顔しないでくんない多串君」

操と一緒にいたのは銀時で、出会い頭にあからさまにいやな顔をした土方に文句を投げつける。

「とうとうセクハラまがいのことして姉さんに捕まったか？」

「あはは、違うのよ。私が声をかけたの」

「姉御にナンパされちゃった」

いいだろとおどける銀時にケツと毒づき、なんでまたと操に問いかける。

「旦那に剣のお相手してもらおうと思って」

につこりと返した操に、懷から煙草を取り出そうとしていた土方が硬直する。

「…本気が、姉さん…」

「もちろん！　いつか手合わせお願いしたかったのよ。ねえ旦那」

「なー！」

にこりと笑い返した銀時に着替えてくるわねと言い残し、操は早足に部屋へ戻っていく。

それを二人して見送って、先に口を開いたのは土方だった。

「あーあ、お前死んだな」

「なあにをオーバーな」

「オメー、姉さんは総悟と並ぶぐらい強いって俺が教えたの、忘れてるだろ」

言われて、銀時は無意識に記憶を辿る。

それはもう一年近く前、

松光と操が初めて出会った日のこと…。

『本気で戦ったことがねえから分からねーけど、総悟と肩並べるぐらいつえーぞ』

土方は銀時に、確かにそう教えた。

それを思い出して、銀時はげつと喉を鳴らす。

「…そうだった…」

「あーあ、俺は知ーらねっ！」

ざまあみろと言いたげな顔のまま銀時を放置して回れ右をした土方

の襟首を、

銀時がガツと掴む。

「ぐげ…っ！」

首が締まる形になって、土方は潰されたカエルのような声を上げた。

「んだよ…」

「見捨てないでよ多串君…、俺死んじやう…」

既に目がキョドっている銀時は、未だ土方の襟を離さない。

土方が振り払うように身を振っても、銀時はしがみついたままだった。

「知らねーよお前が死のうが死ぬまいが！！ 姉さんの誘いにのつたお前が悪いんだろ！」

「私に勝つたら団子20本奢ってあげるなんて言われたら乗るっき

やないじゃん！」

「随分安い取引だな！　いいから離せ！」

「助けてよ多串君！」

つかず離れずぎゃあぎゃああとそんなやり取りをしつつ、土方が逃げた先は…。

「なんで道場（どうじやう）おお！」

少しばかり汗臭い道場だった。

騒ぎに、鍛錬に勤しんでいた数人の隊士たちがなんだなんだと目を丸くする。

「姉さんと手合わせすんだろ、いつべん逝（い）って来い！」

「逝（い）ったら帰（かえ）って来（こ）らないじゃん！」

「…副長、なんの騒（さわ）ぎっすか…？」

言い合いを続けていたら、鍛錬の真つ最中だった隊士のひとりが恐る恐る話しかけてきた。

「こいつが姉さんと手合わせするらしい」

土方が銀時をさしてそう言ったら、ざわっと道場中がざわめいた。

「ま、まじですか…？」

「怖いもの知らずっすね…」

恐怖におののいた目で見られるものだから、銀時は自分が追い込まれている立場をふつつつと痛感する。

操の申し出を受けてはいけなかったのだ。

「あの…、姉御ってやっぱ強いのか？」

顔をひきつらせながらそう聞いてみたら、もちろんっすよと神妙な面もちが帰ってきた。

「近藤隊長の強さは生半可なものではありません。隊長格ならともかく、俺ら平隊士じゃ手も足も出ませんよ」

「真撰組四天王の一人ですからね、近藤隊長は」

やっぱり俺帰ろうと回れ右をした銀時の襟首を、今度は土方が掴んだ。

「逃げんなよ。男は約束したことぐらい守れ」

「だって死んじゃうじゃん！」

「姉さんだって最強なワケじゃねえ、女に背を見せて逃げんのか」

んなこと言われたってと渋っていた銀時だったが…。

「姉さんに勝てる方法、ないわけじゃねえ」

土方のその言葉に、ころつと態度を変えた。

「なあんだ、だったら早く教えてよ」

「お前な…」

銀時のあまりの変貌ぶりに額に血管を浮かせつつも、土方は操に勝つための方法を教えてくれた。

「まず、間合いには絶対入れないことだ。姉さんのスピードは尋常じゃない。気付いたらそこにいる、そんな速さだ。間合いに入らねたらまず負けると思え」

「ふむふむ」

「それから、言ったら怒られるが姉さんも女。力じゃお前のほうが上だ。鰐迫り合いに持ち込めれば勝てる確率は高くなる」

ほうほうと頷く銀時に、「あとは姉さんのスピード攻撃を如何に避けるかだな」と教えていた土方は、銀時の後方に袴姿の操を見つける。

「お待たせ、旦那」

長い髪は高い位置で結われ、動きに合わせてひょこひょこ揺れている。

真っ白な胴着に強調される大きな胸。

ウエスト部分で締められた袴が、腰の細さを際立たせている。

「おー、袴姿も粋だねえ。姉御」

「ありがと。さ、始めましょ」

うきつきと道場に入っていく操を見送るも、銀時は後に続く勇気が持てず…。

早く入れよと土方にけっ飛ばされて、中に転がり込んだ。

「一発勝負！ 異存はないわね、旦那」

「おうよ。俺が勝ったら団子20本な」

「私が勝ってもお団子20本ね」

唇を釣り上げた操が、足を開いて竹刀を構える。銀時も同様に…。

お互い防具はつけていない。操が邪魔だと判断したからだ。

それはあくまでも余裕からくる発言だったのか、銀時はなんとなく甘く見られている気分だ。

「行くぞー。始めっ！」

審判役を買って出ていた土方が、大きく手を振る。

銀時は腰を落としたが、構えた時には目の前にいたはずの操の姿はなかった。

「！」

真横から風圧。

ハッと気付いた時には、竹刀を逆手に持った操が右目の端に映るところだった。

ヒュッ！

「つつ…！」

突き出された突きを、しゃがみこむようにして避けた。髪を竹刀がかすめていく。

ならばこちらもと大きく突き出せば操が大きく反り返り、彼女の顔があった場所を通り過ぎていく竹刀。

ぶんと唸りを上げる横殴りの竹刀を間一髪で避け、銀時は飛びすさって間合いを開けた。

「避けられるとは思ってなかったわ。さすがね、旦那」

銀時は照れ隠しに「フッ…」と鼻で笑ったが…。

（イヤイヤ！　さすが、じゃねえよ怖いよ姉御！）

心の中では、悲鳴のオンパレード。

（無事に帰れるかな…）

今更ながら、不安になった銀時だった。

「破あつ！」

振り下ろされた竹刀を受け止め、体重をかけて弾き返す。

鰐迫り合いに持ち込もうとすれば操は直ぐに間合いを開けてしまい、彼女との距離を詰めることもできない。

（多串君は間合いには絶対入れないこととか言ってたが…）

先ほどの土方の教えを思い出す。

（間合いに入れないでどーやって鰐迫り合いに持ち込めってんだ！）

鰐迫り合いにさえ持ち込められれば、力で押し負かすことが可能になる。

しかしそうなる為には、間合いを詰めなければ…。

（他の攻撃は当たらねーし…）

兎に角操が早いのだ。力こそ男のそれより非力だが、スピードは5分手合わせしてやつと目が慣れたくらい。

（ツラみてえだな…）

全てにおいて非凡な兄は論外。

兄が弟と可愛がる自分たち4人の中で一番スピードがあつたのは桂だ。

細腕で力がない分、桂は風を切るような動きで敵を翻弄していた。

まるで彼と手合わせしているようだ。

「旦那、何を考えているの？」

肩で息をしながら、間合いを取った操が笑う。

いつでも動けるように構えながら、銀時も笑った。

「んにゃ、姉御の戦闘スタイル…。ツラみたいだなと思ってな」

操の目が見開かれたのを、銀時は確認した。

「姉御の戦闘スタイル…。ツラみたいだなと思ってな」

銀時にそう言われ、操は目を見開いた。

彼と戦闘スタイルが似てる？　そう言えば、ここのところ会えてない。

「…そつか、旦那は彼と一緒に戦ったことがあるんだっけ。…私が勝ったら、彼の居場所教えてもらおうかな」

「冗談、俺あ奴の居場所なんぞ知らないよ」

私も知らないのよ旦那。

私は彼のオンナなのに。

彼が今どこで、何をしているかも知らないの。

「松光殿なら知ってる？」

「知ってても教えないと思うよ」

桂に会いたい思いと、会えないもどかしさを振り切るように、

操は銀時への間合いを詰める。

身構えた銀時の眼前でその身が沈み、右足を軸に回転。

銀時の胴に渾身の一撃を叩き込もうとしたが、寸前でひらりと避けられた。

「…残念ね」

それは何に対しての言葉だったのか。

それを銀時は、知る由もないが…。

なんとなくだが、桂の名前を出してから操の太刀筋が乱れたように

気がする。

何だろう、いくら彼女の敵であるといえ、そこまで心揺すられる名前なのだろうか。

あの澄ました顔が憎たらしい男の名前は…。

「貰った！」

「！」

先ほどの彼女であれば出き得なかった隙。

銀時はそれを見逃さなかった。

バシィ！

「つつ…！」

とうとう鏢迫り合いに持ち込み、体重をかけて押し込む。

操は竹刀を真横にして、片足を後ろに引いて、なんとか踏ん張った。ギリギリと攻防が続き、銀時は久しぶりに彼女の顔を近くで見たなと思った。

小さな顔に長い睫。

深い紫色の瞳は強気にこちらを見上げ、銀時の竹刀を押し止めるために食いしばる白い歯が覗いている。

男だらけの中、生きていくのは大変だろうに…。

（いや、今は勝つことを考えよう）

少しだけグイと押し戻してきた操に我に返り、戻された分押し進める。

留める操の顔が辛そうに歪み、じりじりと後退していく。

勝った、そう思った時だった。

「操隊長！ 大江戸通りに攘夷浪士組の目撃情報が！」

ドタバタと駆けてきた部下の言葉に、操がぴくりと反応した。

「なんですって！？」

「のあつ！？」

おどろいた操が竹刀の角度を下げ、一步後退して銀時の間合いから出た。

渾身の力を受け流された銀時が、べしゃつと床に倒れた。

「人数は！？」

「約10名と推定！ 目撃情報からして常信党と思われます！」

「でかしたわ！ 9番隊すぐに準備して！ きつと沖田隊長の耳にも入ってるはずだから遅れをとらないで！ 私もすぐに行くわ！」

「了解！」

一通り命令を出し終わった操は、慌てた口調で床に倒れたままの銀時に声をかける。

「ごめんね旦那！　続きはあとでね！」

そのまま銀時に手を貸すこともなく、操は慌ただしく道場を出て行ってしまう。

成り行きを啞然と見守っていた鍛錬中の隊士が、恐る恐る銀時に声をかけた。

「あの…大丈夫ですか…？」

「…姉御、半端ねえ…」

床に伸びたままの銀時から、消え入りそうな呟きが聞こえた。

屯所の庭もなかなか風情があるもので、勝手に帰っては殺されると  
思いのんびり縁側に腰掛けていると、

山崎がどうぞとお茶を出してくれた。

「どうぞ、旦那」

「おつ、ありがとジミー君」

素直に礼を言つてアツアツの茶にふうふう息をかけていたら、控えていた山崎が控えめに口を開いた。

「しかし旦那、みささんと手合わせするなんて怖いもの知らずですねえ……」

「さつきも誰かに言われたー」

「そりゃそうですね。沖田隊長しかり、みささんしかり。真撰組四天王と手合わせしようなんて考える命知らずはこの屯所にはいませんよ」

そりゃそうですね…。ずずっとお茶を啜りながら、銀時は呟く。

「近藤さんについていくために、みささんは想像出来ないような修行を続けてきたわけですからね…。強いわけですね」

「…」

しみじみ言う山崎の声を黙って聞いていた銀時は、手にもつ湯のみの茶が波立つのを見てしばらく黙り込む。

「…ジミー君」

「はい？」

「姉御、まだ帰って来ないよな」

さあ、と山崎は遠くの空を見上げる。

「結局攘夷浪士捕まえたっていうから、当分帰ってこないと思いますよ?」

「…そつか」

残っていた茶を一気に飲み干し、銀時は立ち上がる。

熱い茶が胃に届いたのか、アチチ…と眩きが漏れた。

「ちょっと旦那出掛けてくるわ。姉御が帰って来たら言っておいて」

「…はい」

まさかまたみささんと手合わせするつもりなんじゃ…。

のんびりと出掛けていく銀時の後ろ姿を見送りながら、そう思った山崎だった。

結局銀時が出掛け先から帰っても、操は戻っていなかった。

謙虚した攘夷浪士の数が思いのほか多かったらしく、後処理に手こずっているらしい。

日が暮れるなか縁側でのんびりと横になることを許されていたら、ドタバタと廊下を走る音がした。

なんだなんだと体を起こしたら、風呂敷の荷物を持った操が駆けているのが見えた。

「旦那、ごめんなさいね！ 時間かかったちゃって…」

「待ちくたびれちゃったよん」

意地悪く笑って、唇を釣り上げて見上げれば、そう言わないでよと肩をすくめられた。

「はいコレ」

一旦出掛けて買ってきた包みを差し出せば、操がキョトンと首を傾げる。

「俺は負けてないけど、勝ってもいないしね。団子は半分の10本だよん」

更に首を傾げた操が徐々に顔を笑みに染め上げ、やがてくすくすと笑った。

「考えること同じね」

そう言って、手にしていた風呂敷を銀時に見せる。

「私も買ってきたのよ、10本」

それには銀時も驚いて、やがて耐えきれずに吹き出した操と一緒に肩を揺らして笑う。

「一緒に食べよーぜ、姉御」

「ええ。お茶淹れてくるわね」

「おつ、姉御に淹れて貰えるなんざラッキーだね」

風呂敷を銀時の隣に置いて、待っててねと笑顔の操が廊下の奥に消えていく。

その後ろ姿を見送り、銀時は置かれた風呂敷を両の手のひらに乗せて顔の高さに持ち上げた。

団子10本分の嬉しい重さが、ずしりと手に掛かる。

「何ニヤついてんだ、気持ち悪い」

顔を上げれば傍らには土方がいて、自慢してやろつと風呂敷を見せつける。

「ほら、姉御が団子買ってきてくれたんだぜ！」

「ほー、いいな。一本寄越せ」

そんなことを言い出した土方から、銀時は慌てて風呂敷に包まれた団子を離す。

「やだよ。姉御が俺に買ってきてくれたんだから！」

「一本ぐらいいいだろうが！」

「嫌だったら嫌だ！」

奪おうと手を伸ばす土方から、風呂敷を守る銀時。

「旦那、お待たせ……」

「寄越せ！」

「嫌だ！」

盆に湯のみを乗せた操が戻ってきたものの、廊下で行われている団子の攻防に目を瞬かせた。

「旦那、月曜日お誕生日だったでしょう？　一緒にお団子食べたいなあって思ってたの」

縁側に腰掛け、幸せそうに団子を頬張る操。

その隣で、銀時が串の先端をくわえている。

「嬉しいけどさあ、なんで多串君もいるワケ？」

銀時を操と挟む形で座っていた土方は、遠慮無しに団子にかぶりついていた。

「オメーが姉さんと二人でお茶たあ１００年早い」

「俺らも早々出来ることじゃありませんし」

ちやっかり操の隣にいた山崎も、嬉しそうに団子を咀嚼する。

操は肩でくつくつ笑って、いいじゃないのと言った。

「みんなで食べるほうが美味しいじゃない」

「おつ、総悟ー。お前も団子食うか!？」

たまたま廊下を通りかかった沖田に土方が声をかけ…。

「もう増えんでいいわ!」

折角のチャンスをと、銀時が泣きそうに突っ込んだ。

『旦那、お誕生日おめでとう』

『おう、ありがとうございます』

『オメデトー』

『…何その感情の籠もってないオメデトー…』

終

## 手合わせ願わん（後書き）

以前ユーザーの瑞紀さんから、「銀さんと操が実際に手合わせしたらどうなるんでしょう？」というリクエストを頂きまして、そのリクエストのお陰で出来上がった作品です！

女の操が主人公の銀さんに勝てるわけないけど、でもちよつと苦戦してもらいたいなあと思ってこんな展開になりました。瑞紀さん！

リクエストありがとうございました！ 〵 〵 〵

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9978j/>

---

唯一の女隊士

2011年10月12日07時55分発行